THE KAIZO

改造

新年號

1924


髮刈りの順序
チューブ入
クラブ
煉歯磨
文化生活
治療より豫防にクラブ歯磨
朝
夜


書きよい萬年筆
プラトン萬年筆
最新式の完全裝置
インキの出具合極めて良くペンの走り最も滑かなり
進んだ人には進んだ文具！
プラトンシャープ鉛筆
日本文具株式會社製造
クラブ齒磨本店發賣



創作



——巻頭言——

現閣存立の意義

現内閣に誰しも劃時的見識があらうとは思はない。もとより社會的創作をこれ等時代の違つた政治家達に望むのは、望むものの無理であらうやうに、彼等が、ただ蓄音器がわりに普選を斷行すると云つても、それまでにはいくたの準備がなくてはならぬのに、今もつてそれがないのを見ると、此案はただ單に政略家が試野心の爲に斷行するものだと云はれても辯解の辭がなからう。政略可なり、黨略可なり、斷行するのは斷行せないのには優る、ただ現内閣は普選に寄生する内閣であつて、理想し、燃燒する内閣ではないのである。

特に、このごろ遺憾にたへぬのは、我々國民——國民と云ふより我々人間——が剴切、重大な結果をもつ復興豫算に對し、國民とは夙うの昔に——人間とはまだ交渉があるやうだが——沒交渉となつていたはづの伊東、大石輩によつて議せらるるの不見識、不名譽は國民として斷じて忍び得ないところである。前者は白晝闊歩の出來ぬ代物として一世の指彈をうけておる人であり、後者は時代錯誤の一野狐禪ではないか。國民の代表者といつてくふだんから威張つている衆議院の諸君はこの轉倒した審議ぶりに果して公憤をおこすだけの元氣があるか。そしてその伊東、大石の耄碌連が又、アベコベに山本内閣に逆襲しているので天下の奇觀も、奇觀の方で驚いてしまつたらう。勿論身から出た錆とは云へその責任の全部は山本内閣の負ふべきものだ。

或ものは現時の我國の財政難では、永遠の復興策を樹つることは不可能であると云ふであらうが、生命の前には忍び難きも忍ばねばならぬ。喉元すぐれば熱さを忘れるのは人間の常とはいひながら、かほどまで大自然からいぢめつけられて今の姑息な復興策とは何である。この五億九千萬圓案が果して確定したら十年後、百年後に於て我々の兒孫はどれほど我々に怨恨を持つであらう。

その日ぐらしの引込思案で、ただ目前の安逸をのみ貪る審議會の水鼻どもを怖ちたり、議會の安否をのみ氣づかつたりする現内閣の無定見、無識見は沙汰の限りである。よしそれが東京附近の地方問題であるにしても、生命の前にそれが何だ。外債可なり内債可なり、饑えたるものに與へ、凍えたるものに與へることに戰爭の慘禍を經たと思へば何でもなからう。あらうとあるまいにかかはらずそうすることが我々の踐むべき道である。

我々の希求は生を完ふすることにもあるが、又進んで生をいき〳〵と輝かすことにもある。災禍に豫め完全の設備をすることが生を完ふする人生の行程であり、そして復興豫算を忍ぶことが生命を團體的に、社會的に生かす所以である。

此根本理論を度外視したる復興豫算は成立の價値なく、併せて現閣成立の意義も同時に喪失する。

復興經濟の厚生的意義

福田德三

（一）

私は豫見する。氣短かな東京人とそれに雷同する一部の人々は、餘り遠からざる將來に於いて、復興と云ふことに嫌厭を惹起し、其前途を極端に悲觀するに至るであらう。而して向上發展の意氣なき固陋因循の實業家、政治家、學者、論客等は、其時の到來を蟄伏して待つゝあるが故に、一度復興嫌厭の聲が放たれると、此機逸す可からずとして、あらゆる宣傳、あらゆる方略を應用して、反復興熱を煽るに、彼等の『最善なる最惡』を盡すことであらうと。此危機は、現在の復興當局者の誤つた措置が、殊に其の輕浮なる態度が最大の力を以つて釀成しつゝある所である。今の時に於いて、

最も聲高く復興、々々と叫びつゝある彼等當路の人々こそ、最も有効に、反復興熱の到來に勉めつゝある所の人と云はねばならぬ。何んとなれば、彼等は、實行の上に一の復興する所なくして、唯口舌を以つて復興を唱導しつゝあるのみであつて、復興の齎らす可き善き結果は一も之れを與へず、否復興の宣傳に全力を傾け盡して、當面直下に施設す可きことを一切高閣に束ねつゝあるによつて、罹災者は勿論非罹災者に至るまで、當さに與へらる可き營生の機會を與へられず、民衆の生存は、震災によりてよりも、寧ろ災後の當局者の怠慢放縱失態の爲めに、彌々益々脅さるゝ外ないからである。火災保險金問題一つすら未だ何等の解決を見ざる間に、九月は十二月となり、バラックを襲ふ風と雨とは、震火に生殘つた人々に、却つて其の生き殘つた事を一の明と感ぜしめるに至つて居る。天災は諦めることも出來よう、人災は諦め切れるものではない。私の此頃試みた推計によれば、現實の失業者十一萬人餘、それに其家族を合算すれば、三十萬六千人、更らに準失業者と看做す可きもの、轉業者九萬二千餘人、新求職者五萬五千人、合計十四萬七千、其家族を合すれば、約四十萬人となる。かくて兩者通計約七十萬の罹災者は、復興の空聲に先づ失望落膽す可き第一線に立つ人々である。復興の意義を如何樣に解決するとも、其の規模の大小を如何に計劃するとも、復興第一の事業は、此の七十萬の人々に、其の全く若くは一部分的に奪はれたる營生の機會を恢復することであらねばならぬことは、誰人も之を疑ふ能はざる所である。然るに、今政府の爲しつゝある所を見ると、此一事に就て、殆んど何事をも施設して居らぬのである。最も手近な一例を擧げれば、東京市と農商務省とは、相議して、婦人罹災者に副業を授くる案を立て、果して如何程の求職者あるか、其總數並びに其希望職業種類の調査を企てた。此れは甚だ結構な思付きである。故に私共は、東京市の懇請を入れて、私共の微力の許す限り其調査を試み、甚不完全なるものではあるが、所要の結果を提出したのである。然るに之れに對する吏員諸君の返答は曰く、調査の勞を多謝す、但し我等が要求したる二十萬圓の豫算は上司の

容るゝ所とならず、一杯にして拒まれた。我等は豫算なくしては、何事をも爲すこと能はず、折角調査をなして貰つたが、其れは後日の參考に供するの外なく、目前直下、我等は其對案に就て何事をも爲すこと能はざるものなるを諒とせよと。政府吏員の態度常に概ね此類である。彼等は何事にも豫算々々と云ふ。畢竟彼等の能事は、如何にかして上司を動かし、如何にかして財政當局を動かして、一錢にてもより多くの豫算を獲取し來るを得んかの一事に集中して居る。無論豫算潤澤にして、事績を擧げ得るに、越したことはない。然し乍ら限りある國家の歳入を以て限りなき吏僚の豫算慾を滿たす可き道は存するものではない。而して甲の事を爲すに豫算、乙の事を始むるに豫算と、餓鬼の食を强請するに均しき態度を以て復興の重大事に向つて居る。豫算取れざれば、一切の責務は、其瞬間に消滅するものと觀ずるが、今日の日本の官吏の共通心理であるのである。(此く豫算々々と口に絕たざる彼等は、私共に從事延人數七百四十二人、前後二十數日に亘る調査を依賴しても、一言も豫算を口にせず、私共は一厘一毛も彼等から支出を仰いだことはない、悉く學生諸氏自ら之れを辨じたのである。)。

（二）

廣い意味に於いては七十萬、狹い意味にては三十萬内外の失營生機會者に、少くとも稍々安定せる營生の機會を與ふることなくして、復興を談ずるは、寧ろ罪に近い無責任の處業である。其の營生機會の恢復は、決して事容易ではない國費多端なりと雖も、之れに要する支出は、國として決して辭するを得ない處である。道路、建物、港灣、運河の如きは、此の取扱に比すれば甚だ從屬的の意義をしか有せぬものである。然るに其等の從屬的なる、而かも必ずしも直下に急施するを要せざる幾多の計劃を、單に机上に立案する爲めに數十萬圓の經費を要する復興院なるものを設け、屋上更

らに屋、床下更らに床を架する底の各種の機關を設けつゝある政府は、焦眉目前の急施を要する營生機關恢復の事業は、平時さへ無能無爲の典型として知られた賣れ殘り吏員の一團に放任し去るに、其吏員等は、日が照つても雨が降つても、唯豫算々々と御題目を唱へて徒手遊食しつゝあるのである。必要不可止經費なら、御題目を唱ふる暇を以つて、財政當局なり上司なりに、十分説明して聞かせて、之を支出せしむ可きである。彼等はその決斷すら之れを持つて居らぬのである。

七十萬の罹災者は、決して永く慈善の目的物として放置す可きではない。文明國民の意氣から云つても、慈善の目的物として取扱はるゝことは、一日も早く之を脱れ出でしめねばならぬのである。今日の處罹災者の爲めに、少くとも其の集團バラックに就て、若干の事項を擧げつゝあるものは、救世軍、東西本願寺、基督教青年會、同愛會、同心會、櫻楓會等少數の健氣なる人々のみであつて、而して其れは言ふまでもなく、慈善救濟の意味に於いて力を盡くしつゝあるに過ぎない。バラック團に於いても憐れなる罹災者の爲めに、若干の世話を爲しつゝあるものは、自らも亦罹災者たる有志の人々であつて、而も其執務の爲めに、自らは營生の事に從ふ能はず、市區よりは壹錢の報酬をも供せられないものである。從つて彼等は怨嗟の念に充たされて居つて、漸次罹災民ブローカー（私は其れが增加する傾向あることを玆に斷言する）の手に移り行くことを免れないのである。或る集團に於いては、其の役員等に配給上不正の事あつた廉を以つて、自治團は解散を命せられた。無能なる市は、之れに代る可きものを作らぬ、從來自治團の役員が、辛ふじて周旋しつゝあつた婦人の內職は全く其道を絕たれた。當局者は、私共が此事實を指摘して警告するまで、其樣の事を夢にも知らなかつたと告白して居る。又他の集團では、數十世帶の病者、老廢者を別處に集置し乍ら、其が特別配給を要するものなることを全く打忘れて居た爲め、數日に亙つて殆んど絕食の狀にあつたことを發見した。私は戯れに言つた。

今の此世に『速成地獄』を見んと欲する人あらば、須らく來つて此等のバラックを見よと。『速成地獄』は如何にして作られたか、其手續は誠に簡單である。曰く、無能にして怠慢なる市區吏員に罹災者の取扱を放任することによりて。其放任の責任者は言ふまでもなく、最高位に在る復興空說者等である。凡そ人を殺す者は罰を免る可からず。私は、今の世に於いて、最大の殺人罪を以つて問はる可きは、虐殺犯人何某大尉等にあらずして、却つて時を得顏なる復興空說の當局者其人々なるを指摘せずして已む能はざるものである。刀を執つて他を殺す者は、其事明白なる丈け罪却つて深からず、刀を執らず首に繩を擬することなくして、日に何千の悶死者を作り出すのは最も指彈せられざる可からざる道德的殺人犯人と云はねばならぬのである。

（三）

私は今當局者糺彈の爲めに筆を執るものではない。私は罹災者の現狀を見て、堪へ難き感傷に惱むものではあるが、此の胸中を披瀝して、仁人志士に訴へんが爲めに此文を草するものではない。私は讀書生の分際として、其力を有せざることを十二分に自覺して居るものである。私は、私の分として冷靜に談理せんが爲めに、此一篇を物するものである。私が上に言つたことは、復興咒咀の第一聲が幾萬の罹災者其人々から發せられるに到るであらうことを明かにせんが爲めに過ぎない。私は飽迄復興の前途を樂觀し、其可能性、殊に復興による損害の最小化の可能性を十二分に信じつゝあるものである。唯私は一方に於いて、實行の上に於いて、今の復興當事者が全然　却する大問題が焦眉の急施を要するものとして横はることを明かにし、而して、他方に於いては、やがて來る可き反復興熱に對して具ふ可き冷靜の理論を說かんと欲するものである。現前の救濟問題を度外に措くことは、眞正なる復興を絕望的ならしめるものである。十一萬

の失業者は、災前に於いて、其れ〳〵何等かの職業を有し、之れによつて、社會の一員たる資格を保障せられ、之れによつて、自己と其家族との營生の機會を保持しつゝあつたものである。彼等の多く、若くは、殆んど全部は、有形の財物を失つたものである。乍去、彼等は未だ無形の財物を全くは失つたものではない。彼等は其れ〳〵の職業に於いて、多かれ少かれ、之れに適應した技能、適性、熟錬、習慣性等を有して居たものであつて、其等は、彼等が今失業者たる間は全く活用の機會を與へられて居ないものである。其等は、貴ぶ可き無形の財物である。彼等の多くは、此の無形の財物の活用、運用によつて、有形の財物の消滅を、或は多く或は少く、補償し行く可きものである。彼等が生く可き道は、此外に存しない。此の無形の財物は、之を活用す可き營生の機會、之を適用す可き何等かの職業を見出すことによつてのみ、財物たり得るのである。配給品に生活し、慈善に命をつないで居る限り、彼等は唯だ生きて行くと云ふに止り、其有てる貴き無形の財物を、自己と社會との進歩に貢献せしむ可き働きは全く閉されて居るのである。其損は彼等自らのみに止らない、國と社會とは、活用せられざる無形の財物の價値全部を損しつゝあるのである。利用機會の閉塞が長期に亘るときは、此等無形の財物は、其の本體價値を永久に減損し若くは滅却するに至るであらう。熟錬工業勞働者に就いては、此理は誰人も直ちに看取する所であらうが、其れは決して熟錬勞働者のみに限られたことではないのである。不熟錬勞働と云つても、必ずや或度までの習錬と適性とを要し又た之を有して居るものである。商業、公務自由業從事者に其の虞なしとも決して云へないのである。たとへ一歩を讓りて、職業的、技能的損毀はないとしても、人の道徳的性格は、永く極窮の狀態にあるか、慈善の目的物たるに止るかによりて、著しく損毀せらるることを思はなくてはならぬ。集團バラックに於ける德性の破壞に就ては、私は幾多の事例を目撃した。風紀などは言ふまでもないことであるが、私の最も恐るゝ所は、生存の肯定力の薄弱化之れである。殊に正しく人らしく生きんとする意思の減損是れで

ある。從つて、今日の經濟生活の根本基調を成す營生の衝動の惡化是れである。私はバラック踏査以前に執筆した或論文（我觀十月號『經濟復興は先づ半倒壞物の爆破から』）に於いて、配給米請取りに半日を潰すを惜まぬ罹災者、殊に借金してまでも獨立して自らのバラックを建てる人々を、生存權擁護の健氣なる實行者と呼んだ。集團バラック收容者の大多數に就ては、私は依然として爾く觀察することを渝へない。乍併其或部分に就ては、私は此語を適用することを今月に於ては、多少躊躇せざるを得ぬものである。彼等は生きんとする人々には相違ない。問題は『如何に』の點にある。獨力獨行生きんとする人々としては、彼等は漸次落伍しつゝある。此現象を一概に『依賴心が強い』と許し去ることは、事の眞相を窺ひ盡さないものである。私をして率直に云はしむれば、彼等の或者は極窮權の實行候補者たる考へ方を、段々培養せられつゝあるものではないかと思はなければならぬ、果して然りとすれば、今日の文明生活の一員としての資性の上に於いて、大なる逆行の事實が横はるものでなければならぬ。今日の文明制度の基調の上に、妥當なる生存權主張を建てゝ行かうとする人々は、我らが最も深い感謝の念を禁ずる能はざる人々であると共に、此基調を外にしてまでも、否、外にすることによつて、生きて行かうとする人々は、此の文明生活の爲めに甚だ憂ふ可き又た恐る可き人々である。私が生存肯定力の薄弱化と呼ぶのは、單なる物理的存在の否定の謂ではない。今日の文明生活の基調の上に生きて行くことの否定の謂である。而して私は、之れを無形の財物の破壞の最大項目に數へなければならぬものであると信ずるものである。此の意味に於ける無形財物の破壞は、復興の前途を著しく悲觀的たらしむること、恰かも歐洲大戰後殊に現在の獨逸の有樣に甚だ接近するものと思ふのである。

（四）

私は他の機會に於いて（我觀十一月號『困ることの過大觀』）歐洲大戰後の戰後經濟と、我日本現在の復興經濟との根本的差違を指摘することを試みて、東大教授ベルリナー氏の復興費不生産支出論の誤謬を論じた。私は其際主として、支出の經濟的解剖の上に、私の論據を置いた。其れは慥かに最重要の點であると思ふ。乍併、其れと同時に民衆心理の方面あることを、今力說したいと思ふのである。私は、歐羅巴に於ける改造事業の遲々たる進行の最大原因を心の上にあると屢々論じた。（著『經濟危機と經濟恢復』其他の文に於いて）誠に、今日の歐羅巴又世界の改造の前途を暗黑にしつゝあるものは、國國と相嫉視し、民民と相憎み、而して國中の各部分互いに相疑ひ相妬む人心の荒さみ實に是れである。戰爭による物質的破壞の大部分は、歐洲諸國年生産の四五年分にしか該當せぬものである。之を過大視することは、大なる誤謬である。戰爭による物の破壞よりも、寧ろ戰後に於ける人心の荒廢が、今日の歐羅巴を苦惱の淵に沈めて居るのである。是れは、戰爭と云ふ人間惡が原因であり、戰後其の人間惡が同じ道程を辿つて更らに增大せられたからである。然るに日本の被つたものは、人間惡でない、天の降した禍である。之を天譴と見る人は見ても差支ないが、兎に角、九月一日の禍は、地震と云ふ不可抗自然力の產み出したものである。災前の日本人は惡化しつゝあつたのかも知れない。然し乍ら其惡化が彼の地震を招來したのではない。否、地震とそれに續く大火との禍の爲めに、少くとも罹災人民は、一時は驚く可き程善化したことは疑を容れない。其心理狀態はまさに大戰後の互に相疑ひ猜み合ふ歐羅巴の各國民の其れとは雲泥の相違がある。互に相いたはり相憐み合ふ人情美の極度まで發揮せられた有樣は、極端に云へば人間が震火によつて此くも善化するものなら、寧ろ震火は歡迎す可きものなりとまで考へさせられた位である。國中の人々の間が此く善化したのみならず、米國支那を始め、國際心理險化の極度に陷つて居る獨露佛國民すら、我々日本人に心からなる同情を寄せて吳れた。地球の表面は、少くとも或時間は、戰後の呪はれたる氛氣から脫出して、日本を中

心に、純眞なる人道の支配する宇宙の一角と化し去つたかの觀があつたのである、我々の友人は或は壓死し、我々の親戚の多くは丸燒となり、我々自らも玄米飯に有りつけるかつけぬかの狀にあつたとき、我々は同時に、世界の此くの如き醇良化の其の中圏に立ち、世界各國民の美しい同情の對象となつて居ることを知つたとき、我々は我々の悲しみを忘れて、此くも幸なる身分となつたことを心から神に感謝せざるを得なかつたのである。私の住む町の隣り町では、町長の機轉によつて、米國からの救護品を配給するとき、米國の國旗を自動車に立てゝ町を奔走せしめた。之を見た罹災者の一人感歎すらく、燒け出されて須田町から上野へ、上野から日暮里へ、逃げ廻つたときは、神も佛もないものと思つて怨んだが、今日見も知らず言葉も通ぜぬアメリカから、此く樣々の品物を送つて異れたのを見ると、矢張り神も佛もちやんと在るものと知つて、一時怨んだのが如何にも勿體ないような氣がすると。此れは、恐らく多くの罹災者の抱く感じであらうと思ふ。此の感じこそ私は復興の前途を樂觀せしむ可き强大な心の力となるものであらうと思ふ。此心の力のあることは、戰後の歐洲とは、全く反對な現象であるのである。物質的破壞が假りに歐洲大戰に倍することありとも、災後の救濟の困難が歐洲改造の其れに勝ることありとも、彼れになくして、我にある此の感激、此の人情美より生ずる心の力は、我々をして、復興の前途を樂觀せしむるものである。況んや物の破壞の程度、其恢復の困難は歐洲の其れよりも遙かに尠少なるに於てをや。物の上に於ても、心の上に於ても、私は到底日本の復興と歐洲戰後の恢復とを同視する一部の論者に贊同することは出來ないのである。

(五)

然るに、何事ぞ、復興空説者を當局の長上に戴くの結果は、此の美しい心的基礎は今や漸くにして破壞せられんとし

つゝあるのである。曩きの感謝は漸くにして怨嗟に轉化し、曩きの同情は漸くにして嫉視に變ぜんとする傾向を見る。私は、それを最大の損害と見ざるを得ない。其れは折角の樂觀を悲觀に轉化せしめざれば已まないものである。かくて反復興心は暗默の間に偉大なる力を養ひつゝありと、私は觀ずるのである。復興を復舊たらしめようと虎視眈々たる舊特權階級、特に資本主義的獨占權者等は、決して此の反動を利用せずして默過するものではない。彼等は待つて居ましたと云はん斗りに、其の最善の最惡を傾倒して、復興即復舊の輿論を煽り立つるに全力を用ゐるに相違ない。復舊は最惡最拙の復興經濟法である。何んとなれば復舊は、震火災による物的破壞の全部を、向後の我々の生活に於ける借方勘定、損失勘定に記入せしむる所以であるとは、私が他の論文に於いて力說することを勉めた所である。人心の荒廢より來る反復興熱は、此の最惡最拙の經濟法を唯一の旗印として驀進し來るであらう。此くして復興に對する民衆の樂觀は急轉直下大なる悲觀となる外はないのである。人心が緊張して居る限り、世界の同情に感泣した醇良の心が衰へざる限り、舊特權階級は如何に焦慮するとも、復興を復舊に變形せしめて、私利私慾の飽貪を圖ることは出來ない。化物は暗處にのみ住む。民衆の心にして光明正大なる限り、化物は引込んで居るであらう。民心一度弛むとき、ブルヂオア文化の特權化物は、更らに七つのより惡しき惡鬼を伴ひて歸り來るのである。復興は復舊に非ずと大聲叱呼して起ちたる當局は、まさに自家の擁護の爲めからのみ言つても、民心の弛廢、復興悲觀の心理の蔓延を防ぐに、全力を傾けなければならぬ筈である。況んや眞に日本復興の大事業を遂行せんとするに於てをや。

（六）

私は感傷を聯想せしむ可き言は一も之を發せないつもりで、本文に筆を執り乍ら、以上此のヂスクレションに裏切つ

たことに心付く。以下此のヂスクレションを裏切ることなき論理の立場に立返り、私の撰んだ論題たる復興經濟の厚生的意義を明かにすることを勉めねばならぬ。

今日の經濟生活は、貨幣經濟、價格經濟の殆んど最絶頂に到達した生活である。其の改造とは、厚生經濟への進化でなくてはならぬ。是れが私が數年前から主張する所である。私は、其の意味する復興經濟なるものは、此の進化の一道程たるものであると信ずる。此の道程ならざる復興經濟は、復興の名あるも其實なきものであると信ずる。破壞せられたものを復舊するに止まる經濟には、此の進化はない、從つて其れは、何等の厚生的意義を有せないものである。之れに反して破壞によつて消滅した舊經濟に代へて、新しい經濟たる復興經濟を興すことは、其の經濟の立て方によつては著しい厚生的意義を有することになる。復興經濟の內容、換言すれば、如何に復興するかの方針は、其れが有する厚生的意義を、少くとも現在の狀態に於いて可能的最大ならしむる事に存せねばならぬのである。更らに言換れば、災前の我々の經濟生活に於いて、價格經濟の缺陷、弊害たりしものを、可能的に撤去し之れに代るに、厚生的作用を助長することであらねばならぬのである。價格經濟、殊に貨幣經濟のタームスに於てしか、物事を考ふることの出來ない私經濟學、商業學、財政學等は、抑々復興經濟に容喙すべき資格を全然有せざるものである。火災保險の現實の（比較的に小なる）問題に就てすらも、契約而かもプソイド・コントラクト（嘘の契約）神聖觀論者は、何故に契約條款に明記してある地震原因火災免除の有効性が問題とせられつゝあるかを諒解する能力を缺いて居るのである。非常の時に際會して猶常時の法條に拘泥することは、勅語を以つて戒められてあることの眞意すら彼等は理解し能はぬのである。此くの如き狹く囚はれたる價格經濟（或人は之を資本主義經濟と呼ぶ）の渇仰者等に向つて、復興經濟の原理を談ずることは、或は徒勞であらう。乍併、私は未だ失望せざるものである。何れの日か、狹きものを擴げ得るの望は、未だ全く去つた

のではない。唯だ價格經濟の病態の恢復に、ヴァイタル・インテレストを有する特權階級、（地主、實業家、政治家、從來の市區政關與者等）に至つては、殆んど無緣の衆生である。私は彼等に向つて談理するの勇氣を少しも有たないものである。

（七）

價格經濟は價格の得喪を以つて、人間の經濟的努力の中心となし又た其の標的とする。アダム・スミスは普通には、此の價格經濟の樹立者と看做されて居る。奚んぞ知らん、彼は繰返して說いて云ふ『消費は一切の生產の唯一の目的と歸趣であらねばならぬ』と（近刊商學研究揭載拙文『厚生哲學の鬪士としてのアダム・スミス』を見られたし）。今日の價格經濟は、決して消費を目的とする生產を營むものではない。より多くの價格、より多くの利潤を標的として生產を營んで居るものである。マルクスは玆に今日の資本主義經濟の內在的矛盾ありと云ひ、河上博士は最とも忠實に其說をあらゆる機會に於いて說教せらるゝ。私は此くの如き內在的矛盾の存在を否定する。資本主義經濟が外的作用によりて破られざる限り。營利本位にして、只管により多くの價格獲得を標的とする今日の經濟生活は進展して行くものと信ずる。矛盾は資本主義に內在せずして外在する。換言すれば、資本主義經濟によつて生きつゝある我々人間の全生活の內に其矛盾は存在する。我々の人間としての要求（或學者の所謂文化價値）は、價格經濟其もの丶矛盾を彌々痛感し行く。厚生經濟の主張と要求とは、此の痛感から產れ出て來つたものである。

現存する價格經濟の世界其ものが、未だ厚生經濟の主張と要求とに覺めざる以前、既に我々の人間性への反省は、暗默の間に働いて居る。其作用の發端は、今日の價格經濟學と雖も之を度外に措くことが出來ないのである。其考慮其反

省は幾多の原理的疑問を提示する。其最も顯著なるものの一は、數理經濟學者殊に最近物故した伊太利の經濟學者ヴヰルフレド・パレトによつて稍々明白に指摘せられた。所謂パレト法則なるものは、此の反省を（私から見れば誤つた方向に向つて）言明したものである。私は嘗て改造に掲げた論文に、此れについて左の通り書いて置いたのである。

『今日までの勞働運動は、其理論的根據を何れも價格鬪爭論の上に置いてあるが爲めに、甚しき誤謬に陷つて居るので、其爲めに過去に於ける勞働運動に害を成したこと、重且大なるものありと云つても誣言ではないと思ふ。處が新らしい――或意味にては最も新しい――學者の中更らに同樣なる誤れる立場から有力の一新説を唱出したものがある。其は數理經濟學者中現存の巨匠たる伊太利のヴヰフレド・パレト氏である。氏は其『經濟學教科書』に於ても更らに又新著たる『經濟學綱要』に於ても、所得統計の研究を基礎とし、更らに詳密な數學的證明を加へて次の如き法則（之れを所得の「パレト法則」と名つく）を打立てゝ居る。

（一）(a)最低所得の増大(b)所得間の不平均の減少は所得が人口の増加よりもより速かに増加するに非れば、共に同時にも又は別々にも起り能はぬ。

（二）反對に、所得額の増加が、人口の増加よりも、より速かなる毎に、換言すれば、各個人平均の所得額が増す毎に、次の結果が同時にか又は別々にか生ずるものである。（一）最低所得額の増加（二）所得不平均の減少。

從つて氏は斷言すらく、貧民生活改善の問題は、結局、富の生産の問題であると。』

（八）

パレトの論は、一の『レドクチオ・アド・アブスルドム』（歸謬論理）であるのである。パレトが、容易に指摘せられ得

可き此の矛盾論理を打立てたによつて、消極的に、價格經濟の外在的矛盾を立證したものと見るのは、必ずしも他の論頭を執つて逆まに之れに向ふ次第ではあるまい。パレトは主として十九世紀に於ける所得統計を蒐集して、之れに數理的説明を下して云ふ。與へられたる所得高をxとしx部を超過する所得を得る人の數をNとし、縱坐標をxの對數とし、横坐標をNの對數とする曲線を引くときは、此の曲線は、粗ぼ直線に近い線であるのみならず56°よりは3°又は4°しか距らぬ角に於いてxの軸に傾く。而してtan 56°＝1.5なるが故に、x額より大なる所得の數がNに均しきときは、mの値が何程であつても、mxより大なる數は$\frac{1}{m^{\alpha}}\cdot N$に均しいと「經濟學教科書」三〇六頁以下之れから二つの結論が生ずる。（一）一國の總所得高を增加することは、同時に貧者所得の絶對額を增す。（二）其反面に於いて貧民所得の絶對額を增すことは、一般に云へば、全體としての國民總所得を增すことによるの外全く不可能であると云ふ是れである。第一に、パレトが基礎とした所得統計の推論は、彼の如く一樣的に取扱ふことを許さないものである。パレトは、對數的所得曲線を、粗ぼ直線に近いものと斷定した。併し乍ら、事實に於いて、所得曲線は、所得の種類の異るに從つて、異れる傾斜を有つもので、一切の所得に通じて同一の傾斜を有つものと云ふことは出來まい。タトへ其れは一樣に粗ぼ接近的なる直線を現ずるものなりとするも、各直線は描かれたる坐標系に於いては、其れ〳〵に異つた度の傾斜を有すものである。更らに又た、所得額計算の時期の長短によつて、各直線自ら其傾斜の度を同ふしないものである。此く異れる傾斜を有する所得諸線を共通の法則の基調とすることは、計算上のみから見ても誤謬である。

パレトの如き卓越した而かも數の取扱に於て、今日の經濟學者中、類稀なる天才たる人が、此くの如く容易に指摘し得べき誤謬に陷つた理由は、必ずしも之を遠方に探求することを要さない。パレトは數理的思索には長じて居るけれども、現在の經濟生活に於ける所得決定の事實——殊に流通經濟に於ける權力の大作用の觀察を怠つたからである。而し

て他方に於いて、彼は現在の價格經濟が厚生經濟とは、其質を甚だ異にするものたるを、殆んど全く度外に措いて、彼れの考察を進めた。進つて、彼は、所得決定の現社會的、現人間的方面を看取することが出來なかつたのである。彼は凡ての所得を同一否單一の法則によつて決定せられるものと見、其單一の法則は、厚生經濟に行はる可きものが、直ちに現在の價格經濟に於いて行はれて居るものと前提し去つたのである。故に彼は所得曲線の直線性を見出すや、直ちに其直線性は悉く同一度の傾斜を現はして居るものと速斷して仕舞つたのである。彼が直線性を見出したことは、或は一の學問的業績であつたらう。乍去、其傾斜度が其れ〲に異ることを同時に見出し得なかつたこと――或は見出したのかも知れないが之を默殺し去つたこと――は、彼の業績を痛く毀ける所の誤謬と云はなければならぬ。茲に我々は、價格經濟の外在的矛盾を無視することの危險なる一の殷鑑を見出さゞるを得ないのである。

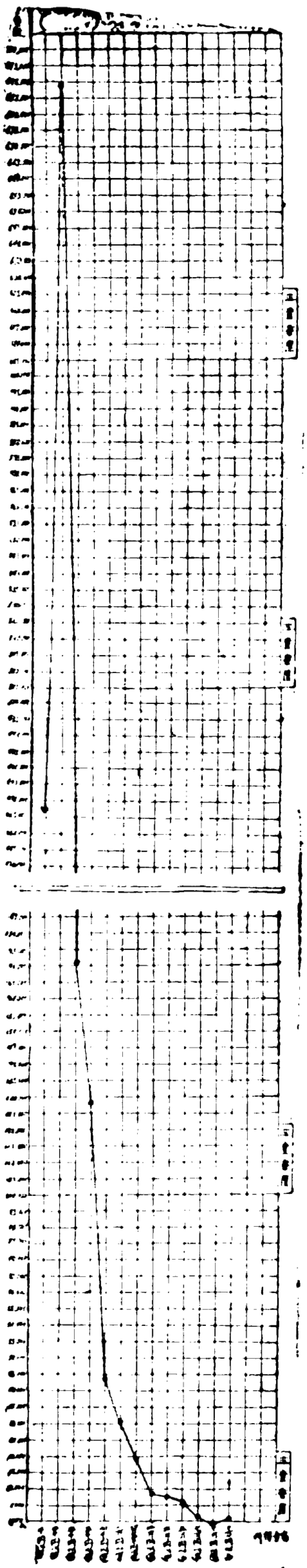
乍去、私はパレトに對して出來る丈け公平なる可く、姑く右の統計的誤謬を看過して、更らに他の點を考察して見たいと思ふのである。

(九)

假りにパレトの統計的基礎に一の誤謬が存せぬものとして見る。然るときに於いても、パレトの描いた曲線は妥當を缺くものである。我々は、彼れの描いたものよりは遙かに簡單なものを描いて見よう。即ち横坐標を以て所得の諸々の額を表はすものとし、縱坐標を以て其等諸々の所得を得る人々の數を現はすものとする是れである。然るときは、事實に忠實なる所得曲線は、其最高點に近くに從ひ甚だ迅かに上昇的傾斜を示めし、其下方に向ふに從つて絕へず下降するものなることを見出すであらう。此れに似寄つた現象は、出來高拂による賃銀形態に於ける勞働者の所得に就いて觀察

し得られることは、嘗て私の主張して置いた所である。『社會運動と勞銀制度』三四二頁以下并に三七一頁以下 言葉を改めて平易に云へば、今日の經濟生活に於いては、平均所得額より遙かに少い所得しか得ぬ人この數は甚だ大であり、平均以上の所得額を得る人々の數は比較的に甚だ少いのである。是れが今日の價格經濟組織に於ける現實の所得分布の狀態である。即ち國民總所得の大部分は、所得層の最下段に近い處に集中せられて居るものである。此事實は、端的に現在の價格經濟に於ける所得の分布は、厚生經濟の要求と甚だ相隔つて居るものなることを物語るものである。

以上の事實を我邦に就て立證す可く、私は玆に云ふ單純曲線を大正十年の第三種所得統計に就いて試作して見た。(序に云ふパレト曲線を利用して我邦の所得曲線を描いたものに汐見學士の甚有益な研究がある。Eutnrickelng des Volkaseinkoumens. in Iapan 1903—1919. Fig.4)



人の心的、物的稟性、從つて其の生產營利能力は、右の曲線で示した樣に分布せられて居るものではない。從つて若しも各人の所得が其の生產營利の實能力に忠實に追從するものとするならば、所得曲線は右の如くになるべきではない換言すれば、今日の價格經濟に於ける各人の產業營利能力と其實收する所得とは、甚だ相異れる曲線に沿ふて分布せら

れて居るものである。厚生經濟とに、此二つの曲線が均しかる可き經濟態樣の謂であり、前者の間隔が少しにても除却せられることは、其れ丈け厚生的意義を增し加へる所以であるのである。私が復興經濟に厚生的意義ある可しと主張するのは、他の多くの事と共に、此兩線が如何程にても相接近す可しとの謂であるのである。

人の產業能力に從つて描き出さる可き謂はゞ理想的の所得曲線と、今日の價格經濟に於ける現實の事實に基く所得曲線との相違は、種々の理由によつて產み出されるものである。其の重なるものは、(一)相續財產の有無並びに其の多寡(二)不勞所得の有無並びに其の多寡(三)職業の特殊性——權力性——の有無並びに其の强弱(四)所得の獨占性及强制——併稱して奪掠性——の有無並びに其の强弱是れである。パレト法則の主張者自らも、後年の著作たる『經濟學綱要』に於いては、多少此點に考慮を拂つたものと見へて次ぎの如く告白して居る『此の法則は純經驗的なものである。此くの如き經濟法則は、其れが經驗的に異なるべきことが見出された制限以外に於いては、極少の若くは皆無の價値しか有せぬ』(同書三七一頁以下)と。此れは率直に云へば、此法則の妥當性の要求を自ら否認したものである。此の間接的否認によつて、パレトは寧ろ甚だ有力に、價格經濟に纏絡せる外在的矛盾を肯定したものと云ふも決して過言ではないと思ふ。平易に云へば、彼は(一)國民總所得の增加は必ずしも、貧民所得の增加を伴はざること(二)貧民所得の增加は必ずしも國民總所得の增加を須たずとも將來し得ることの二則を、反面的に肯定したものなのである。私は更らに一步を進めて主張する。國民總所得が減少しても、或は下層民所得の增加することは可能、蓋然的であり、下層所得の增加は、國民總所得が減少する場合にも可能又た蓋然的である。其の可能性、其の蓋然性は、價格經濟が厚生經濟への進化によつて悲調付けられるものであると。殊に我々が今當面する復興經濟の建設は、此の可能性、蓋然性を生じ得可き見込を包

殺するものである。何んとなれば、其の建設は（一）相續の有無、多寡てふ防碍原因を著しく除却するものであり、（二）不勞所得の多寡を減ずる可能性を有するものであり（三）所得の掠奪性をよし全滅は爲し能はざるも、著しく之れを輕減し得べき可能性を有するものであるから。其の反對に、復舊に墮落するときは、此等の可能性は一も存し得ない。從つて價格經濟に附帶する外在的矛盾は、其儘に繼續せらるるの外はないのである。而して殊更らに大なる重みを、私は此點に關して現前の失業問題の上に置くものである。

（十）

此度の火災によつて、相續による所得の不平等が、著しく除却されたことを、我々は甚だ歡迎せざるを得ぬものである。無論其れは、日本國の全部に亘つてでないは言ふ迄もなく、又罹災地方にあつても、必ずしも普遍的なりとは云ひ得ぬのである。併し乍ら少くとも、可なり多數の人々に就て、父祖傳來の相續による有形の財產並びに或度までは無形の貨幣財產の消滅し、又は著しく其價値を減じたことを知る。樂觀的なる東京人は之を丸燒てふ言葉によつて言明して居る。此意味に於ての丸燒は、甚だ歡迎す可きことである。若しも此度の大災なかりしならば、他の作用によつて、此くまで相續制度による不平均の均一化は決して實現し得られなかつたであらう。人或は言ふであらう。此均一化は全國的ではない、又た普遍的でもない、從つて却つて不平均を甚しからしめたと云ふ害がある計りであると。私は答ふ、然らず、タトヘ國の一部に就てなりとも、不平均の取り除かれたことは、其れ丈け、價格經濟の厚生化へ接近するものとして喜ぶ可きことである、若し此事が人爲の何等かの方策によつて行はれたならば、タトヘ其範圍の廣いと云ふ得はありとも、他方に、經濟心理的、社會心理的の危險が伴ふことを免れない。誰人も咎めらるることなく責を負ふことなくし

て、此れ丈けの均一化が行はれ得たことは、不幸中の幸と云はねばならぬことである。況んや此の不平均の取除けは、他の種々なる取除けと同時に行はれ、丸燒けは、相續分と否とを問はず、一樣に行はれたのである丈け、其れ丈け、何等の特殊的なる弊害も危險も——一般的には左樣でないかも知れないが——伴ふことなしとの大得があるのである。不勞所得の——少くとも——一時的停止も之れに劣らず歡迎せらる可きことである。災前二千圓も三千圓も價した土地が百圓、二百圓に下落したと傳へらるゝことが、若しも實際の事實でありとしたならば、其れは、不勞所得の思ひ切つた減殺であつて、其れ丈け厚生的意義を有つものと云はなければならないのである。所得の權力性と奪掠性とに就ても、亦た粗ぼ同樣の事が言はれ得るであらう。無論其れには、弊害は一般的に伴ふかも知れない。然し乍ら其の特殊的弊害が減少したことは、少くとも、其れ丈けとしては、甚だ歡ばれなければならぬことである。此くの如くにして、價格經濟に就ては、誤謬である所のパレト法則が、却つて普遍安當性を獲得し得るに至る經濟生活の實現、眞正の厚生經濟のアドヴェントへ一歩にても近くことを得るならば、大災の禍は轉じて眞の福となり得るの外はないのである。私は、之を認めて復興經濟が、先づ其出立點に於いて『イン・ヌチエ』に於いて有する厚生的意義なりと呼ばんと欲するものである。

（十一）

復興經濟は、其の命題に於いて更らに今一つの大なる厚生的意義を有つ。私は其れを新舊代替轉位の厚生作用と名ける。此作用は、必ずしも復興經濟に特殊的なものではない。復興經濟の第一原理が特殊的のものたらざるが如くに、此の轉位の厚生作用は、平時の經濟原理に於いても、十分に說かれてなければならぬものであつた。唯不幸にして、私

經濟、資本主義經濟の使徒等は此原理の發見を敢てするに及ばなかつたのである。乍去、私經濟的考察に甚だ鋭く徹底した獨逸の學者ロバート・リーフマンは、數年前の獨逸社會政策學會の生産能率に關する討論に際して、此原理の闡明に多大の貢獻を爲した。私は、彼れの立論によつて甚だ多く教へられたものであつて、『國民經濟講話』に於いて、若干の自己考察を述べたことがある。（リーフマンの論は載せて當時のコンラッド年報にある）。リーフマンは色々の機會に於いて、私を以つて最大知己の一人なりと云つて居るそうである。私は未見の友たる彼に對して必ずしも知己を以て任ずるものではないが、彼の思索に重大なる缺陷あるを知ると同時に、彼の徹底した立場の多くに對して心から共鳴するものである。子なるカール・メンガーは父メンガーの一生の大著作『經濟原論』を再版に附する序文に於いて、理論經濟學は、獨逸に於いて閑却せられつゝある間に、伊太利に於いて、和蘭に於いて又た瑞典、那威、デンマークに於いて、スラヴ諸國に於いて墺太利派の理論が認められ、就中米國と日本とに於いて、理論經濟學の研究が、成功を以つて營まれて居ると記して居る。一九二三年刊第二版編者序文第八頁私は彼が日本を表中に加へたことを寧ろ不思議と感ぜざるを得ぬものである。併し少くとも、伊太利の諸學者を始め、リーフマン、シュムペーター、シュパーン、アモン、マックス・ウェバーの近時の研究が日本に於いて理解せられ祖述せらるゝことは、（其代表的なるは高田保馬博士、土方成美教授等である）子なるメンガーをして此く言はしめたものであるかも知れない。是れは、日本の經濟學の手柄と云はんよりは、寧ろ、價格經濟學が餘りに甚しく我々の理論的要求に孤負するが爲めと云ふ可きであらう。少くとも、今私が論ぜんとする一事に就ての價格經濟學の怠りは、餘りに甚しいのである。

私は煩を讀者に課せざらんが爲めに、唯二人の卓越した價格經濟學者のみを引照するに止める。其一人は倫理學として盛名ありしヘンリー・シヂュウヰックである。其の第二は、勞働問題の先覺として、又た理論經濟學一方の驍將として

甚だ重きを爲すジエー、エー、ホブソンである。

シジュウキックは云ふ。「私的企業は、企業家が其の企業が社會に與ふる全純利益以下ならず其以上のものを占有する可能性を有つから、時としては社會的に不經濟的であり得る。何となれば、彼は一擧にして一方に利益、他方に損失を惹起す可き或る新舊轉置の利益の大部分を占領して、其れと同時に生ずる損失を全部他人に嫁することを爲し得るから。一例をあげれば、Aなる企業會社が例へば鐵道の如き費用多き永久的機關を自己並びに公衆の利益の爲めに作つたとする。然るに茲にBなる他の會社があつて、旅客に取つてより便利なる新鐵道を布設し、其結果A會社の旅客と貨物との大部分を自會社に奪ひ去るとする。然るに此場合新鐵道によつて社會一般が享受する利益は、其の架設費に及ばないとせよ。而もB會社は其の新鐵道を架設するであらう。何となればB會社は、其新鐵道の利用とA會社の舊鐵道の生じた利用の大部分とを利益として收得し、其損失は之を社會一般に嫁することが出來るから」と。（『經濟理論』四〇八頁）言ひ換れば、シヂュウキックは此の新舊鐵道の轉位には、一方に利益を生むと共に、他に之れから當然差引かれねばならぬ所の損失なるものありと前提して居るのである。

ホブソンに至つては、更らに露骨に言明して云ふ。『近年に於いて新發明が基礎産業に採用せらるゝことの迅速なる割合は——其採用は、未だ用ゐ盡されざる利用の源たる費用高き設備や機械の大量の供給を伴ふ——大なる浪費の一淵源である。吾人にして、少しく思慮を旋らすときには、各種の改良を餘りに急速に産業に採用することは、産業を一の全體として見たときには、甚だ浪費的であることを發見するであらう。或る僅かなる節約法の發見者が一擧にして、彼の競爭者の全部の有する現存設備の全價値を全滅せしめ得る競爭制度の下に於いては、此くの如き浪費を防ぐ可き道が存せぬ。公的又は私的獨占の場合に於いては、タトへ改良が案出せらるるとも、之を採用するに方つては、舊設備の未だ用

ゐ盡されざる利用の少くとも一部が用ゐられることを可能ならしむ可き緩慢なる速度に於いてのみ爲されるであらう。此くする方が遙かにより多く眞に經濟的であるからである』と。『金と價格と勞銀』第二版一一〇七―八頁

(十二)

右兩氏が言ふ所は、根柢に於いて、一の大なる眞理に立脚して居るものである。即ち價格經濟に於いては企業者の得る利益は勿論のこと、其他の所得に於いても、各經濟單位の收得する所得餘剩は必ずしも、社會として見たる餘剩即ち厚生餘剩と一致するものでなく、其れよりも少いこともあり得ると同時に、其れよりも遙かに多いこともあり得る、換言すれば、社會は或所得者によつて其の厚生所得の一部を掠奪せられ得ると云ふこと是れである。即ちパレト法則は、價格經濟に就ては妥當ならずてふ理論を他の方面から觀察した結果である。併し乍ら、其の可能なる幾多の場合の一つとして、兩氏共に此の新舊設備の轉遷を擧ぐることは、甚だしい誤謬に陷つて居るものと云はなければならぬ。其れは、價格經濟の缺陷を指摘せんとして、却つて自ら其の爲めに囚はれたものに外ならないのである。若しも此くの如き見解が妥當なりとしたならば、鐵道を布設しようとする者をして、ガタ馬車、人力車、馬力の經營者に補償金を支拂はしめ市街自動車會社の設立に際して市電に若干の補償を交付せしめ、電燈會社をしてランプ屋に見舞金(一)を支拂はしめなければならぬことになるであらう。世豈に此くの如き沒理あらんや。此れは畢竟『ギヴ、エンド、テーキ』に沒頭する私經濟的思想に囚はれて居るものである。何んとなれば、轉位せられる舊設備共ものゝ所有者は、其得んと欲したる利益を失ふには相違ないが、他方には、彼等によつて供給せられて居た購買者は、其失はれた利益丈けの利益を新たに增收するものであつて、社會全體としては、其處に損失と目す可きものは、些も存しないのである。此場合に於いては

新設備の供給者の得る限界餘剩は、社會全體が得る限界餘剩と大體に於いて一致するのである。舊設備によつて生産せられる商品は、其の生産費にして、新設備によつて生産せられる商品の生産費よりも大ならざる限りは、決して新設備の商品によつて驅逐せられるものではない。換言すれば、新設備が取つて代はる商品は、舊設備によつて生産せられる商品に對して支拂はる可き價格から、其生産費を控除した純利益の全部に該當する丈け低廉なる價格に於いて賣られるものでなければならない。然れば、舊設備の所有主が失ふ所の利益は、其れ丈け購買者の利益となるのである。從つて利益を失ふものは、舊設備の所有主丈けであつて、決して社會全體ではないのである。此場合は、唯だ利益の轉置が、舊設備の保有者から、消費者、購買者へと行はれるのであつて、損失と目す可きものは、一も起らないのである。或は云ふ者があらう。直接の損得の上からは左樣であるかも知れないが、遠く慮る者は、間接の作用を考へなくてはならぬ莫大な經費を投じだ機械や設備が、一の新發明起れば、直ちに全部無用に歸すると云ふやうな危險に曝されるとなると、企業家は、費用多き設備をすること共事を差控へるに至るであらうと。答、成程其の懸念はないとは云へない。然し乍ら、其の懸念の爲めに、新發明、新發見ありとも之を採用することを猶豫するときは如何。凡そ發明發見は、其れが採用せられるといふことによつて、最も有力に奬勵せられるのである。發見、發明をしても、其れが容易に實際に應用せられないときは、發明、發見、新案の起ることは、必ず著しく沮喪せられるを免れない。其れより來る損は、費用多き設備を控へると云ふ損とは到底比較するを得ないものである。況んや今日の經濟生活に於いては、殊に競爭の激しい業に於いては、いくら押へたとて、改良した設備ありと知れば、必ず誰人かあつて之を採用する。一人採用すれば、他の人々が差控へることは不可能なことである。然れば、寧ろ新案、新工夫の採用に何の妨害を設けず、之れによつて其れ等が續々起ることを刺激する方が、社會全體より見て、遙かに有利、遙かに經濟的であるのである。特に一部の特

權階級、ヴエステッド・インテレストの主體の爲めに、新機械、新工夫の採用が妨害せられるは、不經濟の最も甚しいものである。ホブソン、シヂユウヱック兩氏の論は、私經濟の利益の爲めに、全體の利益を忘れた謬論であると云ふの外はないのである。

（十三）

私は今新舊代替轉位の經濟理論其ものを講ずるつもりでないから、此以上追窮することを見合せる。私が此事を茲に提出した所以は、復興經濟は、多くの點に於いて此の新舊轉置を實現するものであり、否、せなければならないものであるから、豫め起り來る可き謬論の根據を破壞し置く必要ありと思ふからである。殊に私が『我觀』の拙文『倒ることの過大觀』に於いて、少しく論評して置いたベルリーナー氏一流の私經濟に囚はれた復興經濟論に對しては、此點を確かにして置く必要が大であると信ずる、震火災によつて滅ぼされた幾多の産業設備の中には、新設備の爲めに、當然轉位せらる可くして、而して當事者の怠慢、無能の爲めに、其儘續用せられて居たものが少からずあるに相違ない。左樣でなくとも、此れを機會に、より改良された機械、より進歩した設備を以つて轉位するを得可きものは、更らに甚だ多いことと信ずる。市區の路線、橋渠、運河其他にも左樣なものは尠からざることは、都市計劃と云ふことが、災前既に久しく懸案であつたことによつて、疑もなく左證せられて居る。其等のものが、人間の手による轉置を待つまでもなく、震火災の爲めに打捨てらるゝに至つたことは、以上轉置代替の經濟理論の示す如く、國全體、社會全體に取つては、何の損をも意味するものではない（其の私經濟的所有者は無論損失者であるが）。問題は、滅ぼされたものゝ損其物ではない。新たに復興せらる可きものが、其れ丈け多く改良せられ、改善せられ、從つて、舊所有者の被むる損失が、社會全體か

ら見て、何等の損とならず、唯だ一方に失はれた利益が、他方に得られると云ふ利益の轉置——殊に其の增進的轉置——が起り得るや否や其れである。增進的轉置が實現せられ得るならば、復興經濟は其れ丈け、多くの厚生的意義を有することとなる。單なる轉置に止るとしても、其の設備が改良せられたものであるならば、更らに他の改善を促すと云ふ點に於いも、厚生的意義が其處に存する。此の厚生的意義が多いほど、舊價格經濟より新厚生經濟への進化は促進せられることが亦多いわけである。國を、社會を、一營利業者、一の大なる私經濟と見ても亦た左樣である。況んや綜合經濟としての國民經濟の立場から見るときをや。ベルリーナー氏若くは契約無上神理論者の私經濟觀は——企業家一己人、企業會社其ものの立場から國民經濟の廣汎なる事象を律せんとする——到底、復興經濟の眞諦に到達することを得ないものである。而して其れは、私が本文の始めに於いて言つた處の反復興熱を促進する有力なる武器として使用せらるゝ危險大なるものである。遮莫、私は、今の政治家、實業家、特權階級に向つて殆んど何等の望を囑せないものである。私は冷靜なる談理を聞くを厭はざる新進新興の人々に對してのみ、復興の眞意義、復興の厚生的意義を正しく理解せられんことを切願するものである。

(十二、十一、廿四—廿六稿)

人間の意志創造の意味について

石原純

一

自然と人間能力との交錯は、まことに私たちの人生における仕事の根本的の意味を思考する場合に、深く考究せられなければならない問題です。

私たちの人間は自分の意志のまゝにふるまひ、それによつてこの地上に人間特有の一つの文化を創造してゐるかの如くに、みづからを感じてゐます。そして私たちの藝術と科學とはそのはたらきの美くしい實りであることを誇らうとするのです。けれども私たちはそれらの人間の仕事の究極的の有様を想像しやうとするときに、私たちは果して人間にどれだけの創造能力がゆるされてゐるかを、一度は省りみなければならなかつたでありませう。なぜなら、恐らくそれは神の創造能力のやうに無限ではあり得なかつた筈でありませうから。それならば人間の意志創造には、神のそれに比べて果してどれ程の制限が置かれ、若くはどれ程の差別が豫定せられてゐるのでせうか。私は先づその意味について考究してみたいと思ひます。

二

近く自然の絶大なる慘禍を經驗した私たちは、自然のまへに人間の能力があまりに貧しくみじめなものであることを

體感したものでありませう。幾ばくの人たちが流した汗と脂とをもつてつくられた物質的の建造物はそれが實用品であると藝術品であるとを問はずに、瞬く間に滅びつくしてしまつたことは、なほまたそれにも増して悲惨な数おほくの人命の凋落とともに、私たちが涙なしには追憶し得ないことでありました。けれども巷にあへいでゐる多くの同胞たちよ。若しあなたがたが心を靜めて省慮するならば。私たちが究極の目的としてゐる人生の仕事としての藝術と科學とは之がために少しでも損はれたものではないことを悟つて、せめてもの心を安んずることが出來るのでありませう。私たちの須臾なる肉體的生命の死滅は悲しむべきものにはちがひありませんが、併しそれでも滅びないであらうところの魂はやはり人生の永遠なる理想のために生きると見ることは出來ませう（週刊朝日新年號「永遠への理想」參照。）なほまた再び創ることの出來ない多くの美術的作品の失はれたことは惜しんでも足りないところですけれども、併し私たちの自然科學は之等の藝術的價値を永遠に殘し傳へることの可能性を教へるのです。私たちの勞作が自然のまへに壊滅に歸することは、決して自然が人間の文化に叛逆しやうとするのではなくて、却つて私たちの淺慮が自然の過程を正當に見出すことが出來ないで、その勞作をして自然の變化に順應せしめることを知らなかつたからであります。私たちは決して自然を恨み悲んではなりません。私たちの人生の仕事のまだ到らないことを恥ぢ勵まなくてはならないのでせう。神の恩念は深遠絶大です。私たちの仕事をしてその永遠無限なる究極への路を歩ましめんがために、あらゆる自然を私たちに恵み與へてゐると見なくてはなりますまい。

人間の文化は自然を征服するにあると云ふやうな言葉を嘗て私たちは屡聞かされました。私は征服と云ふやうな舊時代的な耳さはりな云ひ表はし方をこゝには避けませう。畢竟は私たち人間が自然を適宜に變更開拓して、そこに存在しない人間特有の世界を創造すると云ふ意味であると私は思ひます。けれども私たちは斯様な文化の世界を「創造する」に當つて、たとへ一指だも、自然に反抗して之を動かすことは出來ないのではありますまいか。私たちすべては自然に生き自然に死ぬものです。自然に背いては一つの呼吸だにゆるされないのです。私たちは自然に順應することをその最も正しい道であるとしなければなりません。之を忘れて人間の意志に何の權力があり得るでせう。何の價値が伴ふでせ

う。私たちはその誇らしい大都會の果敢ない破滅を見せられました。都會ならぬ自然的原野が遙かに私たちの生活に幸福であるとするなら、それは物質的文化に對する餘りに露はな皮肉ではありますまいか。私たちはその生活に便利なためにのみ都會を建設した筈であつたからです。

けれども都會が何ゆゑにそれ程たやすく壞され得るものであつたかを少しく考へたなら、私たちはそこに知らず〳〵の間に自然への反抗を企てゝゐたことに氣づくでありませう。固より私たちは他の便宜的な若くは經濟的な事由から之を顧るに遑がなかつたわけでもあつたでせう。ともかくも併し私たちは自然に順應することを忘れて、あまりに人間の氣隨な意志のまゝにふるまつたことは否み難いのでした。私たちはもつと〳〵自然のどんなものかを深く知らなければなりません。そして自然のあらゆる變化に順應する道を究めなければなりません。そのうへで本當の健全な文化が成り立つのです。私たちの帝都を復興しやうとするに當つて、意識的に止むを得ずとして、自然へのあからさまな反抗が再び繰り返されることがあつたとするなら、それは實に怖ろしいことです。かやうな謬まつた反自然的な盲目的な復舊よりも、若し經濟事情が之をゆるさないならば、寧ろ自然的な原始的生活を敢てして徐ろに時機を待つとの方が、どれ程自覺的な眼ざめた企圖でありませう。徒らなる粉飾のかはりに一株の生き〳〵した樹木の方が遙にまさつてゐるではありませんか。

私は斷じて云ひます。人間のあらゆる創造は自然に最もよく順應しなければならないものであると。自然を無視してはそこに何等の價値もないばかりでなく、神を冒瀆することに於てゆるすべからざる罪惡です。無知のために之を冒す間はまだ恕すべきでもありませう。けれども一たびにがい經驗によつて之を知つた上で、なほ自然への反抗を再びすることは恐ろしい罪でなければなりません。彼等は神の惠みに依頼する何等の資格をも失ふのであります。

三

私は人間の創造能力を論じやうとしたのでした。抑も人間の創造なるものがどこまでも自然に順應しなければならないものであるとすれば、そして何等の關係に於ても自然そのものを人間の氣隨に改變することがゆるされないとすれば

そこに創造を容れる餘地が果して存在するでせうか。人間の意志のどの樣なはたらきがその創造なるものを意味するのでせうか。或る人はこゝに論理の矛盾を豫想するかも知れません。或る人は併し人間が自然を利用して自然に存在しない現象變化を起し得ることを周知の事實として承認しやうとするでせう。また或る人は斯う說明してゐるのを私は見ました。「人は自然法そのものを自由にすることは出來ぬとしても、その法則と法則とを互にあやなして取り扱ふことが出來る。……人が自然のなかにゐながら自然を超えんとするは自然の法則に從ひながら、その作用する機會を複雜になすの自由を有して居るからである。故に自然界に於ける人の自由は自然をふみつけることではない。自然必然の法則に自ら同化して其の中から更に複雜にはたらかしめるやう助長することである。畢竟自然の自己化である。この意味に於て人はまた自然の主たることが出來る」云々。私にはそれでも「その作用する機會を複雜にする」とか、法則に同化して更に複雜にはたらかしめるやう助長する」とか云ふことは、餘りに曖昧模糊として、それが實際に何を意味するかを判然と見究めることが出來ませんそればかりでなく人間の能力が果して自然の作用をより複雜にすると云ふことは正當であるかどうか疑はれます。自然の現象と、人間の意志で起させたそれとは、いつも簡單とか複雜とか云ふ言葉で差別せらるべきではありますまい。自然科學に於ける實驗の如きは多くは自然をより簡單に現ぜしめる目的でなされてゐるのです。つまり之等の說明は事柄の眞の中核をつかむことが出來ないで徒らに言葉を濁してそれらしく裝つてゐるに過ぎないと私は思ひます。

　人間の意志創造と自然との關係を正確に知るためには先づ自然そのものの意味を深く探究しなくてはならないのですそして何が必然であり、何が隨意であるかを差別しなければなりません。私たちは必然なるものを少しでも變更するとが出來ないのであり、そしてこの意味に於ては自然に順應すると然らざるとの問題さへ起り得ない筈であるからです。併し若しそこに隨意なる部分が殘されてゐるとするならば、私たち人間は之を意志の儘に取捨することが出來る筈です。しかも自然に順應すると否とはこの場合に果して何によつて規準せれるのでせうか、隨意なるもののなかに、私たちは果して何を選ぶことが自然への順應なのでせうか。そこには自然の必要性はもはや相關しない以上、私たちは之に對

して他の規範を求めなくてはなりません。

この根本的な問題の解決のために、私は先づ自然について少しく説明を試みなければなりません。

四

自然科學は私たちの周圍に於ける自然を分析して、そのなかに必然的の關係をもつて結びつけられてゐる多くの現象の存在することを明らかにしました。私たちは既に經驗的事實として證明せられてゐる之等の現象から推斷して、自然に於けるあらゆる現象は斯樣な必然的の法則に支配せられてゐるものであることを假定することが恐らくはゆるされるでせう。實際にこの假定的原理、即ち謂はゆる因果則なるものは、既に自然科學成立の豫件であり、そして自然科學が現に或る程度まで成立してゐる事實は、この原理の可能であり、又正當であるべきことを示すものであると見ることが出來ます。

自然科學における法則が眞である實在であると云ふ意味は、之が究極的に絶對を云ひ表はすと云ふことです。自然における有らゆる現象、それはたとへ人間がその自由意志によつて之を起したものであつても、その現象の過程はこの法則の外に一歩も外れ出すことは出來ません。法則は厳然とした軌道に從ふものであり、從つて私たちは之を宗教的に絶對なる神の意志のあらはれであると解することが出來ます。私たちはこの必然を微塵だも變更することは出來ません。自然法則はたゞ神の創造に依るものであつて、人間の少しも之に觸れることの出來ないものです。私たちは只自然のなかに秘されたこの法則を發見し、之によつて自然を科學的に解釋することを私たちの仕事の一として委ねられてゐるばかりです。

併しながら玆に極めて大切な注意を忘れてはなりません。自然科學が見出すところの必然的な法則は、少くともそれが私達の感覺に直接に關聯する程度の現象（即ち macroscopic）に在つては、數學的にいつも微分方程式の形に於て與へられることは經驗の示すところす。ところが微分方程式は決して現象を具體的に決定するものではなくて、單にそ

の連續形式を與へるに過ぎません。若し或る與へられた時刻に、或る一つの可能的な狀態がそこに現はれるならば、之に續く次の瞬時にどんな狀態が相次いで起るかと云ふことだけを、私たちの微分方程式は敎へるのです。若しその時刻に可能的な他の狀態が存在してゐたなら、同じ微分方程式によつて規定される現象は併し全く異つた他の狀態に進むことも出來るのです。それ故或る有限の時間に於ける現象の具體的のあらはれは、法則としての微分方程式の積分によつて始めて云ひ表はされるのであつて、しかもこの積分の際に相伴つて現はれる積分常數を決定するために、私たちは謂はゆる始原條件、即ち或る考察の最初の時刻にどんな狀態が現在してゐたかと云ふこと、並びに環境條件、即ち私たちの考察する空間的範圍の境界にどんな要件が充たされてゐるかと云ふことを豫め與へる必要があるのです。しかもこの二つの條件は法則たる微分方程式とは全く獨立なものであつて、自然にあつてはそれが隨時隨處に種々の變化をもつてあらはれるのです。自然現象に對して私たち人間が關與し得る部分ば即ちこの兩條件の選擇に外ならないのです。

解り易い一つの例を私はこゝに擧げてみませう。私たちがたとへば一枚のカード札を取つて、之を或る高さの場處から下に落とすとします。カードの落ちる法則は必然的な微分方程式で云ひ表はされます。私たちは之を決して變更することは出來ません。けれども最初カードを落とす場合にそれをどんな向きに向けて落とすかは私たちの隨意です。それによつてカードは床の上に落ちてから、表を上にするか裏を上にするかが定められるでせう。之は即ち始原條件の如何によるのです。又カードの落下の途中で橫から風が吹き當つたとすれば、その模樣に依つても亦表が出るか裏が出るかが左右されます。この際私たちは風を當てないやうにするか、又はどんな具合に當てるかを勝手に變更することが出來ます。之れ即ち環境條件を種々に與へることが出來ると云ふ意味です。たくさんのカードをやたらに不規則につかんで之を落としたとき、その表が出るか裏が出るかは謂はゆる偶然の法則に從ふのです。この偶然と云ふことの意味は始原條件並びに環境條件が個々のカード毎にどう現はれるかと云ふことが全く複雜に不規則に起つて居り、私たちが特にカードの表若くは裏の何れかを出すやうにそれが一方に多く偏つて起ると云ふ理由を見出し得ないと云ふことに外ならないのです。つまり自然現象の偶然性は、その法則の必然性とは全く獨立なことであつて、單に始原並びに環境條件の

不規則にあらはれる結果に過ぎません。それ故にこの偶然性と法則の必然性とは決して相容れないものではないのであつて、通俗に謂はゆる運勢なるものはかやうな偶然性を指して云ふのです。

ともかくも私たちは必然的な因果則に從ふ自然のなかに於て。なほその始原並びに環境條件を隨意に選び變へることの自由をもつてゐるのです。こゝに自然の隨意さが存在し、從つて私たちの自由意志のはたらく餘地が見出され、又人間の創造作用が可能になるのです。（私はこゝに意志そのものが本質的に自由であるかどうかには論及しますまい。少くとも私たちがそれの自由であることの意識をもつことを認める上に於て、自由意志なる言葉を用ひたいと思ひます。）即ち私たちの創造なるものは、單に始原並びに環境條件に關するものであつて、神の創造による法則そのものには及ばないのであります。

それですから、例へば或る物質を適宜の形に組み合せて家屋を建造すると云ふことは、それらの物質が爾後自然法則に從つて變化すべき一つの始原條件を與へるのに外ならないのであり、之に使用した木材を腐蝕せしめないやうに周圍を乾燥に保つと云ふやうなことは一つの環境條件を適當に選ぶのに相當するのです。

五

自然現象の始原並びに環境條件の決定に對して、私たちは或る程度までの隨意さを有し、之によつて自然現象の生起をまた或る程度まで左右することの可能であることが、即ち私たち人間の創造能力を意味するものでありますが。それならば私たちが自然に順應すると云ふことは何によつて制限せられてゐるのでせうか。私はこゝに自然と人間との交渉についての考察に立ち入らなくてはなりません。

自然はその必然的に與へられた法則に從つてその[illegible]を進んでゆきます。そこには法則も尙ほまた始原並びに環境條件も神の意志によつて豫定されてゐると見なければなりますまい。併しこのなかに於て一つの生物として育つた人間はそのみづからに賦與せられた自由意志なる意識によつて自分の行動を選擇しながら自然の個々の現象の始原並びに環境

條件にはたらきかけることが出來ます。そしてそこに人間の永遠の仕事としての文化建設を自覺します。この目的のために先づ自然現象を分析して自然科學的法則をもとめて之を實生活上に應用し、同時に又人間特有の藝術を創造して思想感情を表現しやうとするのです。

併し人間は自然の或る限られた環境のもとに於てのみその安全なる生存が保證せられてゐるのです。私たち人間はかやうな生存が安易に保續せられるやうな環境に於て始めて生れ得たものではありますけれども。併し時としては之を打ち破るやうな異常なる環境があらはれないとは限りません。私たちは私たち自らに適合する自然に於て始めてその美を感じまた調和を感ずることが出來るのです。併し若し自然が私たちの感情を異常に刺戟するならば、そこに私たちは醜を感じまた恐怖を感ずるでありませう。天災に對する恐怖の感、荒びたる自然に對する粗野の感の如きは斯樣にして起るのです。之等の狀態も與へられた自然そのものの一つのあらはれには相異ありませんが、併し私たち人間の安易なる生存に適合しない點に於て、調和の缺除をもたらすものです。私たちはその生存に最も適合するやうな環境に於て、自然の一つの平衡狀態を見出すことが出來ます。固より私たちはかやうな狀態を科學的に嚴確に云ひ表はすことは、現時に於て不可能ではありますけれども、併しその可能を認め、また極めて大體に於ては之を直感することが出來るでせう私はこゝに之を調和の世界と名づけませう。之がどんなものであらねばならぬかは、私たちがどこまでも自然と私たち人間との相關關係を出來るだけ審らかに觀察することによつてのみ知ることが出來るのです。之がために私たちは自然と人間との交渉を觀察するより外に恐らくは據るところの手段はないのです。單なる人間の意志作用は必ずしもこの調和の世界を創造するために正常に役立つとは限りません。即ち調和の世界なるものはいつも純粹に人間の意志創造によつてつくられるのでなくて、却つて自然と人間との交渉狀態の考究によつて發見せらるべきものです。

私はこゝで始めて言ふことが出來ます。人間の創造する文化が自然に順應しなければならないと云ふ本當の意味はそれがこの調和の世界を現ずるやうにせられなくてはならないと云ふことにあると。人間との交渉を無視しては自然はあらゆる狀態に於て神の意志の儘であるのです。それにも拘らず自然の荒びた原始的な環境より私たち人間に取つて適宜に

に整序せられた文化的な環境がより望ましいと云ふことは、それがより多く調和の世界に近づいてゐると云ふに外ならないのです。けれども誤まつた文化は私たちの環境を眞の調和に導かないで、そのなかに却つて之と相反する要素を含ませてゐるのです。私たちはかやうな要求を用意ぶかく見出して、私たちは努めてそれを取り除かなくてはなりません之が謂はゆる自然に順應すると云ふ言葉の意味に外ならないのです。

それ故に私たち人間の創造の目的は眞の調和の世界の現出に在るのであつて、私たちは自然現象の始源並びに環境條件を適宜に選んでこゝに導かしめなければなりません。しかも何が果して調和の世界であるかは私たちが最も周到に自然と人間との交渉の如何を追究しなければ求められないのでせう。

六

私たちは藝術、特にそれが美術に屬する場合に於て美を創造することをもつて目的とします。併しこの創造なるものは私の上に說いたやうな意味に解すべきものであつて、それが神の自然創造とは全く異つたものであることを知らなければなりません。私たちは如何に創意的であらうとも自然そのものを本質的に創造することは出來ないのです。自然の本質としての法則はどこまでも一つの必然として私たちに與へられてゐるからです。私たちは只その始原並びに環境條件を變更することに於て創造能力の發現がゆるされてゐるだけです。之によつてのみ自然に存在しない狀態を現じ出すことが出來るのです。併しそれは單に始原並びに環境條件の特殊であるがために自然に存在しなかつたと云ふに過ぎないのであつて、それが決して自然に不可能であつたと云ふのでは勿論ありません。私たちは只この特殊條件の發見に於て美の創造を考へ得るのです。

この創造能力の發現の自然に對する關係をなほ深く考究しておくことは、美の創造を企圖する上に於て特に大切なとであると私は思ひます。なぜならば美は純粹に人間の思想のなかにつくられるものでなくて、却つて根本的に自然に依存しなければならないと云ふ理由は恐らくはこゝに求められるからです。

私は之を肯定するがためには、先づ人間の思考能力が有限のものであるといふことを假定しなければなりません。恐らくはどこまでも一の假定に過ぎないものではありますが、私たちの思考作用はその經驗的知識と密接に相關聯し、しかも私たちは單に有限なる經驗を所有するに過ぎないことを思ふならば、なほ思考作用を行ふ機關そのものが一つの有限なる内體的組織に伴はねばならないこと、之が或る惰性を有することなどを思ふならば、恐らくは之を承認しなければならないでもありません。之に反して自然そのものは無限なる神に屬するものであり、それ自身に無限に繼續する經驗と變化とを含むものでありますそれ故に自然法則が實現するに際して、その環境條件は無限の變化をあらはしてゐるのです。それですから私たちがその特殊條件を發見し且つ選擇しやうとするに當つて、單に私たちの有限な思考作用にのみ頼るよりも、寧ろ更にひろく既に自然に行はれてゐる種々の條件を顧みることは、少くともその價値批判に際して必要となるでせう。

實際に私たちは單に特殊的な始原及び環境條件をつくり出して、自然を變更することだけによつて、それで美が創造されたと云ふわけにはゆきません。創造されたものが一つの美であるためには、それが或る藝術的價値をもつてゐなければならないからです。かやうな藝術的價値批判は具體的には固より個々の場合について新らに與へられなくてはならないのですが、併しその最も根本的な大綱としては私はその作品が私の前に述べた調和の世界に屬すると云ふことにならなければならないと思ひます。

固より自然そのものは、それが神の意志によつて創造せられたものであることに於て、當然一つの調和の世界であり美の世界であると見られなければならないでせう。併しながら自然に於て屢々私たちの忌むべき天災が起り、又私たちに取つてその儘では美と感ぜられないものの存在するのは、私たち人間の生存並びに感情が或る局限せられた狹小な範圍に於て實在し得るに過ぎないとに依るのです。私たち人間に取つては適合するもののみが、調和であり、美であるのです。從つて私たちのあらゆる文化は斯樣な世界を創造することにその目的をもたねばならないとは、私の既に說いた通りです。けれどもかやうな人間文化の世界といへども、勿論自然に於ける可能な一つの狀態であり、又そのなかに見出さ

れる種々の關係は、人間の創造を待つ以前に、既に自然のなかに何等かの形に於て存在してゐるとも考へられるのです。私たちはそれ故に美の創造に際して、私たち自からの思想に依る外に、何が本當に人間に取つて調和であり美であるかを知るために、又自然のなかに私たちの思ひもよらないそれらの狀態の存在するのを見出さんがために、常に最も周密に自然を省察しなくてはならないのです。私たちが通常、美の淵源を自然に求めると云ふ意味は之に外ならないのであります。この意味でまた、美に對する價値批判は自然を全く除外しては成り立たないものであると謂つてもよいでせう。

七

私たち人間の藝術の歷史に亙つて、近時の謂はゆる表現派の勃興は、極めて興味あり、また大切なものであると私は思ひます。

もと私たちの藝術（廣義の）に於て、眞に人間の創造に屬するものを擧げるならば、建築物及び諸器具衣服及び調理的食物、裝飾圖案、言語、音樂及び文字であります。之等の多くは實用の必要に迫られて創造せられたものであつて、從つて主として便利を目的とする實用的價値が考慮せられて、人間の創造物としての藝術的價値は只時として之に附隨して論ぜられるに過ぎないやうになりました。只このなかにあつて却つて藝術的價値を主として顧慮せられたものは、獨り音樂と裝飾圖案とだけであります。併し尙ほ嚴格に云へば後者に於ては藝術的價値はやはり裝飾なる一種の實用目的のために屢制約せられることを免がれません。私はこの點に於て純粹な創造藝術としての音樂に大いなる興味をもつものです。

ところが之に反して、私たちが通常、藝術（狹義の）として稱へてゐるところの文藝、繪畫及び彫刻、（並びに裝飾の或るもの）の如きは、殆んど自然の事象の再現に依るものであつて、人間の創造に屬する處の寧ろ少ないことは一つの不思議な事がらであると謂はなければなりません。（このうち文藝は人間の純粹創造たる言語によつて成立するものですが、言語が文藝以前の階段に屬することは繪畫の材料器具が繪畫以前の階段であるのと同樣です。この事情のもとに於

て直ちに純粹創造を目的とする表現派美術の興つたことは、創造藝術の上からして大いに注目せらるべきことに相違ありません。

私はこゝに特に表現派美術を論ずる遑をもちませんが、之が單なる自然の模倣再現を超越してひたすらに人間の思想若くは感情を表現する手段をあらゆる自然的素材に求めやうとすることは、確かに一つの重大なる意味をもつてゐると思ひます。かやうにして嘗て自然に存在しなかつた人間の意志創造がこの地上にあらはれ、全く人間の匂に充ちた藝術が建設せられるでもありませう。固より前にも述べたやうに自然はより豐かなより變化ある美を私たちの前に齎らすものです。私たちがこの無限の自然に對して敬虔な謙遜な心もちをもつて、自然の現象を自分の感情に映せしめ、之を再現することによつて藝術を創造しやうとすることも一つの意味ある方法にはちがひありません。けれども自然の再現以外に之と全く離れた人間藝術を創造することは、私たち人間に取つて亦更に愉快な勇ましい一つの途でなければなりません。どちらがよりよい藝術をもたらすかはこの場合に對比せらるべき問題ではないのです。藝術として優越せるものはどちらに於てもあるべきであると私は思ひます。只その形象に於て既に自然が與へてゐるものの代りに最初から人間の思想及び感情を具體化して、それがどんな形象を創るかといふことを見るのは、少くとも私たち人間に取つて極めて興味ある處でなければならないと思ひます。

けれども私たちはその際尙ほ次のことを忘れてはなりません。自然再現の藝術にありては、少くとも美の根本要素は自然そのもののなかに存在し私たちはそれを用意ぶかく發見すればよいのであるに反して、純粹創造の藝術にありては未だ美として存在しないところの素材に對して、一切の美の要素を私たち人間が之に與へなくてはならないと云ふことです。この點に於て後者は前者に比べて、多大なる困難に出遇はなければならないのです。その創作には單なる技工上の苦心のみではなく、その創造藝術が果して美の價値をもつかどうかに就いて充分の批判能力を準備しなければなりません。なぜなら、自然法則に於ける單なる始原及び環境條件の變更は必ずしも美をもたらすものではなく、却つて屢々自然に於ける美の破壞を結果するものであるからです。私たちは寧ろ非常なる用意をもつて之を恐れ戒しめなけれ

ばなりません。若しこの用途を少しでも忽がせにするならば、人間の創造なるものは却つて徒らに醜悪をつくり、怪奇を弄ぶものに墮するであらう。かやうな弊は自然再現の藝術に於てすら、それが主意的傾向を帶びて、より創造的ならんとする場合に、大いに戒愼せられなければなりませんでした。そして幾たびか寧ろ狹少なる人間の我意を棄てゝ無限なる自然に歸することの正當なる所以が說かれました。けれども之がために人間の美の創造は傷つけられるものではありますまい。たゞそこに美の價値を判斷するに當つて、充分に自然に既存する美を尊重し、美と調和との眞正の意味を之から觀取することに少しの遺憾もないやうに努めなければならないのです。美の淵源が自然にあると云ふことは、この意味で純粹創造の藝術に於ても亦省りみられなければならないのでせう。

八

私たち人間の藝術に於て、音樂と表現派美術とが純粹創造の藝術に屬することを、私は一つの意味に於て少なからぬ興味をもつて見たいと思ひます。なぜなら、それが一つは聲音に關し、他は形象に關する點に於て、そしてそれが私たちの思想及び感情表現の目的を有するのであることに於て、私は之が究極的に私たち人間の最も藝術的な且つ合理的なる言語及び文字の創造に與かり得ると思ふからです。

私たちの今日使用してゐる言語及び文字もその最初の創造に於てはかやうな要素が含まれてゐたにちがひないのでせうが、併し雜多なる實用上の必要に迫られて多くを顧慮する餘裕を失ひ遂に全く單なる規約的符號の意味しかもたないやうになり、從つて亦諸人種に於て個々に異なつて發達して來たものでありました。近代に及んで世界語統一の問題は屢論ぜられはしましたが、之が遂行せられることは恐らくは現在の儘では不可能であるとさへ思はれます。たとへ人間の文化が充分に發達しやうとも、單なる規約のうちではどの種類のものが最も合理的であるかの差別がない限り、その何れを採用すべきかは、人種的意見の間に統一を見ることが困難であるからです。私は寧ろかやうな合理的根據をもつ言語及び文字を再び創造した上に於て始めてこの統一の問題が論議せられなければならないものであると思ひます。そ

れ故に少くとも之が可能性をもつかどうかを考察することは必ずしも無駄なことではなく、却つて人生の仕事の根本問題の一つに屬すると私は思ひます。この意味で私は單なる夢想をこゝに物語らうとするのではありません。

言語の統一は既に實用上の問題を超えて、藝術成立の根本義の上からも考へられなければならなかつたのでした。音樂や藝術が最初から私たち人間のすべてに共通なる藝術としての可能な資格をもつてゐるのに反し、何故に獨り文藝が之を缺かねばならなかつたのでせうか。最も文藝のうちの思想的要素は他の異なつた言語への飜譯によつてその大概を殆ど誤りなく傳へることは出來ませうけれども、併し言語表現に直接に依存する諸種の纎細なる感情は、他の言語への轉換によつてその多くを歪められてしまひ、若くは失はれてしまふことは免がれないのです。特に音樂的要素を含んだ韻文にあつては全然飜譯の不可能さが豫測されるのです。かやうな狀態は果して人間の藝術に取つて正當なものでありませうか。

私は人間の思想感情が個性をもつと同時に、それが或る普遍的水準をもつことを信ずるものです。普遍的な科學の成立は既に私たち人間の認識及び論理がその樣な普遍的要素をもつことを私たちに示すものです。音樂及び表現美術の發達は恐らくは藝術的思想及び感情に對して同樣な事實の存在することを私たちに教へるでありませう。すべての藝術がかやうな途を取ることによつて、こゝに始めて人間文化の全體が、私たちの人間に共有であり得ることが達せられるのです。こゝに於て文藝の素材としての言語創造の問題が藝術上からも考究せられなければならないのでした。

私たちは音樂が感情を表現するに際して、果して一義的であるかどうかを、尙ほ恐らくは詳らかにすることが出來ません。併し音樂鑑賞の可能性は、同時に、音樂を聞いて之がどんな感情を表現するかを知ることの可能なるのを許すものです。表現美術に於ても同樣なことが云はれるでせう。それ故、若し私たちが複雜綜合的な音樂若くは表現美術の代りに、之を分析して最も簡單な要素となし、それらの各が表現し得る感情を論定することが出來たとしたならば、そのときには之等の要素は即ち私たちの最も合理的な且つ藝術的な言語及び文字の創造に役立つものとして見ることが出來るでもありませう。この場合に言語及び文字が實用目的のために純粹藝術と分岐するところは、たゞ之等の種類を基礎的な簡單な必要限度に止めて、他はその場合によつて表現の目的を達すると云ふことだけになります。かやうにして言語

及び文字は單なる規約を離れて、始めて人間文化に對する必然性及び妥當性をもち、そしてすべてに共有となることが出來ます。

私は斯のやうな事がらを極めて望ましいことに思ひながら、しかもその實現の可能性について多少の疑問をいだくと共に、少くとも近い將來に於て之を豫想することが出來ないのを悲しみますそれにも拘らず私は人間文化の究極的普遍性を信じ、そして之と必然に結びつけられた思想及び感情表現の普遍性を思惟しなければならない上に於て、この要求にかなふ言語又び文字の統一的創造を期待しやうと思ふのです。

まことにかやうな言語及び文字はそれが私の謂はゆる調和の世界に屬するものであつて、若し他の宗教的な言葉で之を云ひあらはすならば、それは私等が天國に於て神のまへにお互に語り合ふ言葉であり、文字であるのでせう。神のまへにすべての人間はあらゆる爭ひをすてゝ最も自然的にならなければなりません。恐らくは神は人間のこの創造を微笑を以つて嘉するでもありませう。彼のすべての科學と藝術と共に。

九

表現美術が他の實用目的をもつた建築、器具衣服等に對する關係も、畢竟前節に說いたところのものと同樣でありますが、私は之等の細論をもはや玆には省きませう。

たゞ之等の實用目的を主とするものに於ては藝術的要素と共に亦科學的應用効果がより多く顧慮せられなければならないのであつて、そしてそれらが終極の調和に合致するとき、こゝに始めて人間文化の完全なる創造が遂せられるのです。かやうにして人間の創造が亦自然に順應し、その價値を發現することが出來るのであり、之を考究することは、人生に於て最も根本的に大切な問題であると思ひます。併し具體的に何が果して價値ある創造であり、調和の世界にかなふものであるかを知ることは、私たちのいつも最も苦慮しなければならないことであつて、この點に私たち人間の本當の仕事があり、又眞正の文化の進歩があるのです、私たちは人間自からの創造の意味を省りみて、自然のまへに最も謙遜に之を探し求めなくてはなりません。そのなかに最も誇りある眞の創造が生れるのです。

世界はどう動くであらうか

北昤吉

一

社會現象の豫想は、嚴密には不可能である。社會の成員たる個々の意志が既に不定量であるといふ一事が、豫想を原則的に不可能ならしめる。豫言の効力に就いての輕信又は過信は、全知全能の神の意匠に就いての迷信か、社會學が物理學の一節として成立するとの迷信かの何れかを基礎とするものに外ならぬ。

或はいふ者があらう。個人は社會の小波大波である。個人的意志の不定量は社會進化の方向の不變を否定するに足らぬ。而して社會は生產方法又は生產狀態を中心として動くメカニズムである。從つて生產狀態を中樞として考察する限り、末稍的な社會現象、更にその副現象たる思想の動きに就いての豫想は可能であると。

斯くしてホッブスは國家學を一般物理學の一節とした。コントは社會學を生物學の、心理學を社會學の附錄とした。マルクスはヘーゲルの措定を倒にしてイデーを實在の反映とし、社會現象の重心を生產狀態に求めた。斯くして社會の經濟的解釋は近代の流行ともなつた。セーリグマンに「歷史の經濟的解釋」あり、ロリアに「社會の經濟的基礎」あり、後藤子の顧問たりしベアード博士に「亞米利加憲法の經濟的解釋」と「ゼファーソン派デモクラシイの經濟的起原」あり

我が河上博士に「唯物史觀」がある。

併し嚴密な意味に於ての社會物理學は成立の見込はない。多少謙遜な形式に於ての歴史の經濟的解釋もその效用が限定されてある。第一に歴史學の對象となる歴史現象が如何にして構成されるかゞ大きな問題である。之れが自然科學的に構成されよう筈はない。又生產方法とか生產狀態中心の見方といつても、此等は今日に於て所與のものゝ如くには見へても、過去に於て變化したものであるから、將來に於ても依然變化して行くであらう。而してこの變化は、人間の要求、極めて不定量なる人間の要求と關聯して行はれるものであつて、始めより豫知し得られるものではない。生產方法や生產狀態を社會觀察の不定の視點としようとしても、視點其物が既に不斷に動いて行く。

歴史の眞相は階級鬪爭を中心とするものであるとなし、更に階級鬪爭の動機を經濟的のものと認め、その鬪爭の形式を、それ〴〵の時代の生產狀態に規定されるものと考へる人々がある。實際現代には斯樣な人々は多過ぎる程に多い。ところが此等の人々は、例外なく、一の視點を定め、この視點よりする一の見方を定め、更に件の視點と見方から都合よく解釋されるように對象を構成してゐる。問題が先つて立脚地が定まるのではなく、立脚地が定まつて對象が隨意に構成されてゐるのである。さなくば どうして階級鬪爭が歴史の眞相といへよう。

社會定命說は、個人の意志の不定量を無視し、更に大きく、社會現象の變化は分量的でなく性質的であり、從つて因果の等量關係を拒否する非豫知的のものであることを無視してゐる。意志は發動し來つた經過に於てのみ定量的であるが、發動以前に於ては不定量的である。之れ過去が決定說の世界で、未來が非決定說の世界たる所以である。又之れ過去に就いて歴史學が成立し、未來に就いて歴史學が成立しない所以である。

我々は、之にも拘はらず、或る個人又は或る社會の將來を豫言することがある。而してその豫言の確實性を疑はない

場合がある。併しこの場合、我々は個人又は社會の將來を豫言してゐるのではない。我々は單にその現在に就いて確言してゐるに過ぎぬ。何の某は社會主義者の巨頭たることが出來ぬと、我々が豫言する場合には、我々は何の某の現在の性格と社會主義の巨頭が當然有すべき資格とを對立せしめ、二者の相反する性質が兩立することが出來ないことを矛盾律に依つて斷定してゐるまでゞある。社會の將來に就いての凡ての豫言も皆同樣である。日本の將來を揣摩するなど〻豫言者ぶつても、その人は現在に就いての認識を一歩を踏み出ることは出來ぬ。「蝦躍れども斗を出でず」と古人は旣にいつてゐる。

更に一歩を進めて考へる必要がある。我々が未來を豫言して的中する場合は、單に現在を確實に認識してゐるが爲めではない。我々はその場合、過去とか現在とか未來とかの時間的規定に關係なき超時間的、超歷史的本質を把握してゐるのである。斯樣な論斷をば例の形而上學的空想と冷笑してはならぬ。歷史には超歷史的要素がある。時間の流れには時間を否定する或物がある。萬法流轉すとヘーラクライトスはいつたが、萬法流轉の法則が流轉することはあるまい。生物は進化すとダーウィンは考へたが、進化の理法までが進化して止まなかつたらどうであらう。アインシュタインの相對性原理の絕對的確實性は誰にも增してアインシュタインの固執するところであらねばならぬ。故に所謂未來の豫言の確實性なるものもその基礎は未來とか現在とかの時間の區別を離れた或物を根據としてのみ可能である。

斯樣な考へが餘りに突飛ならば、多少轉論して穩健に斯くいふことが出來る。未來の豫想の可能は、過去より現在を經て未來に行く進動の方向の不變性に關係せしめる場合に於て成立すると。之は如何なる相對論者と雖も拒否することが出來ぬ。例へば、歷史は、異なつた形式に於て爲されたにしろ、階級闘爭の歷史であつたと主張する論者も、歷史を通じて經濟的生活が優先であつたことを承認せざるを得ない。之れ人間生活に於ける方向を不變性の承認に非ずして何

であるか。マルクスもエンゲンスも、ヘーゲルに反對して、イデーは實在の反映であると考へたが、彼等はこの事實は人類の地上生活の終焉まで繼續すると信じてゐる。彼等はこの點に於て、明かに一の絕對論者ではないか。

我々が超歷史的超時間的要素に着目する限り、或は過現未を通ずる方向の不變性を承認する限り、未來の豫言は可能である。併しこの場合には、未來を豫言せずして現實を斷定し、更に精密には、超現在的な或物を認識してゐるのである。

而も現在の斷定、超現在の認識すらが困難なのは何に依るか。いふまでもなく、超現在的要素に、方向の不變性に纏はり附く、見逃し難き實在の多樣性に依るのである。此等の實在の多樣性には認識されないものが多い。而して認識されないものゝ內にも、認識さるべくして未だ認識されざるものも、又本質上認識不可能のものもあるであらう。此等のものは不合理的要素又は非叡智的要素として我々の生活をして混沌ならしめる。「昔ながらの混沌の殘存は、斯くして我我の運命であらねばならぬ。若し未認識のものは認識可能のものであつて、そこには認識不可能のものが一もないと主張する人あらば、この人は本質上合理論者である。人間の知識は不完全ながら、原則的には生活の全體の條件を理解し得るものであらうとの輕信は、今日の社會科學に携はる人々の一般的迷信らしい。我々はこの無知からの大膽さを羨まさるを得ない。人生の不合理性に敏感ならざる人々は實際「小兒の天國(キンダー・パラディース)」に立つてゐる。

二

人生の不合理的要素の故に未來が如何に豫言し難いかは、我々を大戰前の世界に置き直して見れば解る。當時何人か能く戰爭の今日を大體なりと豫想し得たものがあらう。露國の革命、獨逸の崩解、中歐一體のバルカン化は現實の事相

であるが、戰前の視野からは奇蹟中の奇蹟でなければならぬ。殊に露國の第一第二革命に次いで、匈牙利、墺太利、獨逸の革命となり、千九百二十年の夏露の赤軍長驅して波蘭の首府を屠らんとするや。歐羅巴全體の赤化は可能なるが如く見えたに拘らず、其後形勢逆轉して　歐洲は今や將に反動の天地たらんとしつゝあるが如き、人智の豫想を嘲笑する世界の進動といはねばならぬ。

我々は今在るべき社會を説かずして、在る社會を説く。形勢は實に意外である。ウィルソンは去る大戰をば「戰爭を絶滅すべき戰爭だ」といひ、又「デモクラシーを安全ならしむべき戰爭だ」と稱へた。然るに事實は反對ではないか。歐羅巴の全天地は正に大規模のバルカンであり、新樣式の春秋戰國である。ヴェルサイユ條件は平和の大憲章に非ずして、新らしき宣戰の布告である。ロイドヂョーヂは英米聯盟の爲めの米國への巡禮中シカゴに於て聽衆に訴へた。「露西亞はデモクラシーをその實驗の開始後數ケ月にして毀ひした、伊太利、西班牙、ブルガリアと而して今や獨逸もまた專制政治に就いて語りつゝある。デモクラシーは未曾有の大勝利を獲た五年後に正に危殆に瀕してゐると。

ウイルソンの幻滅は決して同類なきものではない。カイザーを處刑し、獨逸をして聯合國の凡ての戰費を償はしめんと揚言したロイドジョーヂもまた幻滅の英雄である。更にレエニンもまた白國が六王終つて四海一となると共に、伊太利獨逸の赤化を信じて、二國の社會黨に向つて、老雄セラチとカウツキーの除名を要求した當時の驕慢を回顧して今はた如何の感がある。幻滅はレエエンがウイルソンと共に共有する所でなくてはならぬ。

舞臺は幾回轉した。ウイルソン沒落し、レエニン病み、クレマンソー退き、ロイドジョーヂ野に虎嘯するに反して、米は共和黨の世界、英は統一黨の世界、匈牙利はホルテイ提督一派の世界となり、而してムツソリニとケマルとは古英雄の風を逞しうしてゐる。更に獨のストレーゼマンは議會に向つて執政官としての權能を要求し、佛の大統領ミケラン

は帝王共和國の傳統を破つて、自から外交の方針を指導せんとの了解のみに滿足せず、米の大統領の如く事實上の政治的元首たるべく憲法の改正を要求してゐる。

普通選擧の實施や、婦人の參政權獲得や、歐羅巴の比例選擧の試錬やは世界の大勢の一である。併しこは大勢の一に過ぎない。去る大戰は確かに資本主義の行き詰りの結果として生じた。併し資本主義の行き詰りに依る戰ひの後は資本主義の立て直しであつて、社會主義の實現を必ずしも意味しない。世界の大勢は直線的に非ずして、正に曲線的である。我々は曲線美を發揮して舞ふ舞姬の次の一擧手一投足すら豫測し得ない。況んや世界の進動の曲線のうねりをや。悉く驚異の機會である。

大勢の一を捕へて、世界はデモクラシーに向ふと公衆に告げたるものは、その空虛なる頭腦を捺ひて反省せよ。大戰を轉廻點として世界は社會主義に向ふと宣傳したるものは、その低頭に恥ちよ。諸侯會稽に會するに過ぎざる國際聯盟を國際平和の機關として過信したるものは、錯覺が刑罰なくして終る時勢に感謝せよ。

筆者は今の場合、保險會社の雇醫師の如し。診斷が唯一の任務にして、投藥は却つて背任となる地位にある、須らく在るべき社會に就いて語らずして、現に在る社會に就いて語るのみである。怪しむべき一服のマルクス調製の丸藥を提げて萬病を醫せんとする者とは、我々は、今の場合、異なつた範疇に屬するものである。丸藥が偶々肥滿病の露西亞人にきゝたりとて、必ずしも痩せぎすの日本人に靈驗ありとは限るまい。社會診斷家は投藥に先だつて何よりも社會の體質を嚴密に診斷する必要がある。

嘗てナポレオン沒後の歐羅巴の經濟的疲弊は器械の發明に基づく産業革命に依つて救はれた。又米國の南北戰爭後の疲弊は無盡なる自然的富源と歐羅巴より勞力の輸入に依つて救はれた、去る大戰後の經濟的疲弊は何に依つて救はるゝ

であらうか。產業革命は近き將來に於て期することが出來ず、又無盡の自然的富源も、革命的な利用方法の案出なくしては、計算することが出來ぬ。然らば今日の對策は何であるか。一にも能率主義、二にも能率主義、三にも能率主義であらう。

能率主義は二つの形式を取るであらう。消極的と積極的との。第一の形式は國內的には勞資衝突の緩和、國際的には軍備の制裁、國際貿易の進展、殊に自由貿易的政策の實現之れである。歐洲に於てストライキの減少はこの必要を談つて居る。又未だ實際されぬが國際聯盟に於ける軍備縮少の聲は消極的形式の能率主義の要求である。而してワシントンの海軍協約はこの必要の實現の一部である。軍國主義の平和主義へ、國家主義の國際主義への轉換ではない。國備の制減は決して平和の保證ではない。強者同志と同樣、弱者同志もまた能く伴ふものであるからである。而して國際的了解と關稅の障壁の或る程度の緩和も經濟的疲弊を脫する方便として早晚問題とならう。

次に積極的形式の能率主義は國家に於ける產業の統一と、各個人の勤勞と、政治及び經濟の專制的經營を要求しよう。產業の統一は、既に戰前に於て模範的であつた獨逸に於てすら高調せられ、賠償委員會に於て、獨逸委員は產業統一のみが獨逸の崩解を救ひ得べしと述べたことは近電の報ずる所である。而して各個人の勤勞も必要事中の必要事である。獨逸に於て八時間制度維持の危きはこの事實を裏書する。最後に政治及び經濟の專制的經營は國步困難の際の必要事であつて、今日世界の反動的傾向と稱せらるゝものはその顯現に外ならぬ。ハーバート大學教授カーバー曰く、デモクラシイは多くの時と金とを要し、米國の如き國ならでは高價に過ぐと。事實をうかがつてゐる。米國の徹底せる政治的デモクラシイ、英のギルド社會主義者の要求する產業自治は、國家に餘裕ある場合の制度として可能であるが、自由と能率との二者選一に際し前者を多少とも犧牲にする必要ある國家に於ては不可能事に屬する。伊太利の專制、匈牙利の專

制、ブルガリアの專制は之を實證する。而して政治及び經濟の反デモクラチックな運用は、階級鬪爭緩和の爲めの社會政策の實施とは充分兩立し得る。蓋し二者共に能率主義の方便なるからである。

以上の觀察點より今日の歐羅巴の形勢を見るに、混沌の裡にも多少の條理はある。今日に於て一時の社會主義的傾向の優勢に對する反動的傾向の擡頭のみを見るものは、凡庸の徒である。所謂社會主義的傾向も外面的のものに過ぎず、又所謂反動的傾向も單なる復古的運動ではない。實際は動もなく反動もなく、戰後の疲弊を脫する爲めの能率增進への努力あるのみである。

三

先づ佛蘭西を見るに、そが戰後の疲弊を免れんとする傍若無人の態度は將に列國の憎惡の的とならんとするが如くである。戰爭開始の當初に於ては佛蘭西には政事的に惠まれてゐた。伊の前首相ニッチが「平和なき歐羅巴」に於て說いた如く、獨逸には一人の政治家らしき政事家なかりしに反して、佛蘭西は大政事家を幾人も有してゐた。然るに佛國社會黨の大立物ジョーレスは戰爭開始の際暗殺せられ、かの優秀な財政的手腕と劇的の履歷を有したカイヨーは敵軍と通じたとの理由で千九百十九年の上院の裁判に依つて十年間市民權を剝奪されて今尙ほ隱棲の身であり、二度首相の印綬を帶び政教分離政策の擁護者としてカトリック教徒に憎惡さるゝ天性のポリティシアンたるブリアンは千九百二十二年一月の失脚以來下院に左黨を率ひてポアンカレイの唯一の敵手たる威を示すのみである。媾和會議の前後當時の大統領ポアンカレイを無視せるクレマンソーは今や全く忘却の淵に沈み、リボーの名聲は單なる名殘りとなり、ヴィヴィアニは法律事務に沒頭し、クレマンソーの代言者にしてポアンカレの强敵なりしタルヂューもまた彼と協力を惜まない。

斯くて佛蘭西はミラランとポアンカレとの國である。前者が嘗てポアンカレの代辯者なりし如く、後者は今や前者の代辯者である。父子承傳か、夫唱婦和か、肝膽相照して祖國の恢復の爲めに對外對內共に强硬なる政策を執つてゐる。ポアンカレは千九百十三年大統領に選げるゝ以前、財政的工產的勢力と關係ある辯護士であり、獨逸を不倶戴天の仇敵とすること、政敵クレマンソーと同一であつた。彼は今や、カイヨーが評した如く、法律家の常としてヴェルサイユ條約に一言一句に忠實に、執達吏の如く獨逸に臨んでゐる。彼は執達吏の職務遂行の爲めには、英との不和も、米國の同情の喪失をも意とせざるが如く、獨逸の心臟ルールを把握し、全獨逸の產業を麻痺せしめ、佛國がルールの石炭とアルサス・ローレーンの鐵とを占有する限り威を歐洲の中原に振ひ得べしとの金剛不壞の確信に立つてゐる。佛蘭西は戰後の疲弊を對獨强硬政策に依つて脫せんとすることは一點の疑はない。七月十日政府より議會への陸軍編成換への提案に依れば、兵數は六十六萬を數へ而して空軍はといへば、英の戰前型の三百七十一、米の同樣三百の飛行器に對して、佛は現に千二百六十を有し、二十五年の暮までには英の五百七十五に對して二千五百六十に及ばんとすることになつてゐる。而して佛蘭西の貿易も著しく恢復し、昨年の前半期に於ける輸入高百六億四千萬フラン、輸出高百一億二千萬フランに對して、本年の前半期には輸入高百四十六億九千フラン、輸出高百四十一億七千萬フランに達してゐる。而して近電報ずる所に依ればポアンカレは七十幾票對五百票の壓倒的大多數を以て代議院の信任を負ふてゐる。開戰の際貞操蹂躪の擁護の爲めに立ちし姫御前のいぢらしきに同情せし世界は、今日の佛蘭西を見て奈何の感があるであらう。

轉じて伊太利を見る。此の國はムッソリニの獨步する國である。戰後最も早く赤化すべしと豫想せられゐるに、今は新國家主義の牙城たる觀がある。實に國步の艱難が能率主義の徹底を要求することは、こゝに典型的に示されてゐる。規律と訓練と犧牲とは能率主義のモットーである。大災厄後の帝都の建設が一に緊縮と敏活とに依つてのみ可能なるに

復興家議會、復興院、復興評議會、復興法等を濫設するとは實に驚くべき對比である。ムツソリニは官省の併合を斷行し、大臣は議會に碌に報告もせず、又彼自からは國王より內治外交の大權の委任を受け、國王に代はりて評議會を主宰し、諸大臣に報告せずして命令するのみである。彼はまた七月の半ば伊太利全土に賭博を禁じ、新聞紙の虛僞なる又は偏見的なる報告をなすことを禁じた。又階級的憎惡を刺戟し、官公吏の規律に影響したり、伊太利人に反對して外國人の利益を代辯したり、祖國、國王、法王、宗教制度、國家を侮辱する論文、評論、挿畫等をも嚴禁した。彼は更に最も猛烈なるファスチストのファリナッチに全權を附與して自黨を革正し、社會主義撲滅の自由手腕を揮はしめた。彼は今や一部の社會黨員の援助をも受け、此等の黨員は社會黨の首領連を威嚇し彼等をして戰々洶々手の出づるなき境遇に陷れた。殊に八月廿四日の伊太利の勞働聯合のミラノ大會は、聯合が何れの政黨とも關係せざることを決議し、二十六日共產黨其他の急進派社會主義者の殘敗を以て終結した。

能率を無視する自由の絕對的擁護者は。斯かる形勢に就いて異論の餘地はあらう。併し國步艱難の伊太利がムツソリニ治下に急速に恢復しつゝあることは刮目に價する。二十二年より二十三年に至る會計年度に於て、政府の收入は豫算の見積り額を踰ゆる十八億リラに及び、而して失業者數は削減して千九百二十二年五月一日の總數四十三萬二千に對し二十三年の同月同日には二十七萬となつた。米國に於ては、伊太利は戰時公債償還の基金を設けることも比較的早かるべく、その財政的恢復は、或る點に於ては、英國にも優るものがあると觀測されてゐる。共產主義者に對する取扱ひや選擧法改革案や、上下兩院の權能蹂躪や、國務大臣を首相の番頭手代と化することの是非の論は別として、伊太利は明白に再興しつゝある。殊にムツソリニの對希臘、對塞比亞の外交政策の傍若無人の强硬振りは、勿論國際聯盟の長袖者流には頭痛の種なるも、死灰再び燃え、枯木重ねて花咲くべき運命の伊太利に取つては騎虎の勢といふべしである。詔

ふ勿れムッソリニの弱い者いぢめと。彼は議會に於て、獨逸の分裂と、ルールの永久的占領に反對し、遠く強奈のポマンカレに口頭ながら挑戰したではないか。歐羅巴は正に春秋戰國である。燕趙悲歌の士が一人位あるのは蓋し當然であらう。

佛と伊との二國以外にも非デモクラチツクな傾向は著しい。匈牙利が中歐の「白禍」の猖獗なることは既に久しい。張勳の失敗に似たるヒットラーとルーデンドルフ將軍との最近の失敗にも拘はらず、バイエルンの復辟派は依然として有力である。獨逸政府が、ザクゼンに嚴にしてバイエルンに寬なるは、共産主義よりも、帝政主義が有力なる實證である。

更にブルガリヤの六月革命は一の專制政治に代へるに他の專制政治を以てしたに過ぎぬ。農民黨の曠世の怪雄スタンブリスキーの專制風りは驚嘆すべきものであつた。彼はプロレタリアを壓迫し、戰爭に加つた將軍連を迫害し、ブルジヨアを虐待し、實にマセドニア人を虐殺した。彼に取つては、新聞記者は凡て犯罪人を意味した。大學は凡て之を閉鎖し、教授連を街頭に驅馳し、宗教の神聖を凌辱し、一切の文化生活を破壞し、民をして殆んと結繩の古に歸らしめて、農民の爲めに萬丈の氣焰を擧げた。彼は國王をも廢止して徹底的に農民の天地を開拓せんとした。然るに一朝にして、ザンコフ教授と軍人との共謀に依るクーデターは意外にも成功した。併しながら主體が農民なるかブルジヨアなるかの差あるのみで專制は何の異なる所はない。千九百十一年以來閣員たりし八十六名中、五名は殺され、六十四名は投獄され八名は追放され、無事に過ぎしもの九名に過ぎない。如何に政情が混沌たるかは想像に餘りある。流石はバルカンの一國である。戰後に於て人道主義、平和主義、國際主義の發展を豫言した我か或る種の評論家、否雜論家は、正にペンを折つて默すべしてである。

東京市民が大震一過して、餘震に過敏な神經を尖らしてゐた九月の半ばには、西班牙が同じくクーデターを經驗しつ

ゝあつた時である。一面、モッロコ遠征の軍利あらず、他面共和主義者が跳梁して軍人を輕侮しつゝあつたことに激してバルセロナの總督リヴェラは軍隊の後援に依つて內閣を轉覆した。中立國なりし西班牙にして尙ほ斯くの如くである。世界は誠に以て物騷である。如何なる突飛事か發生するとも限らぬ。實際豫言は迷信である。

五

然らば日本はどう動くか。迷信拔きの豫言は不可能である。單に現在を認識する丈に止めねばならぬ。否現在內の現在的ならざるものが、少くとも過現未を通ずる方向の不變性を捉へなくてはならぬ。併し日本の社會の不變性は幾多の不合理的要素に綢繆されてゐた把握を困難ならしめる。今出來得る限り方向の不變性を捉へて觀測して見よう。

普選の實施すら前途多難であらうか、早晚は物になるであらう。米國の婦人參政權承認が二十一個國目であるのに、今頃普通選擧權が實行圈內に入るとは、日本の悠長も程がある。政治が、日本の社會の趨勢よりも大分立ち後れてゐることは爭はれぬ。從つて不法なる選擧制の改廢に依つて、社會に意外の變動を生ずることは豫測されよう。

先づ大都市から可なり多くの急進分子か代議士とならう。小作人も全國的同盟を作らう。赤化的傾向はプロレタリアを中心としても、農民を中心としても可なり促進されよう。貴族院の大改革、樞密院の廢止が問題とならう。地方長官の公選もやがては行はれよう。教育狂の日本人は、狂信者が寺院を建てた如く高等の諸學校を濫設し、多くの知識階級が生じよう。或者はブルジョアとなり、或者は、單にその手先となり、更に或者はプロレタリヤの味方ともならう。

國民の最も主要な分子たる農民の大多數は、ブルショアに反感を抱くのみならず、都會のプロレタリアにも反感を抱かう。農民とプロレタリヤとの利害の不一致は、日本の階級鬪爭を複雜ならしめよう。日本の農村問題は永久に解けな

い結び目であらう、小作人のみならず、地主も苦しみつゝある今日、土地問題の解決は、佛蘭西革命に於ける如く、又露國革命に於ける如く、地主の土地の分有でけりがつかぬ。露西亞革命の飜譯の不可能なる所以である。殊に六円の米を食ふ歐米人はなく、國民の六割が農業に從事して食物不足といふ國は歐米に一國もないから、歐米の社會主義者の農業問題の論議は何の參考にもならぬ。地震後にベアード博士を聘請するのも滑稽だが、いざ鎌倉といふ時、露國の主義者を聘請も出來るものではない。要するに土地の廣い露國の農民とは異なつて、日本の農夫は土地が狹過ぎるとの感情を去ることは出來ぬ。帝國主義に腑に落ちぬとも、地圖が日本の色で變れば嬉しいに相違ない。斯くて日本の農民は帝國主義的とならう。大部分百姓出身の露國の軍人が地主の土地を分割する要求に於て一般農民と提携し得た如く、日本の農民は土地を擴大する必要があるとの承認から、軍人と一氣相通ずる所があらう。プロレタリアは祖國を有せずなど〻いふ所謂社會主義者とはソリが合ふまい。勞働もしないでプロレタリアを媚て掲げてゐる所謂知識階級には尙更反感も持たう。要するに日本では將來ブルジョアとプロレタリアと農民との三つ巴の喧嘩とないふ譯だらう。プロレタリア丈けの獨裁などは痴人の夢といつていゝ。

農村では地主も小作人も苦しむから、日本は資本主義的に一層發達して、工業と商業とが旺にならなければならぬといふ者も多からう。實際形勢はさう進むに相違ない。產業の統一、專制的經營——能率主義は之を要求しよう。普通選擧制が實施されて政黨組織が大となると、實際ブルジョアの活動の餘地は大きくなる。こは普通選擧が多少の急進分子を議會に送ることゝ充分兩立しよう。

併し日本が資本主義的に發達しようとすれば、國交は多事となる。米と徹底的に親善して、米の支那の開發に好意を寄する位ならばいゝが、左もなくば米とは常に不和であらう。米と不和なる限り、支那は乘じ、露國は乘ずる。日米は

支那を惡み、露國を忌んでも、此等は熊襲であつて、米國といふ高麗が背後にある間はどうもならぬ。親米による親支のみが日米の資本主義をして順調に發達せしめよう。又英の米國加擔が日本に不利となる形勢は、日本をして露國と握手せしめよう。米の資本が支那に投下されて、日本が之を脅かし得る機會を作れば、喧嘩は日米兩國の損害となる考慮より眞の日米親善は可能とならう。併し之は希望に屬し、日米には識者のみがゐないから、米や支那との小ぜり合ひをやり、外交的不安は國内の階級的不一致と相待つて、思想的不安を繼續せしめ、國情混沌たるものがあらう。

若し近き將來をいへば、官僚、軍閥、貴族の第一勢力とブルジョアの第二勢力と、プロレタリヤや小作人の第三勢力の鼎立があらう。勿論各勢力の結合が鞏固でないから、鼎立の勢ひも不分明である。併しプロレタリヤがブルジョアと結合して第一勢力を打破すれば、第二勢力は當分益々强大とならう。大ヴィントの子息曰く、獨逸革命は官僚軍閥の勢力を打破したる爲め、ブルジョアの勢力を過大ならしめたと、然り。三勢力の一たりしブルジョアは今や二勢力の一でありプロレタリア單獨の勢力に對しては優勢たり得るからである。日本も近き將來はブルジョアの勢力を增進せしめよう。而して普通選擧は之が機會とならう。併し若し三勢力立ちすくみ所か、官僚軍閥とをブルジョアと小作人とプロレタリヤとの混戰ともならば、能率主義は一人の巨人を要求するであらう。其の信條は規律、訓練、犧牲、對外硬であらう。而して自由主義は直譯學者の貧弱なる書齋の藏書中に存することゝならう。筆者は日本の將來に自由主義の正道よりも專制主義の權道を見、既にこの混沌裡に鮮血に彩られた一人の巨人の影を幻覺する。

國際經濟と我國の復興事業

堀江歸一

日本の天災に對する諸外國の同情――同情と商業取引との區別――國際經濟上の關係に於て考ふ可き二點――京濱兩市の經濟上に於ける地位――消費地と生産地との關係――歐洲諸國の經濟狀態――其日本に及ぼす影響――米支兩國の市場――粗製品濫造の弊――外國債發行と內國經濟――國際共通主義と內國自給主義――復興事業の連續と內國市場――外債論の擡頭する時――公共團體の復興財源――民間の復興事業と外資――復興事業の縮小――其縮小に依つて生ずる影響――復興事業は不生産的なりや――公債財源の理由顯著なり――我國の財力に對する批判――復興事業の完成期限――民間事業に對する壓迫の緩和――其緩和が民間事業の振興に資するや――復興審議會の注意――

日本の天災に對して、世界諸國は何れも多大の同情を寄せ、救護の爲めに、多大の金品を寄贈し來つた。是れは平生國と云ふ境界を作つて、互に利益の獲得に爭つて居つても、一旦或る國が危急の狀態に陷つた場合には、國の境界とか、人種の相違とか、年來の衝突とか云ふような事柄を忘れ、一個の人間として他の人間の爲めに、力を致すと云ふ人間本來の道德の發露したものであつて、誠に難有い事としなければならない。而して斯る外國の同情に依つて、罹災者たる、我國民が種々の便宜に浴したことも、亦爭ふ可からざる所であるが、其我國民生活に與へた效果から云へば、固より一時的のものであつて、繼續的のものでない。外國との關係に依つて、日本國民の生活が復興する、少なくとも復興の道程に就くものとすれば、其れは普通の貿易金融其他の取引を通じて、行はれるのである。我國に於ては、震災直後外國の同情の熾烈なるに乘じて、外國債を募集せよ、同情に依つて、有利なる條件の下に、募集の效果を擧げるを得るであらうと云ふ說もあつたが、是れは同情と商業取引とを混同したものであつて、私の取らざる所であるのみならず、英米兩國民と雖も、其本來の性格から考へると、他國の災厄に

同情を表したからと云つて直に商業取引上に於て許す可からざる取引を爲すとか、與ふ可からざる信用を與へるとかするものではない。兩者の間に嚴重なる區別の行はれることが兩國をして今日の經濟的優勢を維持するに至らしめた所以であると解されるのである。

然らば此際日本が外國の同情に縋ると云ふような態度は取る可きものでなく、震災火難に依る國難に遭遇し、今其惱みつゝある一個の國として、國際經濟の圏内に入り、諸外國と對等の地歩に於て、各種の取引に從ふ其間に、諸國の經濟力を利用して、以つて我國の經濟的復興に資するの方針に出でなければならない。斯る場合に吾人の考へ可き事は二つの點に分たれる。第一は諸外國に日本の經濟復興を容易ならしめるように、之を助ける餘裕の豐富なるものがあるかどうかと云ふことであり、第二は諸外國の經濟力を利用するだけの準備が我國經濟社會に存在するかと云ふことである。

若しも今日諸外國の經濟社會が順潮に推移し、商工業に相當の繁榮を告げて居つたならば、爲めに我國の經濟的復興に資することの少なからざるは論を俟たない。我國の生産力は過般の地震と火事との爲めに、著しく損傷を受けたのであるが、東京と云ひ横濱と云ひ生産地と云ふよりも寧ろ消費地たる地位を占めて居つたのであつて、兩市ともに其市民の生活に必要なる物資は常に他の都會なり、郡村なりから買入れるを常とした。東京が一の帝都であつて、政治的關係から多數の消費者の集合し生活することを必要とし、横濱亦日本最古の貿易港として、商人仲介業者の居住、取引關係者の來住を必要とする以上は、兩市共に一の消費地と爲るのは、當然であつて、其一隅に或る種類の工業が或る規模の下に、經營されて居つたとした所で、之を以つて兩市の消費地たる資格の上に、何等の異動を齎すものではない。而して是等の消費地が震災火難に依つて、壞滅したことは、如何なる經濟的變化を生ずるであらうか。東京市の大部分並に横濱の殆ど全部は見る影もなき位に壞滅したとしても、尚ほ若干の市民が其焦土の上にバラック住ひをして居る。東京の如きは一時地方に離散した住民も次第に復歸し來つたと云ふ有樣であれば、彼等の消費する物資は結局何れの場所からか、供給されなければならない。現に震災直後、罹災地に於ける當面の需要に應ずる爲めに、關東と云はず、關西と云はず、殆ど全國の生産地方は蔵拂ひ同樣の有樣で、其貯蔵した商品を賣捌し盡し、其代金を受取つて、相當の利益を收めたと云ふことである。唯之に次いで漸次繼續して新規の注文が行はれ、一方に代金の回收が確實であるかどうかと云ふ點に於て、生産地

方の將來に於けゝ盛衰が決定される次第と爲つて居るのである。

一國の經濟に於て、消費地と生產地と孰れに重きを置くかに就ては、殆ど甲乙の別を認めるを得ない。而して消費地が衰微して、其影響が生產地に及ぼすに至ることも亦必然の事實を以つて、目しなければならぬ所である。此際に若しも外國の經濟社會が繁昌して居り、我國生產地方に於て產出する物資に對して、大なる需要を爲す狀態に居つたならば、生產地が消費地たる東京其他の壞滅に依つて蒙る損失は或る程度まで之を回避するを得る道理である。而して我國重要の生產地方は震災に依つて、直接の損害を蒙らず、以前と同樣の生產力を維持しつゝある以上は、此事も強ち望み得ない所でないように思はれるが、如何なる程度まで、其實現を期し得るかと云へば、一に外國經濟社會繁榮の狀況に依るものとしなければならない。

歐洲諸國の經濟社會が戰爭に依る打擊から、未だに恢復するを得ない殊にヴェルサイユ講和條約の規定は獨逸の經濟を壓迫して、殆ど再起の望みなきまでに、之を攪亂しつゝある一方に露國の國內に包藏される天然資料が諸外國に依つて利用されざるように爲つたことは、相重なつて、歐洲諸國の經濟を苦しめる所以と爲つて居り、其財政も亦戰時に生じた內外の負擔に對する重荷は依然たるものであつて、常に財政の不如意を訴へて已まない。唯英吉利の如きは近年財政上に目覺ましき程の經費節約を行ひ、一方に物價の下落して、國民の生計を安易にし、對外放資の如きも亦兩三年の戰前の狀況 復さうとしつゝあるが、尚ほ諸外國の疲弊は英國をして輸出貿易の伸張を難からしめる。合衆國は戰爭中常に順境に居り、經濟の發展亦著しきものあるを得たが、戰後の今日、山積した對歐債權の元金回收は勿論、利拂すら滯り勝ちと爲る一方に、歐洲經濟の不振は自國輸出貿易の發展を困難ならしめ、却つて近年に至つては輸出の劇減著しきものがある。合衆國の產業は戰時數年間外國に於て物資に對する需要の盛なるに應じて、其れ〴〵規模に擴張を告げるに至つたものであるから、輸出貿易の數量に劇減を來たしたならば、直に產業をして從前と同樣の規模に之を維持することを困難ならしめるのである。

即ち諸國共に今日の國際經濟的狀況に對しては、不滿足であつて、何等か病根を尋ねて、之を一掃しようとすることに就ては、何れも同感であるものゝ、其實際の方策に對しては、諸國の間に一致點が見出されず、從來の國際會議が盡く不成效に終つたのは勿論、此種の會議に合衆國を參加せしめんとした最近の計畫も亦水泡に歸した次第であつて、歐洲諸國の經濟社會

は何時に至つて、復興の緒に就くか、又安定の機運に達するか、殆ど人をして五里霧中に彷徨せしめつの趣きを免かれない。斯る場合に日本が天災に依つて、經濟上に大なる打撃を蒙つた。日本の立場としては、歐洲諸國へは勿論、日本の輸出市場として最も重きを置く合衆國へ向つて、出來るだけ多額の物資を賣却し、一方に國際貸借の均衡を維持する一助たらしめると共に、他の一方に輸出貿易に關係ある産業の振興を期したい。生絲が相當の高い價格を以つて、輸出されることに爲れば、單に製絲業地方の經濟を潤ほすのみならず、輸出港たる横濱の殷振を來す效果の少なからざる次第であるが、生絲貿易が果して往年の全盛時を再びするを得るかどうか、合衆國の經濟状態から云へば、甚だ覺束なく、而して戰時三　年間に亘る好景氣時代を通じて、内國に於て生絲の生産費の増嵩したことなどは、今日に於て考へれば、却つて當業者を苦しめる所以と爲つて居るのである。合衆國に次いで、日本の爲めに重要の輸出市場とす可きものは支那である。而して支那に對する日本の輸出貿易の不振に於ては、支那人の間に排日氣風の盛なる事も、一の原因として擧げられるが、更に他の有力なる原因としては、支那に對する外國の借欵が杜絶し、借欵の收入の市場に撒布されることに依つて市場の繁昌の維持される道の皆無と爲つた事が認められる。而して借欵の杜絶たる、支那の財政の紊亂した當然の結果ではあるが、又一面から見れば歐洲戰爭以來對支借欵の斷絶したことが支那財政紊亂を惹起したとも云へる。

斯の如く考へると、我國が假令ひ震災の爲めに、國の生産地方に大なる損傷を蒙つて居らないことに乘じて、輸出貿易の伸張を謀らうとしても、外國の經濟状態は果して我國の物資を受入れる程の餘裕を存するや否や、一個の疑問を以つて目される。唯我國民として玆に大に考慮す可き事がある。蓋し我國輸出貿易の不振なる、今日に始まつた事柄ではない。歐洲戰爭當時我國が輸出貿易に於て、順境に向つたのは、歐洲諸國の經濟が戰時財政の壓迫を受けて、他に其力を伸ばすを得ない缺陷に乘じた結果　あつて、火事場泥棒に類する嫌なしとしなかつた。隨つて戰後世界經濟の平靜に歸した曉に於て、依然として戰爭時代の好況を維持しようとするには、我國に大に考ふる所ある可きであつたが、當時の我國政府並に國民は此考に缺けて居つた。即ち政府の經濟財政策は極端に國民の投機熱を煽揚するものであつて、其爲めに物價を騰貴せしめ、物價の騰貴は更に生産費を増嵩せしめた。生産費増嵩の下に、尙ほ製造品を外國に輸出して、其販路を維持するに就て、當業者の爲す所は即ち粗製品を濫造するの一事であつて、此方針の下に、彼等は物

價勝貴の下に、輸出品の海外市場に於ける命脈を繋がうとした。斯くて我國に於ては一方に經濟社會に人爲的好景氣が行はれ、輸出貿易亦增進する、他の一方に於ては、粗製品の輸出に依つて、海外市場の信用を害し、將來に於て輸出貿易の維持される望みを絶つて居つたのである。

故に震災の如き一大事變に接して、之に當る爲めに、輸出の增進を謀らなければならない今日に爲つても、生產費の增高、其結果として生ずる粗製品の濫造が共に我國輸出貿易の伸張を妨げる原因と爲ることとは、已むを得ざる所であつて、隨つて我國經濟社會に更生の機運を開かしめようとする以上は、震災を機會として、當業者が心機一轉し、生活の簡素、能率の增進、技術の錬磨、機械の應用、あらゆる手段を講じて、生產費の節約、優良品の製造に意を用ひなければならず、政府亦物價調節策を斷行し、經費を嚴に節約し、世人の浮華に流れる弊を抑制し、經濟社會に一大緊縮を加へる覺悟あることを必要とするのである。此一事を除いて、今日貿易の權衡、更に之を廣くして國際貸借の權衡を求めるの道は他に得られないのである。

斯の如く日本が輸出貿易伸張の策を講じたとした所で、今後幾年かに於ける我國の貿易は輸入超過と爲るとを免かれないであらう。而して之を決濟する爲めに、外國債の發行されることは、必然の事實であつて、此點に於て國際經濟に對して、我國の關係する所、自ら厚きに至る。然しながら、我國は今日外國債を發行するに就て、必ずしも有利なる地位に居るものと稱するを得ない。蓋し震災火難に依つて、我國の國富に大なる減損を生じたことは、一般的に云つて、財政の信用を低下せしめる所以と爲つたのみならず、歐米諸國の戰後經濟の狀況、右に述べた如くである以上は、外國債であるから必ず低廉なる利率の下に發行されると云ふ斷定を下し難きこと勿論であつて、次第に依つては高利の外國債の發行される爲めに、內國の金融市場に壓迫を及ぼすこととなしとしない。然も復興事業の經費全額に對して、內國に於て、內國債の形態で醵集した收入に依つて、均衡を求めることも亦內國の金融を壓迫する所以であつて、何としても他に道を求めて、之を回避しなければならないとすれば、勢一部の財源を外國債に求むることは、必要已むを得ざる所と爲るであらう。

斯く外國債に依つて、財源を外國に調達したならば、其募債條件の利不利に拘はらず、我國は外國に輸入品代價決濟に要する資金を備へたことゝ爲るのであるから、外國物資の我國に輸入される勢は自ら強く爲るであらう。私は玆に我國が天災を機會として、經濟政策を一新し、生產費の節約を謀つて、輸出の

奨勵されることの必要を論じた。思ふに此事にして成就したならば、單に輸出を奨勵するのみならず、輸入をも沮止するに至る道理であるが、實際の結果は果して如何であらうか。復興材料として、我國が今後需要する物資は鐵、鋼鐵、各種鐵製品、木材、セメント、機械等枚擧に暇なき程であるが、是等諸種の物品たる、内地に於て產出されると共に、外國からも輸入される。其外國輸入の分に對しては、從來若干の輸入税を賦課して以つて内地產業を保護する用に供して居つたのである。而して今日内國に於ては、失業問題解決の聲甚だ高く、其方便として内國產業の復興並に繁昌を期して已まない其際に、外國債の募集に依つて、外國物資の輸入の容易に爲ると云ふ、狀勢が現はれたならば、論者は果して之を默過し去るであらうか。我國の經濟政策を支配し來つた傳統的思想から云へば、一方に外國債を發行して、外國物資の容易に輸入される、狀勢を作つて置きながら、他の一方に於ては、其輸入され來る物資に輸入税を賦課して、以つて其内國に來る勢を沮止すると云ふ矛盾が行はれることなしとしないであらう。我國が此際外國に債務を起すことは復興財源の調達に就て、國際共通主義を取らうとするものである。既に此點に就て國際共通主義に據らんとする以上は、復興材料の供給に就ても亦同一の主義を取らなければならない道理であるのに、此點に關しては正反對の内國自給主義に據らんとするのは、甚だしき矛盾であつて、此矛盾にして一掃されない限り、復興事業の進行を攪亂することを免かれないであらう。

財政當局者は復興事業の財源は主として之を内國債に求め、外國債に依賴する分は之を外國から輸入する復興材料の代金支拂に要するだけに止めしめると云ふ旨を公表した。其趣意に就ては、私は贊成を表することを惜まない。若しも方針斯の如く爲らず、外國債の募集されるに任せて、之を募集し啻に復興材料の代金支拂に止めず、其一部を内國に取寄せて、財源に供用したならば、忽にして通貨の膨脹、物價の騰貴を招いて、經濟社會を混亂の淵に導かざるを得ない。此點に於ては國產奨勵論者や、内國自給論者の外國債募集に反對するものと、正に說を同じうする次第であるが、金融業務や、株式賣買業に從事する者の如きに至つては、自ら異なる立脚點に居りはしないであらうか。復興事業の進行と共に政府が多額の資金を經費拂出しの形に於て、撒布する、民間經濟社會に於ては、資金の移動を盛にし、物資勤勞に對する需要を大にして、以つて好景氣の狀勢を作り出すに至るかも知れないが、復興事業は幾年の間、連續して行はれるものである。政府にして一旦經費を拂出した後に、

財源漸く乏しきに至つたらば、次の財源を調達する爲めに、更に內國債の募集を必要とする。此場合に何人が如何なる處に資金を求めて、之に應募するであらうか。復興事業の全部は生産的性質を有するものと見るを得ない。又其內に富の生産に資するものありとしても、經費の支辨される一方に、忽にして生産の効果を擧げることは、實際に望み難く、之を擧げるには、或る時期の經過を必要とする。果して然らば政府が右の手で復興事業を實行しつゝ、國民の間に新に作り出された財源を左の手で公債として、吸收しようとするが如き至難の業とせざるを得ない。兎に角從來公債の發行される度毎に其半額以上の應募に當つた東京市の財力に一大缺陷を生じ、其れが充されない場合に、年々巨額の內國債を發行しようとする以上は、如何に民間に撒布される資金を貯蓄させることに勉めた所で、到底金融を壓迫する結果を免かれない。固より政府は公債の利率を高くするであらう、又斯く利率を引上げることは、新に貯蓄に對する奬勵とも爲るが、同時に國庫と民間企業者との間に、供給の限られた資本を需要するに當つて、兩者の競爭を劇烈ならしめ、民間企業者にして之に對抗する爲め、高率の利子を負擔しなければならないことゝ爲つたならば、爲めに企業に一頓挫を來すことは、免かれ難き所である。斯る時期に至つて、財政の金融に對する壓迫を除却する爲めに、外債論の擡頭し來るのは、必然の勢であつて、若し其成效を得なかつた場合には調財源調達難の爲めに、復興事業の完成期を延長する必要に接するかも測り知るを得ないのである。

更に我國の復興事業と國際經濟との關係は公共團體並に民間の行はんとする外資の輸入に於て生ずる。政府の立案した復興計畫に據れば、國家自ら爲す可き復興事業あると共に、公共團體の爲す可き事業を國家が代つて爲す場合があり、又公共團體自ら團體として爲す可き事業がある。此場合に公共團體は何を以つて財源に充てるであらうか、受益者負擔の主義を適用し、受益者に就て收入を徵收することも、特別稅を賦課することも、自ら其方法たるを失はない。然しながら公共團體の事業が市民に利益を與へる場合に、直に其人に有形的利益を的確に生ぜしめるであらうかと云へば、必ずしも然るを得ず、殊に東京市の如き甚だしく荒廢した場合に於て、事業の施設を爲したときと、其れから利益を生ずるときとの間には、或る隔りがある可き筈であつて、隨つて受益者負擔の主義を適用するに就ても、自ら斟酌を加へなければならない。特別稅に就ても亦今日の如く課稅目的物と共に、納稅力の減失した場合に、其收入の大なるを望むことは、甚だ困難であつて、强いて特別稅を賦課した

ならば、却つて課税目的物を他の地方に逸し去らしめるの危險すらなきを得ない。茲に於てか地方自治體の復興財源も國家の給與、貸付を要するは勿論自治體自ら財源を調達する爲めに、公債を發行するにしても、國家自ら元利金の支拂を保證する地位に立つことを要する。震災直後倫敦市場に於ては、我國債の市價は相當に低落したが、殊に東京横濱兩市の市債に至つては、價格の下落するもの甚だしきを見た。畢竟兩市ともに市有の財産を失ひ、市民の納税力亦以前に比して、著しく減損し、今後の財政を維持するに困難なる事情の明瞭に推察された結果であつて、已むを得ざりし所としなければならない。而して其後に於ても、兩市の財政に信用を恢復せしめる何等の新事實を見ない。隨つて市が市債に依つて、財源を調達するに當つて、國家の保證を必要とする次第であつて、其れだけ外國市場に於て、我國の募債力に影響を及ぼすことは、豫め覺悟しなければならない。

近年我國に於ては、內外國の間に於ける金利步合の差違の大るなに隨ひ、內國の會社にして社債を英米兩國の市場に發行するものを生じた。震災の爲めに、此傾向は絕無と爲り、震災前交渉中であつたものも、不調に歸したやうに聞くが、今後社債が復興期に入る一方に、內國に於ける金利が漸く上進するに至つたならば、必ず民間企業家の間に、外資輸入の計畫されるのは、必然の勢と見る可きである。此際に處して政府は如何なる方針を取るであらうか。政府自身の外國債發行を容易ならしめる爲めに、公共團體や私人の外資輸入に對して、政府に於て干渉を加へることは、從來屢々行はれた所であるが、復興事業が政府の獨り行ふものでなく、公共團體や私人の協力に依らなければ、其完成を見るを得ない性質である以上は、斯る干渉は無益の沙汰であつて、政府としては寧ろ民間の外資輸入を自由にするは勿論、更に幾多の便宜を與へることを至當とする。

國際經濟と我國の復興事業とは相關する所幾しとしない。貿易の方面に於ても、金融の方面に於ても、諸外國が我國に對して、如何なる地位に居るかと云ふことは、我國の復興に影響を及ぼす次第であり、而して諸外國の經濟社會が全體に沈衰し、疲弊しつゝあることは、我國の復興に對して、大なる妨碍たらざれば、已まない。國際共通經濟の重んず可くして、孤立生活の不可なる所以は、此一事を以つてしても、自ら之を理解するに難しとしないであらう。

始めは二十億圓を要するとか、十五億圓を下るまいと稱された復興事業の經費が政府の原案に於て七億三百萬圓と云ふ比較的小額に止まつた一事は隨分世人をして一驚を喫せしめたと共

に、或は我國現下の財力に於て、已むを得ざる所と思はしめたのに、其七億三百萬圓に對しても、復興審議會に於 尙ほ尨大であると云ふ異論が起り復興計畫其のものに種々の修正が加へられて、遂に五億圓臺に經費の切下げられたことは、私の再度の喫驚を覺へる所である。斯くて帝都は復興に非ずして、復舊に止まると云ふ。當局者の當初の聲明は事實に於て、裏切られた次第であつて、國民として、市民として、當局者に愚弄された感を免がれない。實際の結果に就て考へれば、斯る復興計畫の縮小、小規模の復興計畫の實行は、如何なる結果を齎すであらうか。復興計畫が小規模の範圍に於て、實行されることゝ爲つた結果、經費が七億圓から五億圓に引下げられたとすれば、其れだけ財源調達の困難を減ずるに至つた次第であつて、其れだけ當局者としては、計畫施行の易きを得る譯であるが、施行の易きに至ることゝ、計畫其もの丶利益を生ずることゝは、全然別個の問題であることを知らなければならない。現に政府の原案に於て、京濱運河と東京築港とを短少の時日に竣工し、竣工された兩施設を其後に於ける復興事業に利用しようとした計畫の如きは、其廢棄と爲つた今日に於ては、聊か死兒の齡を算ふるの嫌はあるが、兎に角一個の見識であると云へる。若しも原案の如くであつたとしたならば、復興事業着手後の一兩年内に比較的多額の經費を必要とし、其時に於ける經費の年度割は勢高きに上り、之に對する財源は自然外國債に求められざるを得ざることゝ爲り、其れだけ内國に於て募債を行ふ必要を減ずる。假に外國債に依つて、多額の經費に對する財源を調達し、單に復興材料の輸入價格を決濟する用に充てるに止めず、其一部分を內國に取寄せて、拂出すが如きことがあつたならば、其れに依つて、經濟社會に刺戟を及ぼすことは、疑を容れない。又假に外國債に依らず、多く內國債に依るとしても、一時に多額の經費の拂出されることは、自ら經濟社會に對する或る刺戟と爲るのは、疑を容れざる所である。然も復興計畫其ものが縮小したならば、其れだけ此計畫の下に民間に撒布されて、物資や勤勞を要求する力の微弱と爲る結果、經濟社會に對する刺戟も亦小ならざるを得ない道理である。復興事業の着手と共に、復興景氣の到來を望んだ者の如き、此點に於て先づ失望せざるを得ないばかりでなく、復興事業に依つて、失業問題の解決に資せしめようとした考も自ら實行的價値を少なくしたものと云へる。

帝都復興事業は不生産的のものであるかどうかは、從來屢々世間の問題と爲つたようである。復興事業が其當初に世間に傳唱された如くに尨大に失し、粗漫に流れ、都市としての裝飾的

計畫に類する方面に沒頭するものであつたならば、或は不生産的消費としての非難は之を免かれなかつたであらう。然し其計畫が縮小され、道路、橋梁、運河、港灣、市場の如きもの丶新設なり、擴張なりを主とし、殊に大都會に於て必要とする最小限度に近きものに限られて居る場合には、是等に投ぜられる經費を以つて、必ずしも不生産的のものであるとは、斷定するを得ない。固より上記の事業たる、其性質から云つて、有形の收入を直接に當事者に與へるものではないが、尙ほ事業の利益は必ず一般的に市民の所得を增加する働きを爲す。隨つて經費の一部分は受益者負擔に依る收入を以つて、之に充るを得るは勿論、斯く生ずる利益を以つて、利子を支拂はしめる豫定の下に國債又は公債を發行することを不可なりとしない。換言すれば復興事業の多くのものは生産的に屬し、隨つて國家又は公共團體の信用を利用することを妨げざるものと考へられる。即ち或る場合には外國債を以つて、他の場合には內國債を以つて、復興事業の財源を調達することの正當なる理由は玆に存する。復興事業の財源を租稅の收入に求めたならば、國民全體に負擔を加へて、一都市の事業を完成すると云ふ非難の生ずるのは勿論であり、又斯る非難なしとしても、租稅の收入に依賴することは、復興事業の財源を乏しからしめる所以と爲る。復興審議會に於て、政府の原案を縮小するに當り、委員の或る一人は公債の增發に依る我國財源の信用に憂を懷くの意見を發表したるやに傳られる。七億圓臺の經費に對して、財源を求めること丶、其削減された五億圓臺の經費に對して、財源を求めること丶の間に、我國財政の信用に及ぼす影響に大なる相違があり、七億圓程度にすれば、財源の信用は何うされるか、五億圓程度にすれば、其安きを得ると云ふ理由は如何にして見出されるであらうか、私の解するに苦む所である。即ち私は第一に復興事業の財源として、公債を利用することを以つて、事業の性質上、當然と考へ、第一公債財源の所要額が二十億圓とか、三十億圓とか云ふ途方もない金額に上れば兎に角七億圓臺に止まるものであれば、我國現時の財力に顧みて、多少金融市場を壓迫する虞れはあるとしても、尙ほ必要已むを得ざるものとして、之を承認することを可なりとしたのであるが、世間には杞憂を事とする人もあつて、遂に七億圓臺の經費に應ずる公債の募集すら、財政の信用を脅かすものとして、之に縮小を施すこと丶爲つたのは、私の寧ろ驚く所である。思ふに杞憂論者が斯く、我國の財力に對して悲觀的判斷を逞うするに至つたのは、過般の震火災に依つて、我國の喪失した富の百億圓に上ると云ふ計算を眞面目に、又其儘に受入れて、斯る莫大なる富が滅失したとあつ

では、我國の經濟的將來亦寒心す可きものありとした結果ではあるまいか。如何にも震火災に依つて、滅失した富を其一個々々に就て評價した上に之を合計したならば、百億圓の多きに上るかも知れないが、其内で一般國民の生計に對して、直接の關係を持たざる富に至つては、決して急速に復舊することを要せざるものであつて、國民は其滅失に就て、何等の痛痒を感じないとしたならば、百億圓の富の滅失した事實を以つて、直に其割合に國力の消耗を招いたものと斷定するのは早計とせざるを得ない。此事は一方から云へば、復興計畫の大たる規模に於て、行はれることを必要としない理由に充てられると同時に、復興事業の經費に對する國民の負擔力を輕視する者を戒める論據にも爲ると思ふ。隨つて私は所謂尨大なる復興計畫には反對を表さゞるを得ないが、七億圓程度の計畫を以つて、所謂尨大の意味に當るものとし、之に應ずる公債の發行に對して、我國財政の信用を何うすると云ふ言論を以つて、一場の危言とするの外あるを知らないのである。

唯復興計畫の縮小された爲めに、偶然の幸と爲つたのは、其施行期の短縮された一事である。蓋し復興事業は其全部の完成しない限り、充分の效果を奏するを得ないものであるとしても其事業の性質に依つては、一部分の施行と共に、直に或る效果を生じ、利益を一部の市民に與へるを得るであらう。即ち或る區に於ては早く街路の擴張、鋪道の修築が完成し、其兩側に建築された商店の如き營業を開始して、多數の顧客を吸收しつゝあるに反し、他の區に於ては道路未だ成らず、路面の通行不如意であつたならば、商店の如き見す〳〵顧客を他に奪はれるであらう。而して斯く利害の相反する關係が多年の久しきに亙つて、繼續するが如き、同一都市に於ける市民に對する取扱として宜しきを得たものでない。復興事業の規模縮小と共に、施行期限亦短縮され、斯業に伴つて生ずる利益を餘り間隔なき期間に於て、市民に與へることゝ爲つたのは、勿怪の幸とす可きである。

最後に考ふ可きことは、復興事業の規模縮小と共に、其民間事業に及ぼす壓迫の聊か緩和さた一事である。固より一方に完成期限の短縮された以上は、一年に就て之を云へば、發行を要する公債の金額には相違する所ないであらう。然し七年完成の計畫が五年完成となり、所要經費亦七億圓臺から五億圓臺に減じたと云ふことは、自ら民間に對する壓迫を輕うするものと考へられる。殊に政府が七億圓計畫の際に豫定したと同一の金額を五億圓計畫の今後に於ても、依然外國債に依頼し、經費の削減されたと同一の金額に於て、内國債の募集額を節約したなら

ぜ、復興事業に伴つて、金融市場に加へられたる壓迫は輕く爲るであらう。唯斯く內國債の募集を減じ、內國の物資に對する經費の費消高を少なくしたならば、爲めに內國の事業に對して及ぼす刺戟を微弱ならしめる虞れを生ずる。玆に於てか外國債の募集に依つて收められた收入は單に外國に購入する物資の代金を決濟する用に充てるに止めず、其一部を內地に回收して、內國市場に對する刺戟を盛ならしめるに至りはしないであらうか、一個の問題に屬する。復興事業の縮小に依つて、內國市場に對する刺戟の弱められたことは、已むを得ざる所でありとする。斯く弱められた刺戟を大ならしめる目的を以つて、投機奬勵に類するが如き手段の行はれることは、吾人の回避せざる可からざる所である。

復興審議會が今更ら火災保險問題を云々したるが如き蛇足であり、地震保險を喋々したるが如き、亦無用の辯である。唯希望條件の一として、商工業復興資金の供給を必要としたことは誠に當を得た言であつて、政府に依つて閑却されて居つた所を補つたものと云へる。差し當り復興計畫の縮小に依つて、民間金融市場を壓迫する勢が緩和されたとして、其緩和されたゞけ民間事業の振興を促すかどうか。假に復興經費の減縮したゞけ內國債の發行高が削減されるとしたならば、銀行の手元は然らざる場合に比較して、自ら餘裕を生ずるであらうし、有價證券の市價も亦甚だしき打擊を蒙らないであらう。是等の二點は自然金融市場を緩和して、金融を圓滑ならしめる所以であると考へられるが、市中諸銀行の營業方針が今日の如く臆病を極めて居つて、果して能く目的を達し得られるか、甚だ疑はしい。随つて民間事業の振興を謀るには、別に工風する所なければならない。其れには、從來政府が日本勸業銀行や、日本興業銀行をして行はしめて居る資金貸付の方法を擴張し、是等の貸付に依つて、兩銀行の蒙つた損失に對しては、政府自ら之を保護する地位に立ち、時には復興後に當業者の持つ可き資力を信用し、之に對して資金を融通するなり、當業者間の組合を信用して、資金を融通するなり、適當の方法を講ずること、必ずしも困難であるとしないであらう。兎に角復興審議會の議決に依つて、

復興計畫の縮小されたことは、一方から見れば、市民に對する負擔を輕くする道と爲るかも知れないが、他の一方から考へると、復興計畫の實行を機會として、自家の復興を企てようと期して居つた人々に取つては、大なる打擊であり。又失望でなければならない。左なきだに意氣阻喪して、或は自暴自棄にすら陷らんとする罹災民に再度の苦痛を感ぜしめることは、私の忍ぶ能はざる所であつて、彼等に酬ゆる一法として、商工業復興資金の融通の主張されるに至つたことは、當然としなければならない。

比例代表法に就いて

美濃部達吉

一

議會の選擧に比例代表語を採用すべしといふことは、學說としては、餘程古るくから主張せられて居た所で、其主張者の側からは、殆ど是が唯一の理想的の選擧法であるかのやうに唱へられて居たのであるが、實行問題としては、比較的近頃までは、國會の選擧法には、白耳義や瑞西などの二三の小國に行はれて居ただけで、大國には殆ど何處にも行つて居る所は無かつた。世界戰爭の後になつて、是が遽に各大國にも普及することとなつたので、唯英吉利本國だけは、今も舊來の小選擧區制度を維持して居るが、同じ英國の中にも、大學選擧區だけは比例代表法を取つて居り、アイルランドも獨立の議會制度を設けてからは、同じ方法を取り、英吉利の各自治殖民地も、大抵は比例代表法を取つて居る。英吉利以外では、歐羅巴大陸の諸國は、伊太利がムツソリニの武斷政治に依つて、一たび採用した比例代表法を廢止して、一種の武斷的選擧法に改めたのを除いては、殆ど例外なく、皆比例代表主義の選擧法を採らないものは無いやうになつた。殊に戰爭後に新に作られた憲法では、殆ど何れも皆、憲法の中に比例代表主義を取るべきことを明言して居る。米國の諸邦は今も小選擧區制度であるのが多いが、此等の少數の例外を除いては、比例代表制度は、普通選擧制度と共に、今は既に世界の大勢となつたものと言つて可い。

何故に比例代表法が、既に數十年の昔から主張せられて居たに拘はらず世界大戰後に至るまで、多數の國には採用せられず、大戰後になつて、遽に各國に普及するに至つたかと言へば、それにはいろ〱の原因を擧げることが出來るが、其最も重な理由としては、比例代表法は理論上は最も正義に適するものとして認められて居ても、其實行の結果は比較的多數黨に不利益であることは、免れ難い所で、現在政界の政力を占めて居る多數黨が、其實行を喜ばないことは自然の結果であり、それ

が爲に、世界大戰といふやうな政治上の大變動の起るまでは、多數黨の勢力に依つて其實行が阻止せられて居たのであるが、世界大戰に依つて、歐洲大陸の諸國は、殆ど何處でも、革新の氣運が全國に瀰漫し、理論上正義として認められて居たことは、躊躇なく之を實行するといふ勢が盛となつた爲に、各國相競つて此制度を採用し、殊に新興諸國では、憲法自身に於て此主義を明言するに至つたのであると思ふ。

二

比例代表法は何故に正義に適するのであるか。是は敢て多言を要しない。若し現在のやうな小選擧區制度であれば、假令當選者が有效投票の過半數を得て當選したとしても、半數に滿たない外の投票は、全く代表者を出だすことの出來ない代表投票となるのであるが、それはまだ善いとして、多くの場合には、一選擧區の中に三人四人の候補者が出て、當選を爭ふこととなり、而して此場合には、投票の比較多數を得た者を以て當選者とするのであるから、當選者は全體から言へば半數にも滿たない得票しか無い者であることが屢生する。否、現行法では

有效投票ノ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス但シ其ノ選擧區内ノ議員定數ヲ以テ選擧人名簿ニ記載セラレタル者ノ總數ヲ除シテ得タル數ノ五分ノ一以上ノ得票アルコトヲ要ス（七〇條一項）

と定めて居るのであるから、極端な場合を想像すれば、一區一人を選出する區で、選擧人の總數が一萬人である場合には、二千票以上の得票が有つて、其得票が比較多數でありさへすれば、當選者となり得るのである。若しそんな場合が有るとすれば、其議員は其區の選擧人の僅に五分の一を代表するだけで、他の五分の四の選擧人は、全く代表者を出ださないといふ結果になる。勿論、是は最も極端な場合で、實際には、もつと多くの得票が無ければ當選しないのが通常であるが、それでも、半數未滿の得票で當選することは、決して珍らしい事ではなく、一區一人を選出する區で、三人以上の候補者が競爭する場合には、殆ど何時でも、さういふ結果を生ずるのである。さういふ場合には、其議員は其選擧區の過半數を代表しないもので、寧ろ少數者の代表者たるに過ぎない。若し斯ういふ結果が、多數の選擧區に起るとすれば、其全體を綜合した結果が、可なり不公正なものになり得ることは、當然である。

それが爲には、全體として多數の議員を選出し得た黨派が、其實は却て少數黨であつたり、それ程ではないにしても、多數

黨が不釣合に多數の議員を出だし、少數黨は甚しく少數の議員しか出すことが出來ないことになり得ることは、避け難い所である。

比例代表法は、此不公平を除いて、政治上及社會上の各種の集團的勢力に對して、恰も其勢力に比例するだけの代表者を出ださしめようとする方法である。それは必ずしも政黨だけを眼中に置くものではなく、職業的團體でも、單に政界の廓新を目的とする中立の有志團でも、兎に角相當の人數を集め得た集團的勢力が有れば、それ等の各のものに、丁度其集め得た投票數に比例して、何人かの代表者を出だすことを得せしめようとすることが、其主義の存する所である。

若し此主義を、他に缺點を伴はずに、實現することが出來るとすれば、それが現在のやうな制度に比らべて、遙に正義に適するものであることは、更に疑を容れぬ所であらう。

三

比例代表法の主張せらるる根本の理由は、右に述べた通りであるが、此外に、其附隨的の利益であつて、而も考へ方に依つては、それよりも一層重要な長所とも、見られ得べきものが、尚一つある。私が普通選擧の實行と同時に、直に比例代表法を斷行すべしと、主張するのは、其根本的の理由よりも、寧ろ此附隨的の長所に基いて居るのである。

其長所は何かと言へば、之に依つて、選擧の弊害を、全く根絶することは出來ないまでも、少くとも著しく減少することを期待し得べきことに在る。

從來の日本の選擧界が可なり腐敗したものであつたことは、多くの實際家の經驗談に依つても、疑を容れぬ所であると思ふ。其弊害の最も甚しい點は、言ふ迄もなく、投票の買收や、戸別訪問に依る個人的の請託やが、陰密に又は公然に盛に行はれて、其結果は各候補者の要する選擧費用が、非常な巨額に上り、一方には、官權による選擧干渉が、巧に行はれることに在る。此弊害は普通選擧の實行に依つても、決して除かれ得べきものではなく、投票の買收などは、或は一層盛に行はれることになるかも知れぬと思ふ。如何にして此弊害を除き得べきかは、選擧法改正に際して、最も顧慮せねばならぬ點である。多くの論者は、法律を以て嚴重な取締規定や罰則を設けて、此等の行爲を禁止することに依つて、其目的を達しようとして居るのであるが、それは私の贊成し難い所である。若し法律で禁止したり、罰則を設けたりするだけで、此等の弊害を除き得るものとすれば、事頗る容易であるが、法律の力はこれだけでは頗

る薄弱なもので、法律が益々嚴密になればなる程、法網を潜るものが益々多くなるといふだけに止ることが多い。投票の買收といふやうな、萬人が認めて不正行爲とするものですらも、法律が早くから之を嚴禁し嚴罰して居るに拘らず、今日も尚盛に行はれて居つて、現に檢擧せられる者は、其極めて一小部分に過ぎないことは、法律の力が如何に薄弱であるかを證明するものである。況んや戸別訪問の如き、又は選擧費用の多額に上るが如きは、社會萬人の必ずしも不正行爲とは思考しないものである。戸別訪問は畢竟は他人の家を訪問することであり、選擧費用が多額に上るといふことも、自分の所有の金を使ふことに外ならない。人の家を訪問したり、自分の金を使ふことは、それ自身別に惡事として認められないことであるから、其れを法律で禁止したとしても、それは徒に煩瑣な法律を作つて、時々檢擧せられる犯罪者か、統計上可なり多人數になつて、見はれること以外には、到底實効を期し得ない事柄である。それは實に無益であるばかりでなく、甚有害であつて、さういふ到底實行の出來ないやうな法律を作れば、之を嚴密に勵行して、其違犯者を殘らず公平に檢擧することは、不可能であるから、警察官や檢察官の手心に依つて、或る一部の者だけに其法律を勵行することになり、其結果は巧妙なる選擧干渉となることは、見易い結果である。

選擧の弊害を救ふことは、此の如き人爲的の禁止制限に依つては、到底目的を達し難い所で、其目的を達する爲には、其弊害を生ずる源に溯つて、其原因を除くことに努めねばならぬ。是が其唯一の有効な方法であると信ずる。

比例代表法の採用は、私の見る所では、此弊害を救ふべき最も有効な方法であると思ふ。從來の選擧の弊害を生じた最も重なる原因は、私の考では、從來の選擧が常に個人と個人との競爭であつたことに在ると思ふ。各候補者が個人として自分に成るべく多くの投票を集めることに運動するのであるから、其結果は、投票の買收も行はるれば、戸別訪問も必要になり、其政見の如何よりは、個人的の關係の方が重きを爲し、平生から其選擧區で人氣を集めることに努めねばならず、場合に依つては、同じ選擧區に於て、同じ黨派に屬する者が同士討をするといふやうな結果も、生じ得るのである。此弊害を絶つ爲には、選擧を個人と個人との競爭から移して、團體と團體との競爭となり、各選擧人は、候補者たる各個人に投票するのではなく、團體に投票するものたらしむることが、最も有效であらうと思はれる。それは即ち比例代表法であつて、比例代表法の要點とする所は、從來の選擧法に於て、各選擧人が或る特定の候補者

其人に投票して居つた事を改めて、選擧人は各政黨其他の集團的勢力の何れか一に投票するものとなし、それ等の各政派の得た投票數に比例して、各政派から出だし得べき議員數を定め、而して各政派から何人を當選者とするかは各政派自身をして之を定めしめようとするに在る。言ひ換ふれば、從來の選擧法に於ては、誰れが當選者になるかといふことが、選擧人の投票に依つて定まつたのであるが、比例代表法に於ては、各政派から何人づゝの議員を出だすといふことだけが、選擧人の投票に依つて定まり、誰れを當選者とするかは、政派自身の決定に任かせようとするものである。

此方法を採る結果として

第一に、選擧の費用が著しく低減せられることは、更に疑も容れぬ。從來の如く候補者が個人として運動する必要は全く無くなり、集團的勢力を以て運動するのであるから、同じ黨派に屬する者は相聯合して、其運動を共同にし、各選擧人に發送する推薦狀なども、同じ黨派に屬する數人の候補者が、連名で發することが出來る。其結果は、從來は一人の負擔であつた選擧費用だけを以て數人の共同の費用を充たして餘りあることになることは、當然期待し得べき所である。

第二に、選擧の爭が著しく公明正大となり、個人的の請託運動は何等の實效なく、專ら各黨派の主義政見の爭となることも、自然の結果である。選擧人が候補者各個人に投票する制度の下に於てこそ、個人的の請託運動が必要であるが、黨派に投票することになれば、黨派と黨派との間の勢力爭となるのであるから、一時に總ての弊害を根絶することは、出來ないにしても、少くとも其爭が主義政見に重きを置くに至ることは、當然の趨勢であらうと思ふ。

四

比例代表法に付いて懸念せられる所は、主として其方法の比較的複雜であつて、實行に困難なことに在る。隨つて比例代表法を論ずるには、必ず其方法に付いて研究する所が有らねばならぬ。

比例代表法として、今日諸國に實行せられて居る所は、大體に於いて二種類に大別することが出來る。一は英國流の單記移讓式の比例代表法であり、一は歐洲大陸流の名簿式の比例代表法である。

此中、起源から言へば、單記移讓式の方が、遙に古いもので、それは、十九世紀の中よりも前に、既に英國人ヘーアに依つて主張せられた所であるが、それを實行して居るのは、唯へ

ーアの本國である英國及び英國の殖民地のみで、其他の諸國では皆名簿式の投票法を採つて居る。私も若し比例代表法を取るとすれば、名簿式に依る方が、一層適當であらうと思ふ。

單記移讓式の方法を簡單に說明すると、凡そ左の通りである。

假りに一區から五人の議員を選出する區であるとして、各黨派から屆けでた候補者の總數が十五人であつたとすれば、其十五人の氏名をイロハ順か何かで豫め投票用紙に印刷して置き、而して各選擧人は、其投票用紙に、自分の最も希望する候補者の上に「一」と記入し、其次に希望する候補者の上には「二」と記し、以下少くとも定員に充つる迄で即ち五人までは、順次其希望する候補者の上に「三」「四」「五」等の順位を記入して投票するのである。

而して當選人を決定するには、左の方法に依る。

第一に、當選標準點を定めねばならぬ。是は當選人となるに必要な得票數で、それだけの點數を得れば、當然當選者となるのである。當選標準點の定め方は、有効投票の總數を其區の議員定數に一を加へた數で除し、其商から分數を取り除いて之に一を加へた數である。即ち

$$\frac{\text{有效投票總數}}{\text{其區の議員定數}+1}+1=\text{當選標準點}$$

で、例へば定數五人の區で、有効投票の總數が八萬票あつたとすれば、$\frac{80000}{6}+1=13334$ で、即ち一萬三千三百三十四票が當選標準點である。

第二に、投票の全部を開票して、先づ各候補者の得た第一順位の得點を計算する。若し第一順位の得點が、當選標準點以上に達してる候補者が有れば、直に其候補者を當選者と定める。

第三に、若し第一順位の得點が、當選標準點を越えて居る候補者が有れば、其餘剩投票は之を第二順位の候補者に移讓し、第二順位の候補者の得點として計算する。若し第二順位の候補者も、既に當選標準に達して居れば、更に第三順位の候補者に移讓する。

第四に、斯くして順位に移讓して、當選者を定め、尙當選者の數が定員に滿たない場合には、第一順位に於て、最低の得票しか無かつた候補者の得票全部を第二順位の候補者に移讓し、以て當選者を定める。

以上は唯要領だけの說明であるが、是れだけでも、其計算が可なり複雜であることがわかる。殊に此方法の缺點は主として左の五點に有ると思ふ。

一　選擧人自身に候補者の順番を付けさせることは、可なり無理な事で、可い加減出たらめなものになる虞れが有るばかり

でなく、若し各選擧人に必ず定員に滿つる迄の順番を付けることを要求し、それを付けて居ない投票は總て無效であるといふことにすれば、無效投票が頗る多くなる虞が有り、若し又「一」の順位を付けただけでも有效で、「二」以下は必ずしも記入する必要が無いとすれば、移讓不能の投票が非常に多くなつて、公平に移讓することが不可能になる。

二　選擧人の順番の付け方が、可い加減出たらめなものになるといふ結果は、例へば第一位には政友會の候補、第二位には憲政會の候補、第三位には革新倶樂部の候補に投票するといふやうなのが、可なり多く出て來ることは、豫想し得る所で、こんな投票が多くなれば、比例代表といふ趣旨には全く反する結果になる。

三　此方法に依れば、各候補は相互に順番を爭ふ必要が有るのであるから、其結果は矢張り、個人的競爭の必要を生じて、從來の選擧の弊害が救はれ難い。

四　此方法に依る投票の計算方法が非常に複雜なことは、明瞭で、投票が終つてから、當選の結果が判明する迄には、相當の日數を要することゝなるばかりでなく、計算に誤を生じ易く、隨つて當選訴訟を頻繁ならしむる虞が有る。

五　補闕選擧が甚だ困難であることも、此方法に伴ふ著しい缺點の一である。

五

名簿式の投票法は、單記移讓式に比らべて、手續が簡明であるばかりでなく、最も公正に比例代表の目的を達し得べき方法であると信ずる。

其方法にもいろ／＼あり、殊に最近にバーデンから獨逸聯邦に傳はり、『プロイセン』其の他にも採用せらるるに至つた、所謂「オートマチック・システム」は、全國を一選擧區となし、而も比較的簡明な方法を以てするもので、理論上最も公正なる方法と言ひ得べきものと思はれるが、併しながら、選擧法に尊ぶべき所以は、純然たる理論上の公正よりも、甚しく公正を失はない限度に於て、選擧民の實際に適することに在るので、而して此點から言つて、私は大要次のやうな方法を推薦したいと思ふ。

一　選擧區

一　選擧區は一區原則として五人を選出する割合を以て定むること

二　各選擧區に選擧長を置くこと

二　候補者名簿

一　選擧期日の二十五日前に選擧人五十人以上の連署を以て候補者名簿を選擧長に屆出づるを得しむること

二　候補者名簿に記載する候補者の連名は其區の議員定數の二倍以內に限ること

三　候補者の連名には順序位を附するを要すること

四　候補者名簿には成るべく一定の名稱を附せしむること政友會、實業同志會、辯護士會の類）

五　候補者名簿には各候補者の承諾書を添附せしめること

六　同一候補者は同一選擧區內に於て二以上の候補者名簿に記載せらるるを得さること

七　同一選擧人は一以上の候補者名簿の屆出に署名するを得さること

八　各名簿の屆出には其署名者中より一人の代表者を指定せしむること

九　名簿の屆出あるときは選擧長は其正否を審査し選擧期日の遲くも十日前には之を確定し且つ之を公示すること

十　候補者名簿の屆出が唯一に止まるときは其候補者を以て直に當選者とすること

三　投票用紙

一　投票用紙に附表の如き樣式を以て豫め之を印刷し選擧當日之を選擧人に交附すること

四　投票

一　選擧人は投票用紙に列記せられたる各候補者名簿の中何れか一に〇印を附すること

二　投票所に於て投票管理者は成るべく各選擧人に投票記載の方法を指示すべきこと

五　當選人の決定

一　各候補者名簿の得票數を一、二、三等の數にて除し其商數を最大數より順次列記し其區より選出する議員定數に相當する順位に當る數を以て當選基數とすること

二　各候補者名簿の得票數を當選基數にて除し其の商數を以て其名簿より出すべき當選者の數とすること

例　一區より五人を選出すべき區に於て候補者名簿四個ありて左の得票數ありたりと假定す

甲　六五、八二四票

乙　五三、一六〇票

丙　二六、五三〇票

丁　一三、三四五票

之を一、二、三にて除するときは左の如し

(1) 65824　二にて除したる數 (3) 32912　3に、除したる數 21941

(2) 53160　(4) 26580　17720
(5) 26530　13265　8843
12345　6172　4115

此等の數を其大小順に列記すれば其第五位（五人を選出すべき區なるが故に）に當るものは二六、五三〇票なり故に之を以て當選基數と爲し從て甲名簿及乙名簿よりは各二人丙名簿よりは一人を出だすことと定むるなり

三　各名簿より出だすべき當選者は連名の順位に從ひ之を定むること

四　同一候補者が二以上の選擧區に於て當選したるときは其何れか一を選擇せしむること

五　候者當補選を辭し又は當選無效となりたるときは同一名簿に屬する次の順位に在る者を以て當選者とすること

六　補闕

一　議員任期中に死亡、辭職等と理由により闕員となるときは其の選擧區に於ける同一名簿に屬する次の順位に在る者を以て補闕議員とすること
若し次の順位に在る者なきときは之を闕員とし補充せざること

附表　投票用紙の樣式

第一號　政友會　何某
第二號　憲政會　何某
第三號　革新俱樂部　何某
第四號　實業同志會　何某

注意
一各候補者名簿の番號は届出の前後に依る
一選擧人は其投票せんとする名簿の横に在る空欄に○印を記入すべし
一二以上の空欄に○印を附したるもの又は○印以外の他事を記載したるものは無效とす

○

是は固より私の未定稿に止まるもので、敢て是を以て完全無缺なりとするものではないが、選擧の手續に於ても、投票の計算に於ても、簡單明瞭であるといふ長所が有り、又之に依つて略比例代表の目的を達し得ると共に、大に選擧の弊害を救ふことが出來ると信ずるものである。

唯是に對する最も大なる非難は二の點に在るであらうと思ふ。

第一の非難は、各黨派から候補者名簿を屆出づる場合に、必ず順位を附して屆出づることを要し、而して其順位に依つて當選人が定まるのであるから、黨派の內部に於て、激烈な順番爭が起り、黨派の幹部に於て到底之を決定することが出來ないであらうといふことに在る。

是は此方法を實行する上に於て、最も大なる困難の點であるが、併し是が此方法の主眼とする點で、之に依つて始めて選擧の弊害を救ひ得られると信ずるものである。元來人物を鑑識することは、近親の間柄に於いてすらも、甚だ困難であつて、況んや普通選擧を實行する際に、一般民衆に人物の鑑識を一任して、何萬人の投票に依つて當選人を決しようとすることは決して適當な結果を得る所以ではないと思ふ。人物の鑑識は是非共小數者の間に於いて行はれねばならぬ所で、それには各黨派の幹部をして、候補者の順位を決定せしむることが、唯一の適當な方法であると思ふ。それは勿論最初は多少の困難を伴ふであらうが、各黨派の組織が整ひ、慣習も積まれるに從つて、略圓滿に行はれ得べき見込が有るであらうと思はれる。

第二の非難は、此方法に依れば、選擧人の意思が餘りに束縛せられ、選擧の實權が黨派の幹部に移されるといふことに在といる。此非難は理論上は一應尤のやうであるが、併ながら現在の選擧法と雖も、選擧人は決して自由意思を有するものではなく、唯見はれた候補者の中に就いて、一人を選擧するの外は無いのである。候補者の全部が自分の欲しないものであつても、選擧人は其中の何れかに投票するか然らざれば棄權するの外は無いのである。しかのみならず、現在の如き方法では、其投票は全然無効果となる場合が多いのであつて、折角投票を行つても、一票としての價値を著すことを豫期し難いのであるが、比例代表法なれば、各黨派の得票數に比例して當選者の數が定まるので、總ての投票は確實に一票としての効果を發揮することが出來るのであり、選擧人の意思を尊重する上に於いて、寧ろ現行法よりも遙に勝るものが有ると思ふ。



學術の生命

―雜誌「改造」のために―

ハインリッヒ・リッケルト

「現代の學術と希臘哲學」と題する本誌上の一論文に於ては、今日屢々批難の的となる理論的研究、殊に生命の哲學に依て旺に批難さるゝ理論的研究のことより論を起し、且つこれに關する問題にして現今旺に論議さるゝ所のものを釋明せんがためには、ギリシャに於けるヨーロッパ學術の發生を一瞥すべきを指示したのである。今回の論文はその同じ問題を更に組織的な見地から論ずるのであるが、併し前回と同じく古い時代の理論的生活に關係せしめ、之に依つて現在の研究の狀態に對して何ものかを學ばうとする。

ヨーロッパの學術が唯單にギリシヤや哲學に源を發すると云ふ許りでなく、現代に於ても尚その本質的の點に於てはそれに依存してゐると云ふ事實其物が、生命の概念の中に己が立場を置かんとする現代の傾向から云へば、果してかゝる種類の學術が吾々の今日の文化世界に適したものであるかどうか、といふ疑問の種となるのであらう。かゝる古き年經た現象が、始めより如何はしきものと見做すべきだと、思惟することも出來よう。既に數千年の昔に芽生えたものが今も尚滿開の時にあると云ふ如きことが、果して可能であらうか。吾人は先づ文化の推移を、丁度生物が生體の生命を研究する如く、考察すべきことを知らなければならぬ。然る後始めてその批判に對して、正しい見地を得るであらう。故にもし吾人が學術の意義に就て明かな見解を得ようと思へば　先づ古代から繼承されて來た文化財が、如何なる意味で今も尚「活きてゐる」と云はれ得るかといふことを確定しなければならぬ。これが解決如何に生の哲學の存在の是認さるべきか否かが所依する。

學術の生命と云ふことは、凡ての理論的の人々にとつて最も重大な問題である。何故ならば誰か自己の努力する所のものが、眞に活き〳〵してゐることを欲しないものがあらうか。死物に對しては誰しも自分の力を費すことを欲しない。

さりながら所謂知識の「生命」とは一體何を意味するのか。この場合生物に於て用ひると等しき意味にこの言葉を用ひる事が可能であるか。我々は世人が如何なる權利を以て理論的研究に就いて、之が自然有機體の如くに生き或は活力があるべきであると要求するかを理解する限りに於て、この問題を論じようと思ふ。

近代の生の哲學は問題の提出に就いてのみならず、解答を求むべき方面に就いても、豫じめ、斷定を下し得るものと信ずる。生きとし生けるものは凡て、先づ芽を出すに始まり、生長し、花咲き、實を結び次に又衰へ、結局枯死して了

ふ。之れ生物の避くべからざる運命である。從つて生物學に方向を與へられる考察に取つては、若さと老ひとが、價値又は反價値が評價さるべき場合に普く用ゐられる尺度であらねばならぬことになる。彼等にとつては、若くて、元氣に生長してゐるものが、この種の考察には有効なものであり、之に反して老ひて灰色になつたものは、毫も神々しからぬものである。年處は聖化する力ではなくて、凡ての現象を導いて必然にその衰滅に到らしむるのである。學術と雖もどうしてこれと變りがあらう。ギリシヤに於ける學術の發生を思ふ時は、學術は遠き昔にその青春の花盛りを有つた一の生命的所產であることが明瞭になる。故に學術が生命を保ち得るためには、再び若くなる工夫をするの外はない、而して此目的のためには、古代より承繼いで來た、殘骸を除かなければならぬ。然らざれば學術と雖も凡ての生くるものの運命を脫がるゝことは出來ず、遂には死滅せねばならない。かゝる考の中に吾人は學術を評價すべき最も普遍的な見地を有するものである。と生の哲學は考へる。

然しこれが生の哲學によつて、學術の追求に就て言はれ得る事の全部ではない。吾人は最初期の理論的の人を考察する場合に於ても、生物學的見地からは、如何はしい姿と彼に思はれる諸の特色が現はれてゐる。吾人は學術なるものが曾て果して生物學的の意味で、若くあつたのであるかを疑問とせずには居られないのである。ギリシヤの文化の內で、學術は後期の所產であつて、從て生物學的には得心の行かぬこととなるのである。殊にアテンに於てはソクラテスの頃、政治的、經濟的、國民的生活の方面は既にその頂點を越えてゐた。故に時間的にはその學理的研究の至上の勝利は、ギリシヤの活力の凋落と一致してゐる。

或は二者の間には、必然的な結合があるのであらうか。ギリシヤ人が求めたような學術はその國民の沒落の徵候或は甚だしきは酵母であるのであらうか。多くの人々はこの疑問を肯定する傾向があらう。

哲學が完成に近いた時は。取りも直さず生命の姿が老いた時である、既にヘーゲルは云ふてゐる。ミネルヴァの梟は迫り來る黄昏と共に、はじめて飛翔し始める。この言葉の中には、全く近代の生哲學の方向の中に存する眞理が認められてゐるがやうに思はれる、理論的の人は既に一の凋落の型であり、民族的黄昏の徴候であつた。殊にニーチエはギリシヤ主義に就いて斯樣に主張した。ソクラテスは彼には理論的人間の原型であると同時に、又衰滅の現象たることを意味した。而して彼は又ヘーゲルの思想をヘーゲルほど味ある言方ではないが、以下の如き質問の形で云ひあらはしてゐる。「智慧は腐肉の少しの臭に刺戟される鳥の如くにして恐らく地上に現はる、ものか」と。かくして、吾人は更に純理論の價値に對する疑惑に到るが、此の場合にも亦如何に生物學的見地が規準的なるかゞ明かである。

人或はこの見地に助けらたて、遂には學術の生命の仇敵たることがその本質上必然的なるものとして理解しようと試み、而も又理論的な人々とその生活の態度とに就いてその發生當初に於て確定され得る事項に固説することとさへも出來よう、即ち嚴密なる意味の學問は人々が最早生きんがために探求したのでなく、却つて探求せんがために生きた時に始めて存在した。彼らは眞理のために眞理を求め、生は唯それが用に供せられねばならなかつた。即ち生が目的であつて手段ではない、本原的自然的狀態の顚倒を必要とするものであつて、而してこの轉化は生物學的見地に於ては甚だ危惧すべき現象である。人間は疑ふべくもなく、他の生類の系列中の一員であり、從て如何なる事情に於てもそれら一般の生命の法則より脫がるゝことは出來ない。從つて、人は自己の個人的生命を助長するか、その種族の生命を保存することに努むる場合のみ、完全なものと見做さるべきである。眞理のための努力でも生存競爭に役に立つ場合には、たしかに生活力と健全とを示す。其場合は甚だ有益でもあり厚生的でもさへあり得る。反之、生の個有の價値を理論的の人に於ける如くに、研究に押し移すことは、墮落とし亦考てはならぬ。それは重心の病的な移轉であつて、齲齒と同樣に無

意識なものである。故にギリシヤに於て學術が、その國民生活の衰頽と時を同じふしたとて、敢て異とするに足らぬのである。研究のための研究は、人をして生活に對する配慮を忘れしめ以て抵抗力を有する活力の基礎を覆へすことになる。生きんがために認識するのでなく、認識するがために生くるものは、一切の生命の法則を害ひ、從て遂には生物學的に滅亡せねばならぬ。

果して然らば年處を積めること、事實上學術の隆盛に伴へる國民的ギリシヤ主義の崩解とが學術を危惧すべきものたらしめるのみならず、學術それ自身の本質の中に、生の哲學にとつて一の生物學的禍害となる如き或るものが含まれてゐるのである。かくの如き又之に似よつた思想は今日廣く行はれてゐるから、我々は之に對して何らかの態度を執らなければならない。かくして學術が、禍害たらぬ爲めには「生きてゐる」ものであらねばならぬとは、如何なる意味であるのか、を明瞭にすることが出來よう。

此問題を考ふるに當つて、吾人は先づ第一に、生物學的知識論を夫れ自體の假定に就いて檢討する時、直ちに生じてくる一の困難から出發する。生物學的知識論は何よりも先に學究的人間に見る價値の移轉に對して氣を惡くし、その移轉のために學究的人間を呼んで「種的變化」と認める、勿論此言葉はこの際穴勝無意味ではない。生物學的見地よりすれば、己が生涯を眞理のために捧ぐる研究家なるものは、彼が單なる自然的なものより超出してゐるといふ點よりして「不自然」であると云ふことも出來る。殊に斯樣にいへよう、卽ちかゝる人間は、斯くして一の他の「種」art に一歩を踏んだのであり、從つて「種的變化」Ent-artung であると云つても差つかえないのであると。唯問題となるのは種的變化といふことが一の批難を意味していゝかどうかと云ふことである。もしさうだと信ずれば、其の人は難點に遭遇しなければならない。一體自然と非自然とは誰が區別するのであるか、又世人が文化現象を純自然的生活からの背離と

して批難する目的で以上の區別をなす場合何を根據とするのであるか。此の場合理論的の人と彼の學術とを一の「頽廢的墮落」だと攻撃するものは自然とか生命とかいふものであらうか。これは論を待たずして明かである。自然は生れながら無害なものであるから、それが單なる生命に留る限りいつまでも、學術を攻撃する如き言葉を有しないであらう。されば生きてゐる自然そのものによつては人間が頽廢せるや否やの判斷が下さるゝことはないのである。

然らば一體事實はどうなのであらうか。世人が生物學的理論に基いて、學理的研究を以て生命の敵であるとして攻撃する場合には常に、學理的な人間が語るものであり、而して彼が自己の所論を基礎附ける爲には、數世紀を通じて發展し來たつた文化の成果である諸の研究に立脚しなければならない。しかも此等の研究を「墮落」として批難すべきであるか。こゝに明かに何者か筋違の合はぬものがある。よく注意して見れば、左の事實が明かになる。生物學的知識論に於ては、眞正な種が變種に對して戰を挑んでゐるのではなくして、實は理論的人間が理論的人間を非難してゐるのだが、唯彼は己が戰ふになくてはならぬ彼自身の假定を暗に轉覆してゐるといふこと。彼は學的論證を利用しその助けを得て凡ての學術に宣戰してゐる。こゝに生と生物學とを混亂せしめゝならば、直ちに明瞭となる矛盾がある。生の哲學は結局學術の所産に他ならない。そは凡ての學術を以て生の頽廢とすることによつて徹底的には不條理に陷るのである。それによれば生命といふものはあるが、生命の「哲學」といふ如きものはあらう筈はない。斯樣な結果をば哲學的に全く滿足しうるものと我々は稱することは出來ぬ。

生物學的人生觀の假定の以上の如き無意味を避けんと欲し乍ら尙且學術を一つの財と認むることを躊躇する如きものには、もう全く學理的な問題等に頭を煩さないより他に逃路はない。かゝる人は彼自身の道を進むが善いが、その結果は學術に對して反對者としてすら立つことを止めることになる。吾々はかゝる者を更に立ち入つて考察するを要しない、

こゝではかゝる人には用はないのである。

反之、凡ての學術をば學術的根據を以つて攻撃せむと企圖するものは、一體彼が何をなしてゐるかを知らぬのか、或は、學術が自ら徹底するに依て崩解し、その結果生に必要なる學術の死滅を來すことに知識の本質の現れる事を主張せねばならぬ。

斯様な批評は、餘り早急な論斷ではないかと問ふものがあるかも知れぬが、併し兎に角生物學的知識論の上に揭げられた不條理は生物學自身が學術なる文化財が吾人に揭げる如き文化問題に就て嘴を容れる能力のなきことを證するものであつて、かゝる考を更に辿つて行く時はじめて遂には學術の生命と云ふことに就て滿足な結果を得ることが出來るであらう。

人は生物學的知識の誤謬をば、同時に當面の問題の積極的方面に導かれるように最もよく覺ることが出來る。學究者の生命が自然的有機生活體と同様唯芽生え、花咲き、實を結び、凋落し、遂に枯死するにすぎないものであると云ふならばその謬りである。

寧ろ學術は文化生活の一部その始めを遠く過去の暗黑の中に有し、大きな中斷はあつたにもせよ、現今のものに迄發展して來た文化生活の一部を形作つてゐる。斯様な歷史的過程——卽ち有機體の生命の如く、一つの周圍を描くものではなく、不斷に變化し常に新らしき形體を生み出すような過程に對しては反復する自然的生命の觀察に於て自明なる諸概念は當て嵌らぬのである。歷史的となり又自己開展をなす文化の生命に於ては殊にその所產をば、獸や草木に適用するように若いとか、老ひたとか、榮えてゐるとか、死んでゐるとかと稱し得る種類の始めもなければ終りもない。若しかゝる諸概念を此處に用ひんとすれば、先づ嚴密な限定を必要とする。さもなくば文化現象の研究に際して、かゝる概

念を以て文化現象の價値無價値を云々されない。

然らば文化財が老ひてゐるとか、若いと云ふのは何を意味するか。

生物學的概念を文化國民の如き人間の社會に移し用ひると云ふことが既に、全體としての國民の生命は之を形造る各員の生命とは本質的に異つてゐることを忘ることによつて、過誤に導くのである。

何れの一時代にも、若き個人も老ひたる個人も共に生活してゐるのであるから、一つの時代が、某々個人に就て云ふ如き意味で全體として若いとか年老ひてゐるとか云ふことは出來ない。かようなことは自明なことで、特に言立てゝ云ふ必要もないことである。從つて若い又は老ひたる文化、隆盛な又は枯死せる文化等人々の好んで用ふる用語は如何に空漠であり、且つ沒說明的であるかゞ明瞭とならう。確定的な概念を要する學術に於ては、意味の精密な說明なくしては用語丈けでは不充分である。

之にも拘はらず、吾人は種々な民族に就ても、轉用的な意味で若いとか年老ひとか云ふことが出來ないでもない。國民の生命は個人のそれと同じく、時の或範圍内に限られてゐるといふ事を示すことは出來る　吾人はその生命が決して亡びない、と主張し得る如き民族のあることを知らない。各の民族は一度發生した如く、そは復一度は滅亡しなばければならない、此場合その始めの段階を稱して若いと云ひ、後の段階を稱して老ひたと呼ぶことが出來る。これは單なる比喩ではない。殊に一國民の衰滅といふ概念は以上の意味には疑ふべくもないものであつて、そは過去の文明に於ける夥多の事例根據を有することが出來る。かくして必要な用心を持てば、民族の生死に對しても一の生物學的考察を下す試みが爲され得ると云ふ人もあらう。

右のことは正しいとして一先づ承認しやう。それが故に凡ての文化的所產に對して、老若の概念を用ふることが出

來、殊にそが年老ひた後は必ず亡滅に到らねばならぬといふような結論が生ずるであらうか。一民族の死が、その民族によつて造られた有ゆる文化的財産の亡滅を常に意味する場合にのみ當を得てゐるか、かゝる事はあり得ないことは論を待たぬ。ギリシヤ哲學とそれに依據するヨーロッパの學術的研究が、此事を最も明かに證明してゐる。ギリシヤに發した學術は、そが始めて現はれた國民の滅亡と共に滅亡してはゐない。寧ろその學術に對する勞作は、他の諸民族によつて新しい力を以て承繼され、而して此等の民族が亡び行くに當つては、更に青春の盛りにあり且つギリシヤ人の始めた仕事を續け行くべく用意してゐた諸民族があつたのである。右の様なわけであるから、若し世人が若いとか年老ひたとか云ふ言葉をば、かゝる文化財（こは學術と同様單に個々の國民に限られたものではない）を批判するための原理として用ひようとすれば、此等の言葉はその轉用的の意味に於てでも意義を喪つて了ふ。

此處に於て文化科學の一般原理なるものが現れて來る。實質的な意味に於ける文化は決してそのために働いてゐる人々と同様に考察さるべきではない、從つて假令その人物そのものは生物學的概念の下に考ふるが當然であつても、彼らの活動から生じた所の仕事に迄それを及ぼす事は出來ぬ。之に關しては學術が典型的の例を示してゐる。學術は文化財としては眞の理論的意味を有する命題より成る、而してその事實上の本質が、漸次之を理解して行つた個人や民族から切離された時、はじめて學問たる名は適はしいものとなる。若し人が何識も亦一つの「生命」を有してゐると云はうとすれば、さう云ふことも出來ようが、然しその場合の「生命」とは、有機的生命より獨立な狀態を有し、從て生物學的概念を以て律することの出來ない一つの固有な生命を云ふのである。故に學術が數千年の「齡を有してゐる」といふ事情は、若しそれがその事實上の固有の生命に關して云ふてゐる場合には、それが「生命を有してゐること」を毫も否定するものではない、この固有の生命のその衰滅が必然に結び附いてゐるような生物學的の意味にて老ゆるものではない。否若い個人や、若い民族がそのために盡す限り、その固有の生命は全く老ゆるものではない。

現今の人が理論的研究に對して抱く概念の一つはそれによつて除かれてしまう。假令人が學究的人間を以て生物學的概念の下に律すべきものであることを信ずるにしても、事實上の文化財に迄かゝる考へ方を移し行くことは出來ない。近世の生の哲學は、學術がその起源をギリシヤ人に有し、既にその國民的文化に於て亡びたる民族に屬してゐたものであるの故を以て、之を疑ふべきものであると見做すべき何等確實な根據を有するものではない。年處に長けてゐることは、此の場合その生命力如何を毫も問題たらしめるものではない。

然し乍ら、吾人は此處に更に一歩を進めて、學術の生命を論ずるに當ては、生物學的概念を以て始めることが如何に困難であるかを知らなければならぬ。學術を此世に齎した人々及び民族も、彼らが實際の文化に貢献あればあるほど、益々生物學に依つて叙説し去ることの出來ないものとなる。知識論上個人及び民族が緊要なのは、彼等が生物たる所以に依るに非ずして、學術に對して果すものに依るのである。彼らの生の意義はその非生物學的の特殊の生に依て規定される。單なる生物即ち生物學の對象としては彼らは學術に對して何ら果す者ではない。寧ろ、人は生命の價値とは異つた特殊の價値と轉じ行くことに依つて、換言すれば眞理のために文化的財たる學術を培ひ始めることに依つて、始めて學的の人間となるのである。斯く彼らは文化財固有の生に與かることによつて、他の「種」へと進み行くものである、從つてかゝる種的變化を離ずる生物學的考察は、必然に背理とならざるを得ぬ。この事實は、學術は充分に發展すると共に、自から崩解するといふ考の如何に謬であるかを證するものである。論者の陷ゐる不條理の責は全く謬れる生物學的評價にあるのである。殊にかゝる謬れる生物學的評價は、生命が本來の價値に資することに依つて本質的なものとなる場合には、注意して避けなければならぬ。

唯かゝる本來の價値よりしてのみ生命の事實上の取扱が可能であり、又その價値の助けに依つてのみ學術の生命が如何なるものであるかを確めることが出來る。

斯樣にして一度歴史的の文化財と、それがために働いた人々及び民族を評價するに正しい見地を得たならば、ギリシヤ人が學術に對して爲した偉大なる業績を、彼ら固有の文化並に後の文化に關係させて、更に正しく評價することが出來やう。

嘗て數千年の昔に於て、學術研究の隆盛が國民の沒落と時を同じうしたと云ふことに、何らかの因果的關係がありはしないかといふ事は恐らく斷言し難いことであらう。然し兎に角、その學問の興隆と國民的沒落とが同時的であるといふことは否まれないとすれば、當時にあつては知識が實際に國民的存在の生命力を害つた要因の一つであつたといふことは承認しようと思ふ。然し吾人は此の理由で、直ちに學究的人間を批難する權利を持つであらうか。此の場合にも、吾々が文化固有の生命と有機體の自然的生命とを區別すると共に、生物學的考察とは全く異る結果に到達するのである。しかし此事は必然である、何故ならばギリシヤ人はどう見ても、死んでゐるとは云へないからである。生物學的意味に於てはギリシヤの國民の生命は、全く亡びてしまつてゐることは事實であるが、反之その文化は尚ほ論議さるゝ所に却つて立派に生きてゐるのである。此國民の亡滅後數千年の今日、ヨーロッパに於ける文化の研究者は何人と雖もギリシヤを無視することは出來ない。故に吾人は彼國民に凡ての生物學的生命を遙に優越した一つの固有な生命を承認せねばなるまい。ところが、彼らは單なる生命をば、凡ての生活力から獨立して妥當なる本來價値へと轉向させた生物觀の言ふ如く「變性」し得たればこそ、今日もなほ生命を保つてゐるのである。かくして今や充分に明瞭になる。生物學的見地よりすれば衰亡と見えるものが文化科學的に見れば——生物學的な表現を用ひ得るならば——最高の開花期にあつたといふこと。

此處に謂ふ「花咲く」といふ言葉は勿論單に比喩である、蓋し文化の花は凋むことがなく、又さもなくば生物學的概念を以て律することは出來ないのである。有機體の法則はそれに對しては何らの力もないのである。凡ての生物學的生

命はその中に死の萌芽を藏するのであるが。知識の生命は亡ぶるを要しない。そは眞理に於ける生命であつて、沒時間的又は永久的と名けらるべきものである。斯くして自然的生命より個有價値への生物學的に離ぜらるゝ傾向は、實はギリシヤ人に不滅を與へた。而して此の不滅をば彼らの造つた文化的所産に附着する價値の沒時間的妥當とのみ解すべきものではなく、又實に彼等が生物學的沒落以後の各時代の歴史的文化の內に自らの特質を以てその働を續けて來たといふ點に於ても不滅と云はるべきものである。如何なる民族と雖も、數千歳の後までも生命を續けるように沒落する事にもまして望ましい事があり得やうか。近頃流行語たる「生」とか「死」とか云ふ言葉の多義曖昧なるに惑はされない先入見なき人は、確かにその然るを疑はないであらう。又ギリシヤに於て學術の隆盛が實際に於てその生物學的死を致した一原因であつたとしても、吾人は寧ろかくの如き燒死に憧がるゝ生者をば讃美するであらう。

併し以上は學術に對する攻擊を全く謂はれなきとして論破せんがために、先づその最も都合の悪い場合を想像して見たに過ぎないのである。その他の場合には、學術の隆盛と國民的生命の沒落とが時を同じうすることが、二者の因果的關係を意味するといふことは斷じて確定されない。又かような問題がどう決定されようとも、吾人は學術の生命に就て生物學的の生の哲學とは背馳する結果に達するのである。學術的人間が自然的生命を目的とするよりも手段となし、自然的生命の重心を移動せしむるが故に、學術は生命の敵であると論ずる人があつても、文化の立場よりすれば何ら痛痒を感ずるものではなく、生物學的の衰微は寧ろ最も強い文化的生命の徵象なりと見做すべきものである。

その然る所以は既に知れてゐるのであるから、生の哲學の外見上最も有力な論證をも駁擊する爲めに此の上更に立ち入つた議論を要しない。單に生物學的な意味に於て生活し生活の重心を本來の價値の世界に移し置かうとしないものは、凡ての生物と同樣晩かれ早かれ死に、然もその場合終局的に死に果てる。單なる生物として、彼は彼の時代の文化の中に、自己獨特な存在の何等の痕跡をも殘さない。故にもしもその人が全然死に果てゝ了はねばならぬといふ運命か

ら脱かれんとせば、單なる生物の系列の外に歩み出なければならないのである。それ以外に此地上に於て死を脱かるゝの道はない。此事は個々の文化に就ても又文化民族に就ても同樣である。彼らは單に活きてゐるといふことを止める時に始めて生きて文化のある限り亡ぶることのない生命に關與することが出來るのである。反之、出來得る限り生き〲せんが爲めに、生物學主義の理想に忠實に生きる人々は、間もなくかの夜──それより彼らが甞て浮び出て須臾の存在を得た所の夜と永久に沈み入つて了ふ。永續の生を欲するものは生物學的以上に活き得なければならぬ。

以上說く所は知識が如何なる意味で「生くる」のであるかを明かにするために必要である。生物學的考察は如何なる意味に於ても禁物である。人が若し生きんがためにのみ研究するとなれば、そこに衰退と滅亡──勿論生物學的生命のそれではないが、實に知識の生命のそれ──が生ずるのである。

自然的生命を認識のために用ひ、而して甞て先人が自然的生命の死によつてその事業を見棄てねばならなかつたものに就いて働き續ける人々があるならば、その場合のみ、彼等の固有の生命が向上し行くのである。如此して事業の生命は、有機的生命の凡ての變遷を超えて永續する。否、其事業は古くなればなる程益々豐富な形を具ふるに至るものである。從つて吾人はギリシヤより傳へられたる遺産を確保して行かうとするに際し、一つの死んだ又は死に果てる事柄に從事するのではないかといふ危惧の念を抱く理由は毫もないのである。

かく此文化財が有機體の自然的生命とは、全く異る事實的な固有の生命を續くるが如く、吾人知識的に働かうとする人間は學究的人間として生き、その限りに於て又自然的生命の重心を移し去らねばならぬのである。甞てギリシヤ人が單なる生命より離反し去ることによつて不滅なものとなつた如く、吾人も亦學術の固有の生に與かることによつて、一度は死なねばならぬといふ凡ての生者の運命を脫がるゝのである。故に我々の生の爲めに我々は學術を究めなければならぬ。學術の生命は吾人をして生を保たしめるものである。ところが學術は眞實の認識を實現してゐる場合に於て生き

てゐるものであつて、そのためにはギリシヤに於て始めて現はれたような種類の人間が常に必要なのである。價値の移動とその結果として生ずる研究を、生の手段より生の目的に轉向せしむる事なくば、學術なる文化財の根本的保育は思惟することが出來ぬ。果して然らば、生物學的傾向の生の哲學はもしギリシヤの人々を貶すならば、如何にしても生命に對して何ら貢献する所はない。

斯くいへばとて、吾々は數千年以前にギリシヤ人が創造したものに、何時までも止つておるべきであるといふ意味は勿論毫もない。もしも人が嘗て考へられたと同じ思想を追想してゐるだけであれば、そこから實際に於て學的生活は生じはしない。學術もまた生長し發展しつゝ始めて生くるのである。勿論此の生育發展といふ言葉も生物學的意味に考へられてはならない、殊に新しき學的生活は古き學的生活の死を豫想するものと信じてはならぬ。寧ろ學術の生命が眞理の中に生きたものであればある程又新らしき知識生活の中に充分に保存されるのであつて、その保全されたものを増加することに依つてのみ、吾々は古き生命を超へ出るのである。然しこの事は前代と何等共通してゐなかつた一つの新しい種類の學術を發見することによつて出來るのではなく、新しい材料を持ち來り、古い方法によつて新しい、即ち一層包括的な知識たらしむることによつて吾々は生きて前進するものである。

かく學術を常に生命あらしめむと努力するともいつかはその材料が盡きて了ひはせぬかといふ心配は、杞憂である。何故ならば吾人が認識すべき世界は、見渡すことの出來ぬ迄多種多樣なるものであつて、吾々に常に新らしい問題を提供するからである。故に吾人は唯眞摯に要求しさへすれば、新らしい難問に遭遇するであらう、而して之には最も強い吾人の學的生活のみがそれに打勝つことが出來る。もしも知識が一度衰頽する如きことがあればその罪は一に吾人の學的の生活力に缺くるところがあるのである。之も一時的の事である、永遠には學究的人間は決して死滅することなく、從て學術の生命は將來にも確保されてゐるのである。



歐洲問題の由來とその歸趣

ヘイデルベルグ大學正教授
東京帝國大學講師　エミール・レーデラー

一九一四年の宣戰布告は歐洲々國の國際的共同社會の解體の烽火であつた。從來と雖も、これ等の國家と政府との間には、色々の意味に於ての敵對的事實はなかつたワケではないが、その間、一種の共同社會が存在してゐた。この共同社會は實に幾世紀に渉る傳統を有した。即ちその精細なる外交關係の紐帶や、經濟力、學者、藝術家等の相互の接近や若しくは、かの一般に承認されてゐた金貨本位の幣制と、殆んど完全に近いと思はれた鐵道網とにその表現を見た自由なる國際的交通やの上に建てられたものであつて、歐洲の内部より之を見れば、この制度は永久に動搖すること、絕え

てなかるべしとさへ見へたのである。而して、國民の大部分は、――たゞに公侯、外交官又はやんごとなき貴族のみならず、廣い範圍に於ての市民、又、勞働者の階級の地位が向上してより後は、所謂無產階級者中の上級に屬するものまでもが――別に旅券の面倒もなく、官廳のうるさい干涉もなく、自由に、この廣大なる地域を旅することが出來たのである。まことに、戰前この意味に於ての歐洲があつたのである、それはたゞに一概念としてゞはなく、一現實としてあつたのである。――而してアジア人の目には、或はほんの小つぽけなものとも見えるであらうやうな、その地表に、かの一種の自由にして雄大なる生活が開展せられ、そこに一個の現實の文化團體なるものが成立してゐたのであつた。もとより今日に至るまでなほ、この文化團體は、その究極の藝術的表現を有するまでには至らなかつたけれども、之等の諸國中最も非民主的な國家に於てすら、一種の自由の雰圍氣が作られ、その內に資本主義的經濟生活の無味乾燥なる形式主義を脫却しやうとする。共同的聯帶的一大新精神が、躍動しつゝあるのを覺えたのである。

今や、この歐洲が壞滅した。なるほど歐洲戰爭前に於ても、有識者にして、――特に獨逸に於て――この現世的滿足、この生活の安易に對して懷疑の眼を見はり、やがて一般的意氣の銷沈、反撥力の減退、國民の墮落が來るべしと爲し、勞働階級のあまりに享樂的であり、有產階級のあまりに飽滿的なるとを憂へたものは鮮くはなかつた。その意は、國民があまりに周到なる保護の下に棲息し、あまりに合理化されたる、生活を爲すに於ては、國民のエネルギーは消耗し、責任感は減却するであらうと云ふのである。けれどもこの見解は全然虛僞にして欺瞞的のものであつたことは事實の前に之を拒むことは出來ないのであつて、事實は却て、生活の安易が精神的心靈的活力の自由の發展の基礎條件であつた事を示すのである。而も上述の危險なる見解が、この多面的なる文明とこの秩序整然たる世界とに眩惑され、徒

にローマンチツクなる氣分にしたることのみを知つて、その反面たる『ローマンチツクなる不安』に累を致すことをしやうとしても見なかつた人々の所産であつたことは、まことに止むを得ざることとである。

けれども歐洲の國民全體は、こんな思想に禍されてゐたのではない。彼等は、たゞ、平和に、勤勉に、ひたすらに相互保助と隣保相倚の一大系統中に身を置いて、各その生をいそしみ來つたものに過ぎない。然るに今やこの系統は一朝にして破れ、全歐洲は如何になり行くか全く不明となつた。今より十年前、世界文化の中樞を以てほこりし歐洲は、今日、偉大なるバルカン半島たるの觀がある。如何にしてこうなつたか？その意義は如何にその行く先は、果していづく？

今更、世界戰爭の原因を論ずるは、全く詮なきことであらう、歐洲と云ふ管絃樂の一團中、どの國が、他の國々よりも、ヨリ多く戰爭の責任を負ふべきかを考ふるなどは、全く詮なきことであらう。何となれば、歐洲の凡ての國家は、『抽象的權力國家』であつたが故に、（スイス、オランダ、と云ふやうな小さい、中立國を除けば、）どの國家も、どの國家も皆、戰爭と云ふものを、いつの日かは避けることの出來ない一個の運命と見てゐた位ではなく　否寧ろ、それを政治の正常的手段、即ち國家的目的の遂行に缺ぐべからざるものであるとさへ考へてゐたからである。從つて外交の要諦は、如何にして、戰爭をさけるかと云ふことよりは、寧ろ如何にして、自國民として、その戰爭を防禦的戰爭なりと自覺せしめ、進んで國防の事に當らしめやうかと云ふことにあつたからである。（註一）歐洲の國家間に於いては、それでなくとも權力の爭奪は不可避のことに屬する、況んやこのやうな思想を以てして、奚んぞ戰爭を永久に避け得やう、たゞ若し、內面斷じて戰爭はしまいとのかたき決心をもち、外面それと他に洩すやうなヘマをやらぬ極めて卓越した外

交を有する國家があり得たとしたならば、斯の如き狀況の下に於ても、猶且つ或はよく平和の政策を遂行し得たかも知れぬ、とは云へ全歐洲に、そんな國は一つもなかつた事はたしかである。

（註一）　この種の思想を洞察せる點に於ても、亦この思想に淵源せる歐洲諸國の外交振を記述せる點に於ても、讀むべき價ある書はオーストリアの歷史家 Heitaich Friedjung の „Das Zeitalter des Imperialismus" である。フリドリツヒユングその人はこの根本思想に對して特に論難的態度を採つてゐない爲めに、吾々は特にこの書を面白しと感ずるのである。

よくこう云ふ說明がある。曰く、歐洲の外交はもとより本來平和の爲めにあつたのだが、たゞ經濟的利害關係にせまられて遂に戰爭を始めてしまつたのに過ぎないと、けれども、戰前に於ける歐洲の經濟上の利害關係なるものを、少しく精密に分析して見ると、この主張が意味を爲さないことが、スグわかる。抑〻世界戰爭に於て決定せられるべきものは、たゞ歐洲の政治問題の全部的總體でなければならなかつた。而してその政治問題はいづれも數世紀に涉り、遠く現代の產業的發達以前に根源を有するものである。即ち、從來國民の平和的要求に從ひ、又特に政府の配慮によつて、不幸なる戰爭を見ずして、時に或は湖縫的に解決され來つた問題は、今この戰爭によつて、凡て決定的に『解決』せられなければならなかつたのである。例へば、所謂オーストリア問題なるものは、オーストリア、ハンガリー王國内に於ける民族の民族的自覺に基礎を有し之等の民族が如何にして各その政治的存在を保持せんかとの問題なるが故に、その起源の古くその解決の安易でない問題であることは、歐洲の政治史を知る者の皆首肯する所であらう。ポーランド人及其の他ロシアの邊境諸國民の問題も大體同樣の性質を有し、更にバルカン問題、トルコ問題、アルサス、ロレーン問題等、皆等しく重大なる問題である、最後に、歐洲各國の權勢が如何に擴大してても、英國は、いつまでも、その海上の優越權を主

張し得るかと云ふ問題――その他なほ植民地の問題、――など、いづれもみな、數百年來の懸案であつて、相互意見の錯綜せる問題である。而して戰爭は凡て之等の問題を解決しなければならなかつたのである。

けれども、近世の工業中心の世界に於ては、國際的爭議を戰爭によつて解決しやうと云ふか如きは、全然不可能のことに屬する。この事實は、此次の戰爭が、何等問題の解決に資する所はなくして、却つて、新たにより多くの問題を招徠したと云ふことだけによつても明白である。即ちこの戰爭は、たつた一つの問題をも徹底的に解決しなかつたのみならず、却つて無數の新しき對立的勢力を作り、爲めに新問題を無數につけ加へた。否それのみではない、この戰爭は、各國内に於ける政治的實力關係を徹底的に改造し、從來の舊勢力を解體し、それに代へるに新勢力を以てした。而してこの新政治的勢力こそは、戰時下に於ける社會的勢力移動の表現であつて、歐洲の政治に特に新基調を與へんとするところのものなのである。

吾々は、今ロシアを除外するも、政治の主力は既に社會の新階級に推移したことを見ることが出來る、一九一四年前までは、歐洲列强中何處に行くも、貴族の出身である外交官、軍人、及び王族の輩が國家内の一大勢力であつた。故に、ヨーロッパの特色そのものは云ふまでげなく實業的勢力に由來したけれども、戰前までは政治上に於ける封建的諸侯の勢力なるものは、決して之を無視することを得なかつたのである。然るに戰爭は、――歐、米、各その社會構成に應じて所謂『工業的戰爭』となり、その工業的戰爭が益大規模となるに從つて、戰場に於て勝利と爲るものは經濟的見地よりして完備した組織を有する國家であることは當然の理であるが故に戰爭が工業的戰爭となるに從つて、基礎工業と軍事

工業とは、病的と思はれる程度を以て發達せざるを得なかつた。曾つてナポレオン戰爭のときには、纖維工業がその戰爭の利益の大部分を奪取し得たやうに、今回は、石炭、鐵及鋼鐵の産業特に軍需品の工場が、之を收得した、就中その指導的地位を確得し得た戰爭材料の生産者（この中金屬加工業の第一位に位することは云ふまでもない）の利益は甚大なるものであつた。之と同時に勞働力の不足は勞働者の地位を高め勞働組合の勢力をも大に增進せしめた。そのため戰時に於ける工業家と勞働者とは、戰爭に對して決定的なる二大工業勢力となつたのであつて、之實に過去の歷史に其の例を見ざる新現象である。

而してその結果は資本の集積と、生産過程の集中と、生産力の增加と、資本の政治的侵略とであつた。かくして戰爭の終る頃には、孰れの國に於ても、たゞにその國を料理する人々の顏ぶれが變つたのみならず、富の分配、社會的生産物に對する各人の分前も變り、これにつれて、全社會組織も亦根本的に變つてしまつたのである。農業者は一般には富裕となつたけれども、國全體の生産力に於ては可なり減退した國も鮮くない。又中間階級と、レンテイエーと、下級官吏とは、その財産を喰ひ込み、その購買力を失つた、此間製品工業家は益々その地位を高めんとあせり基礎工業者と海運業者とは、——相對的意味に於てばかりでなく絕對的にも——益その經濟的重要さを加へることが出來た。（註二）

（註二）拙著 Deutschlands Wiederaufbau und Neueingliederung in die Weltwirtschaft durch Sozialisierung. Tübingen (J. C. B. Mohr) 1921 參照、

吾々は、この事實を、早くも戰時中、工業と軍用品の供給との關係に發見した。いやしくも戰爭に從事した國々に於ては、諸種の工業は、一大生産組織の內に集約せられ、その代表者と參謀本部との間では、自ら密接なる要點が生じ

た。而して、大仕掛に武器及軍需品を製造し、所謂材料戰を强行するためには、工業家の協力、とくに有力なる工業家の協力は必要缺くべからざるものであるから、その結果として、之等有力なる實業家は、軍用品の供給機關を通じ、政治上にも決定的に有力なる勢力とならざるを得なかつたのである。戰線を擴張するにも、新攻勢的計劃を樹つるにも、たよりとなるものは、軍事工業の供給能力である。而もこの供給能力を增加せんとせば、利潤を增加せねばならず、且つまた賃銀の加給によつて勞働者の歡心を買はねばならぬ。この結果は、いづれの國に於ても、企業者及勞働者をして、本來の意義に於ける『戰時成金』(クリーグスゲヴインナー)とならしめたのであつて、これ以外の國民は、その儲けたもの丶總てを、或は租稅として或は通貨膨脹の形式を通じて、皆彼等にさらわれてしまつたのである。

この傾向は、戰後も、しばらくの間繼續した。即ち休戰直後一年有半の前古未曾有の好景氣は、各國の通貨を膨脹せしめ、通貨の膨脹は更に實質的財產の集中を起し、之によつて所有關係に於ける勢力の社會的變化を齎した。之實に好況時代一過後に於ける相當長期間に吾々の目擊したる現象である。かくして、この時代を通じ所謂基礎工業は、その絕對的なる支配的地位を確保するに至つたのである。幾多の製品工業中にも、この好況時代を通じて巨利を占めたるものなきに非ずと雖も、一般的に之を云へば、石炭、鐵、鋼鐵等の生產業者殊に金屬加工工業の類は、急激異常の發達をなし、この肥滿部分は、(その獨占的組織により)歐米の工業的全體の構造に對し却て不權衡のものとなり、その資本價値を不當に高めてしまつたのである。こゝに於てか、彼等はその生產物の價格を高め以て、彼等の一旦獲得した高い利廻を失ふまいとし、戰後生產力の減退せる國々に對してすら高價なる貨物を提供したのであるが、斯の如き高價なる商品を、長き期間高價のまゝで買ひつゞけて行くことは、他の工業者の能力の許す所ではない。吾々は、この資本の過

大に見積る」と云ふ事實に、戰後の世界的經濟危機の眞因を求めやうとするものであつて、平和條約の結ばれた今日、各國が猶ほ軍備に汲々たる所以も亦、各その戰爭によつて得たる配當利益を維持しやうと云ふ希望に支配されてゐるものと解して然るべきである。（註三）

（註三）　鋼鐵の生産額の發達の狀況は次のやうである。

	アメリカ	フランス	ドイツ	イギリス
一九一三	三一、三〇〇	四、六〇〇	一七、五〇〇	七、六六〇
一九一九	四五、〇〇〇	一五、〇〇〇	七、〇〇〇	一二、〇〇〇

この外小國の生産を合せて計算すると一九一三年——一九一九年の生産の增加率は約三三%と計上されてゐる。（European Reconstruction, Manchester guardign Commercial. No. 15）而して特に歐洲の生産者にとつて脅威の種となりつゝある事はアジア（例へばインド）の生産增加である。蓋し、輸出販路の縮少に外ならぬ。而して右の生産增加は、好景氣の反映とも見るべく、從つて今や再び之を豫知することが出來ぬ。——一九二〇年以後に於ては基礎工業全體の生産額は減退を免かれなかつた。その故は、需要の減退と、獨占的地位を享有する企業家の無遠慮な生産制限とにある。けれども生産能力が增加してゐることはその生産費の減少せる事實によつて明白であつて、内外いづれかの販路を求むることと急である。而してその最善の販路は、軍備競爭を激甚ならしめることにある。

經濟力の集中と、歐洲に於ける既製品工業の全基礎の異常に急激なる發達とは、遂に政治的勢力の變化となつて表はれた。乃ち彼等は基礎工業の工場内の組織を綜合理化し（European Reconstruction Manchester guardian Commercial. とくにその第七號と見よ）その統一的管理をなし、且つその製品を他の工業製品又は農産物よりも高價に販賣するの道を講ずることを忘れなかつた。かくの如くにして、彼等が餘分の利益を獲得した所以のものは、全く他工業の利益を侵害した結果によるものである。又、國際的競爭による販路の喪失と通貨の購買力の減少による損失を償ふ爲めに

は、彼等は〻の生産物の販路を擴張するのみを以て滿足せず、進んでその生産物を使つて出來上つた既成商品の販路を擴張することをも忘れなかつた。けれどもこの所謂既成商品と云ふのは、軍用品に外ならぬのであるから、彼等の要望するものは、國際的規模を有する大軍事工業であつた、何となればこの種の工業にして始めて彼等の生産能力一杯の生産物を消化することを得、且つこの種の大工業にして始めて、彼等をして相當の利益を以て事業を經營せしむるに足るからである。歐洲の工業家は　斯のやうな地位に立つて、平和以來日に混沌を重ね來れる歐洲の政局にその手腕を揮ふべき運命に際會したのである。

過去數年間の政局の發展に對して、之等石炭、鐵、鋼鐵、石油、航海業者の類が、どの位の程度まで現實に關係したかを、正確に示すことは、いまゝでのところ、無論一の可能ではない。だからと云つて、近時の政局の發展が、之等經濟上の諸團體の利害關係と最も密接なる關聯を有つてゐる　の事實は之を疑ふことが出來ぬのである。否かくの如くにして、實業家が政治上の決定的勢力となれる結果、歐洲の政治生活は根本的に變化したと云ふことが出來る。云ふまでもなく、今日までの歐洲の政治的狀況を以て單に實業家政治の結晶であると云ふのは中らぬであらうけれども、吾々は、重要なる政治問題について、實業家と政治との關聯が、從來よりも遙に濃厚となつて來たと云ふ事實を一々指摘することが出來るのである。蓋し、今や軍國的政治の最重問題は、如何にして、國家の戰鬪力を强めるに足る工業地域を獲得すべきかにある。往時に於ては、政治の目的は、富裕なる邦國又は農耕上有望なる土地を攻略し、以て『安全なる境界線』を得るとにあつたが如く、現時に於ては、工業地帶、鑛山、鎔鑛爐、機械工場の類が、國際的政治の目標となるのである。かくの如くにして、國際政治のあらゆる問題も、歐洲列强間の同盟又は反目の事實も、今日は――十年前はそ

れほどだとは云へなかつたのに――主として、或は時としては全然、産業的發展及び産業的競爭の表現として、之を觀察することによつて始めてその眞相を得ると云ふワケなのである。

第一　英佛の關係

フランスは、新にアルサス、ロレーンを回復し、又ルクサンブルをベルギーとに對して密接なる關係をもつやうになつた結果、歐洲中原第一の工業地國となつた、戰爭前と比較して、全く面目を一新するに至つたその上にラインランド全部の支配權を得たから、中歐、東歐に於ても工業上極めて重要なる地位を獲得した。加之、その勢力をのべて、友邦チエツコ、スロバキヤ及ポーランドをして、東歐の石炭及鐵工業の要地を領有せしめた。而して最後に、ルールの炭礦地方を占有して、歐洲最大の鐵及石炭の生産力（しばらくロシアの將來の能力を度外視して）をその掌中に收めた。かくの如くにして、今やフランスは全歐洲を制御すると云ふことが出來る、何となれば、フランスは、今日の戰術上戰爭の遂行に最も重要なる而も唯一の重要なる基礎をもつものと云ひ得るからである。而してすべてこれ等の地方を通じて、フランスの資本が決定的勢力となつたこと、少くともフランス政府の意向によれば、それが將來決定的勢力を有すべきことは疑ふことが出來ない。

戰前に於ける獨英の衝突原因を（私はこの見解が誤謬であつたことを確信するものであるが）獨逸産業の急激なる發達が英國を脅かすの事實に歸する論者は、今日フランスが全歐洲を領有すると云ふ事實を見ては、直ちに英佛同盟が事實上に於て死滅したことを意味すと爲すであらう。まことに、フランスが事實上歐洲の鐵、石炭の生産を完全に支配するならば、歐洲各國如何なる國と雖もフランスの御意に敵對し得るハズがないのであるから、フランスは、歐洲大陸の覇權を握り得たのである。こゝに於て英國に與へられたる。唯一の道は、或は植民地に於て若しくは北米に於て、その

補償を求めることであらうが――それ以外歐洲の內部に於ては、多少とも政治的勢力を有する國家の援助を豫期することは、全く不可能である。この狀勢當然の結果は、全歐洲の資本家は、一團となり凡てフランスの勢力範圍に屬すると云ふことになる。たゞ、獨逸の資本團の配下にあるものについては、フランスの勢力下にあるとは云へないけれども、フランスは如何にかして之をも――少くとも西方獨乙をも――この一大勢力圈の內に包含しやうとしてゐる。フランスのフランが下ると云ふことは、決してこの狀勢開展のさまたげとなるものではない、否寧ろこの事實は通貨膨脹を意味し、フランスの資本家をして外國の事業に手を出させるに必要なる資金を得せしめる所以とのみなるのである。云ふまでもなく、歐洲の政局が亂れゝば、たとへ直接戰爭にはならなくとも、工業家はそれによつて仕事の機會を得、その利潤は增加する。而してかくの如くにして出來上つたこの歐洲大陸の資本家の一大聯合は、イギリスの資本家にとつてとくに重大なる脅威である。その輸出は爲めに阻害さるゝ虞があるのみならず、その植民地(例へばインド)の輸出すらも大なる障害を受けるやうなことにならぬとも限らない。

第二　佛獨の關係

フランスは一體何を欲するのであらう？、フランスの政治はしばしば動搖せるが如く見ゆるけれども、その目的は當に一つである。卽ちその目的は、主として政治的であつて、たゞ間接にのみ經濟的であると云へよう。さて、フランスの政策を決定するに際して、今日の工業的國家より巨額の償金を絞りとる手段として、權力を用ふることは有効なる方法はないと云ふ事が考へられたかどうかは疑問であらうけれども、今日の國際關係に於ては、債務の支拂は、過去の如何なる時代に於ける場合よりも、ヨリ多く債務者の意志に係るものであると云ふ事實は、之を動かすことが出來ぬ。昔は戰爭のあとで直接に債務をとりたてることが出來たが、それはたゞ農業國に於て始めて出來ることに過ぎない。こ

の故にフランスと雖も、獨逸に對して武斷的政策をとれば必ず反作用を起すが故に、高壓政策によつて、獨逸の賠償能力を增加し得ない位のことは必ず之を豫期せざるを得なかつたであらう。この事實は、フランスがいよいよ高壓政策をとつて見た結果は、一歩は一歩より、たゞ益歩をすゝめて占領地域を擴大する外に道なく、ことにルール占領後に於ては、混迷錯亂拾收する所を知らざる有樣となつた現前の事實によつても明らかに證明せられた處である。こゝに於て、フランスの意圖を計るものは、フランスは當初よりこの『結果』を豫期しつゝ、これによつて、ルールを永久に、若しくは極めて長期に涉つて占領せんと企てたものとなすのは極めて當然也と云はねばならない。まことに、この高壓政策が獨逸の愛國的運動をつよめ、フランスに對する暴力的反抗の氣勢を高かめたのであつて、それが又フランスをして占領地域を擴大せしむるの原因となつたのであつた。この意味に於て、吾々は、フランスの政策が、甚『有效』てあつた事を認めざるを得ぬのであつて、卽ち一年來獨逸としてその賠償金の支拂をゼロにし、獨逸が軍事的に降伏したる今日、尙ほ、佛獨の間事實上の戰爭關係が繼續するの實狀を齎したのは凡てこの政策の結果である、又一方フランスが獨逸の工業的基礎を奪取するためには、武力を用ひることは正當にして且つ已むを得ざることなりと信ずるのも亦この狀勢とこの理由とによるのである。惟ふにフランスはかく信じたであらう曰く、ライン を取り、ルールを占領すれば、長きに涉つてドイツとフランスとの工業が結びつくに違ひない、それが結びつけば、フランスの資本家は、指導的地位を占め得る可能性があると。國民の多數は勿論政治家と云へども或はこの點までは深く考へてやつたのではないと云ふかも知らぬ、けれども事實についてフランスのやつたことの意義を求むれば、正に之より外に解釋はあり得ないのである。

吾々は、この點に關して、獨逸工業的資本家のやつた通貨政策の失敗を非難せざるを得ない。（工業的資本家の通貨政

策と云ふやうな言葉を用ひねばならぬ事實を注意したまへ、今日に於ては、最早政府は、自由に政府の思ふがまゝに通貨政策を行ふのでなくして、種々の利益關係者、とくに、工業的資本家は思ふまゝにその意思を行ふことが出來るからである。)獨逸政府のルール政策は獨逸の通貨を無限に膨脹せしめた、又獨逸の政府は、租税を起してルール戰の經費を調達するにはあまりに無力であり、且つ問題を(その經濟的崩壞の前に)政治的に解決するの能力をも有しなかつた。斯の如くにして、有史以來他に比倫と見ることの出來ない紙幣の洪水が一九二三年と共に獨逸を見舞ふたのである。蓋し一九二三年前に於ける紙幣の濫發は、國家財政の不足と、賠償金の支拂とに由來せるものであるが今や更に重大なる一因を加へ、政府はルールの工業を保護して、何等生産の事業に從事せざる勞働者に巨額の賃銀を支拂はざると得ざることゝなつたからである。又ルールの石炭の不足を補ふために巨額の石炭を英國より輸入し、政府は之に對して、爲替資金を調達せざるを得なかつたからである。而して、この爲替資金に對して支拂ひ得る唯一の途は、紙幣の印刷器の外何物でもあり得なかつたからである。而も國家のこの異常なる財政的必要を滿すために一厘の租税收入を得るの途のすら講ぜられなかつた。否、それとは反對に、將に第三の紙幣濫發の原因がこゝに胚胎した。即ち帝國銀行は、國内に於ては通貨下落の趨勢極めて顯著なるによらず、國外に於ては爲替相場の狀勢日に非なるに拘らず、極めて低率を以て盛に資本家に信用を與へた。本年一月に至り帝國銀行は、始めてその利率を年三割に上げたけれども、(紙マルクの貸出に對し)當時、既に市場の金利は七割以上であつて、而も何人も之を得るに困難を感じたほどであつたから、帝國銀行と密接の關係をもつた大きい商會だけは、自由にその手形を帝國銀行に割引かしめ、商會自身の信用を充實し、その得たる信用の値に一部を以て帝國銀行の債務を果たし、或は又、內地の事業は紙マルクを以て經營し、外國で儲けたものは凡て外國の爲替資金として又は投資として之を海外に保持することが出來たのである。かくして國家的紙幣濫發に加ふ

るに、私的濫發を以てし、マルクを九天より直下せしめたのであるが、本年の八月に至つては、マルクはその暴落の極に達し、全國民も、帝國銀行自身も、マルクはほんの一時的の支拂要具たる効用をすら有たないものであると自白せざるを得ざるに至つたのである。これよりして（法律上の制限に牴觸せざる限り）國內一切の取引は金マルク本位若しくは金計算本位となり、一般物價も金勘定となり、常に計算數字、若しくは指數を基礎として、紙マルクの計算をすると云ふことになつた。この指數は、爲替相場、卸賣相場、地方の騰貴率指數等を基礎に算出せられるのである。然らば、この金計算法は紙幣濫發の弊をふせぐに足るかと云ふに、それは反對に、むしろ濫發を促進するの効果を有するものである。何となれば、かうなれば、最早濫發稅を負担する國民階級なるものが存在を失ふからである。そこで國民は毎日計算をし直す不便と、急激に變化するバルータの動搖よりのがれやうと、『土地マルク』（ボーデン）『不動單位』（ウエルトベイテンダイゲ、ウエルンゲ）『純金單位』（フインゴールドヴエールルンゲ）など色々のものを試みやうとしたが、之等一切の『試み』は、國庫の收支が到底相出合ふ見込のない以上、ことごとく失敗たるを免れない。從つて、ドイツの工業と、ドイツの經濟生活は、悲劇的團圓をはてしもなくめぐるの外はない、何となれば、マルクは最早價値の尺度ではないから、それが如何にならうと誰だつて知つたことではない、物は手ばなしてはたらぬから、誰だつて一文でも國庫に稅を拂ふのはイヤだ、……かくして、自力によりて生活する力ある經濟體の基礎は、徹底的に破壞されつくされんとするのである。然り、今日ドイツが體驗しつゝある此の經濟的の破滅現象は、通貨膨脹の形を採れる一大溶解作用であつて、この作用の前には如何に堅固に作られたる組織もその存在の危險を感ぜざるを得ないのである。

フランスの政治の目的の遂行上必要とした心理的動機をさぐれば、右の如くになる、無論この目的を達するためにフランスは、もつと違つた方法を採り得たか、知らぬが。いづれにするも結果は同一であつて、今日フランスが兎も角も

其の目的を達することが出來たことを疑ふワケには行かぬ。而して、通貨問題を中心にして、經濟觀としてのドイツが沒落するとすれば、ドイツ國內の小經濟區域は、かの賠償の重荷よりのがれ、かの陰暗なる過去の戰禍を忘れんが爲めに、本國と分離しやうとするやうなことが起らないとも限らない。かくの如き不祥事が、獨逸多數國民を脅すことがないやうにとは、何人も希ふ所であるけれども、今や獨逸國內、直接間接にフランスより援助を受けてゐる『國民的』運動は可なりに猛烈であつて、或はドイツの分裂の機運なきにしもあらざるの事實を認めざるを得ない。而して、この思想の根帶は、ドイツにして一度『國民的小天地』を出で、今日の小獨逸をすてれば、ファッシスト的組織の下に 光輝燦爛たる一大强國新獨逸が直ちに成ると云ふ幻覺である。たゞドイツの內部に於て獨立して立つて行くことの出來るやうな國家を作ることは、事實上困難であつて、或は到底不可能のことではあるが、悲しいかなラインランド及びルール地方については必ずしもさうでない。と云ふのは、これ等の他方の資本家は『止むを得ざる必要』の下に經濟的獨立を企て、新貨幣單位の採用を實行 ないとも限らぬからである。かうなつたならば、その先はどうなるであらうか。ドイツの他の部分は、果してその存在をつゞけ得るや、よしつゞけ得るとしても、如何にしてそれをつゞけて行くか、問題は愈重大にして容易に解答を許さない。此の場合、ドイツの運命は、まさにオーストリアのそれである。國際聯盟は、果してオーストリヤに對して採つた方法を採るに至るであらうか、それとも、いつまでも ドイツは昔のまゝのドイツであつて、うかうかそれを助けると、復再び手をかむやうな處があると云ふ昔ながらの夢の假定とそのまゝに安眠をつゞけるであらうか。

以上の如く觀じ來つた、吾々は、今日フランスの政治的目的がほゞ成就の日に近けることを知る。即ちフランスは賠償金をとる目的を達することは出來なかつた、否少くとも。それを減殺せざるを得なかつた。それかと云つて、又ドイ

ツを略取したと云ふのでもない。たゞ、獨逸の經濟力の決定的部分を自己の用に共し、若しくは少くとも、之を世界經濟より除斥することにほゞ成效したと云ふのである。若し夫れ、ドイツに於ける國民的煽動が効を奏して、ドイツの國內に內亂が勃發するやうなことが起つたとするならば、それも亦、フランスの政策の一結果と見るべく、ヴルト內閣以來、その內政の秩序恢復に全力をそゝぎつゝあつた民主國獨逸に、暫時の休息を與へまいと云ふフランス政策の勝利である。然し問題はこれで終るのではない。抑フランスがドイツを制壓すると云ふことは何を意味するのか?。吾等は進んで歐洲諸國の政治的狀況、特にその新興國の狀況を見やうとする。

第三　中歐の邊境諸國、

中歐邊境の諸國、即ち小協商に屬する諸國、及ロシアの西の國境にある諸國、とくに、チエコスロバキヤ及ポーランドは、今や歐洲に於けるフランスの步卒である。而してこれ等の國々はその領土の大さと、その組織とに於て、(人口の中心をなす純正の國家的民族に對立して『小數者』(ミンデルハイト)と云ふが質は可なりに大きい民族の存在する)その形態は、正に、西歐に於けるフランスのそれのやうである。戰後軍國的代辯者の勢力が極めて强かつた當時に於て、獨逸の領土を併合する案を公然樹立しなかつたことは、クレマンソーの智者たる所以であつて、彼は敢然として、一時的の占領案を作り之によつて他日、占領を實行する領地を存置したのである。然れども東歐に於ける之等の小軍國は今や相集つて不正者の同盟を作り、ドイツとロシアとの接近を制壓し、或は、時にドイツを威嚇しやうとするの形勢である。今これ等の國に於ける政治的權力の基礎を見れば、その成立の由來より考ふるも、その攻勢的態度に鑑みるも、又その軍備の强大なる點より云ふも、其の背後に偉大なる工業體の存することを疑ふことが出來ない。故にこれ等諸國の政府は當然資本家的であつて、その經濟政策は第一に於て基礎工業家的工業政策ならざるを得ない。而してその偉大なる軍備は直ちに

かの實業家聯合の經濟力を益强大ならしめるのであつた、彼等は更にその强大を利用して、復た、その生産國の販路維持に必要なる心理的條件を作り出すのである。之を要するに今日の歐洲は、ドイツを制壓する爲めに作り出された經濟的並に政治的一大合同力の制御の下に立てるものと云ふことが出來る。之果して、有効にして建設的なる政策と名づくべきものであらうか？歐洲の平靜なる狀態はかくの如くにして遂に望み得べしと云ふか？

四　ロシヤ問題

けれども、凡て之等の背面にはロシア問題がある。イギリスは、ロシアと手をとることが出來るであらうか？或はまた、フランスは、その經濟的障害を排し、その從來の主義上感情上の反目をすてゝロシアの心を奪い得るであらうか？フランスがこの目的を有すること、又それを有なければならぬことには疑があり得ない。何となれば、フランスは之によつてイギリスに對して最も有効なる强威的勢力を獲得し得るからである。フランスは之によつて軍事的威力を以て世界的通路を壓し、イギリスのアジアの植民地を壓迫することが出來るからである。日本までも延びた長いかの一線は、フランスに對しては、イギリスを世界に孤立せしめ。それを昔のまゝの英米の文化圏内におしこめる可能性、否わりよくば自分の歐亞兩洲を支配すべき可能性をすら示唆するものに相違ない。

若しフランスの政治にして何等かの意味を有するとするならば、――而してフランスの政治を採る人々は、どこまでも練達の士であり深慮の人々である――その意味は、全歐の資本家的勢力の全體を經濟的に表現すると云ふのに外ならぬ、而もそれは自由なる團體ではなく、主として列國相互の服從關係を基礎とする列國の聯合の壓力によつて出來た團體を作らうと云ふのである。けれどもこの政策は、果して、現代の實際的勢力を計量して立たられたものでありやは問

題である。

戰後に於ける歐洲諸國の立國の大本は、戰前のそれに比してやゝ『意義ある』ものであることは疑ない。戰前に於ける歐洲の政治の目的はなるだけ大きい民族國家を作ることにあつた。特に十九世紀の中葉以後に於てはこの原理は、諸國の政策の基調となり有意的に遂行せられたことは疑ない事實である。特にドイツ統一イタリの統一、トルコの壞滅、ことにオーストリア、ハンガリーの聯合の危殆等の事實は一國家は一民族の範圍に應じて之を作ることが理想的也との思想を作り、民族國家は同質的であるが故に國民の國家意思決定上政治的に有利也と考へさせてゐたのである。けれどもこの原則が實際に實現したのは、西歐に於てのみであつて、それも決して純粹なる形に於てゞはなかつた。オーストリア、ハンガリー、ロシア、バルカン等の諸國に於ては、民族と國家との間に色々と相交錯し相矛盾した關係が出來てゐた。

この矛盾衝突は如何にするも之をさけることの出來ぬ性質のものであつた、と云ふのは、東歐に於ける民族は犬牙錯綜して棲息してゐるが故に、民族國家なるものを作ることは事實上不可能であつて、多數の國家より成り、而も各の國が完全なる自治を有するやうな『數民族の聯合國家』の成立のみが可能であつたのである。然るに世界戰爭が作り出したものは　この種類の國家ではなく、それが國家間のデモクラシーの名に於てなされたにあらず——これとは全然反對のものであつたのである，即ち平和條約に於て、團體性を與へられたものは、民族的勢力ではなく、經濟的勢力であり、而も、戰爭によつて益强大となり來れる經濟的勢力であつたのである。斯くの如くにして軍事工業そのものが、近代國家の構成原理となつたまでの道は、その第一步よりして常に政治的壓迫主義であつたと云へる。かくの如き制度は

果して、安全であらうか、それとも亦その辿りつゝある道を變更さすに足るべき力に衝突することがあるであらうか。

昔の封建的勢力は資本家的新勢力、ことに基礎工業の爲めに解體せられた。而して昔の封建諸候は戰爭に勝てば、敵の所有してゐた土地の收益を手に收めることを忘れなかつたが如く、現代の戰勝者は工業的企業を自分等の手に收める目的を達した。たゞ彼等は、この目的をさへぎるべき二つの困難に遭遇した、その一は私有財產にして、他の一は勞働者の國籍之である。けれども私有財產は平和條約に於ては必ずしも尊重されなかつた。獨逸人たる所有權者は（例へば、アルサス、ロレーン、ルクサンブール、ザール等に於て）或は差押られ或は沒收された。又フランスの資本が投入せる處、若しくは、ドイツの資本が『國有化』されたところに於ては到るところこれと同樣のことが起つた。この結果としてフランスの資本は、その分派にして而もその統制の下にたつ業と通じて、（その勢力の大きいベルギーを除くも、）アルサスロレーン、ルクサンブール、ザールは無論、ポーランド、チエクスロバキヤ、オーストリア、ハンガリー及バルカン諸國に於て極めて絶大なる地位を獲得した。云ふまでもなくこの巨大なる聯合的勢力に對して、それに必要なる經濟的條件が常に有利に開展したと云へない、――蓋しかの重大なる世界的經濟危機のために、――けれども、之がまた大に軍備擴張を繼續せしめ、彼等の工場を益擴張せしめ得る動機となつたことも亦疑ふことが出來ない。若しそれ獨逸の從來の工場所有者に至つては、平和條約の規定に從ひ、獨逸帝國そのものとは手を切り、それによつて得たる金と、通貨膨脹によつて得たる利益とを合せて、之と事業の擴張組織の改善補充工場の買占に用ひ、以てその所謂『外延的聯合』を完成したのであつて、これまさに、今日のドイツ國民經濟の特色を爲すものにして、又實にフランス及其の附屬者の獨占的覇權を脅かしつゝあるものである。

第二の困難は、例の民族問題に存す。工業的企業の便利と、工業的力心と戰勝國に置くことに意を注いで國境を定めた當然の結果は、民族的國家との間に齟齬を生じた。たゞウイルソンが、その十四ケ條の一に於て、民族自決權を主張し來つた手前より云ふも、形式上この主義を通さなければならなかつたから、そこで、之には何等か適當な口實を見つけ出し、之によつて自決權とは矛盾することなしに、『國民を石ころのやうにあちこちに動かした』、所謂『經濟上の必要』及『經濟的附屬』と云ふ標語は、即ちこの爲めに見出されたものであつて、――民族がその領土の國家的統一の上に有する權利は、鍊工場が、そのコークスの上に有する權利に及ばずとの原理を發見したのである。これと同じ理窟により、諸種の原料が、その加工地を得べき『權利』を、その原料を產する人間の權利の上に置いたのである、かくて遂に今日の歐洲には、一個の『數民族の聯合國』――オーストリー、ハンガリー――の代りに無數の數國家の聯合國』――チエツコ、スロバキヤ、ポーランド。ルーマニヤ。ユーゴースラブ。イタリー。ドイツに於ける勢力をも數へればフランスもまた之に屬す――が出來上つた、而もこれ等の國は、その國内に可なりに大きい異民族たる『少數者』を有するけれども、それはすでに民族國家の名に於て建てられたる國であるが故に、これ等の民族が國内に於いて勢力の均勢を得ることは（もとのオーストリア、ハンガリーに於て、とも角も得てゐたやうに）到底之を期するとはに出來ない。けれどもこれらの國家の創立者、とくにこの國境設定に、あのやうに貢獻する所多かつた巨星實業家連には、この事體はあまり不都合でないであらう、何となれば、歐洲を不安に置くものは、而して軍備の維持を最も巧に維持するものは、實に彼等であるからである。

こゝに於て、吾々は軍國主義の新生面を見るのである　將來の標語の方式は、——國民の活動に必要なる排路を得るために、販路、新市場、軍備、——と云ふにあつたとすれば、この本來無意味なるシステムは今やその矛盾性を遺憾なく發揮したと云はねばならぬ。何となれば、今日に至つては、軍國主義はたゞ戰爭の爲めの戰爭を意味するからである——軍需品の新生産を強要し、財産の擁護を行はしめ、工業家に高き、利潤を得せしめ、その生産力を增加せしめんが爲めの戰爭であるからである。即ち平時の需要を滿す以上に、いみじくも肥滿した資本家は、生きんが爲めに戰爭へとおしよせるのである。戰後疲弊せる歐洲は、この工業政策により、工業地域を併合され占領され、「戰敗國の經濟價は微塵に碎かれその市場は狹ばめられ、その幣制は紊され、それによつてその貧困が度を加へたのである。——而して吾々は、今日前に、その巨大なる生産力と、その巧妙なる技術とを、どうにも使用し得ぬ世界經濟をみまもりつゝあるのである。

ドイツも、ロシアも、またその間に擱る諸國も、或は購買力を失ひ或は混亂の悲境にあるのときに、フランスが今尙ほ依然として大部分農業國であるのときに、又製品工業も、英國も、その生産物を捌き切れずに困つてゐるのときに、而して、他の半球、平和なる經濟地域に於ては、歐洲の生産と獨立した自給方策が、漸次に確立せんとするのときに、然りまさにこのときに、ヨーロッパの基礎工業は、抑々、誰に向つて働かうと云ふのであらう？けれども、ヨーロッパの工業家は盲目である、彼等は彼等の脚下に橫はるものは廢墟であることを知らない、そして今、一戰を經ば、彼等の覇權はいよ〳〵鞏固なる基礎を得るであらうと考へつゝ、更にヨーロッパに來るべき『今一つの戰爭景氣』の試練と祝福とに對して一劍を磨きつゝあるのである。その戰爭は、云ふまでもなく工業のための戰爭であらう、——そこで、諸國のファチストの運動を彩る標語が、鋭く勇ましくひゞくとき、それが軍國主義的なるをあやしむ者はあるまい。之賞

に、工業的に復活して、その過大に肥滿せるオルガンを使用し、なほそれを擴大せんが爲めに、權力を使用せんとする抽象的軍國主義の聲である。――歐洲の國民は、果して、この境遇を脱するにつけて、資本家的幻影に從ふであらうかそれとも、健全なる理知の命に聞くであらうか？これ今日焦眉の問題として而もこの問題に對しては何人の答案をも許さない。吾等はたゞこゝに、この好戰的解決法に對立せる一勢力のあることを示し得るだけである。

今日のヨーロッパに於て、主義として、この新抽象的軍國主義を、全力をつくして排斥しつゝあるものは、獨り勞働者及二三の國に於ける被使用人と官吏とだけである。否この外に知識階級及デモクラットの二三のグループをも數へ得るかも知れない。通貨の下落と、戰爭の負擔とによつて、その至つて小さき財産を失ひたる所有階級の人々には、依然として、軍國的標語に耳をかたむける者が多く、彼等の多くは、今も尚、一度權力を用ふれば、復た新時代が來て、混沌を通じて一擧に富を獲得することが出來るであらうと考へてゐる。故に、歐洲の經濟組織が、その全崩壞の運命より救はれ得る希望は、勞働者――及悲しいかな極めて少數のビュルガーの代表するその政策が行はるゝことにのみ存する。

若し今日戰爭が起るとすれば、結果は逆賭すべからざるものがある。何となれば今日の歐洲に於ける戰爭は、最早一九一四年のそれの如く、秩序ある國家間の戰爭ではなく、たゞ流動混迷の社會相をのみ呈するであらうから、――そは軍隊と軍隊との戰爭でもなく、軍隊と國民との戰爭でもなく、各國民内に於ける戰爭となるであらう、――而して、かの世界戰爭の場合に於けるよりも、それを終局せしめ、新秩序を招徠するに足るべき實力を有するもの又はその用意あるものがないであらう。そのときに於ける瓦落の有樣は、もとより想像の限りではない、遂には、史上曾て見ざるの暗

黒時代が來り、或はこの豊富なる世界の一部分が泥迷の裡にかくれ、そのエネルギーが消滅しつくすかも知れない。

ヨーロッパを諸國民共同の努力によつて組織すべき秋は、まだ來るのであらうか？社會を作り上げる力、社會を維持すべき力は、もつと力を得ないのであらうか？之を實際政策的に云へば、勞働運動の勢力は、ヨーロッパの戰爭を阻止すべく、まだあまりに無力なのであらうか？抑も亦破壊力の組織的勢力が今尚即て強しと云ふのであらうか？ヨーロッパは、歴史的なる現在の瞬間を認識するの力を缺ぐが故に、又その傳統を社會の力を以て制御するの力を缺くが故に、又その社會秩序を新に整へ、その生存を可能ならしめ、その文化を維持して行くだけの力を缺くが爲めに、遂に亡びねばならぬと云ふのであらうか？之まさに『歐洲問題』である。(一九二三、一二、一)

附記。本篇の筆者 Emil Lederer は、ハイデルベルヒ大學の教授として新獨逸に於ける理論經濟學の權威を以て許さるゝ人である。彼が獨逸近時の最大社會學者にして政治批評家たりしマックス、ウェーバーの衣鉢と事業とを直繼して、かのブラウンアーキーフとハイデルベルヒとの大學の講堂とによつて、墺太利學派と社會主義學派に對する深き盛譽をかたむけて、理論經濟學に新説を吐露しつゝあることは、まさに獨逸學界の偉觀とせられてゐる。又彼獨逸戰後に於ける經濟政策の基本を決定せんとする『社會化委員會』(ゾチアリジールングスコムミッション)に於ける彼の言説は、事實と見ることの正確さと、論理の整然たることゝは、若し彼を知らざりし新獨逸の驚異であるとせられてゐる。本社は今先生に乞ふて紛糾せる歐洲の政局に對する批判の一篇を得ことゝに之を公 することを得るを喜ぶものである。混迷の世界を披いて整然たる體系の世界に說き、紛糾の内に事實の論理的發展の必然を示し、讀者をして、現下の最大問題の眞相を捕捉せしむるは、蓋し、筆者獨特の境地であらう(因に本稿は全部東京帝國大學教授大内兵衞氏の譯にかかる)

無用の犧牲

河上肇

北部ボルネオの生蕃人に關し、エヴンズといふ人が昨年公にした著書を見ると、その一節に、この土人の間に行はる宗教上の色々な儀式のことが書いてある。その中で、ツアラン地方でモボグと稱せられてゐる儀式は、村から惡靈を追ひ拂ふために年々行はるゝもので、多くの儀式のうち最も大切とされてゐるものだが、それは次のやうにして行はれるといふ。

若干の女の祭司が、——この土人の間にあつては、宗教上の儀式は總て女性の仕事とされてゐる、——太皷と銅鑼を鳴らす若干の男を伴につれ、行列を作つて、村中の總ての家々の周圍を其れから〳〵へと練つて歩く。行列は所々で止まり、其處で供物が供へられ、舞踊が行はれる。村中を廻つて仕まふと、行列は河の岸へ出る。其處には筏が繫いであつて、その上には、惡靈の好むと想像される色々の物——食物や、男女の像や、水牛や、鹿や、その他の動物——が豫ねて用意してある。供物の欲しさに行列について來た惡靈どもは、——ツアラン地方では、まだ乳離れのしない豚を、小さな棒で打ちながら、行列につれて歩く、惡靈どもは其の豚の鳴聲に誘はれると想像されてゐるのである、——河の岸まで來て見ると、筏の上に澤山の供物があるので、大に喜ぶ。そこを不意に、筏を中流に押し出し、河下へ流して仕まふ。さうすると、惡靈どもは、筏に載せられて、村から追放される。それが此の祭の主眼である。

一種の迷信に本づく斯樣な宗教上の儀式は、決して珍らしいものではなく、恐らく諸國に其の例があることだらうと思ふ。私は幼けき頃を周防の岩國に育つたが、その頃私の郷里には、毎年蟲送りの祭といふものがあつた。神官を先頭に立て、多勢の若者がいくつかの大太鼓を打ち鳴らしつゝ、行列を作つて、村中を練り廻はつたものである。太鼓の上には、粗末なる飾物がしてある。それには、今日ならば警察官が、とても默許すまいと思はれるやうな、滑稽な物などが在つたことを、私は今も猶ほ記憶してゐる。村中を練り廻はつた行列は、やはり河原に出て、其處で太鼓の飾物を河に流して仕まふのである。稻に蟲を繁殖さす惡い神樣は、之によつて河に流されるのだといふことは、今年九十六歲で亡くなつた祖母が、當時私に教へてくれたところである。農學が普及して、害蟲驅除の有効な方法が知れ渡つたためか斯樣な祭は、私の郷里では、久しき以前に絕えて仕まつた。私と同郷の人でも、この頃大學を卒業する位の年輩のものは、嘗て斯樣な祭が自分の郷里で行はれてゐたと云ふことさへ、恐らくは知らずにゐて、例へば前に引いたエヴンズの著書などを繙く時は、ただボルネオ土人等の奇妙なる迷信を嗤はるゝに止まるであらうと思ふ。

迷信への犧牲が、例へば食物や、男女の像や、水牛や、鹿やに止まつてゐるならば、たとひ其れは無用の犧牲であつても、さして惜しくも思はれないが、若し其の犧牲の男女の像に止まらず、生ける男女そのものであるならば、それは犧牲とされた者のため、人間の運命として餘りに痛ましく思はれる。人類の幼稚な時代 多くの國々に行はれた思想によれば、家屋を建築するため土工を起す時は、土地の神樣の怒に觸れ、あとで祟を受けることがある。それで其の祟を避けるため、生きた人間の頭を敷地の中央に埋め、之を土地の神樣に獻げ、豫め其の怒を鎭めたものである。橋を架ける時などにも、斯樣な犧牲が供へられた。それは我國の上古にも、例のあることである。前に述べたボルネオの生蕃人

は、謂ゆる獵頭族として知られてゐる。敵人の頭を獵り集め、之を誇とする風習を存してゐたからである。今斯樣な恐ろしき風習が長く維持されたについては、色々の事情があるであらうが、或る學者の言ふところによれば、新らしく建築した家屋の安全や、穀物の豐穰や、獵獸の繁殖やを神に祈るため、犧牲としての生ける人間が必要とされたことも、その原因の一つであると云ふ。

斯樣にして因果關係の誤認は、その目的を達するための手段としては全く無効な場合に、敢て生ける男女を犧牲とする。それは遠き昔の世のこととのみ限らない、また幼稚な野蠻人の間におけることとのみ限らない。文明を誇る今の世の吾々も、自ら造り出した惡魔を追ふために、往々斯かる過に陷る。

さすがに近代人の頭には、ボルネオ人が描いてゐるやうな神樣は、描かれてゐない。——今度の大震災を天譴だなどと言つた人はあるが、それは恐らく單なる形容に過ぎないであらう。——しかし近代人の生活の上にも、原因の不可解な、または少くとも之を豫防することの不可能な、いろ／＼な災難が降りかゝる。さうして彼等は、斯樣な場合に、その禍をば、目に見えざる惡魔の所爲にこそ歸せざれ、動もすれば、それとは何等の因果關係もなき、眼前の物や人に歸する。機械の發明のため其の職業を失つた勞働者等が、最初のうち、機械や工場を自分等の敵の如く思ひなし、曾て之が破壞を企てたと云ふことは、西洋の歴史に載すところであるが、これなども其の一例である。言ふまでもなく、實際においては、彼等の境遇の變化は、新たに起つた資本家的生産方法の影響である。けれども斯かる無形の社會關係は、之を認識することが容易でないから、當時の勞働者は、禍の本は機械そのものに在りと見たのである。機械なり原料なり貨幣なりが資本となるのは、是等の物が介在することによつて取結ばるゝところの、特種の社會關係に本づくのであ

るが、多くの經濟學者は、今に至るも猶ほ、資本の本質を物に固有する物理的性質に求めんとして居ることから考へたならば、産業革命の初期における勞働者等が、資本家的生産の齎す禍を除かんがために、機械や工場の破壞を企てたと云ふことも、決して不思議ではないけれども、しかし其れは、全く因果關係の誤解に本づく無用の犧牲である。呪はるゝ對象が物でなくて人となる時、禍は益々大きくなる。例へば、原因の能く分らぬ火事に遇つて、自分の最愛の兒女を亡くした遭難者の心理は、動もすれば或る人物を假想して、その者の放火に本づくに相違なしと信ぜしむる傾向を有する。大きな不幸の原因を不詳のまゝに置くことは、普通人の心理として耐へ得られざる所であるが、それかと言つて、近代人は、ボルネオ人のやうに、之を惡靈の所爲に歸することも出來ないので、已むなく之を或る人間の所爲に歸する。是がため、無用の怨恨や忿怒が人と人との間に生じ、さうして此の怨恨や忿怒といふ惡靈は、事實の上には何等の根をも有たぬに拘らず、往々にして、生ける男女の犧牲を要求することになる。私は豫ねてから、誤解に本づく平和の破壞を、人生において最も殘念な出來事の一つとして居る者だが、この頃特に其の感じが深い。思ふに、總て因果の關係を究め、事物の眞相を明かにすることを、其の使命となす科學は、斯かる無用の犧牲を無くする點だけにおいても、人類の福祉に貢獻すること、恐らくは尠からざるものが有らう。

經濟的制約に就いて

倉田百三

我々は地上に於て、常に、不斷に、經濟的制約の中に生きてゐる者である。此れは我々にとつては「與へられたるもの」であつて、我々が此れを欲すると欲せざるとに拘はらず、我々は此の制約の中に生きざるを得ないのである。即ち我々の地上に於ける運命である。故に我々は此の運命を享けるよりほか選ぶ事が出來ない。我々にとつて最上の道は、此の運命を享けて、最も良く此れに處する事である。故に自分は此處に此の經濟的制約の概念を明瞭にし、其の範圍と限界とを定め、從つて人生に於ける此の制約の位置を確定し、然る後、如何にして此の制約に最も良く處すべきかを考へ度いのである。其れは我々の精神生活にとつて、極めて大切な事であり、殊に今日の時代の、最も厭ふべき經濟と道德との混雜――更に一般的に云へば固有價値と利用價値との混雜を訂正し、精神生活全體を健かに、且つ透徹　らしめるに役立つと信ずるからである。

第一に經濟的制約とは何であるか。其れは我々が地上において、我々の生活の目的たる人格價値を生かさんとする欲望に對して、外部より必然的に規　する時間、空間、及び物質の數量的及び因果的條件である。例へば我々は自ら生き、隣人をも生かさん事を欲する。此れは二つとも我々の衷心よりの願望である。故に若し我々が無限のパンを持つならば、我々は素より自ら必要な丈け取り、悦んで其の他を隣人に頒つであらう。然し事實として我々は一定量のパンしか持た

ないが故に、我々は自ら食ふ事と隣人に頒つ事との間に或る均衡を求めなければならなくなる。又我々は戀人と親とを共に愛する。然し一は甲地に、他は乙地にあるならば、其の愛を表現する方法は、兩者を同時になす事は出來ない。又我々が一つの家を建てんとする時、我々に必要なる居室と寢床とを得んが爲には、順序上先づ礎を置かなければならない。又一定の診察時間に患者を診察せんと欲する時、我々の願望は出來得べくんば、凡ゆる患者を一人一人充分な綿密さを以て診察せんとするにあつても、或る一定の人數を限り、且つ各個人を或る程度迄の綿密さを以て遇する他に道がない。此れは只四個の例に過ぎないが、我々は凡ゆる日常百般の行爲に於いて、此の如き時間と空間と物質との數量的及び因果的制約の下に立つてゐる者である。故に現實生活に於いては、一刻も此の制約を度外視して、何事をも考へる事は出來ない。この事は政治や經濟のみならず、藝術や道德に於いても同樣である。此の制約は何事をなすに當つても、我々が必ず處理しなければならない條件として、我々にとつて最も實際的なるものであり、且つ我々の精神の力を以て如何ともする事が出來ない點に於いて、最も外部的なるものである。故に我々は何事に當つても、此の實際的、且つ外部的なる條件が滿されざる限り、其の實行不可能なる事を知るが故に、其他の點に於いて、如何に價値ある願望或ひは計畫であつても、此れを「浮いたもの」若しくは「空想的なるもの」として考へる。此れは確に當然の根據を含んで居るものである。如何なる願望や、計畫も、其れが實現不可能のものであるならば、其の實現せられたる曉に於てのみ生ずる價値を目的とする限り、其の願望や、計畫には意義がないからである。從つて眞摯にして、實意ある願望者、若しくは計畫者は、必ず此の經濟的條件を充し得る自信少くとも關心を持つて居る筈であるからである。然し乍ら玆に明らかに辨別しなければならない事は、此等の經濟的制約が、我々にとつてかく迄意義を持つのは、何處迄も其の願望と計畫とが、我々にとつて價値あるものであるからであつて、其れ自身の爲ではない。此の願望と計畫とが價値がないなら

ば、如何なる經濟的制約も意義のないのは無論の事、從つて其の經濟的制約を處理する如何なる勝れたる手段も亦何等の價値もない。故に願望と計畫との價値は本質的であつて、經濟的制約の意義は從屬的のものである。從つて如何に實現し得る願望や計畫であつても、其れ自身の價値が少いならば、其れ自身に價値大なる願望と計畫であり乍ら、實現不可能なるものよりも必ずしも勝つて居るとは云へない。此の二個の視點は明らかに區別しなければならない。此處に實現不可能なる場合を後に讓つて、先づ實現困難なる場合に就いて考へるならば、恐らく何人も實現容易なる價値少き計畫や、願望よりも、實現困難ではあつても價値大なる願望と計畫とを以て、より勝れたるものとなすであらう。然し乍ら此の場合に於いても、我々は現實生活に於いて、順序上先づ前者を撰ばなければならない場合がある。例べば理想的社會を建設せんとする時、無政府主義と集中的社會主義とに於いて、理論上明らかに前者の方か價値大なる計畫であるが、其の實現の難易に於いては、後者は前者よりも遙かに勝つて居る。此の場合我々は先づ後者を撰ぶであらう。然し乍ら此の場合後者が前者を其の實現困難なる故を以て空想的として排斥する根據は何處にあるか。其れは本質的意味に於いては、存在しないと云はなければならない。其れは只便宜上若しくは、順序上の根據にすぎない。然し如何に便宜上の根據であつても、結果より考へる時、一つの計畫が其の實現せられたる曉に齎らすべき價値を目的とする限りは、決して此れを無視する事は出來ない。故に此處には明らかに二つの視點を必要とする。卽ち計畫其れ自身の價値と其の實現の手段に從屬して生ずる價値とを區別しなければならない。嚴密に同じ理由に依つて、教會的共産主義が無政府主義よりも更らに遙かに實現困難なる計畫であつても、本質的價値に於いては、最も勝れてゐると云はなければならない。若し其の實現困難なる故を以て、集中的社會主義者が、教會的共産主義者を空想的として排斥するならば同じ權利を以て、今日の國家主義的改革主義者は、集中的社會主義者を空想的として排斥し得るであらう。此の不合理を除去せ

ん爲には本質的價値と從屬的價値とを區別するに他に道はない。又例へばバラックの家と大理石の家とが存在する時、其れを如何に人類の多數が享受し得るかと云ふ視點より見る時、勿論前者は後者より勝るであらう。然し一つの家として其れ自身に於いては何人も後者が前者よりも勝つて居るとなすであらう。此の二つの視點は區別しなければならない若し我々に大理石が無限に存在するならば、無論我々は後者を撰ぶのである。我々が現實生活に於いて前者を撰ばなければならないのは、經濟的制約の爲に餘儀なくされるのにすぎない。此の辨別をなさずして、本質的に價値あるものを經濟的制約の爲に從屬的に生ずる價値を以て排斥し去る事は誤謬である。大なるもの、美なるもの強きもの、豐富なるもの、高貴なるもの、凡そ——其れ自身に價値の勝れたるものは、其の實現の難易、享受の機會の多少、因果的順序の前後如何に拘はらず、尊重されなければならない。然し乍ら如何に從屬的なる價値と雖も、我々が實際に事實として經濟的制約の下に生きてゐる限りは、或る一つのものを生み出さんとする時、或ひは一つの行爲を決定せんとする時　我々は此の制約を無視する事は出來ない。例へば一つの演劇を試みんとする時、演劇として理想的なる演出をなす事が、他の隣人の飢餓を傍觀する事を條件とするならば、今一人の藝術家が如何程の物資と時間と努力とを此の演出に捧ぐべきかは、一つの考慮さるべき問題である。此の場合に此の藝術家の心中には同時に矛盾なく、願望としては完全なる演出と、隣人の救助とが並立し得るのであるが經濟的制約の爲に、此の二つが矛盾するのである。此の場合其の藝術家の正しき態度を決定するものは何等かの他の原理でなければならない。完全なる演出を只單に贅澤として斥け、若しくは隣人の救助を單に藝術的良心の不足として排斥する事は出來ない。只此處に我々は、如何に隣人の救助の爲とは云へ、一つの演劇として、完全なる演出を不完全なる演出よりも尊重する事を忘れてはならない。故に現實生活に於いては我々の前に我々の目的たる本質的價値を生かす爲に、如何に經濟的制約を處理すべきかの問題が置かれる　我々の正し

き態度とは此の問題の合理的解決と云ふ事に他ならない。

然らば此の問題を合理的に解決すべき原理は何であるか。其れは其の行爲を決定せんとする時に於いて、最も良く自己の人格價値を生かし得るやうに行爲する事の他にはない。我々にとつて眞に固有なる價値は、即ち其れ自身に價値あるものは、人格價値である。（リップス倫理學の根本問題參照）我々にとつて人格價値とは、自己に與へられたる本能の全體を意味する。此れを離れて何處にも人格價値の內容は存在しない。此の意味に於て、凡ゆる個々の本能的欲望は、それ〴〵に悉く自分を主張する權利を持つてゐる。只然し此等の諸の本能的欲望は其れが人格全體の價値を如何程生かすかに從つて、上置と下屬との關係に於て、一つの體系を作らなければならない。而して我々が二個以上の動機の中から一つの行爲を決定せんとするに當つては我々は主觀的制約を離れて、人類的見地に立つて、客觀的に重要なる動機より先きに撰擇しなければならない。（同書道德的正の項參照。）即ち其の動機が自己のためのものであるか、他人のためのものであるかに關はらず、客觀的に重要なるものより先きにするのである。例へば自己が花見にゆかんとする時隣人の家が火事でらるならば、花見は自己のためであつて、火事は他人のためである、と云ふ個人的制約を離れて、消防と花見とが何れが客觀的に重要であるかに依つて先きにすべきものと後にすべきものとを決定するのである。然し乍らかゝる動機も結局自己の本能を離れては意義を持たない。即ち自己の內なる花見の欲望と消防の欲望との間の撰擇である。一般的に云へば、自己の內なる個人的本能と、人類的本能との間の撰擇である。此の二つの本能は、共に自己の本能として、人格價値の內容をなすものとしては同一であるが、此の二つの本能を其の重要さの度に從つて、上置と下屬との關係に於いて、人格全體の要求の中に抱擁するのである。故に善とは自己の凡ゆる本能の間の調和である。此處に忘るべからざるは、其れは調和であるが故に、凡ゆる本能が多少の度合ひに於いて必ず攝り容れられなければならない。

上置する本能のみを肯定して、下屬するものを全然否定する事は調和ではない。例へば、自己の内の人類的本能が如何に凡ゆる本能の中にて上置さるべきものであつても、それのみを生かさんが爲に、例へば、純粹に個人的なる享受の本能を無視してはならない。個人的享受の本能も必ず其の正しき度合ひに於いて、卽ち人格全體を生かすのに最も適當なる度合ひに於て生かされなければならない。素より此等の凡ゆる本能は、此の人格全體の調和的關係に於いて同時に生かされん事を要求するものである。我々は今此の體系をなせる要求を以て、經濟的制約に對するのである。此處に於て當面の問題は、其の經濟的制約を此の體系的要求に依つて、處理する事によつて解決されなければならない。所謂希臘主義と基督教主義との對立の調和の道は、此の方法の外には考へられない。前の例に就いて云へば、完全なる演出をなさんとする欲望と、隣人の飢餓を救濟せんとする欲望とは、兩者共に生かされなければならない。只然し二つの自己の欲望を、自己の人格全體の要求の中に、其の重要さの度に從つて、適當の度合ひに於て攝り容れねばならない。故に此の場合に於いては、此の二つの欲望が其の人の人格内に於いて、どれ丈けの重要さを占めて居るかに依つて、決定されなければならない。例へば其れが藝術家であるならば、彼れにとつては完全なる演出は自己の使命である。卽ち自己の内なる人類的本能である。隣人の飢餓を救濟せんとする欲望は、一人の個人に對する、自己の個人的愛の本能である。此の二つの本能は其の藝術家の人格内に於て、主觀的制約を離れて、其の客觀的重要さを比較する時に、前者の方が大であるが故に、其の藝術家は完全なる演出の爲の努力を先きにしなければならない。此れに反して、若し其の演劇が自己の使命でなくして自己の個人的享受であるならば、我々は隣人の飢餓の救濟を先きにしなければならない。何となれば、他人の飢餓は其の人の生命を維持する爲の必須の條件であつて、其人の使命卽ち人類的本能を生かす爲に、缺くべからざる條件である。故に此の場合に於いては、自己の個人的本能と、他人の人類的本能との對立である。然るに

主觀的制約を除去するが故に、此の對立は結局自己の人格內に於ける個人的本能と人類的本能との對立に歸する。而して後者は前者よりも上置するが故に、此の場合其人は後者を先きにしなければならない。然らば何故に自己の人類的本能は、自己の個人的本能より上置されるのであるか。其れは我々が生命を公物として意識する處より生ずる。卽ら生命は自己の私有物に非ずして、「與へられたるもの」であり、我々に生命を與へたるもの——神のものであると意識する處より生ずる。此の受身の意識を肯定しない限り、人類的本能が個人的本能より上望する事は我々にとつて、理解し難きものとなる。卽ち人類的本能は、生を與へたるもの、神に對する義務の意識に外ならない。生命は神より與へられたるものであるが故に、自己の生命たると、他人の生命たるとを問はず、公物である。卽ち人類的本能とは、神の前に於ける、生命を與へられたるもの丶連帶の意識である。卽ち神が「人」を造つた時、其の「人」の上に課した處の使命の意識である。我々は神に對して個人としてのみならず、人間一般として此の使命を果す義務を負うて居る。此れ我々があらゆる人間を同類として意識し、神の前に連帶の觀念を持つ根據である。神が人間を造つた時、人間に意匠したところのものを、人間は實現しなければならない。此の意味を離れて、人類意識と連帶の觀念とを說明する事は出來ない。故に我々が我々の天命を完うし、與へられたる本能を生かさんとする時、我々は公けなるものを私なるものより自ら上置する。只然し如何に私的なる本能と雖も、其れは與へられたるものであるが故に必ず適當の度合に於て生かされなければならない。此れを全然滅却する事は、生命を與へたるものに對する不從順である。例へば、自己の使命は、自己の個人的享受より重んじなければならないが、其爲に個人的享受を全然捨て去る事は正當ではない。例へば、一人の藝術家に於て、其の制作の努力は、花鳥風月を樂しむ個人的享受よりも素より重じられなければならないが、其の爲に全然花鳥風月を樂しむ事を捨て去る事は、藝術家的使命に對して如何に熱誠であるとは云へ、正當なる事ではない。假令花鳥風月を

樂しむでも、只制作に役立つ爲にのみ此れをなす事も亦正當ではない。此の場合其の藝術家の最も正しき道は、制作に專ら力を注ぎながら、又純粹に――制作の爲でなく、個人的享受として、花鳥風月を樂しむ餘裕をも殘す事である。此の意味に於て、神に對する我々の義務とは我々の人格を完成すると云ふ事の外にはない。我々の使命は如何に重要であつても其の義務の一部である。人格を完成することは與へられたる凡ゆる本能を、其の調和せる體系に於いて、生かす事の外にはない。故に個人的本能を無視して、人類的本能のみを生かす時、其の人格は完成されない。神への義務は完全に果たされない。實際に我々はかくの如き人格に對する時、悲壯なる感動を受けても、圓滿なる滿足を得ない。人事の總てを制作欲望の爲の手段となす藝術家は如何に仕事に熱心であつても、完成品を作り出す事は出來ない。

前述の如く人類的本能は個人的本能より正しく上置されなければならないが、然らば同一の本能に於いて、若し主觀的制約を拂拭するならば、自他の先後は如何に定むべきであるか。例へば、自己の使命と他人の使命とは何れを先きにすべきであるか。其れは自己の使命を先きしなければならない。其れは權利の順序ではなく、我々の神への奉公の努力の發現する機會の自然の順序である。我々は一個の生命を神より依託されたのである。我々は此の生命を完うする義務を負うて居る。故に人類的本能と雖も、自己の本能としての他我々は意識する事は出來ないのである。已に主觀的制約を拂拭する以上自己の使命も、他人の使命も同一である。故に、自然の順序として、自己の使命を先きにする迄である。主觀的制約の下に考へるが故に我々は自己を他よりも先きにする事を何等かの「私」の觀念と結合して考へるのであるが、已にこれを捨て去つたればこそ、我々は何等の疚ましさなく、平氣で、自然の順序に從ひ、自己の使命を先きにし得るのである。自己の個人的享受と他人の個人的享受との先後も此れと同樣である。我々は他人の使命の爲には、自己の個人的享受を後にしなければならないが、他人の個人的享受の爲に自己の個人的享受を後にする必要はない。た

だ然し前にも述べた如く、他人の凍餒の如き生理的必需は、他人が其の使命を果たす爲の必須の豫件であるが故に、其れを救ふ爲の努力は、自己の個人的享受よりも先々にしなければならない、(此等の點に就いては、此の論文の直接の目的と離れるが故に、別に「ギリシヤ主義とキリスト敎主義との調和の道」と云ふ論文に於いて詳論するであらう。)

上述の如き順序は、我々にとつて與られたる經濟的制約が避くべからざるものであつた時に、其れに對して我々の、其れ自身には肯定さるべき二個以上の動機の間の選擇の原則である。然し其れより別に經濟的制約を出來得る限り少くし、其の我々にとつて煩なる負荷の感を減ぜしめ、更に反つて此れを生かす道、一言にして約せば經濟的制約を超克する道はないであらうか。第一に我々は此の制約を出來得る限り少ならしむる爲に節約しなければならない。物質と時間と空間とを浪費する事を止めなければならない。素より一層大なる價値を生かす爲に必須なる材料を惜しんで、より小さき價値にて滿足する事は排斥しなければならない。此の意味の消極主義は人生の創造的本能を衰微せしめるものであつて、最も厭ふべきものである。然し或る一定の價値を生かすのに必要以上なる材料が費されてはならない。其れは我々の此の重荷たる經濟的制約を大ならしむる罪惡である。然のみならず生かされざる材料は、只に無價値であるのみならず又同時に醜である。かくの如き浪費されたる材料は、實に絶對的の損失である。殊に藝術品に於ては、此の無駄は全體の價値の積極的瑕瑾であつて、單に餘分なる附加物ではない。又節約は積極的な美と力とを生み出す爲にも必要である。より高き價値を生かす爲には必ずしもより多くの材料を要するとは限らない。例へば建築に於いて、素樸なる樣式の建築は華麗なる樣式の建築よりより高き美を演劇に於いて簡素にして集中されたる表出は、複雜にして繊巧なる表出よりもしばしばより強い力を持つて居る。聖人を飾るに相應しき服裝は王者を飾るに相應しき服裝よりも質素である。故に我々は出來得る限り少しの材料を以て出來得る限り大なる價値を生かさん事を努めなければならない。又節約は我々の精神生

活に缺くべからざる心の靜かさを保つ爲にも必要である。此の意味の節約は凡ゆる種類の節約の中にて最も貴きものである。宗敎生活には殊に此の種の節約が缺けてはならない。物質的材料が多ければ多い丈け我々の心は物に捉はれ、心を形の役となる。精神生活の獨立を保ち難く、他人の意を迎へ易く、已れを枉げ、種々の無理を企て、過失を作り易く、心をいら立たせて、淺ましき態度を取り易い。遺敎經にある如く、節約者に却つて憐愍さるゝが如き奢侈者は愚かである。我々は靜かな、うるほうた、常に熟慮と觀照と奉仕とに用意した心を保つ爲には、節約しなければならない。又鬪ひに於いて、事業に於いて、豫備を蓄へ、潜勢力を養ふ事は、最上の智略である。道德生活に於いて、謹しみ深き判斷や、他人に對する援助をなす餘裕を持つ事は、善事を行ふ爲の最高の智慧である。遺敎經にある如く「智慧の水の爲の故に漏失せさらしめ」る節約は、宗敎生活に於いて、禪定を保つに缺くべからざる道である。藝術生活に於ても、何よりも必要なる觀照の深さと、制作の爲の行き屆きたる仕上げに缺くべからざる、なみ／＼と堪へた靜かな心を保つ爲には、凡ゆるものを節約して、常に餘力を殘してをかなければならない。殊に感情の表現を節約する事は、我々の人格を高貴ならしめ、眞實ならしめる爲に缺くべからざる條件である。或る種の感情耽溺は實に低く、或る種の贅澤は實に卑しい。此れに就いては「卑しむべきものに就いて」の中に詳論したから此處には再び繰り返へさない。

次に、經濟的制約は我々にとつて必ず此れを重荷としてのみ感じなければならないであらうか。一面より見れば經濟的制約は我々にとつて價値あるものゝ發現及び其の强調の機會である。例へば一つの都市計畫に於いて此處にある一定の經費と年限と場所と其他の經濟的制約があればこそ、多くのプランの中から優劣を決定する事が出來るのである。其の制約がないならば、數多のプランの中から、實際問題に於いては、優劣を決定する事が出來ない。競技に於いても同一の一定の經濟的制約が與件として必要である。また俳句は十七文字を制限さるゝが故に、其の中に最も價値ある内容を盛

り生かされとして、其處に集中が行はれるのである。其の印象的な、強い効果は手數の制約がないならば、生れる事は出來ない。又富みたるものゝ高價なる贈物が我々を動かす事が少いのに、貧しき者の小さき贈物は其の眞心を遙かに生かして、我々を動かすのである。我々の愛や、誠や、實意は經濟的制約の大きい丈け強調されて現はれるのである、天的なる味が貧しきものゝ觀念と結合するのは其爲である　又我々は個人意識以上の人類意識を生かす事に依つて、人類の連帶の觀念から、此の經濟的制約の重荷を或る程度迄超克する事が出來る。例へば一人の天才が其の才能を生かす爲に、極めて多くの物質的材料を消費したとする。其時此れを單に一個の個人がかくの如き多大の消費をなしたものと考へる時、我々は其の不合理と、其爲に生ずる人類及自分の經濟的制約の增大とに對する不平と、及び人間的なる羨望と嫉妬との衝動に惱まされるであらう。然しかくの如き天才を人類の誇りとして讃美する時、其の消費は人類の消費であり、畢竟自己の消費として考へらるゝが故に此等の苦惱を遙かに輕減する事が出來るであらう。又自分が仕事の爲に同樣の消費をなさねばならない時、同樣の人類意識に立つ事に依つて、同胞の經濟的缺乏に對する同情より生ずる苦痛から免れる事が出來るであらう。かくの如き超個人的なる人類意識は人類の文化の爲に缺ぐべからざるものであつて、此れなくしては人生の偉大なる積極的事業は成就する事は出來ない。共產主義的精神は此の意味に於いて、又一種の節約である。偉大なる公園や、寺院や、美術館の如き多大なる經濟的消費を要するものを、個人の經濟的制約を增大する事を出來得る限り少くして、然も享受の機會を均霑せしめることは、共產主義の長所である。只此の場合に忘るべからざるは其の創造が、其の本來の性質上個人的なる約束を持ち、且つ其の享受に高き教養を要するものであつても、其れがそれ自身に價値あるものである限りは、自己が此れを享受し得る機會と資格とを有すると否とに關はらず、人類の名に依つて、此れを自己のものと考へなければならない。共產主義をかくの如き高き連帶觀念に依つて高めないならば、

それは畢竟人類全體の文化を低卑ならしめるものである。如何なる場合に於ても、我々は其れ自身に價値あるものを經濟的制約に依つて生ずる從屬的價値に依つて斥けてはならない。此の公明なる、崇高なる勇氣は實に人類の誇りである。

最後に經濟的制約に關する最も深き考察が殘存する。經濟的制約は、如何に我々の出來得る限りの努力を以てするも、其れは畢竟我々の存在の限界である事は免れない。我々にとつて願はしきものではなく、餘儀なきものである。我々は地上に於いては、此れを忍受する他はない。然し我々は其れ以上を願ふ事は出來ないのであるか。經濟的制約なき存在の方式を願ふことは出來ないのであるか。かく願ふ事は我々の我儘若しくは忍耐の不足であらうか。勿論我々は我々の我儘と忍耐の不足から、なすべき事をなさして、徒らに經濟的制約を、單に我々の欲望に對する障碍物として、厄介物扱ひする事は稀れでない。節約すべきものを節約せず、無駄の爲に材料を浪費し、更らに自他の天命を損ふ罪惡の爲の消費に依つて、此の經濟的制約を增大する事が少くない。又人類意識を缺く爲に、材料を私有して公共的に生かす事能はず、或ひは人類の文化に眞に必要なる材料も羨望と嫉妬とに依つて、浪費と考へる事より、自己の不平と苦惱を增加する事も多い。一言にして約せば、我々の德の不足の爲に經濟的制約を不合理と感ずる場合が多い。此の原因よりして經濟的制約の除去を願ふ事は我々の側の我儘、忍耐の不足、一層適切に云へば慾のよさである。然し乍ら我々が經濟的制約の除去を願ふのはかくの如き原因からのみではない。我々が最善を盡くしても如何ともする事能はざる我々の正しき願望に對する障碍物として、此の經濟的制約は人生の最も大なる禍ひの一つである。例へば其れ自身に矛盾せざる二つ以上の願望の中から、一つを撰んで他を捨てなければならないと云ふ事は我々にとつて諦め難き事である。例へば、かの譬話にある川の彼方と此方とに居る二人の愛兒を鬼から守らねばならない運命に置かれたる母親は、單に時

間的、空間的制約の爲にのみ、一人の愛兒を鬼に渡さなければならないのであつて、若し出來得べくば二人の愛兒を救はんと希ふのは素よりである。此の際其の母親は、單に不可避の制約である故を以て、悲嘆から醫される事は出來ないであらう。素より其の悲嘆は返へらぬ愚痴である。此の制約が如何ともすべからざるものであるならば、我々は此れを忍受する外はない。然し我々の最上の努力を以てして然も此の悲嘆を餘儀なくせしむる運命を、我々が其儘にて、讃美する事が出來ないのは當然である。かゝる成り立ちを持つ世界を、其儘にて、調和ある世界と思へと云ふのは無理である。此の世界を合理的であると感じ得る爲には、此の地上の外に、かゝる制約なき何等かの世界を立て、此の地上と其の世界との合理的なる關係を求めるより他に此の無理を除去する方法はない。素より此の世界が全體として、合理的である事を要求せずして生きる事の出來る、一切を偶然の所產として滿足する唯物主義者は、かくの如きを只不可避の事實とするのみであらう。然らばそれ迄の事である。只問題は我々が眞に、人間として、我々の限なき人性を素直に發露せしめた結果に於いて、かくの如き事實を只事實として、滿足する事が出來るであらうか、と云ふ點である。自分は其れが出來ない者である。唯物主義者は或は云ふであらう。我々と雖も、かゝる世界の存在を願ひはするけれども、其れが事實存在せざるを知るが故に此れを求めない迄であると。若し然らば、其の知識は絕對的に確實なるものでなければならない。其れは我々が無慾、若しくは無頓着から、どうでもいゝものゝ智識に就いて其の確實性を强いて吟味せざるが如きと同一の比ではない。事は我々の人性の最深の願望にかゝるのである。然もかくの如き智識の確實性は可成り薄弱なるものである。其れは我々が認識論の入門を學ぶ事に依つて既に少くとも唯物主義者が信じて居るが如き確實性は支持し難きものとなる程である。然らば反對にかくの如き世界の存在を肯定する絕對的に確實なる智識が存在するのであるか。其れは存在しない。然し乍ら、其處に信仰の世界があるのである。信仰の世界を支持するためには來世の存在の否定に關する智識

の確實性がない事丈けで足つてゐる。必ずしも來世の存在の肯定の智識の確實性を要しない。かくの如き智識は、カントの指示する如く我々の理論理性の能力の限界を超えて居る。併し乍ら我々は、智識以外の根據よりかくの如き世界の存在を信じる事が出來る。然も其の根據は、內面的自證性に於いて、智識に勝さるものがある。(此の來世の存在の信仰の根據に就いては、別に詳しく論ずるであらう。)我々は經濟的制約なき世界を希ふ事が出來るのみならず、願ふべき筈のものである。此の如き世界は我々が道德的意識に於いて、最善を盡し、蟲の良き願ひを斷念すればする丈け、益々斷念し難きものとなる。我々が總てのよきものに愛着し、あしきものを捨離する時、其のよきものに對する愛着は愈々諦め難きものとなるのである。我々が花を眺めて居る時、其の花の美に對する觀照が深まり、其の態度に私心がなければない程、我々は隣人の火事を消す爲にでさへ此れを斷念するが出來なくなる。然も隣人の火事を消して居る時、我々の愛が深まれば、深まる丈け、此れを傍觀する事が出來ない。然も其の一つを擇ぶ事を餘儀なくせしむる經濟的制約は、我々の最善を盡くせばつくす程無理である。不合理である。然も我々は如何ともする事が出來ないが故に、前述の如き態度に依つて、最高可能の處に此の經濟的制約に處する道を擇ぶ他はないのである。然し其れに依つて、此の不合理が除去されたのではない。此の不合理が除去されざる限り、我々は衷心より滿足する事は出來ない。此の世界の調和を──神の完全を信ずるが出來ない。自分が「千手觀音の畫像を見て」の中に書いた如く、我々は此の地上の限界と人間の境涯とを忍受し、彼岸」自在身とを願はずには居られない。此の信仰に立つて、翻つて此の地上に於ける經濟的制約に對する時、初めて我々は多くの正しき觀方をなす足場を得るのである。例へば教會主義と社會主義とに於いて、社會主義が一層價値ある如く見えるのは、只此の經濟的制約の爲にすぎない。本質的價値は素より教會主義にある。大理石の家が贅澤として排斥されるのは、只此の經濟的制約の爲にすぎない。凡て個人的にして、貴族的なる趣味として、其の享受

の機會が一般民衆に拒まれてゐる高き文化が斥けられるのも只此の制約の爲に過ぎない。本質的には、總て此等のものは、讃美さるべきものである。總てのものは、樂園を莊嚴し得る價値に從つて、價値を持つて居る。彼岸と此岸とを合はせて、全體として一つの世界と見る時、其處には只一つの原理が存在するのみである。我々は地上に於いて、此の唯一の原理を經濟的障碍に對して適用する時に、最高可能の處まで此の原理に忠實ならんとして我々が現に持つが如き混雜と、機械主義と、散文性とを生ずるのである。此れは我々の存在の方式の限界である。觀方に依つては、神が課したる刑罰である。實際に、我々が萬人に對して持つ潤ひに充ちたる愛と、仕事に對する忠實無私なる熱情とを同時に生かさんとするとき、我々は面會日を定めるが如き、又彼の診察時間の醫者の如き、機械的にして散文的なる結果とならざるを得ないのである。我々の內面的なる純一性は我々が個人に私せずして、人類に奉公せんとすればする程、稀薄、乾燥なるものとなるのである。此の意味に於いて、行爲は心情の滓屑である。內部は金玉であり、外部は瓦礫である。我々は常に價値其のものを重んずる時、內面を以て眞の實在とし、外部を以て其の不完全なる模型として見なければならない。常に、不完全なるものゝ中に完全なるものを見んとする象徴主義を持せなければならない。眞の實在は理念であつて見ゆる處のものは譬喩に過ぎない。ファウストにある「一切の過ぎ去るものは譬喩にすぎず」と云ふ言葉は實に深い。然し乍ら假令其れが象徴であり、譬喩にすぎなくとも、我々が地上に於いて、完全なるものの理念を表象する道は、此れに據る外はないのである。抽象的眞理を具體的形象として見んとする時、我々は此の象徴主義の他に方法を持たない以上、我々のなすべき事は、せめて出來得る限り、此の經濟的制約に依つて縱容されたる不完全なる譬喩を通して、完全なるものゝすがたを髣髴する事である。其れは譬喩であるが故に價値がないのでなく、完全なるものゝ譬喩であるが故にこそ、價値があるのである。地上の理想的社會が如何に天上の樂園の、拙劣にして、不完全なる模型にすぎなくと

も、我々は此の模型を造り出す事を努めなければならない。其れは我々が地上に於いて、樂園を具現する爲に許された最高可能の努力である。只我々が忘れてはならないのは、此れを譬喩として見る謙遜なる心である。かくする事に依つて我々の理想的社會の價値は減ぜずして、反つて生きるのである。何となれば、此の不完全なるものは、其儘ではなく、完全なるものゝ譬喩だからである。我々の心は、此の譬喩としての理想的社會を作り出したる心は、其裡に眞の實在としての樂園を藏してゐる事に依つて、益々我々の價値を増すのである。卽ち此の謙遜は我々の矜恃である。此の譬喩の故に實在を斥けるものは、反つて我々の內なる無限の可能性を否定する事に依つて、人類の價値を低めるものと云はなければならない。價値あるものを、其れ自身に於て、且つ其の極限に於いて求めよ。其れこそ眞の實在である。其れは理念であつても、物象であつても其れは第二の事にすぎない。

（一九二三、一一、五）

附記。讀者は此の文中「神」なる語に躓く事なく一文の指示する意味を理解せられん事を希む。

日本に於ける社會主義の將來と思想界の趨勢

社會主義の人性化的反省と哲學の社會化的新生

杉森孝次郎

「人性についてわれらが眞實に知る唯一事はそれは變はるといふ事だ。變化こそはわれらが人性について確說しうる唯一質だ」と、『社會主義下に於ける人間のたましひ』のなかで言語藝術家ワイルドはいうた。この表現の内容としての思想は、かれの他のすべての場合に於けると同樣に表層深のものにほかならない。

　なにが、どう、さらにくわしくはいつ、どこで變はるかといふ問ひから離れて、ただ變はるといふだけの認識經驗は、なに人のいかなる事情のもとに於いても決して成り立たない。空間の一屬性、一派生質にほかならない。たとへば水がこほる、木の芽が伸びるといふやうにだ。基礎的、先在的認識で、ある水、木の芽はなにを意味し、こほる、伸びる、はどうを意味する。いつ、どこでといふ性質も勿論この變化の認識に帶ばれてゐる。

　人性に對するわれらの空間的最深認識は、したがつて時間的最永認識は、人性は、それの本質的特徵を愛と憎とのかたちに於いて、榮と辱とのかたちに於いて、利と害とのかたちに於い

て、眞と僞とのかたちに於いて、美と醜とのかたちに於いて、肉體的快樂と苦痛とのかたちに於いて、正と邪とのかたちに於いて、及びなほこれら以外のいく多のかたちに於いて示すものにほかならないことをわれらにかたる。ナポレオンは、「貴族主義は常に存在する。それを華族社會に討ちほろぼせば、それはすぐに中流階級の財力あり、權力ある家々に移轉する。それをこれらの家々に討ちほろぼせば、それは生を殘つて工場や民衆の指導者たちのところへ避難する」といふた。エマサンも、プロリテリアの行きつくさきはブルジワであり、ブルジワのいでたつはじめはプロリテリアだといふ意味の叙說を、これの數倍量の文字を巧みに使用してなした。ナの觀察も、エの判定も、人性對する空間的坡深認識に多少の自覺を持つて、人間社會の行動及び思想のかたちに於ける變化の一部を、それの意味と本質にしたがつて、讀んものだ。「愛憎、榮辱、利害、眞僞、美醜、肉體的快苦、正邪等の意識は、いかにも人性の永久的、内在的支配力であるにちがひない。社會思想と社會運動とは、人性の或る作用または或る在りかたにほかならないがゆゑに、先づ人性に對する空間的坡深認識を怠たりもしくは過まつならば、われらは一とつの社會に於ける思想上または行動上の變化を理解することはできない。

しかしながら、ナや、エが、人間社會に於ける思想上または行動上の變化を、車輪の廻轉進行に見るが如くに、下部が上部に移り上部が下部に移り、またさうしてはまた〳〵、さうして行くだけのものだと見たと假定するならば、それは粗大なる不完全認識だ。人性の變化質は、いまさういふまでもなく、成長としてのそれだ。したがつて人間社會の思想上または行動上の變化も、進歩としてのそれだ。いつかはそれもとまるかも知れん。人類が全體的に老衰し去る時期が將來に待つてゐるかも知れん。しかし、ここはまさしくヤソがいうた通り、「あすの事を心配に病むな、あすの事はあすが心配してくれるだらうからさ。けふ分の心配ごとはけふだけに十分ある。」

ヨーロツパに於ける學藝復興前の思想界と、後のそれとをくらべて見ても、またフランス革命後に於ける西歐諸國の政治的制度をその前のそれと比較して見ても、あるひは近く、維新前の日本の思想界及び制度慣習と、後のそれらとを對較して見ても、人性の時間的形式に於ける在りかたとしての、もしくは作用としての變化は、單なる「歴史は繰りかへす」式のものでは決してなく、湯の盤の銘の通り、「まことに日に新たに、日に〳〵新たに、また日に新たに」伸び變はり行く進化的變化であることは顯明だ。

「けれども、クリストは權制に對して叛戰はしなかつた、かれはローマ帝國の帝政的權制を容認して納稅した。かれはユダ教會の教會的權制を忍負し通ほした、そしてそれの暴力をかれ自身の暴力によつてはねのけようとはしなかつた。かれは、わたくしが前にもいうた通り、社會改造の計策を持たなかつた。しかるに近代の世界は諸般の實行的計策を持つ。それは貧と貧がもたらす難苦とを除去しようと提案する。それは痛ましさと痛ましさがもたらす難苦とから離脱せんことを欲求する。それはそれの方法として社會主義と科學とに信頼する」とワイルドが前記の一作のなかでいうたのは、大體に於いて妥當だ。日本に於ける社會主義の將來と思想界の趨勢がどう觀測され、また現代の日本人によつてどう意志されべきかといふ一問に對する解答も、右の引用文に多少の辯護的解釋をほどこせば、それのなかに見いだされる。

大戰前までの最近の日本の思想界は、それが進步的性質のものであつた場合に於いてさへも、單純に心狀を目的とした。それは事情を無視した。たましひの在りかたの變化を、それの環境の在りかたをばそのままに保存しまたは放任しながら出來ることだと最初からきめて實現しようとばかりそれはあせり、もがき、さけび、うたうた。明治の末期に俄然として日本の思想界のわかい部分を染め拔いた觀を呈した自然主義に、それの一例だ。

多少無自覺的に、沒反省的に現狀謳歌の心狀を保持した古代ギリシヤの思想界が、感情的、空想的主觀生活の範圍内だけに於ける現狀不滿の心狀に、クリスト教的、中世紀的思想界の特徵といふかたちを帶んで變化し、いはゆる近代と共に、歐洲の思想界はさらに變化して客觀的知識を内的主要條件とした意思の解放、保護、達成の興味と努力に代表される心狀に移つたが如くに、明治末期の自然主義にすぐ先きだつた時代の日本の思想界は自覺と反省に缺乏した幸福的心狀であり、自然主義時代の思想界はそれに對する多少の主觀的覺醒及び意識であり、同時代の人類社會の著大なる部分に於ける戰爭と革命をいはば眼前咫尺の距離に目撃感動して以來の日本の思想界は、事情の變改を基礎的情調とする性質のものに急轉直進して來た。

制度改造を直接の目的とする日本最近の思想界は、あだかも今回の震災が東京及び國内の人心に與へ及ぼした變化的影響にも似て、要するに歐米の意思のあらはれとしての戰爭及び革命の自然的震蕩波及に負ふところ著大なだけあつて、切實に自發的でない。それは、したがつて、十分に體驗的基礎ある認識活動でもなければ、評價活動でもない。それは讀書にもとづく概念

的エンシユージアズムを比較的に多量に帶び、感覺的、知覺的經驗にもとづく必至不可抗の本能と衝動を比較的に少量に帶んでゐる。それには模倣質が目だつ。

日本に於ける社會主義の將來は、模倣質が自發質に變化することによつて特徴づけられるにちがひないと、論理的に推定される。また勿論理想的に要求される。直接及び間接の經驗に對する反省の深全化と、直接及び間接の經驗そのものの豐富化、增大化とが、日本に於ける社會主義の將來を、現在よりも深く、廣く國民の常識、各職業、各專門に根生した、したがつて實行的、成功的可能の確實なものに變化させる必然は多少疑問だとしても、必要は不可疑だ。

社會主義に對して反對または無頓着の心狀にある現在の人々が、社會主義を研究して反省すべき餘地があると同時に、社會主義者自身も、なほ深く、廣く人性と社會を研究して、自己の現在の社會主義を反省すべき餘地がある。

現狀では、社會主義者は、十分なる人性主義者としての礎地を持つてゐないやうだ。けれども、いかなる特殊の主義も、人性主義の特殊の事情下に於ける、いはば時、處、位に於ける必要な在りかた以外のものであつてはならん。特殊の一主義が、人性主義以上の位置を自覺するとき、その自覺はさらに反省を要する不完全自覺だ。

經濟的私有制を環境とすれば、人性は嫉妬心を著增し、經濟的共有制を環境とすれば、人性は嫉妬心を著減することはたしかだ。制度の自由はその程度にまでは及ぶ。けれども、いかなる制度を環境としても、人性が、たとへばわたくしがこの文のはじめあたりで注意した愛憎、榮辱、利害、眞僞、美醜、肉體的快樂及び苦痛、正邪等の諸意識をあるひは持ち、あるひは持たなくなるといふほどの根本的變化は期待されない。それが期待される場合があるとすれば、その制度は、人性を保護する善制ではなく、人性を破壞する惡制であるにちがひない。

されば、制度變改は、人性をそれの根本質にしたがつて明確に全認しつつ、最も自然的に保存することを原則的目的とすべきだ。ここで人性の根本質と呼んだのは、破壞することはできても變改することはできない性質の人性要素をさしたのだ。破壞の結果は非存在であり、變改の結果は多少變はつたかたちの存在だ。たとへば愛憎意識、榮辱意識、利害意識等をば、根本的には、善制度であるかぎりこれを保存するほかない。ただ、なにを愛し、なにを憎み、なにを榮とし、なにを辱とし、なにを利とし、なにを害とするかといふ問ひに對する答へは、すなはち愛憎、榮辱、利害等の諸意識の內容または對象は、制度變改

によつて多少變改される可能がある。人間の制度變改力、制度創設力は、この可能に人性主義の見地からして最善の機會を與へることを目的として使用されべきだ。

一社會内の多數人に經濟的不自由、及びそれが必招する諸多の不幸福を强制することによつてその社會内の少數人の經濟的自由及びそれが必招する諸多の幸福を保存し、獲得することは、その逆の場合よりもわるい。しかし一社會内の大多數人の强制的不自由を犠牲して、その社會内の全數人を强制的に不自由にすることは一層わるい。また、すべての人々の經濟的不自由を救除するために、すべての人々の全人的不自由を强制することはさらに一層わるい。社會内のすべての人々の全人的自由の保護と增進とが常に制度の目的でなくてはならんからだ。

わたくしは、日本の近き將來に於ける社會主義は人性に對する認識及び評價を一層完全にしてき、日本の近き將來に於ける哲學は社會に對する認識及び評價を一層どころでなく無限行的に、すなはちはじめて新たに持つてくる必要があるがゆゑに、日本人の能力に相當してその必要を意識し、したがつて滿たすべく行動してくる必然があると考へる。

社會主義の人性化と、哲學の社會化が、先づ明日から明後日へかけての日本の思想界の輪廓的特徴だらう。勿論、その輪廓の内容には、たとへば國民主義とか、國際主義とかいふやうな事情も、またたとへば震災善後といつたやうな一層臨時的な事情なども、多少の條件的勢力としてはたらく具體的雜質が豫視される。

現存の社會主義の人性育と、現存の哲學の社會育とが、時と共にどれほどか意識されてくるだらう。しかるのちに、社會主義の共同戰線も、哲學の啓蒙も、深い、廣い、强い、そして成功するものとなるだらう。

民衆の社會主義への理解とその將來

千葉龜雄

社會主義といふよりも、むしろ社會主義者といふものだ、わが一般の國民によつて、どう考へられて居るかといふ事が、この大災のどさくさまぎれに行なはれた血腥い事件によつて、可なりはつきりと形態の上に分らせられたやうに思はれる。この憎惡は一體どこから來るか。ラッセルか、誰かも云つたやうに、とかく社會主義者とか、無政府主義者とかいふものは、いつも爆彈を抛げたり、暴力を用ゐたりばかりする人間の一團だと誰にも思はれ勝ちだ。けれども、一九一四年の七月に、サライヴオで オオストリイの皇太子に爆彈を投げつけたものは主義者ではなくて、却つてちやきちやきの愛國者であつた。わが國でもこの頃は、暴力を主義の實行の爲に公然用ゐるものは、主義者ではない。却つていわゆる愛國もしくは愛國黨と自稱する人々に多い。それに主義者だけが、暴力と爆彈の專門引受け手のように考へられて恐怖されて居る。もし主義者にせよ、何にせよ、たとへまたそれがどんな理想の樹立のためにせよ、日本國民があの未曾有の大災に遭つて、一列一體に底知れない恐怖におのゝいて居る刹那に、更にそれ以上の恐怖をもつてその國民衆の意志を強制し、その心理を脅かさうと考へるものがあるならば、それは狂人か何かの所業であつて、決して健全な理知をそなへた人間の所業では無い筈だ。またそんな非人類的な理想の執行が成功されるわけのものでも無い。衆の定あの當時、朝鮮人があらゆる暴行を働らいたと輕信された間違ひと同様に、社會主義者がそれを使嗾し、もしくはそれと共謀したといふ當時の輕信は、今や事實の上に段々と抹殺されつゝある。もとより社會主義者の人格や知識だつて、すべての主義者のやうにピンからキリまで差別がある。中には充分誤解をまねくやうな、所業や言行をやり或は輕はづみな人間が無いとも限らない。いな、さうした人々は、主義者の中に隨分ある。けれどもかの當時にあつて、眞の知識者である人々の中には、そんな理性を失つた政策を採り上げやうとする人間は一人も無かつたやうに思ふ。むしろ彼等は、この大災から來るところの、經濟上の壓迫を豫想し、明日からのパンの恐怖にふるひて居た無產階級であつたのだ。そして彼等の多くが多少の迫害に遭つたのは、みな、彼等が、社會主義の標抱者であるといふ、平生の豫感からやられた者であつた。

民衆はかくの如く社會主義者を憎惡する。もとよりそこには主義の眞義と取りはなして、平生の主義者そのものが、時代と社會に對する無理解から、もしくは、その人格の無自覺から、主義一のものの體現をあやまり、主義を誤解させる缺點も幾分かはある。たとへば、人類の進步は將來にある。然るに彼等が或

る場合に、一切の過去の試程が、そのまゝに將來に模倣されるものとし、それをそのまゝに實行しやうとするやうな、融通のきかない恐怖主義を、强いて主張しやうとする如きもどうであらうか。たとへ過去の人類のどんな過誤によつて、どんな恐怖すべき史實を過去に生んだにしても、その過誤を、過去のやうな恐怖手段に依賴する必要を俟たぬまでに、平和にそれを解決することが、次代民衆文化の創造であるわけでは無いか。唯物史觀の或る論理は、千古動かせない定義ではあつても、マルクスが生きた一八六〇年代には、デモクラシイの世界的響應は、まだ世界人類の上に生れて來なかつた。だから時代時代の進みによつて、マルクスの學說を修正したところが、それでマルクスの叛逆者だとはいへぬであらう。或はそれはマルクスの叛逆者であつても、世界人類への犧牲者であればそれは滿足されるであらう。

次にわが民衆が、社會主義を彼等が懷抱する故に社會主義者を、憎惡するのは、民衆が果して、社會主義の心髓を、理解しての上の行動であらうか、それとも全く理解しないでの所業であらうか。もし理解しての上ならば、それほど彼等の憎惡する社會主義政策の一端が、今回の大災において、わが政府に採用された結果を、×××××して居る理由はどこから來るか。即ち物資の徵集や、土地市有說や、暴利取締りや、たとへ意識しないにせよ、みな何ほどかでも、共產主義やその他の社會主義原理の幾分かづゝを加味したもので、それが或る點まで、民衆の苦難の生活を柔やげたものであり、さらばそれを延長して、なほどれほどでも合理的に、それを大規模に執行した時に、社會主義が何故に今日まで信ぜられたやうに、邪惡と社會安寧の××××と確信されねばならぬ理由があるか。

もとよりサンチカリストや無政府主義、或は極左黨社會主義から見れば、こんなことは社會主義でも何でも無く、一つのデモクラッチック・リベラリズムの少量に、社會主義の極少量を加味したぬえ的なばけ物に過ぎぬといふであらう。或は然らん。が、われ等は學校の生徒のやうに、一つの敎へられた學說どをりを、一歩も枉げずに實行しやうとする程に、いわゆる學說に忠實で、社會に不忠實なものであることは有り得ない。どんな學說も、所詮は人類の幸福の爲に生れたものである。人類の幸福を目標として、あらゆる學說を適宜に採り、或は切り捨て、そこに完全な理想の世界を造り上げるところに、始めて新文化の民衆の創造がある。外國にあるからといふて、直譯文明をそのまゝに輸入しそのまゝに押付けるのは決して創造では無い。外からではなく、内から考へるべき時だ。だからわれ等

は、現下以後のわが國に、現在行はれて居るどの社會主義だけが、どれにも増して行はれるかといふやうな豫想には、大した興味を持たないのである。

なほ、それにかゝわらず、われ等は現下以後のわが國に採り上げらるべき政策が、どうしても社會主義の便宜的交錯を、或る點まで大宗とせねばならぬことは爭へぬ大勢であるやうに思ふ。またその必至は避く可らざるもののやうに思ふ。現に社會主義を目の仇にする政府當局さへも、危急の場合には、今度のやうに意識せずに、社會主義の原理の或る部分を利用しやうとするではないか。そしてたとへば一時の大災の打撃によつて、日本資本主義は驚ろくべき逆退を示すだらうと思はれたのも、昨今の形勢によつて見れば、それは局部的には多大の痛手はあるものの、恢復は存外に早いやうに思はれる。むしろこの大災が、かへつて資本主義の急進と爛熟を早めて來て、そこに階級戰爭が、ますます急調になることが豫見し得られぬでもない。都市と地方における土地の大資本的私有、生産の搾取といふことも、地震前に繼續してますますその大勢を進めることもまた有り得るであらう。一方、今回の大災によつて、水を加味された社會主義、或はデモクラチック・社會主義の効能が、今まで理解されなかつた民衆の間にさへも浸潤して來つゝあるから、それを沮害しやうとする諸種の特權的占有主義や資本主義がその面前に現はれた場合に對しては、公然たる宣戰が隨所に火ぶたを切られるであらう。これは止み得ない大勢であるとして、さてその鬪爭の解決を、どんな手段に置くべきかは、それはその大勢の自然に任せるよりも、その大勢を自由に調節し得る民衆と統治者の知識文化の啓發程度いかんに待たねばならぬ。だから今日では民衆も統治者も、もう社會主義を一つの破壞主義として憎惡する時代ではなく、却つてそれを一つの政治的、社會的生活の原理とし、廣大無邊な人類的心臟をもつて、それに接觸し、研究せねばならぬ時代になつたのだ。

社會主義を人類解放の天啓として歡迎しながら、その解放される人類は衆愚の人類でありとし、藝術家だけは、同じ社會主義治下に居ても別の高い寶座に居ることを許されたいと考へるものは、オスカア・ワイルドである。社會主義の人類解放をエキスタアナルな生活の解放であるとし、人類はエキスタアナルな解放によつて、始めてインナアナルな解放に入り得るからとて、社會主義を歡迎するものはルドルフ・オイッケンである。つまり社會主義は、個人の解放に導く機縁であるから、それを歡迎するといふのである。個人個人の解放は、かくして個人の總額、卽ち全人類の解放に導びく、藝術家及び思想家が、多く無

政府主義に同情を持つ所以である。自由の喘ぎである。そしてその方策は何であるにせよ、これからの世界人類の求むべきものは、生活の自由と心靈の自由が、ぴつたりと合ふやうな社會そのものでなければならぬ。そこには心靈の自由をかいた自由な生活がなく、また自由な生活を缺いた自由な心靈が無い。

わが國では、民衆生活の社會的自由が容易に求め得られないやうに、個人の思想生活においても、またその自由が好い加減に壓迫されて居る。これはわが國の社會組織や、歷史的傳統が、他の歐米諸國と全く基礎を異にする爲である。が、××××××××××××××××。たとへかゝる場合におこり勝ちな、反動力の發生は物理的に止み得ないとしても、その反動力は、不幸にして對者の戰鬪力を益々高潮せしめるとも、決してその力を弱めることが出來ないほど、それほど寄せ手の熱情が强烈になつて居るのである。なぜなら、人類が生活と思想の自由を求めることは、決して一時の興感の爲ではなく、××××××××××××××××××××××××××××××××××××。

社會主義の將來

山川均

□

日本に於ける社會主義の將來如何といふ問題は、日本に於ける資本主義の將來如何といふ問題である。吾々には絕對の眞理はない。社會主義の眞理は、たゞ資本主義と相對的にのみ眞理である。そして社會主義が、資本主義發展の過程そのものによつて實現せられることを主張する限りは、社會主義の將來如何は、資本主義の將來如何が答へてくれる。

□

大震災は日本人の思想の上に、特にその社會思想の上に、どんな影響を與へたらうか。或る人々は、この自然の大破壞を轉機として、日本の思想界に一大變化のあつたこと、若しくは變化のあるべきことを豫想してゐるようである。自然の現象が、人間の思想に、影響を與へることは事實である。けれども文化の進むにつれ、人間の思想の上に及ぼす自然力の影響は、社會力の影響にその重大さを讓るようになる。若し大震災が、日本人の思想上の一大轉機となるとしたならば、それは自然の大破壞が直接に思想の上に與へた影響ではなくて、この大破壞が、社會生活の上に與へる影響の反映でなければならぬ。自然の大破壞が、直接人心に與へる衝戟は多かれ少かれ一時的である。之に反してこの大破壞によつて引き起され、または引き起されようとする社會上經濟上の事實こそ、日本人の思想を決定するものである。

そこで大震災が人心に與へた衝戟と思想上の影響に社會主義の將來如何といふ問題の解答を求めるのは誤つて居る。眞に此の問題に答へるものは、大震災が日本の社會生活と經濟組織に如何なる影響を與へるか、そして日本の資本主義に、如何なる變化を與へるかといふことにある。

ところが大震災が人心に與へた衝戟と皮相的な思想上の影響によつて、社會主義の將來を推測しようとする淺薄な考へと淺薄な企てとは到るところに現はれてゐる。そして其の最も淺薄にして最も淺薄なものが彼の震災當時に、××××××××××××××××××××。當時彼等は、その大規模な組織の力と、彼等のみが利用することの出來た通信交通の機關を使ふて、×××××××××××××××××に撒り播いた。彼等は極端な、思想崇拜者であつた。彼等は、人間は、少くとも日本人は、頭で立つて歩るいてゐるものと考へてゐた。そこで彼等は、全國の國民の頭に、彼等の毒素を注射することによつて、日本に於ける社會主義の將來を決定することが出來ると信じてゐた。けれども彼等は、日本に資本主義發展の進路には、少しの影響と變化を與へ得ぬことを忘れてゐたのである。

□

大震災が自然力の大破壞である限り、資本家階級に取つても無産者階級に取つても、均しく打撃である。自然の破壞力は、勿論、資本主義的勢力ではないが、その影響は、矢張り資本主義發展の進路を促進する。資本主義は自分に有利な影響にも不利な影響にも、有ゆるドサクサのあるごとに、その影響によつ

て、進むべき固有本來の進路に一歩を進めてゆくものである。資本主義發展の過程は、好景氣によつて促進せられるやうに、不景氣によつても促進される。戰爭によつて促進せられたやうに、自然の大破壞――國民が均しく蒙らしめられた打擊と災厄――とによつても、同じく促進せられるのである。こゝに資本主義發展の必然性がある。

震災が日本の資本主義に與へた直接間接の影響は、究極は資本の集中企業の集中を促進するものである。不景氣の影響は、既に震災以前から、金融業に於ても、綿絲業に於ても、その他の主要産業に於ても、合同の必要を來たしてゐた。そして震災の影響はこの傾向を促進するものであつても、決して之を阻止するものではない。東京は今、謂ゆる復興氣分に醉はされてはゐるが、復興の曙光は、決して中以下の資本と企業の上には輝いては居らぬ。東京の灰燼のうちから動きだしてゐるものは、より大なる資本主義に外ならぬ。そして政府の復興施設もまた、この勢ひを助けてゐる。支拂猶豫令は、その實績に於いて、銀行業の救濟に外ならず、暴利取締令は小賣商人を脅して居るにも拘らず、卸商人は地方の生産者に二重の仕切書を作らせることにより、巧みに取締令を空文に歸せしめて居る。商工業者の復活のために、致命的に重要な日本銀行の資金融通の如きも復興資金を要することの甚も急な小商人や小企業者は、殆んど全くその恩惠に浴することが出來ぬ。世間で最も喧しく云はれてゐる保險金の一割支拂ひにしたところで、纏つた金額を受けるのは、保險金を受けなくとも復興に見込みのある大資本大企業であつて、三千圓五千圓の保險契約をして居つて、保險金の支拂を受けなければ復興の見込みのない多數の被保險者は、僅かに三百か五百の涙金を貰ふに過ぎぬ。若し政府が、眞に誠意を以つて是等の市民の經濟的復活を助けようとするならば、大資本と大企業に多くの利益を與へるために、一億五千といふ莫大な資金を無利息同然で保險會社に貸下げる代りに、同じ資金を以つて、眞に政府の援助を必要とする小商工業者に對して、直接に資金融通の途を講ずべきである。

すべて斯ような作用の結果は、多數の小商人や小企業者が、獨立の地位を失ふて、無産階級に沒落することを意味して居る。

罹災地方に於ける勞働組合の受けた、有形無形の打擊の大きいことを見て、早くも關東に於ける勞働運動の前途を悲觀する者がある。また自然の破壞に對する復興の必要と大激變から受けた人心の衝戟を見て、今後の日本には、階級の協力が階級の鬪爭に代はるであらうと樂觀する者がある。彼等は震災の影響

がより大なる力を以て資本主義の發展過程を助け、階級闘爭の根底となるべく、幾多の社會問題と社會的現象を生みだした事實を忘れてゐる。彼等は事實に足を踏みたてることを恐れて、日本をして、頭で歩きしめようとしてゐるものである。

□

或人は社會主義者が大地震を引き起したようなことを云ひ、或人は、大地震が社會主義を揺り潰ぶしたようなことを云ふ。しかし社會主義が地震を指導する上に、幾何の力をも持たなかつたように、地震もまた、社會主義の上には、多くの力を持つことは出來ぬ。地震と社會主義とは、全くの他人である。

震災の當時、社會主義者と目せられてゐる一青年が、檢束を受けて某警察署に引致せられてゆくと、署長は血相を代へて、『君等はいよ／＼同志と謀つて事を擧げたな』と怒號したといふ笑ひ話がある。社會主義の根本目的は、資本主義によつて發達した生産力と生産機關とを、社會全體の利益と生存とのために、社會全體が支配し統制することである。社會主義の對象たる一切のものが消滅した焦土に立つて、社會主義者には、擧ぐべき何事も無い！。天災による人心の極度の動搖不安に乘じて、社會主義者に關する小說的の流言蜚語を放つたり、無批判に此の種の爲めにする流言蜚語に惑はせたりする人々は、要するに社會主義そのものに對する智識が、この一警官以下でないまでも、以上でないことを暴露したものに過ぎぬ。

□

驚くべき自然の破壞力は、日本の資本主義を破壞しなかつた。社會主義が若し何等かの影響を受けるとしたならば、これは必然に、科學の社會主義から實行の社會主義に推移することである。何故ならば、大震災の影響によつて必然に起るべき資本主義の發展は、日本の社會主義をして、最早や何時までも、革命的理論の領分に縮ぢこまつてゐる必要をなくして、實際問題に對する大衆の運動たらしめるからである。災後の日本には、全國民をして資本主義的政策と社會主義的政策との間に去就を決せしむべき幾多の實際問題が續々として起つて居る。

丸ビル時代と社會主義

室伏高信

一

日本における社會主義の將來といふ問題は二つに分けて考へられる。一つは社會主義が外部に對する場合、即ち主として社會主義と資本主義との關係である。第二は社會主義の内部における問題、即ち廣義の社會主義が、その内部において將來如何なる變化があるか、若しくはないかといふの點である。

前者の場合から考へて見る。先づこの意味で社會主義の將來が問題にされるやうになつたとすれば、社會主義の信用が缺乏して來たことを意味する。ブルジョアの讀書階級の間で社會主義の流行が去つたことは疑ひの餘地がない。特に大地震以後反動思想が著しくもり返してきたことは爭はれない。二、三年前まではブルジョア階級の間であつても、多少にても物事を考へ雜誌でも讀む人たちだと、來るべき直後の社會が社會主義の社會であるであらう位ひには考へてゐた。それが大地震以後は全く形勢の一變を見た。地震は資本主義を揺らないで社會主義を揺すつた。勿論、勞働者はこのところ仕事も多く、景氣もよくブル氣分でゐるものも少くないやうである。これに反してブルの方にも大分不景氣なものがあり、就中プチ・ブルが地震で可成りの痛手を負ふたことも事實である。けれども一つのブルが仆れても他のブルがそれに代つた。小ブルが仆れて大ブルがそれに代つた。資本集積、中産階級衰頽の方向へと一歩を進めた。思想的にはこの形勢は一層にそうである。大ブル全盛の時代が開かれた。小ブルと封建の分子が縮小されて大ブルが益々榮ゆるの時代がきた。今日は丸ビル時代である。地震後の日本は丸ビル時代である。人々は丸ビルを崇拜する。價値は今や並的觀念である。算盤玉によつてはじき出すことができなくては價値ではない。大きなものは價値である。大建築、大量生産、

五百萬圓の寄附者、四十間道路、大政黨、大國家、野田卯太郎、大きなものが崇拜されて質的觀念が沈んだ。文化が死滅して文明が勝利を占めた。新らしい東京は純粹なる世界都市として立つであらう。丸ビル時代とは世界都市時代なのだ。Sieg der Weltstadt über das Bauerntum —— 沈みかかつてゐた農民は一層に沈んで世界都市が凱歌を擧げつゝある。世界都市時代が文明の時代なのだ。日本は純粹文明の時代に移つてきた。こゝに丸ビル時代がきたのだ。純粹資本主義の時代がきたのだ。大ブルが活躍するの時がきたのだ。

丸ビルが流行する時は社會主義が流行しない時であるごとくに見える。道樂半分の社會主義が衰頽するでもあらうことは明らかである。けれどもそれは社會主義の衰頽とは何のかゝわりもない。社會主義は益々根強くもなり、益々深まつても行くであらう。私はカアテルやトラストや、資本集積が社會主義に到達する道であるといふのマアクス主義を信んずるがためではない。資本集積はマアクス主義には近づくにしても、共產主義には遠ざかつてゆくものだと思はれる。人類は共產主義から出發して文明に、都會に、金錢に、資本主義にまで變つてきた。資本主義の發達狀態としてのカアテル、トラスト、資本集積は、共產主義から最も遠い距離に立つてゐる。それが近づこうとするのは共產主義へではなくて國家社會主義へである。國家社會主義は共產主義から見ると想像することのできる最遠距離に立つであらう。そこが文明の最高所、智の最高所なのである。

けれども文明と人間とは兩立することができるものでないといふのが私の考である。そこで文明がその力を用ゐ盡した時に文明の沒落がある。ロオマ文明が沒落したように、近代文明も沒落すべき運命にある。その兆候は既にいろ〳〵の方面に現はれてゐる。その文明の沒落する時に資本主義が沒落する。私はそうした意味から文明が完成されてゆくことは何等の悲觀をもつものではないのである。

社會主義の時代がかくして丸ビル時代につゞくのである。

二

社會主義自體はどうなりゆくであらうか。英國や獨逸でそうであつたやうに、政治的民主主義とともに行くであらうといふ兆候は既に顯著である。普通選擧の聲を聽くまでは、日本の勞働團體は、ボルとアナとの二つに分れた。頭腦社會主義は勿論これに先つてアナとボルとの二つに分れてゐた。ボルとアナとのほかは社會主義者でもプロレタリヤでもなかつた。ゴムパアス的傾向の人も、若しくはギルド社會主義、社會民主主義の徒

派に屬した人たちでさへ、最近にはアナかボルかの二つに分れてゐた。堺利彥氏のような今日では生粋のボル的共產主義者と思はれてゐる人でさへ二、三年前までは純粋のカウツキイ黨員であつた。大正九年末に同氏が「新公論」のために書いたものには明らかにこのことが記るされてゐるのである。片山潜氏にしても同じく社會民主主義であつた。私は一日倫敦でハインドマン（今は故人となつた）とベルフオド・バックスと同席した時に片山氏の話が出たが、その時ハインドマンはまだ片山氏が第二インタナショナルに屬するとばかり思つてゐた。その人がボルシエヴヰキとなつたといふことを私から聽いて、二人の老人は非常に驚駭してゐた。かくして日本における社會主義の分野が、狂風のような勢でアナとボルとの二つの陣營に分れてきたのである。この傾向のうへにも、最近にはしかしまた一つの變化が起つてきた。普通選擧の影響がこれなのである。普通選擧の實行は勞働運動を、若しくは汎く社會主義思想を再革命しつゝある。勞働黨運動、若しくは山川君の所謂フエデレエテッド・フアマアス・エンド・レエバア・パアテイの要求がこれなのである。

今日謂はれてゐるところの勞働黨運動なるものが如何なる內容をもつてゐるかは尙ほ不明である。その中にはボルシエヴヰキもあるであらう。社會民主主義者もあるであらう。ヘンダアスン・トオマス・エンド・コムパニイの一派もあるであらう。これ等のものの如何なる分子が將來勞働黨ができるとしてそれの支配的地位を占めるであらうかは不明である。今日まで日本における勞働運動の政治派は主としてボルシエヴヰキであつた。その點からすると將來勞働黨の指導分子は今日ボル陣營のうちにある人たちなのかも知れない。またボルの戰術としては例のZellebildungの方法もあることであるから勞働黨を先づ造り各種の社會主義者、半プロ、半社會主義者なぞの絹綿交ぜ織りの政黨を拵らへ上げてそれをボルによつて統制しようとする方法が行はれないとも限らない。特に日本の勞働者には堅固にして大規模な組合もなく、從つて政治運動の基金もないことであるから、ボルのごとくに、ロシヤ政府から財的援助をうける可能性のある一團がこの間に勢力を占めるであらうことも容易に考へられないことはない。またボルシエヴヰキが勞働黨の內部に參入しようとする運動は現に英國でくり返されてゐることでもあるが、英國で縱令ボル派が勞働黨に入つたとしてもそれが勞働黨を左右するであらうといふことは一寸想像することができない。日本ではどうであらうか。日本に先づ勞働黨ができるとしたら、それは英國の勞働黨程度の日和見的なものであるに

相違なからう。獨逸の社會民主主義よりは遙に妥協的なものであるであらう。ボルシエヴヰキは勿論彼等の原理を捨てねばならぬ。勞働者の獨裁といふごとき原則は直に放棄しなくてはならぬ。その唯一の守本尊はこれを捨てねばならぬ。從つて第三インタナショナルの加入條件はこれを大部分放棄しなくてはならぬ。即ちボルであることからボルでなきあるものへと變つてゆかねばならぬ。彼等の攻擊してやまざるエス・エル黨カウツキイ一派よりも更に〳〵日和見主義へと退却しなくてはならぬ。足利織から木綿織りへと行かねばならぬ。日本のボルシエヴヰキはこれに堪ゆるであらうか。堪ゆるか否かは別として、兎も角、日本の社會主義運動が、アナ、ボルの極左黨から勞働黨の最右翼へ向つて中心を移すであらうことは既に明らかである。政治的非民主主義から民主主義へ、獨裁主義から民主主義へ向つて進みつゝあることは最早や掩ふことはできない。

そのうち最も妥協的なものは「フエデレエテツト・フアマアス・エンド・レエバア・パアテイ」といふ種類の運動であらう。V.B.A.P. といふものが成立しないことはない。現に政友會のような V.B.K.P. が存在してゐる位ひであるから V.B.A.P. もまた可能性がないことはない。たゞそれが可能であればあるほど、それはエス・エルを理想とするものだといふことができるであらう。エス・エル黨成立すべきか。即ち V.B.A.P. 成立すべきか。日本の勞働運動が政治を利用せねばならぬとしたら、若しくは一派の勞働政治家の諸君が考へてゐるごとくに、政治によつてのみ勞働者が救ひうべしとしたなら、共產黨運動の代りに、人々はエス・エルを選むのほかはないであらう。現に日本のあるボルシエヴヰキは「勞農黨」なるものの將來を豫想して福田德三、吉野作造、大山郁夫等の諸君が代議士として當選するだらうといふてゐる。然らばそはエス・エルより寧ろカデトである。プレフアノフでなくてミリユコフである。

幻影の大衆から大衆の實體へ

青野季吉

一

大衆的でなければならぬとか、大衆を率ひなければならぬとかいふ言葉が、この一二年來、日本の社會主義運動の陣營内で一種の流行となつてゐた。運動が大衆的でなければならぬのは、始めから判り切つてゐる話で、事新らしく呼ばれるといふのが元來可笑しなことだが、とにかくさういふ方に注意が喚起されて來たといふことは、かなり大きな意義を有つてゐる。

ところで、果してこれまでの日本の社會主義運動が、大衆的であり得たか、大衆的であり得る準備を具へてゐたかと考へて見ると、遺憾ではあるが、全くその反對であつたと認めないではおられない。なるほど、尤もらしく標語は掲げた。しかしその標語は、結局附焼刄の標語に終つて、運動の實質は、依然として、大衆から離れたものであつたと認めないではおかれぬのである。

たしか伊井敬君だつたと思ふが、これまでの日本の社會主義運動は、「一本の赤旗」を衛ることにばかり努めて來た、といふ意味のことを、何處かで述べてゐたと思ふ。まことにその通りである。旗手及び旗手團に、幾度の代謝が行はれ、そこには、尊敬す可き多くの戰士を見出したが、殘念ながらそれは結局一本の赤旗を衛つて進んだに過ぎない。後衛たる大衆との距離は次第に遠ざかりはしないまでも、少しも短縮されなかつたことは、明らかに、これを認めなければならない。

たとへば今回の震災中の出來事を見てもそれが分る。今日の日本の大衆が、いかに思想的に遅れたものであるか。社會主義思想に對するほんの僅かな理解さへ、大衆の間に見出せない實相は、あの場合の諸事實が、手痛いまでに證明してゐる。現在の日本の大衆は、社會主義思想どころの騒ぎでない。自由主義

想念へまでも、まだだいぶ距離があるのである。封建的情意の殘滓などといふものは、西歐の資本主義國にあつて、即ち、資本主義が自然な經路をとつて、發達して來て、それに伴ふ想念の自然に醸成された國々にあつては、今日あまりに亡靈的であるが、すべてが自然でなく、集縮された形態において進行して來た日本では、それは決して亡靈でも何でもなく、立派な體を具えて生きてゐるのである。もちろんそれは、大衆の想念の復雜した構成の一部を引合ひに出して見たまでであるが、凡てがそんな調子である。社會主義は、今日まで、日本の大衆の實體に對して、何の觸手も持つてゐないのである。

云ふまでもなく、日本の社會の經濟構成は、『晩期資本主義相』とも、又『初期社會主義相』とも名付けらる可き實質に押し進んでゐることは、世界經濟の中につゝまれてゐる當然の結果である。しかし、その機械的必然的進行と、想念の問題とは、また別物である。普通に平面化された史的唯物觀では解されぬ、複雜な構成を持つのが、生きた社會である。社會主義的思想がすぐ、日本の大衆の實體に觸れないとしても、それは決して不自然な現象でも何でもないのである。

また日本の社會主義運動が、まるで誤つた方向を執つてゐたとか、有力なる闘士に事をかいてゐたとか云ふことから、この結果が生じたものでもない。今日までの受難の道はそれより外にない道であつた。一本の赤旗を衞り續けることが、出來得る最大であり、その意味に於いて、最善だつたのである。大衆的でなければならぬ、大衆を率ひなければならぬとの標語は、寧ろ、新出發の準備の掛聲だつたのである。

しかしその新出發の準備は、どの程度まで全ふされたかと考へると、まことに心細い次第である。新出發の準備には、またそれに應じた新分子とも闘士とも名付けらる可きものが必要であるのは、云ふまでもないことである。ところで、その新らたなる戰士は、從來の社會主義運動の陣營内に於いて、少しも養成されて居らなかつたといふのが、その實狀である。隨つて新出發の標語は掲げられながら、依然として社會主義原理論に終始し、少數の進んだいはゆる闘士群を目標とし、それを幻の大衆として運動が續けられたのである。例へば組合運動の方向でも、まだまだ戰闘的少數といふ、サンヂカリズムの亡靈にとりつかれて、戰闘的少數理論の眞髓たる、それを支持する組織勞働階級の大衆の編成といふ方へは、あまりに注意と努力が注がれなかつたし、また組合勞働者は、無産階級の大衆ではなく大衆のホンの一部に過ぎぬものであつて、それを圍繞する大衆

の、消極的な支持にしろ、とにかく何れかの理解を持たなければ、組合運動そのものも、決して孤立的に發達も生長もするものでなく、しかもその關聯する大衆を、思想的に引付けるのが社會主義運動の一面の重大な任務であるといふ方へは、まるで目がとゞかなかつたと云つていいのである。かう云ふわけであるから、社會主義運動が、非常な勢ひを以つて、ボルシエヴイズム化されたとは云はれながら、眞にボルシエヴイズムを解し眞のコンミユニストたる分子は、極めて寥々たるもので、依然としてそこは、アナルコ、ザンヂカリズムの妖魔が出現し、ネオ・ブランキーズムの小悪魔のはびこる舞臺だつたのである。

かう云ふ實狀が、震災の經驗の洗禮を受けて、どれだけ變化すべきかは、俄かに斷じ難い。否、震災の經驗などはどうでもいいとしても、その以前からの新出發の準備の叫びだつたところの、大衆的でなければならぬとの掛聲が、どれだけ實質的なものとなるかは、容易に憶測を下せない。しかし、とにかく所謂共産黨事件の、手痛い打擊を受けて、小さく底へ固まらうとする運動傾向の結果について辛い經驗を得、震災によつて現在の社會の思想的構成の複雜なることを、余りにも殘酷に見せ付けられた以上、今後、日本の社會主義運動が眞に大衆的なる方へ、『方向轉換』を全ふし、幻の大衆から大衆の實體に觸れる方へ、鋭い角度を以つて、進む可きには豫測するに難くはないと思ふ。それでこそ、大衆的でなければならぬといふ新出發の準備の聲が、始めて意義をなすといふべきである。

こゝに日本の社會主義運動の大衆的への新出發に對して、重大な關係を持つのは、普通選擧の實施の近きによつて刺激された無産階級の政治行動、云ひ換へると議會行動――議會行動を離れた政治行動などは、全く意義を爲さぬ――のである。思ふに大衆を率ゆるといふこと、大衆的であるといふことは、大衆の方面の、政治的、經濟的の利益のために、力強く戰ふといふことである。そしてその戰ひによつて、反對の陣營の政治的術策と、思想的幻術とに引摺られてゐる大衆を、そこから解放し階級的の意識を目醒ますことによつてそれを引付けるといふことである。而して大衆の當面の政治的、經濟的のために、『力强く』戰ふ一個の有力なる舞臺として議會を無視するのは、いや、重大視しないのは、大衆的である有力な武器を棄てるに等しいことは、大した思考をめぐらさずして明白である。議會行動の是非は、最早、日本の社會主義運動の論爭の問題でなくなつたのは、とにかく一進化と云つていいが、議會行動の意義を

發揮するために、當然執る可き道に關して、依然として宗派的、原理論的、孤立鬪爭的な空氣を享樂してゐるが如きことがあれば、それこそ社會主義運動の進行上、致命的と云はなければならぬ。

云ふまでも無く、社會主義運動は、單なる反抗運動でもなければ、宗派的結成の運動でもなく、大衆の支持によつて、社會××××××××可く運命付けられた運動である。しかもその大業は、政權×××××くしては行はれぬことは、先進國の無産階級によつて教へられた所である。しかしその政權××なくしては、新社會の基礎工事たる組合(Associotion)の生長も覺束ないことも、これまた儼たる經驗的の事實である。されば、日本の社會主義運動の將來の進展如何は、この際、政治行動に如何に正しく振舞ふかに、懸るところ大なるものがあると云つてよい。

思ふに大衆の社會主義化と、社會主義者の運動とはまた異つた二つのものである。社會主義者の運動は、大衆の社會主義化にとつて、必らずしも大きな領域を占めるものではないであらう。しかし社會主義者の運動如何によつて、大衆の社會主義化の進度の左右さる範圍は、必ずしも小なるものではない。されば、社會主義の將來にとつて、大いなる樂觀を持つことと、社會主義運動の將來に向つて、多少の疑惧を持つことは、私等にあつて同時に存し得ることである。(終)

東西の美術を論じて宋元の寫生畫に及ぶ

岸田劉生

今日支那の畫と云ふと、大てい山水畫や水墨の南畫等を想ふ樣である。そして宋元あたりのこの小さい寫生畫は一部鑑識の高い人たちをのぞいてはあまり顧みられないといふ傾きがある。

勿論山水畫でも南畫でも立派な作品は澤山にある。殊に唐宋時代のまだ南畫北畫の形式の區別のない時代の山水畫又は墨畫などには神品と云ふ可きものがある。王維筆と稱される瀧の圖や夏珪筆の山水、牧溪の墨畫等といふものは私がそれから敢て賛しやうとする宋元の生物寫生畫をしのぐ程の神韻を持つてゐるかもしれない。がそれ等のものゝ價値については、もう可なり充分に云はれた事であらうし、又人々もそれを認めてゐる事と思ふ。尤も、それ等の或る見方なり價値なりに關して、私には私一個としての考もあるが、それは又他日にゆづる事とし、今日は、まだ充分に一般的になつてゐないこの宋元寫生畫の眞價について考へるのが至當であらうと思ふ。

勿論、この宋元寫生畫とて、一部の本當に理解ある鑑賞家なり藝術家なりによりて充分に鑑賞されその眞價を認められてはゐる。

しかし私は特にこの宋元寫生畫にもう一歩深い反省と味識を促したいのである。其處には案外の寶がまだ〳〵秘くされてあるかの感がある。此處には案外に近代及び未來の最も確實である可き藝術と深い交渉のある一境が靜かに眠つてゐる様に思はれる。

宋元寫生畫の事を考へる前に、吾々は、支那の美術の價値と位置について考へる必要を感じる。そしてその支那の美術の中での宋及び元の兩時代に於ける作品の位置を考へなければならない。

東西兩洋の美術のどちらが優れてゐるかといふ事は中々難かしい問題であつて、これを己れの趣味や郷土的理解から俄かに斷ずる事は本當ではない。要するに、西洋でも東洋でも優れたものは優れたものなのであつて、御互に長所もあり又短所とするところもあらう。しかしかう云つてしまふ事はたやすい事で吾々はもう一歩も二歩も深くこの問題について考へてみる事を促がされる。

しかしこの可なり大きな問題を今日の私が充分に解決しつくす事は出來ない。それにしては私はまだ第一に見聞が足りないし修業も足りない。しかし私かに思ふところは持つ様になつた。これは自分の仕事の修業と、いろ〳〵の鑑賞や見聞からだん〳〵と得て來たもので、今では相當に確實なものとなつてゐる。が今日では私はこれを私見以上のものとする事を遠慮して置かうと思ふ。勿論かく私見としてども公表する以上は他日私見とのみしないですむといふ幾分の自信を藏してはゐる。がまあそれはどうでもよいとして、私の私見としては、東洋の美術はその深さと澁奥と味ひとに於て、どうも西洋の美術の上にあるものであるといふ事である。

この私見は、自分が東洋人であるために、殊に東洋の味がよく分るために生れたものでない事、更に又それは決して單なる味ひの上の好きこのみではない事等については出來るだけの反省を以て確め得たところである。勿論、私は、郷

土的な原因から特に、東洋のものを西洋のものよりよく理解し、又好くであらう。それは、自然の理で致方がない。又味ひだけの好き嫌ひから云つてもやはり私の好みは東洋に落ちつく事になる。しかし私はそれ等の事のために批判を誤る事のよくない事を充分に知つてゐる筈である。これ等の事は藝術に於ける味ひ以上のものに關して深く考察し得ればよいのである。「味」といふものは、元來、精神的であるよりもむしろ、官能的のものであるから、郷土的原因から來る本能的な好惡に支配され易いけれど、味を超へた、藝術境に至ると、それは官能以上の藝術境であつて、其處には精神とか、「心」とかいふものが必要となる。この精神とか、「心」とかいふものは、官能以上のものであつて、郷土的原因から來る好惡等の力の至り得ね世界、それ以上の廣く深い世界である。

藝術作品の美感に於ける。形而下の快感と、形而以上の快感とこれを呼ぶ事も出來るが、この形而以上の快感、即ち形以上の美の世界の感銘は人間の精神生活にとつて喜ばしい幾分倫理的な感じのともなふ底のもの、即ち、無限とか、嚴肅とか、神秘とか、幽玄とか、靜寂とかいふものであつて、これ等の感銘は、言ふ迄もなく、官能以上の感受性を持たぬものには感じられぬものであり從つて、郷土的本能の支配はうけない。事實、日本人でも支那人でも西洋人でも度人でも、精神文明といふものを所有する程度の文明人であれば、等しく感受し得る超民族的感銘である。

かういふ、藝術上の形而以上の世界に於いて東西兩洋のそれを比較すれば、そこに幾分の味ひに對する好きこのみ等の邪魔があるにしても可なり公平にそれを批判出來る筈である。しかし、その事は、この藝術上（美術）のそういふ超形而的世界、即ち最も深い世界を明確に、透徹的に觀照し得ないと中々難かしい。私が私の考を、まだ私見であると謙遜するのはその點、私の見聞や修業がまだ〳〵であると思ふからである。が、しかし私見としてのべるだけの自信を以て言へば、どうも、東洋美術の心境が、西洋のそれよりも少くも一歩深い様に思はれるのである。

が、こゝに東洋といふのは、主として支那の事である。支邦以外の國では日本より外にこの光榮を持つ國は東洋にはないが、そして日本にも支那の偉い畫に比べられる程の畫がない事もないが、しかしそれは支那にくらべては誠に微々たるものといふ事をまぬかれない。

支那の美術が西洋の美術よりどうも深い樣であると只云つたゞけでは理論にならないが、この事を充分に說明するのは中々難事の樣であるし今日はその機會でもないからそれに多くの力を費するを避けたいが、しかし、理論の無い斷定は空論に近いものだから。少しくその問題も考へてみる事にする。

支那の美術にあつては、その形而以上的世界は少くも(西洋にくらべて)一層深遠の感銘を持つといふ事が出來る。よく人はその代り西洋の美術は現實に徹してゐるといふ。しかしこの言は美術の事を知らぬ半可通の言であつて笑ふ可きものである。現實を深く見たのは西洋ではなく東洋である。否支那人である。後にくわしくのべるが、さういふ點で宋元の寫生畫程深い寫實境を持つたリアリズムは西洋には先づないのである。西洋を寫實の國の樣に云ふのは、まだ藝術としての寫實の境地を本當に知らぬものゝ言である。なる程西洋の美術は實物によりよく似て居やう。しかし、極めて少數の、——一人か二人位の畫家をのぞいた一切の畫家の寫實は寫實だけとしてみたら實は甘いものである。寫實の妙諦は、外形卽無形の美となる一境にある。實物の形、色、質それ自身が直ちに一種深い美の感銘になる事にある。この境地を持つた寫形をした畫家に西洋には、わづかにヤン・フアンエツクと、セザンヌ位のものデウレルの寫形に幾分その味をみる位のものである。レオナルドも或る意味で形と色と質とを通る美のモチイフにしてゐるが、そこには多分のロマンチズシム(高いものであるが)を含む他の諸天才たちの仕事の境地は嚴密な意味に於ける寫實境以外のところにその生命を置いてある。

これ等の言に對する理解は、美術上可なり專門的な境地の實感を必要とする。さもないと一寸言をこのむ様に聞えるかもしれない。しかし事實なのである。西洋の畫が寫實で、東洋の畫が超現實的であるといふのは、外見上の見で、西洋の畫が如何にも本物らしいからといふのに止まる。

のみならず、この西洋の畫が、本物らしくかける、材料と教養とを持つが故に、つい〳〵只の實物らしく出來るといふ誘惑に引き懸つてしまつて、それがそれから先の一層深い寫實境に至る邪魔となつたのである、西洋の畫がそれだからいけないといふのではなく、それだから、かへつて西洋には本當の生一本のリアリストが極めて少いといふのであるかくて西洋の畫をリアリストの境地から離したものは、その外見的寫實性であるのは妙な現象、否、實は自然なる現象といふ可きである。西洋の美術はかくて他の方面にその美の表現を求めて居る。そしてさういふ風に行かないものはたいてい中途半端な寫實に引つかかつて、だるい仕事をしてゐる。ヴアン・ダイク、チチアン、ホルバイン、ヴエラスクエス、クールベイマネ、モネ等數へれば甚だ多い。これに對し、レオナルドでもアンヂエリコでも、デオツトオでもリユーベンスでも、又ゴヤでも、ドーミエでも、ドラクロアでも、ルノアールでも、偉い畫家や相當善い畫家は皆、嚴密な寫實家ではなく一種別のところにその藝術的生命を開いてゐる。これに反して支那の宋元寫生畫の寫實境は實に寫實として深いものである、がその事について後にのべる。

かくて、支那は超自然的、幽玄、神韻等について偉大かもしれないがそれ以上に西洋は現實に徹してゐる點で東洋より偉大であるといふ言は皮想の見である。

只、東洋の陰的なのに比べて西洋が陽的であり、東洋の神秘的なのに比べて西洋が現實的であるといふ事は事實であるかもしれない。が、この事はむしろ西洋美術の價値を唱ふるためには不利な事である。現實に徹するのでなく現實的

であるといふ事は藝術としていゝ事ではない。かく云つたからとて西洋美術の價値はそんなに安價たものだと云ふのではない。只東洋——支那の藝術に比べては幾分現實的な感銘があるといふのである。

しかし素直なる直覺に於て、陰の感じは陽の感じよりも一層の含蓄を感じる事は否み得ないと思ふ。陰なるものは必ず陽なるものよりも深いといふのではなく、感じに於ての陰と陽との事である。即ち陽の感じは動を思はしめ、陰の感じは靜を思はしめる。

西洋の美術にも深い靜寂境はあるけれど、東洋藝術のそれに比べると一寸へだゝりがある樣に思はれる。東西の藝術を藝術全體として對比してみると時、どうも東洋の方が靜的で西洋の方が動的であるといふ感銘を得るのは否み難い事實である。

西洋の美術は美が露骨に生きてゐる。その美は無論深い。しかし何だか、それ丈けの樣な、もの足りなさを感じる。西洋美術だけ知つてゐればその樣な感銘を與さぬかもしれないが東洋の藝術を知るとその感じを否めなくなる樣に思はれる。

東洋の美術を見た目で、西洋の美術を見ると、ともすればそれが『作られしもの』といふ感じを與しやすい。板の上に、紙の上に、壁の上に、布の上に、畫家の精神と、美意識と、熟練と、勞力、とを以て、深い美くしいものを、作つてあるといふ感じである。言をかへて云へば、西洋のものは東洋のものゝ自然物的なのに對し、金族的で機械的で人爲的な感じを持つ。あの美くしい、レオナルドの草花の素描寫生にしても、これを、宋畫あたりの草花の寫生のそばへ持つて行くと、何となく作りしもの、美くしきものといふ感じがする。幾分意志的で又意識的に見へる。

このレオナルドの素描について云へば、其處には紙と鉛筆の線がうづまく如く引かれるところの効果から來る美感と

白と黒とのとの交錯が起す銀の彫物の様なノーブルな美くしさと素描的要素の緊密によつて生ずる深い美と、寫形によつて生じる美化された實物感の一種の詩情と實在感との一緒になつた様なさやしい、しかも強い美と、これ等のものがその美的要素となつてゐるが、これを支那の畫のそばに持つて行くとこれ等のものが、すべて輕くさへ見へて來る。美くしいとは思ふがどうもそれらの美的要素の計畫が計畫としてみへて來る。つまりそれ等の美的要素が一つにならないで要素のままで目に入つて來るかの感じが幾分するのである。

これに對し支那の畫は、偉大な「間ぬけさ」を持つて居る。支那の畫を見ると、美的要素が西洋の畫程露骨でない。無論、深い計畫はあるのだらうが、それがみへない。西洋の畫でもいゝものはそれがすぐに見立つのではないが支那の畫のそばへ持つて行くとそれが見立つのである。支那の畫でも、或る畫をもつと偉い畫のそばへ持つて行くとそれが見立つかもしれない。

が大體に於て支那の畫は西洋の畫に比べて自然物的である。意志的でなく、無意志的な深さを持つ。

又味について云ふならば、西洋の美の味覺はどうしても甘く。東洋のそれは澁さ或は苦さを持つ。ゴヤの如きものでも、甘味からはなれない。これに比べて顏輝（元人）の寒山の如何に苦い事であらう。

又西洋には先づ絶體に無くて東洋にある一種の味に「さび」といふ感じがある。これは味といふにしてはもう少し精神上の感じであるが、藝術に於てこのさびは如何に深い境地を暗示する事であらう。

要するに西洋の審美は、若く生んとしてゐ、東洋の審美は老熟と落ちつきを持つてゐる。いづれが尊いか、いづれも尊いものであらう。しかし既にいづれが尊いかと云へばそれはどうも老の方が尊い筈である。

しかしこれ等東西兩洋の藝術の比較は本論でないからこれ位にしておかう。又東洋藝術が西洋藝術に優るか否かと

いふ事については他に多分の考察の餘地もあらう。西洋の美術には單に若く生々としてゐるといふ以外にまだ別の深い美點がある事も認め得る。レオナルドのモナリザや、ヤン・フアンエツクの肖像畫等は支那の一流の作品のそばに持つて來てもたぢろがない深い主觀と洞察と熟練とを示してゐる。しかし大體に於て前述の私見は不當の考ではないと思ふ。藝術の最深境に於て支那はどうも世界の長である樣な氣がする。がそれ等の比較問題はこれで擱いて、これから支那の美術の事をもう一歩進んで考へてみやう。

支那の美術には偉大なる間ぬけさがある。この間ぬけさは支那の國民性から來るものであらうがこれの深い感じが即ち「仙」である。それは一種の深い稚拙感であり、深い現實感の拒否又は缺除である。これを繪畫の造形上から云へば一種の寫實の拒否又は缺除となる。

普通この事は象徴といふ字を以て云はれてゐる。象徴とは、現實を非現實な形を以て暗示し、以て現實の眞相を摑まへる事の謂である。私の謂ふところの、現實感の拒否、寫實の缺除等の言は象徴といふ言を一層明確に說明したものと思へばよろしい。

ところでこの象徴乃至　現實感の拒否の仕方なり結果なりが支那の美術にあつては大體「仙」の感じになる。元來「仙」といふ感じは支那獨特の深い境地であつて、この感じは西洋のものではない。

勿論支那の畫にも必ずしもこの「仙」の感じのないものもあらう。又畫境として大切なのは神韻とか氣韻とか云ふものであつて、支那の畫にあつては、その神韻なり氣韻なりが、どこか「仙」といふ樣な感じで感じられるか、又はその神氣の一境が「仙」といふ樣な感じの中に表はされてゐるかの場合が多いのである。

次に支那の美術は、西洋の美術に比べて、「美くしさ」の意識が拂はれてゐる。この事は先に東西の比較をした時にも

一寸述べたが、支那の美術には只に美くしさの意識が見えたぬのみならず、多少の「非美感」を見る事が多い。私はこれ迄二三度、東洋藝術に於ける「卑近美」について述べた事があるが、それは卑近美と云つてもいゝが、とも角も、一見卑俗なるかの如き、又醜いかの如き、美と反對な感じを往々支那の畫の中に見うける。

この味は多分、野蠻味が文明の爛熟によつて味はれ嗜まれて一つのより深い、美的境地を暗示する要素として、リファインされ生かされたものであらう。がそれは、一面であつて又他の一面には、野蠻味が文明の成熟する時代にあつても、排滅され切らず、民族のどこかに殘つてゐて、その感じが、深い天才の心に生きたものとも云へる。つまりその両方であつて、排滅され切らぬ野蠻味を、深い藝術的天分によつて、深く味ひ嗜み、リファインし生かして一つの藝術的要素としたものと思へばいゝであらう。この味は支那のみならず日本にもあるがしかし日本のは支那のよりずつと意識的で一層、嗜まれ、リファインされてゐる。支那のそれにはどこか、自然的な、しつこいところが多い、國が大くて古い故であらう。

だから西洋の美術の「端美」なのばかり見つけた眼にははじめ支那の畫は美くしく見へない事がある。事實支那の畫は必ずしも、所謂、美くしくないものが多いのである。積極的に、非美的でないものでも「美的」ではないといふのが多い。一見、實に美くしいと思ふのもあるがしかし、西洋のものに比べる時はそれ程にその「美しい」といふ方面が見立たなくなる。

事實、支那の美術は「細美」といふ事を、第二義位に考へてゐるのである。謝赫の六法に於て。第三の應物寫形及び第四の隨類賦彩は、ともに畫面の「細美」を司る法と思ふが、それ等は第三第四位におかれてあつて、第一を氣韻とし第二を骨法としてゐる。即ち、神氣を第一とし、筆端の力を第二としてゐるのである。つまり支那の美術にありては

美くしいといふ事よりも、無限で、靜かで、力强いといふ事を必要とするのである。(謝赫の六法については他日考察してみたい、非常に面白い問題だから。)この事が必ずしも、支那の美術が他國の美術よりも神氣に於て勝つてゐるといふ事の理由にはならない事は論を待たないが、しかし、この事は支那で美術の樣式をして含蓄多きものと爲してゐるといふ事は否み得ない。一見、美でもなんでもない。無意識の樣な畫面は、實は味へば味ふ程味の出て來る畫的要素を以て描かれてゐる。

先にものべたがレオナルドの草花の寫生素描をみるとその線なり調子なりは美の深い意識から生れてゐるといふ事が分るが、支那の畫をみると、さういふ感じはせず只ふと何氣なく描かれてある樣で、一寸みてはつまらない樣にさへみへる。しかし、一度その神氣が解つてからその描方をみると、それが又實に味のある復雜なものになつて來る。

つまり支那の畫の神韻のためにはあまり行きとゞいた美くしい感じといふ樣なものはむしろ邪魔になる。無論畫だから、美が本當に邪魔になるのではないのだが、美に對する、執着があまりに强い事は美以上のもの、(それも美ではあるが)神氣、氣韻への觀照をさまたげるのである。

かくて支那の畫は如實感への或る程度以上の拒否と、唯美感への缺除を持つてゐる。この二つはともに支那の畫に仙境及び神境を附與する大きな要素となつてゐるのである。又支那の畫の持つ一種の稚拙感。大痴感、等も其處から來てゐる。これ等は實にこの大國人の氣質から生れたものであらうと思ふ。この支那の畫にくらべると西洋風藝美はどうも稍利口で整頓的な感じがするのは事實であると思ふ。

次にこれも同じ原因から來てゐるが、支那(のみでなく東洋)の畫は、西洋の美術にくらべて稍非健康的な一種の感銘を持つてゐると思ふ。これは、先の「非美的」又は卑近美等が稍別の感じに於て感じられた場合であるが、このむしろ

病的な樣な感じは又よく「仙」の感じ超現實の感じを出す要素となつてゐる。どうも西洋を引き合ひに出す樣だが、西洋の樣にギリシアあたりの美術は實に明るくて、喜び輝いてゐて、肯定的で、健康である、それは實に美くしい。これに對して支那の畫は陰氣で、默りやで、そして非健康的である。がこの二つを對比する時、支那の病的が必ずしも美術なり人生なりに厭はしいものでなく、西洋の肯定が必ずしも最高の肯定でなく、この不健康の樣な感じの示してゐる或る深い高い世界に何となく、深い深い肯定がある樣な感じがある。

支那の畫の非健康味は同じくその國土なり民族なりの感じから生れてゐやうが、それは要するに現實感への一つの拒否の表はれである。形を見形を寫す時に當つて、さういふ形にものをみる事はその現實の持つてゐる一層深い感銘への觀照なり憧憬なりから生じた一つの趣味又は必要事なのである。

中に本論の寫生畫の方に行かないが、とも角も、序でに支那の畫の事を云つておく方が寫生畫を論ずる時に早くすむと思ふのでつい長引く。寫生畫の事に入る前に、その寫生畫と對立する二三の畫法の事を考へて置かうと思ふ。

支那宋元風の寫生畫に對しては山水畫、人物畫、文人畫、水墨畫等がある。支那の畫と云へば普通寫生畫の事は云はず、山水畫、文人畫(南畫とも云ふ)墨畫等を云ふ事は本文の最初にものべたが、一般人は支那畫の眞生命を、墨畫及び文人畫にありとする傾がある。

これは、支那美術の生命が、氣韻の生動及び骨法用筆にあるといふ事を、稍概念的にあつかつた結果から生じた事でもあるが、しかし又或る一面から云へば、支那畫の眞生命が「墨」といふものにあるといふ事も決して嘘ではないのである。

支那には書畫一致といふ語があると聞いてゐるが、この書といふものは支那(及び日本)にしかない一種の藝術境で

ある。即ち、全然字形とか傳彩とかの外物からの美的ヒントをうけず、又細美を離れた。全然骨法と、線描だけを主とした、つまり一段と内容的な、要素を以て、全然唯心的領域だけを以て、神氣を出す。

書が美術であるか否かについてはいろ〳〵異つた解釋もあらう。しかし、一味の藝術である事、それも深い心境を語り得る一境である事は否めない事實である。

水墨畫の筆致はこの書の筆力と非常に似たものがある。否支那及び日本の繪畫の線には昔から出た筆力が用ひられてある。支那の畫でも極く古いもの、唐以前のものにはこの筆力といふものはなく、筆初も筆末も同じ力の線を以て太細なしに引かれてあるが唐の呉道子あたりからこの筆意といふもの、墨氣といふものが初まつたらしい樣に聞いてゐる。日本畫の筆意は勿論、支那畫法を傳へたもので、とも角も支那の書が畫の筆意の神韻の上に範となつた事は事實である。支那以外の國（日本をのぞく）では東洋の他諸國の畫にあつても、線に筆意といふものはなくまして墨氣といふ畫境はない。西洋畫に於ける素描の、黑白（ブラックアンドホワイト）の墨色等は、形美の方に屬するもので支那の如く、墨氣が直に作者の内生活なり主觀なりを語る神韻となる底の事はない。

尤もこの筆意といふものが畫に生じるといふ事は、繪畫の成熟を示す事でありその事は國の文明が同じく爛熟した事を示す事になる。初期藝術といふものには筆意といふものはなく、只幼稚なる寫形の線條と着色位があるもので、それがだん〳〵進歩しても中に筆意に迄至らない。

さういふ譯で、さすがに西洋の美術にも、レオナルド以後、繪畫にツッシュといふものの味が生じこれ迄のフレスコの硬さを自由にほどいてゐる。チ、アンからレムブラント、ベラスケス、ゴヤ、ドラクロアと、だん〳〵ツッシュ（筆意）が生きてはゐるがしかし、それは支那に於ける筆意の如き形而上的な深い意儀には乏しいものである。

さういふ譯で支那の水墨畫に於ける筆意にはそれ自身作者の主觀なり、神氣なりが籠るのであるから、眞にそれの出來る人は面倒な寫生畫などをしなくとも、水墨によつて直ちに神氣をほうふつさせればいゝ譯になる。又一般鑑賞家の方から云つても寫生畫の眞髓といふものよりもこの方が露骨に神氣が出てゐるものだし、又出て居さうな感じのあるものだから、神氣の事など本當には實感の出來ない多くの人々も何となく偉さうな、丁度、禪僧が何かによつてゐる樣な水墨畫を氣韻の點で一等とし、支那の美術と云へば水墨畫かその水墨の味が自然の風物に宿つてゐるところの山水畫を推す樣になつたのは自然と云はねばならない。

この水墨畫が支那畫の代表となる事はよいとして、こゝに反省してみなくてはならないのは近來の南畫渇仰の傾向である。水墨畫渇仰の餘波として、近來は支那畫と云へば南畫文人畫を指すといふ風になつてゐる。南畫とて無論つまらぬものではなく、その、中には多くの偉い畫家もあらうが、しかしどうも南畫が南畫らしくなつた。明以後のものはその眞の神韻に於て、北畫に及ばない樣である。尤も明以前元の倪雲林あたりの畫も南畫らしい南畫と云へるが、これは一寸偉いものだと思ふ。しかしそれより前の宋唐あたりになると北畫と南畫とをはつきり區別し難いところがある。又宋元風花鳥其他の寫生畫にあつても、この南北畫の區別がはつきりつきかねる。南宋畫人北宋畫人といふ區別はあるがそれは畫家の生國の事で、畫風に南北はない、徐氏體と黄氏體の二派があつて黄氏體は鈎勒の法（濃墨の强線を以て輪廓を強く描き、濃彩を以てその線をかくさずほりぬりする法）により徐氏體はつけたての法を用ふると聞いてゐる（つけたての法は紙布に畫の具をいきなりつけるか、輪廓をうすく描いてほりぬりにせずに描く法）つまり黄氏體は北畫じみた硬さを持ち徐氏體は南畫らしいやわらかみがあるといふ事になるのであらうが、しかし、徐氏體の畫と雖も決して後世南畫の氣と通ずるものではなく、その畫境は嚴しい寫實境を持つてゐる。又唐の人王維を南畫の祖といふけれど、

その畫境は必ずしも南畫らしいものではない、南畫の味といふものは、どうも氣韻といふものが氣分に近くなつてゐる樣である。神氣といふ樣なむしろ宜い嚴しい感じは南畫の領域には無い樣である。この言は大分反對もあらうが、しかし、實地に南畫らしい南畫を捕へて來て觀ると、この言が決して不當でないのを肯かねばなるまいと思ふ。先述の倪雲林の畫には稍嚴しい氣韻がある。しかしそれはむしろ「大氣」と云つた樣なもので、北畫の夏珪あたりの山水畫が持つてゐる樣な一味透徹した、むしろ寒い樣な神氣には一寸したへだゝりがある。

王維の瀧の畫は有名だが、これには立派な神氣がある。もしこれを南畫であるとすれば無論南畫にも北畫におとらぬ畫境があるにならう。しかしさうなれば結局名稱の爭ひになる。事實に於ける南畫の、味は大體に於て氣分的であつて、眞の神氣には遠い。

一體この神韻といふものに實感はさう、一般の人に持てるものではない。一般の人に神韻の本當の嚴しさ、寒さ、透徹さ、靜寂さ、無限さが解ると思ふのは間違ひである。さふ人が南畫の持つてゐる一種の大きな氣分、欝勃たる感じやに一種の氣品、朗らかさ、飄逸さ等を畫の神氣と思ひ込むのは仕方のない事であり、そこ迄でも畫の無形境の分るのはいゝ方なのである。

南畫にも無論さういふ樣な形而上的地があるけれど、それは要するに、北畫の神氣には及ばない。もし、眞の神氣を欲すればどうしても、もつと嚴しい表現樣式を欲して來なくてはならない。

又南畫はどうしても、文人畫の域を脫せず、つまり素人畫、遊び（深い意味の）の域を脫しない。この事は別に惡い事ではなく、北畫の一方にさういふ畫の有する事はいゝ事ではあるがそれだけに、それは觀照の嚴しさ、畫としての節嚴を缺きやすいのは仕方がない。

南畫の筆致は、北畫の規範的な筆意から自由になつたものとする事はよく人の言ふところである。事實北畫に於ては拘勒の法であるのと、水墨の達筆なのとの區別なくその筆意は直に精神をつたへるものとして、筆初から筆末息をする事を禁じ心をじつとこめてその心境を筆に傳へるものとされてゐる。生半可な畫工がいかにいきんでやつたつて本當の氣韻は出まいけれど偉い畫家がやればこの法は全く深い畫境を作り出すものと思ふ。

南畫にあつてはこれに反し、筆をどういふ風に用ひてもよく、筆をまげる事、ひねる事皆自由とされてゐる。それだけに自由でいろ〳〵の味が出るが、又それだけに筆の本當の深さの味は乏しくなる。殊に明末清初の南畫になるとその筆なり畫面なりがともすると「味感」の境に止まりやすくなる。かなり勝れた畫でも、その畫境は長い鑑賞にはたへない、つまり「味のもの」に止まるものが多い。石濤、南田、八大山人、新羅山人等の人々はその中にあつて最も偉い人々だけあつて、その畫品は只に「味のもの」ではなくその畫境も相當の透徹した世界を示すけれどしかし、北畫の畫境とは段が違ふ。その筆致にも各々異つた雅致なり力なり墨氣なりを持つけれど、北畫の筆致なり墨氣なりとはかなりの內容の深さがちがふ。それに比べてはどうもこれ等の人々の筆致も「味ひのもの」に見へて來る。事實南畫の畫面には一味の「味ひ」があふれてゐて、その畫仙紙に落とされて一點の滲み、渴筆の味、濃い淡彩のにじんだ味など、誠にいいものであるが、味のものはそれを味つてしまふと、どうも飽が來やすいものである。

しかし、近代人は如何にこの「味のもの」を喜ぶ事であらう。近代の人はます〳〵宋元の藝術境を忘れやうとしてゐる。深い、深い、嚴しい藝術境を忘れて本當の藝術は解るものではない。

如上で支那の藝術についての大體の私見は述べた樣である。次に吾々は宋元の寫生畫の事を考へやうと思ふ。

支那の畫がこれ迄、水墨畫及山水畫を以て代表されたの觀ある事は既に述べ、それが必ずしも本當でない理由ものべ

た。しかし、支那の畫にはその水墨よりももつと眞の「畫」として造形藝術としての意義の深い寫生畫（花鳥、動物、果物野菜、等々）の一境のある事を等閑にするのは眞に支那の藝術を解するものでない。

水墨畫は氣韻本位の畫であつて、畫でありながら餘程書に近い。それは造形といふ事よりも、墨氣、骨氣、筆意を以て直ちに神氣に迫らうとしてゐる。無論書ではなく畫なのだから此處には或る寫形もあり、從つて質物感もある。しかしそれは大體に於て客となつてゐる。例へば牧溪の猿の圖は如何にも深山の樹間に仙骨を帶びた小猿が遊んでゐる。その氣韻を感じる。しかし、それは決して、猿の形そのものに即して、深いものを見たのではない。猿を描いてはあるが實は猿でも何でもいゝのである。たま〳〵猿を描いたのも猿の感じは出てゐるが、それ以上に猿の形色に即したものは見、居ないのである。其處にモティフとなつたものは、猿が溪間に遊んでゐるといふ「事」の感じであつて、それを通じて感じる。溪間や深山の幽邃な深い神氣を捕へやうとするものである。

私はこの種の畫の中、原三溪氏藏の牧溪の枯蓮と鶺鴒の圖をみた事があるがこの圖のこゝに蓮の實とそのわきに生へてゐる隣態？　の筆と墨氣とに深く感心してゐる。この圖の如きは實に深い禪境とも云ふ可きもので一抹の墨色がよく無限の深い心境を語つてゐる。しかし、繪畫はこれを以て唯一の又は最深の境地とす可きものであらうか。

畫といふものが寫實の境を離れては完備しないものである事は私のこれ迄屢々說くところである。寫實の道は畫道に於ける最も普遍的な本道である。畫が寫實を離れるとともするとその美的境地が單純又は簡單なものになり易い。元來美といふものは人間の裏にある一つの觀念であるから、必ずしも外物を模寫、寫生しなくともそのまゝその觀念を形（線や色に）表はせばそれで美の表現は出來るのであるけれど、しかしその內なる觀念は又外物の形の誘異的刺激によつて生成し、樣々な枝葉を茂らし肥へ太り、複雜になり同じに深いものになるものといふ事を忘れてはならない。

即ち寫實を離れた繪畫の精神的主體、形而上的境地が、ともすると、單純なものになりやすく透徹してゐるものにそれが復雜さを缺き簡單なものであるといふきらひがあり勝ちである。支那水墨畫の精神的主體が必ずしもさう單純なものとは云はないけれど、吾々が水墨畫の深い禪的な境地から神韻を充分に感得しながらも、一面に何か別の造形的要求を欲しい様な氣のするのは、つまりその主體が透徹した深いものでありながら何となく畫としては單調なのを感じる故である。

事實繪畫としてみる時、水墨の道だけではもの足りない。繪畫には、もつと、現實に即いた、形象に即いた、一境がなくてはどうしても物足りない。のみならず寫實を離れた、藝術の美の主體はともすると獨り合點に陷りやすい。少くも獨り合點に陷つても氣がつかず又その神氣の獨合點と眞の神氣との區別に對するはつきりした認識もしにくゝ従つてそれが混同しやすい等の弊があり勝ちである。唐宋のいゝ水墨にまさかそんなものはない筈だがしかしそれが極めて主觀的なものであるといふ事は爭はれない。即ち一抹の墨氣が深い心境を語るといふ一種禪的な主觀境であつて、これは勿論非常に尊い事ではあるが同時にその道が普遍の道でない事を示してゐる。普遍の道と云つても通俗の道といふ意味ではなく、藝術の道として最も普遍的な本道を指したものである。つまり水墨畫の主觀境は畫道としてみる時は本道といふよりは偏道であり、一つの道であるといふのである。

支那の古山水畫に就てゝ同じ事が云へる。支那の山水畫は其モテイソが今日吾々の描く風景畫とは異つた處にある。吾々のは土とか艸とか山とか道とか樹葉とかの物質に即したものを寫生するのだが、支那の山水畫のモテイフは、自然の氣といふ様なものと大きな廣々とした世界を對照としてゐる。そしてそれ等は寫生によらず大ていは想像を以て又は想

像を多分に加へて描かれてある。濃彩のゝのもあるが主として水墨が多い。濃彩のものはずつと細美感に近づいゐてどちらかと云ふと裝飾的効果をねらつてある。勿論一方の嚴肅な強い形而上的世界がないのではない。かくの如く、支那の山水畫も、水墨畫と同じ樣に、寫生畫ではなく從つて先述の樣な、幾分の影を持つ事は爭はれない。無論その形而上的境地の示す世界は非常に深いものであつて、夏珪の山水畫などの持つ堅い深い寒い境地は他のどんな藝術も一寸そこによりつけない樣なところがある。

かもし支那の畫が以上の如きもののみあつたら、それは物足りないものである。人々はさうは思はぬかもしれないが支那にあの成熟し、完成されたる宋元の寫生畫の存する事は又藝術的世界の王者たる支那としてでも自然の事であると云はなくてはならない。

支那に於ける生物其他の寫生畫はいつ頃から生じたか、物の形を寫す事なら畫は凡てさうだから大古よりあつたらうけれど實物の美しさをモテイフとして、そこに生命なり、神氣なりを見出したところの畫は、先づ唐にその曙を見、五代の（唐と宋の間西暦九〇七年より九五九年迄）徐熙及び同じく五代の黃筌に至つて所謂徐氏體黃氏體の花鳥畫に於ける二派を生みこゝに寫生畫が、完成されたものと聞いてゐる。歴史等の事は淺學にてくわしく知らぬが先づさう思つてさしつかえない樣に記憶する。

繪畫の生れる純粹な動機は、多く外物の形への驚異讃嘆から內なる美が刺激されて生じるものだが、この動機は一時宗教又は祭事のために甚だしく唱道された。しかし支那に於ては早くから山水、人物等の畫圖が發達し、（よくは知らぬが恐らくは隋唐の頃からであらう）藝術は立派な獨立を保つて居た。しかし、その藝術の純粹の動機が最も成熟したのは何と云つても、寫生畫の完成された五代以後宋朝に於ける、三四百年の間であると思ふ。

つまり寫生畫が成熟したといふ事は繪畫が一層純粹に獨立し專門的に發達したといふ事であつて、外的寫生によつて美は一層複雜に微妙に味識され經驗され技術も亦一層の練磨と爛熟をみた。かくてその觀照の世界は一段と繪畫的境地に於て深くなり、厳しくなり又デリケートに進歩した。

唐朝の藝術は深く大きい、しかし、まだ何となく初期の影をひそめ切つては居ない。これに比して宋の畫は一層文明の纖細さと爛熟さを加へてゐる。宋の寫生畫に至つて支那の美術は完成の極に達したといふ事は否み得ない事實である。

元に至つては最早稍下り坂になる。しかし元初には宋人の偉い畫家が生きてゐて、立派な仕事をした。錢舜擧、趙子昂等がそれであるが、其後だん／＼神氣に於ても技術に於ても宋朝の盛を缺き、明に至つて更に力を失つた。しかし、元朝はまだ決して捨てた時代ではない。殊に元初の大家の畫は宋朝も中々及ばぬ位の畫が澤山ある。

宋元寫生畫中の偉は何と云つても宋朝の徽宗皇帝に止めをさす。五代の徐熙、黃筌の中黃筌の作となつてゐるものを復製でゞもまだ見た事はない。徐熙の作と云はれてゐるものは有名な白鷺と柳の畫の復製と、先日酒井家の入札にやかましかつた、白桃小禽圖の實物及び白路と蓮の大幅の復製のあるをみた位である。あと徐熙といふものを少しはみたが信ずるに足りないものゝみであつた。これ等の畫はさすがにいゝ。

しかし、徽宗皇帝の桃に鳩の圖、水仙に鶉の圖等の逸品にはこの二つながらどうも及ばぬ。さすがに宋朝の畫であると云ひたい程、殊に桃鳩の方は、完成と成熟の極致に達してゐる。

この桃鳩の圖の本物を見た人の話では、見てゐると、ボーッとなる由、復製でみてもその感じがする。簡單に、小さい方形の中に桃の一枝が垂れてゐて其の上にどつしりと稍大きな鳩が體をふつくらとふくらして止まつてゐる。それだけの畫である。が其處には何とも云へぬ氣高い氣品がある。この味は皇帝でなくては描けない味である。その富めるそ

の貴い、位の高い感じは正に帝王の氣稟と云ふ可きである。宋元の畫でこれより鋭いもの又或る見方に於て深いものはあるかもしれないがこの氣品のために多くの寫生畫は蹴押されるのである。

しかしこの畫がどこ迄寫生でどこ迄想像畫かといふ事は區別し難い。一體宋元の寫生畫と私は呼んでゐるが、これ等の畫が、實物を前に置いて、今日私達がする樣に直接に對照にぶつかつて行くやり方をとつたものとは云ひ得ない。中には實物を前に置いて逐形的寫生をしたと思へるものもある。徑山月の大豆や私所藏の趙昌の蕪の圖等はそれでなくては描けない畫である。構圖も形も描方も全く寫生である事を示してゐる。が、この徽宗の桃鳩や、錢舜擧の鼠、等の如きものが實物を前に置いて描けるものではない。尤も下圖（素描彩色ともに畫稿として充分ていねいな描方を以てす）をとる時は充分の寫生をするのであらう。しかし製作に當つてはそれを畫面化し、一層の深みを出すためにいろ／＼取捨して描いたものと思ふのが本當であらう。

しかし、それ等の事は結局どつちでもいゝのである。或はこれ等の畫が全然その畫としては寫生によらず、筆者の頭からぢかに生れたものであるにしても、そのモテイフが、自然物象の形象に即した美を主體とし、其處に最深の美術的境地を見出してあるものであればそれは立派な寫實の道であり寫生畫である。

事實宋元の寫生畫のモテイフは、自然物象の形に即し、その形を通じて深き神氣を求めてある。かゝる造畫態度は西洋にも先づないものであつて、實に純粹の寫生畫は千年の昔支那に於て完成され發達したものと云ふ可きである。西洋に於てはわづかに、ファン、エックと、近代に於てセザンヌ等がわづかに眞のリアリズムを成したといふ事は本文の初めに說いたところである。

しかし、宋元の寫生畫は如實感、本物らしいといふ形以下の類似に於て西洋畫には及ばない。西洋の畫はさながら其

態にあるが如く、浮き出し、影を持ち、科學的なる透視明影、面、丸味を持つ。しかし、東洋畫にあつては、第一に影がない。透視畫法、遠近法は甚だ非科學的である。面もなく、正確なる丸味も持たない。東洋畫にあつてはむしろ、それ等のものは卑しめられる。一面にさういふ事が深く研究されなかつたからそつちの方面の進歩？がないのかもしれないが、さういふ方面を研究しなかつた動機は必ずしもあなどる可きものではない。

東洋人が、西洋人に比べて科學的でないといふ事は事實である。この事が文化の上にいゝ事か惡い事かは不問、少しも藝術にとつては決して惡い事でない、むしろ有難い事であるといふ可きである。

東洋畫にあつては、影の代りに甚だ非科學的な隈といふものを用ひる。この隈といふものは、光線の方向などはかまわずに、只凹んだところを稍濃い又は暗い色をもつて、くまどりする方法で、科學的にみると、天に二日があつて、東西から照らさなくては生じない樣な明暗が生じたりする。それも甚だしく樣式的に裝飾的に生じてゐたりする。ところで東洋畫法にあつてはその隈さへもあまり強く用ひる時は畫が下卑ると云つていましめる事になつてゐる。

この畫が下卑るといふのは何の意味であらうか。又畫家が隈をとりすぎて、そこに品格がなくなつたと感じたその感じは何であつたらうか。即ち、云ふ迄もなく、畫が現實的になる事なのである。

東洋畫にあつては丸味とか、浮き出した感じとか厚みとか面とかは、それをそのまゝ形に寫さず、象徴に於て寫す輪廓線に可なり正確な寫生をやる場合があるが、賦彩にあたつては、可なり現實と離れる事を意としないのみならず、幾分心がけて居るかの感がある。

一體、輪廓線を生かして、その輪廓の中に彩色を平たく塗ると、その感じは變に強い稍厚い感じが出る。その感じは變にミスチツクな感じを呼び與こし、その神秘感は、輪廓線の實物感によつて、質の感じを聯感させる。即ち、質の美

といふものは、物質感の持つ神秘的美感であつて、輪廓線によつて、それが瓜なら瓜といふ感じが描いてある中に、瓜の色をべたりと平らにぬる時はその平らに塗つた色彩の神秘性が、輪廓の實物感によつて質實の神秘感として生かされるのである。

ところが、もしそれではどうもまだ本物らしくないといふので、其れに持つて行つて影をつけ、丸味をつけ、更にそのものが置かれてある床を描くとか、そこへ到影をつけるとかしたら、如何であらう。必ずこの神秘感はくずされ、實在感や、重みや、深さが、かへつて飛んで行つてしまふ事となるのである。隈をとりすぎると畫が下品になるとはこの邊の消息を云つたものであつて、支那の古畫聖たちはこの感じを意識的にか無意識的かに知つて居たものと云ふ可きである。

この事は、近代になつて西洋の畫家たちも氣附いた樣である。それは東洋の美術を彼等が見ることにより、即ち支那畫や浮世畫の鑑賞によつて、平らたに畫具をぬつた感じが、影をつけるよりもずつと深みやらスチツクな味のある事を知つたのである。

ピユビス・ド・シヤバンヌ、ポールゴーギヤン、ヴアンゴーホ、等からその點の先驅者であつたらう。マチス、ドンゲンの徒はそれをずつと輕くしたがしかし、彼等も要するに東洋のその味に興味をもつたものであらう。（ゴーホの搖籃の繩引く女の黄色き顏等はその例也）

この事は近代の西洋美術に於て意識的に行はれた事であるが、不知の間にならばずつと昔の古大家たちの作品にもその間の消息を感じる事が出來る。

即ち、ヤン・フアン・エツク、デウレル等の畫家の畫はその對照物をあまり多くの影の生じない樣な光線の下に置いて

寫した。即ちエック・デゥレル等の畫はレオナルドやチ、アン、チントレット、レムブラント、等の畫に比べて平面的にみへる。レムブナント、チントレット等はこれに對してことに影の多いものをかいた。

エックの畫が殊にその感銘に東洋的な味と深い眞の寫實境を持つのはその理由による。デヰレルはエック程その二つの味が強くも深くもないがしかし、他の西洋畫に比べるとかなり多くの東洋味と寫實味を持つてゐる。

或る淺薄な見方によれば、影があり浮き出した如き光線の描寫の方に寫實味が少いといふ私の言は不思議なものに聞えるであらう。しかしもう一歩深く眞當の寫實といふもの丶味ひなり經驗が分ると、影の多いといふ事はそれだけ「質の美感」をかくしてしまふ事であるといふ事が分るであらう。

影の多い描寫は多く通俗になる。レムブラントの畫の一味の通俗味と寫生の不緊密から生じる描寫の「甘さ」は此處から生じてゐる。

本當に繪畫的に、寫實といふ事の深い一域が分るものは、物質の感じを、影を以て暗くしてしまふ事の如何に勿體ない事であるかを知る。事實影を以て切角の美を暗くしてしまふ事はとりもなほさず、繪畫の嚴密なる寫實境を知らぬ事になる。明暗の美が、それに代るといふかもしれないが、そして其處に更に深い神祕境を見るといふものがあればそれは本當にまだ畫事の分る人ではない。それ等のものは多分の文學趣味であつて、本當の「形而」に屬した嚴しい美を知るものはさういふ言を弄しない筈である。

物體の正面から光線を與へて、影を作らぬと、その物體は嚴しい寫實的畫境を與へられる。それに反し そこに多くの影を造るときはそこには嚴しさのかわりにロマンチックな感じが生じる。

西洋の美術が多く、美を嚴密なる寫實境に見出せず、ロマンチックなところに求めたのは、その材料が反想の如實感

を出すに適し過ぎたが爲めともう一つはその民族の科學的氣稟に基するものといふ事が出來る。

宋元の寫生畫は、實に影を卑しとするの卓見と自覺を有した、かくして影のない、平らたい描寫はますます〳〵その寫實的領域を多くし、深いものとしたのである。要するに支那の古大家たちは不識か識の間に、その平らたに塗つて行く賦彩の示す深い感じをよしとしそれ以外の現實感を拒否し、象徵と寫實との質に最高なるそして最妙なる融和共生の一境を作り出したものである。

支那の美術に「仙」の感じのある事は前に述べたところであるが、多くの宋元の寫生畫にもこの一種さびた、深いそしてどこか稚拙感のある非現實的な感じ、「仙」の一境がある。李迪筆狗兒圖等はその好適と云ふ可きである

宋元の寫生畫にあつてはさういふ「仙」の感じ超現實感の感じがその深い寫實境、現實境と深いところで一致し、深いところで接し、生かし合つてゐる。否、現實が深く深く見られると其處にふと、この深い超現實が生れ來るのであるその仙境が不圖生じて來るのである。

吾々は宋元寫生畫に於けるこの神氣なり超現實感なりを見るとともにその深い寫實味を見忘れてはならない。其處には實に何のロマンチヽズムも、又何のわざとらしい誇張もない。實に只の、ありのまゝの自然味がある。この李迪の狗兒にしても、その裏庭が何かの樣な飾られない極くあたりまへの地べたの上に一匹の白犬が二匹の小さい黑狗兒をかばつて安坐してゐるのであるが、此處には何のセンチメントもロマンチシズムもない、吾々がよく見る裏庭あたりの光景である。

しかもその只の裏庭は又決して只の裏庭ではない。其處にゐてゐる只の狗は又決して只の狗ではない。何か、深い深いところからその生命を與へられて不圖生きて來た樣な、實に深い靜かなミスチックな感じを持つ。

その眼に湖の底の如く、何か深い〳〵靜かさをたゝへてじつと何かを見てゐる。その生きてゐる力、その深い感じはこれ又支那でなくば到底生れないものである。

これ等宋元の寫生畫が、實物に向つての直接の寫生であるかないかは別として、これ丈けに深く「實」を描く事は寫生の意義を離れては出來ない事である。誰れか、只の空想だけでこの李迪の狗や、徽宗の雀や猫や、趙昌の牡丹や、錢舜擧の瓜や鼠を描く事が出來やうか。それ等の實物を想像畫で或る美術として描く事は出來るけれど、これ丈けの深い、現實感の美を描く事は到底寫實の意義を離れた觀照からは生れない。

事實これ等の畫の主題は、現に吾々の眼にふれる本當に生きただもの「狗」であり鳥であり雀であり猫であり花である。しかもそれ等のものは深い深いところから生きてゐる。それ等畫は深い〳〵仙境の如き超現實を示すとゝもにその仙境は吾々の日常にみる只の後庭であり、樹木であり、物質である。

狗の眼の事を云つたが、事實宋元の寫生畫に於ける眼は正に造形美術に於ける深き驚異でなければならない。その眼の描き方には何の複雑なる技術はない。只一つ、點睛でいゝのである。ハイライトさへないのである。然るにその眼は不思議な神秘的な生命を持つ、實に、生けるものとはこれであると思はしめる底の力をその眼はもつ。

眼を描くに當つて、その黒眼を、一方によせて、描く時はその眼は幾分生きてみへる。これは何かを見てゐると表情がその顏に生じるから其處に或る力が生じるのであるが、これは人の聯想にうつたへるので本當の藝術的な生命は宿らない。

支那寫生畫にあつてはその眼は別にさういふ風に企圖されない。ことに花鳥畫の鳥の眼などは大てい白眼の中央にその點睛をほどこしてある。しかもそれがかへつて、ヂーンとした深い力を以て、生けるが如くにみへて來るのだから偉

いのである。

質に眼をよく描く事といふ事は、傳神の謂である。深い〱心境がないとそれは出來ない。徽宗皇帝はその點睛を生の漆を以てしたと云はれるが、眼をかくといふには殊に深い用心をみる事が出來る。しかも皇帝の畫の眼は何等の惡い意企がみへる、所謂深刻らしいところがなく、平和な中に、深い〱神が入つてゐる。又偉と云ふ可きである。

又この宋元の花鳥其他の寫生畫の骨法、線がきは更に墨氣のない、白描風の線描方を用ひてある。そして大ていそれは細そい。その線が中々いゝ味を持つてゐる。私の持つてゐる鵝の畫の水盤の線などはへんに永遠な深いそしてデリケートた感じのするいゝ味の線だと思ふ。これはつまり、宋元の寫生畫の美の主體が嚴しい寫實境にあるからの事で、墨氣の如き主觀的要素の混入をゆるさないのである。物象の形而に即して深きをみるのは、墨氣や筆力が混入しては二兎を逐ふ事になるからであつて、この事は實に宋元寫生畫の一層の嚴密なる造形的領域を示すものである。

かくて宋元寫生畫感銘は一層深い嚴しいものがある。しかしこれを眞に見得るといふ事は、畫事の深處に遊び得る人でないと出來ない。何でもない樣な形、何でもない樣な描方に宿る深い〱無限感や神氣はそれだけの位の高いものである。

挿畫中の任山月大豆寫生畫は、元畫靜物としての尤品であらう。透徹した美と、シーンとして靜かな氣韻とは一種嚴肅な感じを持つて觀者に來る。しかもその描寫は何の奇もない。平らかなしかも微細な描寫で、畫者の物質に對する愛感がしんみりと出てゐる。

かくの如き、嚴さとさやしさは、ともに宋元寫生畫の特徴であつて、實に深い寫實の妙諦と云はなければならない。ことにその細かな細部の描方と技巧とは入神のものである。

細かく描くといふ事は畫道の邪であるかの如き概念がともすると人々の上にありがちであるが、しかし眞の寫實境に於ける眞の細部描寫にはそういふ人々の知らない深い妙域のあるのである。

細かさは、確實感の美と、質の美の神秘感と畫面の一種の裝飾感とを助け、又は造り出す。支那寫生畫にはよく、翎毛をよくしその技神に入る等といふ賛辭があるが、この翎毛とは鳥や、獸の毛描きの事であつて、宋元寫生畫の、神秘境は實にこの翎毛の技に負ふところが多い。

私は毛益（宋人）の麝香猫の圖を見た事があるがその翎毛は實に技神に入る底のものであつた。ボーッと煙の如く綿の如くぼかした樣なその猫の毛は、實は細い細い白い線を、無數に重ねてかいてある。その神秘的な、生きもの丶感じ、これ等は正に翎毛のよき一範であらうと思つた

とも角も宋元の寫生畫は畫道に於ける、實に最も本元の道であつて、吾々の仕事はこれをもう一度見なほし、其處に多くのものを教はらねばならないと思ふ。吾々はその點で惠まれたる東洋人である。殊に今後の日本畫の行き道はこの宋元の寫生畫にもう一度深く參しなくては本當の復活は望めないものである。徒らに大幅を競ひ、又低級なる、西洋畫の眞似などをしてゐる中は本當に新しい生命ある日本畫は再び生れないのである。

大幅と云へばこの宋元の寫生畫が大てい小點である事はさすがに偉いと思ふ。宋元の寫生畫ではどうも大幅よりは小點の方がずつといゝ。畫は大きいものをかくのは本當ではない。小さいものを描く時は畫事の他の體力的な努力は不必要となり、努力を畫事のみに集中出來る。その事は描く可き對照により深く潜入出來る事でありより畫三昧に入れる事である。さういふ態度迄彼等に教はらねばならないのは少し情け無さすぎる事である。

これで大體宋元寫生畫については語つたと思ふ。

夢魔に追るゝ人

吉江喬松

しばらく日本を離れてゐた者が、その歸來の船で、はじめて故郷の岸を、空水の間に、遠く眺めやつた時、一種の寂しさと同時に一種のたよりなさが、秋雲のやうに、その胸の中に湧き上つてくるのを覺えるであらう。水に枕してゐる島山――遠く離れてゐる時は、果てしなき紫紺の波が四方から打寄せて來て、その波間に浮沈する銀盤の上に、眞白な、深い浮彫をした連嶺の姿が、遠い水平線上の夢のなかに浮び上つて來た。

いかに探し求めても、いかに眺めやつても、舊い西歐文化の殿堂のなかには、一人の日本人の姿も見られなかつた。廣い森の中へはいつて行けばゆくほど、故人の足跡とは遠ざかつてしまつた。そしてその森を出て來る時は、一種の寂しさを胸に抱かずにはゐられなかつた。

我々は長い間、廣大な空間のために、太洋上の孤島の沈默を强いられずには居られなかつた。けれど時が來て、その沈默を破つた時、我々はいかなる姿をして、波の間から、世界人の眼前に立ち現はれたのであつたらうか。その波間の永い眠りは我々を幸福に導いてゐたのであらうか。さらに今日なほその眠の影が我々の日常生活の上へ薄雲を投じてゐるのではあるまいか。

「十年以來東京から來て、一の巨浪の如く、大地の全部に流散し汎流する恐ろしき殺戮の傳播」「戰爭に對する一致」、

こんな酷評を、或は誤つてもゐるであらう批評を、そして今では最早や飽々してゐるほどな批判を、我々は屢々見聞きせずにはゐられなかつた。日本人が立てば、立つて動けば、其處に波があがる。その波は四方へ遠く廣がつて行く。併しその波はいつもの恐ろしき巨浪といふ如き姿をとらねばならぬであらうか。

國境を越えて行く集團の姿、その目的と表現とをあやまつてはならない。およそ人々が持ち得る國境越えの集團の姿には三種ある。その一は隊伍を整え、命令の下に、枯葉を吹きまくる嵐の如く、防禦があらうがあるまいが、侵入して行く姿である。その二は、長い冬期をシベリアの野から離れて、海洋の島々を足どまりとして、更に遠くより住みよき國を求めて南下して行く渡鳥の如く、己が住み好き土地を求めて海を渡り、其處に新らしき自然と人との間に永住せんとする集團である。第三は、様々な異れる風土と環境と習慣との中に住みながら、人間我の一元的歸結に向つて、その思想、その表現をして、湧き上る潮の如く一國の領海を越えて、遠く八方に流動せしむることである。

第一は攻撃であり、侵略であり、野心であり、所有慾である。征服被征服の差別と、拘束壓倒の不自由とを原則としてゐる。第二はその目的が調和と融合とでなければならぬ。第三は明なる立場と、自由なる解放とを生命とする。その中で初めて人は人らしくなり、相呼應し、相救助し、人爲の境界線を絶した渾一の生活をするのである。

我々日本人は集團として如何なる修練を從來與えられて來たのであらうか。如何なる表現相をもつて立ち振舞ふやうに導かれて來たのであらうか。我々は常に何等かの假想敵を思ひ設けずしては振ひつ立ことが出來ないであらうか。如上の三様の集團的表現に於て、そのいづれをとつて、自分等の表現とするやうに我々は一般的に導かれて來たのであらうか。

我々が若し何等の假想敵なしには振ひ立ち得ないものであるとするならば、何故に、我々は人類共通の環境たる自然をめがけて突進することを考へないであらうか。何故に自然の存在を忘るゝであらうか。それを忘るゝが故に、事あるごとに直ちに同じ人間の中に假想敵をつくり出して來るのである。我々の前に、今現に提供されつゝある首都の復興といふ問題にしても、この自然といふ共通對稱を忘れてゐるが故に、或人は、如何なる理由があるにもせよ、土地の價格低下を口實にし、所有權の絶對を主張し、その復興を遮らうとしてゐる。今度ほどの非常な自然の大發動に接してゐながらも、なほこの存在を忘れて、その自然の懐で小さな所有慾を張らうとしてゐる。この自然といふ共通對稱を常に意識に浮べてゐるならば、何よりまづそれに對する安固なる設備をしなければならないはづである。若しまた或人の言ふ如く都市をして國防的ならしめんとするならば、對自然的に安全なる都市を考へよ。眞に國防といふならば、それは自然に對して人間の生命を安全に防ぐことでなければならぬ。一日にして十萬の同胞を失ひ、年々幾百となき不慮の死者を生しながら、なほそれを單に天譴とよび、無意味な、迷信的なあきらめをもつて自然に對し、それに對策することを忘れ、若しくは無視し、徒に所有慾を主張し、國防を議する如きは興なきわみである。人間にとつて若し敵があるとするならば、そしてその敵を假想しなければならぬとするならば、それは人間でなくして自然であることを忘るゝな。今日に於ては、特に今日本に於ては、科學の觀念なき爲政者くらゐ危險なものはない。

我々日本人は舊時から平等的な集團生活の習練を受けてゐない。共通方則のもとに集まる團體にせよ、共通目的の追究のために形づくらるゝ團結にせよ、ソシエテの觀念は日本人の間には確立されてゐない。これは屢々ほとんど聞飽くくらゐ我々の耳にしてゐる批評である。日本にあるものは命令と服從とだけである。それ故、日本人が團體的結合をす

る時には、必ず絶對命令、無上命令と、そしてその批判なき射行實踐との形をもつて現はるゝ。日本人の團結には討議がゆるされない。衆議の當然の歸結でなく、感情的の一致點所謂擧國一致か、然らざれば個人感情の紛爭でまとまりがつかない。いづれにしても感情に終始する。理智的追究を共通目的とした集合社會生活はいとなまれない。佛蘭西流の或る理想、若しくは殆ど或學派の下に集まる政治的諸集團、まだ英國流の或職業、或階級の利益を代表するものとして集まる諸政黨、そのいづれでもなく、殆どたゞ感情上のいきさつ、若しくは個人利益以外に於ては、日本の政派を組織する理由は殆どない。小さな團體が有ゆる方面に出來てゐながら、その存在理由は殆どまつたく情實だけである。それ故、日本人が團體的行動として、世界人の眼に映ずる場合には、いつも絶對命令とその服從關係、即ち軍體的行動のみが際立つて來るのである。日本人が全體として持つた表現は、軍事的行動以外にはないものゝ如くに思はれるのである。

その反對に、この命令服從關係でない日本人の集合團體が國境以外に永住の地を求めて行く場合には、その人々の生活はいかにもみじめである。北米に於ても、南米に於ても、日本の移民は決して幸福ではない。彼等は彼等の間に於てだけでも樂しい集合生活は營まれない。まして他人種との間には、流通した快い集合生活なぞをつくることは出來ない。排斥せらるゝか。然らずば大自然の中へ見捨てらるゝか、そのいづれかの生活である。

故國の愛と人類愛との一元的歸結、人間我の目醒め、人間我の發現といふ事にいたつては、明治以前は勿論のこと明治以來とても、一般的に我々の教養の主眼とはせられてゐなかつた。のみならず、かゝる目醒めは寧ろ或る意味では、强いて抑えつけやうとさへせられてゐるかも知れぬ。「人を見たら泥棒と思へ、」それを言ひ換えれば、いつも假想敵を眼前に於て生活せよといふ事である。假想敵を眼前に於て生活することは、常に爭鬪を意識することである。從つていつもこの爭鬪に對する準備が何を措いても大切なことになつて來る。その準備が出來てたつもりでさへ居れば、それで

世界の強國のやうな氣がするさうでなければどうしても不安で耐らない。――大自然が不意な發動をしたのに驚かされて、センティメンタルな、一時的な、所謂擧國一致の會合が出來上つたとしても、その發動が過ぐると間もなく、その一時的な共通のセンティメントも消えてしまひ、直ぐ人の中に敵を見出す。假想敵が亡靈のやうに傳統的に浮び上る。そしてその會合はめちや〱になつてしまふ。

「彼等の各は、麥粉か石炭かの袋か、それとも羅馬歩兵の裝甲のやうな重い、一つの大きな怪物(シイメエル)をその背に負つてゐた」。その怪物は常住坐臥、彼等の背から離れない。この怪物は影とたつて前に投じ、鞭となつて背後から叩く。彼等はいつもその影と鞭とで、身を悚せながら行進せずにはゐられない、重くて重くて、押し潰されさうになつてもその怪物を捨てることは出來ない。或時が來ると、不意に彼等の肩が輕くなつたかと思ふと、いつの間にかその怪物は、眞の怪物となつて、彼等の眼前へ立ち現はれる。その時こそは、彼等は、歡聲を擧げて、今こそ生き甲斐ある時であるとしてそれに向つて突進する。これが彼等にとつて、千歳一遇の秋であり、光榮ある死に方をなし得る時である。――けれど、その瞬間がすぎると、彼等は疲勞してしまひ、がつかりしてしまふ。そしていつの間にかまた、彼の背には以前と同じシメエルが飛び乘つて、前と同じやうに、彼等の行進を指揮してゐる。

若し何人かゞ、「氣の毒な人達だ！　敵のゐるのはあなたの心の內だ……」なぞと、クレランボオと共に叫びでもしようならば、それこそ大變だ。彼等はその背に乘せてゐるシメエルと共に、一樣に怒りの目をその人の方へ向けて來る。「いや、敵なぞはもうゐないのだ……」と更にクレヲンボオと共に言ひでもしたならば、それが最後だ。おのれの存在を無視せられたシメエルは、直ちに其の復讐をせずには置かない。

このシメエルを背に載せてゐる人々の會合がいつも喧爭で、亂鬪と罵詈とに終るのは當然のことだ。國内の代表、撰良の集合であればあるほど、その會合は惡魔の亂舞場となる。そしてその場の勇者は、この亂舞に最も優れた技量を持つた人である。

遠く國を離れてゐた人が、久振りでその故國の岸を望みながら、一種の寂しさを感ぜずにはゐられないのも要するにこのシメエルの仕業である。小ぜり合ひと、亂鬪と、小さな刺激の及ぼし合ひと、焦燥と疲勞と、空氣はいつも細かにいぢけた動波で彫まれ、小さな渦紋を描いて流れてゐる。これが寂しいと同時に一種のたよりなさとならずにゐられるであらうか。

我々はいま多數者が集り住むべき、安全な住み好き都市を建設しようとしても、それすら出來さうもない。集團的な、最も合理的な、現代的な、多數共通の最も具體的な表現たる都市の建設に際して、日本人はその本質が試驗せれつゝあるのである。こゝにまた感情的な爭鬪性ばかりを發揮してゐるならば、我々はつひに一都市といふ一つの集團生活すら十分には營なむことが出來ない。破壞性ばかりに長じ、物事を小さくのみ刻み、末細りした針の尖端の如くに神經を尖らせ、批評とては、たゞ皮肉であり、穿ちであり、揚足をとることであり、惡魔のメスのみが到る處で閃き、分離、隔絶が事々に行はれ、悠揚たる伸び行く姿、流合融合はつひに見られない。

これは大氣の缺亡を意味す。集團生活、都會生活にして、この伸びやかなる流合的環境を缺くならば、その息苦しさ空氣の中に生長する年少者等は、必然的に、痛められ、ゆがめられ、息苦るしさに耐えずして、自暴自棄的な行動に出でずにはゐられない。窓を突き破つてでも新鮮な空氣を求めずにはゐられない。

我々が一般的に持ち得る現代の教養なるものは、我々の多數者と流合し、合同し、その安住伸長をはかるべきためのものでなければならぬはずである。けれども現在の日本では、その修養を持つことですら一種の特權の如きものであり修養を持つことが却つて多數者と隔絶することを意味す。文藝藝術に到つては、必然的にこの多數者の廣い胸の上に咲き出でたる花でなければならぬ。文藝藝術の咲き出づる地域はほかには有り得ない。それが有りとすれば、日陰に咲ける花、鉢に播き付けられたる花草、若しくは盆栽のたぐひである。――我々の祖先は嘗て、自然を模倣して築山泉水式の庭園をつくつた。やがて、それを短縮して箱庭をつくつた。最初は自然の花草を移し植えた。やがて、小さな鉢にそれを移した。所有者の思ふまゝに技巧が加へられた高價な盆栽がそこにつくり出された。かくて箱庭と盆栽とは日本人の自然征服として最も優れた技藝と稱せらるゝにいたつた。――我々の祖先はまた嘗て詩歌に於て、長い表現形式を持つてゐた。そしてその長形式の最後に結論の如く、一種の短かい形式を附加しておいた。結論に急なる我々はいつの間にか、その結論だけを採用して、國詩の形式はこの短形でなければならぬものゝ如く考へてしまつた。けれど、その短詩形だけもまだ物足らなく思はれた。更に短かきものを求めた。十七字形が發見せられた。かくて日本の文學はその短詩形に於て特色が認められた。

「大衆が端初であり、藝術が結論である。眞珠は海をつくりはしない。眞珠をつくるものが海である。」といふことは、現在でもまだ一般的には、我日本に於ては認められない。日本に於ては、名人が藝術をつくる、夜光珠を磨き出す。その珠をもつて大海に臨まうとする。けれど、海はあまりに廣く、珠はあまりに小さい。その珠は或者の前へ投げられたる眞珠の如く踏みにぢらるゝか、玩弄品にせらるゝかである。自分の呼吸から生れでたものでなければ、自分等の血潮の通つてゐるものでなければ、如何なる寶玉とても、我々にとつては何等の價値なきものである。日本に於ける人氣ある

文藝家とは、即ちこの玩弄せらるゝ度合を如何に多く持つてゐるかといふことである。盆栽が愛好せらるゝ如く、箱庭が珍重せらるゝと同じことである。併しそれでも名人である點に於ては、日本の文藝家は安心してよろしい。そこに生命があるのである。たゞその名人の作品が一般とは何の關係もなく、隔絶孤立した境界内に棲息してゐるといふだけである。

限界線は到る處にひかれてゐる。東京市中を歩いて、到處に高い石壁の圍ひに打當るごとく、小さき塊團となつて、互に競ひ合つてゐる姿は何處にでも見られる。事件の背後に女性があるといはるゝけれど、一般的には日本の現代の女性はその事件の背後に立つことなら禁じられてゐる。女性に性格はあつても、時代を生む力にはならない。我々は舊時から一般的に女性の中にすら敵を見出すことを教えられて來た。女性を惡魔視することを教えられて來た。この惡魔はいつまでも暗い國の中に幽閉して置かなければならない。智力を磨かせることは恐ろしい。批判力を持たせてはならない。まして活動は禁ずべきである。最も急進的だと思はるゝ人々の會合に於ても、日本の女性はこの目をもつて見られ、さういふ待遇を與えらるゝ。我々の正半數を組織してゐるであらうと思はるゝ日本の女性のために、曾て、十分なる理智の力を開放すべき最高は設備機關に對する建議が、一度でも、我々の國の撰良諸氏によつて會議に提出せられたことがあるであらうか。その撰良諸氏の腦裡に一度でもさういふ考が浮んだことがあるであらうか。――日本に於ては有ゆる集合生活上の問題は、みな男性の專有である。教育ですらも男子の專有である。およそ文明國とは何を言ふであらうか、當代の最新の智識、當代の最も價値ある修養を、その國の最大多數者が吸收し、了解し、體得し、而して實現し得るをいふ。我々の國に於てはその正半數はその智識修養を得べき機關すら持ち得ない。その機關も組織もなくし

て、しかも現代の良妻たり、賢母たる人々を造りいださうとしてゐる。更に、我々の國はさういふ半數者と共に作り出す家族をもつて、集合生活の基本として、家族主義なるものを振りかざさうとしてゐる。家族主義に徹せんとするならば、その意味を十分に徹するために、現代が要求する教養を何故にその半數者に與んとはしないであらうか。それを與ゑることは恐ろしいからだ。即ち女性の中にも假想敵を持たなければならないからだ。彼女等に武器を與えてはならない。武器は自分等の方にのみなければならない。この武器を持たない女性、それが日本では良妻であり、賢母である。――かくて我々は、日本を眞半分にして、丁度晝夜の區劃が永久續いて行くでもあらう如く、半面に暗黒の世界を持たなければならない、その暗黒の中で目醒めた人が稀にあつたにしても、それは暗夜の星さづの如きものである、途行く人の足許を照らすことすら出來ない。

到る處に小區劃を設け、到る處に夢魔の如き所を見出す。そして相寄り、相集つて小ぜり合ひをする。その姿は何であらうか。「日本はいまだ封建を去ること遠からず、その影は今も地上に低迷してゐる。」こんな批評もまた我々が屢々、耳の痛くなるほど聞くことである。しかもその批評を取り捨ることは出來ずにゐる。

實際上の日常生活に於て、我々は全く抗すべからざる力をもつて、國外より流入する生活力を受けずしては、生きてゐられないではないか。更に我々は或種の集團となつて、國外へ流出せずしては、平穏な生活が保たれないほどになりつゝあるではないか。何故に我々はいつまでも我々の狹き習辟の城廓内にのみとぢ籠つて、傳習の敵をのみ想ひ設けてゐねばならぬであらうか。

執念くも背に取りついてゐる夢魔を捨てよ、いつも合手の眼中に敵意をのみ讀むことをやめよ。爭鬪は模倣性から生

する。一方が手を擧ぐれば、他方も不知不識にその眞似をする。そして夢魔が摑み合ひを初める。二人の婦人の毛髪が眠つてゐる間に、蛇となつて喰ひ合ひ出したといふ傳説の如き姿を呈する。若し個人が絶對の信念をもつて向へば、その人の前には白刃も加へることは出來ない。これこそ眞の意味の個人解決である。若し或る國體が、眞に固き信念をもつて結合して立てば、その前には如何なる武器も役には立たない。爭鬪は多くの場合、いまだこの眞の自信が足らない場合に生ずる。若し或る民族が眞に平和を信念として立ち、平和をもつて結合機關の中心として向へば、如何なる他の民族もこれに向つて武器を加へることは出來ない。その結果が眞に固いかどうかゞ問題である。これが眞の意味の民族の解放であり、この解放の波は四方へ傳播せずにはゐない。何故なれば、これが眞に生きる途であり、人間我が必然的に伸びる唯一の方法であるがためである。武裝せる平和といふ如き僞善は、全く夢魔のつくりいだすいたづらである。

少くも我々はこの人の意味の個人解放、國體解放、民族解放の方へ一歩を進めつゝあるかを常に振り返つて見たければならぬ。愛國心が人類愛に一致する方へ向けられてゐるか、個人我は人間我に近づきつゝあるか。我々の一人のこらずがいまこの方向へ向つて熱意ある行進をしつゝあるのでなければならぬ。遲るゝものを励まし、引返さんとするものを押し返し、相反せんとするものを包括し、溶合せしむるだけの力を持たねばならぬ。少くもそれを信念としなければならぬ。平和のために戰ふといふ如き矛盾を二度と繰り返さないやうにしなければならぬ。かゝる熱意の行進の間に、我々が持つ、相互の疑惧と期待、苦惱と希望との表現、それが現代の要求する文藝であり、藝術である。

我々が胸に抱く一種の寂しさ、たよりなさ、それとても實は我々の背に取ついてゐる夢魔のさせる業である。それが引き起して來る不安である。それの投げる前影である。我からそれを捨てずして、如何にして他に向つてそれを求めることが出來得よう。この夢魔から解脱すること、これが現代人の求むる急務でなければならぬ。

文學の起源

厨川白村

すべての者の發達は單純より複雜に向つて進む事である。だから或る事物の本質を明かにしようとすれば、先づ其起源に溯り、それが最も純眞にして簡單な原始時代に在つた狀態を回顧しなければならぬ。

生きると云ふ事は求める事である。人間の生活には必ず何等かの缺陷があり不滿がある。如何にかして、この缺陷をこの不滿を、充たしたいと云ふ慾求は、やがてまた生命の創造性だと見られる。僧院に入つて禁慾生活を送れる彼の修道の士の如き、一見すれば一切の慾求と慾望とを絶つ者の如くに考へられてゐるが、實はさうではない。彼等は現世的な肉慾とか物慾とかを離脱する事によつて、眞の自由と解放とを求め、靈的に具足圓滿な超然たる新生活境に入らうと云ふ別な大きい慾望に動かされてゐるのである。すべて極端と極端とは相似たもので、生の慾求の極度に强烈なる者に至つては、生命その者を絶つ所の自殺行爲を以てしてすらも、その慾求を滿足させようとする場合があるではないか。

缺陷と不滿とは即ち生命の力が、内的にも外的にも抑壓せられ阻止せられてゐる狀態で、それがまた人間の懊惱であり苦悶である。個人の生活が慾望と滿足との無限の連續であり、一つの滿足は更に次の新しい慾望を生じて、夫れが次から次へと果てしもなく續いて行くと同じやうに、人類の歷史もまた原始時代から今日に至るまで、否な更に未來永劫に向つても、永久に此狀態を繰返へすのである。

抑壓から生ずる苦悶を解說し、翻然として自由なる生命の表現を求めて「生の喜び」を得べく、原始時代の人類は何を爲したか。文明の進步と共に吾々の生活は精神的にも物質的にも複雜の度を加ふるが故に、現代に於て、更にまた未來に於て、變化を加ふると共に、其複雜性は益々加はつて行く。しかも人間生命の本來の要求に變化なき限り、換言すれば根本に於て不變なる人間性の儼として存在する限り、原始人類の單純な生活に見られた現象は、現在未來に於ても永久に繰返へされるのである。

歐洲中世のベネディクト派僧院の生活を示す言葉に、「祈禱と勞働」orare et laborare と云ふのがある。是は日本の禪寺で、托鉢の僧が坐禪や勤行と共に、衣食住の萬事をも同じく宗教的の修行として徹底な心持で自ら處理して行くのと同じ生活を云つたものである。それと似寄つた事が、人間として極めて單純な生活をしてゐた原始人類に就ても考へられる。卽ち原始時代の人は、さし當り手近かな日常生活に於ける衣食住の物的欲求を滿たさんが爲に、山に獵り野に耕す勞働に從事すると共に、また一方には怪しげなる異教の神々の前に跪き、木や石で拵へた偶像の前にぬかづいた。この時代に於て、生命宇宙の發現として最も著るしく彼等の目を惹いた者が二つあつた。換言すれば彼等は此二つの者を對象として其「夢」を描いた。それは日月星辰と、性慾の表象としての生殖器とであつた。露天のもとに起臥して日と夜となく夜となく彼等は天體を眺めて、そこに宇宙を支配せる不變の法則と無始無終、悠久の世界を夢みた。人間が如何ともする能はざる絕大の無限力をも認めた。更にまた目を轉じて自己を顧みれば、身内に燃ゆる烈火の如き慾望が性慾を中心として、そこに白熱點に達してゐる事をも考へたのである。人間の生活意志の最も强烈なる表現である食慾と性慾とのうちで、前者を彼等は不完全ながらも勞働によつて滿たし得ると共に、後者の欲求の更に力强き者である事を知つた。兩性相交つて新しき一つの生命を創造し、之によつて種を保存すると云ふ事實の前に、彼等は最も大なる驚嘆を禁

じ得なかつたからだ。

この二つの現象を兩極端に置いて、その中間に彼等は森羅萬象を「夢み」て、之を禮讃し、また禮拜した。讃美歌を歌ひ、呪文を唱へ、祈禱を捧げて、自己生命の要求慾望を、それら客觀界の具象的な事物に向つて放射しつゝ、極めて幼稚な簡單な表現をしたのであつた。生の躍動は彼等をして有限界にあつて無限にあこがれしめ、絶大なる慾望の充足を願はしめたとき、そこに原始宗教の最も普遍な形である天然神教と生殖器崇拜教とが生れた。慾求が制限壓服を受くる所に生ずる人間苦と、原始宗教と、それから夢と象徴と、かう云ふ風に連絡を附けて考へるならば　聰明なる讀者は文藝の起源が果して何處に在るかを覺られるであらう。まことに原始時代に於ける宗教の祭式と文藝との關係は、姉妹であり兄弟であつたのだ。「すべての藝術は宗教の祭壇に生まれる」と云ふ言葉の意味も、亦た此點に存する事を知られるだらう日本に於て支那に於て、また埃及希臘に於ても、印度パレスタインに於ても、或は今日なほ原始狀態にある蠻民の國に於ても、この現象は等しく皆指摘し得られる事實である。

原始狀態に於て人間の慾求は極めて簡單であると共に、其表現も亦た單純であつた。先づ日常生活に於ける實利的な慾求から出發して、そこに簡單な夢が成り立つ。たとへば旱魃に苦められ雨をおもふ事切なるとき、たまく雲霓を望めば彼等は天に祈る。天に祈つて雨降れば、彼等はまた感謝と讃美を捧げる。水災や風害のために穀物や家畜を奪はるれば、かれ等は此自然現象を咒咀すると共に、甚しくそれを恐怖し畏怖するに至るであらう。彼等は自然力に抵抗する力が甚だ弱いために、地水火風に對しても日月星辰に對しても、ひたすら感謝や讃嘆や或は咒咀恐怖の感情を以て之に向ふ。是に於てか星も空も風も雨も、皆それ等は詩化せられ象徴化せられた夢として表現せられた。殊に原始人類の幼稚な頭腦には、自分と外界自然物との差別が甚だ明瞭でないために、森羅萬象皆おのれと同じく生けりと觀て、萬物に

喜怒哀樂の情をさへも見出さうとする。殷々たる雷鳴を神の怒の聲なりとおもひ、鳥歌ひ花咲くをながめては春の女神のおとづれなりと見る。かくの如き感情、かくの如き想像を一つの搖籃として、そこに詩と宗教と云ふ雙生兒は生ひ立つたのである。

この原始狀態よりして更に一歩を進むれば、こゝに智力の作用は加はつて、好奇心も起り摸倣慾も出來る。更にまた前の畏敬や恐怖は一轉して無限の信仰となり信賴ともなる。火を見ても生殖器を見ても、猿の尻の赤いのを見ても、皆それ〳〵の由來を考へて見たり理屈を附けたりして、はては夫れを禮讃し渇仰し崇拜する。もとを尋ぬれば皆生命の自由な飛躍が阻止せられ抑壓せられる苦悶、即ち心的傷害から生ずる象徵の夢に他らない。滿たされざる慾求、其儘直に實行の世界に移すを得ざる生の要求が、形態を變じて表現せられたものだ。詩は個人の夢であり、神話は民族の夢であつた。

その最も單純な原始狀態に就て見れば、かくの如くにして祈禱禮拜の折の心もちと、文藝の創作鑑賞に於ける心境とには、明かに一致があり、共通性が見られるのである。

ギリシヤ思潮の推移と神像の變遷

板垣鷹穂

一

エーゲ海を中に擁してギリシャ半島と小アジャとに點在するギリシヤの諸市が、二千余年の昔、光榮ある文化の生産地であつたことは今更めて云ふまでもない。紀元前十何世紀か古い時代に榮へたと云ふ傳説的なエーゲ海文明は、ホメロスの叙事詩に麗しく謠はれた戰を最後に亡びる。北の方から侵入して來た新しい民族は、エーゲ海文明の後繼者として新に彼等の文明を養ひ始めた。世繼ぎの手續きは紀元前十世紀頃に一と先づ完成するが、其後約五百年の星霜は、なほ新なる建設事業の内に遑しく過ぎ去つてしまつた。然るに六世紀の當に終らんとする紀元前五〇〇年から半世紀の期間は、ペルシャ戰爭の血腥い戰鬪の内に暮れる。悲想なテルモピレの光輝あるプラテーエの激戰の後に、サラミス海道の勝利を克得たギリシヤは、終に最大の試練に堪えた。しかもペルシヤ戰爭以後全ギリシヤの覇權を掌握したのは、保守的なスパルタでなくて進歩的なアテン市であつた。ギリシャの文化が充分其使命を完うし得べき運命はアテン市の勝利によつて保證された。アテン市がスパルタの下に屈する日の來るまで、五世紀の後半を通ずる所謂「五十年間」――此處にギリシャの文化の最も絢爛な展開をなすべき幸福な時が與へられた。然し此の幸福は長く續かなかつた。既に二十餘年以來續いて居たペロポンネソス戰役の結果はスパルタの勝利に歸した。そして更に、スパルタの軍國的方針はやがて全ギリシャの瓦解を馴致し、マケドニアの勃興と共に彗星の如きアレクサンドロス大王の征服となり、ディアドッコスの建國となり、一四六年のコリント落城を最後としてギリシャ市はローマの州縣に成り終る。

此の約十世紀に渡る全ギリシャ史の中で、文化史上最も注意すべきは以上に述べたペルシャ戰爭後の半世紀、所謂「五十年間」である。それ以前は此五十年間の絢爛な文化を出産する準

備時代であり、それ以後は「五十年間」の文化が變遷しつゝ諸方に傳派する時代、即ちアテンに開けた都市の文化がアレクサンドロスの遠征によつて各地に傳へられ、各地固有の文化と結合しつゝ所謂世界文化を形成すべき時代である。しかも、此處に云ふ、都市の文化が完成されたアテン全盛時代の五世紀、半期とペロポンネソス戰役後アテンの權力が失はれた四世紀初頭以後とでは――互に連續した時代でありながら――文化の有様が餘程異つて居る。そして此兩時代を代表して居る代表的な人物がアテンの雄辯政治家ペリクレスとマケドニアの彗星的英雄アレクサンドロスである。

改めて云ふが、繁榮なる幾多の都市より成るギリシャと東方の大帝國なるペルシャとが、力をつくした半世紀の戰の後に、ギリシャが勝利を克得たこと、そして更に、戰勝にあづかつて最も功勞の多かつたアテネ市がギリシャ全土の覇權を掌握したことは、世界文化の展開に甚だ幸福であつた。上代の家長制度を脱したギリシャは、此頃のアテネに於て最も優れた共和的な都市國家を實現した。豐かな財寶を集めたペリクレスの治世は、アテネ市の最も幸福なる時代であつた。彼の治世を中心として、其前後に何れ程盛大な文化が生れたか――。先づかの有名な三大悲劇家、アイスヒユロス、ソフォクレス、エウリピデス、並びに當代社會上の大立物を盛んに皮肉つた喜劇作家のアリストファネスを始め、史學の父トッキディデス、ペリクレスの師なるアナクサゴラス、及び大聖ソクラテス、更に、壯嚴な神像を刻むに優れたフィデアス、――之等幾多の大人物が當代文化の代表者であることを知れば、充分此の榮ある時代の概念が得られやう。

然しアテン市のかゝる光榮は長くは續かなかつた。保守的なスパルタの、アテンに對する妬みから生じた呪はしいペロポンネソス戰爭がほゞ結末に達する五世紀の末葉頃から、ギリシャ文化の形勢は漸次變化して來た。そして次に來るべき四世紀の時代は、戰亂の惱みと民主政治の墮落、並びに階級の利害衝突の不祥な出來事の斷へる時がなかつた。

ペロポンネソス戰役に勝つたスパルタは、兎も角も一時、ギリシャの覇權を掌握したけれど、之を長く保つことは出來なかつた。そして終には、歴代の國民的仇敵なるペルシャの勢力を借り、ペルシャ王の威光と金力に依つて自らを援ける迄に墮落した。外にはかゝる帝國的な政策に惱まされ、内に暴民政治の跋扈を憤つた當代の識者は、自分の國家に愛想をつかし、市民の心は等しく極端な個人主義と世界主義とに傾いた。即ち市民は一般に國事に冷淡になり、海外貿易の利と現世の快

樂とのみを目的とするに至つた。其結果、利福を求めて外に出で、ペルシヤの豪族をはじめ、外國の雇主に仕へる者が多くなつた。國事に冷淡な、自己の快樂に專心な當時市民の心持ちは、同じく喜劇作家なるアリストファネスとメナンドロスとを比較しても解る。社會上の大立物を皮肉つたアリストファネスの喜劇は國事に熱心な五世紀時代の人心を語り、專ら市井の情事のみを題目にしたメナンドロスの作品は、氣慨の衰へた四世紀時代の快樂專心の事情を明示して居る。

加ふるに、四世紀の中頃から北方のマケドニアが急激に勃興し、ケーロネアの戰を最後として、ギリシャ全土はマケドニア王の配下に歸し、繼いでアレクサンドロス大王の東方遠征と共にギリシャの文化は東方諸國に傳派され、各地個有の色彩と融合するに至つた。しかし、東方諸國の風習がギリシャ個有の文化を變化させたこともまた著しかつた。從來は互に「戰友」と呼び交はして居た大王と士卒との間柄は、東洋式な俯伏叩頭の禮を以て遙かに隔てられ、支配者の絕對權は次第に民主的な習慣を壓倒してしまつた。大王の後繼者達が、かゝる新しい君臣關係の下に其國土を支配して居たことは云ふまでもない。——トウキデイデスの呼んで「五十年間」となす紀元前五世紀後半のギリシャと、四世紀以後のギリシヤとが、其政治狀態並びに文化思潮の上で、何れ程變化して居たかは上述の事情でほゞ推察出來やう。

アテン市の丘上には、今尙光榮ある「五十年間」の文化を物語る貴い記念物が殘つて居る。パルテノンを始め、此時代に建設された數個の神殿がそれである。美術の好きなペリクレスは、最大の國難を救つてくれた都の守護神アテナに謝意を表するため、ペルシャ軍に毀たれた舊神殿の傍に更めて神殿を營むだ。依託された美術家は建築家のイクティノスと彫刻家のフィディアスとであつた。ペンテリコンの大理石で組立てられた神殿は壯重なドーリア式である。破風やフリースには、フィディアスの監督の下に、守護神の德を讃し守護神の祭禮を描いた美しい彫刻の裝飾がほどこされた。神殿の內陣には黃金と象牙とに刻まれたアテナ・パルテノスの巨像が安置され、神殿の傍には七米の高さを有するアテナ・プロマコスの銅像が立つた。此像に用ひられた金屬はペルシャ戰爭の折、榮あるプラテーエーの戰に克得た戰利品を鑄たものである。女神の戴く冑と肩に立てかけた槍の穗先とは遠く海上から望むことが出來たと云ふ。全市を舉げて守護神を讃へて居たアテン市民の幸福は偲ぶにあまりある。

然るに一世紀と經たぬ間に何と云ふ變りやうだらう。紀元前

四世紀の半頃、ペルシャの代官としてハリカルナソスに都して居たカリアの支配者マウソロス王は、本國の威光を傘に發威を專にして居たが、古代エジプトの王者に倣つて、王位にある頃から自身の記念碑を築きはじめた。幅七十七米半、奥行六十六米の方形の高い壇上に三十六本のイヲニア柱をめぐらし、更に一大金字塔を其上に頂かせる。「空中に浮ぶピラミット」と呼ばれた此壯麗な大建築は、然し國家と國民とに利福を惠む神の住居ではない。一王者の墓である。彼の暴力政治の記念である。

アテンの民主政治は墮落して獨裁君主の時代が來た。國家の利福を思ふ時代が去つて自己の欲望を追ふ時代が來た。守護神を讃えたパルテノンの後に王者の權力を誇る記念碑の生れたことは　然の運命であつた。

奇しくも興味あるギリシャ思潮の推移が美術表現に何んな影響を與へたか？此事情は彫刻に表はれた神の像の變遷に窺はれる。以下にしばらく其有樣を觀察してみやう。

二

有名な「英雄傳」の著者なるプルタルコスは、ペリクレスの章に物語つて云ふ。民望を求むるペリクレスは國庫を傾けて全市民に職を與へ、土木建築の工事に從事する者にも、戰役に服せる人々と同じく豐かな給料を與へた。かくてアクロポリスの裝ふ神殿の造營に際しては、アテン全市がさながら一大工場の如くに視られた。規模の極めて雄大なるにも拘らず、工事の迅速に進行した事は人々の驚嘆するところであつた。然し、ペリクレスの政敵等は　彼の企圖する事業が國帑を浪費しつゝある事に就てペリクレスを攻擊した。此處に於て、雄辯なるペリクレスは市民の集會に向つて大膽なる問を發した「諸君は余が國帑を浪費せりと思はるゝか？」。市民は此問に對して一勢答へた。「然り浪費せり、甚しく浪費せり」と。そこでペリクレスは直ちに下の如く言つた。果して然らば、今よりは、此費用を余一人に被らしめ敢て諸君を煩はささらん、余は一人にて之を負ひ、かくて銘は余一人の名に止めん。「此一語を聽くや名譽心の強い市民等は終に屈し「事業の完成まで國費を惜しむ勿れ」と叫んだ。

此物語りが何れ丈正確であるかは知らないが、如何に富めるときとは云へ、アテンと云ふ一小都市に對しては、パルテノン神殿の造營が國家の一大事業であつたことが解る。

紀元前四八〇年、ペルシャ軍の蹂躙に委ねられたアテンのアクロポリスは、頽れた神殿の殘骸が堆積する惨ましい廢墟にすぎなかつた。ペリクレスが、彼の政策－並びに國土の幸運を

守護神に獻するため、此廢墟に更めて營むだパルテノン神殿は、ギリシャ盛代期の代表的建造物となつた。其樣式は既に發達し完備した壯重なドーリア式である。型の如く長方形の神殿は三階の段上に建ち、前面に八本側面に十七本の支柱を繞らし、前後の破風を始め軒下並びに外陣の欄間には彫刻の裝飾がほどこされて居る。材料は全部ペンテリコンの大理石で、内陣には壯麗無比なる處女神アテナの巨像を安置する。アテンの丘上に高く聳ゆる此神殿こそは、アテン市の武功に與へられた名譽の冠であつた。

然し、此壯重極みなき神殿と共に、光輝ある當時のギリシャ精神を象徴する紀念物として、ペリクレスの友なる彫刻家フィディアスの手に成る數個の神像と、彼の監督の下に製作されたパルテノン神殿の裝飾彫刻とがある。

フィディアスは神らしい神の像を作つた最初の作家だと云はれる。神の像に對して眞に神々しい尊嚴な面持を與へることの出來た最初の作家はフィディアスであつた。彼以前のギリシャ彫刻にも神の像は勿論あつた。然し、此等の神像には神の性格を表はす持物以外、人間と區別さるべき何物もなかつた。獻納の青像立像が通常アポロの像と呼ばれて居る一事を以ても其有樣が窺はれる。人間は己に似た神を作つて居る。若し牛馬にして神を創造することありとすれば、牛馬の神は必ず牛馬の如き風貌を有するであらうと云つて民衆の宗教を皮肉つたギリシャ哲人の言葉を別の意味から從來の神像彫刻にも適用することが出來た。紀元七世紀頃の、一本の柱のやうな女神立像は勿論、六世紀頃の間の抜けた微笑をする神像にも、五世紀前半期に屬する神像等にすら、神らしい所は少しも認められない。有名なオリンピアのゼウス神殿の破風を飾る群像に於ても、中央に立つてギリシャ人を護るゼウスは、唯一人の逞しい若者にすぎない。——然るに、五世紀の後半期に活動するフィディアスは同じゼウスの像を如何に刻むだか？

オリンピアの神殿のためにフィディアスの刻むだゼウスの像は、黄金と象牙と有色の大理石と黒檀とを以て作られて居る。巨大な坐像は神殿の内陣の奥を、天井から床まで一ぱいに充して居る。神は玉座に坐し、足臺に足を休めて居る。左手には頂に鷲のとまつて居る笏を持ち、右手には勝利の神ニケをのせて居る。豐かに波打つた衣は神像の下半身を掩ふて床につく。玉座や足臺や臺座にも亦豐かな裝飾がほどこされて居る。海から昇るアフロディテ、晝と夕暮の神、アマゾンの戰、少年を爪にかけて居るスフィンクス、ニオベを射殺すアポロとアルテミス、舞狂ふ勝利の女神達——此等の浮彫は隙間なく神

像の縁りを装飾する。

ホメロスの詩に謡はれたゼウスが初めて其壯嚴な容姿を現はした、フィディアスの甥が其 父に向つて、彼の此像に用ひた構想の範が何であるかを問ふたとき、フィディアスはホメロの詩に據つた旨を答へた。イリアス第一章の終りに近く、海の女神テティスが其子アキレスに加へられた非道に報ゆるため、ギリシャ軍を危からしめんことをゼウスに懇願するところがある。テティスはゼウスの膝に左手をかけ、右手で其顎を撫で、媚び甘へながら懇願する。之に對してゼウスは承諾を與へる。

クロニオン(ゼウス)はかく云ひて黑き眉毛をもてうなづく。王の香氣高き髮房は不死の頭より前に波打ち、オリュンポスの高嶺どよめきわたる。(フォスの獨譯による。第一章、五二八三——〇)

此等の句からフィディアスは彼の構想を養つた。此像は惜しいかな遠くの過去に失はれてしまつた。しかもフィディアスの名に相應しい模寫すら今の世に 傳はらない。然し古人の此像に對する讃辭は様々に傳へられ居る。ローマのコンソルなるエミリウス・パウルスが、マケドニアを征して後ペロポンネソスを通過した き、彼はオリンピアに此像を見た。眼のあたり眞の大神を觀る心持した彼は、故郷ローマのカピトルでユピテルを祭るときの如く、ゼウスの前にも犧牲を捧げた、コンソルは神の嚴粛さと共に平和と至善との感じに打たれた。そして神に對する信仰の强められることを切に感じた。「オリュンピアに行け。フィディアスの作を觀ざる者は不幸なるかな」と他の一雄辯家は叫むで居る。

フィディアスの手に據つてホメロスの神は現實の姿を與へられた。然しゼウスの像と共に彼の名を不朽ならしめた作品はアテンなるパテルノン神殿内の處女神アテナの立像である。

十二米の高さを有するアテナの像は、ゼウスと同じく黄金、象牙、銀、青銅、色大理石等を以て作られて居た。暗色大理石の臺坐には、黄金と象牙の高肉彫で、神々より贈物を受くるパンドラの誕生が描かれた。此臺坐の上に處女神は壯重なる姿で立つて居る。左手は地に置いた楯の上に息み、楯の内側にはアテン城廓の主なる大蛇が首を上げて蹲まり、楯にはメドゥサの首、アマゾンの戰、神々と巨人との戰とが描かれて居る。そして右手の掌には、兩手に冠を持つ勝利の女神を載せ手の下には太い支柱が立つてゐる。アテナの着して居る、簡素な衣は、長い縦の襞を描いて垂れ下り、正面を向く女神の首はスフィンクスと二頭の天馬とを以て飾られた甲を戴いてゐる。文武兩道を司どる都の守護神は嚴粛な姿で立ち、克ち得たる勝利の後の靜け

さを守つてゐる。

アテナ・パルテノスの外、なほフィディアスは二體のアテナ神像を彫むだ。プラテーエーの榮ある戰勝を紀念するアテナ・プロマコスと、レムノスの殖民地より贈られた美しいアテナとが之で、何れもフィディアスの名に相應しい出來榮であつた。然し惜しいかな二體の一つすら今に傳はらない。不完全な模造遺品に、影の如き推測が許さるゝ丈である。

然し吾々は、なほフィディアスの面影を偲ぶに足る若干の原作を所有してゐる。フィディアスが直接手を下したものではないが、恐らく彼の監督に下に製作されたパルテノン神殿の裝飾彫刻がそれである。神殿の裝飾は破風を飾る二面の群像と、神殿の軒下を繞る九十二個のメトープ浮彫と、内陣外壁の欄間に繞る一連のフリース浮彫とであるが形式の稍古いメトープ浮彫は今は略して、他の二種の作品に就てしばなく述べることとしやう。

東西に向くパルテノンは東西兩面の破風に群像裝飾がほどこされてあつた。群像は、一六八七年の秋此神殿にヱネチア軍の撃つた彈丸が命中して以來、若干の部分を殘して他は總て失はれてしまつた。然し幸なことにはパルテノンがかゝる悲運に會する少し以前、オランダの一畫工の描いた破風のスケツチが殘つてゐる。之によつて觀るに、東面の破風はアテナの誕生を、西面の破風はアテナとポセイドンの競技を題材に採つたもので、其構圖も可成り充分に推測することが出來る。

アテナは甲冑を身に裝ふたまゝゼウスの頭より飛び出し、オリュンポスに集ふ神々を驚かせる。――東面の破風は此神話を主題として描いてゐた。左の隅には、ヘリオスが駟馬を御しつゝ波間より昇り、之に對して、毛皮の上に半ば身を横へてディオニソスが坐す。酒の神はなほアテナの誕生を知らない。次に此出來事を知つた二女神の坐像と、立ち上る一女神の像がゐる。坐する二女神は農作の神デメテールと其女のプロセルピーネらしい。アテナの誕生を寫した中央の有樣は遺憾ながら推察を許されぬ。中央を挾み前の立ち上る女神に對して二體の女神坐像と、其一人の胸に依り身を横へて居る一女神がゐる。身を横へて居る豐かな肉體の女神は恐らく美の神アプロディテであらう。そして更にヘリオスに對して駟馬を御しつゝ汐の中に沈み行くセーネがある。

アテン市の遠い昔、アテナとポセイドンとがアッティカの所有權を爭つた。そして此二神は、何れが人間に最も必要な物を與へ得るかと云ふ競技をアクロポリスに行ひ、市民が審判の役を務めることになつた。此時アテナの創り出したのが橄欖の樹

で、ポセイドンの湧き出させた鹽の泉より市民を悦ばせた。それ以來アテン市はアテナの所屬に歸した。——此傳說が西側群像の主題である。中央に立つ二神は矛と三叉矛とを立てて向ひ合ふ。兩神の背後には女神等の引く駟馬がひかへ、なほアテナの後には勝利の神ヘルメス、イリス等が位する。神々の他には競技に審判の役を持つたアッティカ最古の住民ケクロプス王、エレクテウス、其他がゐる。

次にフリーズの薄肉彫がある。夏期に行はれる大祭の有樣が其題材である。アテン市の大祭はパンアテネ祭と呼ばれる。其昔、女神アテナが巨人アステルを征服したとき、エレヒトニオス王が初めて此祭を營むだと云ふ。六月にわたる祭の最終日に盛大な行列が催され、乙女達が守護神のために織つたペプロスが捧げられる。なほ此行列には市の要職にある者を始め、アテネと親交ある都市から犠牲を以てつかわされた使者達までも加はる。パルテノンのフリーズは此行列の有樣を繪卷物の如くに描き、一米の巾に百六十米の長さを以て神殿の欄間を繞つて居る。祭司、要職者を始め、老若とりどりな祭りの指揮者は手にする杖に身を支へて立つて居る。乙女等は靜かに首を下げ、黄金造りの犠牲の器を持つ、青年等は外衣に身を被ふて歩み、琴彈き笛吹き等の音樂師や、奉納の菓子、撒き水、聖樹等を持つ者達も行く。次に犠牲の羊や牛が續き、武具を身につけた騎子達が容々として乘り込むで行く。然し後方の騎子達は未だ行列に加はつて居ない。乘馬の轡を取るもの、片足を鐙に掛ける者など其姿はとりどりである。更に前面の一部に、祭司は捧物を少年の手より受け、女の祭司は聖器を持つて女達に何事か命じて居る。

此等市民の群に對しては、なほ行列の到來を待つ神々の群が描かれて居る。神々の王なるゼウスは一人玉座に坐し、其側には后なるヘラが大神の方に頭を向けつゝ頭を掩ふ懸け衣を展いてゐる。そして其側には、翼のあるイリスが侍して立つ。次には逞しい姿の軍神アレスが膝頭を兩手に抱いて坐し、その側には農業の女神デメテールが貴く長衣に身を包んでゐる。次には女らしい酒神バッコスと、彼を伴ふ神の使者ヘルメスがゐる。更に少し隔てゝ祭の主人役、神殿の主なるアテナ、次に女神と親交あるヘファイストス、それより海の神ポセイドンや、アポロ、アルテミスの兄妹、アフロデティと女神に倚りかゝる其子のエロス。態度は思ひ思ひである。——行列の賑はしさと神々と市民の親しい鬪ひ、其技法は性格を示すことに鋭く、而かも個有の端正と氣品とを失はない。此線畫のやうに美しいフリーズこそは、戯曲的でありながら壯嚴な破風の群像と共に、ギリシ

ゃ文化盛大期の最も代表的な記念物である。此等装飾彫刻の作者が誰であるかは解らないが、フィディアスめいた「氣高い單純さ」と「靜寂な偉大さ」とは、監督者たるフィディアスの創意を偲ぶに充分である。神を神として嚴粛な姿に表現することを知つたフィディアスの現はし得た神々の理想像こそは、エスヒュロスの詩文ソクラテスの人格と共に、アテンの所謂る五十年間の榮ある代表物であらう。

三

榮ある「五十年間」が過ぎてアテンの權勢は衰へる。アテンに對するスパルタの妬視は終にペロポンネソス戰爭の大亂となり、既に紀元前四二九年ペリクレスが當時流行したペストにたふれてから、アテンには數々の不幸が相繼いで起つた。加ふるに、ペリクレス以來の民心收攬に依る政略はやうやく墮落の徴を示し來り、市民は公事に冷淡に唯だ私利のみを求めるやうになつた。然しスパルタの覇權も永くは續かない。祖國を仇敵ペルシャに賣つて、辛くもつなぎ得た不面目な平和がマケドニアの勃興と共に容易に破壊されるべきは自然の運命であつた。畢竟アレクサンドロスの勢力なくしては統御することの出來なかつた當事の不甲斐ないギリシャに對しては、デモステネスの熱烈な雄弁も何の役にも立たなかつた。

此頃カリアに猛威を振るつたペルシャの代官マウロスが、自己の權勢を誇る墳墓を築いた事は既に述べたが、此墳墓こそは當代ギリシャの國情を示す好代表物であつた。マウソロスの死後、夫の意を繼ぐ后のアルテミシアは、當代ギリシャに名高い有能な彫刻家達を招いて此紀念碑の装飾を依頼したが、招かれた幾人かの技術家の中でスコパスが其一人であつた。

「空中に浮ぶピラミット」と呼ばれたマウソレウムの壯觀は、唯だ考古學者の想像を俟つて窺ひ得るに過ぎないが、吾人は幸にも此紀念碑を飾つた美事なフリース浮彫の幾分かを所有して居る。題材はアマゾンの戰、ケンタウルの戰爭混亂と激情の渦卷きを描いたものが多く、感情の發露の豐かな其表現は、パルテノンのフリースの靜寂な有様に對して、如何にも著しい相異である。然し後者の端正さに對して前者の濃厚さが卑しいのではない。前者の豐滿さに對して後者が不足なのでもない。唯だ此處に時代と共に變化する藝術的表現の相異を視るべきである。然し兩者の隔りが藝術的表現の相異である丈に、兩者は其製作された時代の好き代表者であり得る。パルテノンのフリースが五世紀後半期の藝術的表現を代表するとすれば、マウソレウムのフリースは當に四世紀後半期のそれを代表すると云へやう。

人間の不變なる本性をエトスと云ひ、常に變りて留まることなき心の樣をパトスと云ふ。靜寂なるパルテノンの浮彫はエトスを表はし、躍動せるマウソレウムの浮彫はパトスを表はす。エトスの時代が去つてパトスの時代が來た——と歷史家は云ふ。五世紀後半期の消養的な理想的な表現の時代が過ぎて、四世紀後半期の人間的な情緒表現の時代が來た。

スコパスにとつて其理想とする型は、憧憬と激情との豐かな表現にあつた。眼球は上方を向いて眼窩の中に落込むやうにみへる。そして更に、胸を脹する息苦しさは輕く開いた口元に現はれる。これがスコパスの理想型であつた。而してスコパスの擇むだ此形式丈が此頃悅ばれた感情發露の唯一の形式ではない。同じく豐かな感情を描きはするが、スコパスの熱情に對して夢みる如き心の穩かさを愛した他の代表作家——プラクシテレス——がゐる。

プラクシテレスは自己の生涯に許された幸福そのまゝのやうな、夢に醉ふ穩かな表情を其影像の顏面に與へた。彼の手に成る神の像は、もはや一世紀前の嚴肅さを持たぬ代りに、晴れやかな美しさに輝いてゐた。何れもゆつたりした身のこなしやうをして、長閑な日の幸福を樂しむでゐるやうにみへる。そして更に此頃になると、時代思潮の變遷に伴はれ、刻まれる神そのもの種類も以前とは變つて來た。神々の王として尊嚴を犯し難いゼウスや、文武兩道を司どる男まさりの處女神アテナ等はもはや姿をみせない。もつと若々しく、もつと人間に近い神々の時代が來た。己が肉體の美の誇りつゝ、時としては不死の身を其人の子に任かせた愛の女神アフロディテ、惡戲な其子のエロス、歡樂に浸る酒神バッコスを始め、青春の豐かなアポロン、森の若者のサテュロス等は、等しくプラクシテレスの親しい神々であつた。豐艷な肉體を持つた女神と青年の美しさを具へた男神とが初めて作られた。

酒神バッコスにつかへるサテュロスは、從來の半神半獸めいた粗野な姿でなく、品の良い若者の姿になつた。その顏には親しげな微笑が浮び、微醉の心地良さを味つて居るやうにみへる。

同じやうな傾向は然しオリュンポスの高嶺に集ふ位の高い神々にさへも窺はれる。サウロクトノスのアポロと呼ばれる優雅な立像は、小さな蜥蜴を殺さうとして居る若者の姿である。此像には遠射の名人らしい猛しい樣子は少しもない。半ば少年期を脫しさらぬ若者が、ほんの慰みに蜥蜴を殺さうとしてゐる有樣にすぎない。美しい若者は蜥蜴の上つて來る樹幹に輕く臂をもたせ、左手で樹木の上部を支へ、右手に矢を持つて蜥蜴を狙らつてゐる。其顏は此の小さな惡戲に餘念のないアポロの心を

示してゐる。

森に棲む粗野なサテュロスにも、太陽神の高貴なアポロにも同じく優しい若者の姿を與へ、夢みる穏やかな表情と乙女の柔かい肉體を與へたプラクシテレスが、女神の姿を刻むに優れてゐた事は云ふまでもない。最も好むで肌合の細かなパロスの大理石を用ひたプラクシテレスこそは、婦人の肉體に温かい魅力を與へ得た最初の作家であつた。

ペレウスとテティスの婚禮のとき、宴に招かれなかつた不和の女神エリスが、「最も美しい人に」と書いて投げた黄金の林檎を得やうとして、アテナとヘレネとアフロディテが競爭した。ゼウスの羊を飼つて居る若者のパリスは、判決者として此林檎を愛の神なるアフロディテに與へた。――此處にトロヤ戰爭の恐るべき種子が蒔かれたと云はれる。プラクシテレスは此アフロディテの美しい肉體を刻むで終に不朽の名を爲した。

コスの住民がプラクシテレスに女神アフロディテの彫像を依頼したとき、プラクシテレスは着衣像と裸體の像と二體を刻むで住民に選擇させた。然るにコスの住民は着衣の像を選むだので、裸體の像はクニドスの住民の希望に基いて彼の地にはこばれ、其神殿の中に安置されることになつた。後世歎稱の的となつたのはクニドスに祭られた裸體のアフロディテである。

全裸體の姿で女神の像が刻まれたのは此が最初である。アフロディテの如く、肉體の美しさに特殊な魅力を持つ女神でさへ、從來の作品は總て着衣の姿に刻まれた。軍神アレスや青年アドニス等に戀をあさつた肉體ではあるが、觀者の眼を悦ばすために女神の體から衣を剝ぎ取つてしまふことに、從來の彫刻家はなほ躊躇した。然し「時」は次第に女神の衣を脱がせた。肩から胸に、胸から腰に、腰から膝に、女神の輝く肉體は羞らひつゝ顯はれた。尊嚴なる精神の讃美が豐艶なる肉體の讃美に變つて行く神像理想の推移が、此處にも明かな表現を示してゐる。クニドスのアフロディテは沐浴に下る姿である。彼女の衣は傍に立つ香油の壺の上に置かれ、清らかな泉の冷めたさが女神の美しい肉體を慄かせてゐる。白く透き通つたパロスの大石は、森影の泉の薄明の中にくツきり浮ぶ肉體の美しさを偲ばせる。

此名高いアフロディテを視るためにクニドスに旅行した哲人ルチアヌスは云ふ、

「身を包む衣はない。裸形の姿は其の美しさの總てを示してゐる……頭髪と、額と、眉との描く美しい線――そこには輝きと優しさとがある。彼女の瞳には潤ひがある、そして彼女の面持には高貴な輕い微笑の痕跡が殘つてゐる。」

ルチアヌスの心を奪つたものは單に女神の首ばかりではな

い。腰の肉付の引きしまり方や脛の動き方も亦彼の心を深く捕へた。

「像の前に立つ觀者は叫ぶ。――見よ。脇腹の豐かさよ。胴體に漲る肉の諧調よ――と」胴體の美しさを記述するルチアチスの筆は實感に過ぎて洗練した趣味をおびやかす程である。

アフロディテの小さい祠は月桂樹やサイプレスやプラタンの森の中にあり、森の冷氣が女神の沐浴する泉の清らかさを思はせる　祠は方形で内陣の前後に扉があ　、内陣の内に女神の像が立ってゐる。輝く其姿は聖殿に近づく觀者の方を向いて立つてゐる　背面の扉は閉されてゐるから神像は薄光の中に浮出てみえる。然し女神の美しさに飽かぬ觀者は　番人に金を與へて背面の扉を開かせる。そして豐かな神像の背部を外光に輝かせる。

生氣溢るゝクニドスの女神は、觀者の心を奪ひ幻惑の内に引き入れる。クニドスの里人は語り傳へて云ふ。或時一人の若者が女神の美に魅せられ、其ほしい情熱に捕　れた。そして、望を滿さんがために殿堂の中に忍び入　た　此若者には大理石の冷めたい肌が血の通ふ肉體に思はれたのであ　――と。

クニドスが負擔い借財にな　むだとき　國寳全部　プラクシテレスの女神像とを交換しやうと云ふ申し出を受けたが、市民は肯えんぜなかつたと云はれる。此物語りも亦後世の捏造かも知れぬが、此作が集めた人氣の程は推測出來やう。

不幸にして吾人の知り得るところは、此像にからまる幾多の傳説と、古人の讃辭と、ワティカノの不正確な模造品と丈である。其温ひある眼はなは現えぬでもないが、プラクシテレスの思ふ樣妙技を振つた肉體の美しさは、此模造品に僅かの痕跡しか止めない。

然し吾人は幸にもプラクシテレスの手になる一個の原作を所有する。ゼウスの命を受けて幼ないバッコスを守するヘルメスの像がそれである。此像はオリンピアのヘラ　堂發掘の際、記錄に記された正しい位置に發見された。ゼウスの命により、ヘルメスは幼兒バッコスを備稿の房であやしながら、ニュンフ達にあずけに行く。優しい快活な氣分が作品全體に溢れてゐる。幼ない弟と戯れてゐる年長の兄の愛を示すヘルメスの姿は、長閑な神々の牧人に相應しい。情人の温かさに厚く、近づき難い神々しさは少　もない、

なほ一體、クニドスのアクロポリスから發掘された作者不明の女神坐像がある　此作の女神デメテルを刻むだもので、死の神プルトンに奪はれた己が女を悲しむでゐる姿である。デメテルはゼウスより一人の乙女プロセルピーネをさづかつて居た。

ある日プロセルルピーネは野に出て花を摘むでゐたが、其處へ突然現はれたプルトンは、彼女を奪つて黄泉の國に歸つてしまつた。母なるデメテルは悲しみと怒りから自分の職務なる耕作の支配を棄てた。地上は五穀實らず人類は饑餓に陥れると云ふ始末になつた。そこで父なるゼウスはプルトンに説いて、プロセルルピーネを八ケ月母の元に戻らせ、殘りの四ケ月を黄泉の國に居らせることにした。これ故デメテルが孤獨に暮さねばならぬ四ケ月は、歎きのため女神の職たる耕作の業が行はれない。草木の枯死する冬の悲哀はかくて生じたと云ふ。――クニドスのデメテルは歎き悲しむ女神の姿である。女を思ふ追慕の情と悲しみとを表はすデメテルの面持ちは傷ましく寂しい。そして其寂しさの中に限りない深さがある。此像の作家が誰であるかは解らないが、情緒の表現に優れたスコパス、プラクシテレス時代の作であることは云ふまでもない。ヘルメスの像に見らしい親しさが認められるごとく、デメテルの像には母らしい懷かしさがある。

神と人との隔りは次第に少くなつた。神らしい神よりも人らしい神が、好まれて來た。神の持つ性格の内から神らしい徳を取り出して像に刻むだものが五世紀時代の作品であれば、四世紀の中頃に活動したプラクシテレスの作には、神の性格に含まれた人間らしさのみが表はされてゐた。そして神の理想は唯だ其の肉體の美しさにのみ殘された。位の高い神より位の低い神、人間に近い神々ば多く作られるやうになつた原因も此處にある。然し神の理想の變遷 同時に時代精神の變遷を示す。尊嚴な神を讃へる時代は幸運の傾きかけたギリシャには二度と返つて來ない。プラクシテレス以後の作風が、肉體の感覺的な美しさと人間らしい情緒とを描くことのみ腐心するやうになつたことは自然である。

四

アリストテレスを師とする青年の英雄アレクサンドロスが、意氣の漸く傾きかけたギリシャ本土に覇を唱ふるや、爛熟したアテン文化の總てを提げて東方遠征の途に上り、征服せる各地にギリシャ文化の種子を蒔いて、都市の文化を世界文化に仕立て上げたことは、思慮深い神の意志に基く。大軍を率いて國を發するに臨み、アレクサンドロスはあらゆる財寶を悉く部下に與へ、自らの分け前としては唯だ「希望」丈を殘して置いた。壯觀を極めたその遠征も、大王の彗星の如き生涯と共に了るが、彼の後繼者はアジア、アフリカの各地に王國を開き、此處にギリシャ文化の世界化が完成する。此等各地の文化はまた美術の

發展を作つた。その中でも特に盛んなのはプトレマイオス治下のアレキサンドリアと、アッタロス治下のペルガモン並びに同一系統に屬するロドス島とである。

大王の遺骸を葬つてアレクサンドリアに都を定めたプトレマイオス家は、地の利と賢しい外交とに依つて大いに此都を發展させた。「アレクサンドリアに無いものは唯だ雪丈だ」と諺にまで謳はれた此都は、其富と規模とに於て當に當代の首位をしめるものであつた。四年目宛に行はれる都の大祭には數へつくせぬ財寶が運ばれ、快活な千鳥足のシレヌス、サテイロス、狂踊亂舞するバッカナリヤ等に扮した男女も加はる。プトレマイオス二世は其晩年の頃、此地にミュゼオンを設立して學者を養成したが、數學者のエウクリッド物理學者のアルヒメデス等、堂々たる大學者が多數此地に輩出した。富裕な此地に盛大な美術が生れたことは云ふまでもない。

アレクサンドリア系統の美術は、女權の強い富裕な都市生活を反映して一般に牧歌的情調を帶び、浮世風俗の樣に表現するとが多かつた。水神の戀を描く浮彫は恰も繪の如く、戀の矢を射るエロスと可憐な乙女プシュヘとの接吻する樣は仲の良い兄妹の子供のやうに罪がない。肉付の誇張と激情の發露とを好んで描いたペルガモン系統の作品は、有名なラオコン群像の如く全く別種な系統に屬しはするが、ローマ時代にまで及んで行くギリシャ末期の作風が、一般にアレクサンドリア風の浮世風俗式たものであつたことは明らかである。人の心と共に神の種類も變り神の姿も變る。此頃の製作にかかる、身だしなみをくづして醉ひつぶれてゐるサテュロスの如きは、不死の身とは云へむしろ獸に近い。そして殊に男女兩性を具ふるヘルムアプロディトス等が彫刻家の好みの題材となつたことは、此邊の事情を最も明らかに物語つて居る。

ヘルムアプロディトゥスはヘルメスとアフロディテとの間に出來た子であるが、其兩親から非常な美しさを惠まれてゐた。ところが水の女神のニュンフェが彼を戀した。然し何うしても戀がかなわなかつたので、ヘルムアフロディテの沐みの時、彼の身を抱いて共に一體とならんことを神々に願つた。そこでニュンフェの願は聞かれ兩性を具ふる者と化した。――此極めて感覺的な物語りに由來するヘルムアフロディテの、伏して眠る姿を描いた有名な彫刻はギリシャ文化の墮落を象徴してゐる。此像の表現にはもはや精神的なる何物もない。唯だ極めて感覺的な肉體美がある。伏臥した怠惰な身のくずし方、官能的な臀部の肉付――此處には既にプラクシテレスの優雅な美しさは全くない。ましてフィディス時代の氣品などは影すら殘らない。

紀元前一四六年コリント市はローマ軍に征服され破壊された。之を最後としてギリシャは亡びローマの屬州の内に加へられる。此頃にはギリシャの美術も亡びる。フィディアスやプラクシテレスに光榮なる祖先を誇ることの出來たギリシャの彫刻家達は、個性の無い技術丈を以て身をたてる工人の群と變る。ローマ人の飽くことなき所有慾を滿足させんがために、彼等は古來傳來の作品を巧みに模造して、限りなくローマに輸出した。模造は多くの場合原作のまゝを反復してゐるが、時としては當代の趣味に投合するために意識的な變更を加へた場合もある。プラクシテレスの名作クニドスのアフロディテに、阿娜た艶めかしさを與へたメディティのウェヌスの如きは其代表作であらう。──その昔神殿に祭られた愛の女神は、今や繁榮な都に出て身を賣る白拍子と化した。かくてギリシャの神々の亡びる時が終に到來した。

×　×　×　×

本稿はペロ、レウィ兩氏の著書並びに坂口昂先生、澤木四方吉氏の研究等に負ふ所が甚だ多い。厚く謝意を捧げる。

各國の外交政策

獨佛の外交關係

（ライン問題に關聯して）

米田實

一

大正十二年の十月に入り、遽かに世間を驚かした出來事は、獨逸ライン州に於ける獨立共和國の樹立であつた。十月二十一日レオ、デカアスを首領とする分立派は、エーラシヤペルに於て起ち、ライン共和國の成立を布告した、當日は一滴の血をも流さず、エーラシヤペル市廳及び其他の公共建築物を占領し、警察行政を掌握した、巡査は新共和國に忠誠なることを誓約し一度其武器携帶を許された程であつたが、其夜に於て警官の武装は解かれた、併し尚其任務に當ることを許された程頗く寬大であつた　斯くして彼等は其附近に於て着々勢力を擴大し、翌日にはコブレンツを占領し又ウイスバーデンに於ても市廳を占領した、其他約六箇の街を共和國政府の手に收めると共に、漸次活動の範圍を擴めて來たのであつた。而して共和政府の領袖たるデカアスはエーラシヤペルの生れで年齢六十歳の働き盛り以前は家具並に衣類製造業を營み、衣服商等にも關係して居たのであつたが、過去四五年間例の有名なるドルテン博士其他と共にライン獨立國を樹立するため力を盡して居たものであつた。此ライン獨立に對しては英國は不贊成の意を表明したけれども、佛蘭西及白耳義は大體贊成の態度を示してゐた、但其後ライン獨立共和國樹立の面々が、政治的能力を缺き徒らに地方の紛亂を强め、人心を恂々たらしめたる結果遂に十一月に入り、エー

ラシャベルの白耳義官憲は分離派の武裝を解除し退去せしむるが如きことに、一時形勢の轉化を見るに至つたが、併しライン獨立問題は決して之を以て消滅した譯のものではなく、今後異れる形に於て再現し來るべきは多く疑ひを容れざる所である。

ライン共和國分立の機運を作つて居ると目せらるゝラインの地域は何處であるか、之を狹く觀れば所謂ライン左岸である、今のアルサス、ローレンより和蘭國境に至るライン河流の西に位する面積約一萬方哩人口約九百五十萬の地域を指すのであつて、同區域は今より百十年前即ち一八一四年までは、佛蘭西領土に屬したものであつた、當時佛蘭西は同州が幾多の小君主の領土であつたものを占領し爾後二十年を經過して居たのであるが、右の年に普魯西は之を佛蘭西より占領し今日に至つた、今次の歐洲大戰にありては同州は殆ど獨逸に於ける軍事的要地と見られた程、多くの砲臺は勿論多數の軍需品製造工場を有してゐた、殊に獨逸の西進政策を支持する意味に於て、軍事的並に軍略的鐵道は多く敷設されてゐたのであつた。住民の多數は言語としては獨逸語を用ひてゐるが、併し普魯西に合併せられ、普魯西人の權力下に統御せられて居た所から、自然普魯西の權力に對し不平を懷き、彼等は常に重税を普魯西に支拂ふ結果として、得る所は唯普魯西流の官僚政治であるといふが如き不滿を漏してゐたのであつた。此地帶は固より工業地帶にして、其富裕なること論ずるまでもない。即ち軍略的にも軍事的にも將た經濟的にも、當然重視せらるべき地域でなければならぬ。言ふまでもなく佛蘭西はラインの分立に就ては、熱心なる同情者であり、今回の獨立運動に對しても佛蘭西の態度は、エーラシャベルに於ける共和國樹立宣言の行はれた當時既に好意的中立にあることを示してゐた、エーラシャベルは、白耳義軍隊の占領地帶であつたが、若しも此分離運動が其他の地帶若くはライン河を横ぎつたる彼方即ちライン河の支流たるルール河地帶等の佛蘭西軍占領地帶に起つたと假定しても、佛蘭西はやはり同情ある態度を執ることに定めてゐたのであつた。論より證據、ラインの佛將ドグー將軍は、佛國占領地に於ける獨逸官憲に警告するに一切分立運動に干渉すべからざることを以てし、若し此に干渉すべからざるの命令に服從せざるに於ては、佛蘭西は港[illegible]持の立場より警察に向つて干渉を爲すべきことを聲明したのであつた、之を以て觀ても佛蘭西の態度は明かに首肯され得る、尚十月二十八日佛國首相ポアンカレーが、ライン獨立問題に就て聲明せる所を觀るに、其眞意は[illegible]せられる、而して佛蘭西のライン獨立に對する同情は、其左[illegible]に[illegible]する點に於て一層強きものがあつた、ライン河左岸までを佛蘭西領土に屬せしめた

い底意が佛蘭西側に於て強く、現に大正八年の巴里講和會議に於ても、其色彩は濃厚に現はれて居た位であつたが、併し佛蘭西の希望はライン左岸の獨立といふことのみに限られて居た譯ではなかつた、廣く是を觀ればライン州全體の獨立實現こそ、佛蘭西側に執り最も痛切に歡迎せらるべき問題でなければならぬ、勿論ライン州全體の獨立が實現することゝなれば、茲に面積二萬一千八百二十三方哩人口一千百五十六萬を算するに至り獨逸の「巴威」より稍大きく新設墺太利共和國よりは一層大となり、塞比亞王國が戰勝の結果新しく作り得たユーゴースラヴィア國と相伯仲の間に在る獨立國が出來る譯である、從つて近頃大戰の結果小國、雨後の筍の如く出現せる歐洲に於て、ライン州が一國となるのも敢て不都合とは見られない。若しライン地帶が獨立して獨逸より分離さるゝことゝなれば獨逸の工業國としての地位は破壞せられなければならぬ、卽ちエッセン、コロン、デュッセルドルフ、エルベルフエルト、コブレンツ、マインツ及びフランクフルト等は獨逸の地圖面より除かれて了ふであらう、從つて大正十一年の初めに於ける佛蘭西のルール占領に際き、大いに之を問題と爲したる世人は、此度十二年秋より始められたるライン地帶の分立問題に對し、重視しない譯には行かないのである、依つて予は少しく此問題に對する佛蘭西の政策を研究して見たいと思ふ。

二

抑もライン共和國樹立の問題は佛蘭西が直接原因を爲したとのみは斷定し難い、固よりライン地帶の住民中にも獨立國樹立を希望するものが尠からずあつた又た現にあるに相違ない、其第一は前にも述べた如く同州は普魯西に所屬し、重稅を課せらるゝと同時に、徒らに壓迫を加へられて居たこと、第二は地方住民は大いに彼等の政治的生活を發揮せんと欲し、之に對する企圖を懷けるものもあつたに相違なからう、就中近頃に於て獨逸が賠金問題に行惱み、非常なる經濟的財政の難局に逢着し、今や馬克紙幣の如きは一は償金問題のため一は誤れる財政々策の爲め、續々低落し甚だしきは戰爭前の百萬分の一といふが如き程度にまで下落した、延いてライン人民も其影響を被り苦境に惱まされて居ることも疑ふべからざる事實である。茲に於て同州が獨立によつて自からの苦境を免かれんとする考を持ち來つたのが第三の理由であると思ふ、併しながら彼等は此事のみを以て思ひ切つたる獨立國樹立等の活動は出來るものでない、卽ち此等は陰然他の後援を恃み得ることによつて、敢然として獨立政府を樹立し遂に十月末コブレンツに於て首相以下外相其外の各閣

員を定め獨立政府組織を聲明するに至つたのである、若しも本運動の同情者たる佛蘭西の後援なかりせば、或は其獨立の實現は容易に期待されなかつたものかも知れない、恰も分立派の中心と目せらるゝものにして、分立聲明後駐佛公使に擬せれたらるドルテン博士は、大正七年の末葉より今日まで屢巴里に往來し、ライン獨立問題に就て佛蘭西政事家と會商を續けてゐたものであつた。大正八年には例の佛將マンジヤン將軍等は、マインツに於てライン獨立を後援せんが爲め、其熱する所遂に極端なる擧動を敢てし、同年五月にはマンジヤン將軍の案に從ひ、ライン革命は開始せられたのであつたが、米國の反對に會して同革命は間もなく失敗に歸し、マンジヤン將軍は召還さるゝの運命に陷つたのである、要するにライン獨立問題は佛蘭西の政策を度外にしては、到底解し能はざる所である。

然らば佛蘭西がライン獨立を希望し熱望する所以のものは何か、其由因は頗る舊い、即ち佛蘭西に於て久しく存する彼の天然國境論に遠因を發せるは否むべからざる事實である、然らば天然國境論とは何かと言ふに、苟も國家として天下に立つ以上、其國境は天然の障壁を以て作る權利がある。又作るべきものであるとの主張是れである、即ち國は山、河、湖水、海の如きものを以つてその國境とする權利がありと言ふのである、然るに歐羅巴に於ては英國は四面環海にして完全に天然國境を作り、西班牙亦山岳と海によつて大體の天然國境が構成されてゐる、翻つて佛蘭西は如何と見るに、其國境は西方海に面し東南、山によつて圍まれ充分保護を與へられて居るに拘らず、唯一の佛蘭西の最も遺憾なるは殆んど無障壁の狀態に置かれたる東北方面の國境である、佛蘭西と英吉利佛蘭西と西班牙、佛蘭西と伊太利の國境は勿論天然國境として認むべきも、獨逸白耳義方面に於ては天然國境と稱することが出來ない、此間幸ひに白耳義は今日佛蘭西との爭端少ないけれど、獨逸佛蘭西間の關係は極めて圓滑ならざるものがある、此方面に於ては殊更らに天然國境の策定を必要とする立場にある、殊に佛蘭西國内は平野相續き、國内の統一には好都合ではあるが、外來の敵を防禦するには頗る不都合の國である、是れ他の山嶽重疊せる國、河川湖海の多き國に於けるよりも、天然國境論の盛に唱導され易い所以でもあらう、尤も二百年前例のボーバンは天然國境によらずして人爲國境により國を安全にせんとする案を支持してゐたことがあつた、即ち砲臺とか各種の軍事的施設により人爲的國境を作り出すことが出來るといふ案であつた、然るに例の有名なるルーソーは之に反對意見を抱き、天然國境論を鼓吹したことさへあつた。天然國境論が佛蘭西に最も盛に唱導せられ始めたのは

何時の時代かといふに、ルイ十四世の時代が顯著なものであらう、ルイ十四世は十七世紀頃より東北に戰ひ西に鬪ひ、或は西南に兵を進めたが、其多くは佛蘭西の爲めに天然國境を完全に得んとする政策から出發したのであつて、彼は苟も一國は山河湖沼或は海等の自然障害を以て、天然國境を作る權利がある、若し之を積り來つてその地を自己の領土として居る國があれば是れ不法な侵入者であるから、侵されて居る國は之を驅退し退去せしむる權利でありと考へて居た、果して彼の戰爭振は如何であつたか、今更述ぶるまでもなく歷史によつて世間周知の事實である。然るに十九世紀に於て有名た佛蘭西の歷史家ラバリエはゴール時代から一八三〇年迄の佛蘭西の歷史と云ふ著述を爲し、佛蘭西の古い時代に於ては其祖先たるゴール人は實に、此天然國境を維持し今日佛蘭西が天然國境として、當然自己の國境たらしむる權利ありと主張するライン河地帶を領有してゐたといふ主張を爲してゐる、其後も佛蘭西人の頭に天然國境思想が消滅せず、常に東北方面に於て所謂天然國境たるライン河までは自己の領土とせざるべからずといふ考を維持して居た、十九世紀に於ける此思想の現はれは墺普戰爭時代に於けるナポレオン三世の外交であつた、當時普魯西のビスマルクは好餌を以つて佛帝ナポレオン三世を牽制し、其間墺太利を打破し盡さんとする策を弄した、ナポレオン三世は遂にビスマルクの怪腕に見事翻弄せられたのであつたが、併し一面から觀れば佛蘭西自から此天然國境たるライン河地方を自國領土となさんとする希望極めて切なりしものありし結果、遂にビスマルクの爲め愚弄せられ翻弄せらるゝの機會を釀成せることを忘れてはならぬ。一八六六年七月ナポレオン三世が普魯西駐剳佛蘭西公使ベネデチーをして、ビスマルクに致さしめた條約案には第一に普魯西よりライン左岸一帶の地をナポレオン三世に讓るのみならず、普魯西王は巴威王並にエツセンの太公を動かして其支配下に屬するライン左岸の部分をも佛蘭西に割かしめやうとしたものであつた、所が同條約案文の八月に至り、ビスマルクに致された後、ビスマルクによつて、恐るべき佛蘭西の野心は與國に吹聽せられ、遂に佛蘭西の聲名を失墜せしむる原因となれることは、歷史家の夙に指摘してゐる所である、それ以來一時佛蘭西の天然國境主張は影を潜むるに至つた、それといふのは其後普佛戰爭の起るあり佛蘭西は敗戰の結果ライン地帶所か、自己の領有して居たるアルサス、ローレンをも普魯西に奪はるゝが如き運命に陷つた、然るに時運は廻り、今回の世界大戰勃發により、獨逸は戰敗國の悲慘なる境遇に立ちたるに反し、佛蘭西は大いに其志を爲すの機會到來せりと見られて來るや、遽かに天然國境論

の主張は擡頭し來たのである、佛蘭西は先づ戰爭最中即ち大正六年（一九一七年）露西亞と秘密條約を結び、駐露佛國大使ツーメルグをして露西亞皇帝及び外務省に對してライン地帶の境界線に就ての保障を求めたのであつた、其結果露西亞外務大臣は大正六年（一九一七年）二月十四日付公文を以て彼のアルサス、ローレンを佛蘭西に恢復せしむることを保障すると同時に、「目下獨逸帝國の一部を構成するライン河左岸の地帶は全然獨逸より分離せしめ之を自治的中立的一國と爲し且或時期の間佛蘭西軍隊によつて之を占領せしむることを許す」の約を與へたものである、勿論之は各候件で露西亞から許されたものではない、即ち佛蘭西側にては之より先きコンスタンチノープル、ダーダネルス、ボスフォラス兩海峽及び近東方面に於ける露西亞の主張を飽くまで後援するの約束を與へ居たることは勿論特記して宜いことゝ思ふ、此秘密條約に就ては英國は與り知る所なかつたのみならず寧ろ之に對して不贊成なりしことは同年十二月十九日彼の外交の衝に當つて居たバルフォーア氏が英國下院に於ての言明に徵しても明か。ある即ち「英國は決して斯の如き計畫に同意を表せることなし又之を希望せず之を奬勵するの意思なきことを言明す」と云つてゐるのである、併し協定の範圍が佛露兩國に限定されてゐたとしても、以て佛蘭西のラインを獨逸より引離さんとする考への強かつたことは否定すべからさる明瞭の事柄である、勿論佛蘭西は此問題に就て全然英國方面に對する運動を閑却してゐた譯ではない、同じく大正六年（一九一七年）一月には時の佛國首相ブリアン氏は英國駐剳佛蘭西大使カンボン氏に書翰を送り大いに之を主張して居るの事實あるに見ても明かである、駐英佛國大使は此點に於ける英國の努力を求め、奔走頻りに努めたに拘らず遂に効果を收め得なかつたことも世人の知れる所である。

三

其後ライン地帶を佛蘭西の勢力下に馴らすの案を強く主張し、且具體的の案を作り出したのは彼の世界大戰に於て聯合軍總司令官として功勞顯著なる佛蘭西のフォッシュ元帥であつたと思はれる、フォッシュ元帥は大正七年十一月二十八日佛蘭西は是非共獨逸の國境はライン河を以て境とすべきものなりと主張した、即ちライン左岸は聯合國の支配下に置かるべきものであるとの希望を聲明した、此案が事實に於てライン地帶を佛蘭西の支配下に置かんとする意味を包含すると思はるゝことは當時フォッシュ元帥の具體案中にライン左岸の住民は佛蘭西の兵役に服すべきものであると主張されてゐる點である。結局同

案は餘りに露骨に過ぎ、佛蘭西の野心を殊く見らるゝ危險ありと信じたる爲めか、フオツシュ元帥は翌大正八年（一九〇九年）一月十日更に別箇の修正案を作出した、此修正案がフオツシュ元帥によつて作らるゝ前月即ち十二月には、米國大統領ウヰルソン氏は佛蘭西及び英國に來り、盛に國際平和を唱導し侵略主義を攻撃し、就中十二月末には倫敦及び巴里の双方に於て、ウイルソン對クレマンソウ兩氏の間に國際聯盟對勢力均衡主義の爭が行はれ、爲めにフオツシュ元帥等も極端なる侵略主義が同講和會議に於て成功の望みなきこと、を看做したる結果であつたとも思はれる、併し此變更修正せられたるフオツシュ元帥の案によるも、やはりライン河を以て獨逸の西國境たらしめざるべからざることを主張し、ラインの重要地點は聯合國軍隊によつて占領せざるべからざること及びライン地帶は西方の諸國と關税同盟を作るべきものなることを主張してゐた、即ちライン地帶は關税的に云へば獨逸より引離し佛蘭西等に密接せしめ協同せしめなければならぬといふ主張であつた。佛蘭西首相クレマンソウ氏は或程度に於て一應フオツシュ元帥大統領ポアンカレー氏等の主張をも相當に傾聽し、佛國の外交通運が指摘して居るやうに一月八日、二月十九日、二月二十五日の覺書に於て、又二月六日、二月十九日、二月二十三日、三月十一日、三月十二日、三月十四日の英米其他聯合國全權等の協議に於て、盛に此主張を鼓吹し持したものであつた。然るに佛蘭西側の主張は聯合國殊にウヰルソン、ロイド・ヂョージ兩氏の容るゝ所とならず、ロイド・ヂョージ氏の如きはライン地帶は長く獨逸の領土にして然も獨逸文明の揺籃地とも觀らるべき地帶なれば之を獨逸より引離すことは、即ち第二のアルサス・ローレンを作ることである既にアルサス・ローレンの苦經驗を觀て居る吾々が今回の戰爭に於て再び第二の惡例を作るが如きは大いに不可なりとて强硬なる反對論を唱へたのである。一方米國に對しても佛蘭西は大正七年末講和全權の一人なるハウス氏が歐羅巴に來つた當時既に、ライン地帶迄自己の勢力を擴大せんとする案を陳べて居た、當時の米國の態度は極めて曖昧であつたが、遂に大正八年三月大統領ウイルソン氏は講和會議中一旦歸國し再び歐羅巴に渡り交渉再開するやロイド・ヂョーヂ氏と共に、佛西西の態度に對し熱心に反對を表して來た、クレマンソウ氏は極力佛蘭西の主張の採用に努力したけれども、議容易に容られず白耳義皇帝アルベルトさへもさして此問題に贊成せざるが如き態度を示すに至つたので、佛蘭西も遂に心ならずも第二の妥協案を執るに至つた、該案はライン左岸を獨逸より引放さんとする案を放棄する代り、其主たる方法として英佛米三國同盟に依

り佛蘭西の地位を鞏固ならしめんとするにあつた、同案は大正八年三月十四日に至り漸く採用せられ同年六月二十八日公式に英米佛三國同盟條約として現はれたのであつた、其内容はライン地帶に於て獨逸が佛蘭西を脅威する場合英米は武力を以て佛蘭西を援助 ると言ふ約束である、同盟の期限を定めず將來國際聯盟が完全に此種の點に就て保護を與ふるに至るまでは英米二國は佛蘭西に後援するの義務を負ふことゝなつた、之を以て天然國境を獲得し得なかつた佛蘭西は、該同盟條約によ 幾分か獨逸の脅威より免るゝを得ることとなつた、尤も佛蘭西國民中には英米の援助を以て間に合はずと主張するものもあつた 即ち獨逸が急激に活躍し來る場合に、英米より兵を派遣するのでは時既に遲し、從來の經驗に鑑みても到底戰場の活動には間に合ひ兼るといふ論もあつたが、佛蘭西に一朝有事の場合に於て利益であることに疑ひはなかつた。但佛蘭西は之れのみを以て滿 することは出來なかつたので、尚今後十五ケ年間聯合軍によりライン左岸を占領すること、及びライン橋頭並に其右岸約五十吉米間に對して、一切砲臺の建設を許さゞることゝし、之によつて獨逸がライン地帶を根據地として、急激に佛蘭西を襲ふが如き危險なきことを保障せるのみならず、今後十五ケ年間獨逸の兵數を十萬人に制限することによつて亦此方面の危險を一層減少することにした。之丈けウイルソン及びロイドヂョージ氏を自說に屈服せしめた佛蘭西全權クレマンソウ氏は自分も遂に英米の主張に讓歩して本問題は一旦解決を見たのである、然もフオツシユ元帥大統領ポアンカレー其他佛蘭西の愛國論者は未だ之に滿足する能はず、輿論の趨く所勢ひクレマンソウ氏の政治的蹉跌の原因をなし、翌年 月佛蘭西大統領 擧を行はるゝに際しクレマンソウ氏は再び其候補たらんとして、遂に失脚の止むなき運命に陷つたのも亦之に原因する所が多かつたのである。

斯く觀來れば天然國境論を根本とする佛蘭西のライ 策は殆ど判明し來るのである、佛蘭西としては帝國主義の譏りを蒙るゝものあるが故に、今日堂々自からライン地帶を領有せんと主張するのではない、少くとも之を獨逸より分離せしめ之に自己の勢力を加へんとする程度のものであつた、而して之は講和會議に於ては一應失敗したものである、然かも遺憾なことには、その後、新らたに佛人のライン 策再燃を促す如き事情が發生したのである、予は之を思ふ每に憮然たらざるを得ぬものである。

四

何が佛蘭西をしてライン分立を又もや强硬に希望しなければならぬ立場に置いたかといふに、吾等の觀ずる所を以てすれば折角成立せる大正八年六月の英佛米三國同盟條約、即ち佛蘭西が之によつて一度獨逸の攻擊來るや英米の援助あることを確保し、以て自國の地位を保障し安全ならしめた條約其者が、遂に無効に歸して了つた事實最も與つて力があることを思はねばならない、それは誰も知る如く大統領ウォルソン氏が大正八年彼のヴエルサイユ講和條約案を米國上院に提出し、其批准を求むるや上院は同年十一月其批准を拒絕し、翌年三月に至つても又復其批准を拒絕したのであつた、斯く講和條約案の批准が拒絕せらるゝことゝなれば、之に附帶せられて協定された佛英米の三國同盟條約が英國に於て、採用せらるゝことと不可能となれるは言はずして明かである、況んや米國は本來同盟條約なるものに反對の國ではなかつた乎、過去に於て米國が同盟せる歷史は十八世紀の獨立戰爭時代に成立した佛米間の同盟關係あるのみに過ぎぬ、之も其後米國は同同盟關係の有害なるを認め、初代大統領ワシントンは何れの國とも結託すべからざるを主張するに至つたのである。明治四十年（一九〇七年）英國よりゼームスブライス氏が新たに駐米英國大使として赴任するに際し、同大使が英米同盟に努力すべしとの說米國に傳へらるゝや、反對論所在に勃發したことがある。又た米國が國際聯盟規約に反對を表せる一原因は、同條約案第十條が米國と他の强國との間の、一の同盟條約たるかの如き觀ありといふ非難である。斯の如き事情であるから佛米英三國同盟條約が講和條約の拒否と共に米國の批准を得ずして敗れたのも、何の不思議があらう、已に米國が批准を與へないとすれば殘餘の英佛だけで同盟條約を生かし存續し行き得るかといふに、それは無論駄目であつた。何となれば該同盟條約は英佛兩國に於ては、大正八年十一月二十日批准交換を行つたけれど、それを以て完全に効果を生じたのでは無かつた、右批准交換は、米國が批准を爲した場合に始めて効果を生づるといふ諒解の下に行はれたのであつた、此點は當時英國下院に於て自由黨議員ケンウオルシー氏の質問に對し、ボナーロー氏は政府を代表して同條約は米國政府が同一の義務を負ふことを條件とするのであると聲明せる事實に徵しても明かである。茲に於てクレマンソウ氏が大正八年三月佛國の希望せるラインを獨逸より分離すべしとの主張を已むを得ず撤回するに至つた所以の最大の條件は空無となつた譯である。佛蘭西は最早一朝事有る秋に當り獨逸軍の侵入に對し英米兩國より何等後援を得る保障を失ふたのである。而して獨逸は再び短年期間を經たる後に於てライン地帶を根據とし、恰も一八七

○年即ち明治三年に於て行へるが如く若くは一九一四年即ち大正三年に於て行へるが如く、佛蘭西を有利に攻撃し得る地位置かれてゐると稱しても差支なくなつた、併し英佛間でも此後此點に關し多少の會商が行はれ、大正十一年(一九二二年)一月ブリアン內閣當時カンヌ會議に際して、約十年を期限とする英佛同盟條約案が成立しかけたこともあつた、然るに此案は佛蘭西上院に於て頗る不滿足とせられ、假令向ふ十年間の同盟條約を締結するも、其所謂十年間は獨逸が佛蘭西に對して何等の行動をも執る能はざる時期である、此期間に於て英國が如何に佛蘭西に對し同盟援助を與ふるとも、何等效果を齎さゞるは明瞭であるとの反對論あり、其爲めブリアン內閣は同年一月遂に沒落し次でポアンカレー內閣の成立を見るに至つた、同內閣成立後に於ても英佛同盟條約問題に努力し、ポアンカレー氏は少くとも二十五ケ年間の同盟條約を作らんことを希望したのであつたが、是亦行惱みを生じ今日に於て何等の成果を見るに至らない、斯の如き形勢に對して佛蘭西政治家の間にライン分立問題を再び考へ出すに至れるのに何の不思議があらう。

五

佛蘭西人は米英佛三國同盟條約の批准失敗で自國の不利なる形勢が出來ると直にライン問題に關する輿論昂め始めた、大正十年頃佛蘭西人間にては英國を攻撃し、英國はライン地方に於ける平和維持の任務を佛蘭西に負はしめ、ライン方面に於ける平和維持によつて生ずる利益を佛蘭西に與へざるものであるとの非難の聲が高まつて來た。大正十一年(一九二二年)佛蘭西代議院財政委員長は、ライン分立を主張する意見書を起草した即ち第一ライン地帶に分立せる獨逸のライン國民兵を組織すべきこと、第二豫算は全然獨立すべきこと、第三、ライン地帶に於ける普魯西官吏は免職せらるべきこと、第四、ライン地帶の軍事的占領の時期は延長せらるべきこと等の主張を爲した、此事は英獨其他の新聞に漏洩せられ盛に議論を發生するに至つたのである。斯の如き形勢は大正十二年一月に入り償金問題を機として、ライン河の分流たるルール河の地帶(長さ六十哩幅三十哩の鑛物豐富にして工業盛なる地帶)をも佛蘭西に占領せしむるに與つて力あつたことを疑ふを得ないのである。

以上の如き事情に於て觀察するに、今日佛蘭西の外交がライン地帶を獨逸より引離すにあることは諒解するに困難ではない尤も之には假りに佛獨間多年の疎隔の歷史を別にして見ても、亦所謂天然國境なる思想を別にして見ても、佛人のライン策に熱心せしむる追加的事情は他にも在る。否な之が最近に屬する

丈け、影響深きことを免れ無いのである。蓋し世界戰爭前に於ては獨逸の首府伯林は佛獨の國境より四百哩の距離に在り、巴里は百六七十哩の距離に在りて、巴里の方が遙かに容易に攻撃を受け易い境遇にあつた、加ふるに伯林に達するまでには中途幾多の天然的の防禦線がある、即ちライン、ウエゼル、エルベの三河を擁し、其間にも幾多の山岳を控へ、殊にライン地帶には多數の砲壘が築造せられ防禦設備が整へられて居る、之に反し佛蘭西は天然的の防禦も充分ならず、人爲的防禦線も不完全であつた、今やアルサス・ローレンは佛蘭西の手に歸したけれども、此不利なる大勢は尙完全に恢復せられてゐる譯ではない、殊に佛蘭西の立場として考ふれは、戰爭後獨逸は一の共和國となつたとは云へ、謂ば形式に過ぎない、最近に於ては一層左進せずして右進するの傾向を示し、却つて保守的傾向濃厚となり、帝制的思想の益々固まり行く狀態にある、換言すれば侵略主義といふが如き思想は決して減少し無いのである。加ふるに佛蘭西として憂慮せらるゝのは例の人口問題である、佛蘭西は現に三千九百萬の人口を算するけれども、年々二十萬人宛の減少を示し此勢ひを以て進む時は、今後五十年を出でずして國内の人口は著減し二千五百萬の小國と化せんとする危險さへありと見られて居る、唯だ最近一ケ年間の佛蘭西の形勢は一寸人口減少の勢を中止した形ちと言はれるが之れとても一時的現象にして將來果して前に述べたる如き大勢を變更することを得るや疑ひなきを得ない、佛蘭西は人口問題に就て非常に苦心し、國家は子供に對する補助金を與へ、現に第一子に對しては一ケ年三百三十法、第二子に對しても同樣三百三十法、第三子以下に對しては一ケ年四百八十法の補助金を下附する制度さへ設けられ其外にも種々人口增加の奬勵策を講じてゐる、斯の如くしてまで人口增殖策を執らざれば、其將來憂ふべきものあるに對して獨逸は如何、世界大戰に敗れたる結果領土を失ひたる爲め、人口も之に準じて減少したとは云へ今尙六千萬を算し、然も年々七八十萬人の增加を示してゐる、獨逸の人口形勢は大いに佛蘭西人を憂慮せしめ、將來若し戰爭ある場合には獨逸は必ず兵力に於て佛蘭西を凌駕するならんと憂慮し、從つて其防禦政策よりライン地帶を重んずること尋常ならざるは、是亦自然の觀なければならない、況んやラインを獨逸より分離せしめんとすることは從來佛蘭西の執れる種々なる政策にも適合するものである普佛戰爭前、彼のナポレオン三世などが飽くまでも北獨と南獨との合併を阻止せんとする政策を執れるが如き、假令それに失敗に歸したるにせよ今日に於て尙南獨北獨の間を引離すか、若くは少くともライン地帶だけにても引離すことゝならば、それ

だけ獨逸の人口は減少を來し富力は衰へ戰鬪力は減殺される、從つて人口問題より生ずる佛蘭西の困難なる形勢を幾分緩和することが出來る、此等事情が前述の天然國境論等に助成し、猶油らを注ぐに至つた原因の一たることも亦疑ひを容れぬ點である。尙他の一の理由は例の戰爭後に生ぜる佛蘭西實業家の希望並に運動も關係して居ると思ふ、そは何かといふに經濟的見地からのライン發展策である。既に戰爭前でも佛蘭西は石炭の欠乏を感え、其消費年額六千三百萬噸に對し、自國よりは四千百萬噸しか産出せず、爲めに二千二百萬噸は之を獨逸其他の邦國に仰がざるを得ない狀態にあつた、然るに戰爭後佛蘭西は年額二千百萬噸の鑛鐵を産するアルサス・ローレンを恢復せるため、勢ひ石炭の必要を生じて來た、即ち銅鐵及銑鐵を作出する製鐵事業は石炭なくしては行はれない、斯くて佛蘭西の石炭需要は一層多きを加ふるに至つた、茲に於て佛蘭西は少くとも石炭産額の豐富なるライン地帶に手を伸ばし以て自國の工業を盛にするの策即ち戰爭によつて新しく獲得せる富源を開發し、之を利用するに必要なる資料を現在の獨逸より取る策としても、ライン地帶を獨逸より分離せしめ佛蘭西の領土とするか、又は領土とせずとも獨逸より分離獨立せしめて無形的に佛蘭西の勢力範圍と爲すとの必要に迫られて來たのである、由來今日鐵産國にして石炭なきものは決して製鐵事業を完全に盛んならしむることは不可能である、現に米國の如き英國の如きは鐵を有すると共に石炭を有すればこそ、製鐵事業が盛大である之に反し瑞典の如きは鐵を有すれども、石炭なきため其製鐵事業は鐵の潤澤なるに比して甚だ微弱なるものがある、其他歐洲に於ても鐵鑛物を産出しながら英國其他に輸出して居る國は、皆石炭不足の結果であつて、佛蘭西人が夙に之を看取し戰前千八百萬噸の鑛鐵を有し、今やアルサス・ローレンを加へ彼是れ四千萬噸近くの鐵を所有し其地位歐羅巴に冠たる立場に在る佛蘭西としては、何としても獨逸の石炭供給地に地帶を作らなければならぬ、此點に於て大正十年及び同十一年に亘り、佛蘭西實業家の爲せる運動殊に政府其他政黨間の遊說は大いに努力せられたものであつた、是亦佛蘭西の外交をしてライン膨脹策を助成せしむるに至つた原因の一には相違ない。斯る事情下に兎も角佛蘭西のライン政策が行はれて居るものとすれば、ライン獨立問題は縱しや之を不利とする英國などが假令獨逸に援助することありとしても決しても、決して、死滅するものではない、今後益局面を紛糾し錯雜ならしめて行く問題であらうと思ふ、同時に見なければならぬことは、之が爲め獨佛間の關係が將來益調和すべからざる程度まで、漸次乖離し行くことであらう、是亦佛蘭西の政

策より生づる重大なる結果であると考へなければならぬ。

六

然らば一轉佛蘭西の此侵略的外交政策に對して、獨逸は如何にして之に對しつゝあるかといふに、獨逸は先づ内政策としては第一にライン人民の緩和策を講じて居る獨逸政府は共和政制樹立以來非常なる内治外交の兩難局に立ち從つて其外交振等も活動の餘裕少なく、巧妙に行はれて居るとは評し難い。ライン地方人民に對する政策なども成功してゐるとは言はれない、殊に普魯西官僚主義の失敗の跡は今日に於ても尚殘つて居る、併しながらライン地帶人民の主張を尊重することは彼等と雖も無論考へてゐた、彼等はライン地方は往時より獨逸の領土であり、獨逸民族なる自覺心も強く、殊にその地方農民の間には眞に獨立の希望ありや否や疑はしいと考へてゐた、併し獨立熱の存することを知悉し、之に對する善後策としてラインを以て獨逸國内の完全なる一獨立國として普魯西より引離し、同州人民の政治的希望を成就し滿足せしめやうと考へ、現に獨逸憲法の制定せられたる當時の如き、ライン地方人民の希望に最も敬意を表し、特に加へられたるものが同憲法の第十八條であつた、第十八條は現在の獨逸國内各州の境界を變更し得ること、憲法修正の手續により獨逸國内に新しき州を若くは國を作り得ることに定めたのであつた要するにライン人民の意嚮を尊重し、獨逸國内の一部たるまゝに彼等の政治的自治の希望を成就せしめんとしたのであつた、尚大正十二年秋ライン共和國樹立せらるゝ以前に於て、ヘルヘツ氏等を始めとせる自由主義系の政治家は獨逸大統領エーベルト氏に對して、一日も速かにライン地帶を獨逸國内の自治的一州として聲明せんことを主張した如く、彼等は完全にラインを普魯西より引放し、ライン人民自身を希望する政治的組織を之に與ふることを最も必要なりとした、彼等は之に關聯してライン地帶の舊教徒及び中央黨等が普魯西の支配を嫌惡せる事實を特に指摘したものであつた。唯た現内閣は其地位極めて安固ならず、急激にライン地帶を普魯西より分立せしむることの、普魯西人の感情を害はんことを慮るる分子もあり、未だ實現の域には接しなかつた、併し少くとも彼等が緩和策に出でんとせることは大勢として明かに察知せらるゝ所であつた。

以上は獨逸のラインに對する内政策であるが、然らば其外政策は如何といふに、獨逸は二箇の政策を根抵として居るやうに見える、それは何か、第一は英米を動かして以て佛蘭西を牽制する策に出で、第二は露西亞と接近し之によつて獨逸が世界戰

爭の結果喪失したるものを塡補し以て將來の發展を期することである。先づ英米政策より云へば英國と獨逸とは十九世紀時代に於てはさして衝突のなかつた國である。尤も英國は早くより殖民地政策を行ひ世界に發展せる關係上、現狀を維持することを以て其利益なりと信ずるに反し、獨逸は他國が發展した後に遲く世界競爭場裡に飛び出したので爲めに現狀を變更することによつて、自國の利益を得ねばならぬ立場にあつた、卽ち現狀維持對現狀變更の立場に於て雙方利害衝突の因子があつたことは無論言ふまでもない。併し十九世紀中阿弗利加殖民地問題等に於ては、英國の爭ひは主として佛蘭西との間に多く、獨逸とはさしたる烈しき衝突を見ず紛議發生の原因も極めて少なかつた、斯くて二十世紀に達したのである、當時此形勢繼續したのは現に明治三十五年(一九〇二年)に出來た日英同盟の如きも最初口火を切つたのは倫敦駐剳獨逸代理公使で、當時日英獨國三國同盟さへも一時考へられてゐたのでも分る、然るに其後獨逸が着々海軍擴張政策を始むるに至り、英獨の關係は漸く疎隔し來り、明治四十年(一九〇七年)獨逸海軍法の制定以來英獨の關係は極めて面白からざるものあるに至つた、英獨海軍の競爭こそは實に今次の世界大戰を誘導したる原因の一となつたのである、併し今や大戰の結果此形勢は一變した、獨逸の海軍力は全滅に歸し、英國との從來の疎隔原因は玆に絕滅せりと見て差支ない。之に反し英國にては戰後大いに貿易を盛にし、歐羅巴に活躍せんと考へたので、歐羅巴の政治的經濟的不安の最大原因たる獨逸の現狀を救ひ、其結果として英國の對歐洲政策換言すれば貿易を順調にし利益を占めんとするに至つた、尤も是は佛蘭西の對獨政策强硬なるが爲めに、益獨逸をして難局に陷らしめ、英國の政策は一時悲觀せらるゝと共に、英國內には失業者愈增加し恰も大正十二年までに四十億圓の巨額なる失業救濟費を投じた程で、今や急に恢復の曙光をすら見出し難き狀態にある。大正十二年十月より倫敦に開かれたる英帝國會議に就ては爲めに止む無く、外國品に對し保護關稅政策を行ひ、之に伴ふて殖民地に物品の利益を與へ、殖民地と本國との關係を密接ならしむる與特關稅政策を採り、之で殖民地との貿易を盛にして對歐貿易不振の苦境を救はんと考へ其爲め現に十一月總選擧をさへ行ふことゝなつたが、左ればとて英國は決して獨逸其他大陸の貿易政策を輕視したのではない、唯佛蘭西の同情なる爲めに行はれないので、止む無く志を成すを得ぬが必ず今後歐羅巴恢復策に努力する決心は變更しないに相違ない、此點これ實に獨逸が以て乘ずべしと爲せる所以に外ならない。

次に米國は世界大戰に於て獨逸と戈を交へたとは云へ、大い

して犯怨ある譯でもなく、やはり歐羅巴に對する食糧品其他物質の輸出を希望せる關係上、獨逸の恢復及び之に伴ふ歐羅巴の恢復を希望して止まないのである。故に英米兩國は共にその利害關係を一にし、獨逸援助を利益として居るのである、現在の獨逸の外交政策が之を利用して、英米の援助を受けて佛蘭西の壓迫に對せんとしつゝあるは自然と言はなければならない、唯だ問題は、英米がその援獨策實行上一致點を見出し得るかその時期は何時來るかであらう、次ぎに獨逸が露西亞と提携し露國の物資を利用して獨逸國及國民の發展を期せんとするも、亦た同じく自然の勢であらねばならない、卽ち獨逸は大戰の結果アルサス・ローレン並に上シレシアを失ひ面積百萬哩の殖民地を喪失し鐵石炭其他各種資源の減少を生じたのであるが、之に處する策としては一轉人口一億五千萬面積世界陸地の六分ノ一を占め富源無限である露西亞に發展し、露西亞より是等物資を得以て往時の如き獨逸工業を復舊し自から富强ならしむるの外は無い、唯だ問題は、獨逸の對露政策が果して如何に進展し行くかであらう、現在の所では先づ獨逸を援助しつゝあり又援助せねばならぬ立場に在る米國が思ひ切つて歐羅巴に手を出すに至らぬ爲め、英國も單獨で强硬に佛蘭西に對抗するの決心が付かない、例を擧ぐれば大正十二年一月佛蘭西がルールを占領するや獨逸は爾來之に對し抵抗を繼續しつゝある間には何れ英國其他の援助が來るだらうと期待して居た、然るに米國は愼重の態度を執り容易に手を下さず、英國亦單獨に之に抗爭する決心も付かず、漫然本年春のボナーロー內閣時代まで唯佛蘭西に對し頗る曖昧なる態度を執つて居た、ボナーロー氏死病で辭しボールドウイン內閣成立するや、漸く其態度を明かにし英國內務卿カーゾン氏等も漸く堂々佛蘭西のルール占領は法理上不當なりといふ意見を示す迄になつたのである、併し實際上思ひ切つたる援助を獨逸に與へ得ず、大正十二年九月に入り獨逸は遂に屈服し、所謂勞働的抵抗を中止せざるを得ざるの苦境に立つたのである。此獨逸の外交政策が今後果して如何に展開し行くかは、未だ豫言の限りではないが、大正十二年十月英國政府がライン獨立に對して反對の意を聲明せることは、獨逸に取つては甚だ有利であつたに相違ない、唯だ英國が何處まで其聲明を固持して行く決心であるか、佛蘭西と相爭ふてまでも獨逸を助けて行く決心ありや否や頗る疑問である、思ふに十二年十二月行はるゝ英國總選擧は表面主として保護關稅問題であるとは云へ、やはり外交政策も問題とさるゝこと疑ひなく、總選擧に於て何等か英國の外交上に新發展を促進すべき形勢にても生ずれば、目下獨逸の執りつゝある對英米外交政策並に英米外交政策

を基礎とせる對佛政策にも何等かの發展を見るかも知れない、這は神明にあらざる吾々の豫斷を敢てすべからざる所である、兎も角此問題が大正十三年即ち一九二四年の外交界に於ける一大問題であることは、吾人此年の劈頭に於て斷言するに憚から ぬ所である。若しそれ獨露關係問題は、長き日子を要することだから玆には深く言及せぬこととする。

七

以上は佛蘭西對ライン政策對ライン活動に關聯して述べ來つたものであるが、予は是等の形勢を觀じ世人と共に一考して見たいことがある、それは何であるか斯の如く國と國とが相敵視し相衝突しつゝ進み行く狀態にどれだけの價値があるか、現に歷史を見ると啻にライン地帶のみならずアルサス、ローレン地帶が佛獨の爭ひとなつて居たのは、幾世紀であらう、又た之を繞れる戰爭並に辛辣なる外交は幾世紀に亘つて居たことであらう、吾々は十七世紀に於ても之を見る、十八世紀に於ては尙更其甚しきを見た。而して二十世紀に於ても當然之を觀なければならない、過去の戰爭並に外交的爭ひが果して如何なる成功を收めて居るか淡泊に言ふと何等効果を齎さずして推移しつゝあるではないか、唯だ之を反覆し繰返せるに止まるは何たる醜狀であらう、一時的に觀ずれば何物かを得たる如くであるが、少くとも數世紀間に亘つて之を通觀すれば何等得る所はない其爭ひは百年一日の如くである其問題も亦從前と異る所を見ない、例へば十七世紀に於てルイ十四世はアルサス・ローレンスを獨逸系より占領したものゝ間もなく獨逸系に取還されてゐるではないか、又た十九世紀でも始めに奈翁戰爭時代に佛國がアルサス、ローレンスを取つたが、それが普佛戰爭で獨逸に取られ、又今回の大戰によつて再び佛蘭西に取戻されたのである、戰爭毎に互に奪つたり奪はれたりするに止まる、ルイ十四世の爭ひを反覆するが、そは何ものをも解決せず、何ものをも落着して居ない、取られたり取り戻したりすることの繰り返しに過ぎ無い、而して何の永久的獲物も無い、一時的に見ると、効業成つたやうに見える、明治三年普佛戰爭の結果獨逸がアルサス・ローレンを領有した場合には、獨逸軍人の功名となり外交家の手柄であつた、恰も獨逸の榮光なるかの如くに見えた。然かも之れは今や一時の夢に過ぎぬでは無い乎、一時奪つては取戻され其間相反目し相敵視しつゝ結局殘る所は何物もない、ありとすれば人を殺し國費を失ひ更らに國民間の惡感を加へたに過ぎ無い、而して其外交も極めて醜惡なるものとして識者の惡感を買ふのみである。」斯く觀來れば現在の佛獨紛爭問題に就ても感感

とは一時或は短期間外交史の研究を離れて、永き期間に亘つて違親し來ることの殆ど其兩國の爭の愚劣なるに悟らしむるに必要なるを思ふものである、併しながら斯の如き状態が改善されて行くのは何れの時であらうか、個人と個人との交際關係に於ても醜惡なる現象は多いが、國と國との關係程醜惡なるものはない、外形のみは種々なる粉飾を以て飾られてゐるもの丶、内面に流るゝ醜惡の狀は到抵正視するに堪え難きもの多きを悲しむ、加ふるに今度の世界大戰によつて生ぜる佛獨兩國人民の感情の一層疎隔を加へたことは、國際政治革命の理想實現を遠くするものではあるまいか。以上はライン獨立問題と共に佛獨外交關係を論ずるに當り當然吾々の感じなければならぬ點である。(尚附言ではあるが本論に於て賠償問題の方面並にルール占領問題等には多く言及せず專らライン問題に止めたのは、一は賠償問題並にルール問題が予自身も亦世間も共に屢々論議し盡した後であるからである。)

英國の對大陸政策

稻原勝治

一

春の海然たる餘裕があり、超然ととぼけて居るところに、英國外交の妙趣はある。佛國が色を作すも、獨逸が理窟つぽく出ても、露が闇に鐵砲を亂射するも、米國が腕を捲くり上ぐるも乃至何處かの國が遑々焉として色を喪ふも、一切これに關せず端然、また泰然として、落着き拂つて居るところは、誠に一個の偉觀として、推稱するに値ひする。これにはシーザー以來の被征服國民としての經驗が、凝つて國民性に入り、外界に對する有らゆる表現法を、極度に非江戸つ兒式、換言すれば非日本式たらしめたことも、與つて大に力がある。怒るも、焦るも、一懊惱するも、他國の怒り、焦り、懊惱するに比して、頗る靜か

であり、消極であり、然して時に處女中式なるに墮落する、英國は紳士の集團に伴ふ聲は、その形式に囚はれ、陰險と罵るはこの消極面のみを見た僻論で、兩者ともに終まり、若しくは兩者ともに眞理がある。

二

第一次の英同盟の締ばれた時である。白色人種が有色人種と提携するは、開闢以來未だ有らざるの英斷であると云ふやうな宣傳が、可なり執拗に行なはれた。併しながらこれはテレ隱しであるから、單にテレ隱しを必要とする境遇を、同情の眼を以つて眺むれば宜い。然るに時の英國外相は超然として云ふ『陛下の政府は、同盟を日本に許可せる』と、全く、、、、、、、、、、て遣りたい位のものだ、斯んな世間離れのした言を、洒啞々々乎として吐き得る間は、少なくとも現在の世界には、英國の外にはない。我等も一度で宜いから、英國の身分になつて見たいと考へる。

銀行對支借欵團の出來た時のことである。日本は法は既往に溯らずとの原則に則り、滿蒙に於ける既得地位の擁護を叫んで起つた。すると英國外相は、徐ろに日本に告げていふ『借欵團の活動が日本の經濟的及び國防上の安全を危害せざるべきは、英國背面を以て之を保證致さん』と。列國に相談せないで、列國の行動を保證する勇氣。保證が裏切られた際の責任を考へないで、責任を負ふ膽力。斯んな勇氣や膽力を具へて居る國家がこの世の中に、天日に曝されて生存して居やうとは、我等英國の通告に接するまでは、實際夢想だもせなかつた。若し外交上に神韻縹渺とこの熟字を使用し得るとせば、斯る場合に最も適切に當て得ると考へる。

最近の支那鐵道國際處理が、問題となつたのは、支那は獨立國である。主權國であると云ふ、華盛頓會議の決議が通過してから、尙ほ一歲に滿たぬ時である。そこで原案者たる英國が、武力に訴ふるも、主張を貫徹すると云つた形勢を示すに拘はらず、國際的君子國たる日本は『華盛頓會議の手前もある。そりや余りに酷いじやないか』とやゝ微弱なる故障を申立てた。すと英國は『へ、ア成程、然うだつたけネ』と空とぼけて終つた。この漠々たる大腹中は、世界を吞吐するも、尙ほ且つ足らずと爲すかも知れず。

三

斯る外交振りは、誠に掛値なしに、垂涎せらるべきもの、怪しからぬとか、僞善だとか、惡聲を浴びせ掛るの資料と爲さる

べきものではない、何だか寸が延び過ぎて居ると云ふ人があるかも知れぬが、それは寸が詰まり過ぎて居る國の人の云ふことである。細工には流々ありとし、英國から同盟許可問題を取消して來たと云ふ話も聞かず、日本保證問題について追究された噂も耳にせざる以上、延びたと見えて、實は延びて居ないのかも知れず、少なくとも實蹟の關する限り、延びて居ないと見て差支ない。

併しながら英國の外交が、斯くタンク式にまで進化するには相當の年功も經、また試練の苦みを閲みして然るもの。唯理由なしに、また一足飛びに、斯くなつたものでは決してない。順序として下に進化の道程を述べる。

世界大戰に方りて、英國は波蘭が三回の分割を經て、地圖から抹殺されて終つたのを、天人倶に容れざるの罪であると斷じた。天人倶に容れざるの罪か否かは、本文の關する所ではない。併しながら波蘭の消滅に對しては、獨逸のみが責任者であつて、英國は無關係であると云つた英國の態度は、少なからず事實に反するから、是非訂正を必要とする。それは何故かと云ふに、第一回分割の際英國は、當時强大であつた佛國を牽制するの必要から、普魯西を扶くるの賢明なるを見、フリードリッヒ大王に向つて、分割に對する承諾を與へて居るからである。

この事實は現時の英國人が、腫れものに觸れるゝやうに、不愉快に感ずるによつても知らるゝ如く、頗る以つて低級なる苦肉の謀と云ふべきである。苦肉の謀を弄せなければならぬと云ふのは、要するに貧乏世帶の遣り繰りです、從つて弄するものゝ身になつて見れば、決して甘い經驗ではない。反對に苦く、然して辛い體驗である、英國にも斯う云ふ、同情に値ひすべき、苦しい時代があつたと云ふことを忘れてはならぬ。

伯林會議の際である。堂々たる政治家と我も許し、人も許すところの英國のソールスベリー卿は、英國がサイプラス島を占領する代償として、佛國のチュニスに於ける優越權を認めると云ふ密約を、佛國代表と取交した。ところが會議が終り、佛國がこの英國の振出した小切手を現金に交換されんことを乞ふや倫敦政府はそんな密約を、取交した覺えはないと、シラを切つた。『佛國が藪から棒にチュニス問題を提起し、自家の利益を計ることを悲む』と云ふ倫敦政府の聲明が、すなはち夫れ。然かも一方に斯う云ふ聲明を出して置いて、英國は他方密かに摩洛哥王（チュニスは當時王の支配に在り）に手を廻して、佛國の主張するやうな優越權は、未だ何國によりても認められたことがないと斷言した。一面から見れば、恐ろしい悪黨振りであるが、併しながら又一面から見れば、ソールスベクー卿と雖も、

嘘はつきたくなかつたらうし、また倫敦政府とても、約束を反古紙にすることに、愉快を感じた譯でもなからうから、要するにこれは、英國が苦し紛れに發した刹那獘と斷定すべきものであらう。ことほど然やう當時の英國は、窮境に立つて居たのである。

所謂『コルシカ生れの一野人』たるナポレオンが歐洲に荒れて、英海峽また安からざる時である。この頃の佛國は強く、英國は弱く、如何に惡罵を『コルシカ生れの野人』の頭上に注ぎかけても、實力問題になると、英國は屁古垂れざるを得ない。陸軍はいふだけが野暮、海軍と雖も、到底問題にならぬ、そこで窮しては通ずるの譬へ、英國が考へついたのは黃金である。陸軍も海軍も駄目として、駄目でない『黃金を以てコルシカ生れの野人』を征服することに考へが落ち、そこで主として墺太利に黃金を與へて、換言すれば伊太利を傭兵として、佛國に背後から取つちめにかゝつた。英國がこの目的を以て伊太利に支出した黃金は、當時に在りては前代未聞と稱せられた六十萬圓と云ふ巨額に上り、それが三十年ほど後には、元利合せて二億二千萬圓と云ふド偉い金額となり、そこで英國は返して貰ひたいと云ひ、墺太利は酢だの、荷蒻だのと云つた末、漸やく元金の三分の一ほどを入れて、殘りは然るべくと云ふやうな挨拶をして、結局踏み倒して終つた。貸金は踏み倒されたにせよ、兎に角ナポレオンを取つちめる目的は、十分に達したのであるから、英國としては差支の算盤は明らかに取れる。併しながらこれは結果から打算してのこと、當時英國が亡國の瀬戸際まで乘り上げ、墺太利の奮闘によりて、辛うじて此の運命から免がれたと云ふことは、現時の英國と比較して、天壤も啻ならざる相違ではないか。斯んな時代も、英國にはあつたのである。

以上の外交には餘裕などは、服藥にしたくもない。切端詰つた、金石相撃つやうな外交である。英國人が斯る外交を名譽と考へて居ないことは、英國人の著した萬國史なり、外交史なりを一瞥すれば一目誠に瞭然である。斯う云ふ不如意の時代を經て、落ちつくべき點に落ちついたのが、英國現代の外交振りである。

四

さて英國が歐洲の一端に僻在し、征服されたり、征服されかけたり、オツカナ吃驚式生活を營んで居る間に、自然に一個の外交上の方針が鑄出された。それは『英國は常に歐洲に於ける第二流の國家と提携して、第一流の勢力に當る』と云ふことと是れ。この方針は一見妙に考へる、けれども、實際は決して妙で

ない。假りに第二流國と組ます、第一流國と手を組むとせんか第一流國は忽ちにして歐洲を席捲するは、英國に取つては素より問題ではないが、歐洲を席捲せる國は、自然の順序として、必ずや手を英國に伸ばす、若くはその植民地に伸ばすから、決して問題ではないと云つて、澄まして居る譯に行かなくなる。だから英國の對外方針としては、歐洲に覇者を生ぜしめないことに存し、從つて歐洲が内亂でゴタ／＼して居れば、それで宜し若し然らざれば第二流の國家と交りを訂して、第一流の國家に當り斯くして未然に　王の出現を防ぐと云ふところに落ちなければならぬ。

この方針の實地適用は、數ふれば到底限りがない。前に述べた英國が、普魯西に味方して、波蘭の分割を成就せしめたのもまた墺太利を購ふてナポレオンに當らしめたのも、これは畢竟當時佛國が歐洲の覇者たり、若しくは覇者たらんとし、英國玆に安からじと考へたからのことである。然るに世の中は、兎角妙に出來て居る、英國は歐洲に於てのみならず、埃及に於ても印度に於ても、乃至加奈陀に於ても、完全に佛國を抑へつけて終い、玆に絕對安眠の域に入らんとするや、忽然として英國の安眠を裏切つて、飛び出したのが獨逸である。獨逸は元來英國が、佛國を辱める爲めに利用し、且つ扶援して遣つた國である。その獨逸が今度は、拙者儀とばかりに罷出で丶、英國の後釜に濟座した。斯んな筈ではなかつたと云つて見たところで、追つく筈のものではない。そこで英國は我にもあらず狼狽した末、つら／＼考へて見ると、佛國は最早や敵ではない。換言すれば第二流國に墮ちた。これに反して在來第二流國であつた獨逸が何時の間にか歐洲の帝座に、ムンズとばかり胡座を組んで居るのだから、これは何うしても其の外交方針に、廻れ右ツを命ぜなければならぬと考へた。すなはち往時の敵佛國の手を握つて、往時の友獨逸を叩きつけることである。この際の英國が如何に獨逸の威容を畏怖したかと云ふことは、英佛接近を實現する道具立てとして、國王エドワード七世をまで舁ぎ出した一事によりて、明瞭に歷史に採錄されて居る。英佛の協調玆に於てか成る。フアンショダ事件を距る僅かに六年。英國が佛國の袖を引いたことを、然も悖德行爲であるかに攻擊するものがあるが斯う云ふ輩は英國にはない。英國人は寧ろ名譽だ位に心得て居る。散々蹈んだり、蹴たりした佛國を懷柔し得たのは、懷柔し得たもの丶偉大さを、裏書きする所以であると考へて居る。何うも安々桁が違つて居るやうに思はれる。

五

併しながら世界戰爭は、英佛の協調の出來た瞬間に於て、動かすべからざる可能性となつて、地平線上に現はれた。サラエヴオの彈炳が原因でもなく、墺太利の對塞通牒が基因でもない。哲學的に達觀すると、これ畢竟英國の傳統政策の動いたものに過ぎぬ。

無論表面の歴史は、斯う云ふ樣には傳へられて居らぬ。戰爭の第一原因から云つて正當至極なる、英佛對獨逸との戰爭だけで埒が明かず、世界を渦中に捲き込み、終ひには米國をすら被害者として引き摺り込むことによりて、戰爭本來の面目が戸惑ひを演じ、また戸惑ひを演ずるやうに仕向けた。おまけに餘計なことには、正義人道とか、世界の平和とか、文明の何だとか人類の何だとか、種々雜多なる極彩色の看板が掲げられ、看板で內容を瞞着し、然かも瞞着する方の連中が多數なところから瞞着不事實として、大手を振つて大道を濶歩するに至つて、眞相はます〱不明瞭を加へ來る。ここで玆に注意すべきは、瞞着なる熟字が、何ら道德的價値を含んで居ないことである。何うせ國際關係は倫理學でなく、要は輿論の形式を製造し得るものが、一番偉いのだから。

六

さて獨逸が氣息奄々として平和に入り、換言すれば第一流國たるの實を喪ふや、こゝに英國の外交政策は、又もや方向轉換の必要を見、また實際グルリと一廻轉を試みた。戰爭は獨逸を歐洲の第一流國から、第二流第三流どころにまで引きづり下し、他には露も、伊も、ゴタ〱して居て問題ではなく、唯佛國のみが問題となる。問題となるのは、規模は小さいながらに、歐洲の第一流國となれるからである。無論心細い第一流國には相違ないが、兎も角も他に比敵するものなきに於いて、第一流國と云はざるを得ぬ。然して第一流の勢力となることは、換言すれば英國の敵となることを意味する。すなはち佛國は、今や英國の敵である。この事實は每日の新聞電報によつて明らかである。これが英國外交の方向轉換である。今後英國の味方は、獨逸である。或は伊太利である。或は露國である。露國は少々手に食はぬ上に、距たり過ぎる。伊太利は地理的には申分がなく、歷史的に不信用である。然れば詮ずるところ、英國の味方は獨逸だと云ふことになる。

獨逸を滅亡せしむるは、人道上の大問題であるとか、歐洲の平和を害するとか、その他同樣の宣傳用語が行なはれて居る。宣傳用語だと云つたからとて、何も嘘だと云ふのではない。一國を亡ぼすのが人道でないのは、分り切つたことであり、獨逸

が倒るれば、太陽系統から地球が彈き出された位の影響を、歐洲の平和に與ふるのも、明白な事實である、唯吾人は斯る宣傳と、英國の對歐政策な關係を、明白に心鏡に映寫せしむれば、すなはち足る。

七

英國の傳統的外交策の適用は、唯に歐洲に止まらぬ。適例は日英同盟である。同盟締結の當時はロマノフの露國が、東亞と印度彊上と、波斯方面に荒れて、ジョン・ブルの夢寐何安らかならず。現に波斯に於ては、露國と勢力範圍の協定を遂ぐるの退擭振りを示した位で、英國は辛うじて土俵際で持ち堪へて居ると云つた形。露は强國である。實際は分らぬが、强敵として映ずる。然れば勢ひを自然に任せて置いたならば、何んなことになるか分らぬ。寶庫印度の運命も保し難い。支那に於ける地方の如きも、風前の燈火に類する。然うなつては大變だと云ふので、そこで露國に對する策として、次ぎの强國と結托すると云ふ故智を、亞細亞に實現した。その次ぎの强國と云ふのが取りも直さず日本で、すなはち『同盟を許可』されたる當事者なのである。だから日英同盟なるもので、畢竟旗を立てゝ騷ぐべき事件ではない。

既に斯う云ふ意味の日英同盟であつて見れは、その生命が日露戰爭と共に盡くるのは、當然のこと、名に於いて存在するその後の同盟は、生ける屍たるに過ぎない。否屍ならば、無害であるが、戰後の日英同盟は、然う無害ではなくなつた。それは戰後日本が東亞の盟主として露國が戰前に居た地位に據つたからである。英國の方針としては、第二流國と提携して、第一流國に當るべきに、事實はこれと反對に、敵とすべき第一流國日本と握手して居るのであるから、まるで右に據るべき螺旋を左に據るやうなもの。英國の外交はシドロモドロの醜狀に墮せざるを得ない。ところが呑氣千萬なる倫敦の政治家は、この根本的錯誤に氣がつかず、日本が同盟關係あるに拘はらず、英國の政策を扶けないのは、不都合だと云ひ出した。これは無論謬まりで、事實は日英同盟あるが故に、英國の外交が不動縛りに會つて動かないのである。このデレムマに坐して、流石の英國も懊惱を重ぬる多時、漸やく遲蒔きの決算を、華盛頓合併でつけた。すなはち日本を敵として、第二流たる米國と結托することによつて、日露戰爭以來脫線して居た英國の外交が、茲に復線することになつた。慶賀すべき現象である。

修正モンロー主義で進んだ米國
凡そ國家實利を逸せぬ腕、力、彈性

伊藤正德

一

モンロー主義、力相撲、横車、領土擴張、他門開放、自門閉鎖、豹變的轉向……是等が米國の主要なる外交政策の歴史である。即ち米國の外交史はワシントンの明るい第一頁を除けば全體を通じて暗いページが續く、ウイルソン氏が染めた美しい數頁を最近の除外例として。

隨て米國の主要なる外交政策は、今の瞬間と今後の想定とを別とすれば、先づ以て『鎭守の森の大關』の相撲振りであると評して大過あるまい。無理押し、力づく、體裁拔き、時には張り手も辭せず逆手をも發して以て懸賞の米俵を獲得せんとするに類する。攻める手は無制限勝手氣儘で、而して防ぐ手にモンロー主義を振り廻すのが、米國の外交常道だと言へば、恐らくは總括的の評言として適切であらう。

無論、今日と今後とは違ふ。既に擴張の頂點に近く、更に米國言論界に所謂る"world's conscience"即ち國際的良心が發達して來れば、遠慮も自制も自ら生じて來るであらうし、政策の發動に美しい轉向が現はれる可能性が考へられる。故に此點は後の問題として豫め保留を必要とすることを斷つて置く。然し乍ら米國の主要なる外交政策を説くには、何うしても今日までの百年を一貫せる大傾向を捉へて是を解剖するより外はない。自然その暗いページを明るみに引張り出し、二言目には出て來るモンロー主義なる僞體朦朧の怪物の本性を質すことになる。また暗いページの中に、光彩賞すべき部分がチヨイ〳〵と散見される共點も、米國の惡く言へば『氣紛れ』、褒めて言へば正純なる良心存在の證據として紹介し、茲に米國外交の全局を

知ることになるのだ。

二

モンロー主義よりも以前に、"disentanglement"と云ふ斷乎たる教訓が、祖師ジオージ・ワシントンに於て下されて居る。是れ米國人にとつては外交策上の唯一の聖書たるの觀がある。エーローヒアン、デスエンタングルメントは其辭の如く歐洲不干涉、舊大陸からの孤立不覊を意味する。偉大なるワシントン氏が、新興國の安泰の爲めに遺した名案で、狡猾なる歐洲諸國の紛爭に關與することは、軈て彼等を新興國の運命に容喙せしむるの端を啓くものであるから、米國は須らく極端な敬遠主義を執り、對岸とは運命上の交涉を絕つ可しと遺言したのである。ワシントンは新興せる祖國の獨立を維持擴充するを主眼として此名教訓を殘した。素より米國の實力が世界一となつた今日に臨んだならば祖師の教訓は自ら違つて居るに相違ないが、米國防禦の外交策を主眼とせる當時にあつては無二の名訓であつた。斯くて歐洲との交涉を愼しみ遼隔の地に特立し、軍備の用を見ずに產業の開發に集中して國富は年毎に激增して行つたのである。

然るに一八二三年、英國の外交は、米國のモンロー主義の產婆役を務むるの結果となつた。或は單なる產婆役のみでなく、米國をしてモンロー主義を受胎せしめたと云ふ方が適切である。早晩モンロー主義が米國自發の產物として現はれたか何うかは別とし、該主義の發生のみに就て言へば、モンロー主義は英國が製造して、無代價で米國を肥すに至つたものである。

カンニングが英國外相の時である、佛が西と和して南米の諸國を西班牙の爲めに恢復し大いに共和政治をデモンストレートせんと企てたのに對し、英國は默過し得ず、左りとて一國で對抗するの不利なるを知り玆に米國を教唆するに至つた。米國は始め『是は祖師の歐洲不干涉訓に反する』の理由で跳ねつけたが、巧妙なるカンニング外相は「是れ歐洲の事件に非ず、南米に於ける米國の勢力消長に重大なる影響ある事件は、實に米國自身の死活問題に非ずして何ぞや』と說き進むるに及んで、大統領モンロー氏は大いに動いて了つた。其所で元勳ジエフアーソン及びマヂソン兩氏に相談すると兩人も既に動いて居る。大統領に與へた意見書の要領に述べて曰く

『米國外交の第一則は、決して歐洲の紛爭に干與せざるに在る。されど此原則を擴充して得らる可き第二則は、決して歐洲をして米國兩大陸の事件に干與せしめざるに在る。歐洲は漸く專政の巷たらんとするも、大西洋以內の吾等の半球は、

斯くの如くにして自由の郷土たるを得ん』と。大統領モンロー氏は快諾し、玆に十二月二日の有名なる教書が發せられた。モンロー主義の發表か是れである。

三

モンロー主義の本質は右の通りで、米國は是を主要なる外交政策なりと發表した。然るにモンロー主義が公認の主義たるを得ざる理由が二つある。(一)は夫れが米國の自分勝手の發表で何等世界を拘束するの約束でもなければ、又(二)に第一則は米國だけのことであるが、其二則は外國の自由權の範圍に屬するからである。米國にして若しもモンロー主義を不可侵の約束を認め、飽く迄も是を追へば必ずや外交上に騷擾が起る。モンロー主義は全然米國にのみ好都合の策、例へば一家の家法のやうなものでも何等作家を支配す可き法ではないからである。

然るに米國は此一家の家法で世界を拘束することに決めて掛つた。果然、ゴタ〳〵が起き、力が動き、遂に實力で横車を押し通すの外交政策を記錄するに至つた。加之、モンロー主義は其背後に侵略主義を秘めて居た。卽ち前記ジエフアーソンの意見書は其結論に於て、實に次の如き侵略の意圖を抱いて居た。

『……然し乍ら殘れる大問題は吾國が西斑牙の一領土を併合す可きや否やに懸る。余は正直に言ふ、キユーバこそは米國が併合せねばならぬ第一の西斑牙領土である……唯だ其時機と方法とを後日に考慮す可きのみ云々』

大統領モンロー氏は、十二月二日の教書に於ては流石に是に觸れなかつたが、モンロー主義の策源に右の如き領土併合の方針の秘藏せられた一事は特記せねばならぬ大事實である。玆に於てかモンロー主義は、其當初より次の内容を持つ外交方針に相違ないのである。

(イ)米國は歐洲の紛爭に干與せざるを可とす
(ロ)歐洲及び其他世界の紛爭にして米國に利益ある場合には進んで干與するの自由あり
(ハ)他國領土の併合は毫もモンロー主義と抵觸せず
(ニ)世界の如何なる國も南北米大陸の事件に干與することを禁ず

四

斯かる好都合の外交方針なるものは天下また他に求む可からず、實に勝手氣儘の理想標識と言はねばならぬ。

斯かる外交政策が世界の承認を得る筈のないことは極めて明白である。實にモンロー主義は米國の家法ではあるが、斷じて

外交關係上の約束ではない。世界から見れば全く一片の理論に過ぎないもので、世界は何時でも自由に是を打破して差支ないのだ。米國が『モンロー主義を知れ』と息捲けば『何の得手勝手の屁理屈を』と峻拒笑殺して何の妨げ無い譯である。然るに歴史の事實を通觀すれば、不思議にも、モンロー主義は、恰も世界公認の外交方針なるかの如き外觀を呈し、强國は殆ど米大陸の事件に干與せず、其反對に米國獨り隨意に他國へ干與して昂然たるものがある。

無論、十九世紀の末葉に至るまでは、英佛西の諸國との間にモンロー主義を中心として幾多の外交紛擾があつた。キューバ併合事件、パナマ獨立事件等は其著るしい例であるが、結局はモンロー主義の勝に歸して了つた。思ふに前世紀にありては、米國の孤絶せる地理的便宜、歐洲先進國間の葛藤が主たる原因となつて自然モンロー主義の跳梁を許す結果となり、廿世紀に入つてからは、米國の實力が是を押し通して了つたのである。斯くて米國は外交上の防禦策にモンロー主義を將し、外交上の侵略には國益自由主義とも稱す可き無遠慮を働きつゝ今日に至つた。一八五二年に國務卿エヴーレット氏が英佛に送つたキューバ問題の通牒なぞは、外交史上稀有の亂暴な文書として有名であると同時に、米國は立國以來領土併合を國是とするものだと公言し、『キューバは天然の地勢上、米國の領土に外ならぬ』とまで暴言を吐いて平然と押し進んだものである。

國際公法、善隣の義務、外交禮讓……こんなものは一切お構ひ無しに併合擴領を働いたのが十九世紀を通ずる米國の外交常道であつた。素とモンロー主義とは斯かる亂暴な思想の産物に他ならないのであるから、實力を以て矯正し得ざる限り、横車は縱横に押し廻されることになる。『正義人道』の看板は日本の內閣が『善政を施く』と宣言するのと大差はない。斯くて米國は、(イ)買收、(ロ)强要買收、(ハ)內亂挑發後合併の三手段を常用し、一八〇三年ルイジアナ州の合併を始めとしてフロリダテキサス、カリフオルニアの天惠の各州を併合し、キューバ、パナマを勢圏に收め、ハワイを獲、フリツピンを奪つて、短年月の間に世界無類の領土擴張を遂行したのである。

太西洋以西の事件には外國は干與す可からず但し自分は干與自由併合勝手なりとの廣義のモンロー主義と、背後の實力並に地理的優越とを以て、米國は今日の世界的大を成した。而して守るにはモンロー主義、その攻勢發動は『痛快なる我儘』に外ならない。

五

是より其『發動』に入る。發動は洋の東西を使ひ分けて進退甚だ自由である。東洋には門戸開放、機會均等、西洋には干渉と不干渉を取り交ぜて進む。是等は最近廿五年の頻繁たる外交事件の總評で、主要政策は三重にも四重にも分派し、歸して實利の一體に落ちた。

布哇、比律賓で覺えた味を極東に及ぼさんとした時は既に遅かつた。其所で領土權の慾を斷念して經濟的勢圏の確立に驀進するの方針を定め着々と進んで來た。門戸開放、機會均等、支那領土保全の三標語は、米國の産であつて米國の極東經濟發展の鍵である。日清戰後、列强の支那領分割の勢の急進するを見た米國は、自國の經濟發展の閉鎖を惧れ、列强に通牒して、勢力範圍内に於ける門戸開放の原則を容認せんことを要求し列强是を入れて、玆に支那の門戸開放の原則が生れた（一八九九年）然るに翌年の團匪事件は列强の領土的野心に最良の機會を與へたので米國は默つては居られない、再び同文通牒を發して『支那の領土及政治の保全、並に列國が公正且つ均等に貿易し得る希望を述べた（一九〇〇年）。是れが機會均等主義の發端』また領土保全の約束の生れた起源である。

那は極東に於ける米國外交の大成功を語るものである。支那の門戸が開放され、通商の機會均等が保證されゝば、米國の極東外交は思ふ通りに行つたもので、加ふるに領土保全主義を以て列强の領土擴張を禁遏するの果實までも拾つた。團匪事件後の北京會議に望んでは、米國は團匪頭目の處分や外國人の今後の身命財産の保障等に關して最も强硬であつた一面に、賠償金に就ては最低額を主張し（支那の購買力と對米感情とを考へて）、また領土の保全には最新の注意を拂つた。支那にして世界中に感謝す可き外國ありとすれば夫れは正に米國である。門戸開放や、機會均等や、其名は美しきに引換へ、其實は支那の倉庫を開けさせて列强で均等に喰べやうと云ふ一種の侵略的約束であるが、支那は是をしも感謝せねばならぬ程に領土的危機に瀕して居たのだ。いづれにしても米國は、支那の感謝を獨占しつゝ列强を相對峙せしめつゝ、然かも所期の外交政策を遂げたのである。ルーズベルトの凡ならざる所以が玆に在る。

日露戰爭に至つて米國の極東外交はいよ／＼方向を鮮明にし而して成功の道を擴げた。日本弱き間は大いに日本を助け、その勝利の全かる可きを憂ふるに及んで出でゝ仲裁の勞を取り、寧ろ露國の顏を立てさせ、支那に於ける日本の過度の發展を制限するに努めた。卽ち孰れか一方の決定的優越を防止し、外國同志を相索制せしめて機會均等と門戸開放とを無代價で確保せんとするに在る。トルコ外交の常套手段たる"to play off one

"against another" の策略を。米國は大實力を擁して是を東洋に活用したのである。

六

米國は極東に關しては其外交政策を一貫して今日に至つた。門戶開放、機會均等の二題目の下に經濟的侵略の一途を進み、決して手を緩めず、經濟戰の上から絕へず日本と對抗關係を持した過去二十年の歷史は玆に述ぶる迄もなく、而して是れ實に今後も不變なりと信ぜらるゝ米國の主要なる極東外交政策である。東洋の市場は、日本にとつては死活の問題、米國にとつては發展の問題に過ぎないけれども、然かも熾烈に所謂るピースフル・ペネトレーションを續行す可く、いざ米國の實利となれば決して橫車を辭するものでない未だ記憶に新たなる筈のヤツプ問題なぞは顯著なる一例で、日本の條約上の權利に橫合から割込み、尻を捲つて動かず遂にガムーヤツプ電線を占めて了つたので解る。此時に米國は『ベルサイユ條約第百十九條其他に照し米國も利益に參與するの正當なる權利あり』との主張を振り翳した。米國がベルサイユ條約の調印國ならば始めから問題はない。ベルサイユ條約を否認一蹴して置き乍ら、利益の段になると平然として是を引用する所に、米國橫車外交の面目躍如たるを見る。

所謂る廿一箇條（實質的には無意味極まる標語）に對する米國の抗議——抗議せるは米國一國のみ——進んでは巴里會議に於ける米國の援支排日の外交、下つて華府會議に於ける日本の讓步に至る迄の外交を一瞥するも、彼が極東主として支那市場に對する經濟的發展の妨害を悉く打開するの鞏固なる決心を持ち、領土保全、門戶開放、機會均等の約束を楯として飽く迄も突進するの意圖なるは一點の疑を容れない。そこに得意の橫車を以てす。ヤツプ問題も起らざるを得ず、現に懸案中の三井と支那海軍部間の無線電信契約に對する米國フエデラル會社と支那交通部契約の權利爭奪の如きも米國の無理押しから起つて居るのだ。通信網を經濟發展の一大要素となす關係より、米國は橫合から利益を奪ふの不合理を辭せない。斯かる强暴無理の手段は軈て自制されるかも知れぬ。たゞ門戶開放以下の三標識と經濟的大侵入の外交策は永く渝る所がないであらう。

其所で私は再び彼の外交の骨子に顧み、米國の極東門戶開放主義は一種のモンロー主義に外ならぬことを注意し度い。何となれば、米國は支那に對しては門戶を開放せしめて居るが、自分の方は東洋人に對して堅く門戶を鎖して居るからである。不都合千萬は東洋人の申し分、米國には是れ以上の好都合はな

い。即ち極東外交の底にもモンロー主義は活躍して居る。

七

南米諸邦に對してはモンロー原主義の下で立派に盟主になり濟まし、多く論ずるの要を見ない。歐洲に對しては、一九一七年を以てモンロー主義、否なワシントンの祖訓を破り、大戰爭に參加した。參戰前年の大統領選擧に『米國人は參戰す可く餘りに自尊に富む』と壯語したウイルソン氏は、翌年參戰を敢行した。可成りの急轉である。巴里會議に望むや、多くの遺憾はあつたが、ウイルソン氏が國際聯盟と民主的講和の爲めに獻じた功績は偉大であり、『世界の爲めには米國も動く』と云ふ雄壯なるデモンストレーションを記錄し、世界平和の一方の支配者たる新境地を確保したのである。若しも一九二〇年、ウイルソン氏三度び大統領たるを得たらんには、ヴルサイユ條約調印、聯盟參加となり、米國の世界平和、歐洲整調に獻ずる所絕大なるものあり、米國の外交史は百年の暗い記錄を燒き棄てゝ光彩陸離たる世界的大記錄を得たかも知れぬ。選擧に臨むや反動全土に漲り、原モンロー主義燦然と燃へて早くも鎖國主義の世とはなつたのである。國務卿ヒユース氏如何に努むるとも、『歐洲の紛爭に干與せず』との祖師訓及ひモンロー第一則の勢力拔く可からず、國際高等法院への參加すらも容易に決し難き時代に歸つたのである。

果して再反動が來てウイルソン主義が米國を動かすことになるか何うか、素より民主黨勝つともウイルソン程の勇敢なる外交は出來ない。ウイルソンはワシントンやモンローの訓言を綺麗に棄て去つて無條件の歐洲干涉、否な歐洲支配までも想望した。斯かるは現實を離れ得ない政治家の努めて戒める所であるが、然し乍ら民主黨勝つの日は、英國のセシル卿の主張する程度の改訂國際聯盟（例へば第十條を修正す）に加入することも極めて在り得べく、即ち米國外交の根本に變更を來すの秋が來ると想像が出來る。米國の識者中には、ヲールド紙やタイムス紙の主張するやうに聯盟に參加することを米國の世界生活の必然の運命であり亦必要事であると信ずる者が少なくない事實に徵し、何時かは實現さる可く共實力の飽滿に連れて外交は力より業の妙に進むであらうが、今玆に論及するのは命題の外にある。

依て今日までの外交政策の主要なる傾向を結論すれば、第一に、米大陸の事件には一切外國の容喙を許さぬと云ふモンロー主義の第二則を、無條件に而して實力を以て押し通す一方、第二に、モンロー主義の影を潜める實利强奪の方針を、是れ亦實

力を以て押し通し、膨脹既に達したれば全然經濟的侵入を新市場の各方面に企てゝ止まず、時に歐洲極東に干渉し、都合が惡ければモンローの名を籍りて遠方より見物し、風向一定せず。

而して此不定の都合主義こそ宛然米國外交の無言の確定義を成すもので、私は名づけて修正モンロー主義と呼ぶ(完。十一月末日)

彈力性を有する露國の妥協外交

布施勝治

一

サウエート・ロシアの全視線は今や、變轉極まりなきドイツの政局に注がれつゝある。ドイツは結局どうなるか。行き詰つた揚句、ロシアの轍を踏んで赤くなりはせぬか。而してドイツにして一朝眞に赤化せんか、歐洲の大勢、ひいで世界の全局はいよ〳〵第三インターナショナルの思ふ壺に篏まるであらう。モスクワの勞農政治家が昨今頻りにベルリンの形勢を堅唾をのんで凝視しつゝあるも、まさにその所であるとせねばならぬ。

去る十一月七日勞農革命第六週年祭日に際し、モスクワにおける祝賀行列の先頭におしたてられた旗じるし即ち當日の標語の一つに「モスクワ、ワルソー、ベルリン！」と云ふのがあつた。赤き都のモスクワから號令を發し、フランスの對露策源地なるワルソーを通して、動々もすれば赤化せんとするベルリンと手を握り、以て歐洲の大勢を支配しやう……と云ふは蓋し勞農政治家がかねてから何よりも渇望してやまぬ所である。

しかしこの故を以て直ちにサウエート・ロシアがドイツの泥亂に際して、何事か積極的劃策を廻らしつゝあるとか、トロツキー氏の率ゆる赤色軍が出動の準備をなしつゝあるなど云ふ推斷を下すはあまりに早計であるまいか。

革命の當初、所謂「世界革命」を夢みて居た頃——即ち數年前のトロツキー氏等ならばいざ知らず。今日のクレムリン政治家はよく世界の趨勢にも通曉して居れば、彼我の力の優劣も十

分にわきまへて居る。加ふるに過去の辛き經驗は幾多の教訓を與へ、彼等は今や練達せる政治家となり、容易に輕擧に走るをゆるさぬ。

ハンガリ革命の失敗は今尚ほレーニン氏等の記憶に新らしく一九二〇年のワルソー城下に於ける赤色軍の大敗は同軍の巨頭トロツキー氏等にとつて何よりの教訓であつたらう。

「外よりの援助は却てその國の革命の成功を妨げる」とはレーニン氏の喝破せる共產黨信條の一ツである。サウエート・ロシアはドイツ刻下の危局に對して深甚の興味をこそもち居れ、之れに乘じて、武力を用ひてまでも赤化促進をはかるが如きことは、よもやあるまい。

二

サウエート外交とし云へば世人は直ちに「赤化の魔手」を聯想する。勞農外交は卽ち「宣傳外交」であるとなし、モスクワ外交の背後には「第三インターナショナル」てふ傀儡師が控えて居るとなす。しかし之れを以て昨のサウエート外交を評するならばともかく、今の勞農外交に當嵌める事は果してどうであらう。

モスクワ政府は革命當初の二三年間、たしかに「赤化の魔手」を揮ひ「宣傳外交」をさかんに用ひた。而して之れによつて成功もし、失敗もした。卽ちドイツの共產革命を煽動し、ハンガリに、勞農政府をおしたてた。兩者ともに一時は非常の成功の如く見へたが、やがて反動勢力の逆襲に會して共に見じめな失敗に終り、幾多兩國の同志が無殘な最期を遂げた。

當時勞農外交が主として「宣傳」に力を用ひたのは無論一は勞農巨頭等がロシア本國に於ける革命の成功の餘勢を以て、一氣呵成、世界革命を實現し得るものと早合點したからであつたらうが、又同時に一は「宣傳」の外に資本列强、殊に協商國の壓迫に對抗する十分の力をもたなかつたからにも因つた。卽ち所謂窮鼠猫を嚙むの類であつたかに思はれる。何しろ政權はわが手に握つたもの丶、國力の統一が出來ぬ。國内には所在白軍が擡頭する。白軍の背後には列强の援軍が控えて居る。西比利出兵が斷行される。内外敵の重圍裡に落ちた勞農政府は之れが對抗策として、手段を選んでは居れぬ。大いに「赤化の魔手」を揮つた。國財をあげて宣傳費につかつた……など云ふ當時の「赤禍」說は多少針小棒大の嫌があつたにせよ、たしかに又一部の事實を語つたものである。然しそれも最早や已に三四年以後の過去のことに屬する。やがて「宣傳外交」では世界各國の仲に伍して行けぬことがわかつて來た。「赤化の魔手」を以てしては世界征服どころか、却て「社會主義の祖國」を危うするものであるこ

とをさとつた。それと同時に一方に於ては、國内の白軍が全滅し、列國も亦露國を撤兵するに至つて、もはや「窮鼠猫をかむ」の必要もなくなつたので、一九一九年の末頃から翌一九二〇年の初めにかけ（予のモスクワを訪うた頃）勞農外交は當時レーニン氏の投じた新標語「息拔（ペレディシカ）」政策に從ひ、資本列强との對抗戰をやめて、彼等との妥協方針をとることにした。「世界革命かもしくはロシア革命の滅亡か」てふ當初の標榜を撤して、新たに「共産主義國と資本主義國との共存」「國際コンプロミツスの建設」を唱へ「宣傳外交」の手をゆるめて、サウエート政府と第三インターナショナルとを判然區劃し、更らに廣く露國の天産を開放して、利權を列國の前に提供し、外資の輸入をはかる所謂「利權政策（コンセッション）」なるものさへ案出するに至つた。

三

當時レーニン氏は資本主義國との妥協政策を高唱すると同時に又「列國の封鎖のためにロシアは莫大なる損害を蒙つて居るしかしこの封鎖のために列國自身の受ける損害は却てロシアのそれよりも更らにより大である」と傲語したといひサウエート外交が妥協方針となつても、無暗に讓歩するものでないとを諷した。當時の列國政治家は勿論之れを以て、レーニン氏の「負け惜しみ」であるとなし、レーニン氏の「資本列國との妥協策」を以て「共産主義の資本主義に對する降伏」であるとなした。然しその後三四年を經たる今日の彼我の狀態は如何。互ひに有無相通じ、過不足相補うて一つの「經濟機體」を形成する世界、殊に相互經濟關係の最も密接なる歐羅巴からロシアてふ天産無盡の豐庫を除去したことのために、ロシア自身と世界各國との損害の程度の比較は如何、或はレーニン氏の言ふ所にも幾分かの眞理がありはせぬか。少くとも原料品國よりも工業國の方がより早く行く詰るが當然の勢であるまいか。當時予がレーニン氏をクレムリンに訪へる折も、天産に富む原料品國のロシアは持久力が强い故に、苦しいながらも何うにかして自力でやつて行ける」と語つたことがある。之に反して輸入原料に俟つ工業國の西歐諸國は、輸入の杜絶と共に直ちに行き詰らざるを得ぬ。時日を經るに從つて、形勢は列國殊に西歐諸國のためにによりより多く不利となり、、それだけロシアにとつて有利となつて來る。比較的戰爭の被害も少く、露國との經濟關係も左程に密ならざる日本との交渉に於てすら、長春は大連より、東京は更らに長春より、ロシアにとつて一般の形勢がよりよくなり、わが日本の主張と要求とが、會議を重ぬる毎に軟化し、次ぎの會議には、やゝもすれば、漁業權もしくは材木問題などにて釣られ

んとするものがある。

ロシアは資本主義國との經濟的妥協を必要とし、外資の輸入を當面の急務として來た。經濟的妥協を實際的に有効ならしめんがために、政治的妥協をも必要とし、列國の承認を得んことにつとめねばならぬこと丶なつた。然し之れと同時に列國も亦ロシアの穀物がほしい、材木、石油、魚類がほしい。何とかして彼我の關係を復舊して、通商を開かねばならぬ破めに陷つた。ロシアも困つて來たが、しかし列國にも弱味がある。こゝに於て一九二〇年レーニン氏等が對外妥協方針に決した時、同時にこの妥協を行ふに際して、よく對手の弱點にも留意し、無暗に多くの讓歩をする必要はない、成るべく犠牲を最小限度に止めよ、列國の承認は一刻も早きを可とするけれども、無理に急ぐことはない、勞農外交は「彈力性」を必要とする、サウエート外交の要諦は、まさにこの點にあらねばならぬ……としたのは、誠に己れを知り、對手を知るの明と云はなければならぬ。

四

思ふに今日のサウエート政策も概して一九二〇年レーニン氏の樹立せる所謂「彈力性を有する妥協外交」を以て進みつゝあるものと見て、當らずとも遠くはあるまい。たゞ一昨年ゼノア會議開かれ、始めてサウエート外交當局が國際の晴れの舞臺に列するの機會を捉へ得た時、會議に臨めるチチエーリン氏を始め、勞農代表の態度頗る強硬をきわめ、列強の代表を向ふに廻はして氣焔當るべからず、妥協どころの騷ぎではなかつた。當時「コンプロミッスの神」なるレーニン氏が病んで一時政局を引退したので、日頃血氣に逸やるクレムリンの若手政治家が所謂「強國政策」をとるの議を主張し、その結果ゼノアに於てもハーグルに於てもつひに妥協を排し、攻勢的態度をとるに至つたものだと云ふ説もある。但しこの説の當否は別として、ゼノア及びハーグルに於て勞農外交はたゞ萬丈の氣焔をあげたと云ふに止まり、徒らに一旦我れに接近しかけた列國を遠ざけ、その反感を高め、何等實質的雜物を得ることが出來なかつた。その後國內に於て未曾有の饑饉起るあり、いつしか「強國政策」も撤回され、再びもとの妥協方針に戻つて來たものゝ如くである。露國の現狀は決して窮鼠猫を嚙まねばならぬやうな立場ではない、けれども又同時に徒らに倨傲尊大、強國振りをきかす程の狀態にも立つて居らぬ。あまり強ぶらず、しかし又弱腰を見せず、國力相當の權威を國際間に支持して行かう……と云ふかチチエーリン氏等の日夜腐心して居るサウエート外交の苦辛點であらう。

五

サウエート外交にとつて當初來最も大なる缺陷としたのは對外通信機關の不完全であつたことにある。革命の當初、極めて最重なる列國の封鎖に包まれたるロシアは殆んど手を外に伸ばすことが出來なかつた。强いて之れを伸ばせば、直ちに「赤化宣傳」として、到る處迫害され、排斥された。從つて勞農外交はつひこの頃まで外國の事情を知らずして、對外策に當つて居たかの觀があつた。平たく云へば「盲目外交」であつたのである。少くともその嫌があつた。盲滅法に進み過ぎて、色々の失敗を演ぜざるを得なかつた。ゼノア及びバーグに於ける「强國政策」も畢竟所謂　蛇におぢぬ盲」の如きものではなかつたか。

爾來勞農政府は這個對外策上の一大缺陷を補塡すべく多大の努力を傾倒した。あらゆる機會を捉へて外國に人を派遣し、各方面の情報蒐集をはかつた。更らに國營通信社ロスタ社の社員を半公式外交官の資格を以て各國に特派し、世界到る處極めて廣汎にして且つ周密なる通信網を張つた。わが國に於てもさきにアントノフ氏横濱にあり、同氏去つて後ヲズネセンスキー氏東京に駐在し、現に或は内閣諸公を訪うて、その所見を叩き、或は東京大阪間を來往して國內の事情を精査し、露國人の日本に對する種々の誤解の芟除につとめて居る。

斯くして二三年前「蛇におぢざる盲(めくら)」の嫌ひあつた農勞外交は今日已にサウエート在外大公使館及びロスタ社在外特派員てふ「兩眼」を具備し、他の諸外國の外務當局に比して、殆んど遜色なき種々情報機關を設備した。已にして外國の事情に精通し自他の力の優劣もよくわかつて來た以上、勞農政府たるもの、如何にしてももはや「蛇におぢぬ盲」たることがと云　ぬ。

それにつけてもわが國人の多くが今も尙ほ動々もすれば露國外交は依然「宣傳外交」であるとなし、徒らに風聲鶴唳の醜態を演ずるのはあまりに見苦しいことではないか。或はレーニン號を以て宣傳船とじて逐ひかへし、或は震災救助の寄附金を以て宣傳運動費ではないか……などと騷ぐが如きはあまりに大人氣ないことではないか。

この頃ある人が「露國はドイツ革命運動を助成せぬか」との質問をなしたのに對し、トロツキー氏は「革命はその國の自力だけで遂行し得る場合に於てのみ成功し得る。大國民の革命に於て特に然りとする」と答へた。それを換言すれば波斯とかアフカニスタンなど云ふ小國に向つては革命の煽動も效果があるであらうか、ドイツの如き大なる國に向つては最早や外から手

を入れるべきでないと云ふたものであらう。然らば卽ち無暗にロシア外交の「赤き手」を危惧するは畢竟自らわが國を波斯もしくはアフガニスタンの列に卑下するものとせねばなるまい。

六

斯くして今日のサウエート外交は革命當初のそれに比して、著しくその趣きを異にして來た。但し之れは主として强大國に對する場合であつて、弱小國に對しては、必らずしも然りとは云へぬ。

歐露邊强の芬蘭、エストニア、ラトウイア、リスアニア及びルーマニア、近東方面に於ける土耳古、波斯、アフガニスタン等の諸小邦に對し、ロシアは今も尙ほ時として宣傳もする。恫喝を試みることもある、懷柔の手も廻はす。時には積極的援助をも辭せぬ。蓋し小國民は他力によつて動かされ易く、小國に對する「宣傳」は實際の效果がある。ロシアにして適時彼等に對して相當の手をかけなければ、彼等はいつしか資本列强の藥籠中のものとなつて了ふであらう。加うるに弱小國を强大國の羈絆から救出すは抑々勞農立國の國定の一ッである。一方やゝもすれば强國の後援を肩にきて無暗にゐらがらんとし、「虎の威を籍る狐」を振舞はんとする歐羅邊强の諸小國に對して。時々その出鼻を挫き、他方歐洲列强の羈絆から脫却しやうとしてもがきつゝある近東諸小國に對して、援助の手をのばすは、今日の勞農ロシアとして當然とるべき政策であらねばならず、又事實モスクワ政府は小國對策に於ても從來巳に少からぬ努力を傾倒し來つた。しかし勿論是等小國方面はサウエート外交の主力を向ける方面でないことは云ふまでもない。

七

今日勞農外交の主力を用ひつゝある對手國は云ふまでもなく英米佛及びわが日本の四大强國であらねばならぬ。但しこの四大强國中、米國だけは露國との間、政治的、殊に軍事的に衝突を起すべき理由が少い。たゞ一方が資本主義の最も發達せる國であり、他方が最も赤化せる共產主義國であるが故に、どうしてもそりが合はぬ。けれどもさりとて兩者が互ひに起つて干戈を交へるやうな場合は殆んどあり得ぬ。しかし兩國が近き將來に於て、經濟的に世界の二大競爭國となりはせぬかと云ふ問題はそろ〳〵歐米の識者間に眞面目に硏究されんとしつゝある露米兩國はともに國土尨大、天產無盡藏の國である。たゞ一方が急激に文明の進步を遂げたのに當つて、他の一方が今尙從前世紀時代の舊式農業國の域を脫して居らぬ。しかし今日のロシ

アは「勞農ロシア」である。農民の向上とともに產業方面に於て或は遠からず驚くべき發展を遂げるやも知れぬ。少くとも今日の勞農當局はその經濟政策の眼目をロシアを「米國化」するにありと稱して居る。果して所期の成績があげ得られるか否かは今尙ほ豫測しがたいとしても、その天產の豐富にして國土の尨大なる點に於て、ロシアはたしかに北歐の米國たり得る素質は之れを十分に具備して居るとせねばならぬ。然らばロシアが米國の競爭者となり、米國とともに世界の穀物市場に覇を爭ふに至らんことはたゞ「時」の問題であるとせねばなるまい。

昨夏モスクワを訪へる米國議員の一行に對してトロツキー氏は「米國の農家はロシアが再び歐洲の穀物市場となり、世界の穀物相場をかきまはすに至らんことを危惧して居るであらう。米國の資本家はこの際大にその資本を露國に投下し、露國の工業を興して以てロシアの穀物がなるべく多く國內に於て消費され、なるべく外國に輸出されないやうにするがよからう」と語つた。言外の意義更らに深いものがあるではないか。

ロシアは勿論最近の饑饉當時における米國の救援に對して深く感謝して居る。しかし兩國の國交は將來に於てどこまで接近し得るか。時折米人ワンダーリップ氏なるものに勘察加の租借權を擔保したり、又例のシンクレーヤ會社にサハレンの石油採掘權を讓與しやうとしたりして、米國に對し好意を持ち居るかの如くに見せることがある。けれども、それは多く日本を牽制するための術策であつて、眞に米國と親しまうとするものとは思はれぬ。

八

勞農外交が一方米國と日本とを嚙み合はせて、所謂毒を以て毒を制するの政策をとつて居ると同時に、他方英佛、兩國に對しても、兩者が事每に衝突し、容易にそりの合はぬ所を以て爭ふべき點として居る。

勿論佛國の武斷政策はクレムリン政治家にとつて最も嫌忌するところであり、殊に一七二〇年のポーランドに於ける敗戰以來フランスは實に勞農ロシアにとつての鬼門であつて、ポアンカレーの名は實に勞農政界に於て最も强く呪はれつゝある名の一つであらう。しかし孰れかと云へば英國の方が矢張り實際に於てサウェート外交にとり、より厄介な苦手であらう。フランスが如何にその武斷政策をふり廻しても、それは今の處ドイツだけに限られ、他へ手を伸ばす餘裕がない。少くとも此方から挑まぬ限りフランスの方から長驅ロシアに攻めよせて來るやうなことは容易にあり得ぬ。經濟的にもフランスは到底直接ロシ

アに對し脈迫を加へる力をもたぬ。フランスに對してはその保護下にあるポーランドにさはらさるを要領とし、これさへ心して居れば、先づ差し當り、何等危惧すべきものがなからう。

然るに英國との關係に至つては政治上に於ても、はた又經濟上に於ても中々複雑を極め、到底フランスに對するが如き一本調子ではすまされぬ。互ひにいつまでも絶緣して居ることが出來ないが、扨ていざ交渉を進めやうと云ふ段に到るや、双方ともにしてやらう、してやられまいとして、容易に油斷をゆるさぬ。やさしく見せて、あくまで老猾なるロイド・ジョージ、素直のやうで中々ねばり强くもあるカーゾンを對手としての對手外交は實にチチエーリンやリトウイーノフにとつて、最大の難關であらねばならぬ。それ故にロンドンには常に最も手腕の卓越した代表委員を置くことゝし、さきにはリトウヰーノフ氏あり、ついでクラーシン氏幾度か使ひし、最近ラコーフスキー氏が常駐することゝなつた。しかし英國との折衝は苦辛をしても苦辛のし甲斐がある。努力をつくしてもつくすだけの價値がある。勞農外交は對英策に於て、曾つて努力を惜しんだことがなく、倦怠の色を見せたことがない。一生懸命である。ある限りの腦漿を絞つて苦辛慘憺をきはめつゝある。蓋し英國は實に勞農ロシアにとつて、對資本列國の戰線に於けるウエルダンであり、二〇三高地である。英國との妥協を遂げ、英國をしてさへ勞農政府を承認せしむれば、他の列國は直ちに英國に倣ひ、資本列國の聯合戰線はこゝに總崩れとなるであらう、サウエウト政府の主要外交方針は蓋しこの點にあつて、他の何處にもあり得ぬ。勿論ベルリンの昨今の形勢はモスクワにとつて何よりも興味の津々たるものがあらう。又日本、米國もしくはフランスとも、交渉打開の機會さへあれば必らず之れを捉へることに努力する。同時に又近來その他の所謂弱小國方面に向つても夫れ〳〵適宜の政策をすゝめるであらう。しかしそれも之れがサウエート外交の全局から見れば、要するに英國てふ必主對手國に對する主要外交のための「補助外交」に過ぎぬであらう。

柳營最後の御狂言師

鳶魚

今度の地震火事で湯島新花町の松村琴莊氏の家が燒けた、懸命に搬出されて、辛くも炎燄を免れた坂東綏治の寫眞と、其の舞扇一本とは、江戸の昔の史秘を語るのに究竟なものである。

坂東綏治といふ名も今日では忘れた人もあらうが、明治二十七八年迄は明神下の師匠といへば演藝方面にも花柳方面にも誰知らぬ者もない踊のお師匠さんであつた、その人は二歳の時から神田旅籠町一丁目三十二番地に住んで居たから、明神下の師匠で通つて居たのだ、本名は松村ぎん、江戸の世盛りであつた文化十四年、上野隅田飛鳥山と花見に忙しく、泰平の春を謳ふ三月　湯島の丸山某の家に呱々の聲を擧げ、翌年は襁褓のまゝに伯母かんに貰らはれて、旅籠町の駿河屋松村金次郎といふ鍛冶屋の娘になつた。

此の鍛冶屋の娘は四代目西川扇藏について踊の稽古をした。文化文政に踊の流行したことは夥しい、武士も踊れば町人も踊る、茶番やら素人芝居やら、まだ足りないで花見祭禮開帳の出迎等にも假裝して押出す有樣、從つて八百八町の娘といふ娘に踊ッ子でないのはない、其の時トコトンの教育費を惜しむ親仁お袋は四里四方の內には見附らぬ、恰も坂東三津五郎、中村歌右衞門、岩井半四郎、瀨川菊之丞のやうな舞踊を誇る俳優が、江戸の人氣を背負つて立つたので、踊ッ子は坐敷雛以上に舞臺から仕入つたのを、競つてお浚の晴れにする、サアお浚の景氣は凄しいものになつた、日傘花簪或は手拭のお揃ひで繰出す花見などでは滿足しない、祭禮の手古舞若しくは踊屋臺の演技を覘ふ、のみならず當時の高等女子教育であつた大名奉公をするのにも、踊か三味線の嗜みがなければ採擇されなかつた、踊で上つた、三味線で御首尾したといへば、當人一代の榮譽でもあり、父兄は勿論親族一類までが自慢にする程であつた、それゆへ市中の踊の師匠も多い、志賀山西川市山藤間などゝ家元もあれば各々の門葉もあつて、それ〳〵に繁昌し、女師匠には中村坂東岩井など、役者苗字を名乘るのが多く、娘子供の稽古を引

受けて、好い世渡りにもなつた。

駿河屋の娘は文政十一年西川の名取りになり、僅か十二歳であつたが一本立のお師匠さんであつた、格子戸に打つた坂東照代と書いた標札も未だ古びない天保六年、目に立ち易い師の師匠の風俗、一種瀟洒な氣味から江戸の總べての階級に類のない別段な樣子のものであつた、照代は其の時十九歲、一枚繪に描かれて錦繪の色彩麗はしく持て囃されもした、照代は叡山御成と聞いて、世子家慶の鹵簿を拜觀しようと、御成道の懇意な家に出掛けた、それは何月何日の事か知れないが、西丸御年寄萩浦から駿河屋へ御內談があつて、照代は其の年の內に萩浦さんのお部屋へ上がつた。

歌舞伎移しの御狂言

本丸でも西丸でも高級な女中の部屋には、お犬子供といつて十二三才の少女が居た、川柳にも『小間物を出すとお犬が寄つて來る』といつてある、是は御直の勤めでなく、大奥女中に遣はれるのであるから、身分に制限はない、町家からも農家からも、緣故を辿つて部屋〳〵に仕へるのであつた、其のお犬の內で先に立つ者が、お茶の間（お茶所といふのが正しいのださうたが、世間では專らお茶の間と云ひ慣した）子供になる、お茶の間子供はお三の間に勤める女中（將軍や御臺所の御側で働く御老中の下働き）の下に屬し、御中老の給仕を役目とする。

お茶の間は御中老、御次、お三の間乃至お末といふやうな役名でなく、又たお茶の間といふ部室があるのでもない、お三の間に附屬した一室をいふのだ、其のお茶の間子供といつても十八七才から三十前後の者が多い、中には五十餘の老年者もある、それでもお茶の間子供なのだから面白い、だがお茶の間子供の上坐（頭分）の者をお茶どこと云つて、御中居格になり、始めて輕い奧女中に准じた待遇を受けるのだが、やはり員外に置かれることは變らない、此のお茶どこは柳營の御狂言師なので、大名の奧では狂言をする時には町方から呼び上げるけれども、柳營では一切外間からは呼ばぬ、お茶の間子供が何時も御狂言を擔當するのである、從つて柳營には御狂言師といふ名稱もない、奧の子供と御中老等の御給仕に働いて居る者等では、上覽に入れる程の技藝があらう筈もない、其處で奧の子供の中へ稍々年闌けた技藝に堪能な者を撰拔して採用する必要があつたのである、川柳に『お茶の間は大味になつて緣に附き』も年功でお犬がお茶の間に進むにしても、技藝の爲めにお茶の間になつても、受けが好いのだから早く御暇が願へない、それで嫁に往くのが遲くなるのを云つたのである。

大奥には御鳴物の間といふのがある、御精進日（祖先其の他の忌日）の外は隨宜の御催しで、九ツといふから午後一時に始めるのだ、さうして六ツ（午後六時）或は四ツ（午後十時）迄も續く、月初には四五日も御催が續き、平素は茶菓を給はるのみであるが、月初めには定例で鳴物方に酒肴を給はる、御酒下されとなると鳴物方も大燥(はしや)ぎで民間の藝者のやうに騷ぎ立てる、御鳴物所の演奏は長唄（下た方とも）常磐津義太夫等であるが、演者は屏風圍ひの内に這入つて唄ひもし彈きもするので、外の些少も見へないやうになつて居る、其處は御臺所の御居とは五室を隔でた場所なのだけれども、御臺所は適當に居ながらお聞になるのだ、しかし聞く方も聞かせる方も互に顏は見へない。

お茶の間子供の上坐は御狂言の主演者であつた、お茶の間の景氣は何と云つても鳴物より、御狂言の方が好いからである、御狂言は毎年尠くとも三四度を缺かさない、御狂言一度の費用は金千兩では足らなかつた、御狂言のある前になると、御鳴物に出演するお茶の間子供を午前中は日常の勤務に出るが、午後からは御番を除かれ、御鳴物所へ來て稽古をするのだが、御狂言へ出る場合は幾日でも御番に出ない、のみならず三座の芝居見物をも許される、時に主演者は芝居見物をするばかりでなく、移すといつて歌舞伎役者について話し合ひ、着附鬘は云ふまでもなく、大道具小道具等も其の儘に拵へる、主演者は此等の新調品を頂戴する外に、多分の御手當金をも拜領するのだがら、一度の御狂言にも大變な利得があつた、それゆゑに好んで三芝居の新狂言を御覽に入れるやうにする、又た千代田の大奥に入輿されて、一生外出の機會のない御臺所、吹上や濱御殿へも容易には往かれぬ、將軍の正廳たる御表拜見さへしない、自分の官邸の玄關口を知らない程に世間離れをして居る、斯うした女性には何程民間の模樣が珍しからう、話のみに憧憬する芝居町から人氣役者花形役者やら、處へ新狂言移しを御目に掛けるといふのだ、受けのよいのも當然である。

御三の間の疊を上げると舞臺になるやうに、兼ねて構作されてゐる、鴨居に小壁はない、皆欄子になつて居るので、必要次第花などを釣つた、絹の太い打紐に乳の附いた縮緬の幕、幕引きはお次の女中、後見はお三の間女中、御臺所は御簾屏風の内から御覽になる、此の御簾には波の模樣がある、それでは御覽なさるのに見憎いといふので、模樣のない御簾屏風が立てられた。

大奥の御狂言は御臺所の御慰みなのであるから、將軍の上覽に入れる譯のものではない、それ故に上野とか芝とかへの御

成、鷹場へ狩獵に出られる御成のやうな遠御成の際に計劃されることが多い、御狂言は朝から夜まで續く、將軍は歸城されると必ず一度大奥へ來られる、さうすると御狂言の最中でも直ぐに舞臺を片付けて了ふ、將軍が表へ歸られれば時を移さず續行するといつた按排、決して將軍には大奥の御狂言を見せないやうに仕組まれて居た。

云ふまでもなく當將軍は本丸に、世子は西丸（隱居した將軍が大御所樣で西丸に居ることもある）に居る、此の大奥は將軍なら御臺所、世子なら御簾中が居られ、御年寄といふ最高級の女中が取締つて居るのである、孰れにしても表は正廳で役所と見るべく、中奥は官邸、大奥は私宅と見るべきものだ、照代の上つた西丸御年寄萩浦の部屋は、十一代將軍家齊の世子從一位内大臣家慶の夫人、有栖川中務卿織仁親王の七女樂宮喬子を主とした大奥である、其の時樂宮樣は四十一、家慶世子は四十三。

十二代將軍の大奥

樂宮樣はお十六の文化六年十二月朔日に御婚禮をなされた。家齊將軍は一妻二十一妾を擁して四十年間に五十五子女を擧げた、其の相續人に生れた家慶世子、御親類の水戸齊昭（烈公）が一妻九妾から三十五年間に三十七子女を產ませて居るのに負けても居られまい、試みに生殖表を作つて見よう。

家慶の年齡	子女の名	生母	年號
二十一	竹千代	樂宮	文化十一年
二十二	達姬	さだ（押田氏）	同十一年
二十三	儔姬	樂宮	同十二年
二十四	女子	さだ	同十三年
二十七	嘉千代（登次郎）	さだ	文政二年
三十	直形	かく（太田氏）	同五年
三十二	家祥（後ちに家定）	みつ（跡部氏）	同七年
同	米姬	はな（菅谷氏）	同
三十三	初之丞	さだ	同八年
三十四	咸姬	かく	同九年
同	春之丞	みつ	同
同	暉姬	はな	同
三十六	悅五郎	みつ	同十一年
三十七	直丸	ふで（稻生氏）	同十二年
四十	銀之助	ふで	天保三年
四十一	里姬	きん（竹本氏）	同四年
四十三坂東照代入仕	千惠姬	ふで	同六年
四十四	吉姬	きん	同七年
四十六前年將軍となる	龜五郎	ふで	同九年

四十七（夫人喬子逝去）	萬釵姫	きん	同十一年
四十九	若姫	ふで	同十三年
五十一	田鶴若	お琴(杉氏)	弘化二年
五十四	錦姫	お琴	嘉永元年
五十五	鐐姫	お琴	同二年
五十八	長吉郎	お琴	同五年

斯うして勘定すると一妻七妾から二十五子女を子るのに三十八年を要し、それが二十一歳から五十八歳までの間であつたのも知れる、又た三十四歳の時には一年に三子を産ませ、三十二歳では二子を儲けて居るが、六十一歳で薨された家慶將軍は、死前四年まで生殖力を發揮した、六十四歳で薨去された水戸の烈公が死前一年十一ケ月に最後の廿二腹を産ませ、しかも其の年には正姫をも連發させた六十一歳振りの凄しさにこそ敵し難くもあれ、五十五歳で泰姫の誕生を打切りとした家齊將軍の死前生殖は、七十歳で薨去されたのだから、十五年の距離がある、最後の勇氣は敵前上陸に比較すべき家慶將軍の死前生殖は、親に恥ぢないのみか、誰に對しても遜色はなからう。

家齊將軍に比較すべきものを、歴史の上の人間に、求めるよりも、産卵夥多の爲めに賞翫される名古屋コーチンの一雄にして二十餘雌に遭遇し得ることを云ひたい、だが臘納臍は一牡で百牝を従へて居るといふから、人間に家齊のあるが誇りでもない、しかし人間としてコーチンの好敵手たる將軍家齊は絶倫の生殖家である、一妻二十一妾の親と一妻七妾の子と對比して、生殖の多寡を論じるのは無理だ、但し一腹の能率から見ると、嫡出が二人、庶出では押田氏稻生氏が各五人、杉氏が四人、竹本氏が三人、菅谷氏太田氏跡部氏各二人であつて、一腹當り三人餘になる、家齊將軍は五十五子女であつても二十二腹から出たのである、お閑なお方に御計算を願ふ迄もなく、二人半にしか當らぬ、此の勘定では家慶將軍が親に勝つて居る、

水野忠邦の美女獻上

家慶の世子であつたことも隨分長かつた、家齊將軍の在職は五十六年も續き、六十五歳になつて漸く大御所樣になつた、十三代將軍になつた孫の家定が十四になるまで本丸を動かなかつたのである、家慶はお茶の間子供宜しくで、四十五歳まで世子で居た、それでも十二代將軍に僥倖であつたことは、豪傑の子は餘程優秀であつても親より劣つて見へる、名人に二代なしとも云ふ、必ずしも不肖ではない、豚兒でもなかつた家慶も、大御所樣の榮華物語の陰翳の爲めに、將た嘉永の黒船闖入の爲めに、彼の閣政は全く忘れられて了つた、柳亭種彦の田舍源氏は

幕府の故老勝海舟すら、家齊將軍の大奥を描いたものだと云つて居る、女謁苞苴の盛んなものも十二世は知らない昔の話らしくもなつて居る。

家齊將軍の奥向に中野播磨守、水野美濃守美濃部筑前守など、寵姫の近親縁類が跋扈したのは誰も知つて居る、しかし御側衆とか、御小姓頭取とか、御小納戸頭取とかいふ方面に潜んで暗中飛躍を續けたにもせよ、未だ政局の大正面に立ち現はれたことはなかつた、然るに家慶の時になつては、天保の大改革を敢行する程の信任を得た水野越前守忠邦が、何に依つて渠れだけの猛斷を試みるまでの堅牢な立脚地を築き上げたらう、御人拂ひの對談の外に、將軍の寢所にさへ出入する稀有な寵遇を受けたのは、實に美女獻納の効果に他ならぬ、水野忠邦が美女を獻納した時日は知れない、けれども竹本安藝守の娘のおきんの方が家慶の第七女を産んだのは天保四年七月である、家慶が本丸に乘り込んで十二代將軍になつた天保七年にも吉姫を産み、同十年にも萬釵姫を産んで居る、此の十年間はおきんの方とおふでの方(稻生右門女)と、お産の競爭をして居るやうにも見へた、それで如何に此の兩人が寵倖されたかゞ知れよう、おきんの方は南鍋町の菓子舖風月堂の娘で、沈魚落雁羞月閉花と御約束の形容の役に立つ美人なのを、忠邦が見出して貰ひ受け、實弟の跡部山城守良弼の女として、更に竹本安藝守の養女に取拵へて西丸に進めたのである。

水野が文政十一年十一月、京都所司代から西丸老中に轉じ、内府樣(家慶)御附兼大納言樣(家定)御用を承るに至つた因縁は家齊の大奥を信心した外に、何と云つても獻上した風月堂の娘が力強い、天保五年三月に本丸老中に進み、愈ゝ御用部屋へ這入るについては、十一代將軍の寵女おみよの方に御祈禱を願つた効驗だといふ、水越の改革は家齊將軍薨去の後、天保十二三四年に威勢を示し、十四年六月廿二日に家慶將軍の恩旨を傳へ、越中國房の佩刀、備前康光の短刀及び金の麾を賞賜された、それが三個月を隔てた閏九月十三日に老中の職を免ぜられ、弘化元年再度起用はされたものゝ、役職後僅に九個月目に辭退しなければならなかつた、寵姫おきんの方は本丸に移つた後、天保十一年正月廿四日御臺所喬子が逝去されて、大に寵倖の加つた其の翌年の閏正月に大御所家齊が薨去された、水野忠邦は恰も此の際に改革の猛手腕を伸べ、おきんの方が歿した(九月十五日)翌月免職になつたことを、從來水野の敗亡する幾多の理由の外に置かれて居たのが怪訝に堪へぬ。

天保改革の際におきんの方の實父風月堂の亭主が、隱密掛を擔當して町奉行鳥居甲斐守の下た働きになり、市井の間に暴威

を奢つたのみならず、養父になつた跡部山城守良弼は大阪町奉行になつて、例の大鹽平八と喧嘩を始め、意外な暴動を惹起した、それでも貶黜されずに江戸町奉行となり勘定奉行にも榮轉したのは、幕閣の首班を兄に持つたばかりではなからう。

晩年の寵姫お琴の方

天保の改革で庶政刷新儉約勵行、八百八町は奢侈品檢擧で市民が眼玉を白黒させて居る眞最中の十三年の記事、喜多村筠庭の聞之任に、『先月（十月）廿三日淺草寺より三河島へ御成あり、女中多く御供有之由、淺草邊にては此取沙汰決して致まじく、町内へ役頭より申付たりとぞ』とある、徳川實記で見ると此の日は眞間へ出遊したらしい、眞間鳴の寡は紅葉で名高い場所なのだから、十二代將軍も看楓と洒落たのかも知れぬ、將軍の出行に寵姫や侍女を引連れることは、東照大權現の家康が晩年までもお梶お勝などを從へて押廻した後は、十二代將軍の天保十三年まで打絶へて居た、先例古格を尊奉する幕府だけに、爰に徳川第一世の殘された祖法を復興する積りなのでもあらうか、二百年近くも見なかつた女中のお供、それも多勢なのだから、市民は定めて目を欹てたらう、眞間にせよ三河島にせよ孰れにも淺草川から舟路に採るのが遠御成の例である、此の舟の乘降は兩國橋の際に殆ど極つて居たが、或は花川戸のこともあつた、途中は皆乘物ゆへ女中の御供も目立たないが、舟への乘降には是非正體を現さなければならない、花川戸で乘降したから淺草邊の町々に命令して箝口したのであらう、我等は祖法を復興するのに何の御遠慮が入りませう、緊急箝口令を出すのが野暮の行止りだとは決して申すまい、

水野忠邦が失脚してから四個月目（天保十四年十二月）に發表した令達に『御勝手向の義今般御直に仰出され候趣も有之、去丑年（天保十二年）以來御入用格別相減候へども、未だ御入用は御收納の一倍にも相當り、所詮此の儘にては御暮しかた立ち難く候間、此後御自身の上は御不自由を厭はせられず、永世の御主法取立置度候御事に候』とある、情けない公方様は暮しが立たないと生活難を叫んだ、思へば天保の改革は幕府の運數を決すべき事でもあり、又た公方様の生活の危殆に迫つた機會でもあつた、只だ其の前年の春には日光御社參と出掛けて大陽氣に騒ぎ、冬には珍しく黄金の法馬三枚を鑄造して御藏へ貯へるといふ調子の好さに浮かれたのにもせよ、なが〳〵と女中の御供を金魚の糞のやうに引張つて、五十づらを提げだ家慶將軍が、飛んだ先格舊格の復興を企てるに至つては、只だ呆れ返つて了ふだけである。

生活難を叫ぶ徳川十二世が、自身の不自由を忍んで經費を半減にするとは云つた、けれども內寵の儉約は些少も行はれない、何としても愛姬の整理に忍びない、イヤ却つて新進美人が入仕を見た、公方樣の威勢も貧乏には敵し難い、二十五人の子女の內で世子になつた家定を除いて他は大抵二三歳で死ぬ、悉く成育しないのだから、葬式が頻繁になる、それを夜間密に上野の凌雲院や芝の廟選社へ搬びもしたが又た誕生も多いが一々に御祝儀といふ譯に往かないので、出生の發表を抜きにしたことさへある、とは云へ何としても忍ばれないことがある、其處を覗はれるのに氣が附いても、附かないでも同じ事は一つ事になる、家慶將軍の晩年の寵を鍾め、殊に專房の寵を恣にしたお琴の方（はじめはおひろの方）は、杉三之丞といふ小身な旗本の娘になつて居るが、實は紀伊新宮の城主三萬三千石、紀州家の御附家老水野對馬守忠啓の女で、是は美しいだけでなく頗る怜悧な人であつた、御附家老であつては大名の格式が持てない、兄土佐守忠央が抱く青雲の志のまゝに、先づ御附家老を罷めて、大名の列に這入らうとする運動の手先にならう爲めに、進んで將軍の裀褥に近づいたのである、その次の妹を西丸以來久しいお馴染の御小姓藥師寺筑前守の養女として、御小姓平岡丹波守の妻にした、又その次の妹も水野忠邦の弟跡部山城守の養女にして御側衆新見豐前守の奧さんにした、水野忠央は三人の妹を材料に、將軍を捉へたのみか其の側を堅めた上に、幕閣の首班水越との連絡をも作つた、しかし世間では水野忠央が三妹を巧に排置し、將軍の內外に結托したのを、後來の繼嗣問題に對する運動だと見て居るが、病弱にもせよ世子家定に子供のないのを見越して、十四代將軍の相續を競爭する準備とばかり考へるのは、水野忠央を餘りに褒しい先見家に仕立てる譯だ、紀州公方樣と云つた家茂將軍擁立運動は、偶然の機會から起つたので、水野忠央の初一念ではない、けれども經過を顧みると豫め相續競爭の爲めに下地を拵へて置いたらしくも解せられる、とは云へ忠央の本心は幕府の陪臣たる御附家老が厭はしく、將軍直屬の大名になりたかつたのである、三家（尾張紀州水戶）の家來は陪臣にして陪臣にあらずとも云つたが、御附家老でさへなければ、三萬五千石の身上、殊に譜代同樣の家筋であるから、老中になつて幕閣に立つ望みもある、家祖重仲から九代も引續いて、大名衆合ひをせずに居たので、財力も瀦蓄されたから、偖こそ世間に乘出して見たくもなつたのだらう。

お琴の方は利口で別品なのだから、成績に疑ひはない、まして御臺所のない大奧、寵倖第一のおきんの方も沒した後であり、御側衆や御小姓の援護はあり、夙々以て優勢なものにな

つた、競爭者も出て來ない、弘化二年から嘉永五年迄、約九年間に二男二女を分娩して居る、忠央については到底爰で話し盡されぬが、新に新宮へ遊廓を拵へる許可を得て廻船を引附け、水野氏は暴富を致したといふ、斯うした利權の稜取も畢竟美しい妹のお蔭である。

公方樣の熱愛心理

水戸彦根二藩の暴觸を露出し、遂に櫻田事變を惹起した大騷動は、繼嗣問題に由來するものであつて、外交問題と切り放して見ると情況が分明になる、二問題が引搦んで居るのは殆ど同時の論爭であるからでもあるが、殊更に引搦ませた處に策略があるのだ、斯うしたことは勿論十二代將軍の閨政に關係はない、外交問題と入込みにしたのは策略家の所爲に相違ないが、繼嗣問題を彷徨させ、紀州黨と水戸黨と幕府を三派にして訌爭するやうにしたのは、全く閨政と無關係でもあるまい、家齊は汎愛で寵姫の多くを貪つたが、家慶は鍾愛する方で或る時間は一人二人に凝つて了ふのだから、數にしては尠い。

三島中洲が舊主板倉伊賀勝靜の談話として傳へた、家慶將軍は嗣子家定が多病である爲めに後繼者を心配され、特に紀州の慶福(家茂の前名)を召見された、其の時慶福は六歲であつた、家慶の內意は家定は勿論、奧向でも一齊に諒知して居たといひ、中根香亮氏も慶福が初めて家慶に謁した時、十二代將軍は世子家定と三人で苑內の菊を見た、苑內の規定は將軍父子以外の佩刀を許さない、然るに幼年の慶福は規定を知らないから、刀を持つて來いと命じた、家慶は笑つて尤めないのみか、家定を顧みて他日汝に所生なくば此の兒を養へといはれたといふ、此の話の中には請取れない處もあるが兎に角傳說として聽いて置かなければならぬ。

德川慶喜公傳には嘉永五年十二月の鶴御成に慶喜を連れて往かれやうとして、老中阿部伊勢守から止められ、家慶が少し早いかと云はれたといひ、鶴御成には世子の外に同伴の例のないことを擧げて、早く慶喜嗣立の意があつたのだとか、夭折した初之丞に容貌が似て居るといつて寵愛されたとか云つてある、危險な程度は前記の傳說と同樣だが、水彦兩派が贔負々々で製造したものと速斷もされない、けれども兩立し得られない傳說を二つながら認めれば、家慶の意志が奇態なものになる、大體が凝る人なのだから、寵姫に泥む爲めに、其の一顰一笑を買ふやうにもなる、果して然らば紀州慶福に對する傳說は、お琴の方へ撒布した愛嬌の亢進した結果でないとも云はれまい。

さうなら慶喜の方は如何なる熱愛心理に依るのか、一體烈公

が隱居させられたのは、御守殿の風紀を壞亂した罪科である、烈公の兄齊修の夫人峰姫は、十一代將軍の娘で入輿の當時から從つて居る上臈年寄唐橋といふ絕世の美人があつた、上臈年寄は女中の最高級者であつて、一生の奉仕でもあるから、全く嫁娶の事を絕つて居るのみならず、尼僧同樣に不犯を誓ふ例になつて居た、從つて將軍の命令でも寵愛を受けることのないのを定格とした、其の唐橋を烈公が迫奸して姙娠させたので、嫂でもあり養母でもある峰姫が、自分の身邊の風紀を亂し、奥向の制度を毀したのを怒つて幕府へ訴へた爲めである、それ故に到底尋常な事では再たび烈公を世の中へは出されない、去りとて烈公を日陰者にして了ひ、藤田も戸田も押込められて居ては、折角の天狗黨も消滅の外はない、其處で躍起運動を始めたのが高橋多一郎であつて、野村彝之助、加治吉次郎、茅根伊豫介、美濃部又五郎、鮎澤伊太夫等の同志を誘い、領內の豪農を說いて烈公が世の中へ出られゝば鄕士に取立てるとか、百石取りの武士にするとか云つて、條件附の金策をして柳營の奥向へ手を廻した、搦め手へ迂回する運動は外間から何ともなるものでない、幕府直屬の者でも大奥との連絡は取れないのに、親類にせよ水戶の家來の企て及ぶ筈はない、只だ女中の部屋へ隨時出入するのは奥醫師だけである、高橋等は奥醫師坂宗益伊東宗益に接近し奥醫師を通じて御錠口（御年寄の候補者の勤める役）の三保野と結んだ。三保野が云ふには上樣（家慶）を說き附けるにはお定の方とおみつの方とから持込ませなければ往けない、此の二人は私が何とか骨を折つて見ようが、大奥第一の權勢者姉小路といふ上臈年寄が居る、此の姉小路だけは自分の手で動かせない、姉小路を動すには家齊將軍の大奥に御年寄であつた是生尼、今日は深川邊に隱居して靜に老後を過して居る、此の人より外にはないと敎へた、此の老尼は家慶將軍の御覺へも目出度、それに姉小路が入仕の當初に大分世話になつて居る、高橋多一郎が是生尼を擔ぎ出して、遂に姉小路を動かせるやうにした、無論安い勞銀で働く女ではない、遂に姉小路が幕閣の方をも宜しくしなければ好けないといふやうになつた、姉小路は才女でもあり、美人でもあつた、或は家慶と昧な關係もあつたといふが、他の位置ならば知らぬこと上臈年寄としては、仇つぽい傳說を請取りかねる、けれども家慶將軍が何事によらず姉小路の注文は妙に傾聽された、姉小路は烈公からの消息を屢々上覽に入れた、それも緩和材料になるやうに手紙の文句も打合せた上のことであらう、將軍を段々揉み解して置いて、阿部伊勢守とも內談した、阿部は美男であつて婦女の操縱に巧な人であつた、大奥の氣受けの好いことは三百年間有數な老中である

姉小路の内談を受けて阿部は委細呑み込んだ、抑々水越の後を引受けた阿部は、仕事初めに烈公を謹愼隱居させた、八方美人主義の彼は實に迷惑な役廻りであつたが、事情據なく處分をしたのである、阿部は烈公を追込んで置くよりも上手に利用した方が利益であると考へて居た、それに三家の一人、しかも水越が天保改革の用心棒にする積りで、無闇に煽り立てた爲めに、野心のある大名が水戸へ潛り、世間でも大建物だと思ふ程にして了つた、其の烈公の怨みを買ふのは損なのも知つて居る、阿部は姉小路が水戸の蹶起運動者に正門へ廻れと教へるのを點頭して居た、それだから烈公が世の中へ出ても、阿部の提燈持だと云はれる程になつて了つた。

家慶將軍は水戸嫌ひであつた、それに御三卿といふ淸水田安一橋の三家は、將軍の近親の繼承する筋目のもので、其の人のない時には空虛にして置いた例はあつても、親類にもせよ遠い血統の者の相續する例はない、阿部は當面の外交問題に烈公のする煽動宣傳を怖れた、御機嫌を取つて置く必要はある、蟄居御免以上に何か嬉しがりさうな物を見附けやうとした、貧乏で子供の多い水戸、阿部は氣が附いた、七郞麿（慶喜）に當主のない一橋家相續、果して烈公が大喜びであつた狀態は、阿部閣老に送つた書面にも見へて居る、此の前後には孕まれて困つた唐橋も烈公の御熱心強く、京都から引戻され、名も花の井と改めて水戸の奧向に居た、唐橋は大奧の權威姉小路の妹だとも云ふが、さうでなくても近親であつたらしい、烈公は禍を轉じて福となす時期が來た、唐橋を通して姉小路に達する頗る便宜な捷徑をも利用し得られた、慶喜の一橋相續といふものが阿部の策略のために按出され、再三御祈禱された姉小路の見せねならぬ御利益として出現したのである、それを納得した家慶將軍は、嫌ひな水戸の子供を何故辛抱したらう、惚れた弱味だとすれば姉小路との關係を否定されぬ、慥でない傳說も棄て難いのは此處だ、果して然らば慶喜を寵愛したのも、姉小路の歡心を買はんが爲めの御愛嬌でなければ御世辭と見られる、

我等は慶福を寵し慶喜を愛したといふ兩存を許されない傳說は、全然ではなくても必ず幾分の事實があり、それが後來に繼嗣問題の矛盾衝突を伏藏したのを信ずると共に、それ程の重大事を惚れた女の笑顏が嬉しくて當座に無遠慮に遣つて除ける德川十二世がお氣の毒にもなり、爰では家慶將軍が美しいのに對して目も鼻もないことを云へば宜しいのだ、從つて僅少な例證を提擧すれば足りる。

お琴の方の後日

家慶將軍が嘉永六年七月廿二日に薨去されて、寵倖の美人等は現今の芝今入町の御用屋敷（俗に比丘尼屋敷）へ引移り、各自に頂戴した先將軍の御位牌を護持しながら、心靜に餘生を送るのである、お琴の方も御用屋敷に移り、御本丸への御機嫌伺ひ、增上寺への御廟參、其の他には神詣で寺參りの外に外出させない掟のまゝの無聊な年月、何としたことか御用屋敷に來た御大工肝煎某の容貌が、錦繪に鮮な宗十郎に其の儘だとか、半四郎に似て居るとか、一度其の人を見てからは、曾て知らなかつた心の饑へに惱んだ、やかで佛參に托して生家の菩提所へ通ふことが多く、密々の媾曳も度重り阿漕の浦に曳く網の流石に寵倖に誇つた美姬の末路も危くなつて來た、先將軍薨去の翌々年、何月であつたか兄忠央が急病とあつて淨瑠璃坂の屋敷から知らせがあつた、お琴の方が大急ぎて出掛けた後、何日經つても彼の姿は御用屋敷に見へず、それでも其の筋へは死去の御屆が出て居た、呼び寄せた水野土佐守は只だ一刀に、昔を思へば不便の彌增る妹の首を、涙よりも先きに落したと當時に風聞された。

斯うした失態は決して幾つもあらう筈もない、しかし才貌双絕なお琴の方、三萬五千石の武士の家に生れ、新宮城主の家庭に育ち、殊に將軍の殊寵を受けた身で、明治大正の新しい女と同樣な往き方をする、それとも八九十年前に覺醒して居たのかも知れない、それに對して些少も覺醒しない坂東鍬治の江戶前な女振りが話したい。

照代は西丸へ上つたのだが、天保十二年に七年ぶりで外神田の自宅へ下つて來る時は、本丸からであつた、家慶が十二代將軍になつて本丸へ移られたので、御年寄萩浦の部屋も引越したからである、十九だつた照代も二十五になつた、一の側の御年寄の部屋に法度の緊しい大奧奉公、お茶の間勤めの御番に出ても嚴重に監視されて居る、監視されなくても長局に起臥するので見れば、男子の臭氣もありはせぬのに、怪しからぬことは照代が懷胎して居ることだ、懷胎しても何の御咎めもないのみか、萩浦から手當の御金を遣はされた、此の賜金と萩浦の消息とは從姉を妻にした岡田平馬と、異母弟の谷崎久右衛門（谷崎潤一郎精二氏等の伯父）とが保管した、だが賜金などのあつたのは實に不審千萬である、此の懷胎が不義密通でなかつたのは容易に想像されるが、照代は終生此の事について一言も云はずに了つた

家慶將軍の御落胤

照代は女兒を分娩した、其の後は自宅の[illegible]に立つて、町娘

の稽古に忙しく、踊の師匠の賑はしい日を送つて居ると、家慶將軍の御臺所の御姪有栖川韶仁親王の御娘韶子王が、柳營の御養女といふことで、天保十五年十一月江戸へ御下向になり、精姫様と申上げだ、其の翌年（天保十五年に弘化と改元されたから弘化二年）照代は重ねて御本丸のお茶の間に召され、御狂言を勤めるやうになつた、精姫様は照代が御氣に入りで、御望みの御狂言も屢々あつた中に、照代の道成寺、逆櫓の樋口を大變好きなされて、特に似顔の人形に拵へさせて賜はつたのみならず、兼治といふ名を頂いたので、それからは照代を改めて兼治といつた、其の後田安の龍之助様（家達公の幼名）が德川の家名をお立てなされるやうになつたので、御名を憚つて兼治と呼び替へた時は、江戸ではない東京になつて居た。

精姫様は久留米の有馬中務大輔慶頼へ御入輿になつた、それは嘉永二年十二月四日である、照代の兼治は御本丸の御馴染として、赤羽根の御住居へ御狂言に出た、やがて御一新といひ、瓦壞といふ世の中、東京の最初は新しい處は見へない、當時頻に瓦壞々々と云つたか、土崩瓦壞した幕府の跡始末が容易に片付かない、江戸の面積の六分を占めた武家の屋敷地、大名旗本の邸宅が廢墟となり草原となつて、今度の地震火事後の有様で思ひ當る景況、明治も十年以後、西南事件が濟んでから「春も稍々景色ととのふ月と梅」の觀がある、明治十四年に芝公園へ紅葉館が構成され、其處の紅葉踊は貴顯紳士とかいふ條件の涎を流させたものだ、紅葉館の女は孰れも美人の本場の京都産を輸入したが、上方風の踊ばかりではと御好みなさる向もある、兼治は町娘の稽古のみではなく、お姫様方の御運動にもなると變に新し味を附けて、貴顯紳士の家庭へも出入し、有馬家は勿論、同家の御緣で小松の宮家へも參上して居た、明治廿四年四月彰仁親王の御所望で、山姥の山廻りを御覽に入れたのは畢生の光榮であつたが、兼治の名が世間に擴まり、花柳界までも明神下の師匠で通つたのは、明治十六年から紅葉館の舞踊を引受け、專ら新作の振付に從ひ、上方踊と巧妙な折衷に成功した爲めだといふ、それは二十七年七月七十六歲で死ぬまで十餘年間續いたのである。

松村琴莊氏は明神下の師匠の孫であるが、久しく祖父を知らなかつた、本丸の萩浦さんから來た書類や賜金を預つて谷崎久右衞門の弟に江澤藤右衞門といふものがある、此の人も兼治師匠の異母弟なのだ、藤右衞門は物故して嗣子藏之助が、親や叔父から聞いて居た内々話を琴莊氏に傳へた、兼治師匠が照代の昔姙娠して御本丸を下つたのは、上様の御手が附いたのだ、如何にも餘りに異例なる取扱ひであつた、不義者ならば誰か何と

取繕つて呉れた處で、賜金などのあらう筈もなく、再度御營に勤仕する譯にも往かぬ。

十二代將軍の大奥のみならず、寵倖を得た者は、何時も假親して何の某の娘に化け、御中老に成り濟すのである、照代を何故に下げて了つたのか、何故に御中老に製造しなかつたのか、谷崎岡田兩家で保管する筈の萩浦の消息さへ取失はれて、今日何一つ傳はらない上は當時の事情を想像するさへ困難である、お手の附いたことを表向にせずに、病氣引きにでもしたのであらう、勿論御胤を宿したことは全く隱蔽して了つたのだ、明神下の師匠には跡にも後にも只だ一人の娘、おあいさんは每日お稽古の地を彈いて居た、我等の覺へて居るおあいさんは四十を越しても、色白な面長な生へ際の濃い美しい額附の人で、中勢で痩せ形で誠に溫和な樣子に見へた、其のおあいさんが十二代將軍の御落胤だと知らうやうもない、天保十二年に生れたおあいさんは、十三代家定將軍の妹で、第十女萬釵姫と第十一女若姫との間に挾まる譯なのだ、さうならばおあいさんではない、愛姫樣なのである、特に家慶將軍の子女では、家定將軍とおあいさんの外に成育したのはないのだから、何程大切にされたか知れまい、當然大諸侯に輿入して御住居樣と仰がれる身分なのだ、謀叛氣が出るやうなのは却つて眞の御胤でない證據だらう、只だ鷹揚に悠々閑々として居る處が贋物でない難有味かも知れぬ、おあいさんも決して身の上の事を云はなかつた、裕福な踊の師匠の娘で、何の事もなくお婿さんを貰ひ、現代に漢詩で知られた渠の琴荘先生を子に持つた、琴荘先生は德川十二世の外孫には、大分洒落過ぎて居る。

猛火の中から僅に祖母の遺品の搬出されだのを喜ぶ琴荘先生も、今年は既に六十歲である、生母の御落胤おあいさんも明治卅六年三月六日に故人になつて了つた、

意地は江戸前の女

それだけで話は濟まない、廿五歲で御本丸を下り、七十七歲で沒する迄、四十年の長い間に坂東兼治の身の上に色めかしい噂もなかつた、無論嫁にも往かず、聟も取らない、萩浦さんの御部屋へ呼び迎へられる前も、御約束の男嫌ひであつた、一生に男と云つては家慶將軍より外に知らない、それとても惚れやうも腫れやうもないのである、實は御成道（今の萬世橋から上野廣小路の間）へ御成拜觀に出た時に見染められただけのこと、江戸時代には將軍や世子の通過する沿道の家々は、亭主も子供も男たる者の數を盡して、軒下へ荒菰を敷いた上に出て平伏して居なければならない掟なのに反して、婦女は疊の上で居

ながら行列を拜觀して差支へなかつた、當時の照代も知人の家に往つて表坐敷から拜觀して居たのを、家慶世子が乘物の內から見附けた、御目に止めたといふのは見染めたことなのだ、然るに懷胎させた上に、如何なる事情があつたか知れないが、御本丸を下がつたといへば聞へが好いけれども、手當金を與へて追拂つたのである、慥に貞操蹂躪事件なのだ、慣例の儘に御中老に取立ないのは、路端に茅組む柳は折り次第、野に咲く花は摘み放題と思はれたのに違ひい、町人藝人と卑下されるのには慣れても居たらうが、千本櫻のおさとは何といつて泣いた、三位中將維盛さまと知つた後、雲井に近い御方と鮓屋の娘では、何よりも分際が二人の關係を懸隔するのを合點しても、それで涙は止らない、目の前のおきんの方は菓子屋の娘で御中老なのだ、菓子屋の娘と鍛冶屋の娘と何が違ふ、おさとのやうな戀はなくとも、怨みは遙に多い譯だ、野に放たれた照代が鍛冶になり鍛治になつた晩年まで、怨みはあつても戀のない人のために、平氣で孤獨な暮しをした、漢字の意義の變らぬ限り貞操といふ文字は二つながら、變革さるべき意味を持たない、間違つても二人に許さないのが婦女の見識でもある、三萬五千石の新宮城主の娘は或る生理作用に堪へないで身後に醜名を殘し、菓子屋の娘は時代相應に婦德を傷けずに了つた、それは御用屋敷に於てのこと、明神下の師匠は全く自由な境涯に居たのだ、お嫁さんに往つてもお聟さんが來ても、誰からも批難がない勝手な身分だ、嬉しい筈のない仕向けをされても、元來が鯉の鮒のと川魚料理の發立らしい事はないのでも、江戸前の意地は凄じい、復たの相手を見つければ先の相手が江戸に二人とないのだけに、今度は是非とも自分を安くしたければならぬ、沽券を下げる位なら寡婦で暮すといふ處に、物々しい儒者先生の貞操論に教へられず、苦しがつた本能主義にも外づれて、憚りながら江戸前の女の見識があるのだ。

安政の地震の後に夜鷹だの引張りだのといふ私娼が路上の闇に群がつた時に明神下の師匠は未だ三十九だつた、其の時の御救米は四十餘日で打切りもしたが、小女の一人も遣ふ者で御救小屋へ這入つた者はなかつた、まして災後二箇月に願書を出して救助を仰ぐ程な泣き面は江戸に見られる圖按でない、意地の強かつた明神下の師匠の話、女でさへなどゝは決して申さないが、此の際誰彼なしに聞いて置いて貰ひたいとはいふ。

草鞋の話旅の話

若山牧水

私は草鞋を愛する、あの、枯れた藁で柔かにまた巧みに作られた草鞋を。

あの草鞋を程よく兩足に穿きしめて體の上に立つと、急に五體の締まるのを感ずる。身體の重みをしつかり地の上に感じて、其處から發した筋肉の動きが實に快く四肢五體に傳はつてゆくのを覺ゆる。

呼吸は安らかに、やがて手足は順序よく動き出す。そして自分の身體のために動かされた四邊の空氣が、いかにも心地よく自分の身體に觸れて來る。

机上の爲事に勞れた時、世間のいさござの煩はしさに耐へきれなくなつた時、私はよく用もないのに草鞋を穿いて見る。二三度土を踏みしめてゐると、急に新しい血が身體に湧いて、其儘玄關を出かけてゆく。實は、さうするまではよそに出懸けてゆくにも億劫なほど、疲れ果てゝゐた時なのである。

そして二里なり三里なりの道をせつせと歩いて來ると、もう玄關口から子供の名を呼び立てるほど元氣になつてゐるのが常だ。

身體をこゞめて、よく足に合ふ樣に紐の具合を考へながら結ぶ時の新しい草鞋の味も忘れられない。足袋を通してしつくりと足の甲を締めつけるあの心持。立ち上つた時、じんなりと上

から受取る膸のあの心持。と同時に。よく自分の足に馴れて來て、穿いてゐるのだかゐないのだか解らぬほどになつた時の古びた草鞋も難有い。實をいふと、さうなつた時が最も足を痛めず、身體を勞れしめぬ時なのである。

ところが、私はその程度を越すことが屢々ある。いゝ草鞋だ、捨てるのが惜しい、と思ふと、二日も三日も、時とすると四五日にかけて一足の草鞋を穿かうとする。そして間々足を痛める。もうさうなるとよほどよく出來たものでも、何處にか破れが出來てゐるのだ。從つて足に無理がゆくのである。

さうなつた草鞋を捨てる時がまたあはれである。いかにも此處まで道づれになつて來た友人にでも別れる樣なうら淋しい離別の心が湧く。

『では、左樣なら！』

よくさう聲に出して云ひながら私はその古草鞋を道ばたの草むらの中に捨てる。獨り旅の時はことにさうである。

私は九文半の足袋を穿く。さうした足に合ふ樣に小さな草鞋が田舍には極めて少いだけに（都會には大小殆んど無くなつてゐるし）一層さうして捨て惜しむのかも知れない。

で、これはよささうな草鞋だと見ると二三足一度に買つて、あとの一二足をば幾日となく腰に結ひつけて歩くのである。もつともこれは幾日とない野越え山越えの旅の時の話であるが

さうした旅をツイ此間私はやつて來た。

富士の裾野の一部を通つて所謂富士の五湖を廻り甲府の盆地に出て汽車で富士見高原に在る小淵澤驛までゆき、其處から念場原といふ廣い〳〵原にかゝつた。八ヶ岳の表の裾野に當るもので、よく人のいふ富士見高原なども謂はゞこの一部をなすものかも知れぬ。八里四方の廣さがあると土地の人は云つてゐた。その原を通り越すと今度は信州地になつて野邊山が原といふのに入つた。これば同じ八ヶ岳の裏の裾野をなすもので、同じく廣茫たる大原野である。富士の裾野の大野原と呼ばるゝあたりや淺間の裏の六里が原あたりの一面に萱や芒のなびいてゐるのと違つて八ヶ岳の裾野は裏表とも多く落葉松の林や、白

樺の森や名も知らぬ灌木林などで埋つてゐるので見たところがいかにも荒凉としてゐる。丁度樹木の葉といふ葉の落ちつくした頃であつたので、一層物寂びた眺めをしてゐた。

野邊山が原の中に在る松原湖といふ小さな湖の岸の宿は二日ほど休んだが、一日は物すごい木枯であつた。あゝした烈しい木枯は矢張りあゝした山の原でなくては見られぬと私は思つた。其處から千曲川に沿うて下り、御牧が原に行つた。この高原は淺間の裾野と八ケ岳の裾野との中間に位する様な位置に在り、四方に窪地を持つて殆ど孤立した様に高原となつて居る。私は曾つて小諸町からこの原を横切らうとして道に迷ひ、一日松の林や草むらの間をうろ／＼してゐたことがあつた。

其處から引返して再び千曲川に沿うて溯り、終にその上流、といふより水源地まで入り込んだ。此處の溪谷は案外に平凡であつたが、その溪を圍む岩山、及び到る所から振返つて仰がるる八ケ岳の遠望が非常によかつた。

そしてその水源林を爲す十文字峠といふを越えて武藏の秩父に入つた。この峠は上下七里の間、一軒の人家をも見ず、唯だ間斷なくうち續いた針葉樹林の間を歩いてゆくのである。常磐木を分けてゆくのであるが、道がおほむね山の尾根づたひになつてゐるので、意外にもよく遠望がきいた。近く甲州地の國師嶽甲武信嶽、秩父の大洞山雲取山、信州地では近く淺間が眺められ、上州地の碓氷妙義などは恰も盆石を置いたが如くに見下され、ずつとその奥、越後境に當つた大きな山脈は一齊に銀色に輝く雪を被いでゐた。

ことにこの峠で嬉しかつたのは、尾根から見下す四方の澤の、他にたぐひのないまでに深く且つ大きなことであつた。しかもその大きな澤が複雜に入りこんでゐるのである。あちこちから出た山の裾がいづれも鋭く切れ落ちてその間に深い澤を成すのであるが、山の數が多いだけその裾も多く、それらから作りなされた澤の數はほんとに眼もまがふばかりに眼の下に入り交つて展開せられてゐるのであつた。そしてそれらの澤のうち、特に深く切れ込んだものゝ底から底にかけてはありとも見えぬ淡い霞がたなびいてゐるのであつた。

峠を降りつくした處に古び果てた部落があつた。栃本と云ひ、

秩父の谷の一番奥のつめに當る村なのである。削りおろした嶮崖の中に一すぢの絲のきれが引つ懸つた形にこびついてゐるその村の下を流るる一つの谷があつた。即ち荒川隅田川の上流をなすものである。いま一つ、十文字峠の尾根を下げながら左手の澤の底にその水音ばかりは聞いて來た中津川といふがあり、これと栃本の下を流るゝものとが合して本統の荒川となるものであるが、あまりに澤が嶮しく深く、終にその姿を見ることが出來なかつた。

栃本に一泊、翌日は裏山口から三峰に登り、表口に降りた。そして昨日姿を見ずに過ごして來た中津川と昨日以來見て來てひどく氣に入つた荒川との落ち合ふ姿が見たくて更らにまた川に沿うて溯り、その落ち合ふところを見、名も落合村といふに泊つた。

斯くして永い間の山谷の旅を終り、秩父影森驛から汽車に乘つて、その翌日の夜東京に出た。すると其處の友人の許に沼津の留守宅から子供が脚に怪我をして入院してゐる、すぐ歸れといふ電報が三通も來てゐた。ために豫定てゐた友人訪問をも燒跡見物をもすることもなくしてあたふたと歸つて來たのであつた。

この旅に要した日數十七日間、うち三日ほど休んだあとは毎日歩いてゐた。それも兩三回、ほんの小部分づゝ汽車に乘つたほか、全部草鞋の厄介になつたのであつた。

自宅に歸ると細君から苦情が出た、何日には何處に出るといふ風の豫定を作つておいて貰ふか、毎日行く先々から電報でも打つて貰はぬことにはまさかの時に誠に困るといふのである。もつとももとも思ふが、私の方でも止むを得なかつた。たとへば千曲川の流域から荒川の流域に越ゆる間など、ほど二十里の間に郵便局といふものを見なかつたのだ。

また、私は健脚家といふでなく、所謂登山家でなく冒險家でもないので、あまり無理な旅をしたくない。出來るだけ自由に、氣持よく、自分の好む山河の眺めに眺め入り度いためにのみ出かけてゆくので、行くさき／＼どんな所に出會ふか解らぬ間は、なか／＼豫定など作れないのである。

それにしてもどうも私には旅を貪りすぎる傾向があつていけない。行かでもの處へまで、われから強ひて出かけて行つて烈しい失望や甲斐なき苦勞を味ふ事が少くない。

然しそれも、

「斯ういふ所へもう二度と出かけて來る事はあるまい、思ひ切つてもう少し行つて見よう」

といふ概念や感傷が常に先立つてゐるのを思ふと、われながらまたあはれにも思はれて來るのである。

今度の旅では幾つかの湖と、幾つかの高原と、同じ様に幾つかの森林と、溪谷と、峰と、澤とを見、且つ越えて來た。順序よく行けば十日あれば廻り得る範圍である。それにしてはよく計畫された旅であつた。私の十七日かゝつたのは例の貪欲癖と、信州地で三四日友人等と會談してゐたゝめであつた。

机の上に地圖をひろげて見てゐると、まだまだなか〳〵行つて見度い處が多い。いつも考へる事だが、斯うして見ると日本もなか〳〵廣大なものだ、どうか出來るならばせめてこの日本山の景色をでも殘る所なく貪り盡くして後死にたいものだとしみ〴〵思はざるを得ぬのである。

草鞋を穿いて歩く様な旅行には無論幾多の困難が伴ふ。先づ宿屋の事である。次ぎに飲食物の事である。

今度の旅でも私は二度、原つぱの中の一軒家に泊めて貰つた。二軒ともこの邊の甲州と信州との間の唯一の運送機關になつてゐる荷馬車の休む立場の様な茶店で、一軒は念場が原の眞中、丁度甲州の國境に當つた所であつた。時雨は降る、日は暮れる、今夜の泊りと豫定した部落まではまだこの荒野の中を二里も行かねばならぬと聞き、無理に頼んで泊めて貰つたのであつた。一軒は野邊山が原のはづれ、千曲川に臨んだ嶮崖のとつぱなの一軒家で、景色は非常によかつた。

それから妙な廻り合せで裁判所の判檢事、警察署長、小林區署長といふ客の一行から私は二度宿屋を追つ拂はれた。一度は千曲川べりの小さな鑛泉宿で、一度はそれから一日おいて次ぎ

の日、その千曲の溪の一番の奥にある部落の宿屋で。一夜は一里あまり闇の中を歩いて他に宿を求め、一夜は辛うじて同じ村内に木賃風の宿を探し出し、屋内に設けられた厩の二疋の馬を相手に村酒を酌んで冷い夢を結んだ。別に追つ拂はれる事もないのだが矢張り斯うした所では斯うして長いものに卷かれてゐた方が自分の氣持の上に寧ろ平穩である事を知つて居るからであつた。

信州では、ことに今度行つた佐久地方では鯉は自慢のものである。成程いゝ味であるが、それも一二度のことで、二度三度と重なると飽いて來る。罐詰にもいゝ物はなく、海の物は絶無と云つていゝ。

たゞ難有いのは山の芋と漬物とであつた。私は何處でも先づこの二つを所望した。とろろ汁は出來のよしあしを問はず生來の好物だし、斯うした山國の常として漬物だけには非常な注意が拂つて漬けられてゐるので確かにうまい。味噌漬もいゝが、ことに梅漬がよかつた。この國では(多分この國だけではないかと思ふ)梅を所謂梅干といふ例の皺のよつた鹹いものにせず、木にある生の實のまゝの丸みと張りと固さとを持つた漬けかたをするのである。そして同じく紫蘇で美しく色づけられてゐる。これが何處に行つても必ず毎朝のお茶に添へて炬燵の上に置かるゝ。中の核を拔いて刻んで出す家もあり、粒のまゝの家もある。これをかり〳〵と嚙んで澁茶を啜るのはまことに私の毎朝の樂しみであつた。殆んど毎朝その容器をば空にした。また、時として酒のさかなにもねだつた。

田舍の漬物のことで一つ笑ひ話がある。ずつと以前、奧州の津輕に一月ほど行つてゐた事があつた。このあたりの食物の粗末さはまた信州あたりの比ではない。たいてのものをば喰べこなす私も、後にはどうしても箸がつけられなくなつた。そして矢張り中で一番うまいのは漬物だといふことになり、そればかり喰べてゐた。やがて其處を立つて歸る時が來た。土地の青年の、しかも二人までが、見てゐるところ先生はよほど漬物がお好きの樣であるからどうかこれをお持ち下さいと云つてかなりの箱と樽とを差出した。眞實嬉しくて厚く禮をいひ、幾度かの汽車の乘換にも極めて丁寧に取扱つて自宅まで持ち歸つた。そ

して大自慢で家族たちに勸めた。ところが、皆、變な顏をしてゐる。そんな筈はないと自分にも口にして見て驚いた。たゞ驚くべき鹹味が感ぜらるゝのみで、ツイ先日まで味はつゐた風味はなか〱に出て來ないのである。やがて私は獨りで苦笑した、津輕にゐた時には他の食物に比してこれがうまかつたが、サテ他のものゝ味が出て來ると、もうこの漬物の權威はなくなつてゐるのであつたのだ。

酒であるが、因果と私はこれと離るゝ事が出來ず、既に中毒性の病氣見たいになつてゐるので殆どもその質のよしあしなどを云ふ資格はなくなつてゐると云つていゝ。朝先づ一本か二本のそれが濟まなくてはどうしても飯に手がつけられない。晝の辨當を註文する前に一本のそれを用意する事を忘れない。夕方はなほのことである。

それも獨りの時はまだいゝ。久し振の友人などゝ落合つて飲むとなると殆んど常に度を過して折角の旅の心持を壞す事が屢々である。恨めしい事に思ひながら、なほそれを改め得ないでゐる。いゝ年をしながら、といつも恥しく思ふのであるが、いつかは自づとやめねばならぬ時が來るであらう。

旅は獨りがいゝ。何も右云つた酒の上のことに限らず、何彼につけて獨りがいゝ。深い山などにかゝつた時の案内者をすら厭ふ氣持で私は孤獨の旅を好む。

つく〴〵寂しく、苦しく、厭はしく思ふ時がある。

何の因果で斯んなところまでてく〱出懸けて來たのだらう、とわれながら恨めしく思はるゝ時がある。

それでゐて矢張り旅は忘れられない。やめられない。これも一つの病氣かも知れない。

私の最も旅を思ふ時季は紅葉がそろ〱散り出す頃である。

私は元來紅葉といふものをさほどに好まない。けれど、それがそろ〱散りそめたころの山や谷の姿は實にいゝ。

谷間あたりに僅かに紅ゐを殘して、次第に峰にかけて枯木の姿のあらはになつてゐる眺めなど、私の最も好むものである。路にいつぱいに眞新しい落葉が散り敷いてその匂ひすら日ざ

しのなかに立つてゐる。その間から濃紫の龍膽の花が一もと二もと咲いてゐるのなどもよくこの頃の心持を語つてゐる。

木枯の過ぎたあと、空は恐しいまでに澄み渡つて、渓にはいちめんに落葉が流れてゐる、あれもいゝ。ホ、もうこの邊にはこれが來たのか、と思ひながら踏む山路の雪、これも尊い心地のせらるゝものである。枯野のなかを行きながら遠く望む高嶺の雪、これも拜みたい氣持である。

落葉の頃に行き會つて、これはいゝ處だと思はれた處にはまた必ずの樣に若葉の頃に行き度くなる。

これは一つは樹木を愛する私の性癖からかも知れない。

事實、世の中に樹木といふものが無くなつたならば、といふのが仰山すぎるならば、若し其處等の山や谷に森とか林とかいふものが無くなつたならば、恐らく私は旅に出るのをやめるであらう。それもいはゆる殖林せられたものに味がない、自然に生えたまゝのとりどりの樹の立ち並んだ姿がありがたい。

理窟ではない、森が斷ゆれば自づと水が涸るゝであらう。水の無い自然、想ふだにも耐へ難いことだ。

水はまつたく自然の間に流るゝ血管である。

これあつて初めて自然が活きて來る。山に野に魂が動て來る。想へ、水の無い自然の如何ばかり露骨にして荒涼たるものであるかを。

ともすれば荒つぽくならうとする自然を、水は常に柔かくし美しくして居るのである。立ち並んだ山から山の峰の一つに立つて、遠く眼にも見えず麓を縫ふて流れてゐる渓川の音を聞く時に、初めて眼前に立ち聳えて居る巍々たる諸山岳に對して云ふ樣なき親しさを覺ゆることは誰しもが經驗してゐる事であらうとおもふ。

私の、谷や川のみなかみを尋ねて歩く癖も、一にこの水を愛する心から出てゐるのである。

今度の旅では千曲川の水上を極めて、荒川の上流に出たのであつた。

その分水嶺をなす樣な位置に在る十文字峠といふのは上下七里の難道であつたが、七里の間すべて神代ながらの老樹の森の

中をゆくのである。

その大きな官有森に前後何年間かにわたつて行はれた盜伐事件が發覺して、長野埼玉兩縣下からの裁判官警察官林務官といふ樣な人たちがその深い山の中に入り込んでゐた。そしてそれらの人たちのために二度宿屋を追はれたのであつた。

千曲川の上流長さ數里にわたつた寒村を川上村と云つた。

ずつと以前利根川の上流を尋ねて行つた時、水上村といふのに泊つたことがある。

村の名にもなか〱しやれたのゝあるのに出會ふ。上州の奧、同じく利根の上流をなか深い溪間の村に夜雨村といふのがあつた。恐しい樣な懸崖の下に、家の數二十軒ばかりが一握りにかたまつてゐる村であつた。その次ぎの村、これはそれよりも一二里奧の同じ溪に臨んだ村夜雨よりももつと寂しい京塚村といふのであつた。この村をば私は對岸の山の上から見て過ぎたのであつたが、崖の中腹に作られた七八軒の家が悉くがつしりした構へで而かも他に見る樣にきたなつぽくなく、いかにも上品な古びた村に眺められたのであつた。どうしたのか、折々この村をば夢に見ることがある。

荒川の上流と云つたが、二つの溪が落合つて本流のもとをなすのである。その一つの中津川といふのゝ水上に中津川といふ部落があるさうだ。昔徳川幕府の時代、久しい間この部落の存在は世に知られてゐなかつた。よくある話の樣に、折々その溪奧から椀の古びたのなどが流れて來る。箭の折れたのも流れて來た。若しや大阪の殘黨でも隱れてゐるのではないかと土地の代官か何かゞ大勢を引率してその上流を探して行つた。果して思ひもかけぬ山の陰に四五十人の人が住んでゐた。それといふのでその四五十人を何とかいふ莖で何とかいふ木にくゝしつけてしまつた。そしてよく聞いてみると大阪ではなくずつと舊く鎌倉の落人であることが解つた村人はその時の事を恨み、この後この里にその何とか莖と何の木とはゆめにも生ゆること勿れと念じ、今だに其木と莖とはその里に根を絶つてゐるといふ。

傳説は平凡だが、私は十文字峠の尾根づたひのかすかな道を歩きながら七重八重の山の奧の奧にまだ〱さうした村の在るといふことに少なからぬ興味を感じた。落葉しはてたその方角の遙かの溪間には折から明かな秋の夕日がさしてゐた。その一

運動雜誌ア

本社の大飛躍！

運動雜誌の發行！

大業を遂げ、人生の理想を敢行する唯一の資本は身體の頑剛にある。よしそれは唯一を以て許すことが出來ないにしても、その根幹となり、源泉をなすものは我々の體質であらねばならぬ。そして生の哲學を、そして生の理想を幸福に、愉快に遂行せしむるものは我々の肉體の侵蝕されぬことにある。我社はかくの如き大理想を行する立場から、茲に運動雜誌「アスレチックス」の發行に當ること丶なつた。同誌は現在

一たび本社が本計畫を發表するや、各大學、各官廳が卒先して材料を提供し、そして學界の權威者、操觚者、文壇人達が權威ある寄稿をなして下さつたことを感謝するものです。そして全國の**百數十の新聞社が、本社の此計畫が眞に文化史的に、異常の價値あるものと認識され**その賣捌に義俠的に、献身的に努力して下さることに對して特筆して感銘の意を捧げるものです。

特に一人にして數百部を註文して、之を全縣下の各學校、各靑年團に配付せる奇特人もあり、**本書の刊行は今や學校、家庭その他官廳、會社より異常なる期待を有たれてゐる。**本社は愈責任の重きを感じ、必ず千古を通ずる權威ある史實として一方に偏せざる大記錄たらしむべく努力する。大方の諸賢も本社の意のある所を諒とせられんことをお願します。

改造社出版部

個所を指さして、ソラ、あそこにちよつぴり青いものが見ゆるだらう、あれが中津川の人たちの作つてゐる大根畑だ、と云ひながら信州地から連れて來た私の老案内者はその大きなきたない齒莖をあらはして笑つた。

燒岳を越えて飛驒の國へ降りついたところに何とかいふ村があつた。十四五軒の家がばら〳〵に立つてゐるといふ風な村であつたその中の三四軒で、男とも女ともつかぬ風態をした人たちが大きな竈に火を焚いてせつせと稗を蒸してゐた。

越後境に近い山の中に在る法師溫泉といふへ、上州の沼田町から八九里の道を歩いて登つて行つたことがある、もう日暮時で、人里たえた山腹の道を寒さに慄へながら急いでゐると、不意に道上で人の咳く聲を聞いた。非常に驚いて振仰ぐと、畑ともつかぬ畑で頻りと何やら眞靑な葉を摘んでゐる。よく見ればそれは煙草の葉であつた。

下野に近い片品川の上流に沿うた高原を歩いた時、その邊の桑の木は普通の樣に年々その根から刈り取ることをせず、育つがまゝに育たせた老木として置いてあることを知つた。だから桑の畑と云つても實は桑の林と云つた觀があつた。その桑の根がたの土をならしてすべて大豆が作つてあつた。すつかり葉の落ちつくした桑の老木の、多くは幹も枝も空洞になつてゐる樣なのゝ連つた下にかゞんでぽつ〳〵と枯れた大豆を引いてゐる人の姿は、何とも云へぬ寂しい形に眺められた。

今度通つた念場が原野邊山が原から千曲の谷秩父の谷、すべて大根引のさかりであつた。枯れつくした落葉松林の中を飽きはてながら歩いてゐると、不意に眞靑なものゝ生えてゐる原に出る。見れば大根だ。馬が居り、人が居る。或日立ち寄つた茶店の老婆たちの話し合つてゐるのを聞けば今年は百貫目十圓の相場で、誰は何百貫賣つたさうだ買つたさうだ、何處其處の馬はえらく瘦せたが喰はせるものを惜しむからだ、といふ樣なことであつた。永い冬ごもりに人馬とも全くこの大根ばかりを喰べてゐるのらしい。

都會のことは知らない、土に噛り着いて生きてゐる樣な斯うした田舍で、食ふために人間の働いてゐる姿は、時々私をして淚を覺えしめずにはおかぬことがある。

草鞋の話が飛んだ所へ來た。これでやめる。

個所を指さして、ソラ、あそこにちよつぴり青いものが見ゆるだらう、あれが中津川の人たちの作つてゐる大根畑だ、と云ひながら信州地から連れて來た私の老案内者はその大きなきたない齒莖をあらはして笑つた。

燒岳を越えて飛驒の國へ降りついたところに何とかいふ村があつた。十四五軒の家がばら／＼に立つてゐるといふ風な村であつたその中の三四軒で、男とも女ともつかぬ風態をした人たちが大きな爐に火を焚いてせつせと稗を蒸してゐた。

越後境に近い山の中に在る法師溫泉といふへ、上州の沼田町から八九里の道を歩いて登つて行つたことがある。もう日暮時で、人里たえた山腹の道を寒さに慄へながら急いでゐると、不意に道上で人の咳く聲を聞いた。非常に驚いて振仰ぐと、畑ともつかぬ畑で頻りと何やら眞青な葉を摘んでゐる。よく見ればそれは煙草の葉であつた。

下野に近い片品川の上流に沿うた高原を歩いた時、その邊の桑の木は普通の樣に年々その根から刈り取ることをせず、育つがまゝに育たせた老木として置いてあることを知つた。だから桑の畑と云つても實は桑の林と云つた觀があつた。その桑の根がたの土をならしてすべて大豆が作つてあつた。すつかり葉の落ちつくした桑の老木の、多くは幹も枝も空洞になつてゐる樣なのゝ連つた下にかゞんでぽつ／＼と枯れた大豆を引いてゐる人の姿は、何とも云へぬ寂しい形に眺められた。

今度通つた念場が原野邊山が原から千曲の谷秩父の谷、すべて大根引のさかりであつた。枯れつくした落葉松林の中を飽きはてながら歩いてゐると、不意に眞青なものゝ生えてゐる原に出る。見れば大根だ。馬が居り、人が居る。或日立ち寄つた茶店の老婆たちの話し合つてゐるのを聞けば今年は百貫目十圓の相場で、誰は何百貫賣つたさうだ買つたさうだ、何處其處の馬はえらく痩せたが喰はせるものを惜しむからだ、といふ樣なことであつた。永い冬ごもりに人馬とも全くこの大根ばかりを喰べてゐるのらしい。

都會のことは知らない、土に噛り着いて生きてゐる樣な斯うした田舍で、食ふために人間の働いてゐる姿は、時々私をして涙を覺えしめずにはおかぬことがある。

草鞋の話が飛んだ所へ來た。これでやめる。

ふるさとばなし

室生犀星



しぐれ

私には友達ちといふものが此處へ來てから極く少數ないやうな氣がした。その筈であらう私は十年振りで落着いて冬越しをしやうといふのである。べつに東京の餘震がこはくて歸つたわけではなく、私には私らしい田舍ぐらしが。好まれてゐたのである。いつ日は一度かへつてゆつくりと故郷の風物にしたしめさうに思はれてゐたのがこんどの機會にはるばる遣つて來たのである。見知顔だとか、同じ町内の知人だとかなら澤山あるが、しかし戯れて日常世間のことを談じる人が見當らない、些つとした一言でたが、この心を知り合ふといふ同心の友がないのは、十年の間に失ふたのではなく、むかしから無かつたのではないか？――それは東京に居たつて同じいわけである。それだのに何故そんな事新しげな友達ちといふものを私は考へ出すのであらう、――田舍はさびしいところであるから心がそんな古い形にとらはれて知らぬ間に友達ちをさがしてゐるのらしい、人間は故郷へかへると誰でも話し對手のないのを嘆く、だが何處に居たつて結局人間一人づつでは話對手があるやうで無いものである。故郷といふところには不思議にまだ友達ちがありさうな氣のするのも、幼ない頃の幻覺を趁ふてゐるに過ぎないことを知つたら、却つてそんな見え透いた幻覺をも愛せずには居られないだらう。――。

だが、日數をかさねるに從つて私は町中を歩きながら、決して話對手に不足するやうなことがなかつた。どういふ裏町にも

幼ないころの感銘が殘つてゐて、時無草か何かのやうに靑々と萠えてゐることに氣づいた。たとへば土塀の小屋根の上に風雅な粒々たる梅もどきの枝がさし覗いてゐるのや、枯淡な棘の實の下つてゐる木の姿、すこし濕けた飴色をした家の庇や屋根や庭石の蒼い庭、柱や椽を丹殻であかねいろに塗りつぶした昔風な町家敷などが、何か微笑みかけてゐるやうな氣がして、歩いてゐても樂しい氣がした。ことに梅もどきの好きな私はたまたまこんなに國の方に梅もどきの木があつたか知らと、日あたりのよい土塀のある裏町の、殆軒並みと言つていいくらゐの、槎牙たる枝振りと襟飾ピンのやうな點々たる此等の梅嫉の實を眺めた。東京ではあまり見ない風雅で支那風な朱玉の實は、決して派手なところがなくあんなに美しい色であるに拘はらず質朴な粧ひをしてゐるではないか、——話對手はそればかりではない、磧へ行つて見ても寺町を歩いて見ても、何かゆつたりしたいい氣もちがした。

私の育つた雨寶院をたづねると、去夏の洪水に大きな榎や梅の木が根扱ぎに浚はれて、もはやその根もとに蒸した苔の跡を尋ねるべくもない。——新建の堂宇が寂しく一二本の杉の木に抱かれてゐるだけである。私が砂上の家を建てたりして遊んだ古い庭はどうなつたか、秋遲くは石蕗の黃輪をひろげる陰地の點景は、もう咫尺の間にはない、いまは零餘子の蔓さへ眼に立たなくなつた。私はそこの方丈さんと茶話をしてゐる間にも、變り果てたむかしの私自身の姿よりも、よけいにこれらの大木が寺の堂宇を抱いてゐないのを寂しく感じたのである。

いまは紛ふ方もないしぐれの季節で、きまぐれな、晴雨定めない落葉の舞ふ空を見ても、こんな景色に一たい何年振りで出會したことだらうと思つた。竪町の多田といふ油屋へ私はよく菜種油を買ひに遣らされ、河原町あたりから池田町の樹の多い小路でよく此のしぐれに降られたりした。錻力の油罐を提げた右の手の中指がどうやら冷たさうに赤く凍んだやうな氣がして、しぐれの雨あしをながめてゐると、濡れた葉のない梅の裸木が映り、その裸木のひまに雲行きのあはただしげに停つた

り走つたりするのを眺めたりしながら、どこかでうそ寒げな鵯の啼々たるを聞いた心もちはいまだに忘れらずにゐた。そればかりではない。片町の亀田といふのに藥買ひに行つたり、廣坂では公園の林から一どきに音を立てたむ、しぐれにふられたりしたものである。今、私はむかしと同じいしぐれの匂ひに身をつつまれ、とある裏町を歩いてゐたら微風にさわぎ落ちる朱い柿の葉のもみぢしたのを見た。それらは地を茜や赤に染めいち早くさし覗く日に射（てら）されてゐる。國の庭は東京地方のやうに手入れをしてないから、それらの朱い葉は雜草のひまに花より美しい。――若しそれを子供らしく机上に臵して見るなら、さまざまの色が雜つてゐるのにちよつと驚いてしまふだらう。

私には身を郷間に置いても家も地面もないために、しばしば貸家をさがしに歩いたが、坂の多い坂上で、落葉の溜つた屋根越しに町の方をながめると、きまつて時雨を想ひ起した。そしていつも時雨にふられるのが、常である。町の初老の人人はたいがい恩給で餘生を送つてゐる人が多い、そのかたはら鮒釣や菊作りに餘念がないから、さういふ屋根の上には菊の鉢が行儀のよい添竹をされながら佇んでゐる。――その日を安閑として送るのを人生の目的としてゐる人々には、目まぐるしい活動や職業が氣に入らなくて、すこしくらゐ安くても月給取りがいいのである。かれらには人生といふものは秋の日のやうに穩やかに暮すものであつても、慌しげに飛び歩いたりするものでないと云ふ考へを所つてゐる。それ故菊の手入れに一年間かかつても退屈をしない。魚釣に一日をくらしても仕事に身を打ち込むことがなく……そして他人に迷惑をかけない心がけを用意するかはり、また他人に己れの暮しを脅かされることを嫌つてゐるのである。かれらは左ういふ古いエゴイストであつても婚禮とか祝祭とかには祖先からの陶磁器にさまざまな季節の魚介や果菓を盛つたり、他人への季節の贈り物を怠つたりすることがない。さういふときは普段らしくもなく叮嚀に祝ふものを祝ひ與へるものを贈る美風をもつてゐるのである。――假りにこの梅もどきの實る古都の或る家の客となつて、扨てその歸らんとして玄關に立つや、主婦はその半紙にならべた茶菓子をていねいに包んで客に薦め持ちかへらしめる……客は禮儀としてそれを

懐中しなければならない。私はこの古い美風をいとしく思ふた。新人があつてこの美風を當世でないと言ひ且つ誣ひるやうだつたら、おそらくこの古都にある梅もどきの風雅を窺ひ知らないものであらう——。

坂を登つて寺町通りへ出ると、下町に行つたしぐれがもう一度立歸つて、松や栂の濃い緑を重くした。私はなぜか寺院ばかりの寺町が好きである。青苔日厚自無塵ともいふべき苔は冬も凍えて青い。私は主として寺町に家をさがしてゐるのだがまだ好い家が見當らない。そんな盧を結ぶといふ風流ではないが、故郷に一年も住もうといふ私の心がけでは、せめて草盧ともいふやうなものがほしい。大した家がなくていいのである。もとより塵媛の跡をとどめるやうな處でなくても、せめて夏は蚊遣を焚く庭くらゐほしいものである。

私の今ゐるところは金澤の町でも、東京とくらべたら大方麻布の奥かそれとも赤坂の山の手あたりであらうか、樹が家を挾んで流れが多い、その用水から小流れを引いて庭に潺々たるせせらぎを通じる家は、ほとんど軒並みだと言つてよい。——そしてその流れが二三軒分の庭の垣根をくぐりぬけ又用水へと注がれてゐる。それゆえ大概の家には小さい池がある。町の名からして川御亭（かえん）といふ風流な呼び名をされてゐるが、まだ私はその縁起を知らない。往昔前田家の屋敷でもあつたのか、それとも小流れを繞らした家が多いために斯ういふ由緒ありげに呼ばれてゐるのかも知れぬ。——用水であるために水は少しも濁つてゐない、それに家々の前にある一尺くらゐの溝川の水までさらさらと一濁もない美しさをもつてゐる。ときにはそんな二寸とない深さのせせらぎに石斑魚（うぐひ）の子が走つてゐるのを見ると、市街であるとは言ひながら今さら田舎の清閑を愛せずにゐられなかつた。——町の人々は尾籠に入れた十一月鰯を活してをいたり、蜆貝の泥を吐かせたりしてゐる。

窓から隣家の柑子の實つてゐるのが、ふり續いた微雨のたかにつやつやと濡れながら垂れてゐる。屋根は雨に濡れて消炭のやうな色をしてゐるせいか、柑子の肌の黄ろさは輝くばかりである。そして空は灰ばんだ荒涼たる景色である。階下では子守

唄がきこえ風あるごとに後庭の柿の葉の散落する音が夥しい、――。

私は殆癖になつたやうに用事もないのに外室の用意をして、市街の裏町をぶらぶらする。どういふ家にも柿の木があるやうに、どういふ家の庭々にも朱い葉の堆積を見ないことがない、それらの落葉は朝の間に濡れてゐたのか、すこしも乾いてゐない、私はなぜにこんなにまで柿の葉に感心するか分らないが、何か好きで耐らないのである。それから傷枳(からたち)のまんまるいゴム玉のやうな黄ろい實が、家々の垣根に光つてゐる。東京地方でいふ寒竹は此處ではずつと葉なみが、廣く背丈も伸び、多くは垣根に生えてゐる。いまから冬にかけて當時であるから、黒子(ほくろ)のやうな色合ひの筍が垣根を拔いでゐるのを見ると何か物悲しい風情を感じた。――幼時にこれを理由なく拔いた覺えがあるからである。

犀川へ出ると四五日前に見た磧の草の色が一層こゆく茜色や朱色になつたことに氣づいた。もう一日づつもみじして、しまひに眞赤になつてしまふのであらう、そして枯れかかるころには焦茶色になつてしまふのだ。莖も葉もまるで眞赤だ。さういへばどうやら夕日寒山を見るの憶がしだいに昂じて、山々の姿までもみじしてゐる。峯の方は既う落莫とした瘠せた肩つきをしてゐた。此間から飛行機が飛んでゐたので鵯が網にかからない鳥屋が言つてゐたことを思ひ出した。市中に澤山ゐた目白や百舌や鵯まで、演習が、あつて飛行機が飛んだらみんな山の奥へ行つてしまつたとは聞いたが、その山奥にもあまりゐないと言ふ。そんなことを考へてみると妙に心佗しい氣がした。それに十年前に眺めた山々の姿が依然としてゐるが、氣のせいか、一と廻り小さくなつたやうな氣がしてならなかつた。そればかりではなく、何か樹の姿にしてもむかしとは小さくなつたやうに思はれてならなかつた。私自身がべつに子供のときとは大きくなつたせいでさう見えるのではなからうが、全く、醫王山や戸室、それから白山や富士寫ヶ嶽の姿までが、あの時分からみると、ずつと小さくなつて見えた。犀川にしても可愛げな流れになつて見えたのだある。――私が國を出たときは二十一くらゐだつたが、それからさまざまな土地を旅行してあるいたから眼界自ら廣がつたのかも知れないと思つたが、も一つは年をと

ると山河の姿にも何時の間にか驚かさるのではないかとも思つた。

竹

竹は畫けるごとく鋏すべし。珊々たる又斑らなる竹枝の根もとに一石を配すべく、一石の面に水のしたゝり溜れるは嬉しきものなり。わが庵の竹を剪り明りを透したるに、葉と葉の累なりしもの隔れ、枝と枝と交へたるもの自ら二三枝を數へるごとくなり。曇天のもとに光らずに搖れうごきて靜かなり。しかも古き竿枝を剪り今年竹をのみ立てたるなれば、淸楚にて閑寂の趣あり。一雀の走るありて忽ち竹枝たわわとなる。去るを見ればなほ寂然として音あり。竹を愛する我は雅びたる詩人にあらず、俗腸錢餘を算ふるの人なり。さればこそ竹の樹てるに蹲踞み搖れるに從つてなほ左傾するの所以なり。

竹の皮を剝けば節と節との間詰りて、風致いとしき姿を爲すと云ふ。されど我庵の竹は條竹なれば屋後に綠叢を仰ぎ見るべく、いまだ皮剝ぎたることなし。——その影の壘に射しくるときは秋近くなるべく、庭石の上にあるときは冬の日の溫き午后なり。煙草して影を見るべき我はすでに考ひたるにはあらず、心そのやうなるものに眺め樂しむの齡を知れるなり。げに思ひがけなき樂しみの我が上に訪れ來しものかな。などと書きつゞらば犀星既に老ひたりとや言はん。されど我がごとき一介の痴人のかくまでに樂しめるを母など聞きたまはんには、よしとこそ言ひたまはん。まこと母親にあらずして誰人にこの事を告げんものぞ。

その日われペンをとらんとせしが、竹を剪れる震へありてペン握らんことをよう爲ず。文字ふるへて悲し。まことにすゐすゐたる青竹の凛たるを鋏するとき、音してひびき手中の肉をふるはすなり。そのふるへ停まり去ることなく、ひしひしと痛めり。食事にもなほ箸とらんとして震ふ。青き胡瓜をいくたびかわが膝の上に落せり。

「いかにして何時にもなきことをしたまふぞ。」

「手のふるへるなり。竹は剪るものにあらず。」

かく山妻に告げてなほ手の震へるを止めんすべなし。出でゝ

竹を見れば青きすゐすゐたる竿枝の、その尖端になほ一滴の翠余走れるごときを覺ゆ。手に觸れて見て愛でさする心地す。

竹は庭の隅に配すべく、或ひは圓窓櫺楞窓に位置すべし。石手洗を置くによく、又藪柑子梅嫉の紅き珠つづれるを雜へたらんにはなほ風雅なるべし。竹林中亭を建てるはよけれど、そはあまりに贅澤なり。己れ貧しくしてなほ竹を植えるはよし。錢餘りて竹屋敷をつくれといふ某といへる謀人にはくみせず。凡て分に過ぎず目立たぬ贅澤な奥床しきなり。庭に百金を投ずるはよけれど、金銀に千金を棄てるは好ましからざるなり。——寒竹は芽筍（めたけのこ）を愛すべく、篠竹は荒き音こそよけれ。熊笹はぞくぞく生ひ繁りたるは賞翫すべきなり。

閑暇あいて淺草の割烹に遊びしが、石を埋めたる熊笹の緑みな潔よく青かりき。すなはち一枚づつ拭き淸めたるもののごとし。かくのごときまで注意深く竹は愛すべく、その緑は保護すべきなり。それも今はもはや昔の夢とはなりたりけり。わが庵の竹も又をりをり打水などして煤多き都の風に吹き枯れざらんことを恐る。まことに朝ごとに煤はこり黒ずみて葉の上にあり。打水して淸むるなり。

冬近く

すこし寒過ぎると思つたら、ひるすぎから風が出て一ときに霰が降つた。二階の障子が雨にふり込められてゐたのに、霰が打ちぬいで疊の上に皚々たる三四粒がこぼれてゐた。これを手に取つて見るのが、何年振りだか知らない。——見ると障子が何か鋭い爪あとで引掻いたやうになつてゐる。猫の爪あとのやうになつてゐる。

手に拾ひあげて見てゐるうちに、霰は掌中に融けてしまつた。あるは一と雫の水だけである。私はこんなたはいない事をしてゐる間に、或る幽遠な氣もちを感じた。見れば今明るく射したかと思ふと、もう曇つて暗くなつて又た急霰が屋上を叩いて過ぎた。ひそかに火桶を擁してみると、炭の香が久しぶりで國らしい氣を起させた。昨夜しきりに雷鳴がしたのは冬の初まりがけで、そして今日の霰の前知らせであつたのだらう。——庭の隅に落葉と一しょに白い粒々たるのが、吹き寄せられ其處

だけ冷たさうな鮮かな白さで冴えてゐた。私は雨具を用意して烏渡の晴れ間を窺つて町へ出た。

町のなかは何處もみな色づいた落葉で一杯だつた。白い霰がまだ融けないで溜つてゐるのに、冷たい水溜りがあちこちにできてゐた。私は何處へ行かうといふ的もなしに寺町にゐる母親の方へこころざした。いつも一人暮しをしてゐる母親は、私だちと一しよになることを好まないで、不自由ではあるが年寄りらしく小さつぱりと暮してゐたのである。――が四五日さきから腸の工合をわるくして寢てゐるので、とにかく看護婦をつけて置いた。が、どういふものか虎年の看護婦は、ゐの年のわたし迄遣り込めると言つてひどく嫌つてゐたのを無理におさへさせてをいた。それに河原町の醫者が來ると、これは年寄りにも似合はない病氣だといつてチブスの疑ひがあると言つたさうだつたと、昨日の使のとを私は思ひ出したのである。――知り合ひの魚屋の電話を借りて河原町の醫者に母親の病氣のことを先きに聞き合さうとした。が、醫者は電話口へ出ると、けんもほろろな聲で昨日お母さんから廻診を斷はられたから容態がわからないと言つた。

私はちよつと不思議な氣もちでそんな醫者を斷はる筈がない、何かの間違ひではないかといふと、たしかに昨日お使があつて既う來てくださらなくてもよいと言はれたと言つて、わたしもこの年まで醫者をしてゐるが、廻診を斷はられたことがない、とさうかなり不愉快げな聲だつたが、私はあんな頑固な母だから何か氣に入らなかつた事でもあつたので、さう斷はつたかも知れないと思つて一應醫者へは謝まつてをいたが、醫者を斷はるなんて相渝らず頑迷過ぎると思つた。――寺町へのぼると電車通りが、どこかの銀杏の吹かれた黄ろい葉が一杯撒らばつて、うそ寒いお詣りの下向がつづいてゐた、

母のゐる寺の中庭も濡れて寒さうだつたが、母親はすこし元氣になつてゐた。私が尋ねないさきに、河原町の醫者はわたしのことをチブスになるかも知れないなぞと言ふし、第いち藥がにがいのみならずそれを服むと嘔きたくなるからと言つて斷つた。この年になるがそんな人さまのいやがる病氣などになつたことがない、全くあんな醫者にかかつたら碌でもない病名を

つけるかも知れない、それよりも父親のときに診てもらつた醫者のほうがどれだけいいかも知れぬ。さつきから言つてをいたから最う來てくださる時分だらうと言つた。私はどう返事していいか分らなかつたので此の頑固な母親を手のつけやうのない氣もちで眺めた。そして看護婦が席を立つたあとで、あの女がゐるとなほ病が昂まるやうな氣がする。あれを食べてはいけないとか、これを食べてはいけないとか言つていちいち反つてこまる。早くあれを何處へかやつて呉れとも言つた。それでは誰があなたの看護をするのだといふと、雇ひのおばあさんで澤山だと言つた。あんな眼のうすいよぼよぼなおばあさんに何ができることだらう、そしてゐるうちに今はないが熱でも發てきたらどうするつもりだ。こまるものは私たけではないかと口へまで出かかつたが、こんな事を言つたつて解る母親ではないからと、私はうそ寒く襟を掻き合せ、火鉢に手を翳した。うすれた日さしに栗の葉かげが、障子にしてゐる。

ではその醫者はいつ來るのだといふと、もう間もなく見えるだらうと言つた。とにかく醫者に會つて容子を見てから歸へらうと私は茛をふかした。大きな寺の夕方近いことゆえ物音がない、——何かと言ふと私はかへりますと看護婦がおどかすと母は子供のやうに告ぐちをきいたりしたが、私はなるべく口重く物言はなかつた。

見覺えのある醫者だと思つたが、紛ふ方もない父の病氣のときに診てゐた醫者だつた。あれから七年くらゐ經つ間にこの醫者自身もひどく老け込んで、長い寺領の石疊を歩くのさへ危げに見えた。母の容態を話すと、何よりもチブスの疑ひがあるといふことに重きを置いてゐるらしく、本人が入院するやうだつたらそうした方がよいと、なるべく危ないところに身を近づけないやうにしてゐるらしく見えた。こんな醫者に何がわかるだらうと思つたが、母はわたしのからだを診てよく知つてゐらつしやるから安心だと言つた。——醫者はかへりになほ二三日の間診なければわからないと言つて、自分自身のからださへ大儀さうに持て餘してゐるやうに、寺領を出て行つた。この風俗は何といふ草深い風俗だらう、ああいふ何もわからない唯藥服をすすめるだけの醫者が、病人よりもつと酷く不健康さうなむ

らだで廻診にあるくのだ。あんなによぼよぼしたからだで、よく廻診ができるものだと、うそ寒い庭さきを眺めた。

「どんなことがあつても醫者を斷はるのがよくない。」

さう私は口へ出して言つたが、あんな醫者がやつて來たらこちらの病氣が重くなる一方だと母は言つて、いまの醫者は見立てがよいと賞めてゐた。熱も大してないやうだし此分なら大したことはなからうと看護婦が言つて、おつむりが痛まないだけでもチブスぢやございませんと言つてゐた。

さうしてゐるうちにも母親は起き上つて、自分で茶をいれて私に注がうとしたが、起きてはよくないと手をふつて止めた。何なら看護婦さんに淹れてもらつたつていいからと言ふと、年寄ると若い女のするとが間だるつこくて見てゐられない、何をするにも一つ一つ此方から氣附けてやらないとして呉れないだけでも、心が疲れるとも言つた。その理屈は分つたが、私はいいかげんにして母に別れを告げ、霙のやうなぴしやぴしや冷たい雨の中に傘をひろげて、そとへ出た。——ああいふ頑固な母親でもすこし熱でも出てくると、看護婦にむかつて病氣は恢復るかどうか、死にはしないかなどと一日に三度もたづねることがあるさうだ。ひと眠りしたかと思ふと、どうかして恢復つて早く風呂吹がたべたいとか、鯛のさしみを食べたいとか言つて、ほんとに直るなら直ると言つて呉れと執拗く娘のやうな看護婦にせがむさうだと、何かのついでに言つてゐた。七十幾年も生きてゐても人間は生きて生きつくしたいものらしいと、私はそのこころもちを愉快にも勇ましく感じた。

寺町の裏通りの、よく子供の時分に行つたことのある竹藪の中の、ほそい笹下町を通つて見たいと思つた。藪畳が五六町もつづいてゐて、そのまん中に五六軒の家があつたり又絶えたり、小路が曲水のやうにながれ、どこを向いても千竿猗々として霙の中に立ちそよいでゐた。その藪の奥は寺になつて墓碑が蒼々と立ちすくんでゐた。子供のときは此處をゆうれい小路と呼んでゐたくらゐ鬱々たる小路だつた。竹と竹とが折り累つた蒼綠の支那風な風情や、竿と竿とがかつきりと重なり合つてその隙間から向ふの方の町家の明りの見える工合が、久しい間かういふ瀟條たる風景に親しめなかつた私には物めづらしく眼を瞠め

中に暫らくは漂はした。そして又あつらへ向きた鵙のけたたましい啼き聲が籔の奥からしてくるのも、ここへ歩を運んで無駄のないことを思はせた。ふとこの界隈に貸家がなからうかとも立ち止つて考へたりした。

籔から出やうとしながら不圖耳をかたむけると、一町ほど奥の籔の上にしきりに急霰の降りいそぐのが、米研ぐやうな音を立てて過ぎた。そのたびにうそ寒さが身に沁みた。——間もなく二三粒白いのが落ちるのかと、思ふと慌しい霰が籔一面に囂しくさはいで、ちやうどしぐれのあめ脚のやうに過んでしまつた。其あとへ曇り硝子のやうな弱い日さしが一と渉り射し、じくじくに濡れた落葉が寒かつた。私はいそいで小路から通りへぬけやうとすると、この籔中の三四軒の家の井戸端にさむざむとした小鮒を料理してゐる男がゐて、間もない夕餉に生鮒の肌身に包刀をつつ立ててゐた。

霰が來てから間もなく、川の上流の山々がすつかり白くなつて了つた。默つて立つ山々が白雪が被はれた姿を私はこれは久しりだと呟いて見上げた。さういへば既う冬げしきでないものはない、——磧に砂利をすくふ人足の脚も、多くなつたやうな鴉の群れを見ても、山の中には食ひものが無くなつたことが分る。それぱかりでなく寒氣に怖かる町の人人は頭布やマントを着たり村里から出てくる人は莫蓙を羽織つてゐたりした。

「それにしても何といふ人死にが多いことだらう。」

歩く町ごとに忌中と書いた白紙と、靑すだれのかかつてないところがない。十一月下旬になると、ふしぎに病人ががつくりと逝つてしまふ。しぐれや霰の打叩く雨戸の音をきいただけで寒氣には非常に脅やかされる北國人の常として、その音をきくとめつきり弱つてゆくらしい。それゆえ死期はたいがい十一月頃の、うそ寒い、日脚の詰つた日に病人は死んでしまふ。——私は死にさうもない老人があるかはり、すぐ霜どきの蝗のやうに死んでしまふ人のあることに氣がついたりした。岡榮一郎君のお父さんも病氣が重いと聞いてゐたが、二三日白いものがつづいて降つたので、どうかなと思つて見舞ひに行くと、三日つづいた霰の、その中の日になくなられたと聞いた。——俳句で言ふ

北窓塞すといふ季題が寒さにコワがる田舎では藁席一枚でぴつたりと山や田圃や長い町すぢに向つた寒い窓をとざしてしまふのである。又は北向きの軒の入口に席を張りつめたのを春まで構へて置いたりするのである。

私は冬の日南に涌くふうゆうを國の方で雪降蟲と呼んでゐることを面白いと思つた。どうかすると珍らしい冬の日が雪の上にまぶしく射すことがある。そんなとき何處から群れて出てくるのか煙のやうな羽蟲が立つて冬日の中に舞ふてゐる、だんだん日かげが板塀の上へ消えてゆくに從つて、その雪降蟲の群れまでが日かげを趁ふて高へ高へと消えてゆくのだ。人家の棟のところに大輪の菊のやうに映つてゐて間もなく消えてしまふ日かげを、よく見るとれいの雪降蟲がやはりその光を追ふてゐる。しまひには追ふてゆくところがなくなつて影もなくなる。まことにふうゆうとはよく言つたものだ。味氣なくて寂しい。どこへ消えるのか、又どこから出てくるのか分らない、――子供らは、太郎や米搗け、次郎に言ふな言ふな、と雪の日のさむい道端でうたつてゐることから考へると、何となく米でもつくやうに上から下へ、下から上へと舞ふてゐるやうである。――けふ、雨があがつて少し暖かいせいか、永年見なかつた此のふうゆうが屋根から板塀へかけて舞ふてゐるのを見ると、私自身の心もそれに雜つて幼時の思ひ出を捜してゐるため、何か哀れな氣がした。

もう一つ私に哀しくてならぬものは、十二月から一月へかけて魚屋の石たたみに併べられた生鯽の姿だつた。生きてゐるまま二日でも三日でも冷たい石たたみの上に、ときどきあぎとをほんの少しづつ動かす哀れな魚族の、するともない呼吸づかひが悲しかつた。そとには山のやうに雪が掻かれ、その明るい反射のなかに臆病げな鯽が生身をよこたへてゐるではないか？それに水がない、水がなくてもふしぎに鯽は生きてゐるのである。私はこの鯽といふものが何か纖々しいものに見えて仕方がない。――たまに生かしてあるのを見ても、みんな口を上へ向け、半分死んだやうになつて水と空氣とを半分づつ吸つてゐるのだ。それを洗ひにしたり燒いて食べたりするのはどうしたも

のだらう、私は言つた。

「鮒だけは止さう、あいつを食べるのは氣の毒だ。」

冬すみれの花、――から書いただけでは分らない人があらう、寒中の、雪が二尺くらゐ積つてゐることに、私は冬すみれの紫濃いつぼみを見出してむしろ呆然とした。それは日あたりのいい石垣の、石と石との間にこんもりと青い葉をならべた菫の幾株かが、時しらぬげに可憫にも寂乎として綠深く構へてゐるのだつた。これを仔細に見ると角力取花とも言ふほど普通のすみれより花が大きい、――童子らはこの花のうてなのところにある瘤のやうなものを、花と花とを組合はして引つぱり合つて遊ぶものだ。クローバの葉と葉を海鼠廻しのやうに叩きつけると同じである。

私ははじめこんなに寒いときに花なぞ着けてゐないだらうと思つた。それにも拘はらず此のすみれは青いいぢけた幾重にも綠の表皮につつまれた蕾を大切さうに葉のかげに潜ませ、いくらか羞かしげな容子をしてゐた。私はそれに指をふれて見たが、內部はふうわりとして且ついくらかの温かみが含まれてゐさうにも思はれた。こころみにその蕾を破つて見るなら、まだ紫には間のあるうすあかい色の花瓣が、幾重にも累なり包まれてゐることに氣がつくだらう、――私はそれを一度見てから、よく日あたりのよい石垣の中をさし覗いて見て歩いたが、なるほど蕾を持つたのが極く稀れだつた。たいがいは凍へた青い葉を覗かしてゐるに過ぎない。それにしても私はものの眞實さといふものを能くこの冬すみれの花に眺めた。北國のつねとして雪の下には蕗の薹や土筆や嫁菜が春いち早く萌え出すのだが、それは北國地方ばかりでなくとも、東京の野にも見られるところである。しかし冬すみれは寒い國の特有のものに違ひないと思つた。あんなに人知れぬ間にこつそりと蕾は持つてゐるが、その蕾のまま凍へ上つて咲かずにくされてしまふすみれは、まつたく可愛いものの極致だらう。



五厘の笛

堀口大學

砂の枕

砂の枕はくづれ易い
少女よ　お行儀よくしませう
澤山な星が見てゐますれば
あらはな膝はかくしませう

アンチシテ

奥さん　私の詩集は濡れせう
あなたのやさしい指の間で
おぞただしいクッションの葉かげに
奥さん　あなたの乳房が熱します
奥さん　熱い接吻のあとの
冷たいシャンパンは美味ですね
奥さん　明るすぎますか
奥さん　ランプを消しませう

祈る少女

ねむる前に

マリヤの前に
膝まづいて
祈る少女は

私が先き程
花盛りの藤棚の下で
ベンチに腰かけたかの女の足元に
在つた型をまねるのだが

かの女が私の願を
きき入れたやうに
マリヤはかの女の願を
きくだらうか？

ジユリエツト

それは切られた一輪のばらの花でした
哀れなはかない戀でした
蜜蜂よりはやゝに重い
あなたの小さな唇の
吐息がふれたばつかりに
散つてしまつた花でした

ジユリエツトよ
五月の夜は暗い
ロメオの墓石は白い
やさしい少女よ
毒を呑んで死ぬ前に
もう一度きくがよい
森の奥に鳴くほとゝぎすの歌を

カピユレ家の息女よ
それは本當であらうか?

人は云ふのだが
戀があのやうに
鳥をなげかせるのだと?

シャンパンの泡

それはシャンパンの泡ですね
奥さん　あなたの口紅が
私の唇を紅くした
その場かぎりの戀ですね
それはシャンパンの泡ですね

その日暮し

昨日(きのふ)の夢を忘れよう
今日(けふ)は今日(けふ)の苦勞で澤山だ
明日(あす)には明日(あす)の日が出やう

昨日の夢を忘れやう
後悔は
彼(かれ)の男を養はぬ
昨日の夢を忘れやう

今日は今日の苦勞で澤山だ
何と神さま人間に
惱む力のあることだ
今日は今日の苦勞で澤山だ

明日には明日の日が出やう
さうして男は惚れ易く
さうして世界の終りまで

明日には明日の日が出やう

幻の散歩

麥藁でソオダ水をのむやうに
私はお前の戀をのむ私の毛穴から
私の目はお前のからだの風景を愛撫し
圓味ある小徑を散歩する

ここは六月の麥畑です
ここは影多い谷間です
なだらかな丘を下つたら
羊齒の葉かげの泉に來てのみませう

明け方

過去を泣くにはまだ時が早い
われ等は昨日途で行き逢つたばつかりだ
このみすぼらしいホテルの一室で
われ等はなぐさめ合つた事だ
漂流物のやうな二人である
明日が來ておし流して行く前に
女よ　倚りそつてなほ暫くはねむりませう
過去を泣くにはまだ時が早い

凱歌

日夏が聖母をめとるのは
春夫が星を外すのは
少女よ　まだ今宵ではないらしい
われ等が草の上にねころべば

牧場は戀のねどことなる

次第

犬は忠實なけものです
決して他言はいたしません
おしやべりの鸚鵡をしまつたら
奥さん　首輪をおとりなさい

毛蟲

お前のからだは一輪の薔薇の花だ
見えぬ花心が一番に奥ゆかしい
そこに私は醜い毛蟲を見るが
それは私の欲念なのだが

半巾の雲

窓と戸口をしめると
少女よ
お前は帽子をとる
小さな半巾の雲で
鍵あなはふさぎませう

うそ字

私の心臓
人生の小學生
お前はまたしてもうそ字を書きました
手帖のうそ字は消せばよいが

ゴムも消さない思ひ出がある

百合

百合の花は昆蟲の化粧室だ
蝶が出てまゐる
金粉（きんぷん）の着ものをきて
リリイ・スヰイト・リリイ
香水をあふぎ乍ら
リリイ・ホワイト・リリイ
半巾（はんけち）をふり乍ら

拷問

お前の足もとに跪まづいて

何と拷問がやさしい事だ
愛する女よ　慘酷であれ
お前の曲線は私を息つまらせる
ああ　幸福に私は死にさうだ

若しもお前が

若しもお前がそれを欲するなら
少女よ　私はやさしい歌を作りませう
絹と天鵞絨の着ものをきた小鳥が
泉のかたはらで歌ふやうな

若しもお前がそれを欲するなら
少女よ　私は戀の巣を作りませう
お前の身體が其所にねころんで
天使のやうに見えるやうな

若しもお前がそれを欲するなら
少女(をとめ)よ　私は纜(ともづな)をときませう
月は柳の葉かげから水の面(おもて)に流れ
川はわれ等を夢へはこびませう

少女がマリヤにする祈

マリヤさま
けがれずに胎(はら)みなされた
マリヤさま
私(わたし)のねがひをおきき下さい
私のねがひはあべこべです
私がけがれても　けがれても
胎まぬやうにして下さい

文がら

すべてかなしい
人情も小慾も
凋れた花の匂ひです
手箱の中にうづ高い
ああ　昔の日の戀ぶみ

小學生

先生
植物學はうそですね
樹木もやはり笑ふのです
梅が一輪さきました

私は歌ふ

流れることにも飽きて
水がつぶやくやうに
長い旅路に疲れた風が
ささやくやうに
人生この退屈な待合室で
死を待ちながら私は歌ふ

五厘の笛

日夏耿之介を泣かせる爲に

友よ　あきらめよう
地球はまはる
私の五厘の笛では
人々は踊らない

友よ　あきらめよう
人々は踊らない
私はいきが切れる
私の笛はだまる

五厘の笛だ　五厘の笛だ
私の笛は五厘の笛だ
地球はまはる人々は踊らない
友よ　あきらめよう　友よ　あきらめよう

アメリカン・ジャーナリズム

原田譲二

○

旅に出てゐるとシミぐ＼新聞の有難さがわかる、殊に言葉の不自由な外國の旅行では、その土地の新聞紙が親しい話相手であり、知識の供給者であり、人情風俗の説明者である。自分のやうなニュースの紙屑の中に育つて、毎日々々神經をとがらせインキの匂ひのプーンとする、新しい洋紙の、やつと今輪轉機の肌をはなれたばかりのホヤ／＼が、僅にその日の疲勞を和らげてくれる生活を續けて來た者には、新聞はあまりに自分の生活に馴れ過ぎてゐて、それを見ることは苦痛である場合が多いが、久振りに汽車からはなれて一箇の讀者になつて見ると、新聞はのんびりと有難い。種が落ちてゐようがゐまいが、第一そんな氣苦勞がないから取分けうれしい。ローサンゼルスからシカゴへは、サンタ・フイ線を取つた、三日も四日もあの荒涼たる沙漠の中を行く、楚人冠氏からなるたけ寒村小驛で發行してゐる所謂『村の新聞』を集めて送つてくれといふ依頼であつたから、心がけてはゐるのだが、たま／＼停車するステーションは眞に野中の一軒家で、たゞ三度の食事をとらせるだけのレストーラントに過ぎなかつた。やつとカンサスに着いて、豫て聞き及びのカンサス・シテイ・スター紙に面會して、人心地がついたやうな次第だ。

モ少し話させて貰ひたい、太西洋ではアキタニヤ號でデリー・メールがアトランテツク・エデイションを發行してゐるので、大いに心强かつた、キユーナード線はすべてデリー・メールが新聞發行權を占有してゐるらしい。嘗てノースクリフ卿が渡米の際アキタニヤに乘船して、『海の新聞』の完成を思ひたつたのだといふ話だが、一面彼の機敏な商才をも見ることが出來る。そこへ行くと、郵船や東洋汽船の船内新聞は貧弱なものだ、無線電信がない譯ではない、機械設備が出來ないのである。僅に

一頁のライノタイプと、見出しに用ひる少數の大活字とさへあれば、何處ででも新聞が發行される外國はうらやましい。日本でも最近モノタイプは出來たが、あゝ字母が多くてはトテモ物の役には立たぬ。お前の國にはこんな機械があるかと、どこの工場へ行つても自慢さうにライノタイプを見せびらかし、お愛想にチヨコ〳〵と機械を動かせて名刺のステロを作つてくれる。一體國字の數はいくらあるのか、むづかしい字を制限して先づ二三千、から答へると職工が表情澤山に目を丸くして見る。文部省の漢字制限も無論結構だが、國字の煩鎖がどれ位新聞の發達をさまたげてゐるか、外國へ行くと大抵の人がローマ字論者になるのも無理はない。

ヨーロツパ大陸の旅行中は巴里で發行する紐育ヘラルドとデリー・メールとが世界事情の通譯をしてくれた、英字新聞はないかと、よく町の辻のスタンドに立寄つてゐる旅のアメリカ婦人を見かけた、國の新聞が見たいといふ心持は海外にゐるとよくわかる。ルセルンのホテルへ夕暮ついて、バルコニイからすぐ下の湖水の廻廊橋をながめながら、「あゝハーデイングが死んだか、昨日は全快疑なしと新聞にあつたが、人の命はわからぬものだ」と妙にしんみりとしたこともある、加藤首相の逝去は南佛の海岸で知つた、わかりきつたことだが、これも新聞のおかげだつた。

○

アメリカの下級の新聞の標語は怪奇と戀愛と冒險とである。盛んに大きな活字を並べてこゝのところを狙つてゐる、代表的のものは紐育ではハーストのニユーヨーク・アメリカンやジヤーナルだが、しかし記事の敏速といひ、編輯の體裁といひ、なか〳〵よく出來てゐる、これではちよつと飛びつきたくなる。ハースト新聞の一特色で、よく皆の話題に上るものは、ブリスベーンの『今日』と題する斷片論文だ、少しばかり臭いところはあるが、あらゆる方面に知識をもつて、機智と才筆とで輕妙に片付けて行く、ブリスベーンの事を同業者に聞いて見ると、「あれは社會主義者だが、なか〳〵のやり手だ」とほめる。何萬弗とか、アメリカ一の月給取(新聞記者の)で、旅行には必ず料理人をつれて行き、行く先々でタイプラターをたゝいて、論文を電報する、それが翌日は全米のハースト系新聞に『今日』となつて現れるといふ、日本の新聞界では一寸うらやましがられる話である。このブリスベーン君について、加州大學の新聞科の學生がこんな氣焔を吐いた、「ブリスベーンの書いもたものなぞが受けるといつて、それでアメリカの知識程度を量られては困る、少くともニユーヨーク・タイムスを讀んで下さい」。

新聞が悪いか讀者が悪いかとはよく日本でもいふことであるが、それと同じやうにアメリカでも、どちらが持ちかけるのか釣出すのかセンセーショナルな新聞が作製される、大戰以來この傾向は一と際目立つて來て、犯罪中心の記事が歡迎されてゐる。けれども紐育のやうな、活動寫眞の畫看板を見る如き、刺戟の强い、息のつまるやうな都市にあつては、さういふ新聞の生れるといふことも自然であるやうに思はれる、この自然をせきとめるか、他にはけ口を作るか、新聞製作者の意圖のあるなきは別物として。とにかく米國は物凄い所だ、可愛ざかりの少女が、何と考へたか人工的に檢温器の水銀を極度に上らせて醫師を欺き、病源がどうしてもわからぬといふことになつて、名博士が續々立會ふといふやうな事件がある。判事の子供が子守に誘拐されて、まるで探偵小説を讀むやうな生きた事實が起る。それからヒユマン・フライといふ、日本の鳶職と輕業師の合の子みたいな職業があつて、ホテルの十何階といふ壁を縱に歩く、それが雪上りの寒い日のことで、中途で手がちぢかんで、下のペーブメントに逆落しに落ちて碎けた。さうかと思ふと、映畫會社に頼まれて、疾走するバスの屋根から高架電車のレールに飛移るところを實演中、之れも運惡く慘死した。白晝目ぬきの街で、巡査と泥棒とがピストルで渡合ふかと思ふと、自動車で逃げ出すホルド・アップを自動車で警官が追撃してピストルを亂射する、之を危險とも思はないで、野次馬がゾロ〳〵と追ひかけて見物してゐるのだ。ホルド・アップも多い日には九件もあつた、警視廳の無能を新聞が攻撃することは、東京と變りはない。年若い婦人が男子を殺害する事件も、年一年とふえてゐる。

日本に探偵小説の生れないのは生れる理由がないから生れないのだ、アメリカに探偵小説が出來るのは當然の事だからである。かうした社會事象が、いつしか所謂アメリカン・ジャーナリズムを生み、かうい生活環境にある都會人が刺戟の心理によつて、刺戟の追加を要求すること、アルコール中毒患者と同様なのであらう。新聞自身もまたか〳〵と注ぎこむものと見える。

次はヘッディングの問題だが、御覧の如く夕刊などは八段ぶつこ抜きの見出しは珍しくない、イギリスの新聞も近來漸次米化されて、なか〳〵大きな見出しを用ひてゐるが、アメリカほどにあ惡くはない。日本の大地震の際にはデリー・メール、デリー・エキスペレスいづれも八段抜きの見出しだつた、タイムスのみは例によつて一段で、沈着に構へてゐた。米國の新聞はスタンドに並べて賣る關係上、逸早く讀者の眼をひくやうにへ

ツデイングを大きくする必要がある。ズラリと耳を揃へて各種の新聞が並べられてゐる所は、恰もヘッディングの陳列會のやうで、一寸偉觀である。日本では新聞の大見出しは近來問題になつてゐるが、米國ではさほど氣に病む人もないようだ。アメリカ人の生活が、日本人の眼には忙々しいあの大活字を平氣で受け容れさせるらしい。これについて或る記者に質問すると、いや決して大き過ぎはしない、忙しい人々にはあれ位の見出しでなければ目につかない、これから益大きくなるよと答へて驚かした。しかしこのヘッディングも決して出鱈目にやつてゐる譯ではなく、チャンと米國の新聞學の中に入つてゐる、各社とも見出しの標準が定められて、一々形式の番號に依つて附けられてゐるのである。番外ともいふべき超最大の見出しは、米國人の感情を極度に刺戟した例のタイタニック號沈沒の時に用ひた見出しに因んで、タイタニック・ヘッドと稱してゐるが、之れとてもだん／＼せり出して、當時の見出しの倍大以上になつてゐる。たゞ米國新聞界にも一面の見識者があつて、かゝる傾向に追隨せず、依然として舊慣を墨守してゐるのがニューヨーク・タイムスである。タイムス紙がなかつたならば、アメリカン・ジャーナリズムは更に一層惡化したであらうといふ人もある。即ちタイムスのこの保守的態度が、新聞のハースト化を或る程度まで牽制し得たと觀る說である。

煩雜多忙な生活の中にあつて、三十幾頁かの尨大な新聞は、手に取つただけでもウンザリする。更にサンデー・ペーパーになると、各種のセクションを加へて百頁を越すかも知れないが、それが僅に日本金の拾錢であるのも不思議だ。不思議といへば一般讀者がこれだけの新聞紙に目を通すのだらうか、この質問にも某新聞の編輯長は平氣で答へて、「讀むものかい、ツウ・マチだ」といふ。讀者の讀まない新聞を作つて平氣なのだから驚く。

けれども頁數の多過ぎるといふ事は、當事者もよく知つてゐる。何とかしてその日のニュースを一瞥の下に讀者に知らしめる工風はないかと考案の結果が、ツリビューンやワオールドの『けふのニュースの目次』となつて現れた。次で最近ニューヨーク・ヘラルドは『新聞中の新聞』を採用して、その日の主なるニュースをコンサイズしたものを列べて、第一面に『小型の新聞』をはめ込むに至つた。そしてその發案の趣旨を述べて、アメリカの新聞を初めから終ひまで讀み盡すには少くても十數時間を要する。この忙しい世の中にそんな暇を持つ人はない。この小新聞ならば僅々數分で其日の出來事を知ることが出來る。何と重寶なものではないかといつてゐる。それならば何も不必要な大新聞を發行する必要なく、別に小新聞を出したらよ

さうに思へるがそれがさうは行かないところにいろ〱の理由がある。

かくして少より大に、大より小に、兩極端へ對角線的に歩みつゝあるのが、今日のアメリカの新聞である、それがどんな風に變つて行くかは、余程面白い問題だ。

○

米國新聞の形式的に俗惡なりと見える點、內容的には犯罪中心主義(社會記事)であるといふとは既に說いたが、之を以て全部のアメリカン・ジャーナリズを類推するとは早計といはねばならない、今日迄我が國に於て「黃色紙」なる名の下に總括されたアメリカン・ジャーナリズムには余程の訂正を要する。新聞の事はさておいて、一體アメリカといふ國は最も日本に近い西洋であるに拘らず、思想的には殆ど日本人には知られてゐない、日本でいふところのアメリカは實業家、外交官、乃至は軍事者の見たアメリカであり、でなければワシントン或はリンカーン時代の精神的米國である。米國人も日本を知らなければ日本人も米國を知らない、それが國際的に最も恐ろしいもののやうに思はれる。私はホンのアメリカの窓をのぞいたばかりで大きい事は言へないが、思想的に米國の底を流れつゝあるものが何であるかは微に感ぜられる、それがやがてアメリカン・ジャーナリズムの是正となるのである。

巨大な體軀の持主であるアメリカは、外面的にはそれと氣がつかないまでも實は今內心の悶えに苦しみぬいてゐるのである、物質文明の推積がいつとはなしに崩れかゝつて來て、それがいろ〱の社會現象となつてあらはれつゝある。男女の關係でいへば、あの離婚訴訟の無數に多い事はどうであらう、人間の生活が物的關係のみでは生きられないといふ反證であり、一面また夫婦間の貞操のいかに紊れてゐるかといふ證據にもなる、虐げられた若い婦人が男性に對する反逆から、『殺人』の刄を揮ふとも見逃すべからざる犯罪現象である、たとへば日本に於ける葉山事件のやうなものだ。自殺者の多いのも恐ろしいほどで一九二二年の全米自殺者の統計は一萬二千人、年々增加の傾向があるといはれてゐる。その內婦人の數が三分の一を占め「少女自殺俱樂部」といふものまで出來てゐる、なほ、特に目立つた現象は七十九人の所謂ミリヲネーヤが自ら生命を絕つてゐるとだ。さうしてこれからの自殺者は概して富裕な教養あり社會的地位のあるものが多く、職業的種別は大學生、大學教授、學校教師、宗教家、裁判官、辯護士、醫師、銀行會社重役等になつてゐる。また少年少女の自殺も近年著しく增加して、一九一九年から一九二〇年迄の四年間に約三千人に達し、平均年齡は

少年が十六歳、少女が十五歳である。自殺の原因としては、髪を斷髪にしたから(女)、ゴルフが出來なくなつたから(男)、氣車に乘り遅れたから(女)、世界の終末が近づいたから(男)、春着の苦勞から(女)、またしてもいやな冬が來るから(男)、といつたやうな、直截簡明な、文明病患者に得てあり勝な、幻影作用によるものも多いが、決してこればかりでは片付けられないやうである。

○

米國の新聞を見てゐると、以上の如き現象が續出して燦爛した科學文明の底に喘ぎ苦しむ人間の靈の動搖を見ない譯には行かない。私は紐育の新聞では、保守主義だといはれる教權的のタイムスをも偉徹するが、人間的のウオールドをも欣愛する。先に述べたヒユーマン・フライの墜死した時に、タイムスはその論説欄で、「あゝいふものを物見高く見物するとは、昔も昔希臘でに行はれた獸と人間との闘爭を見て喜ぶと同じ心理である、文明々々とはいふけれど、また〱野蠻の心が殘つてゐる」といふ意味のことを説いた。これは社會事象に對して一つの解説を與へて、讀者の判斷の向ふところを指示する新聞のやり方だ。然るにウオールドの方ではそのやり方を雜報で行かうとする、即ち社會事象の中に記者の心を求めて、そこに一個のストリーを抽き出すのである。之れは主觀的の材料選擇法で、摑み出したニュースの中に記者の心が躍動してゐるのである。たとへば或る日のウオールド紙に、「喜劇役者フレッド・ストレーンが戀に活きる」といふ記事がのつてゐたが、之れなぞは忙しい賑やかなソワ〱した米國の人々の心の底に、何か知らうつろがあつて、其物淋しさを宗教の力にたよらうとする心象を、一喜劇役者の行爲によつて代表せしめると共に、かういふ心的傾向をもつた讀者には、それが感激になり慰めになり、省察の糧ともなることを記者が知つてゐて掲載した記事なのである、いはゞ讀者に對する無言の教示である、教の字は感心しないが、今はかういつて置く。それから又、例のヒユーマン・フライの葬儀では、或る新聞は簡單に數行を費して、前日の現場の人だかりの多かつたに比べて、會葬者の寥々たるを記してゐたが、好奇の心と同情の心との相違を暗示したものと見てよい。

自分のいひたいところは、前記の一事例を以ても知られる如く、米國新聞の或ものの中には、社會記事の精神主義が漸次力を得つゝあるといふことだ。嚴密なる意味のニュースはさう毎日々々あるものではない、その多くはストリーの性質を帶びたものであると、彼等はいつてゐるが、ニュース萬能主義から轉じて、ストリー時代が來るのではなからうか。ストリーといへ

ば、彼等が用ひるヒユーマン・インテレスといふ言葉と關係が深い、萬人の心に觸れるストリーはヒユーマン・インテレスに裏附けられてゐなければならぬ、そしてその言葉の意味が嚴粛であつて、內心生活の基調をなすものでなくてはならぬ。私等のよくいふピリッと來るもの、シンミリとさせるもの、考へさせるもの、やがては內心の糧となるものである。ヒユーマン・インテレスといふ語が、好奇をそゝるもの、俗うけのするもの、ヤンヤといはせるものと解せられるとは甚だ殘念だ。

○

取材の態度に於ても彼等はこのやうに眞面目であるが、記事の正確といふことにもかなりの努力を拂つてゐる。「リポーターの想像力は異常な發達をなして、モウ之れ位で充分です、この上諸君の心掛けなければならぬとは正確といふことである」、こんな風の掲示を或る新聞社の編輯局で見かけたことがある。どこでもよくいふことで、世間では正確は石ころの如く道端に轉んでゐるのに、記者はそれをすら拾はうとせず、自分で不正確をこね廻すやうに考へてゐるが、そんなにたやすいものではない。アメリカの新聞が正確に苦勞し、また之を標語としてゐることを、米國式を罵る人の耳に入れて置く。それから次は記事の迅速であるが、今日アメリカ邊りで敏速などを今更らしくいふ者は一人もない、敏速時代は疾の昔に通り越して、敏速が普通になつてゐる。日本では電話の方が電信よりも新聞通信に重用されてゐるが、米國では料金の高い電話は殆ど使はない、電信の方が電話よりも早くて正確だ、日本はいつの時代になつたら通信機關が完備するのだらう。

○

「輿論」についても論議は盛んだ、一體新聞は輿論を代表するか、之れについてネーションのヴイラード君などは、米國の新聞は決して輿論を代表しない、寧ろ一般民心とは遠ざかつてゐるといつてゐる。また新聞にエヂターあつて、彼の意見が生地のまゝに現れたのは昔のことで、今日では主筆といふ代物は何社のクラーク同樣であつて、社主の意見をそのまゝに筆記したものが社說だといふ手嚴しいのもある。それは主としてハーストあたりに當つたのだらうが、ハースト系の新聞の中でも、桑港のコール紙はその買收に際して、新聞社は賣るが社論は賣らないと主筆が頑張つて、さういふ契約の下にハーストの手に入つたといふ話を聞いた。一方にまた「米國に輿論なし」といふ見方は、日本の如く新聞が中央集權的でなく、各州にそれぞれ立派な新聞があつて、各州とも利害關係を別にしてゐるから、たとへば移民問題でも關稅問題でも東部と西部とは意見を異にする、

だから組育だけの新聞を見てゐては米國全體の意見は分らぬといつた風の解釋だ。ミネソタかどこかの州で、シーウッドといふ男が議員に當選した、彼の名が新聞紙に現れるまでは、土地の人々は彼の生在すら知らず、寧ろ不思議に感じてゐたといふ、からいふ例を取つて、新聞必ずしも輿論を代表せず、も一つハイランの市長當選もそれだといふ人もある。こんな事なら、海の外まで行かないまでも、ザラにありさうな話だ。要するに一般人の眞に求めてゐるものをエヂトリアルが與へるか否かといふ問題であつて、雜報の内容を吟味しなければならぬと同樣、ただ形式が變つてゐるだけのことである。

　論說の話が出ると新聞の品格の話に移る。續いて賣れるか賣れないかいとふことになる、組育でも論說の評判のよいイヴニング・ポーストなぞはあまり賣れない。一八八〇年代のロンドン・タイムスは發行部數を三萬五千部に限り、それ以上は決して賣らない方針を取つたさうだ、今から考へると極めて妙な販賣政策を取つたものだが、新聞の方で賣らないといつても、讀者の方が承知しなかつたと見えて、販賣店では一日を朝、晝、夜に三分してお得意先に廻讀を願つたといふ。よい新聞が賣れないといふ理由はなく、よい意見ならばなるべく多くの人に讀ませなければ趣旨が通ぜぬ譯であるから、今日賣れなくてもよい新聞を作つてゐる者はない筈だ。けれども何處へ行つても相當の知識をもつた人が、「あの新聞は立派な新聞であるが餘り賣れない、この新聞は大變賣れるが輿論的にはトント勢力がない」といふやうなことを聞かせる、それは一見理屈には叶つてゐるやうで、實はとんだ間違ひである、よく賣れる新聞ではあるが、輿論的には勢力のないものは或はあり得るであらう、しかし立派な新聞であつて、而も賣れないといふのは、その立派といふ意味が、單に其の新聞の論說なら論說といふものだけを指していふので、それのみを以て立派とかよいとかの冠詞を全體に附する譯には行かない、今日科學的に製作さゝる新聞は、あらゆる方面に於てよいものでなければならぬ、單に部分的によいものはヤハリ不具者である、我々は『よい新聞』といふ概念の誤謬を正だす必要がある。

○

　記者を教育すべきか、讀者を教育すべきか、無論兩方とも教育の必要があらう、けれども世間は主として記者の無學を攻め且つ笑ふやうである。どういふ種類の人が得て記者を無學扱ひにするかといふと、主として專門家に多い、自分の知つた範圍の學問を記者が知つてゐないといふのでヤツキになる、如何にも記者は淺學淺才で、間違つたことを書く場合もあらうが、それは御自分が書齋の中のことしか知らないで、世間的には全く無智であることを棚に上げての攻擊で、聊か片手落のきらひがある。新聞社に若しそのやうな學者を記者として雇うて置くとしたらどうであらう、さぞトンチンカンの三面記事なぞが出來て、世間は一層記者の無學を笑ふかも知れぬ。「あんな記者をよこしては困る、モ少し專門知識をもつた記者をよこして貰ひた

い」といふ注文もあるが、新聞記者の分業化は或る程度までのもので、さう〳〵澤山の專門家を配置する譯には行かない、どこの國へ行つたつてさうである、否寧ろ分業よりも綜合的になりつゝある、あらゆる部門を潜つたものが、一つの纒つた完全た記者になるのだ。それからよく外國にはそんな記者はゐないといつて日本の記者の無識を笑ふ者があるが、これも外國心醉の知つたかぶりのいふことで、ほんたうではない。日本の記者も無識だらうが、外國にも所謂無識がかなりゐる、現に日本に關する知識なぞはゼロなのがある、だからといつて、それで新聞記者の値打がゼロだといふ譯にはゆかない、新聞記者の大切なところはモツト外にあるんだから。ウイスコンシン大學の新聞學科長ブレヤー氏は「米國の新聞記者が外國事情に通曉しないことは、ワシントン會議の時に曝露された、警察種ばかり扱つてゐて勉强をするひまのないものに外國の事情の分るわけはない、こんな缺陷は漸次新聞科出身が補ふだらう」といつてゐるが、この點は日本でも同感で、記者の修養は必要であり、知つてよい學問は無論修めてゐる方がよい。所謂昔の探訪上りよりも、基礎學を修めた學校出の人の方が知識的にはすぐれて居るとはいふまでもないが、それだけでは新聞記者はつとまらぬのである。殆ど今の記者の七分方までは專門學校出身で、日本も漸次記者の內容が變つて行きつゝあるから、誰かのいふやうにさう悲觀したものでもない。しかし新聞記者が文字通りに多忙であるために、修養を怠るべく餘儀なくされてゐることは事實で、英國でも大學出の記者のことを『蜜柑の搾りかす』(スキーズド・オレーンヂ)といつて、たいていは空つぽになると嘆いてゐる。

記者教育について、最も組織的にやつてゐるのは米國で、生徒の多いのも米國だらう、大抵の大學にはみな新聞科がある、そして小新聞を發行して、學校を出ない前から一かどの記者面をしてゐる、ちよつと可愛いものだ。コロンビヤの新聞科では絕對に新聞を發行させない、たゞ新聞編輯を模型的にやらせるだけであるが、この方が却つて成績がよいさうだ。新聞學圖書室の完備してゐるのにも感心したが、編輯室には實習當日に限つて、アソシエーテッド・プレス。ユナイテッド・プレス。インターナショナル・ニューヌス・サーヴイース。タイムスなどの各社からニュースをチエッカーで受けることになつてゐて、なかなかの大仕掛だ。修業年限は二個年、初め一年は理論、二年目から實習に移り、新聞學士になりたいものは今一年研究しなければならぬ。現在の生徒數が五十名、內二十四名は女子である、婦人記者志望者のためには、別に婦人ページを設けて練習させ關係記事なぞ取りにセントラル・パークへやらせられてゐた。アメリカの婦人記者は日本とちがひ、普通の記者と同じやうにやはり朝の二時頃まで夜勤もする、婦人が記者に適するかなかはなほ疑問とされてゐるが、志望者は殖えるさうだ。卒業生の賣れ口は、先づその三分の二はすぐ就職する。我が國でも大學にこの眞似事の新聞講座があるが、之れは追々盛んにしなければばなるまい。

回顧四十年

馬場孤蝶

（一）

教科書以外の書物と云つたところで、少年の時分のことだから、もとより娯樂の爲めの讀書であるのは勿論だが、さういふ書物を何時頃から讀みだしたものだか、時々大凡のところでも思ひ出してみやうとするけれども、何うもまるで記憶がない。しかし、推定して行けば、大抵明治十四、五年頃からのことだらう位には考へられぬことはない。そこで、それは先づそれにして置いて、一體何んなものから讀みはじめたものであつたらうか。

今日のやうな少年向きの單行ものとか、雜誌などのある時代でなかつたことは勿論であるのだから、大人の讀むもの——と云つたところで、少年が讀むのだから、小說とか、それに類似の物語り本に限るのだが——を讀むより外しかたがなかつたのだ。

その時分には、所謂る大新聞と小新聞といふものの區別が形の上に判然と表はれてゐた。大　聞——東京日々、郵便報知、朝野など——は四號活字で殆ど振假名の部分はなく、論說が全く主要部であり、次ぎには、法令とか、政治記事などが重要事項として、取り扱はれて居たといふ風で、挿繪などは絶對にない、全くの政治新聞と云つてい丶位の體裁のものであつたが、小新聞の方は、總振假名の五號で刷つてあつて、續き物——小說と云へば云へるもの——のなかには、極く俗な挿繪があり、雜報——今でいふ社會記事——には、市井の出來事が幾分の文飾を加へて書いてあつて、全體の振り合ひから見れば、何うしても娯樂的の讀み物であつた。所で、僕のうちなどへは繪入新聞——これが一つの新聞の名であつたのだから、唯これだけでも、當時の大新聞と小新聞との差違の一端が窺へるだらうと思ふ——といふのがはひつて居た。僕は何うもそれなどから讀み始めて、娯樂的の讀書の習慣にはひつたのではなからうかと

思ふ。

その時分には、古い木版ものを重ねて高くしよつて、家庭を廻はつて歩るく貸本屋があつたので、さういふ貸本屋の本を何時の間にか讀みだした。

父は決して學者と云ひ得るほどの讀書人ではなかつたのだが、若い時分雜書はかなり讀んだことがあるやうであり、母も假名だけしきや讀めなかたのだが、それでも古い小說は少し讀んでゐたやうであつた。僕には直ぐ上に兄があつてこれは十九歲位で死んだのだが、これが貸本屋からいろ／＼借りて讀んだ。父も、母も、さういふ種類の本を讀むことは反對しないどころではなく、すべて書物を讀むといふことはいゝ事で、さういふ小說類を讀むのでもそれはそれで相當の益はあるのだと考へてゐたらしく、時々は斯ういふ本が面白いとか、これ／＼の本を昔讀んだことがあるとかいふやうな話さへする位であつたのだから僕等のうちでは、讀書の自由だけは十分にあつた。其所で、僕も何時とはなしに、兄の借りた貸本を讀みだしたのだ。兄は納が好きであつたからかとも思ふのだが、『三國志』『水滸傳』『八犬傳』、『弓張月』といふやうなものがうちへ入つて來たので、僕にさういふものをぼつ／＼讀んだやうに思ふ。一九だの、三馬のものもはひつて來たのだらうと思ふのだが、その時分それを讀んだといふ覺えはない。恐らくは讀みかけても、少年にはその面白みが解らなかつたので、讀まずにしまつたのだらうかとも思ふ。兄の死後、遺物のなかから活字本の『滑稽和合人』を發見して、讀んで大笑をしたことは、それから何うしても三四年後のことであつたらう。

因みに云うが、僕の此の兄は、僕に小說を讀む機緣をつくつて吳れたのみならず、本鄕の若竹へ度々僕をつれて行つてくれたのも、此の若い兄であつた。僕のやうな三文文士になることにさへ、何等かの家庭的感化が必要であるといふのであるのならさういふ感化の可なりの部分をば、僕は此の兄から受けたものと思はなければならぬ。

兄が死んでから後、少しの間は、僕自身が貸本屋から本を借りて讀んだやうに思ふ。馬琴の『三七全傳南柯夢』を借りたことだけは確に覺えてゐる。

（二）

さて、その時分からは、活版本を買つて讀みだしたのだが、それらは大抵古い本の飜刻であつた。日本紙へ活版で刷つて、色刷の表紙をつけたもので、半紙版のものもあれば、四六版位の大きさのものもあつた。中には、原版の方の繪を縮寫か何かし

ていれた立派な飜刻なものであつた。『八犬傳』『南柯夢』などが、さういふ本で出て居たのだが、その當時の代價では一冊五十錢にはついてゐなかつたと思うのであるが、今あんなものを出せば、一冊何うしても一圓位にはなるであらう。さし繪だけでも『水滸傳』『三國志』などの飜刻は立派なものであつた。前者の口繪は芳年であつた。『弓張月』は四六版位のものであつたが、繪は芳年門下の年恒であつた。その外、三十間堀の榮泉社といふのから、「古今實錄」といふ叢書が出た。半紙版の一冊二十丁（頁にすれば四十頁）餘位の本で、これは、『大岡政談』とか、『伊達顯秘錄』とか、『天草軍記』とか、『箱崎文庫』といふやうな講釋の種本であつたやうである。その外に、『時代世話劇種本』といふ叢書もあつた。これは、『忠信藏』、『妹背山』、『伊賀越乘掛合羽』といふやうな義太夫の丸本の飜刻で、色刷りの表紙の裏へ、役々に當時の役者をあてたものが刷つてあつた。なかにもさし繪がある。繪は落合芳幾の筆になつたものであつた。これも半紙版の本であつた。その外に『やまと文庫』と云つて、義太夫の丸本が合冊になつて出たことを覺えて居る。これは四六版の洋紙の可なり厚い本であつた。

要するに、明治十六年位から明治二十一、二年位までは、出版界では、飜刻が大勢力をしめて居つたと云つて宜からう。

明治十五、六年頃には、創作とか、新刊とかいふものは全く無かつたかといふに、全く無いのではなかつたが、その數は僅であつたのみならず、その質に於ても、前代――德川時代のものとは比較にならぬものであつたので、その方から云つても讀書界の渇を醫するためには、前代の書物を飜刻するより外はなかつたと同時に、當時次第に發達しかけて居た印刷界の印刷能力の方に十分の餘裕があつた爲めもあつたらうと思はれる。

尙それ以外に、中學以上の文科的教科書は大抵漢文であつたので、それ等の需要を滿たす爲めにも、前代の木版物を活版でする必要があつたことは勿論である。詰まり、庶民が前代のやうに本とあまり關係のない生活は送くつて居られなくなつたところが、その需要をみたすには前代に印刷した本ではトテモ足りないので、その飜刻を急くといふ譯であつたのだと思ふ。

今その時分の本を出してみるのに、總振假名つきのものであるに拘はらず、本文は勿論のこと、振假名にも、誤植が殆どないと云つてい丶位だ。何と云つても當時はまだ印刷業が今日のやうな大商業になつて居なかつたので、文字の素養の幾らかあるやうな人間でなければ、活版工には採らないといふやうな風で熟練工のみを使つて居られたのであらうと思ふ。それから又、何と云つても、活版所も今日のやうな大規模のものはなかつた

のであるから、一體にさう忙がしくはなかつたので、自然仕事が丁寧にし得られたのであらうと思ふ。

斯ういふところにも、近代的工業の發達の狀態があり／＼と窺はれるのは、聊か興味ある事柄である。

(三)

ところで、その時分新作をした作者は何ういふ人々で、且何ういふ風な作物を公にしたかといふことも一瞥する必要であらうと思ふ。

德川時代に於て既に作物を公にしたことがあるとか、さなくとも德川時代の作家の作風を多分に傳へて居るとかいふやうな人々が可なりあつたらうと思ふのだが、吾々の聞いたところでは、その代表者をして、染崎延房、山々亭有人、假名垣魯文の三氏を數へるのが至當であらうと思ふ。

染崎氏は爲永春水の弟子で、二代目か三代目の春水に當たる人であつたらうと思はるゝ。『繪入新聞』の社員であつたやうである。春水の『いろは文庫』は『梅曆』よりも廣く讀まれたやうに思はれるし、『梅曆』よりも作風その他がこみ入つて居ることは明であるのだが、饗庭篁村氏の考證では、『いろは文庫』は春水自身の作ではなくして、染崎氏の代作だといふのである。『いろは文庫』は今日のやうに活版で刷れば太して長いものではないのだが、あれでも木版物としては可なりの長篇であつたらうと思はれるので或はその一部分などは、明治時代にはひつてからではないにしても、明治に近い時代に書かれたものかも知れぬと思はれる。さうすると、饗庭氏の說のやうに『いろは文庫』は全部染崎氏の筆になれるものではなかつたにしても、終りに近い部分位は崎染氏の作であつたことは確かも知れないであらう。それはとにかく、明治十年代になつては、染崎氏の名で公にされた作物はもうなかつたやうに思ふ。或は『繪入新聞』に出た讀物即ち准小說のなかに、染崎氏の筆になつたものが幾つかあつたのだけれども、作者の名が表はして無かつたか、又は表してあつても僕などは氣がつかなかつたかで、僕などは知らずにしまつたのであるかも知れぬのである。

山々亭有人氏のものも、僕などは記憶してない。氏が後になつて條野採菊の名で書かれたものゝ方を記憶して居る位である。

猫々道人假名垣氏にまとまつた小說といふやうな作があつたか何うだか、今一寸それを何れとも斷定し得るだけの材料が手近に出てゐないので、何ともいふことはできないが、何うもさう太したものがあつたらうとは思はれない。假名垣氏は、滑稽

文とか、引札といふやうな短文を書かせては、全く獨步の雄であつた。殊に引札に至つては、こと／＼く稀有の名文であつたと傳へられるのであるが、その性質上皆散逸してしまつて、後に傳はらぬのは、好事の士の痛惜措かざるところであらう。

明治十年前後の短文家としては、成島柳北氏を數へざるを得ないのであるが、氏にも後にまで感化を及ぼすといふやうな作物のなかつたことは確である。

此の時代の文藝的作品といふ點から云へば、よし、それは雜文といふ形式のものであつたとして、如上の四氏のものを擧げるより外はないにしても、形式の上からいへば、又長さの方からもこれを云へば、小說と云はなければならぬ作品をとにかく新作した人々が外に數氏あつたにはあつたのである。

兄の借りた貸本を讀んだ時代のことであるが、その時分位に出た新しい草双紙式の小說を讀んだことを記憶する。一つは『冠松眞土夜嵐』といふ神奈川縣の眞土村といふに起つた農民騷動のことを書いた一編三册續きで、三編位になつてゐるもので作者の名は竹田某とあつたかと思ふ。それから、も一つは河北默阿彌の『霜夜鐘十字辻』であつて、これは一編が三册づゝで五編位にはなつて居たかと思ふのだが、兩方ともさし繪は芳年であつた。草双紙と云つたところで、總假名ではなく、版下流の字ではあつたか、大抵字でそれに振假名がついて居たと思ふ。草双紙型の本では、これ等などが最後のものではなかつたのではあるまいか。明治十六年頃の赤本的小說の作者としては伊東橋塘を先づ擧げなければならぬであらう。敢て優れたる作家といふ意味ではないが、とにかく作物の多かつた點に於て、沿革的の觀方に於ては、その名を逸する譯に行かぬと思ふのだ。その作は大抵七五調で書いた通俗小說であつた。相政の名で通つてゐた相模屋政五郎の傳記とも見えるべき『花春時相政』日本橋邊の商人某――吉安とか云つた――が同じく日本橋の藝者――歌吉といつたかと思ふ――と情死したことを書いた『日本橋浮名歌妓』、それから、五明樓玉輔の續き話を書いた『寫眞の仇討』といふやうな作があつた。これ等は皆半紙半切位の日本紙の本であつた。柳亭燕枝の續き話を書いた『島衛沖津白浪』、春風亭柳枝の續き話を書いた『唐模樣倭撫子』、何れも伊東氏の名で出たものであるが、これは半紙版の日本紙の本であつた。

此の時代に於て、注目すべき出版界の現象は所謂る小新聞の擡頭である。所謂る繪入新聞の發展である。自由黨の結黨以後、その主義の宣傳機關として、『自由新聞』は大新聞として有識社會に對してアツピールする用に供せらるゝと共に、別に民

衆に訴へる機關として、『自由之燈』なる繪入りの小新聞を其後行することゝなり、それより少し後になつて、『朝野新聞』と何れだけの關係になつて居たものかそれは知らぬが、『繪入朝野新聞』といふのが、朝野新聞社の向ふ側――尾張町の北角、震災前山崎洋服店になつて居たところ――から發行せらるゝに至つた。『改進新聞』の創刊も大凡それに近い頃のことゝ見て宜しいであらう。これ等の小新聞は、大新聞では無かつたに相違ないが、それでもそれ以前の小新聞即ち繪入りの新聞よりはその體裁内容とも、ずつと進步したものであつたのであつたのである。だから、從來の小新聞に比すればこれは謂はば中新聞ともいふべきもので、小新聞が大新聞の領地へ一步踏み入りかけたものと見ることができるであらう。思うに、これ等の小新聞即ち繪入りの新聞は大新聞より比較的發行部數などは多くつて、營業としては成功の望があつたので、次第に今日のやうな新聞にまで發達してしまつたのであらう。大阪の『朝日』『毎日』といふやうな新聞は大新聞でありながら、始めから小新聞の形式を採つたのだらうかと思ふ。

『自由之燈』は、續き物に芳年門下の芳宗の筆になる可なり大きな繪を入れてゐた。

沿革的に云へば、形式では小新聞――繪入りの新聞――が大新聞を侵略して現今の如き體裁の一般新聞を作りあげた譯である。

（四）

所で、『自由之燈』――直きに『繪入自由新聞』になつたかと思ふ――には花笠文亨（渡邊氏）の小說が幾つか出たと思ふ。『身を知る雨』『濱の松風』とかいふやうな續き物が出たことを覺えてゐるのだが、作者の署名は無かつたかも知れぬが、大抵渡邊氏の作であつたらうと思ふ。宮崎夢柳氏の『鬼啾々』といふやうな佛蘭西大革命の時のことを書いた小說やうのものも『自由之燈』若くは『繪入自由新聞』に出て居た。

さて、こゝまで擧げて來た作家も作物も、そのうちの柳北氏などを除けば、德川時代の戲作家及びその作物とさうたした差違のあるものではないのであるが、明治十六、七年頃からは、もつとずつと知識階級即ち學者と云ひ得る人々の筆から小說若くはそれに類似の作品が世に問はれることになつたのである。さういふ作品の早いものゝ一例としては、坂崎紫瀾氏の『汗血千里駒』を擧げるべきであらうと思ふ。これは、幕末の有志坂本龍馬の外傳と見るべきものであつて、土陽新聞か何か新聞の續き物で出たものを、更に東京で、半紙半切位の日本紙刷の二冊

本にしたものであつた。但し、作そのもの丶傾向としては、その時分から萌芽しかけて居た明治前期の新文學にさしての影響を及ぼし得べき性質でなかつたことはいふまでもあるまい。

けれども、學者の著作に就て書く前に、一般讀書界の知識程度若くは傾向を大凡指示するものとして、飜譯書の小流行を錄して置くのが宜しからうと思ふ。

井上勤氏の飜譯が一番多かつたやうに記憶する。ジユール・ヴエルヌの『空中旅行』、『海底旅行』、ラムの『沙翁物語』——これは『マアチヤント・オブ・ヴエニス』が『人肉質入裁判』といふ名で出で——それから續いて袖珍本で數種の劇が物語として譯されてゐた。外には『狐の裁判』と『亞剌比亞物語』（アラビアン・ナイト）が井上氏によつて譯されてゐた。その外、牛山某氏のスコツトの『アイヴァンホオ』の抄譯が出てゐたと思ふ。

その外、ベカンフイールドのものや、リツトンのものなど一二飜譯されたやうにも思うのだが、さしかゝつて、判然といふことのできるまでの記憶がない。

唯こゝで一言して置き度いことは、これ等の飜譯書は皆四六版の洋紙刷りのものであつたことである。

科學、政治、などの書は既に洋紙になつてゐたのだが、文學もの丶書が洋紙に刷らるゝやうになつたのは、これ等の飜譯書から追々一般に及ぼしたものとも見られよう。

斷はつて置くが、これ等の本は出版年月は、多分伊東橋塘の作品その他當時でさへ舊派と見なさざるを得なかつた作者の著作の出版年月といろ〳〵に入り組んで居るので、年月だけで劃然と區別ができるといふ譯には行かなからう思ふのだ。

例へば、速記をもとにして作つたもの、或は速記そのまゝのものといふやうな小說は、その內容に於てはさまでの意味はなかつたにしても、速記といふ割合に新しい技術の一般的應用といふ謂はば新しい著作方法によつたものであるといふ性質上、從來の著作方法によれるものより幾らか後になつて出たのは當然であらう。

桃川如燕の講談を速記か筆記かしたものに基いて書いたらしい『曉星五郎』——執筆者は伊藤橋塘——は、前記の燕枝の續き話、柳枝の續き話によつて同じ人の書いた『沖津白浪』『倭撫子』などよりは少し後で出たもの丶やうに思ふ。若林玵藏氏速記の圓朝の『牡丹燈籠』が出たのはまたそれよりも少し後かと思ふのだが、若しそれが前後して居つたにしても、年月の違ひは何れにしてもいふに足る程の隔りはないに違ひない。圓朝の『松操美人生埋』や、『業平文次』の出たのは、そのまた少し後

であつたらう。『松の操』は本を見なかつたが、『業平文次』と『曉星五郎』とは半紙判の本で幾冊にも分冊されて出版された。『牡丹燈籠』も分冊で逐次に刊行された點は前二者と同じだが、型は半紙半切位の大きさであつた。何れも半紙本のことであるから、厚くなることが印刷能力などの關係からも不便であつたのと、代價――當時一般のかういふ娛樂的の書は精々一冊二十錢位なものであつたらう――の關係などでさういふ風に分冊することになつたものであらう、本の體裁から云へば、『曉星五郎』のは、表紙挿繪等に、その前の赤本の體裁が――色刷りではなかつたけれども――まだ殘つて居り、『牡丹燈籠』にも表紙は餘程單純になつてゐたとはいへ、幾らか赤本だちのところがなかの挿繪の風に殘つて居たのだが『業平文次』になると、體裁がもう一層單純で裝飾がずつと減つて居つたやうに思ふ。

（五）

坪内逍遙氏の春の家朧の名で公にせられた『書生形氣』、『内地雜居未來之夢』の二小說は確に明治前期の新興文學――硯友社の勃興から明治二十五六年位迄の時代のものを指してさういふことにして――に對しての曉鐘であつたものと見るべきであらうが、その出版年月は前記の舊傾向の出版物の勢のまだ衰へぬ最中であつたらうかと思ふ。少くとも本の體裁は半紙全紙の分冊もので、圓朝の速記本の系統に屬するものであつた。その發刊が何うしても明治十七年より後ではなかつたことだけは確である。

坪内氏の『書生形氣』には、所謂る文政、天保時代の傳奇的趣向が全く排けられて居たといふのではないが、殺人とか、强盜とかいふが如き日常生活にはさう度々は起らない事件を趣向のなかから全く排除したる點や、學生としての日常生活を可なり如實に描いた點や、それまでの普通の小說とは異なつて、作中の人物をば何れを主人公とは定め難いといふ描法を執つて居た點や、作中の人物にはそれぞれ幾分かのモデルがあつた點などで、當時の作物としては確に異彩あるものであつたと共に、從つて可なり新味のあるものであつたことは疑いない。それで、さういふ新味のある點、即ち謂はば幾分の前期的寫實傾向が、その後に表はれた諸小說――例せば、硯友社同人の初期の作物など――に多大の影響を與へたことは拒み難いであらう。

氏の小說はさういふ風に。小說の主義、技巧の點に於て著るしき影響を當時の文壇に及ぼしたことは疑ひを容れざるところであると共に、坪内氏の如き當時の最高學府に於て修學を了へ

た謂はば學者がまだ當時では何處までも戯作と考へられてゐた小說なるものを書いたといふ事實だけが、讀書界——それは今日の讀書界に比べては霄壤も啻ならざる位極く狹いものであつたことはいふまでもないが——に及ぼした影響は決して輕視するを得ないものであつた。

當時の帝國大學は名實共に確に最高學府であつたし、その課程を卒へた人士は、當時の智識界の水準から云へば、確に學士であり、學者であつた。これは世間もさう思つてをり、當人等もさう任じてゐた。男は十五歳からはもう大人として扱はるゝことになつてゐた封建の時代を去ることまださう遠くはなかつたので、當時二十四五にでもなるやうな若者は對世間的にも、今日の同じ年齢の人々よりずつと大人者びてゐたので、世間から如上のやうに厚く遇されることがとさう可笑しくはなかつたのだ。當時要路にゐた人々も大抵五十以下であつたのを見ても、その時代が何の方面に於ても若者の世であつたことは想見するに難くはないであらう。

さて、さういふ風に世間から尊重せらるべき位地にゐた若き學者が小說を書きだしたのであるから、小說といふものに對する讀書界の考に多少の影響を及ぼすに至るのは自然の數であつた。平俗な言葉を以つて之を言へば、あゝいふ學者ですら小說を本氣になつて書くのであつて見れば、小說なるものは決して輕んずべきものでなく、從つて、相當學識ある者が小說を書いても決して自ら恥づるに及ばぬ譯である、といふやうな考が讀書界に起されたものと見て宜しからうと思ふ。

坪内氏が『小說神髓』を著して、氏の小說に對する主義を闡明せられたのも、小說の著作後さう年月を隔てたことではなかつたと思ふのであるが、これは當時生れ出ようとしてゐた若き文學者に取つての小說作法教科書の役を勤めたことは疑ひを容れざるところであらう。

卽、作家としての坪内氏の出現は、後の青年文士の出現に對しては、春の青草をはぐくむ慈雨の觀があつた。山雨の來らんとするに先だつて、樓に滿つる凉風の趣があつたと云つて宜しいであらう。

作風その他の點に於て、坪内氏の先蹤を追つた硯友社の勃興は、坪内氏の諸作の刊行に對しては、殆どその直後と云ひ得る位までに、年月に於て相接してゐるのではあるが、硯友社の勃興を敍するに先だつて、便宜上、所謂る學者の筆になれる小說——これは坪内氏の場合とは事かはつて、何れも素人わざと見ざるを得ざるものではあつたけれども——に就て、數言を費して置かうと思ふ。

先づ思ひ出づるのは矢野龍溪（文雄）氏の『經國美談』である。これは、古希臘のテエベがスパルタと戰つて、民主國が專制國に勝つといふ傳奇であつて、小說と云はんには餘まりに專を語るのが主だつた作物であつた。しかし、作中の大立者たる民主主義の政治家エパミノンダスの言行などが、當時の民主主義的傾向の思想を持つてゐた青年等の人氣に投じて、可なりに廣く讀まれたものであつた。本の體裁は四六版の洋紙で、挿繪の有無は記憶せぬが、あつたにしてもさう多くはなかつたらうと思ふ。

末廣鐵腸（重恭）氏の、所謂る政治小說『雪中梅』『花間鶯』の二連小說が出たのは、少し遲くなつてであつて、多分明治十九年か二十年であつたと思ふ。國野基といふ民間政治家が、政府の壓制と戰つて、遂に立憲の時代を來して、議會の大立者となるといつたやうな趣向のものであつた。作中の人物にも幾分のモデルがあるやうに想像せしむるやうな描法を用ゐたものであつたので、可なり讀書界の人氣を集めたと傳へられた。二十年頃になつての末廣氏の洋行費が此の二連小說の印稅から出たといふ巷說はあつたもの丶四六版の洋紙で一册精々一圓にはならぬ定價の本であつたのだから、何れ程よく賣れたところで——當時の本の賣れ高で見て——！とても、著者にそれほどの收入はなかつたことは明である。此の二連小說は四號活字で刷つてあつたやうに思ふ。

文章に於ては確に明治の文章であり、題材に於ても、確にその時代のものではあつたのだが、技巧に於て何等の新味の殆どないものであつたので、純文學史的に之を見れば、さまでの價値のあるものではなかつた。唯題材の點から云へば、須藤南翠氏が『改進新聞』に書いた所謂る政治小說に幾分の影響を及ぼし、作に對する暗示を與へたことなどはあらうかと思はれるまで丶ある。

東海散士（芝四朗）氏の『佳人之奇遇』は何うしても明治二十年より早くはなかつたらうと思ふ。漢文崩しの如何にも華麗な文章が讀書界の人氣を呼んだ。これは、半紙へ四號活字で刷つた裝飾の少しもないものであつた。何年もの間に亘つてぼつ〱と卷を逐つて出版されたのであるが、遂に未完に終はつたかと思ふ。

これも元より傳奇的の作であつて、純文學としては價値を認めがたいものでもあつたことは勿論である。

須藤南翠氏が『改進新聞』へ連載した長篇小說は、その水準に於ては矢張り『雪中梅』程度のものと見て宜しからうと思ふ。趣向に於ても、文章に於ても、末廣氏の二連小說よりは、

小說としての資格か幾らか多く備はつたものではあつたが、要するに矢張り事を語るのが主になつて居つて、作中の人物の心理とか、場面の描寫などに注意を拂うといふやうな傾はまだ少しも見えてゐなかつた。須藤氏のさういふ小說のなかには、ディッケンスの『オリヴアー・ツイスト』の飜案などもあつたやうに思うのだが、それとても、原作とは餘程違つて、話の筋を運ぶのが主になつて居たやうである。

これ等の諸作は皆舊時代の傳奇の臭味の多分に殘つたものではあるが、それでも尙、題材とか、文章などの點では、その時代の色彩を可なりにもつて居つたので、舊き傳奇には飽きはてゝ、何等か幾分でも新しいものを、前時代の系統を追つたものとはとにかく幾分でもかはつたものを求めてゐた讀書界からは可なりに歡迎されたのである。何時の時代でも俗衆には餘まり新しくては迎へられない。實體は古くつて、外觀だけが新しく見えるといふやうなものが一番一般には迎へられるものである。前記の諸作の迎へられたのは善く此の間の消息を語るものと云はなければならぬ。

社會何れの方面を問はず、新しい改革が起る場合には、新しいものと、その前からあつた制度などとが、重なり合ふやうになつて、新しい物と古い物とがしばらくは幷存して行くものであるが、思想とか藝術とかいふものゝ世界にあつては、尙一層さういふ傾向が常であるのだから、明治文學の初期の新興時代にあつても矢張その通りで、坪內氏に始まつたと見做し得べき當時での新興文學の進行卽ち硯友社の諸氏その他の活動などが可なり顯著に始まりだした時代に於てさへも、前記の如き舊套を脫しきらざる文學が可なりに並存して居たことは已むを得ない現象である。

來るべき財界の豫測

大正十三年の經濟界

河津暹

客あり予輩に問ふに來年の我國經濟社會の趨勢を以てしたことがあつた、學者は過去を説明し現在に及ぶことはあるが、未來を豫言するものではない、豫言することが出來ないからである、豫言することを試みる場合には夥多の條件をつけて此等の條件が具備したならばかくの如かるべしとはいふが、條件をつければつける丈其の答は精確にはなるであらうが其條件にして發顯するや否やは不明である限りは其解答が如何程論理的であつた所が其の解答は實は價値が少いのである、さもなくば極めて悲觀的態度で問題に對するのである、それが豫言者としては賢明な態度であるからである、何れにしても學者としては豫言者として公衆の前に顯はるゝことは賢き遣方ではないから實は言を左右に托して解答を避けたのであるが客はさる者その位のことでは退却しない問題を小さく割つて背後から攻め立てられるから予輩の如きデモ學者では先輩と同じような嚴正賢明な態度を持することを得なくつい〳〵若干の解答をして了つたのである、今又改造社から同樣の問を以て予輩を苦しめんとしてゐる濡れぬ先なら露をもいとへ濡れて仕舞へばしかたがないから客との問答を記憶を辿りつゝ之を筆にして敢て改造社の請に應じたのである、勿論豫言のことであるから當るか當らぬかは予輩は之に對して責任は負はぬ積りである。

（問）來年は景氣が恢復するか、それとも恐慌でも起つて經濟社會は更に苦まねばならぬであらうか。

(答) 豫輩の見る所では來年は先づ不景氣で始終するであらうが、恐慌等の大變は起るまい。元來昨年から本年にかけて不景氣の頂上に達してゐたのであるから、徐ろに景氣が恢復しなければならぬ理であつた、然るに本年の春一寸景氣が佳くなつたものであるから、そら恢復の曙光が見えたなどと浮調子になりかけたのである、豫輩等は其れは中間景氣であるから油斷はしてはならぬと警告してゐたのである、その景氣も中間景氣であつて再び暗雲天に漲らうとしてゐたようであつた、中間景氣に由つて邪魔をされた嫌はあつたが未曾有の震火災がなくつて經濟社會が順調に動いて往つたならば來年の夏頃には或は眞の恢復の曙光が見ゆるかも知れないと思つてゐた、然るに天災の爲に經濟社會が大打撃を受けた以上は當分は不景氣より恢復することは出來まい、其の間多少景氣がよく見えるようなことがあるかも知れないが、それは例の中間景氣であつて眞の景氣ではない、故に我等は當分は不景氣の雰氣分の裡にゐなければならない、我方の勇猛心によりて此方の雲霧を拂ひ除けることが出來れば早く眞の景氣が恢復することが出來る筈ではあるが、打撃が可成激しいようであるから大體に於て明年中は景氣は恢復することはあるまい、尤も復興の爲にこゝに種々なる方面の貨物についてはこゝに需要が生じた譯であるから、其の需要に應ずることの出來る供給地では案外景氣がよいことはあるかも知れないが一方では東京等の大消費地の購買力は大に減じたのであるから奢侈品を初め其購買力を目的にしてゐる生產地では例年に比して更に窮境に立たねばならない、現に西陣等の絹織物の生產地では今日既に困つてゐるとのことである、東京附近でも八王子邊りでも絹織物の市場であるから一時は頗る困つたといふことであるが川越あたりは綿織物の生產地であるから却つて景氣が宜しいとのことである、かく土地によりては事情を異にするのであるが大體に於ては依然として不景氣を持續するものと見るのが穩當ではあるまいか、然し豫輩の考へる所では恐慌は起るまいと思ふのである實際家の中には恐慌來を豫言するものもあるが（世の中に之を發表したものがあるか否やは知らぬが）豫輩はそうは思はぬ、生產界では不景氣の爲に生產方は相當に制限してゐるし金融機關は依然として緊縮的方針を持續してゐるから不景氣は容易に恢復せぬことは免れまいが、さればとて恐慌は起るまいと信ずる、金融機關の中には或は破綻するものを生ずるかも知れぬが、それが他に影響して經濟諸機關をして運行を止むるに至るとも思はれない、縱令火災保險問題が解決して保險金の一割位が東京市に落ちた所で、これ等は家屋の建築やら事業の復興やらに用ひられて尙足りないのである

から、多少の生氣は爲に生ずるかも知れぬが不景氣を生ずる程のことはあるまい、して見れば差し當り恐慌を惹起すことはあるまい、一派の者が希望するやうに外債募集によりて資金が大に輸入せらたなら不景氣を生じ、其極却つて恐慌などを起すことはあるかも知れないが、歐米金融市場では大に我國の外債募集に應じ得る丈の餘裕はない、假りに餘裕があつたにした所が貨幣等を出すことはなくいはど復興等に必要なる材料買入の資金に充てしめる丈で我國からいへば貨物の輸入はあるであらうが資金の輸入はたいしてあるまいと推察する、して見れば事の善惡は兎角我國は尙依然として不景氣を持續するが大變動は生じまいと推察するのである。

（問）物價は高くなるであらうか、それとも下落するであらうか

（答）物價が高くなるならば景氣つくのであるが豫想は依然として不景氣を免れまいと豫言するのは畢竟物價はさして高くなるまいといふ前提の下にいつてゐることである、貨物の種類によつては今日でも高くなつたものもあると同時に廉になつたものがあるが如くに今後とても高くなるものもあるし、廉くなるものもあらうが大局からいつて物價は左程騰貴しそうでもない其れについて最も關係があるのは通貨であつて通貨が大に膨脹すれば物價は騰貴する傾向を生ずるのであるが、日本銀行も濫りに通貨を膨脹さすこともあるまい、復興の爲に公債を募集した所で、資金の動くのは內地の間であらうから大體に於て通貨を大に膨脹せしむることもあるまい、特に現大藏大臣は投機熱を煽るのは最も忌まれてゐるし、何處までも緊縮方針を採らるゝことと信ずるから物價を騰貴せしむるやうに通貨政策を寬にせらるゝことはあるまい、その點に於ては政黨內閣よりは都合がよい、政黨內閣では大臣等は反對の意見であつたにしろ、黨人等が中々之を許さぬから自然緊縮方針で押し通すことは出來難い場合もあるが、超然內閣では其の點は寧ろ樂であるといへるそれなれば反對に物價は大に下落するやうなことはあるまいかといへばこれも一ツ一ツの貨物についていへば種々のことはあるであらうが大體からいつて大に下落することもあるまい、大體からいへば今日の處物價は上る氣配が多いのであるのを寧ろ抑えられてゐる氣味である、故に大に下落することはあるまいと推察するのである

（問）外國貿易は如何であらうか、依然入超であると察せられるゝが其の入超の程度は甚しくなりはしまいか

（答）豫想も入超であらうといふ御推察に同意する我が輸出貿易は依然として甚しく振ふ望はない、輸出貿易品の太宗である

生糸の如きは最も前途を卜知し難いものであつて之を豫言することは困難であるが横濱の火災の爲に製糸家は大分痛手を被つてゐる、從つて當分大に活躍することは出來難いことであらうそれに其の輸出港であつた横濱港は大打撃を被り其生糸取引の商業組織も殆んど覆されたといつて宜しいのであるから其の恢復は容易であるまいし、さればとて一部の實際家が希望し運動してゐるように其の商業を神戸市に移した所が其れが基礎が出來るまでは多少の年月がかゝることであるから其からいつても大飛躍は困難である、それなれば外國に於て生糸の需要を躍起せしむるような原因があるかといへば宜くは分らぬが差當りありそうでもない、生糸計ではない其他のものでも大に輸出せらるべきものがあるかといへばまづない、我國の物價が諸外國に比して割高にある間は輸出貿易が大に增加すべしとは思へないそれならば輸入貿易の方では帝都の復興に必要なる材料等が益々輸入せらるゝからさなきだに輸入超過の勢を增加するように思はるゝが、こゝに注意しなければならないのは大震災の爲に奢侈の風か一頓挫したことである、震災前に於ては奢侈の風が益々盛であつた上に近ころでは大分ハイカラになつて日本製のものよりは外國品を歡迎し日も尙足らずといふ風があつたから其れが積つて大に輸入を增加し從つて輸入超過を助けたのであつたではないか、然るに少くとも一時はこの風潮を一頓挫せしめた以上はこの種の貨物の輸入は少くなるであらうから、輸入超過の勢を幾分かは緩和せしむることが出來ようし、又其の素質を善くすることが出來よう、而して復興の材料の爲の輸入超過ならさまで悲觀するにも當るまい、未曾有の天災が起つた以上はこの位のことがあるのは當然なことで之を兎や角いふにも及ぶまい、我等は其の間に眞に復興の基礎を作り我經濟社會をして不健全な分子を去り健全となすことが出來たならば、眞に景氣を恢復して大に活躍することが出來て他日輸入超過を變じて輸出超過にすることが出來るであらう、否之を望まざるを得ないのである、この天の試煉に對して之をなし遂ぐることが出來るか否やは一に國民の努力にかゝるのである、國民は震災當時に示した如き勇猛心を奮起したならばこの位のことは出來ねばならないではないか、熱し易く冷め易くては天の試煉に　勝つことは出來ない、いやこれは解答ではなく大に脫線したので相すまぬが予輩は常にそう思ふのである。

震災景氣出現せん

石山賢吉

七億の復興豫算が五億に縮少されたけれども、復興費は單にこれだけではない。第一に官衙の復興費が必要である。官衙の中にも遞信鐵道の兩省は其損害の大きかつたゞけ、多額の復興費を要し、是等兩省の復興費たけでも二三億圓を下らぬさうであるから、官衙の總復興費は四五億圓に上り、之に復興院の復興費を加へた政府支出の總復興費は少くとも十億圓に達するであらう。此外尚ほ民間の復興費が要る。民間の復興費は推測困難であるけれども、東京横濱兩市に於ける燒失戸數約四十萬、其一戸が假に五千圓の復興費を要するとしても其總額は二十億圓となり、一萬圓とすれば四十億圓となる。罹災者は其復興に家屋を建築する外、家財道具や、貯藏商品を必要とするから、一戸平均の復興費に五千圓以上を要するものと想像され、民間の復興費を假に三十億圓と見做せば政府の分とも合せて其總額は四十億圓に上る。大藏省は震災の總損害を百億圓と計算した其數字から考へると、總復興費は到底四十億圓位では足らぬものと想像されるけれども、假に四十億圓としても少からざる額であつて、それが今後數年間に大部分日本内地に集散されるのであるから、經濟界に或期間一種景氣所謂震災景氣なるものが出現するであらうと思はれる。

震災景氣出現說に對する反對論者に、一方に資金の散布があつても、他方に資金の吸收がある。即ち政府は復興進行と同時に貯金を奬勵し、資金の吸收に努めるから、震災景氣出現の餘地がないと云ふのである。然し資金の散布と吸收とは同時に行はれるものではない。同時に行はるれば反對論者の云ふ如く震災景氣出現の餘地がなくなるけれども、資金が一方に散布されて他方に吸收されるまでには或期間がある。其期間中通貨が膨脹し、信用が擴張され、物價が騰貴するから、震災景氣が出現するのである。

震災景氣は、公債募集額、內外債の分量、並に復興の意氣ごみ如何に依つて其程度に相違が生ずるか、然し如何に復興の規模が縮少されても今回の災害が大きかつたゞけそれだけ多額の復興費を要するのであるから、必ず震災景氣が出現するものと考へる。而して其原因を列記すれば次の如きものである。

一、通貨及信用の膨脹
二、復興に要する特殊材料の生產不足
三、復興に從事する勞働者の消費增加

即ち通貨及信用の膨脹と一部商品の生產不足より起る景氣である。眞の景氣は商品の一般的生產不足より生ずるものであるから、今回の震災景氣を一種の變態景氣と見るべきものである。

復活の曙光

青木得三

『復活の曙光』は姉崎嘲風先生の名著の表題である、私は之を以て大正十二年始に於ける日本經濟界の狀態を表し度い、私は此の表題を初、「あがける者の悲哀」又は「あがきし者の沒落」としようかと思つたが、しかしそれは新年號には余りふさはしくない表題であるから、嘲風先生の名著の表題を無斷で拜借した。

大正九年の春を轉廻期として不景氣に入つた我邦の經濟界は大正十二年に至つてもはかばかしい恢復の色を見せなかつた。茲に於て大多數のキャピタリストはしびれを切らした。其の前年に消費節約運動なぞをやつて物價の低落、輸出の增進を企てた全くの眞意は景氣輓回に在つたと私は見て居る。十二年に入つては中央銀行金利引下の議論が大分やかましかつた。金利の引下は生產費の低減であり、物價の低落であり、輸出の增進であると考へたやうである。之も景氣輓回策に外ならなかつた。

しかし私は考へた、我邦最近の好景氣は大正四年から始まつて大正九年に及んだ、其の間五ヶ年であつた、大正九年に始ま

つた好景氣の反動たる不景氣が十二年に至つて已むであらうか最近の好景氣は稀に見る程度のものであつた、其の轉廻するに當つて經濟界の受けた瘡痍は深い、容易に恢復するものではない。加之大正十二年の我國の經濟は不景氣とは云ふけれども、物價は低落せず、金利は高い、之が眞の不景氣であらうか。經濟學は吾々に教へるのに、事業起らず、物價は低落し、金融緩漫となり、經濟界は沈滯の極に達して後始めて徐々に好景氣に轉ずると。然るに我邦の資本家は物價低落せず、金融緩漫とならざるに先ちて早くも好景氣に轉廻せしめやうとした。それが果して可能であらうかと私は思つた。自轉車に乘つて今降り坂を下りる途中である。未だその底まで落ち付かない、途中で車を廻らして元の坂の頂上に上らうとしてもそれは無理な話である。元の坂の上の美しい眺望は自轉車乘りの未だに忘れることの出來ない所である。我邦の資本家が大正四年乃至九年の好景氣に豪奢を極めた其の甘い夢を未だに忘れ得ないで降り坂の途中から元の坂の上に戻らうとする。それは「あがける者の悲哀」である。經濟學と物理學とは共に其の不可能なることを教へる日本の資本家よ、汝等は學問の權威を認めぬのであるか。と私は思つた。

吾等は一度谷の底迄下らねばならぬ、而して徐ろに次の昇り坂に上る準備を整へねばならぬ、といふのが私の主張であつた此の場合には輸入超過も決して憂ふるに足らぬ、正貨の減少、金の流出も恐れるに足らぬといふのが、我の信念であつた。しかし我邦の資本家は左樣な議論を少しも顧みなかつた、而して大正十二年に至つては中央銀行金利引下論を唱へた。中央銀行金利の引下は物價を低落せしめずして却て騰貴せしめるといふのが、瑞典のカツセルや和蘭のフイセリングの此頃唱へてる所である。金利は生産費の一部を構成するのは何人も否定しない所であるけれども、物價は生産費のみに依つて定まるのではない、中央銀行金利の引下は貸出の增加となり、銀行券の增發となり、物價を騰貴せしめるといふのカツセルやフイセリング說である。加之中央銀行が金利を引下げても必しも市中銀行は之に追隨しないであらう。戰前の英蘭銀行やライヒスバンクでも市中銀行をして其の金利の高低に追隨せしめるのは容易なことではなかつた。況んや我邦の中央銀行に於てをや。若し大正十二年日本銀行が公定割引歩合を引下けたならば日本の物價は更に騰貴したであらう。好景氣の甘い酒の醉から醒め得ない資本家は復不健全な事業を企てたであらう。實に恐るべきことであつた。

然るに九月一日の震災は竟にその降り坂の途中にあつた自轉

車乘りを谷の底迄突き落した、是れ「あがきし者の沒落」である。茲に至つて日本の資本家は遂に手も足も出なくなつた。私は我邦の經濟界が遂に落ち付くべきどん底迄來たのであると思ふ。谷底の道は比較的長いかもしれぬ。しかし次に來るべきものは昇り坂である。私は茲に『復活の曙光』を認める。

震災後金融は却て緩漫となつた、新しい事業は全く起らぬ、經濟學者の所謂不景氣の特徴は遺憾なく表れて居る、輸入は谷超過する、吾々は好景氣の時代に蓄積した金を外國人に與へて木材を鐵材とを輸入して居る、在外正貨は減少する、私は之を以て決して悲むべき事態とは考へぬ、震災は誠に悲しむべきものであつた。しかし之に因つて我邦の經濟界は落ち付くべき谷底に到着したのである、谷底の道は未だ暗い、唯幽に遠かく向ふの山の上に曙の光を見る、雲のさゝべりに僅かの紅を認め得るに過ぎぬ、されど、我等の前途は最早や降り坂はない、此の意味に於て私日本經濟界の前途を祝福する。

思想界の新人・舊人

新居格

一、

思想界に活躍してゐる人達を思ふにつけても、千九百二十三年と云ふ年はまさに呪はるべきであつた。堺利彦、猪股津南雄君等は收監されたがため、佐野學君は姿を掻き消したがため、何れも思潮的活躍を中止すべく餘儀なくなつたし、有島武郎、大杉榮、厨川白村君等はその死に仍つてそれ〳〵に華やかだつた活躍を終幕にしたからである。それらは確かに寂しいと云へやう。

それに就けても去年歸朝した森戸辰男、阿部次郎君達がひたすらに筆を收めて敢て思潮壇を顧みないかの如きはどうした譯であらう。博學の米田庄太郎氏が專攻の學問にいよ〳〵體系を作くるべく筆を絶つたのと、三田學園の花形小泉信三君が「財政經濟時報」以外に廣く筆を執らなくなつたのは、櫛田民藏君の筆無精と共に寂しく思はれることだ。しかし、それもいゝことかも知れない。何故かならばジヤアナリズム以外に深かき思想の泉があることは思想界そのもののために力強くもあるからである。新聞雜誌に熾んに發表することが必ずしも思潮的活躍ではない。それは質の問題であつて量の問題ではないからだ。しかし、世間では質の如何に關せず熾に發表しさえしてゐれば活躍してゐるかの如く看做す弊がある。從つて有力なる雜誌の寵兒は思想界の花形であるかの如き觀を呈する。尤も花形たりうべきであるから新聞雜誌が競ふて執筆を依囑すると云ふ相關關係もある。けれどもそれ丈の範圍で思潮的活躍にたいする唯一の準尺とするならば明かに間違つてゐると云へるのである。

僕等の如く身貧にして、しかも職業なきものは生活の關係から悪文も草し雜文も賴まれる限りに於ては書かざるを得ないがそんな事をせずとも質的な思想的活動をしうる人々は靜かに沈潛するのが當然でもあらう。僕等は彼等の靜かな沈默に對して

は敬意を持つ、反省もさせられる。たゞ彼等が學者は容易く思想を發表するものでないと氣取るならば、氣障だとして輕蔑する計りである。氣が向いたらまたは衷心的衝動があるなら兎や角云はずに發表するがいゝとは思ふのである。

益々論じて疲れない人に三宅雪嶺翁や内田魯庵氏がゐる。それにもまして長谷川如是閑氏や千葉龜雄君がある。吉野作造、福田德三、堀江歸一、大山郁夫の諸氏は相變らず賑やかな光彩を持つ人たちである。若かい所の人氣者は末弘嚴太郎君であるかのやうだ。

二、京坂地方に居る人々、

森戸辰男君は近く蘆屋に轉住する相だ。彼は歸朝以來殆ど雜誌に執筆しない。伯林郊外の靜處に三年計りの間、研究に沒頭したが、彼はその片鱗をさへ提示しやうとしない。芦屋も靜かな而して氣持のいゝ住宅地だが彼は大坂天王寺の大原研究所へは一週間二回位出勤すればいゝ相だから、殆ど芦屋で勉强を續ける譯である。同君が所論を發表しないのは研究所の箝口令があるからだと云ふ噂もある。無論嘘だらう。そんな事に拘束される森戸君である筈がない。とすると矢張り極端に鋭い學的良心からなのだらう、しかし、僕として森戸君に注文する點は君は社會問題の專攻者として芦屋はブルジョアの文化式の住宅地、輕快溫暖な雰圍氣内の研究に耽り過ぎて勞働界の風塵に離れ過ぎないやうにと云ふ一點である。

櫛田民藏君は香爐園に住んでゐると聞いた。同君の風格は率直で超脫、その行藏は森戸君より群拔であり、より學者肌でもある。僕は同君の書いたものをそうたんとは讀んでゐないが、日本では誰よりもマルキストだと云ふ感じを僕は受取つてゐる。森戸君を假りに英吉利型だとすれば彼は明かに獨逸型だ。それだけに經歷でも生活觀念でも、より多くプロレタリア的である。無頓着でゐて僕等を惹き付けるのは彼の人格だ。彼も亦「我等」に時たま書く以外、あまり一般的の雜誌に執筆しない。遲筆だとも聞く。

神戸に、賀川豊彦君がゐる。彼はこゝに記叙の筆を執るべく天下周知であり過ぎる。

近ごろは實行方面の大活動に比して、思潮的のそれに稍遜色があるかのやうに思へる。實行的活動も同君本來の基督教的立場により多く傾いて來た、しかし普選肯定の氣運が勞働界の大勢となつて來ては彼の當年の奮闘も酬ゐられたと云ふものだ。

關西學院には新明正道君がゐる。年少篤學その將來を所期されてゐる。

大阪は思想的沙漠論するに値せず。

去つて京都に入れば人多し。河上肇、河田嗣郎、米田庄太郎の諸氏は今更詳說するにも及ぶまい。本庄榮治郎君最近學位を受く。學者らしい學者と僕は睨らんでゐる。佐々木惣一氏は重厚質擊貫祿ある學者、目下渡歐中、森口繁治と云ふ人がある。憲法の學者らしいがその以外の印象はない。恒藤恭君は人氣のある、思潮壇の新彩、波多野鼎君は同志社大學の敎授、學生間の人望もよし。彼は新人會系の一秀才溫厚で好學、神戶の新明君と共に囑望されてゐる。河上門下に小林輝次、水谷長三郎の二君がゐる。

更に多識多方面の土田杏村君がゐる。個人雜誌「文化」を牢して行くとして可らざるなき慨を示してゐる。彼の長短乃至毀譽亦この多能に因して存在する。

哲學の方面を見渡すとすぐれてドエラキ西田幾太郎、波多野精一、田邊元の諸博士やら年少好望の三木淸君等隨分多いがそこまで筆を及ぼすと他の方面にも筆を着けなければならない事になるから强いて省筆する。

名古屋の井箆節三君は中央思潮壇を去つた形であるが中京思想界の第一人者として聲望ありとのこと。

三、中央思潮

東京はさすがに多數多樣である。記叙するに骨が折れるが思ひ出すまゝに書いて行く。

A　社會思想社の諸君

新人會中好學派の集團である。既記した新明、波多野の二君も同人、臘山政道、石濱知行、佐々弘雄、平貞藏、細野三千雄千葉雄次郎、嘉治隆一、田中九一、三輪壽壯君等がゐる。

臘山君は若かい政治學者、若かいに似合はず老成堅實の論容で既に一家の風がある。石濱、佐々君等と共に帝大の助敎授。平貞藏君は法政大學の敎授、嘉治君は滿鐵調査局にゐるが勢實の研究家、奥床しい人だから知られる事を欲しないが、今に思潮壇の新星となるだらう。千葉雄次郎君は幼少より頭腦の明晰で知られた人東京朝日に居るが新聞記者としてよりはむしろ敎授に適してゐる。

B　復活する解放社の新同人

雜誌「解放」は三月から黑田禮二、麻生久、靑野季吉、赤松克麿、山名義鶴の諸君を同人として新たに復活する。その一團を短評する。

黑田禮二君は東京朝日の依託をうけて年末歐露に赴むいた。大正五年帝大經濟科を出た秀才で最近まで滿鐵調査局にゐた。留學二年の後、歸朝したが、半歳ならずして再び海外に赴いた

譯である。各種の語學に堪能で、多能且つ聰明、經濟問題でござれ、社會問題であれ、文藝演劇、乃至詩一として可ならざるなき稀才である。旅行家と云ふよりも冒險家であり、日本が有する本當の意味でのボヘミアンである。それは彼の「蝙蝠日記」をみても分かる。近代の特色の濃い所が愉快だ。麻生久君は勞働運動者として頗る有名だからそれは云はない。近來の彼は小說で知られやうとする傾向がある。彼の人となりは「濁流に泳ぐ」や「生れ出づる群」等を見れば瞭然である。

赤松克麿君も奇才で卓拔のある。與謝野寬氏の甥だけあつて詩人肌の所もあるがしかしより論客だ。

青野君は熱烈な論客、論理明快、文藝論をやつてブルジョア文士を痛擊して頗る冴えあり。

C 種蒔き社一派、

この派にも濟々多士だ。が、思潮壇の鬪士としては平林初之輔、小牧近江、村松正俊、青野季吉君等である。前田河廣一郎中西伊之助君等は議論も大にやるがより以上作家である。

平林君は早大講師、齒切れよく論ずる。小牧君は機智に富む詩人、直覺的なのはフランスタイプか、佛蘭西文壇の實情にも通じ、クラルテの紹介は人其の人を得たものだつた。

村松君も亦詩人鎖同人として作詩もする。語學にも秀でゝゐるが、彼の評論は兎に角異色がある。「無價値の哲學」の如きは僕には面白かつた。

D 學園の一瞥

帝大の小野塚喜平次氏は僕が日本に於いて最も畏敬せる學者で、僕の如き學問的破産者は氏が少々怖ない。尤も僕にしてみれば暫くにもせよ、氏に近接してその指導を受けたのだから云はゞ僕に取つての恩師である譯だ。僕はその後の境遇上、救ひがたき邪道に陷つて仕舞つたのだから、僕から恩師だなぞと云はうものなら、同氏こそさぞかし迷惑を感ぜられもしやうが、そんな個人的私的關渉を別としても僕は同氏の卓越を推讃せざるを得ない。氏は純乎たる政治學者として「國家學會雜誌」以外の如何なるものにも斷じて執筆しないのであるが、若し氏が思ひ切つて一般的な雜誌に執筆されでもするなら、尖鋭犀利なる論鋒は政治評論壇の驚歎すべき光彩であると僕は確信する。

吉野作造氏の明快平易な論文は長い間、思潮壇の花だつた。而して些の俗色を見ないのみか益々その冴えを益す感がある。水晶のやうに明澄な頭腦の所爲であらう。穗積重遠氏は親切な論客、牧野英一氏は專攻に隱れ、美濃部達吉氏却つて若返つた所を見せてゐる。末弘君は少壯隨一の人氣もの、河合榮治郎君は筆を一般雜誌から收めて大分になる、土方成美君の清新な財

政學は近代思想の風韻を帶びて喜ばれる。而し南原繁君なぞは實力を擁して沈默せる一人か文科の姉崎嘲風氏はやゝ疲れたろの感あれど、桑木嚴翼氏は依然として重厚の貫祿を示しつゝある。木村泰賢氏亦一種の論客。

慶大の堀江歸一氏は熾に書く。この割合に印象が二くないのはどうしたものか。小泉信三、高橋誠一郎の二君は學者として定評あり、共に慶大の誇りである。加田哲二君は目下獨逸にあるが好望の評判が高い。野村兼太郎君を初め小壯の人多し。

早大の大山有夫、北澤新次郎の二君亦聲望高く特に大山君は早大の明星に譬へられる。

佐野猪股二君の去つた後で、出井盛之君のあるは賴もしい。この人は早大の持つ最も學者らしい人物であるやうだ。尙、杉森孝次郎君ありて特異の所論を特異の文章で發表しつゝある。あの文章も氣障ではあるが倦色なき精力は目立たしい。北昤吉君大に西洋で勉强して詰め込んで歸る。その甲斐ありしが如見ゆ。その説く所博識なるものの如し。帆足理一郎君も早大にゐる。

商大の例の福田德三氏は大圖格の論客、學識無類にして向ふ意氣の强く且つ荒つぽい所、岩野泡鳴に似てゐる。

高田保馬氏の堂々たる論陣は偉觀である。

E 社會主義思想

山川均君依然として切れ味ある論法を以つて鳴る。菊榮夫人の筆亦健在。石川三四郎君は田端に閑居して讀書に寧日なく靜かな隙で物象を瞰觀してゐるやうだ。遠藤無水君は熱心、北原龍雄君の論理もしつかりしてゐる。堺君は收監荒畑寒村君は不在、共に省筆した。

F その他

防援委員會の小泉鐵君は有名な議論家だが執筆無性の習性あり。それに反して改造社の室伏高信君は多讀多筆、高畠素之君はマルクス學者だが政治家たらんとして經策するに多忙ならんとす。千葉龜雄君は新聞紙界隨一の思想家、海外文藝の造詣も博大だが、社會現象の萬般を論評して活躍の目ざましきものがある。蓋し長谷川如是閑氏の活躍に匹敵するものだらう。

田中王堂君もその名を脫してはならない。

文藝思潮乃至評論を立場として威力ある主張をする人に片上伸、吉江喬松の二君がある。變つた所に武者小路實篤君があり菊池寛君の發表毎に問題をつくるのは面白い。加藤一夫、小川未明、秋田雨雀、宮嶋資夫君等も論客の一面がある。雜誌「思想」に據れる諸氏は何れも相當に重んずべき人々だが、彼等はおとなしそうで中々重く持する所がある。長所でもあれば短所でもある。「思想」に時折寄稿する左右田喜一郎氏は貫祿があつて論文には力作が多い。

安倍能成君、和辻哲郎その他の諸氏の重厚もいゝ。同型の雜誌「講座」の執筆者に比べれはどうしても見貫分だ。

他にも書くべき諸君が多いのだが豫定の紙數が既に盡きたから擱筆する。

文壇名家垣のぞ記

佐々木味津三

注文に依るとせいぜい拾枚位の原稿紙へ少く共五人以上の作家をとらへてなにか面白い讀み物を書けと言ふのだから、言ふ方も少しく亂暴であるがそれを二つ返事で引受けた私の方は一層亂暴千萬な話である。假りに五枚さばを讀んだところが三五の十五で一人頭三枚にしか割當らないが、三枚と言へば三四の千二百字で、千二百字位の原稿ならば芥川龍之介菊地寛久米正雄宇野浩二佐藤春夫里見弴と言つた樣ないはゆる文壇現役諸公の戸籍調べをしただけでももう五六百字は濟みそうである。も少しそれをお化粧して、きりしたんばてれん派の芥川澄江堂、將棊派の菊池初段、元世界的失戀派の久米三汀、ひすてり派の宇野浩二、ねくたい派の佐藤春夫、多情佛心派の里見弴等々と言つた工合に二つ三つ形容詞をくつつけると完全に千二百字位埋まりそうであるが、そんな與太を飛ばしてゐるうちにもう貴重な一枚が代なしになつたから、以下大車輪でいいところたけ刺し身につくつて、極く内々で一皿宛お目にかけやう。

芥川龍之介氏の睡眠劑。

先づなんと言つても好話柄を澤山遺してゐる人はわが親愛なる芥川澄江堂氏である。

往年鎌倉に參禪する考へで一夜南天棒(?)の門を叩いたところ、相憎くと南天棒の鼻の下がひどくさかなのぼうぼうに似てゐたとかで、稀世の逸品「鼻」の作者も鼻から急に世を儚んで雲を霞に逃げ去つたとか、或は又一日電車に乘つて動坂だか本鄕へ赴こうとしたところ車掌から行く先は? と尋ねられて、澄江堂先生釋然とし乍ら言下に「芥川!」と答へたとか、等々と言つた好話柄は氏が一代の名吟「青蛙おのれペンキのぬりたてか」と共にあまりに世に有名過ぎるが、しかしその芥川氏が世にかくれたるカルモチンの亂用者であると言ふ一條は話が少し天機洩らすべからざるていのものだけに、又あまり人口に

膾炙されないだけに就中愉快を禁じえない好話柄である。若し岩野泡鳴のオキシヘラーが世にかくれない好逸事ならば、わが芥川氏のカルモチンも共に後世文學史上を大いに賑はすべき好材料であるが、しかしそう言ふ私が芥川氏のカルモチンをはしなくも發見したのはつひ去年四月のことである。話の起りは東海道靜岡の宿であるが、實を言ふと靜岡の綠會から、私が前座で芥川氏が眞打で一夕文藝講演に招かれたことがあつて、その夜大東館に泊り合せてからであつた。三時に着いて晩の六時からお話で、また九時半から慰勞宴で、色々と疲れ過ぎる程用を辯じてから、いざ睡らうとした時である。芥川氏なにか仔細ありげにトランクを掻き巡はしてゐたが——そのトランクと言ふのはのちに至つて文藝春秋で藤森淳三がトランク事件で大いに曉名を天下に走せた例の有名な古トランクであるが——やがて怪しげなる一封を特ち出したので、何んの氣なしに私が、そりや何んです？　と聲をかけると、ところが芥川氏憮然とし乍ら即座に答へた所に依ると、それが例のカルモチンである。

「えへ！　怪しからんもの用ひますね」と言つてやると、

「冷やかすない冷やかすない！」と言ひ乍ら、ご丁嚀にも五六粒用ひられたやうであつたが、そのうちに、佐々木味津三にしてこう言ふ重寶なものを知らないなんて言ふのは、大いに君の名を恥づかしめるものだから、今晩早速この場でカルモチンの童貞を破れと言ふことになつた。カルモチン位の童貞が破れないとなつてはいかにも佐々木味津三意久地のない話であるから命惟れ從つて大奮發で二粒を用ひてやると、所が小一時間もとろとろと眠つてからである。藥なぞ不自然なものでわが神聖な睡眠をけがしたためか、まもなく私は非常に不愉快な寢苦しさを覺えて夢半ではつと眼を醒された。それと同時にわが親愛なる澄江堂氏も矢張なにか惡夢にでもうなされてゐるためか、しきりにうんうんと怪しげな悶絶を初めたのである。不思議に鬼氣あたりを壓すると言つた風の不氣味を覺えたので、とうとう私は聲をかけて、芥川氏が夜半の夢を破つて了つた。

「思ふにこいつカルモチンのしわざらしいね。僕も變にうなされて眼がさめたんだが」

「そうかい。そんなにうんうんうなつたかな。ぢややつはりカルモチンだね……旅に病んで夢は枯野をかけめぐるつて奴かな。一寸いやだね」言ひ乍らしかし芥川氏はまたすやすやと睡り落ちた。聞き乍ら私も亦いつのまにか藥のせいで落ち入るやうに睡りついた。

以來藥屋の前を通ると私迄が旅に病んでと言ふやうな心持になり勝ちであつたがその後しかし人からの又聞に依ると、芥川

氏一念發起して長年亂用のカルモチンを廢めたと言ふ事である。カルモチンは廢めてゐるが何か別な新藥を用ひてゐるそうで、何と言ふ藥であるか名前のところは度忘れしたが、とにかくその新藥を用ひたところ今度は別にうなされもしないで、申し分なく熟睡が出來たそうである。熟睡はしたがしかし朝になるとどう言ふものか不思議に饒舌になつて何かぺらぺらとしやべつてゐないと一刻もぢつとして居られなかつたそうである。とうとう晩迄喋舌り通しでなんとしても饒舌が止まらないところからいち時は自分乍ら少々不氣味になつて氣でも違ふんぢやないかなと言ふ杞憂さへ抱かれたそうであるが、――しかしその時も矢張り旅に病んで夢は枯野をかけめぐると言つたかどうか、殘念乍ら肝心なところをつひ聞き洩らしたが、そんな新藥があるとなれば今度は九州相良あたりでもう一ぺん泊り合せて、私ももう一度その新藥の童貞を破つてみたいものである。

菊池寛氏の鐵砲と面會謝絶札。

芥川氏に負けず劣らず大いに愛すべき好話柄を澤山遺してゐる人はまた菊池初段である。わけても世に有名なものは、鐵砲と面會謝絶札の二つであるが、鐵砲の方は去年六月都新聞の文壇名所巡禮に菊池初段の鐵砲と言ふ小みだしで私が一寸噂をのせておいたところ、表題だけ見た氣早の閑人が早速やつて來て菊池初段の鐵砲つてなんですか六連發ですか村田式ですかと言ふやうな奇問を發した因縁もあることだから、序でに茲でも一度はツきりとあかりを立てておくことにしやう。尤も直木三十三の說明に依ると菊池初段は本當に六連發を持つてゐるんださうで、なんでも地震當時はその六連發を着用に及んで藤森淳三を幕下に從へ乍ら、大いに夜警の任を果したと言ふ話であるが茲で言ふ菊池初段の鐵砲と言ふのは元より鳩や不逞鮮人を脅やかす豆鐵砲のたぐひではないが、とにかく甚だ有名な鐵砲であることだけは事實である。これを一言にして言ふならば、つねに簡單明瞭極めて彈力の強大なひぢ鐵砲と言ふ程の意味であるが、たいていの場合たいていな人がその強大なひぢ鐵砲の直射に出會つて見事に彈ぢき飛ばされるから妙である。私など現にその一人であるが、いつだつたかの大觀で私が發表した馬を毆りぐ殺した少年と言ふくだらない作品をお目にかけた所幸ひにもお世辭でなく感心しましたと言ふ好評を蒙むつたので、それに少しく圖に乘つて二度目に何か短篇をお目にかけにお伺ひすると、それが私達初對面の時であつたが　開口一番今度のやつはひどくまづいねと言ふ例の速射砲に打つかつて少からず面喰つたことがあつた。それが全くの初對面で。しかも程左樣に歯に衣着せずにどんどんと打ッ放すから全く痛快な鐵砲である。先

迄つても岡山の山陽新報で文藝講演會をやると言ふので私がその勸進元になつて次第によつたら首へ繩を掛けて引ッ張つて行く位な意氣込でもつて、先づ菊池初段の勸誘に赴いたところが、僕五百圓くれないと行かないよと言ふ例の速射砲に打つかつてすツかり出鼻を挫かれたことがあつた。その講演に菊池初段が一枚缺けると結句一座は滅茶苦茶と言ふ重大な場合であつたが、あまりに見事な速射砲に私の方が反對に蒐弱にされてとうとう晩迄いいこころもちに話し込んだ位である。茲までゆけば百發百中傑力の點でまさに機關銃の觀があるが、とにかく菊池初段のこの鐵砲は免許皆傳の鐵砲である。またその鐵砲はなくてかなはぬ武器である。

時計は坂東彦三郎、ひぢ鐵砲は菊池寛、カルモチンは澄江堂、桂文治は話し家で、と言ふ風に連ねて行くと飛んだところでちよぼくれが出來そうであるが、それに續いて世に並び稱せらるゝものは例の面會謝絶札である。上富坂にゐられる頃は、菓子箱の蓋かなんかをそのまゝ用ひてでもゐるらしい極くお粗末なお手製の板ッぺらがいつも玄關にぶら下ッてゐたものであるが、それが又愉快なことには必要がない場合だと釋然として裏返へしのまゝいつまでもぶら下つてゐると言ふのだから、どこまでも鐵砲式の謝絶札である。林町へ移つてからは、板ッぺらが又いつのまにか澎大なボール紙に品を變へて多忙につき何人と雖も面會謝絶といふやうな一流の文句を書いた奴が、伸縮自在裏返へし自在に凜々と玄關先にぶら下がつてゐたのと相呼應して當時文壇プロブル爭議の眞最中であつたところから、自今紹介狀御持參なき方には一文と雖も金錢の强請には應じ兼ね候と言ふでかでかの魔よけ札が、機關銃以上に嚴然と構へてゐたものであるが、惜しむらくは地震以來三日天下のプロ黨が他愛なく沒落の運命に遭遇した爲か、そののち舊魚眠洞窟に移られてからと言ふもの、お目にかゝりうる物は裏返へし自在のボール紙ばかりである。實はつひ先達一寸用件があつて田端の舊魚眠洞窟を訪れたところ正月號原稿多忙に付面會謝絶　當家主人と言ふ一流のボール紙が裏返へし自在でしかも門脇の木の間に風雨に曝され乍らぶら下ッてゐたのを發見して、思はず千年の舊知に會つたやうな懐かしさを覺えたが、それでゐてその謝絶札が一向に言行不一致だからどこ迄も嬉しい話である。十分位なら構はないからまあとにかく上り給へと言ふ奴がいつも二時間は延長されて、二十分と言つた奴がまた四時間位に計算されるのがつねであるが、とにかくボール紙の點と言ひ、言行不一致の點と言ひ、尙近世に流布されてゐる謝絶札のやうに一向貴族的な陰影の散見しないところは、なんと言つても文壇名物の名を辱

づかしめない愉快極まる面會謝絶札である。

尤も今回七千金を投じて購つたと言ふ目白の新居に移つてからは果してどんな謝絶札を用意されるか今からしきりに氣になつてならないが願くば此際だから、縱橫三間位の堂々天下を風靡するやうなゝるし塗りの金看板でも上げてほしいものである。それへ例の鐵砲で緣をとつて同じく裏返へし自在に吊しうるやうな工風でもこらすと、まさに當代の稀覯であるが、これは勿論笑談である。

茜さす久米正雄氏。

別して親愛なるわが久米三汀先生にこのあかねさすと言ふ枕詞みやびやかな枕言葉があると言ふことを知つたのは、實を言ふと芥川氏のからの耳打ちである。私が始めて久米氏とお知合になつたのは一夕雜談に邦文トランプを弄んだ時に偶然一座した以來のことであるが多分その時のことである、なんでも一座してゐた廣津和郎氏がつゞけまゝに菅原を二遍ばかりこしらへたことがあつて三遍目にまたその菅原が廣津氏に出來かかつた時であつた。

偶然久米氏が廣津氏を顧みて、なんだつてそんなに赤丹ばかりこしらへるんだ！　と言ふやうな一言をふとすべらすと、「赤いのばかりでまるで久米正雄の小說みたいだね！」すかさずに廣津氏が辛辣なところを一矢放つたのである。はツと思つて私も思はず久米氏の方を振り返へると、ところがなんと愉快なことか、わが親愛なる久米三汀氏がパツと耳根ツ子まで眞赤に紅葉を染めて、文字通り正眞正銘の茜さす久米正雄氏だつたのである。

これあるかなと思ひ乍ら私はひそかに芥川氏の耳打を思ひ浮べて、そつと柔を叩いたものであつた。爾來春風秋雨二星霜、茜さす久米正雄氏の赤い小說、赤より出でて愈々赤く、先きには名編破船を初め近くは傑作嘆きの市まで天下百萬の處女諸嬢から紅淚を一身に集め得たと聞いて、共に慶賀に堪へなかつたが、就中破船の一篇が大枚壹萬圓の稿料と言ふ話を耳にした時には、おそ蒔き乍ら私ももう一遍菅見を變てどこかで間に合せの失戀をやつてから改めて出直さうかと思つた位であつたが、それも今はいにしへの語り草になつた。大正十二年十一月十七日、この日わが親愛なる久米三汀氏に幸ひあつて、さきの世界的失戀文學者茜さす久米正雄氏はつひに世界的得戀文學者茜さす久米正雄氏となられたのである。

當時久米氏の述懷に依ると、今回の得戀故にこれまでの人氣が一變するのではなからうかと言ふやうな心配へ沖らされてゐたやうであるが、失戀と違つて得戀は得戀でまた別口である。

たとへさきの世界的失戀文學者久米正雄氏が今世界的得戀文學者になつたらうとも、わが親愛なる久米三汀氏が依然として茜さす久米正雄氏である限り、人氣舊に倍すること必然である。願くばわが三汀先生にして永劫新婚の夢まどやかなれば又共に幸ひである。

もみあげ長き宇野浩二氏。

木枯しやもみあげ長き宇野浩二、これはわが芥川澄江堂氏の苦吟であるが、或は世にかくれたる名吟であるが、何のよしあしは別として、そのもみあげ長き宇野浩二氏が、古い下駄しかはかないことと、若し新らしい下駄ならば必ずよごれた雜巾で先づ二三べんふいてから用ひることと、書齋に萬年床を敷きッ放しで執筆されると言ふことは共に世に有名な話である。

元よりそのもみあげ長き宇野浩二氏が若し女のひすてりを描くならば、方今蓋世の妙手なることは言ふ迄もない話であるが實はそのひすてりに就いて去る年私と私の友人との間に一篇の不思議な挿話が持ち上つたことがあつた。

私に長年妻君にひすてりを病まれてゐる一人の友人があるが、失張り妻君がその方で久しい間名古屋の病院へ入院してゐたので、長い間の看病にさぞ疲れたらうと言ふところから、わざわざ見舞に行つて偶然にも持ちあがつた話である。

私と同じくその友人も十二貫足らずの優男で、と言ふと甚だ人聞きはいいが、實は久しぶりに遇つたから一つ朝湯にでも行つてお互ひに瘦せ比べをしやうぢやないかと言ふ動議が持ち上つて何でも起きぬけに二人して出かけたことがあつた。ところいざかんかんにかゝつてみると私が十二貫三百で彼が又十一貫八百しかなかつたのである。私の十二貫三百と言ふのはつまりこれ以上どこと言つて瘦せて然る可き部分のなくなつた言はゞエッセンスの塊りばかりであるから大いに理由のある十二貫三百であるが、彼のその十一貫八百は思ふに長年の看病疲れが亢じ果てた結果だなと言ふことに氣がついたので、何となく私も暗然として暫く彼の瘦せぶりを感に堪へ乍ら見入つてゐたものであつた。

所が對手の彼の方ではさかんに何かにたにたと笑つてゐたが

「俺のこの十一貫八百はな。おゝ天の神よ、助けたまへつて言奴ふなんだよ!」

突然不思議なことを言ひ出したのである。

天の神よ助けたまへと言つたその意味が何んであるか暫く私も合點が出來なかつたが、間もなくおゝ天の神よ、ひすてり、宇野浩二、と言ふ三題話が隼のごとく私の腦中に閃いたのであ

る。わが親愛なる宇野浩二氏が世界に冠絶したひすてり派の妙手である以上は、またわが愛すべき友人なる彼の妻君が長年のひすてりである以上は、彼が宇野氏のひすてり小説を人知れず耽讀しまた彼が作者宇野氏と共に、おお天の神よ助けたまへと叫ぶのも尤もな咄しで、そこへ初めて氣がつくと、流石に私も撫然たらるざをえなかつた。所が彼はなほにやにやと苦笑し乍ら「なあおい！　要するに俺たちはな、ひすてりの看病に生れて來たやうなものなんだよ！　お互にあんまり威張れないね。」一向に泰然としてゐたのである。

「なる程ね。そうかね。威張れないかね。」云ひ乍ら私も今更のやうにしげしげと十二貫参百を省みたものであつたが、全く誰れかこの世に一人としてひすてりの看病に産れざる亭主ありやである。

その點春秋の筆法をもつてすれば、宇野氏ひすてり派の文名をあまねく世界に馳せて、天下百萬の亭主をして撫然たらしむと言ふことになりそうであるが、それはそれで片附けておいて由來私はどう言ふものか宇野浩二氏とは共に浮き名を流し勝ちであるが甚だ心外千萬な話である。小宇野とか第二の宇野浩二なぞと頼みもしないに様々なレッテルを貼つて、いかにも私が宇野氏の半分位ももみあげが長そうな流言蜚語を放つてゐるが、もみあげは勿論の事天下百萬の亭主をして撫然たらしむ程のひすてり小説一つ書けないと言ふ點だけでも大いに異議を申し立つべきである。去年十一月の新潮にのつた最近の芥川龍之介氏なる印象記中宇野浩二氏がものした一文を讀んでみると、そのもみあげ長き宇野浩二氏が往年は宇野浩二撲滅號とかを云爲されたそうで、然し甚だ幸ひなことにはその流言がたまたま改造社長の知るところとなり、山本實彦氏から肩を叩かれて、大いに後援するからしつかりやりたまへと言ふやうなことを言はれたそうなが、與太者の身の悲しさには未だに一人としてこの私の肩を叩いてくれる人もない程な不始末であるが、しかし今後若し再び宇野浩二撲滅號なぞと流言を放つ不逞の徒輩が徘徊するやうな場合があらば、浮き名を流されたよしみをもつてせいぜいもみあげも長くしてから、微力ではあるが私も第一番に駈けつけて大いに肩を叩いてやる考へである。

この他ぜひ垣根からのぞいてみたい人に佐藤春夫里見弴の兩氏があるが　あまり垣根ばかりのぞいて歩くと時節柄不逞の徒に過まられそうだからいづれは又次の機會に譲る考へである。

以上色々と諸名家のお臺所ばかりのぞいてあるいてまさに遠島にも價ひする程の罪を犯してゐるが、それもこれも餅の上の悪い奴と思召されてひとゑに御勘辨を願ふ次第である。



我が新年の今昔

寒村に餅の木の思ひ

小川未明

すでに、青春時代にも遠さかつた、私は、年を取るのに對して、喜びを感ずることはできません。

たゞ、言ひ知れぬさびしさを、逝く年の日に覺えるのです。綺羅に飾られた、暮の街を歩るいて、ほしい物を買ひ、カフエーなどにはいつて享樂の氣分に浸るには、あまりに、私の神經は、傷められてゐます。

私の眼は、華やかな社會の外面に向くよりは、その裏に潜む、惱ましい生の鬪爭を見るからです。枯れた、桐の葉を鳴らす木枯の音ほど、幻滅を感じさせるものはありません。

年始の數日間は、仕事を休むやうに習慣付けられてゐます。實際、これはいゝことであるが、男や、女が、空々しく、昨日までの生活を一切忘れたかの如く、今日は、太平の民であるやうに、虚禮を作るのは、却つて厭やな氣がします。

新聞を見ると、社會面には、元旦匆々から刄傷沙汰があり、また、政治面には、海外諸方の亂雲が須臾も底止しないのを傳へてゐます。そんなことを知ると、尚更、矛盾した感じがします。人類の幸福のために、せめて、一樣に、平和でありたいものだといふやうな空想が起ります。

實際、私には、正月も、その他の月も變りがないのです。湯の好きな私は、毎日のやうに湯屋に行きますが、そして、疲れた頭を休めることにしてゐますが、祭日に、日曜は、人が澤山はいるので、湯にはいることの、煩はしさを感ずるから、行か

ないのですが、正月は、そんなやうな日が、幾日もつゞくのです。

それで、正月には、却つて、幾日も湯にはいらない日が、私には、多いのです。

湯屋は、私、一人の湯屋でないから、我慢するのが至當ですが、最も、私を苦るしめるのは、年賀狀を書くことであります。

書いても、書いても、次ぎ、次ぎに出さなければならぬので、正月のはじめは、重い責任を課せられたやうな氣がすることです。

私は、郵便配達人が、ドサリと音をさして年賀狀を投げて行く、その音を聞くたびに、脅威されます。どうかして、全く、これから逃れるようにならないものかと思ひますが、もらつたものには、答禮するのがあたりまへと信ずる限りは、これも、一般的に廢止しないでは、駄目と思ひます。

年賀狀廢止の同盟といふやうなものができたなら、私は、それに、はいるのかも知れません。

なんと、いつても、私は、子供の時分の正月を樂しく思ひます。

近所に、蠟燭掛の貧しい家族がありました。その一家は、主人はじめ、みんな人のいゝ者ばかりでした。

毎年のやうに、暮の空が、青く澄んだ頃、近方に立つてゐた、高い榛の木に、主人は上りました。そして、主人は、腰にさしてゐた鋸をとつて、木の上で、枝ぶりのいゝのを物色しました。やがて、ゴリ、ゴリと、枝を伐る音がしました。細かな白い木屑が、上から、寒い風に撒かれて降つて來ました。下には、もう雪が積つてゐました。

「いゝかな」と、主人は、木の上から、聲をかけました。すると、枝が、ドサリと雪の上へ落ちて來たのです。

いまゝで、木の頂きにあつて、寒い風に吹かれてゐた枝は、活々としてゐました。そして、來年の春になつて芽ぐむ、芽は堅い赤みのある皮を被りながらも、清新な感じを與へたのです。

主人は、また、鋸を腰にさして、木から降りて來ました。彼は、その枝を自分の狹い家へ擔いで行きました。

二三日すると、彼の家では、餅を搗きました。その日、この間、切つて來た榛の枝に、いくつも餅の球が付けられたのです。

「餅球の木」と、みんなは、これを呼んでゐました。また「餅の木」とも、言つてゐました。

かうした、木に餅を付けるのは、獨り、この家ばかりでなく、このあたりの町家でも、また村でも、さうするのを慣らはしとしてゐたものがあります。

これは、明る年の春まで、待たれるのでした。春といつても、僅かに、五六日間しか、その間はなかつたのです。

一月二日は、町では、買初めをしました。また買ひに行くものは、買初めをしたのでした。

その日は、前日の夜中から、町は、店を開いてゐました。そして、軒には、提燈をつけて、一年では、一番夜が明るく、賑かな時でありました。

村からは、夜、雪の中を雪靴を穿いて、町へ出かけるものもあります。手に下げて行く、提燈の上へ、雪がさら〳〵とかゝることもありました。買初に行つた者には、それ〴〵福の景品が付いたからです。

子供等は、何かもらふのを樂しみにして、夜の寒い中を起きて、眼を擦りながら、母や、姉につれられて行きました。私はよく母につれられて行きました。

「兩替、兩替、小判の兩替」

かう言つて、人通りの多い中を賣つて歩るく、子供や、女がありました。

大抵の人は、歸りには、それを求めて來ました。この小判といふのは、煎餅で、小判の形をしたものを二十枚、三十枚に重ねてあつたものです。白いのは、即ち、銀の小判で、黄色く染めたのは、金の小判であつたのです。

夜が、白むと、もう買初めは、終つたのでした。町では、戸を閉ろしました。店は、二日のうす明るくなるまでの曉だけであつたのです。

「もう、買初めも終つた」と、家に歸ると、母は、よく感慨深かさうに言ひました。私は、それを記憶してゐます。

その後になつて、私は蠟燭掛の家へ遊びに行くと、二日の買初に、町へ行つて買つて來たのでありませう。先日の餅の木の枝に、無數の金、銀の小判がぶら下つて、枝は、狹い座敷の天井張りいつぱいに、平面に、板に就けて吊るしてありました。

「綺麗だね」と、私は、思はず、言ひました。

主人夫婦は、木の下に坐つてお茶を飲んでゐました。

「今年は、何かいゝことがあるだらう」と、顔を見合つて話してゐました。

いつしか十五日も過ぎて、正月の終りになつた頃、また行きますと、まだ、餅の木は、吊るしてありました。主人は、火燵の中にはいつて仰向になつて臥てゐました。障子から洩れる光

い風が、小判を揺つてゐます。
「これが、ほんたうの金、銀の小判だといふのだがな」と、主人は、それを見ながら、溜息をしました。

いま私はこのことを思ひ出すと、昔の漁村には、まだかうした餘裕があつたのであります。

少年時の歡喜と中年時の覺醒

高須芳次郎

水都の新春に見る情趣

新らしい年を迎へる毎に過去に於ける自分の姿を振返つて見ると、さまざまの悲喜哀歡の情が泉のやうにわきあがつてくるのを覺える。年々、私の官能や感覺が鈍さを減じて、新年に對するフレッシュな氣分がうすれてゆくことを思ふと、私は故鄕大阪で迎へた少年時代の生々した新春がなつかしくて堪らない。出來るなら、も一度、少年の昔に返つて、あじ氣ない、のんびりした新年の味を身にしめて見たいと、はかなく空想したことが幾度あつたか知れない。それは恐らく私一人のみの望みでなからう。誰れに取つても、少年時代の新年が一番樂しかつたにちがひない。

私の家は貧しかつた、そして平生極淋しく陰氣であつた。一人の祖母、病父、叔父夫婦と私とが味氣ない灰色の日を送つて居た。そして私がその時分、十一歲の春を西横堀の家に迎へた記憶が今もはつきり殘つて居る。そこは大阪情調がゆたかに漂うて居た場所であつた。家は近松の戲曲のうちにも歌はれて居る西横堀川に臨んで、ガラス障子越しに稍濁りを帶びてゆるく流れる青い水やその上を輕くすべつてゆく荷船、筏などの姿が手に取るやうに見えた。對岸には材木小屋が立ちならんで居て、恰度深川の木場同樣の趣を見せて居た。物干臺へ出ると、南にも北にも橋が見えた。その橋の上をゆく人力車、荷車、男

女、牛馬などの姿も見えた。月明の夜は提灯さげて歩く黒い人影が見えた。

　家の近所に運漕店があつたので、私の家の物干臺の直下に二三の船が日毎に碇泊して居た。夜更け頃や曉に近い時分、四邊が全く靜寂であると私の枕許に櫓枻の音がはつきり聞えた。私は小供心にも、さうした音が鋭い霜氣と共に冴えて耳に入るのを喜んだ。かうした水都の情趣の多い家で私が新年を迎へたことは一つの幸福であつた。

　大阪の新年は、東京と趣を異にして居た。そしていくらか古風なところがあつた。私は其の大阪風の雜煮を愛した、食膳を愛した、二日の初賣に出る人々の群を愛した、萬歳、寶船賣や大阪のみに見る街頭の落語家らを愛した。少年時代の純眞な心はすべて新春に附纒ふ、ロオカル・カラアを素直に味ふことが出來た。

　今私はその頃の小さく痩せた自分の姿を思ひ出す。私は元旦を迎へる前夜、早く寢た。炬燵に足踏みのばして眼を閉ぢて居たが、明日の元旦のことを考へると、私はどうも眠られなかつた。樂しさが胸一杯になつて、ぢつとして居られないやうな氣がした。私と一緒に寢て居る父が鼾を立てゝ、夢の世界に遊んで居るのを見ると、私は父が新春に對して餘りに無關心であることが腹立たしいくらいであつた。

　私は取り留めもない空想の翼をのばしながら、ぢつと天井を見つめて居たが、いつか吾知らず、うとうと眠つた。程經て目さめると時計が午前二時を報じた。

大阪特有のロオカル・カラア

　私には新年の小遣もなかつた。大晦日の夜、祖母や父に請ふた新らしい手帳も買つて貰へなかつた。カルタも凧も羽子板も何も私にはなかつた。新年の晴衣とても、唯黄八丈の着物しかなかつた。それほど私は乏しかつた。けれども私はそれを一向悲しいとも、淋しいとも、不足だとも思はなかつた。唯新年のくるのが嬉しかつた。

「新春よ、早く來れ！」

と私は一日千秋の思ひをして居た。

　四時には、一同が雜煮を祝ふことになつて居るので、私はもう眠らうとしなかつた。

「誰れか早く起きてくれゝば宜いがなあ。」

と思ひながら、父の頬を撫でたり、鼻の先きへ指を觸れたりして輕く戲れながら時をすごした。が、父は尙ほ目さめなかつた。

それから半時間ばかりすると祖母が先づ起きた。次ぎに叔父夫婦が起きた。少し遅れて父が起きたので、私は嬉しく寝床から飛び出た。臺所の近くにある井戸の若水で顏を洗つた時は、餘りのつめたさに身ぶるひしたが、口を嗽いで火鉢の前へ座ると、新春の氣分が胸に滿つるやうに思はれた。そして私は覺束ない手付で叔母が餅を燒くのを手傳つた。

貧しい私の一家は、新年の調度にも乏しかつたが、唯一つ昔の榮華を思はせたのは朱塗りや黒塗りに光つて居た食膳であつた。そのほがらかな光澤、食椀に金で浮かし出した家の定紋、脚高の膳などは見た眼に冴え冴えした美しさを感じさせた。私の膳椀は父や叔父のよりは小さかつた、全部朱塗りであつた。一同とその前に座つて薄赤いランプの下で大福茶を飲み、屠蘇を祝ひ、雜煮の箸を手にした時は、すがすがしい心になつた。

雜煮を二三椀重ねてから、大阪特有の蒲鉾や玉子の厚燒（玉子燒）を味ふのが、どの位、私の味覺をよろこばせたであらう。が、私は數の子やごまめだけは嫌ひであつた。無暗に綠と紅とで彩つた美しい蒲鉾や黄金顆のやうな厚燒ばかり喰べて祖母に叱られた。

夜がほのぼの明けて、鴉がかあと大きく鳴いてゆくのが、その日に限つて長閑であつた。やがて雀が軒に囀り出して、初春の日が、ガラス障子越しに、ほんのりと室内へ柔かに流れ込んでくるのを見ると、私の眼は歡喜に輝いた。そして西横堀川を通る船の櫓の音がぎいぎい聞えるのが春めいて居るやうに聞きとれた。程經て、のつと太陽が東天に出ると、凧のうなり、羽子つく音、年禮者の足音などが次第に巷を賑はした。それらは何處も變らぬとであるが、平生よく巷に見る落語家が、小ざつぱりした木綿の紋服を着て「お目出たう御座ります。」と家毎に挨拶して廻る姿は東京にない風俗であつた。彼れは とある家の前に起つて新春にちなんだ一席の落語を町の小供らを聽客にして聞かせるのである。その男の飄逸な態度、邪氣がなくておどけた眼などを私は未だに覺えて居る。

それに二日の未明に巷へ出る初賣の群は流石に日本一の商業地であるだけに東京よりも一層賑かであつた。午前二時頃から、もう初賣の荷車の行く音や靜まり返つた巷を呼びさましてゆく人たちの聲が聞えた。

「初賣しようとてこの辛度（疲勞）よいよいよい、よいとまかせ。」

と多くの店員が合唱してゆくのが、いかにも若々しい氣分を帶びて居た。そしていづれもが新しい紺法被に元氣よく捻ぢ鉢卷して居る姿が、いかにも威勢宜かつた。黄、赤、青などの旗

を立てゝゆく車もあつた。

私の少年時代に迎へた大阪の新年は以上のやうなロオカル・カラアを帶びて居た。私は今日も、それをなつかしむのである。

重い悲痛から歡喜へ

私は十九歳の時、大阪を出て、東京へ來てから、もう二十餘年を夢のやうに過した。その間、新年を樂しく迎へたことは一二度ぐらゐのものである。新年が來ても、少年時代のやうな歡喜が私の胸によみがえらない。殊にこの二三年は、新春も平日も同じやうに感ぜられて、そこに特殊の感覺も得られなくなつた。それは私の心が次第に鈍くなつた爲めであらうか。それとも、世間が殺風景になつた爲めであらうか。

それらのうちで私に忘れられないのは大正十年の新春である。それは私が悲痛のどん底から、やつと浮びあがつて迎へた新しい歡喜の春であつた。大正九年九月、私は前後して二人の愛兒をいたましい病のために失つた。その六年前、駿河臺のある病院で新春匆々、四歳の長男を失つた苦い經驗があるので、私は何とかして一人だけでも助かるやう、佛天に祈つたのである。が定まつた運命と見えて、助かりさうであつた三男をも到頭失つた。その時の失望、悲痛は殊に深酷であつた。私は烈しい神經衰弱に陷つて、その年の十一月、千葉の海岸へ轉地した。

苦惱、悲愁のうちに大正九年は重々しく暮れた。そして悲みにやつれて青さめて居た妻と共に、さびしく大正十年の新春を迎へようとする時、私は長い默想を續けた。いろいろの惱みが、こんぐらかつて私の胸をひどく亂した。私は强ゐて自分に向つて「忍耐しろ、忍耐しろ」と心で囁き續けた。そして新春を迎へるについて私の心を一新しなければならぬことに思ひ到つた。その時、私は悲壯英雄乃木大將が日露の役に二人の愛兒を失ひながら、ぢつとその大きい悲みに堪えた心胸を思ひ浮べた。

「世の中には、乃木大將ばかりでなく、私以上の悲みや不幸に逢つた人が幾百人あるか知れない。それを思ふと、私ひとりいつまでも泣いて居られない。それに私の生は私ひとりのものではない。愚かな私にも國のため社會のため、ひろく人類のため盡すべき責務がある。それを振り切つてしもふことはどうしても出來ない。大きい悲みのために淨化せられて、元眞の我に歸つた私は新しく蘇活したのと同樣だ、それで新春から全く新生したつもりで意義ある日を送

ることにしよう。純眞な感激とよろこびとに滿ちた第一歩を始めよう。」

私はかう決心して、大正十年の新春を迎へた。元旦、私は午前五時に先づ起き出て、草庵の前にある堀井戸の前に起つた。一痕の殘月は尙ほ冴えて空にかゝつて居た、下界を見守るやうに曉の明星はさかし氣に瞬いて居た。水晶の如く澄んだ井戸の水は四邊の靜寂をかすかに破つて咽ぶやうに潺々の音を立てゝ湧き、滿ちあふれて居た。水の上に銀の月光がほのかに漂うて居るのを私はぢつと見入つた。その時、凛とした曉氣が私の頰に觸れて胸の底に泌み入るやうだつた。私は曉を大きく開いて新鮮な空氣を吸ふた。

孤獨者の祝福

近所の家は未だ眠つて居た。早大工科の講師を勤めて居る畫家K君の家も未だ起き出て居なかつた。私は殘月を仰ぎながら、さくさく音のする白い砂地を歩いた。四五分經つと、平生一番親しくして居る婆さんが起きて水を汲みに來た。その婆さんはもう七十の坂を越えて居るのだが、私と同じく一人の小供もなくて、別莊の留守番をして孤獨の生を送つて居る。「お目出度う。」と私らは互ゐに新年を祝福した。婆さんが水を汲んで、とぼとぼ彼方へ去ると私は杓で若水を汲んで桶に入れた。それを小さい臺所に搬んで、若水で嗽ぎ、顏を洗ふと、氣分が全く新しくなつた。やがて妻が起き出て、雜煮を拵えて大きな黄金盃のやうな太陽が白帆の浮ぶ青い海の下に現はれはじめた頃、唯二人、膳に向つて屠蘇を汲んだ時は、もう去年の悲痛な私ではなかつた。力弱い私でなかつた。淋しい、しめやかなうちにも、ほのかに新生のよろこびが銀線のやうに胸打つて居た。それは私に取つて全く生の一大轉機であつた。私は今もその新年を忘れることが出來ない。私は大正十二年の震火に禍せられた人々が曾て私の體驗したやうに悲痛の底から歡喜の世界へ出て快く望みの光りに輝いた大正十三年の新春を迎へんことを心から祈つて居る。大きい悲みのあとには必ず大きいよろこびがくるのである。復興の帝都よ、私はその上に幸福の太陽が燦爛の光りを投げかけるであらうことを信じて新春の前に起つ。嗚呼日はのぼる、新しい日はのぼる。

昔の人の心になりて

吉田絃二郎

子供のころはたしかにお正月の來るのはうれしかつた。五つの子が六つになり、六つの子が七つになるのは何だかゑらくでもなるやうでうれしかつた。

私たちの田舍ではちよつとした百姓家でも五俵や六俵の餅は搗くし、十俵くらゐ搗くのは普通であつた。十二月も半ばになれば村の人たちが總出で、隣りから隣りへと餅を搗いて歩くのであつた。子供たちは邪魔になるので隣りから隣りへと色々な物を借りにやられる。大人たちはそれを心得てゐて、「家にはない、隣へおいで」といふ鹽梅で、村中の家を驅け廻らせられる。

お正月と言つてもまだ陰暦を用ひてゐるので、東京のお正月とは季が少しちがふ。お正月といふ氣分は陰暦の方がゆたかである。

水車をかけて濠の水を掬み上げて、一冬の食糧として鯉だの鮒だのが幾杯もの大盥に充たされる。膳には贅こどりの川魚がつけられる。子供たちにとつては、何よりの馳走である。涸れてしまつた濠の土を掘れば色々な貝が出て來るので、あたゝかな日など子供たちは濠の中に出かけてゆく。國境の高い山には雪が積もり、蠶豆や麥が一寸ばかりに伸びて來る。

馬小屋では馬が草を食む音だけが靜かに聞えてゐる。作男たちは馬を引き出しては、一里ばかり離れた町まで土堤の上の縣道を走らせる。

町といつても小さな田舍町であるが、そこでは年の市が開かれる。父に連れられて破魔弓だの、獨樂だの、素燒きの鳩などを買つて貰ふのが、どんなにうれしかつたか知れない。獨樂の紐は麻の絲を赤く、青く染めてあつた。素燒きの鳩は尻の方から吹けばぽうぽうと寂しい聲を立てた。

凧揚げはお正月の子供にはつきものであるが、私たちの田舍では凧は二三月頃から揚げてゐた。長崎凧だの唐凧だのいふ物が揚げられた。

舊暦の正月だから、お正月も末になれば流れの水もゆるやかに動き　芹の葉が春の日の光りにかゞやくやうになつて來るのであつた。

わづかに伸びた麥の葉を南の微風がそよがせてゆくのが、恰かも眠つてゐる黒い土を揺り起してゐるやうに思はれた。

子供心には寒い冬が過ぎて、輝かな春が來るといふことがどんなにうれしかつたか知れない。

今の子供たちのやうに、美しい繪本だの、雜誌などを買つて貰ふといふことはなかつたので、殊に田舍の私たちは獨樂でも買つて貰つて、新らしい着物に着替へさせて貰つて、遠い山の雪を見ながら、國道傍で往き來の旅人でも見てゐるのがお正月の遊びといへば遊びであつた。

霜が降つて、菊が枯れてしまうと、母が菊の枝を軒の下につるして置いて、大晦日の黄昏ごろになると、菊の枝を庭に積んで火を焚くのであつた。

その習慣だけは今にも忘れられないので大晦日の夜は、どこに住まつてゐても私は菊の枝を焚くことにしてゐる。何といふ理由もないが、そうすると、しみ〴〵と年の瀬といふ感じが湧いて來る。

今ではほとんど故郷といふものを持たず、長いこと旅にばかり出てゐるので、落ちついた正月を持つこともできないが、それでも、年の暮も、押し迫つて來ると、何となしに世間といふものに引きつけられてしまつて、やつぱりお正月といふ特別な季を迎へなければならぬのだといふやうな樂しいやうな寂しいやうな氣になる。

美しく飾り立てられた街を、人々と同じやうに小急ぎに歩いてゐると、やつぱり自分も年の瀬に立たされてゐる一人だといふことをしみ〴〵と味はゝせられる。また飾り立てられた街の飾窓などを覗きながら歩くのは愉快である。

歳暮だの、正月だのいふことも理屈で割り出して見れば、そんなことのために時間を費したり、餘計な面倒を見るのはばか〳〵しいことのやうでもあるが、子供のころからの聯想があるためか、知らぬが、お正月を迎へるといふ心持ちのうちには何となくゆつたりした氣分が潜んでゐる。たまには人間は子供のやうになつて心からうれしい思をしなければならぬ。子供と一緒になつて怠惰な日を送るのもいゝことであるにちがひない。

私たちのやうに始終家から家と轉々と移り歩いてゐる者には、歳の暮だの、正月だのいふ季節は、殊更に感慨を深くさせる。去年は何々の町で春を迎へたが、來年は何處で迎たへのか知ら？など、考へてゐると、この先、もう幾度か轉々としてゐ

る間に、人生からも別れなければならぬのだといふやうな侘い感じも湧いて來る。

大晦日の夜になつて山城屋だの、丸萬あたりに出かけて行つて、お正月の賣物だけを重箱に入れて歸つて來れば、それだけで私たちの家の春の仕度は出來てしまうのである。

屠蘇は毎年親しいお醫者さんからいたゞくことになつてゐる。座敷の掃除だけすまして屠蘇を味淋に入れたり、床の間の飾りをしたりしてゐる間に、除夜の鐘が鳴つて來る。東京で年を送る者にとつて、一番しんみりとした感じを懷かせるものはあの霜夜の除夜の鐘である。しづかに響く鐘の音を聽きながら、逝く年を送る時だけはさすがに偉大な何ものかが永遠に去つてしまふのだといふ惜別の感が湧く。

元日の朝だけはさすがに靜かな氣がする。二日、三日とふたゝびあわたゞしい日がよみがへつて來る。

滅多に客の來ない深い山のまだ原始的な俤を持つた溫泉などをたづねて行つて、そこで靜かに春の數日を過すといふことは今の私たちにとつては何よりうれしいことである。

このごろ岡山の或る人から贈られた梅石の短冊に

梅白し庵には屠蘇の醉こゝろ

といふ句を見たが、いかにものんびりとした昔の人の正月の心持ちがうかゞはれる。

一茶には「めでたさも中くらゐなりおらが春」といふ感じがあつたにちがひない。まつたく私たちの生活にとつては一茶の心持ちの方がしつくり來るやうであるが、せめて正月だけは昔のまゝの屠蘇の香にでも醉ふて、あくせくした世の中を忘れ得たらと思ふ。

「蓬萊にきかばや伊勢のはつたより」(芭蕉)

何も思ふまい。何も考へまい。せめて春だけはのんびりした氣持ちで、兄弟の幸福を祈らう。隣りの人の喜びを分たう。

春をよろこび迎へるのは子供である。子供には春はこの上もなく樂しい季節となる。

芭蕉も梅石も恐らく子供のやうな心で春をよろこび迎へたであらう。

私たちの春にも喜びあれ。

いつもは忘れがちになつてゐる遠い田舍にゐる友だちのことを考へようではないか。

小學時代に別れたきりの友たちの上にも春のよろこびを分たうではないか。

いろ〳〵のいきさつから別れてしまつて、今ではたよりさへなくなつた人々をも思ひ出さうではないか。

春はすべてのものが浄めらるゝ時である。すべてのものが寛大な心につゝまるゝ時である。

すべての隣人、すべての友達の上に幸福な春を祈らうではないか。

流轉しつゝ

荻原井泉水

私は近頃、自分の俳句全作集の第二卷を出すために、舊ひノートの整理をしながら、其原稿を作つた。第一卷の體裁に倣つて、年代順に、一年一年を一篇一篇とした。各篇の始には、しぜんと新年の作が出て來る。而して其が悉く違つた家で作られてゐる。「歳歳年年人不同」といふ語はあるが、私にとつては「歳歳年年家不同」なのであつた。そんな私の生活が今更のやうに淋しく顧られるし、浮草のやうな私と一緒に流れあるいて居た妻が亡くなつてしまつた今となつては、それが懐しい思出にもなる。

大正六年の新春を私達は大井町で迎へた。その前年、私と妻とは經濟の上で母と離れて獨立の生活をしなければならぬといふ必要から、又、幼稚な反抗心や野心などからも煽られて、神田の神保町で或る小さな經營をして居たが、其がすつかり失敗してから、私は俄に隱退的な氣持にすらもなつて、母の居る私の家にも戻らず、いつその事と寂しい郊外へ移つて、學生時代にしたやうな間借生活を、妻をもつてから始めてしたのであつた。

二階住居に二階の樋の雀等よ

窓に近く巣くつてゐる雀達の夫婦にも親しみが持たれる程、田舍の生活が私達には珍しく、又氣安かつた。神保町の家では軒先を電車がごう〳〵と夜明前から地響を立てゝ、雀の聲すら聞かれなかつた。たゞ朝早く鷄の聲が聞こえるのは、二三軒先の鳥屋で肉庖丁を待つ間の鷄がときをつくるのであつた。そん

た所から逃れて來た私には、自然の淋しさや美しさが、初めて解つたやうな氣持もし、今までの追ひつ追はれつしてゐる心から、離れて、ほんとうに自分の生活や藝術を愛しなければならぬと思へば、自分の行くべき道が、其の新しい年と共に、はつきりと開かれて來たやうに見えた。

　　海を出る日に霜白き大道（だいだう）はあり

此句が元旦の筆始めに書いてある。私は實際此樣な晴々とした氣持で其手を迎へたのだが、此句の景色は又、其家の實景でもあつた。私の借りてゐた所は大井町濱川の三等郵便局の二階であつたが、其家は東海道に面して居り、その大道の向ふには少しの明地を隔てゝ、すぐに海であつた。而して、私の座敷は東に面した方（即ち街道と海に面した方）には、二間（けん）の高窓があつて、障子にはめ込んだ硝子越しに、海は横に細長く、晴れた朝などは殊に、青い色に白帆を浮かして、繪卷物のやうに眺められた。

　　淋しき妻にも新しき日記の元日は晴

こんな句も今は思ひ出の種となる。妻は神田で企てた事が瓦壞してから、凡ての希望を失つたものゝやうにしてゐた、新しい年と共に新しい生活をしよう、と私から勵まされて、强て其氣にならうと努めてゐる彼であつた。

　　母とあるくそこら各枯懷手して

といふ句も其日の作だつた。私の母は惠方詣に川崎の大師に行つた戻りだと云つて、私達の新居を初めて見舞つた。私は母を案内して私達の大井といふ所を見せた。立會川といふ藍染の水が流れて藍臭い川に沿うて行くと、畑の中に大きな料理屋があつたり、堤の下に釣堀があつたりするだけで、何も見る物とてはない所ではあつたが……。

七年の正月に、私達は品川に居た。大井といふ所は、私にはかなり氣に入つてゐたけれども、秋の大暴風雨の爲めに、其邊の被害は甚しかつた。その嵐の時、私達は前の宿から移つて、同じ濱川のうちで、電車線路に近い草原の中の一つ家に居たが、そこまでも海水が打上げて來た。夜半の不意を襲はれた事とて、疊をすりかり濡らして腐らしてしまつた。折柄友人の親戚で南品川にある家が、私達の爲めに好意を以て、二階を貸してくれるといふので、喜んで借りる事にしたのだつた。そこは荏原神社の裏手の橋の傍で、窓の下には目黑川が流れてゐた。その狹い川には上げ潮時になると、奥の製藥會社に屆ける物であ

らうか、石炭や石灰の様な物を積んだ艦が澤山に登つて來る、其船頭達が甲高い調子で、喧嘩かと思ふやうに怒鳴りあふ聲で朝の暗い内から目も覺まさせられる事もあつた。

　棹舟つぎつぎ一すぢの水明け白み

其家は貸座敷の隱居所であつたので、間取りも寬かに、住好く出來てゐた。女ばかりで無用心だといふ譯で、私を容れてくれたのかもしれない。其店の娼妓達で、病氣上りの爲めに勤めを休んでゐる者などが、よく來ては女中に交つて働いてゐた。

夜が更けると、其家から遠くない店で、藝者の太鼓の音などが賑かに湧立つのを聞きながら、私は俳句の選をして居た。子規に「吉原の太鼓きこえて更くる夜に我は俳句を分類すなり」といふやうな意味の歌がある。其もぴつたりと感じられるのだつた。

　元日の餅を燒く妻のあかぎれ

其新年の私のノートには此句が書かれてゐる。妻は夫から後になつて、「私も隨分いろ〳〵の經驗をして來た、娼妓達と一緒に炊事をしたりもした……」などゝ云つて居た。

八年の正月を私達は大磯で迎へた。品川の家にも長く居られぬやうな事情になつたので、海が好きな私は、ほんとうに海らしい海岸に出ようと、そこの郡長に俳句の上での知己があつたのをたよつて、大磯の內で感じの好い座敷を探して貰つた。やはり二階だつた。堤防に近い家で、欄干に倚ると、眼の下に大きな青い浪の翻るのを見る事が出來た。其浪の音を私は好んだ、尤も妻には初め耳について困つたらしいが、其もやがて馴れてしまつた。

　夜更け家內にこもる浪音に火を埋む

その正月には、大磯として珍しいといふ大雪が降つた。雪晴れの海の感じは實に美しかつた。右手には箱根の連山から眞鶴の岬まで、左手には三浦半島が屏風を立てたやうに曲折して、光の襞褶を作つてゐた。海も亦一枚の銀の光であつた。而して地上も唯一色の雪で蔽はれてゐる、その偉觀か、いつも見てゐる景色よりも非常に單純化されてゐて、原始的とも云ふ風な莊重さがあつた、さういふ感じを其時現はしたかつたと覺えてゐる。

　浪ゆるぎ寄る雪晴れてあり

此句は充分に現はし得てはゐないけれども……。其頃私は切

りに土の生活といふことを欲してゐた。「二階で大根も作れませんしね……」と、妻はそんな事も云つて笑つたりした。勿論、私は若干の土地を買ふだけの金は、母から出して貰ふ積りでゐたのだが、別荘敷地として賣買される其土地はなか〱高價で、そこで葱や蕪を作るには餘りに贅澤であつた。其時、一友人が横濱に佳い土地があるからと世話してくれたので、その畑地を手に入れると共に、私達は大磯を引上げてしまつた。で、九年の正月は横濱で迎へた。

　またも移り來し夫婦のなかの今は古い火鉢

私達が移轉する毎に、私達に追從して來た其火鉢もいとしい奴であつた。私の土地は競馬場の山の上にあるのだが、私達が假に落付いた家は其山の麓にある畑の中で、やはり二階を借りたのだつた。遠くに磯子の海が見え、山には獨逸人が住捨てたといふ古風な赤塗の洋館が見え、其邊の人情も大磯のやうな避暑地よりずつと純な所があり、街に出れば買物にも不自由はなく、食へ物のうまいものも數々あつた。私は土を耕しながら、そこを永住の地にしようとすら考へた。浮草のやうな生活を離れて、漸く土に根をおろすことが出來さうな希望も見えて來た。私達はバラック式の簡單な家でも作らうかなど丶、其家の主人が丁度大工なので見積らせたりした。

其内に、東京に居る私の母が急に病氣になつた。老いてもをり、全治の見込はないといふので、私達は母の家へ戻つて來なければならなかつた。而して土の生活といふ計畫も全く打捨てるより外はなくなつた。母が壯健な頃は、あまりに壯健な爲めに、私達殊に妻は強い壓迫を感じてゐたもの丶、母が動けなくなつてみると、私達は、今度はすつかり捉はれてしまつた風になつた。然し、母の病氣は決して危險な事はなく、たゞ非常に長い性質のものなので、私達は東京こそ離れることが出來ないが、私の仕事の爲めに、又、妻の爲めに別に家を借りる事にした。で、十年の正月は芝の今入町で迎へた。尤も麻布の母の許へ、私は毎日のやうに往來してゐた。

　年賀戻りし袴のままに病む母の枕べ

又

　病人身をおこしゐて靜に時移る元日

上に「妻の爲めに」と云つたのは、其時、妻が懷胎してゐた爲めであつた。是までは座敷を借りる時に、何處でも二階を望んで借りたのであつたが、此時は下の座敷の使へる家を求めた

のも、私達の生活がスピタリチーを與めようとしてゐたのだと、皮肉に見れば、見られるのであつた。

けれども、妻の希望も、産兒が死ぬと共に泡沫のやうに消えてしまつたし、其後、彼は病氣勝になつたし、家主の都合で立退を迫られるといふ譯で、十一年の正月には、私達は麻布の宮村町の、山蔭になつた谷底のやうな所で、死兒の喪中の事とて、松飾もせずに淋しく引籠つてゐた。

喪中の春の屠蘇少し淋しき妻にも飲ませて

それから後の事は、前號に書いた事もあるから爰には書くまい。兎も角、私と妻との此十年程の生活は、よくも斯う諸所を移りあるいたものだと思はれる程である。自分の句集の原稿を作る爲めに、舊いノートを讀直して見て、つくぐ＼と共棲を感じてゐたのに、其流浪の伴侶であつた妻に別れて、私は又も新しい年をなへようとするのか――。私は上に「歳歳年年家不同」だといつたが、今となつては床之間の詩句にあるやうに「歳歳年年人不同」であつた、而して同じ詩の中にある「今年花落顔色改、明年花開復誰在」といふ古い觀念的の感想さへ、今の私には新しい體感として味はれる。あゝ、其としても、人間の生活が頼りないものであればある程、私は生きの命の心に觸れた刹那刹那の感銘を言葉に燒きつけた自分の俳句がかはゆくなる。私は新年と共に世に出る筈の自分の句集に『流轉しつゝ』といふ標題を與へようと思つてゐる。

王春今昔

竹久夢二

春に隣りする心持など、もういつか實感に遠いものになつてゐる、ただ、年の暮れてゆく姿ばかりが眼につく。

いつもながら、場末の唐物屋にメリヤスの肌着が積まれ、大賣出しの立札がたてられ、三等郵便局の貯金口に見馴れぬ人が

つどひ、南京豆の空袋が、風にふかれて露地を走る風景の中では、街角に傾いたまゝ突立つた瓦斯燈よりも、人間は忙しいと思ふことだ。

もしそれ、新開地の洋食店のバルコンで廣告樂隊の奏する「煙も見えず」のマーチでも、うつかり聞されたら、今でさへとんでもない涙を流さうも知はぬ。

といふのは、まだ家を持つたばかりの年の暮れに、その頃W大學の政治科にゐたNが來合せて、細君が鏡臺の引出しへしまつておいた正月餅の代を見付けて、どこかの斜めの細道で、「破門さん」と呼びかけられたのをけつく、好いしほにして、あくる日のまつ晝間、王道坦々と歸つてくると、家の近所の新開の洋食屋のバルコンで、件の「煙も見えず」の音樂だ。氣がとがめて、懐手で、政治科と二人で、空腹でものが哀れで、子供に交つて、ぼんやり樂隊を眺めてゐると、師走の二十九日のことだから、赤い手柄をかけた艶々の丸髷の女が、折も折．にこやかに近づいて來るのだ。それが細君で、譲葉と小松を一本、心ばかり淋しく提げた風情を今も忘れない。

依然、その日暮しの破門さんは、シルクハットを被つて伺候する光榮も持たない代りに、年始の禮を缺く謂れもない。だから東京の新年の記憶と言へば　街ががらんとして、大禮服を着た兵隊が晴がましく歩いてゆくのを思出すくらいなものだ。昔下宿屋の二階でよんだ、紅葉や一葉の作物の中にある東京の春の抒景は、もう古典になつたほど、今の東京の新年は、商取引と年期事務としてあるに過ぎないと、思はるる。

富士山の見える四日市場に、紀州の密柑船がつくのさへもう見られまい。

生れた國の方では、年の暮になると、母親の里から、姉の嫁入先から、男の子のために、破魔弓を贈られるのを樂んだものだ、あれが春をまつ心であつたであらう。奥の坐敷の炬燵へもぐつて、皮のすこし酸い雲州密柑を食べながら、酒倉の方で、もとをかく杜氏の唄を聞きながら、脛をまく老人の心境とはまた異つた心で、もういくつ寝たらと指を折つたものであつた。姉の嫁かぬ前には播州室津からきてゐた師匠が、いつも炬燵の女王で、「やしよめ、やしよめ、京の町のやしよめ」を唄つたものだ。

ある年、祇園の朮詣に、一家女中まで引連れて、朮の火を持つたまま、終夜運轉の京坂電車が嬉しさに、道頓堀のおそい茶屋で年越そばを祝つて、住吉へお詣りすると、ほのぼのと夜が明けはなれ、太鼓橋の上で初日出を拜んだ。ほがらかな心持でとうとう和歌浦までいつてしまつた。三ケ日の雜煮もそこ

で祝つて、

「正月にはどうも生れた土地の米が食べたい」そんな事で、大坂から女中だけ京へ歸して、岡山まで、正月の餅を食べにいつたものだ。親も兄弟もそこにゐるのではなかつたが、心豐かな友達がゐて、その山莊へ私達を迎へて、匂のなつかしい備前米を食べさせてくれた。それから病みついて（それが原因でといふ意味ではない）有馬の湯に二週間ばかり、京へたどりついたのは、二月の下旬でもあつたらうか。

「それまで蒼朮の火を消さないで持つて歩いたといふお話でせうね」とこの話をきいた友達がある時言つたが、蒼朮の火はもとより、その時の道作れであつた家刀自はもはやない。

「年の名殘りも心細けれ、亡き人の來る夜とて魂まつるこそ、あはれなりしか」とあるものの本を思出すのである。

附記。蒼朮の火といふのは、祇園社に大晦日の宵から元朝寅の刻へかけて行ふ削掛の神事に、一切の凶惡を除祓ふために、この削掛の火を參詣の人々が蒼朮（不詳を除く草にて火繩のごとく作りたるもの）に移して、その火を消さぬやうに持つて歸つて、元朝の粢を炊ぐ。そして火を一年中絕さないやうにすると幸運があると言はれてゐる。

わが新年の今昔

岡本一平

七つの歳から東京の下町に育つたが新年に就ての好感を持つて居ない。第一正月になると、世間が俄に納り返へり儀式態をつくつて什舞ふのが白々しく寂しいからだ。

子供の時よく遊びに行つた鼈甲屋といふ店がある。往來へ開けぴろげにした仕事場に向ひ合つて三つづつの爐火が熾してある。上に鐵板が載せてある。一番奥に苦み走つて權幟持らしい親方が坐りそれから親方の坐に離れるに從つて一番弟子二番弟子と位が低くなる。一番入口の重公なぞは仕事場に坐るより走

り使ひの方に用が多い。

われ等は小學校から歸るとすぐそこへ遊びに行く。五月蠅がられ乍ら怒鳴られ乍らその仕事場に絡はつて暮す。仕事場の仕事は鼈甲の片々を大きな鐵のやつとこで鋏み付け爐火の上で熱合するのであるがそれを非常な興味を持つて眺め入つた。熱し切るとやつとこを傍の水桶の中へ突込む。熱鐵と水との阿鼻叫喚が縮り締金を外づして開けて見るとやつとこの口から琥珀色に透き通つた分厚の櫛が閉に一つ生れ出るのだ。出來立ての櫛は柔くてほか〳〵して生れ立ての赤ン坊のようだ。何といふ奇蹟だらう。それは都會の子供の小さな世界に生命感を與へる一つのものだつた。

又、櫛を接ぐ前に形の大きさに適當に削つた鼈甲の小片れを親方も弟子共も吃度口の中へ入れてしばらく嘗め返へす。嘗め返へし乍ら少しもそれに氣を取られず手は手でやつとこを裏返へし爐火に炭を入れ添へる。その物慣れたさまは如何にも大人らしい落付きが見ゑ羨しくて仕方ない。そして口の鼈甲がいかにも美味そうに見ゑる。である日彼等の食事休みの時間に彼等の仕事坐蒲團の上に胡座を搔きそのようにして見た。口へ入れた鼈甲は存外冷い滑かさで美味くなかつた。然しそうして見た氣持ちはしばらく子供を大人にした。

癇癪持ちの親方は一々弟子達の仕上げを受取つて批評した。辛辣で齒切れがよくてのつ引きならぬ警句が種々意地惡るく引結んだ親方の口を破り出た。親方はよく猥褻な比喩を用ゐた。われ等は評言の痛快味を貪り聽きつゝ、且親方の言葉の猥褻に渉る事を窃に希求した。

弟子は無闇に末弟子の重公を擲つた。頭を覆ふしもやけの指が裂け血を顏に滴らしつゝ悲鳴を上げる重公の姿は絕望的に見ゑるが擲られ終るともう口を翻へして反抗の態度に出る。重公の執拗が子供には判らなかつた。重公は非常に偉い人なのではないかと考へた。

重公の悲鳴が極端になる時には奧の障子を細く開けてかみさんが顏を出し微笑し乍らたしなめた。このかみさんはきりようはよかつたがいつも一方には世間を憚り一方には熱情を否定すゑような微笑を湛へて居た。故に彼の微笑は空虛でつまらなそうだつた。親方がその養子――自分の遊び友達――に盲目な愛を注ぎかけるのを彼女は矢張りこの微笑をもつて眺めて居た。然し職人達は親方の癇癪より彼女の微笑に一目置き、よくいふ事を聽いた。このかみさんも親方から苛まれるかして奧から時々忍び泣きの聲が洩れた。

都會の子供にとつてはそういふ人事のいきさつが田舍の子供

の山野に對すると同じやうな親しみを覺ゑるといふよりは生きるに是非無くてはならぬ空氣であつた。人事の葛藤が却つて自然で自然の山野を見ると却つて不自然な氣がした。だから遠足の時郊外の自然の中に出ると摑まへ處のないやうな不自然な天地から別のものを見せらるゝやうな氣がした。

それが正月になるとみな改まつて仕舞ふ。鼈甲屋は表の半戸を下す。仕事場は片付けられ何處にも見受けられる。平凡な正月の飾附けがしてある。

職人達はみな外み出して仕舞ふ。重公は商店の子僧と同じやうな襟目のついたお仕着せに角帶を締め前垂れをかけて仕舞ふ。重公が鍵裂きをした内人のやうな筒袖を來て職人に揶られて居なければ重公の價値を失ふ。また、重公として親しめ無い。一事が萬事だ。自分は鼈甲屋の正月の仕事場にまた世間の正月に遠足へ出て自然に對した時と同じやうな物足りなさを覺ゑさせられた。物足りなさの上に鹿爪らしく裝ふのが月並で嫌だつた。町並に一軒三十五錢づゝで鳶頭が請負つた門松が整列する。年始客は上等のは山高に毛皮の際卷のついたトンビを來て年玉入れの大風呂敷を首に釣つた子僧を從へてる。下等のほ紋附ばかりで袴も穿かず年玉も自分の懷へ入れそれを玄關でこそ〳〵と出す小商人と定まつて居た。藝者達――自分の育つた家は藝者町にあつた――は一列に白襟紋付に扮裝つた。子供心にも可愛らしいのが氣に入つてよく宵闇に彼女の住む家の前を覗きに行つた。若い藝者も紋付を着た。すると彼女の少女らしい顏が服裝のぎやう〳〵しいのに負けてその上厚化粧をしたから首を胴へ打込まれた木偶人形になり悲しくあつた。

頓て自分も袴羽織に扮裝たせられ學校で白々しく『年の始め』の唱歌を唄はせられ歸つて來ると若い叔父に連れられて年始に歩るかせられた。軒下の溝板でめんこをして叱られて以來世にも意地の悪いかみさんだと思ひきはめてやらうと決心した。地主の家の玄關へも入らねばならぬ。そしてそのかみさんに挨拶せねばならなかつた。

凧の遊び、かつるた、双六の遊びといふものに興味が持てなかつた。といふのは自分は一體不器用でその上勝負事には氣臆れする性質なのに人一倍勝つ事が好きだつた　負ければ直に勝者の上に深い嫉みと憎悪を感じ復讐に悶へた。遊びの心では居られなかつたからだ。

脂濃くて小味のあるなつつこい物菜の好きな自分であるのに正月の取すましたおせちは食事時を果敢なく思はした。

中學時代には大晦日に貰つた正月の小遣ひをその夜の年の市で大部分遣ひ果し面白かるべく期待した正月が一向面白からぬに噴飯し、輾轉んで不逞な冒險事業や戀愛事業やの空想に費した。

美術學校時代は藝術的野心と女に對する慾求とのあへぎを僅に酒に洩して居た時代ゆゑ、年の暮が來ると『正月よ、來れ飲まん』と銀座の加六や根津の推茸めしの卓上て杯を叩いて宣言した。來つた正月の情勢や推して知るべし。

家庭を持つてからしばらく、正月元旦の雜煮の膳を狹み家人と改まつて眞面目な顏をつき合せるのが困苦に降服するようで厭味で閉口した。元日から刊行物の仕事があるので世間の正月を嘲笑してた。この五六年來閑に正月を正月として迎へる氣構へが出來て來た。元日一日だけはどの宴會も斷り家に居る稽古をした。

震災後の第一年なる來年の正月を早く來れと待構へてる。震災は自分の思想に現實へ力足を踏み締める必要を深酷なる手段で教へて吳れた。來年の正月はその力足を踏みかける第一段の丁度爪先をかける處のような氣がしてる。

わが新年の今昔

西條八十

山の手の一商人の子として生れた私の、幼時の新年の回想は極めて平凡である。

その頃山の手にはまだ青草の生えた空地が多かつた。私はそこで、今の子供たちよりは恐らくもつと元氣に凧をあげた。併しながら私の家の周圍は、門並所謂士族町でそこのお坊ちやんたちは、商人の倅である自分を蔑視して「町ッ兒」と稱んだ。

さうして容易に仲間へ入れて遊んでは呉れなかつた。同じ種族である「町ッ兒」の友達を誘つて來べく、かなり僻遠な地にゐた私は、新年の三ケ日をほとんど孤獨で、その空地に凧をあげ風さむい夕空に伴侶(つれ)も無く淋しいうなりの音を聞いてゐた。

プレット・ムート「は幼年時の孤寂感ほど絶對の孤寂感は無い」と云つたが、今でも幼年時の新年を回想してまづ思ひ浮ぶのは、この幼稚な階級意識に齎らされた堪え難い孤寂な三ケ日の記憶である。さうしてその頃の反抗的な「町ッ兒」魂の名殘りは今なほ自分の心の一隅にそのまゝに止まつてゐる。

併しながらその間に在つて、「町ッ兒」の自分を意氣軒昂たらしめたものは、わが家の盛なる、初荷であつた。私の記憶にして謬なくば、私の父は東京に於ける最も古い石鹼製造業者の第一か第二位に在るものであつた家にはつねに三十人近くの所謂「小僧」「中僧」がゐた。

元旦幼い私の夢を破るものは、これらの小僧中僧が、工場から奥座敷へと續く長い廊下を堵の如とく私をなして主人公である父に新年の御慶を述べに來る、その賑はしい物音であつた。臥床から首をあげると、老いた父は床の間を背にして座し、その傍には母が甲斐甲斐しく侍してゐて來る者毎に、新しい入とシヤツ、それに大きい慰斗餅を二枚づゝ添へてわたすのが見られた。俗に二石を搗いたと云はれる新年の歳末の餅搗き、及び次に叙する正月二日の初荷こそは、幼時の自分にとつて何よりも樂しい行事であつた。

二日の朝、まだ眞暗な曉に自分と弟とは搖り起されて、新しい春着を着せられた上、風邪を引かぬやう、外套やら毛織の襟卷やらをぐる〱卷きつけられる。さうして店先へ伴(ともな)はれてゆくと、煌々と點じたラムプの光の下に、家の若者たちはもとより、町内の鳶の者、ほか出入の者たちが、新しい絆纏を着、已に一杯機嫌のいい顔色をして、大火鉢をとり圍んでゐる。さうして眠い目を擦り擦り出てくる自分を見ると、奪ふかのやうにその大きな幾本かの手が、抱きかかへて、車のその上に載る特別に高くしつらへられた函の中にすつぽり入れる。そこは數十臺並んだ初荷の車の先登である。華やかに飾られた馬が暗の中にチヤラン〱鈴を鳴らして、寒げに嘶いてゐる。私と弟とは寒いのでひつたり身體をくつつけ合ふ。さうして頭上の星空にパタ〱ひらめく幟旗(のぼり)を見上げたり、また工場の人たちが、奴だの、御殿女中だの、若侍などに假裝したなりで、なほいろいろと荷物の積込に斡旋してゐるさまを可笑しく眺めたりする。

今か今かと思てゐるが、車はなか〱動き出さない。そのうちに兩人(ふたり)はいつか眠氣がさしてうと〱とまた寢込んでしま

ふ。やがて賑やかな囃子の音がに、ハッとして覺めれば夜は白々と明けて、私たちの行列はいつか神田の大通りあたりの新春の賑ひの中を進んでゐる注連飾りの下に、商店の小僧や、美しい島田の娘や、見知らぬ町の見知らぬ人たちが、羽根つく手をやめてもの珍らしさうに一行を眺めてゐる。……

かうした初荷の一行が休憩するところは、自然取引上に特別な親交のある店であつた。その或る家に「おせいちやん」といふ稚子輪に結つた可愛いい娘がゐた。たぶん馬喰町邊であつたらうか。この娘は私よりよほど年嵩であつたが、毎年きまつて寄る自分をひどく可愛がつてくれて、よく熱いお汁粉などをこしらへてくれた。で、その頃の私の初荷の記憶にはきつとこのおせいちやんが作つた。そも〳〵の初で戀あつたかどうかそこは判然しない。

私の文は門徒の凝りかたまりなので、新春の注連飾りは勿論床に供餅一つ置かせなかつた。私はその寂しい慣習をいまだに守りつゞけてゐる。だから新年になつても家にゐては格別ふだんと違つた氣分にもならない。兩三年前までは妙に歳末から年始へかけて旅行したくなつて出かけたが、この頃は却て家に籠つてゐて、何ともまとまりのつかない、ぼや〳〵したあの新春の氣分を味ふ方が好きになつた。その中でも多少ほかの人と違ふかと思はれるのは、毎年一月四日には定つて初立會を見に株式取引所へ出かけることである。これは新春の發會の時に限らず、納會の場合にもさうだが、客も役員も地場の者たちも一緒になつて、シャン〳〵〳〵と拍手でしめるあの景氣のいい調子を聞くと、何とも云へずスーッと胸が空いて、ほんたうに新春の氣分、――或る舊い時期と新しい時期と截然と區劃されたやうな氣分になるからである。

商人の子として生れた私が、あの拍手の氣分を愛するのにも何處か運命的なものが潜んでゐるのであらう。

大正十三年の新春は今から想うても寂しさに堪えない。秋喪つた愛兒の記憶は五月の青葉のかげのやう、日に夜にわが胸に濃くなりまさる。おそらく私は、過日ある處に書いた。

都に灯なく
夜に音樂なく
家に愛兒亡し

の句を默誦して、七草を巨燵に籠らう。



讀史餘錄

菊池寛

坂崎出羽守

家康の娘千姫を大坂城中から救ひ出し、その褒美に千姫を呉れる筈の約束を、家康に破られて、憤慨し非業の死を遂げた坂崎出羽守は、同情に値する男だと思つてゐた。が、その後、坂崎が宇喜多秀家の舊臣で宇喜多左京亮と云ひ、たとひ主君が惡ひにもせよ、主君を捨て家康の旗下に走り、關ケ原の役には、主君を敵として戰ひ、戰功あつて石州津和野三萬石を得た男だと云ふことを知つて、自分の同情はいくらか薄らいだ。二女あり、共に美麗と云ふから、講談で云ふほどの醜男でもなかつただらう。天樹院に嫌がられたゝめ、忽ちにして日本無双の醜男になつたのであらう。この坂崎の處分について幕府では坂崎の家老達に家名を立てゝやることを條件として、坂崎を弑せしめようとした。老中本多正純丈は、名分の上からかうした命令に連署することを拒んだ。

越後少將

徳川家將軍の連枝であつて、悲慘な終を遂げたものに、家康の九男越後少將忠輝と駿河大納言忠長がある。忠輝の母お茶阿は、遠州金谷村の商人の妻で、美貌のために代官に懸想されそのために夫は非業の死を遂げたほどの女だが、忠輝は容貌恐ろしく、家康が一旦捨てたのを、家臣の皆川何某が捨ひ上げて育てたのである。長じて、捷勇人に越え山野に狩すると熊狼を搏ちにしたが、たゞ鎧武者を見ると、手足すくみ、怖れをのゝく癖があつた。武將としては、致命的な癖で、そのために大阪陣にも遲參して、家康の不況を買つた。その上、江洲守山にて故なくして、將軍の近習を斬るなど、惡行が多かつたので、改易になつた。勢州朝熊の麓に流されたが、天性水泳を好み、不時に海中へ飛入つて一日二日も歸らず、守護の輩を駭かしたと云ふ。鎧武者を怖れた事と云ひ、海中に一日二日もゐたと云ひ、家康の胤ではなくして、獺か何かゞ家康に化けて、お茶阿殿に通つたのか。

唐人

越後少將の惡行は、諫臣を斥け、籠臣花井遠江守を用ゐたためだと云ふ。花井は幼名三五郎と云ひ、八官と云ふ唐人の子だと云ふ。容姿美麗で、忠輝の母お茶阿殿と通じ非曲が多かつた。家康の最初の妻、築山御前が家康に疎んぜられて、通じてゐた男も、減敬と云ふ唐人醫者である。然らば、この時代には、多くの唐人が日本へ入り込んでゐたのであらう。そして、日本大名の夫人と接近し得るほど、それほど勢力を得てゐたのだらう。

駿河大納言

家光の弟、忠長の悲劇は、境遇悲劇で、父母の溺愛が生んだ悲劇である。當人には、可愛いさうである。世嗣にする

やうに甘やかし、手の付けられないやうなわが儘にし、さて天下を譲らなかつたのであるから、當人が不平滿々亂暴をしたのは無理もない。ある日、鷹野に出て、獲物少く、つまらない上に、午後になつて曇つて寒くなつた。寺へ立ち寄つて、焚火をすることになつた。小姓の小濱七之助が、火を起さうとしたが、薪が前日の雪でぬれてゐるので、いくらあせつても火がつかない。けむること甚しい。七之助が圍爐裡へ臨んで火を吹いてゐるところを、忠長卿脇指を拔き小濱が首を爐中へ斬り込んだ。殘虐も甚しい。が、忠長の心持が分らぬでもない。清水八右衛門當番だつたので、死骸の始末をすると、忠長は今度は、清水に火を焚かした。煙がいよ／＼立ち昇り、少しも燃えないので、すは清水も誅せられるかと諸人、手に汗を握つてゐると、此度は事なく歸城した。その後所領を沒收され、上野高崎城に移されて、自殺せしめられた。

稻富喜太夫

鐵砲の名家稻富喜太夫のことは、三島章道君の戲曲「稻富喜太夫」で有名になつた。喜太夫は、火術の名人稻富の一夢の子で、幕府に召出されてゐた。同じ鐵砲の名家井上外記と門弟のことから不和になつたのを、旗本の長坂血九郎小栗長兵衛などが仲裁に入り、小栗の家で手打の酒宴を催したところ、先輩で、故參だと云ふので、仲裁の盃を先づ、稻富に廻したので、井上外記が腹を立て、即座に長坂と稻富とを切つて捨て、自分も小栗に打たれた。仲裁の席には、盃を二つ用ゐるのが古法で、伊達政宗と旗本の兼松又四郎が私儀の席上でさへ盃を二つ用ゐた。況んや旗下同志で、盃が前後したので井上が憤慨したのだらうと云ふ。尤も、喜太夫は殺されても、稻富流の火術は、長く傳つた。もつとも火術は、二百年少しも進步しなかつたと見え、新しい流儀などは起らなかつた。維新の際、劍客の齋藤彌九郎が長州藩へ

西洋砲術を採用することを勸めたところ、稻富流の鐵砲の先生が大反對をした。

浪人

慶長元和以來、年を經るに從つて、浪人を抱へるものが、だん〳〵なくなつた。一方、諸家の取潰しで、浪人は激增する。從つて、車上を稼ぐ浪人は、江戶へ殺倒して來た。浪人の求職難は極點に至つたらしい。それで彼等のある者は、江戶の大名屋敷に押しかけて行き「永々浪人し生計に窮したから切腹する故玄關先を拜借したい」と云つたものだ。最初はそれが眞劍な武士氣質から出たものとされて、あはよくばその家に抱へられなくとも多少の合力にありついたのだ。所が、おしまひにはそれが、浪人達のユスリの手段になつた。ある日、井伊掃部頭の屋敷へさうした浪人が來た。赤備への勇武未だ衰へざる井伊家であつたからたまらない。望みに委せ玄關先を借さうと云つて、浪人を捕へて切腹させてしまつた。こんな事が、二三あつて諸侯へ浪人が推參することが絕えたと云ふ。

親殺し

黃門光圀が、親を殺したものを捕へて所刑せんとしたら、その者が他人の親を殺したのなら罪にもならうが、自分の親を殺したのに罪になるのは不服だと云つたので、光圀がその無學を憫んで、儒者に托して三年學ばしめたところ、その者が人倫の道を知つて自ら所刑を受けんことを願ひ出たので、改めて刑したと云ふ話は有名である。が、乃祖の家康にはこんな話がある。やつぱり親を殺したと云つて捕へられた者があつたが、家康は中々親は殺しがたきものなり、何か仔細あらんと聞いたところ、過つて傷付けたのが因で、死んだと云ふことが分つたので、死刑を宥め遠流にしたと云

ふ話がある。光圀と比べると光圀は何となく道學者で、家人の方が眞に人間を知つてゐる大政治家と云ふ氣がする。「中々親は殺しがたきものなり」と云つて、頭から親殺しを否定してゐるところが、光圀のやうに親殺しを致命的な大罪とし、改心したものを刑してゐるに比して、どれほど人間的だか分らない。自分も人並に秀吉びいきで、家康はきらひだが、きらひながらも家康のかうした偉大さを認めずには居られない。

親心

黒田如水が、死病になつてからは、隨分周圍の者に辛く當つた。それは、自分に歸依してゐる家臣の心を、自分から放して子の長政に思ひつかせんと云ふ親心だ。あまりに策略的で少し不愉快だが、家康も同じことをした。晩年になつて、賞めるべきものを賞めず、當らざる者を叱つた。本多正信が不審に思つて訊いたところ「父より秀れたる子にても、他人は左樣には思はぬ物也やはり父の方秀れ子の方劣れりと思ふなり、秀忠我より秀れたれども家臣は我を秀れたりと思へば、秀忠に奉公自然と怠るものなり」だから、心に在らぬ無理を云つて、秀忠が自分より秀れてゐることを家士どもに知らしめてゐるのだと云つた。

名君

德川時代の侯伯の中、名君を以て稱せられたる者可なり多いが、何と云つても、德川賴宣、同じく光圀、池田光政の三人を以て、天地人三才に押していゝだらう。將器としては賴宣を第一とし、文に於ては光圀尤も秀れ、人間を知り仁政を布いた點に於ては、光政を押さねばならない。

池田光政

光政あるとき、家臣に向ひ、近頃の我に大なる過ちはなきかと訊いた。光政としては、諫を入れる緒を開いたのである。所が泉八右衛門と云ふ家臣がゐて、「恐れながら、それが嫌にて候」と云つた。光政は、少し顔色を變へ奥に入つた。八右衛門は翌日遠慮して出仕を控へたが、光政は直ぐ使をやつて、登城を促し、談笑の常の如くであつた。光政の宏量もさることながら、主君の名君意識をやつ付けた泉八右衛門もありがたい家臣である。この泉八右衛門は、光政から評定所の列座に申付けられたが、一度も物を云つたことがなかつたので、諸役人が無益の事に思ひ、あれなら八右衛門を陶器に作つて、をく方がいゝと云つた。光政が是を聞いて、八右衛門が前にては、假初にも虚妄のこと云ふ者あるべからず、八右衛門が云はざるは云ふよりもよしと云つた。

また光政があるとき、蕎麥を喰ふのを嫌ふので家臣がその故を尋ねた。光政が答へて云ふのには、先祖池田勝入が長久手で討死したときは、蕎麥畑で討たれたのだ、だから、自分が蕎麥が喰ひたくないのだと云つた。すると家臣の一人が、「さてさて御先祖勝入齊殿は、蕎麥畑で討死されたので、眞に仕合せであつた。若し、稲田の中であつたなら、殿は一生米が喰はれまじいに」と云つた。光政苦笑して座を立つたと云ふ。

徳川頼宣

頼宣は、大阪陣に出陣したほどの年輩丈に、戰國の氣去らず、光國や光政に比べると亂暴なところがあり、家臣なども手打にしたことがある。尤も、光圀も藤井紋太夫を手刄したことなどもあるが、それは家國のために奸臣を誅したのであ

つて、私憤ではない。賴宣はある日、鷹狩の歸りに、大小姓の間宮久彌を迫りながら叱つたのを、久彌が直ぐその跡で舌を振つたのを賴宣が殿目に見たからたまらない。口をゆがめ嘲り候は八幡遁さぬと、たゞ一打に成敗した後、眼色血を注ぎたる如くにて家臣に向ひ、われ久彌めを手討にしたのは、道理か非道か云へと云つた。家臣達、みな頭を地につけ、恐れぬ者はなく、一同は御尤も千萬と云つた。その中で、高井伊織一人丈、うはがはぬ顔にて、頭を上げてゐるのを賴宣が見て、つか〳〵と進み寄り、おのがつらは我を尤と思はぬ貌なり、我が無道か云へと問ひ詰めた。伊織が答へて云ふのには、久彌の罪は勿論だから、成敗に異議はない。だが、成敗するのならなぜ人に云ひつけないのか。武將のことだから、戰場で手を下すことは支方がないが、平生の時に、從三位中納言の高官に在る身が、自身で手を下すなどは、朝廷に對しての無禮不義、たゞ〳〵御武運の末と思ふと云つて涙を流した。賴宣も道理に詰り、奥に入つてから伊織を呼び、汝が先刻諫め申すところ道理至極した、自今一代の裡、手討は決してしないと云つて誓つた。その後、伊織は日向へ下向の途中旅館で他と喧嘩し打果して死んだ。本來ならば、改易になるのだが、賴宣は諫爭の忠を思起して、娘に養子をして、家名を立てさせた。

賴宣には、同じやうな話がある。賴宣は、ある日家臣の家で秘藏の名刀備前長光で以て、自ら試し物をした。水も溜らず切れたので、家臣一同ドッと賞めた。賴宣が得意になり、家臣の那波道圓に向ひ、異國にもこんな利劍があるかと訊いた。道圓が異國にも利劍は澤山あると答へた、賴宣その答に滿足せず、それならかやうに、手づまきゝて人を切るに妙を得たものがあるかと訊いた。道圓はそれもあると云つた。何と名を申したるぞと重ねて尋ぬたので、それは夏桀王、殷紂王と申すもので、人を殺し慰みものにした大惡人だと云つた。賴宣氣色變つて、歸城したが、その夜道圓を召し、忠言を淺からず感賞した。

由井正雪謀叛のとき、頼宣の判鑑を似せたので、幕府の頼宣にかけた嫌疑は可なり重かつた。評議の日は、屈強の兵數十人を城中に伏せて頼宣の登城を迎へたほどである。が、頼宣は宿老達が列座の前で、正雪が作つた謀書を殘らず一見し顏色打とけ「さて〱見出度きことかな、もはや御氣遣無之候、その仔細は彼徒黨人外樣の大名の判を似せ謀書致し候ねば、三代の恩を忘れ、逆心を忘て候よとお疑ひもあるべかれば、我等判を似せ逆心とたばかり候上は、上の御氣遣ひは少しも御座なく候。さ候はゞ無事に相濟み候」と云つてのけた。一座のもの、智勇剛强の雄辯に舌を振はぬものはなかつたと云ふ。後で、老中が退城のとき、酒井讃岐守が、井伊掃部頭に「掃部殿〱唯今の紀井殿の挨拶如何お聞きなされ候や」と云ふと、掃部頭たち留り「あれにてこわがる事にて候」と云つた。頼宣の聲望が柳營にはばかられてゐたかゞ分る。家康以下、徳川家に於て第一人者と云ふ氣がする。

徳川光圀

光圀の家臣板倉宗臍と云ふものが、ある日光圀の前で、獨言のやうに、大名と云ふものは格別堪忍性の强きものなりと、繰返し〱云つたので、光圀はそれはなぜかと云つて訊いた。宗臍答へて云ふのに、自分のやうな賤しい者は、何もかも間近く差置いてあるから、直ぐ用事が足りるが、御大名方は、それ〱の役人に云ひつけ、入用の物を取寄せるには、一時二時も待たねばならぬことまことに、堪忍の入ることだと云つた。光圀は、それは眞にさることなりと云つた。宗臍それよりも、もつともつと感心してゐることがある。それは主君たるものゝ仰せらるゝ事を、臣下達が善惡共に何に依らず、御尤も〱と申すを、よく御堪忍なされ候と云つたところ、何とも答へなくたゞ會心の微笑を洩した。自分は、曾てかうした大名のやり切れない孤獨境を「忠直卿行狀記」で描いたが、光圀の如きはさうした孤獨境を

卒業してゐたと見える。

ある時、水戸にて若侍四五人寄合ひ稽古してゐたが、皆草臥れて寢てしまつたところを、出入の町人が來て、刀を悉く盜んで逃げてしまつた。若士達は、士道を失ひしこととて、皆切腹を覺悟したのを、光圀は聽いて、誰とても寢入りしときは、止むを得ざることなりと云つて事もなく許した。

食膳

鎌倉時代の將軍の食膳の御馳走は、鮭の干物であつた。德川幕府の初世にも御馳走はなかつたらしい。池田新太郎光政が、初めて秀忠に目見をしたとき、勝手へ行つて飯を喰やれと云はれたので、勝手へ行つて料理を頂戴したが、獻立は無汁、大根膾、あらめの煮物、干魚の燒物であつた。

改造社近刊書

超克　倉田百三著　十二月下旬發行

農村法律問題研究　末弘嚴太郎著　一月下旬發行

アインスタイン全集（第四卷）石原純外三氏編譯　十二月廿日發行

アインスタイン全集（第三卷）石原純外三氏編譯　目下印刷中

日本社會史　本庄榮次郎著　目下印刷中

改造社

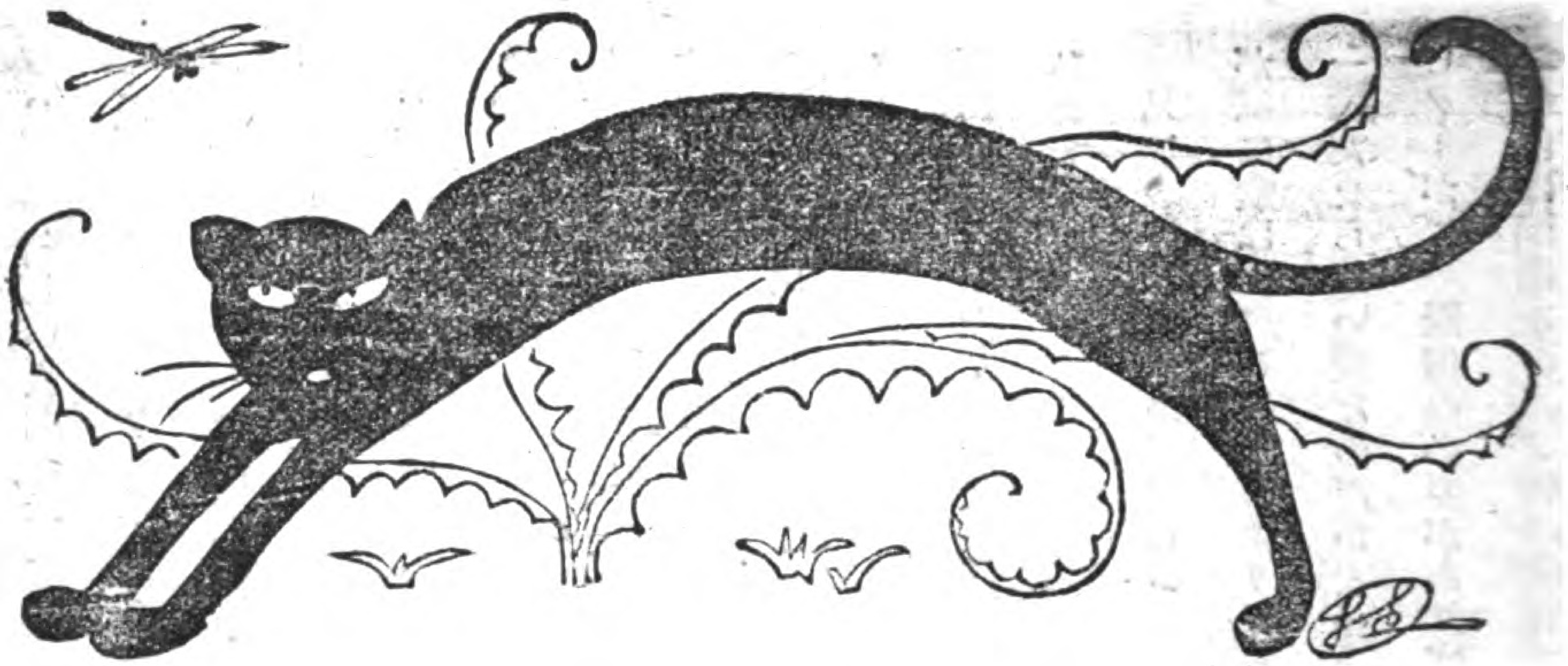
『文藝論』連載

人と書と

芥川龍之介

二月號より芥川氏の一大心血を濺げる文藝論「人と書と」を連載します。芥川氏が我文壇の第一人者であることは誰でも認めてゐる所です。そして氏の藝術論が特絶の名香を有することも否み得ない所です。氏は本題の下に作家と作品を通して見た文藝論を、毎月執筆して下さることになりましたことは本誌の光榮とする所であります。

女性改造



縛られた者と解く者

野上彌生子

兄　巨人プラミシュース
弟　巨人エピミシュース
女　パンドラ
愛の神　キューピット

兄と弟

兄　エピミシュース、お前はヂュピターが我々兄弟に贈るために、何か珍らしいものを拵へてゐると云ふ噂について聞き込んだことはないか。

弟　委しくは知りませんが、サターたちがよくそんなことを云つてゐます。

兄　どんなことを云つてゐる。

弟　何でもそれは『女』と云ふ新しい人間だと云ふことです。

兄　新しい人間と云ふと、我々の造つた人間とは違つた種類の生物でもあるのか。

弟　さうだらうと思ひます。而して非常に美しいものだと云ふ評判です。モデルはヴィーナスださうですから。僕には幾分その新しい被造物の想像もつくと思ひますね。僕等の造つた人間に似て、もつと優しい、もつと美しいもの、神々よりは女神に近いものと云ふのではないでせうか。

兄　さうかも知れない。

弟　兄さんはどうお考へになります。若し本統にチュピターがそれを僕等に呉れるのなら、僕は樂しみですね。白状すると僕は兄さんと二人きりでは淋しくなる時があります。いら／＼したり、またその反動で陰鬱になつたりします。僕は兄さんを愛し、尊敬してをります。兄さんと一緒に人間たちのために働くのを悦んでをります。それでゐてこの感情の變化をどうすることも出來ないのです。雨で狩獵に出られなかつたり、仕事が旨く行かなかつたり、下等なサターたちの悪ふざけに惱まされたりした後は、屹度この發作が起ります。斯んな時にさう云ふ美しい話相手があつて、面白い話をしたり、一緒に優しい歌をうたつたり、踊つたり、同じ食卓でものを食べたりしたら非常に愉快だらうと思ひます。

兄　併しね、弟、美しいものが常に必ず愉快を齎らすとは限らないよ。且つおれはヴィーナスがモデルだと云ふのが氣に喰はぬ。この頃のオリンパスの神々の生活に對して、おれは激しい反感を持つてゐるが、中でもあの女神なぞは一番たまらない型なのだからな。美しい姿だけを寫したのだと云へばそれまでだが。——併しそんなことより、チュピターがこの際何の必要があれば、『女』なぞと云ふ新しい生物をわざ／＼造つて我々に贈つて來るか、と云ふことがおれには問題なのだ。彼の純粹な厚意からだとは受取れない。決してさうではない。寧ろこれには屹度何か悪い意味が

附隨してゐるに相違ないと信ずる。さうは思はないか。

弟　と云ふと。

兄　チュピターは我々が以前程彼に信頼してゐないことを知つてゐる。可哀想な人間たちの味方になつて、彼の専横に對抗してゐることを知つてゐる。若しおれにチュピターの大事な秘密を握つてゐると云ふ强味がなかつたら、我々兄弟は疾くに彼に殺されてゐたかも知れない。併し彼はその秘密を聞き出すまでは殺し度く　殺されない。それで表面平氣な顏をして我々にお愛想を云つたり機嫌を取つたりしながら、陰では我々の邪魔ばかりしてゐるのだ。おれをお前に背かせ、お前をおれから裏切らせようとしてゐる。その離間を利用して秘密を嗅ぎつけようとしてゐる。今度の贈物に關してだつて、おれにはそれ以外の意味は認められないのだ。――悪くすると彼はおれの計畫を感づいてゐるのではないかと思ふ。

弟　さあ。――兎に角、そのために僕等があゝ云ふ二輪車まで作つてゐるとは夢にも知らないでせう。

兄　おれはそれが出來上るのが待ち遠しい。出來上りさへすればおれは直ぐにおれの冒險を決行するのだ。――人間たちのために甘んじて盗人になる。『天の火』を盗み出してやる。チュピターが人間をおれに造らしておきながら、大切な一つの賜物を拒むのは卑怯だとおれは信ずる。「火」を持たないでは人間は何をすることも出來ない。ただ造られた儘の動く人形で、永久に發達することも出來なければ、進歩することも出來ない。況しておれの望んでゐるやうな立派な『文明』を將來この世界に築き上げさせることは思ひも寄らない。製作者の責任として、おれは度々チュピターとそれに就いて爭つた。氣の毒な人間たちのために歎願した。それを彼は肯かないのだ。おれは終に最後の決心をした。よし、呉れなければ取つてやるまでだと。

弟　チュピターは悧ち氣づいたのだと思ひますよ。人間が彼の豫期以上に出來過ぎたのです。彼等は實際元氣で、素ばしつこくて、飲み込みが早いのですから、あれで神々同様にすべての能力を傳授して仕舞つたら、最後にはどんな眞似をしでかすかも知れない、とチュピターはそれで躊つてゐるに相違ありません。タイフォーンやブライアリュースの例もありますからね。

兄　彼奴等は暴力以外は何んにも持たない野蠻人だから駄目だ。チュピターに反抗するたつて、高が山の二つも積み重ねてオリンパスに攀ひ上らうとした位が落ちやないか。併しおれの造つた人間は彼奴等とは本質的に違つた物だと云ふことを、チュピターは先づ知る必要がある。人間には智慧がある。造られた儘では滿足しきれない向上心と、輝やかしい未來に對する憧憬の心を持つてゐる。正しい生活の慾望に燃えてゐる。假令チュピターに反抗しなければならぬ場合が生じたとしても、決してあの連中のしたやうな馬鹿げた眞似をする筈はない。おれはチュピターが將來彼等を味方にするかしないかは、これからのやり方一つで極まることだと思ふ。それは彼等を自由に發達させることだ。出來得る限りの進歩を遂げさせることだ。何故ならば、おれは、チュピターの新しい奴隷を造つたのではなく、彼の子供、彼の兄弟、彼の弟子、彼の友人、彼の助力者、彼の批判者として人間を造つたのだから。さうだとも。奴隷が要るなら今までのサターやサイクロプスで澤山だからな。——人間を正當に發達させることは、チュピターそれ自身を發達させることだ。オリンパスの榮光を增し、彼の王國の富と文明を輝やかせることだ。彼は決してこのことを忘れてはならない。然るにあの傲慢な暴君はおれの云ふことが分らない。すでに束縛と威壓がはじまつてゐる。やつと出來上つたばかりの瑞々しい人間が、彼の暴虐の下に早くも萎縮しようとしてゐる。彼は一つの火をさへ與へることを拒んでゐるのだ。エピミシユース、お前はおれの怒りを不當と思ふか。

弟　決して。僕は兄さんの正しい精神があらゆる不合理を傍觀出來ないことを知つてゐます。またその美しい義憤があればこそ、人間たちはます／＼兄さんに悅服するのです。兄さんのやうな方に造られ、育てられる彼等は幸福です。

兄　いや、彼等はまだ幸福には遠い。今の儘なら造られない方がいつそ增しな位だ。この狀態を變へ得るものはただ『火』のみしかない。『火』は闇を明くすると同じく彼等の現在の生活に光明を投げる。それに依つて彼等の智慧は今の千倍にも活用されるだらう。先づ地の底に隱れてゐる金と銀と銭と銅が掘り出される。煑て煉り堅められた金屬は、彼等の現在の武器を鋼鐵に變へ、美しい黃金で飾るだらう。鋭くなつた鐵と槍は一層夥しい獲物を彼等に與へるやうになる。鹿でも、猪でも、もう生肉ではない。彼等は新しく作つた大鍋で味よく煑たり、長い金串で香ばしく燒いたりするだらう。夜も晝のやうに明るくなつた部屋の中で樂しい饗宴を開くことを知るだらう。斯うして彼等は初めて穴の中の獸や木の枝の鳥と違つた生活を學ぶのだ。それが彼等の新たな智慧の始まりだ。彼等の目は本統に目を覺ます。手も足も本統の働をし始める、心臟の鼓動が變はる。一切の發達、一切の躍進がその日を境界として起るのだ。おれは此度それをさせないでは置かぬ。おれの使命だ。そのためにはチュピターと雖も容赦はしない。悅んで爭ふ。素直に渡さないから奪ふのだ。『火』が要るから『火』を奪ふのだ。それが假令彼の怖ろしい武器の雷電であるとしても、後へは引かぬ積りだ。よしそのためにどんな嚴罰を受けようとも、そんなことで屈しはしない。愛する人間たちのために受ける苦痛なら悅んで受けてやる。——エピミシュース。この大事な時機に際して、チュピターからの贈物を警戒なしに貰へると思ふか。

弟　仰しやる通りです。併し一方から考へれば、僕等が理由なしに彼の贈物を拒絕するのも、却つて疑惑を招きは

しないでせうか。僕は貰ふだけは平氣で貰つた方がよいかと思ひます。チユピターを油斷さす方便としても、それが得策です。

兄　お前は欲しいのだな。

弟　兄さん――

兄　辯解しなくともよい。お前の目はお前の望みを白狀してゐる。

弟　僕はただ『女』と云ふものがどんなものか見度いだけなのです。知り度いだけなのです。

兄　――

弟　皆んな打ち明けませう。その贈物の話を初めてサター達から聞いた時、僕の心は震えました。實際それは今までにない不思議な經驗でした。その日から僕の前には非常に待ち遠しい樂しみなものが生じたのです。女、女、女――どんな物だ。どんな物だ。――僕は寢ても覺めてもそのことのみを思ひ續けました。それが完全に仕上げられて僕等のところへ贈り屆けられる瞬間を想像すると、ぢつとしてゐられなくなりました。

兄　それで分つた。この間からお前の顏は不思議な輝やきに包まれてゐた。お前の身體は歩く時も躍つてゐた。お前の歌ふ聲は悅びの叫びであり、唸めきであり、何物かを待ち悶える呼びかけであつた。お前の矢は的を外づしてばかりゐた。

弟　自分で自分が制しきれなかつたのです。

兄　では、エピミシユース、その事はお前の自由に任せよう。おれは何事に限らず人から强ひられることが嫌ひだから、人にも强ひることはしない。

弟　誤解しないで下さい、兄さん。僕はただ正直に自分の心持を告白しただけで、必ずさうしなければならないと云ふ譯ではありません。兄さんが何處までも拒絕する積りなら、僕もそれに從へます。

兄　いや、それではお前の感情に無理が出來る。屹度自然でないものが生じてお前を苦しめるに相違ない。それは避けなければならぬ。エピミシュース、お前は遠慮なく欲しいものは貰つた方がよい。見度いものは見た方がよい。知り度いものは知つた方がよい。それから超越するにはさうするより外に道はない。

弟　それでは僕等がヂュピターの贈物を受取ることを兄さんは承知なさるのですね。

兄　さうだ。而してそれはお前のものだ。

弟　僕のもの――僕一人の――

兄　一つの弓を二人で射ることは出來ない。――おれはそんな贈物には何等の好奇心もなければ、好奇心を持つ時間もない。おれは頭も胸も常に仕事のことで一杯なのだ。

弟　兄さんにさう云はれると僕は恥かしくなる。

兄　いや、お前はまだ若いのだから。おれと何もかも同じ行動をしろと云ふのはむづかしいことだ。――併しね、エピミシュース、その『女』なるものがどれほど愉快なものであるにしても、決して警戒を解いてはならないよ。夢中になつてはならないよ。我々に惡意を持つたヂュピターの贈物だと云ふことを一刻も忘れてはならないよ。おれのこれだけの忠告は忘れないでくれるだらうな。

弟　大丈夫です。僕はそれを自分のものにして、一と通りどう云ふものだと云ふことが分かりさへすれば、直ぐ興味はなくなると思ひます。

兄　或はさうかも知れない。それから今一つ約束して貰ひ度い。——我々の冒險をば、贈物の『女』が來たその日の夕方決行すると云ふことだ。異存はないだらうね。

弟　よろしいですとも。

兄　それで安心した。ただその『女』なるものがまだ見もしない前から何故お前をそれ程に引きつけてゐるかと思ふと、おれは氣がかりになる。決して尋常一樣の贈物ではないと云ふ怖れに打たれる。お前がおれに反對してまで何かを持たうとしたことは、曾つてないことだからな。

弟　さう云はれると僕も少し氣味が惡くなります。怖い氣もするのです。併しそれだけ強い好奇心となつて僕を引きつけるのです。

兄　ただ腑拔けになるなよ。それだけが肝腎だ。掴むならしつかりと急所を掴め。さうすれば蛇だつて噛みつきはしない。

弟　僕を信じて下さい。

兄　よし、その話はそれですんだ。今度はただ冒險さへ成功すればよいのだ。どうにかして旨くやり度いものだ。

弟　兄さんの計畫したことで成功しなかつたことはこれまで一つもないぢやありませんか。

兄　それはお前がゐておれを助けてくれたからだ。『人間』を造つた時だつて半分はお前の力だつた。おれがどんなにお前を賴みにしてゐるか分つてゐるか。

弟　僕の手足は兄さんの手足です。いつでも呼んで下さい。何でも命じて下さい。それが僕の名譽だと信じて下さい。

兄　分つた。二人で協力してうんとやるぞ。

弟　やります。やります。

兄　屹度成功して見せる。おれの子供たち。待つてゐろ。『燃ゆる火』は頓てお前たちのものだ。あの天上の輝きが地上に降るのだ。お前たちの家の竈が一軒々々ヴアルカンの工場の熔鐵爐のやうにまつ赤になる日が來るのだ。

弟と女

弟　パンドラ、もつと傍へ來い。おれの膝の上に抱かれてくれ。而してお前をもつとよく見せてくれ。お前の噂を初めて聞いた日以來、何百遍お前の姿を想像したか知れない。併し今となつて見ると結句なんにも想像しなかつたと同じだ。お前はおれの想像力を超絶してゐた。モデルのヴイーナスだつたおれはお前より美しいとは思はない。何んと云ふ可愛らしい顔をしてゐるのだ。何んと云ふ優しい姿をしてゐるのだ。――お前の髪毛に顔を埋めると、金色の霧に包まれたやうに目が眩む。お前の熱い息はおれを窒息させさうになる。さあ、もつと強く抱きしめさしてくれ。抱擁でおれのしびれた神經をはつきりさしてくれ。お前の額、お前の頰、お前の口、お前の顎、お前の咽喉、お前の頸、またおれの肩に絡みついたお前のふくよかな白い腕が、決して夢でも幻でもない實在のものだと云ふことを、この燃ゆる唇でたしかめさしてくれ。

女　おお、私のエピミシユース、可愛い私のエピミシユース。

弟　おれのパンドラ、パンドラ、パンドラ、パンドラ――何んと云ふ可愛い名前だ。何と云ふ幸福だ。何んと云ふ

樂しさだ。――パンドラ、着物を取つてしまへ。ミューズたちが丹精を凝らした織物だつて、お前の薔薇色の皮膚より美しい筈はない。裸かになれ。月が雲を拂つて完全な輝と輪廓を現はすやうに、お前の全身を輝やかせ。おれは何物にも汚されない造られたまゝのお前の本體が見度いのだ。その忌々しい蔽ひの下に隱された肉の色がどんなに匂やかに美しいか、四肢五體を限る線の流れがどんなにしなやかに優しいか、場所に依つて高まり、場所に依つて縮む肉置の縺れが、どんなに珍しい陰影を隈取るか、おれに見せてくれ、この手に觸らしてくれ。――おお、何んと云ふ形だらう。――何んといふ均齊だらう。――何んと云ふ調和だらう。――お前の全身は白く燃ゆる焔の柱だ。――香ばしい肉の殿堂だ。不思議な夢の塔だ。――オリンパスの峽間の圓天井だつて、お前の肩ほど圓くはない。サモスの島を繞る波の白い泡だつて、お前の胸ほど白くはない。ヘスペリディースの園の葡萄の房だつて、お前の乳房ほど豐かではない。またその乳房の左右から辿り落ちて、腰の上部で深くつぼまり、其處から再び新たにふくらみ出て、一双の美しい孤を描きながら、自然とふくよかな二つの腿の間に流れ込む曲線のうねりと、その交錯の美妙な陰影を、おれは何に譬へたらよいのだらう。ミナーヴァの左手に輝いてゐる黄金の楯だつて、それほど見事な圓味はない。それほど誇りがな豐滿さはない。またお前の兩脚が優美なしなやかさと共にまつ直ぐな力強い直線で造られてゐることは、貴重な肉盤の支柱として最善の設計だ。でなければお前は大きな白い鳥となつて空に飛んで行くかも知れない。或はまた八月の夕方の虹のやうに、突然消えてなくなるかも知れない。その位お前は美し過ぎる。――何處へやるものか。そんなことは考へられもしない。お前はおれのものだ。永久におれのものだ。斯うしてしつかりとお前を抱いてゐる時ほど、眞實におれのものを抱いてゐると云ふ氣のすることはこれまで何物にも感じなかつた。――パンドラ、おれの此の心持が分かるかい。

女　それが自然なのよ。だつて、私は初めからあなたのものとして造られて、他の誰のものでもないのですもの。

弟　それは本統か、パンドラ。
女　何故そんなことを心配なさるの。
弟　お前はオリンパスでおれの兄のことを何か聞きはしなかつたか。
女　いゝえ、そんな方があるつて事さへ知りませんわ。ヂュピターが私に話してくれたのは、ただあなたのことばかりですもの。あなたがどんなに若くて、どんなに美しくて、どんなに優しいかと云ふことばかりよ。
弟　ヂュピターは矢張りおれを愛してくれてゐるのだ。
女　それから、私はヂュピターがあなたの花嫁として造つた最初の女だから、この結婚が無事にすむことは何より満足だ申しましたの。
弟　それは何のことだ。『花嫁』つて。『結婚』つて。――おれには分らない
女　私だつて分かりはしないわ。でもあなたのところへ來さへすれば、自然に分かることだと申しました。そしてそれを覗つてやると云つて、ヂュピターからも、他の神々や女神たちからも、色んなものを貰ひましたわ。
弟　みんな話してくれ、その時の様子を。それから貰つたものを、何かも。
女　ヂュピターは大層ご機嫌で、さあ、おれが一番に『産む力』をやる。それでお前は最初の女であると共に最初の母親になるのだと申しました。するとヂューノーは、では私はお前の夫が他の女に心を移さぬやうに妻の權威をやらうと申しました。ミナーヴァは智慧をくれました。ヴィーナスは美をくれました。ダイアナは貞操をくれました。アポローとマーキュリーとマーズは音樂の才能と　家事を執つてのはしつこさと、事に臨んでの勇氣をくれました、おしまひにヴァルカンは、それならおれは贈物を皆んな纏めてしまつて置ける物をやらうと云つて一つの箱をくれました。

弟　それだな、お前が大事に持つて來た箱は。

女　ええ。でもね、箱は神様の贈物だけでは、まだ隙間がありすぎてがたがたして困りましたの。——一番おしまひの、一番大切なものが入るまでは。

弟　それは何だ。

女　あなたの愛よ。

弟　おお、可愛いパンドラ。それでお前の箱は一杯かい。

女　ええ、ええ、きつちり一杯よ。

（その時表の戸を叩く音がする）

聲　エピミシュース——エピミシュース——約束の時だ。出て來い。

弟　おお、おれは忘れてゐた。お前の美しい身體の中にすべてを忘れてゐた。

女　あの聲は誰。誰が呼んでゐるの。

弟　パンドラ、ぢつとしておゐで、起きてはいけない。

聲　エピミシュース、どうしたのだ。おれの聲が聞こえないのか。

女　あら、あんなに叩いて。何か云つてゐるやうだけれどもよく分からないわ。——行つて開けてあげませうか。

弟　いけない、いけない。——戸を開けてはいけない。——

聲　お前の若い眠りがおれの聲のとどかぬほど深いとしても、此の叩く音に目覺めない筈はない。——何故戸を開けないのだ。何がお前を躊躇さしてゐるのだ。——おお、それを思ふとおれは不安に襲はれる。おれの怖れてゐたこと

が早く現はれたのではないか。――エピミシユース、しつかりしろ。お前の使命を思へ。おれとの約束を思ひ出せ。

弟　おお、おれを確かり抱いてゐてくれ、パンドラ。おれが我を忘れて飛び出さないやうに、お前の腕で寢床に縛りつけておいてくれ。若しおれのこの手が、衷の聲に誘はれて、ちよつとでも戸口の鍵に觸れたが最後、おれはヂユピターの謀叛人にならなければならぬのだ。――今まではおれは勇んでそれをなし得ると信じてゐた。併しその決心はお前を見た瞬間に消滅した。お前ほどの美しいもの、お前ほどの價値あるものを造り得たヂユピターの榮光よ、永遠であれ。――おれは決して彼に反抗することは出來ない。却つて彼の創造力の絶大と無限を讃美しないではゐられない。お前を抱くことに依つておれの心は謙虚を感じ、恥と怖が身を戰かす。殊にお前が他の誰のためでもない、ただおれだけの物として造られたのが事實とすれば、おれはヂユピターの特別の恩に感謝しないではゐられないのだ。

女　ヂユピターがどんなにあなたを愛してゐるかと云ふことは、誰よりも私が一番知つてゐますわ。――まあ、あの戸は破れやしなくつて。あんなに叩いて。また何か云つててよ。――私よく聞いて見るわ。

弟　おれから離れてはいけない、パンドラ、――あの怖ろしい聲がおれの鼓膜を舒かさないやうに、お前の髮毛でおれの耳を塞いでゐてくれ。

聲　エピミシユース、アポローの二輪車は既に西の谷に沒し去つた。後には「明星」の幽かな瞬きがあるのみで、天は今が一番ひつそりした空虚な時だ。ぐづ／＼してゐるうちにダイアナが星の處女車を引き連れて現はれる。ヂユピターの饗宴からネクターに醉ひしれた神々の車が歸つて來る。さうなると幾ら注意しても我々は直ぐ見つけられてしまふ。天の道は眞直で隱れ場がない上に、星の娘たちは鋭い目を持つてゐるから。それを考へると、斯うしてお前を呼びかけてゐる間も氣が急くのだ。エピミシユース、お前の正しい意識を呼び覺ませ。理性に絡みついてゐる毒蛇を振り落

せ。この冒險のために我々が今日までどんなに苦心をして來たか思ひ出して見よ。我々は乘物からして新しく造つたどの神の二輪車よりも強い、チュピターの雷電にさへ挫かれない自信を以つて造つた。またそれを曳かせるためには森の王なる六頭の黒い豹を選んだ。あの手に負へない獸たちを、今のやうにおとなしく轅に並ばせるまでの怖ろしい訓練を忘れたか。我々は朝早くから夕方握つた手綱が見えなくなるまで、彼等を荒野に引きずり廻した。屈服させるか食ひ裂かれるかの試みを毎日續けたのだ。やつとすべての用意が終つた。時は來た。二輪車は二つの大きな輪を飛ばうとする時の鳥の翼のやうに立てて我々の乘り込むのを待つてゐる。六頭の豹は馴れきつた足並みで今にも駈け出さうと身構へてゐる。彼等の吼り聲と足踏みの音がお前の耳にも聞こえぬ筈はない。待ち遠しがつて怒つてゐるのだ。今あの毛深い背中に一と鞭當てれば、彼等はペガサスよりももつと早く飛び去るだらう。――おお、夕暮の銀色の雲は我々に道案內をしようとして長い旗を靡かしてゐる。エピミシュース、お前はこの豹の二輪車に打ち乘つて、渺茫たる大空の灝氣の道を、あの雲の旗に圍まれて天駈ける愉快を思はないのか。且つその勇ましい冒險は、慰みでも遊戲でもなく、我々の造つた人間の完成のために製作者としての我々が必ず決行しなければならない神聖な遠征だと云ふことを思はないのか。若しお前が本統に人間を愛することを知つてゐるなら、おれをこれ以上待たせる筈はない。

弟　さうだ。おれは矢張り行かなければならない。――パンドラ、お前の腕を離してくれ。お前の蠟のやうな厚い髮毛も、あの聲をおれの耳から拒ぐことは出來ぬ。おれは假令チュピターの謀叛人と呼ばれ、愛に報いるに讎を以つてする忘恩者と卑められても、あの聲に背くことは出來ないのだ。それがおれの悲しい義務だ。

女　あら、どうなさるの。起きて何處へ行つておしまひになるの。――チュタターの謀叛人だの忘恩者だのつて、聞くだけでも氣がかりなのに、あなたが行つてしまつて私はどうなると思つて。あなたの頼りないパンドラを忘れない

で下さい。私はあなたのために造られたので、あなたなしには生きて行く當てのないものだと云ことを考へて下さい。まだ半日と御一緒にはゐないのですもの。それでもう別れて仕舞ふのでせうか。いゝえ、いゝえ、そんな筈はありませんわ。ねえ、どうぞお願ひですから何處へも行かないで下さい。あなたのパンドラをひとり殘さないで下さい。

弟　おお、可愛いパンドラ、泣かないでくれ。お前の涙はおれを氣狂ひにする。

女　約束して頂戴、何處へも行かないつて。――いつまでも二人で斯うしてゐるつて。

弟　それが出來さへしたら――

聲　エピミシュース、西の方が再びうす赤く輝き出したのは、兄に代つて夜の天を警固するダイアナの出現の近いことを示すのだ。さあ、もう一刻も猶豫は出來ない。――出て來い。その戸をぶち破つて飛び出せ。お前の平生の勇氣と誠實が、何物にも損はれてゐないことを見せてくれ。この冒險に於ておれがどれ程お前の助力を必要としてゐるかを少しでも思ひ出してくれたら、決しておれを失望させる筈はない。

弟　おお、どうすればよいのだ。おれはおれのすべき事が分らなくなつた。

女　あんな、誰とも知れない人の聲なぞに、あなたが迷はされるからいけないのよ。あの人が何處へ何をしに行かうと、一人で勝手にさせて置けばよいわ。私たちの係り合つたことぢやないのですもの。私たちは私たちだけで十分樂しく此處で暮らして行けるわ。ねえ、さうでせう。私たちの生活はこれから始まるのよ。本統に幸福な、樂しみの多い一日一日が。――私たちは二人を一緒にして下すつたヂュピターに感謝しながら、仲よくこの生活を守つて行きさへすれば、それで他のことは何んにも考へる必要はないわ。あなたは毎朝早くから狩獵にいらつしやる。而して獸たちを追つて勇ましく野山を馳け廻つてゐる間、私は家で絲を紡いだり、機を織つたりしますわ。私がどんなに美しい布を織れ

るか、あなたはまだ知らないでせう。仕事に飽きれば私は花摘みに行きますわ。向ふの野原まで行くと、綺麗な花が澤山咲いてゐますもの。私は摘めるだけ籠一杯摘んで來てよ。而してみんな私たちの寢床に撒いて置きますわ。夕方あなたが狩獵から歸つていらした時、私たちの寢床が美しい花片と匂ひで包まれてゐるやうにね

弟　それはおれが夢見てゐた通りの生活だ。――その儘の實現だ。――何んと云ふ美しさだらう。何んと云ふ樂しさだらう。

聲　エピミシユース、もうこれ以上は待てないぞ。これがおれの最後の呼びかけだと思へ。――おれとの約束を破つたお前、あの可哀想な人間を愛することを忘れたお前、卑怯な裏切り者。屹度今日の日を後悔する日が來るぞ。苦しい悔恨がお前の髓を挫く日を覺悟しろ。――併しおれはお前を憎みはしない。この破約と裏切りが決してお前の本來の意志でないことは分つてゐるから。原因はヂユピターの贈物だ。すべての惡と背德が彼女と共に來たのだ。おれはそれを豫感してゐた。お前に與へたおれの警告は、どうかしてそれを避けさせ度い爲であつた。併し今はこれ以上立つてお前の反省を促がす時間はない。さあ、お別れだ。左樣なら。――毒された憐むべきエピミシユース、氣をつけろ。お前に背德と裏切りを敎へた女から心を離すな。人に敎へたことは彼女自身からも實行するに相違ない、而かも師匠は弟子よりも巧妙にしてのけるぞ。

女　何か私の惡口を云つてるのね。

弟　あつ――二輪車が動き出した。――豹の群の咆哮に交つて勇ましい嘶きが聞こえる。――高く、高く、天をさして驅けて行く。――許して下さい、許して下さい。この裏切者を許して下さい。

人間の群の祈禱

天地の造り主にして、神と人間との王たるゼウスよ。

宇宙に於ける唯一の支配者よ。

どうぞあなたの尊い耳を、哀れなプラミシュースのためにする私共の哀願に暫くお貸し下さい。

今や天の禁斷の火を盜んだ咎に依つて、コーカサスの嶮しい岩に繫がれた彼、重い鎖に身體を捲かれ、鋭い鉄に手足を釘付けられ、あなたから送られた禿鷹のために日夜その肝臟を食ひ裂かれてゐる彼を思ふ時、私共の身體は同じ苦痛に打ちひしがれ、心は同じ嘆き、同じ怖れに戰くのを感じます。

チュピターよ、私共はあなたの絶對を信じます。あなたの名に於てなされること、すべては眞理であり。他の犯し得ない律法であることを思ひ、如何なる場合に於ても服從と奉仕を怠らないものであることを信じます。併しながらチュピターよ。私共は同時にあなたの寛大なお心を信じます。あなたの無邊際の愛は、どんな厚かましい訴へをも斥けはなさらないことを知る故に、今プラミシュースのためにしようとする私共の例外な辯解をもどうかお許し下さるやうに願ひます。――プラミシュースがあなたの掟を犯してまで燃ゆる火を盜んだのは、あなたを蔑ろにしたのでもなければ、故意にあなたの權能を攪亂しようとしたのでもありません。彼の罪はただ彼があなたの命令を奉じて造つたもの――私共人間を餘り多く愛し過ぎたに外ならないのでございます。待てばあなたが悅んで下されたものを、待ちきれなくて掴んだだけでございます。

チュピターよ。どうかその一つのことをお心に留めて下さい。且つ彼が今日まで盡して來た數々の忠誠は、あなたの

怒りを和げるに役立たぬ筈はございません。あなたが造り上げたばかりの天と地に、良き形と良き生物を配置した彼の智慧、木には枝を、草には花を、鳥には翼を、獣には牙を、蟲には蟲らしい小さい胴を、それ〲に考案した細かい注意、また反對に巨人軍との戰に於ては誰よりも大膽で花々しかつたその功績、殊に其の時には彼は自分の一族を敵にして戰つたのでございます。最後にあなたの命令を奉じて私共人間を製作するまで、一つとして彼自身のためになされたものはなく、すべての仕事があなたに捧げた義務であり、あなたのために働くのを悦ぶ愼ましい奉仕に外ならなかつたのでございます。チュピターよ。この名譽ある功勞者が、ほんの僅かな性急から引き起した過失のために、鎖に身を縛られ、鋲に血を流し、怖ろしい鳥の餌食に打ち任されてゐることが、受くべき彼の正當な報いでありませうか。且つ如何なる殘酷な刑罰も、死ぬ身にはプルトーの領へ下るまでの苦痛として忍ばれませう。ただ不死に生れたプラミシュースこそは、今の苛責が永久の苛責であり、嘆きも悶えも盡くる時なく打ち續ける運命を思ひやつて下さい。

おお、チュピターよ、尊き主よ。

あなたとても、これ程無慘な目に彼を逢はせる積りはなかつたに極まつてをります。どうぞあなたの怒を憐みに變へて下さい。今一度彼を自由にして、鎖も鋲もなくなつた彼の手足が、今後もあなたのために立派な仕事をなし得させて下さい。彼の聲が今の痛ましい唸めきの代りに、平生の晴々した響に返つて今一度私共に呼びかけて來るのを聞かせて下さい。

弟と女

女　人間たちがまたお祈りをしてゐますわ。あの人たちはあれでもデュピターを憚つて思ふだけの十分一も口に出してはゐないのね。でもあの眞劍な様を見ただけで、あの人たちがどんなにプラミシュースを崇拜してゐるかはよく分かりますわ。皆んなの眞心が溢れてゐてよ。ちつと聞いてゐると引き込まれて一緒に祈り度くなるのですもの。チュピターの禁斷の『火』を盗むなんて、想像されもしない怖ろしい罪が、不思議と美しい、何か偉大な仕事のやうに感じられて來ますわ。考へて見ると、本統にえらいことをしたものですわね。

弟　さうだ。それだけは確かだ。――おれはプラミシュースとは意見が違つてゐる。彼の反抗的な精神よりはもつと謙虛な心持を愛せる。デュピターに對しては絶體の服從と信賴を捧げることが、我々に取つても、あの人間たちに取つても必要だと云ふ信仰を持つてはゐるが、と云つてプラミシュースの偉大が分らなくはない。實際彼は彼でなければ出來ないことをしたのだ。何處までもプラミシュースらしいことをやつてのけたのだ。

女　さう云へば、あなたはプラミシュースのことをまだ一度もよく話して下さらなかつたのね。――彼があなたとどう云ふ關係でどうなつたと云ふことを。――この話になるとあなたがいつも避けようとなさるのを、私に氣がつかないと思つて。

弟　――

女　エピミシュース、あの晩――チュピターから私が初めてあなたのところへ贈られた晩、表の戸をあんなに激しく叩いたのは、あれは誰でしたの。

弟　パンドラ、お前の想像の通りあれがプラミシユースだ。――おれの兄だ。

女　お兄さんですつて――プラミシユースが。――あなたの。――まあ。――それでみんな分かりましたわ。プラミシユースのことが問題になる度に、あなたが切なさうになすつた譯が。――また今日までどう考へても腑に落ちなかつたあの夜の不思議な訪問者のことが。

弟　さうだ。あの時は兄がおれを誘ひに來たのだ。我々はあの冒險を一緒に企てた。おれはプラミシユースと共に豹の二輪車を駆つて『天の火』を盗みに行く約束をした。おれはその仕事を名譽だと思つた。人類の幸福と將來の發達のために必要な冒險だと信じてゐた。おお――その信仰を一變させたのはお前だ。

女　勘忍して頂戴、エピミシユース。私はあの時は何にも知らなかつたのですもの。チユピターに反抗すると云ふことが、ただもう怖ろしくてたまらなかつたのですわ。そしてあなたにお別かれするのが辛かつたのですわ。――でも今の私はもうあの時ほど幼稚でもなければ臆病でもありません。あなた方の企てがどんなに美しい動機から生れたか、チユピターがどんなに我儘か、判斷することが出來ます。プラミシユースの勇ましい冒險の價値が分かります。本統に、誰が聞いたつて胸の躍るやうな英雄らしい仕事ですもの。――あの人間たちの群があんなに氣狂ひのやうにプラミシユースを崇拜してゐるのも決して無理ではありませんわ。――あの人たちはあゝやつてコーカサスのお山まで巡禮に行くのですつて。あのお山が新しくプラミシユースの祭壇になるのね。デルファイやドドーナにはこれから誰もお詣りするものはなくなりますわ。――エピミシユース、あなたは私を憎んでやしなくて。

弟　飛んでもない、何んだつてそんな氣紛れを云ひ出したのだ。

女　岩に鎖で縛られ、兀鷹に肝臓をむしられる刑罰が幾ら怖ろしいにしても、プラミシユースが今受けてゐるやう

な崇拜や名譽が、男の心を動かさぬ筈はありませんもの。

弟　パンドラ、それならお前はおれを知らないのだ。おれはお前のために變へられた信仰を決して後悔してはゐない。チュピターの權威を蔑びながら、お前と愛し合つて生きて行く。現在のおれにはこれが最も自然な正しい生き方だと信じてゐる。以前のおれは餘りに兄に印き過ぎてゐた。兄の思想がおれの思想であり、兄の生活がおれの生活であつた。それがお前に依つて初めておれ自身のもの、おれ自身の道、おれ自身の世界が生じたのだ。これはおれに取つては如何なる名譽や崇拜にも代へられない大事な進歩だ。それにどうしてそんな下らないことで兄と競爭する氣なぞ起すものか。單に崇拜の點ならば、おれの方が彼等以上に兄を崇拜してゐるんだから。今度の冒險は別としても、兄は實際どれ程崇拜されてもよいだけの價値を持つてゐるのだ。

女　そんなに偉い方なの。

弟　チュピターは例外だが、神々とタイタン族と人間を通じてプラミシュースほどの者をおれはまだ見たことはない。

女　みんな話して頂戴。あなたに似てゐらつしやるの。

弟　おれよりはもつと大きい。

女　ぢやもつと强いのね。

弟　もつと强い、而してもつと激しい。

女　上手に射て。

弟　兄の矢はおれよりも五寸がた長い。

女　二輪車は。

弟　他に誰なら六頭の豹を御せるものか。

女　それで醜くはないの。

弟　美しさならアポローにも負けはしない。

女　そんな人つて、あらはれるものか知ら。——私そのお兄さんを見度いわ。

弟　おれの一番苦しいのは、それ程のプラミシユースが、彼に取つては名譽の刑罰であるとは云へ、奴隷のやうに鎖で捲かれ、手足を血にして岩に繋がれてゐるのを知つてゐながら、おれの力でどうすることも出來ないと云ふことだ。殊にそのおれは何んと云つても彼から見れば裏切者だ。彼が戸を叩いた時、おれは逃げ隱れた。彼と一緒に行つて同じやうに岩に繋がれ、血を流し、兀鷹に肝臟を裂かれてあるべき筈を、お前と此處で平和に暮らしてゐる。——眞晝の山の日光が、鎖の喰ひ込んだ彼の裸身を焦がす時、おれは涼しい木の蔭でお前の白い身體を樂しみながら水浴をしてゐる。山の夜の寒雨と風が彼の傷づいた手足を打ち叩く時、おれは安らかな寢床でお前の傍に眠つてゐる。——パンドラ、これを思ふとおれは堪えられない。いや、いや、もつと怖ろしい日が頓て來る。山の木の葉が落ち盡して、雪と氷がそれに代はる日が來る。我々の寢床が幾枚もの毛皮で暖められる時に、兄は吹雪の寒風に曝されながら尚ほ岩に繋がれなければならない。霜は彼の髮毛を氷柱にし、雪は彼の身體を埋め盡すかも知れない。おお、それでもまだ彼の刑罰は終らないのだ。一千億度の霜氷を迎へても、決してその鎖の絕たれる日は來ないのだ。

女　いゝえ、いゝえ。エピミシユース、あなたは知らないのよ。プラミシユースさへその氣になれば、あの鎖は今でも絕たれるのですつて。

弟　どうして、パンドラ、そんなことがあり得る筈はない。

女　でも、あの人間たちは皆んなさう云つてゐますわ。チュピターはその條件として、プラミシュースから何か大事な秘密を聞き出さうとしてゐるのですつて。

弟　それならあの秘密のことだ。チュピターの王位に關する重大な豫言で、この世界ではただプラミシュースのみ知つてゐると信じられてゐるものだ。

女　屹度それなのよ。チュピターはそれを聞かしてくれさへすれば今直ぐにも鎖を解いてやるつて、何度もマーキュリーを使にやつたのだけれども、プラミシュースが承知しないのだつて云ひましたわ。——エピミシュース、あなたが勸めにいらして見たら。

弟　おれに——このおれに行つて兄に逢へと云ふのか。——彼が誘に來た時にはあれほど卑怯な逃げ方をして置きながら、今無力な囚人になつてゐるからと云つて、平氣に訪ねて行けると思ふのか。おれは假令裏切者でもまだそれ程恥知らずにはなれない。

女　あら、さうお思ひになるからいけないのよ。みんなお兄さんのためだと云ふ風に考へなければ。——若しプラミシュースが何處までもチュピターに秘密を明かすまいとするなら、せめてあなただけにまで話してお貰ひなさいよ。さうすれば、プラ而してあなたがプラミシュースの代りにチュピターにそれを教へてお兄さんの赦免を願へばよいわ。プラミシュースは何んにも自尊心を傷づけないで、大威張であの鎖の岩から下りられるのだし、人間たちだつてどれ程悦ぶか知れないわ。

弟　いや、いや、それは不可能だ。兄は決して秘密を洩らしはしない。若し洩らしたとしても、おれがそれをチ

ユピターに賣つたことを知るなら、どれ程怒るか知れない。そんな卑怯な手段で救される位なら、尙ほ一層強い鎖で一層険しい岩に繋がれよう、と公言するだらう、兄はさう云ふ氣性なのだ。

女　でも結句それでプラシミユースが放たれさへすれば、皆んなは大悦びをするのでせう。お兄さんを怒らすことが救ふことになり、逆ふことが守ることになるのですわ。

弟　これ程彼を愛してゐるおれが、彼の一番厭がることをしなければならないのか、――一つの裏切りにさへあれほど苦しんだおれが、今一度彼に背くのか。

女　今一度プラミシユースを自由にするために。――今一度プラミシユースの智慧と勇氣を役立たせるために。

弟　今一度――今一度――今のおれには何より辛らい言葉だ。それで唯一つ希望の潜む言葉だ。

女　エピミシユース、その言葉を本統の悦びに變へることの出來るのは、あなた一人ですわ。

弟　おお――クロソーよ、ラキシスよ、アトロポスよ。お前たちは餘り無慈悲な運命を負はせてくれた。でもおれはお前たちを恨みはしない。これがおれの當然の分け前なら從順に忍んで行かう。それよりもおれがお前たちに訴へ度いのは兄の身の上だ。どうぞ彼の運命を今以上に悲慘にはしてくれるな。おれが彼のためになさうとしてゐる苦しい努力にお前たちの手を貸してくれ。おれはお前たちの厳かな力の價値を知つてゐる。お前たちの承認なしでは、假令ヂユピターと雖、プラミシユースの鎖の一つさへ解き得ないことを知つてゐる。その點ではお前たちは神以上の神、支配者以上の支配者だ。プラミシユースの運命を紡ぐ時、お前たちの神聖な糸に氣をつけてくれ。特別の愛と同情を忘れないでくれ。現在の不幸な黒い糸枠を、今一度明るい絲に捲き代へてくれ。解放の喜びで赤く染めてくれ。自由の黄金の色で塗つてくれ。

兄と弟

兄　やつと朝になるな。オーローラは太陽の二輪車を通すために、彼女の紅い門を東の空に開けはじめた。心の優しいあの女神は、毎朝おれの淺間しい姿を見る度に氣の毒がつて泣いてくれる。おれはこの繋がれてゐる岩の肌や、頭の上の木の葉や、足下の野原の草に明らかに彼女の涙を見る。けれども彼女は同情の言葉もかけなければ、慰めも云つてはくれない。何故だ。——チュピターが怖ろしいのだ。今少しするとアポローの二輪車がおれの傍に近づいて來る。彼の車の明るい輝はおれの殘酷な刑罰の光景を、いやでも彼の目の前に照らし出さないでは置かない。この太い鐵の鎖がどんなにおれの骨身を縛つてゐるか。鋭い鋲がどんなにむごたらしい血を手足に流さしてゐるか。——彼はオリンパスの廣間でたまに出逢つた時によくしたやうに碧い大きな目を見張つてぢつとおれを凝視する。一瞬間、痛ましいと云ふ表情が彼の美しい額を暗くする。が、それつきりだ。彼は默つて、手綱を引き締めて、急いで車をやつてしまふ。何故だ。——チュピターが怖ろしいのだ。オーローラにしろ、アポローにしろ、またその他の神々にしろ、おれの冒險が決して私意に基いたものでないことを知つてゐる。またおれの受けつゝある刑罰が受くべき以上に過重であることを知つてゐる。併しながらそれに對して誰一人おれを辯護し、チュピターの不法と横恣を正さうとする者はない。彼等は正義を說いて怒りを買ふよりも、傍觀と阿諛で一身の安易を貪るに急なのだ。——いや、馬鹿々々しい、あんな連中の同情や助力を夢想するほど、おれもたわけ者ではたかつた積りだが。この頃は餘程どうかしてゐるわい。この皮膚に喰ひ入つてゐる鐵の輪が、おれの魂まで囚人根性にしようとしてゐるのではないか。——おお、おれの強い精神よ、堅い意

志よ。不撓の氣魄よ。おれを見捨てるな。不滅に生れついたおれの身體には最後と云ふものがないのだから、お前たちとの結合も永遠無窮でなければならない。お前たちの城をしつかり守れ。屈從や、怯懦や、さもしい妥協が忍び込む隙間のないやうに見張つてゐろ。——世界が皆んなやつと目を覺ましかけたな。空の雲は一齊に輝く日で隈き出し、大地は夜の蔽ひ物を反ねのけた。狭霧の床の中から次々に起き出して來た小山よ、森よ、野よ、河よ、お早う。また誰よりも一番に駈け出して來て、山の上からおれに飛びついて來る起早きの朝風よ。お早う。皆んな何んと云ふ可愛らしさだ。何んと云ふ上機嫌だ。一日のよい營みが今日もお前たちすべての上にあれ。——チュピターが初めて世界を造つた時、彼に力を貸してお前たちの立つところ、擴がるところ、流れるところを工夫したのはおれだ。おれは最善を惜みはしなかつた。併しあの配置が斯うまで調和し、お前たちがこれ程まで美しく成長しようとは想像しなかつた。お前たちを見、お前たちと共に暮らすことは、今のおれには唯一の救はれだ。チュピターはおれを人間から隔離させるためにわざと遠い刑場を選んだ。彼は鎖と鐵の痛み以外に、尙ほ孤獨と遠流の悲しみをおれに味はせようとしてゐる。氣の毒だが彼の企ては失敗だ。お前たちと在る間、おれは決して淋しくはない。愛し得るものは樂しみ得るのだから。——でもお前たちとしては、チュピターの協力者であつたおれが、急に彼の囚人としてお前たちの前に繋がれてゐることは、非常な驚きであるに相違ない。併し沈默の中にすべてを理解するお前たちは、何がおれを斯んな淺間しい姿にしたか。この急激な運命の轉落がおれの受くべき正しい報酬がどうか分つてくれる筈だから、おれは安心してゐる。恥ぢも怖れもしない。お前たちも嘆かないでよい。決して醜い悲しみや騒ぎをしてはくれまいぞ。それよりはお前たちに適當な役目がある。おれの證人になつて貰ひ度いことだ。この刑罰をおれがどんなに男らしく引き受けてゐるか、毎日の激しい苦痛をどんなに強く絶え忍んでゐるか、おれの口が呻き聲の外に一言でも弱い音を吹いたか、苦しい叫び聲の代りにさも

しい憐みでも求めたか、それさへ見てゐてくれればおれは滿足だ。——さあ、頂上の岩に巣ぐつてゐる兀鷹どもが、目を覺まして舞ひ下りない間に、今一度お前たちの晴れやかな眺望でおれの目を慰ましてくれ、すがすがしい朝の大氣でおれの心を勇氣づけてくれ。——おお、——やつて來るな。あの物凄い羽叩きの音はどうだ。巢を舞ひ立つのだ。彼奴等はおれの胸の肝で、生血に濡れた暖い朝飯をするのを悅んでゐるのだ。さあ來い。皆んな群らがつて來い。貴樣たちの貪婪な嘴が終日むしり盡したつて、おれの肝臟は減りも瘠せもせぬ。一夜に完全な形と肉を取り戻すのだから遠慮は要らない。總がかりで飛びつけ。爪を打ち立てろ。齒の根に覺えがたくなるほど、存分に食つて見ろ。おお——兀鷹の忌はしい叫びに交つて、聞き覺えのある懷しい聲がおれを呼んでゐる。——いや、そんな筈はない。斯んなところまで囚人のおれを訪ねて來る氣紛れ者があらうとは思はれない。

弟　プラミシユース——プラミシユース。

兄　おお——あの聲は。——誰だ。

弟　私です。兄さん、エピミシユースです。

兄　エピミシユースだと。——おれはそんな者は知らない。——そんな者がおれのところへ來る筈はない。

弟　どうぞさう云はないで下さい。兄さん。來られる筈のない私が恥ぢを忍んであなたの前に來たのは、よくよく來なければならない用事があるのだと思つて下さい。——それにしても何んと云ふ變り果てたあなたの姿でせう。あの額に渦卷いてゐた金色の捲毛は。美しさと健かさで輝いてゐたあの立派な身體は。敏捷その物であつたあの手足は。——岩の裂目の茨よ。お前の刺の引き纏らしてゐる髮毛がどんな賢い頭を飾つてゐたかお前は知つてゐるのか。無情な鎖よ。お前がパイソンのやうに絡みついてゐる囚人が、誰であるかを問はないのか。銳い鋲よ。お前が岩に釘づけてゐ

る手足が、今日までどんな偉大な仕事をして來た手足だかを考へようとはしないのか。假令チュピターの命令であるとは云へ、お前たちに少しでも尊いものを知る明があつたならば、自分たちの冒瀆に震え上る筈だ。――あつ――兀鷹の群が胸に舞ひ下りた。まるで黑雲の一團だ。あの羽叩き――あい叫び聲――彼等は肉食の飽滿で氣狂ひになつたと見える。血の滴る嘴を爭つて臓腑に打ち込むあの有樣はどうだ。引き裂かれる肉片のあの散亂はどうだ。――それを自分の目で見たものでなくて、どうしてプラミシュースの刑罰の苦痛を知ることが出來よう。兄さん、あなたならばこそよくも忍んでゐられるのです。家から思ひやつたことや、道々想潰して來たことは、呑氣な暇潰しに過ぎなかつた。

兄　お前の用事から聞かう。

兄　私は二つのお願ひを持つて來ました。――一つは恥づべき裏切りにも拘はらず、私の變らない愛と尊敬を兄さんに認めて頂き度いのです。今一つは私の身の上にさしかかつてゐる、怖ろしい破滅から私を救つて頂き度いのです。これがどんなに我儘なお願ひであるかは知つてをります。けれども兄さんの寛大な心は、この裏切り者をも決して見殺しにはなさらないと信じます。どうぞ許して下さい。而して私を救つてやると仰しやつて下さい。

兄　話をはつきりしてくれ。

兄　問題はチュピターの王位の秘密として知られてゐるあの豫言に關することです。――チュピターはあなたから聞かれなかつたことを私に話させようとしてゐるのです。

兄　何だと。

兄　同じタイタン族の兄弟と生れた中でも、取り分け一心同體の親しさで生きて來た以上、プラミシュースの知つたゐる秘密を、弟の私が知らない筈はないと云ふのです。何んと辯解してもチュピターは信じません。あなたから拒絶

された彼の怒りは今みんな私の上に落ちてゐます。兄さん、彼の威嚇を想像して下さい。私は彼の追求から逃れる道はありません。と云つて私がその秘密を知る道理のないことは、あなたが誰よりもよく御存じの筈です。

兄　それでおれに秘密を話させようと云ふのだな。

弟　私を助けて下さ。いあなたの無力な弟を憐んで下さい。——今になつてチュピターに秘密を洩らすと思へば、あなたの自尊心が忍びきれないことは分かります。けれども私に話して下さる分にはさし支へないではありませんか。私はそれを最初から知つてゐたものとしてチュピターに告げませう。でなければ腹立ち紛れに私はどんた目に逢される か知れないのです。

兄　ふん、旨く巧らんだな。チュピターのもくろみさうな仕事だ。いや、いや、チュピターの性格を最もよく飲み込んだもののやりさうな細工だ。——だがまあよい。エピミシュース、チュピターの秘密がお前に取つてそれほど必要なら話してやるのは何んでもないよ。

弟　えつ、聞かして下さいますか。——兄さん。有り難う。

兄　一般にはその豫言はチュピーの結婚と王位との重大な關係を説いたものだと信じられてゐるが、本統の秘密はさうではない。

弟　——續けて下さい。皆んな話して下さい。

兄　今後十三の世紀を重ねないうちに、チュピターは必ず彼の王座から追はれる運命を有つてゐる。而かも彼を滅ぼすものは神でも巨人でもない人間の末裔で東方の國に住む貧しい大工の息子だと云ふのだ。

弟　何んと云ふ豫言だ、信じられない冒瀆の言葉だ。

兄　信じる信じないは別として、お前はそれをヂュピター！に傳へてやりさへすれば救れるのだらう、お前の云ふ通りだとすれば。

弟　さうでした。私はそれだけでよいのでした。——併し私は自分自身を救ふと共に、兄さんをもこの儘にしては置きません。兄さん、どうぞ私の最後のお願ひを拒まないで下さい。この秘密を洩らす條件として、あなたの鎖を絶ち切ることを私にヂュピターと約束させて下さい。あなたがヂュピターに降るのでもなければ、和睦を求めるのでもありません。すべては私とヂュピターの交渉ですむのです。私が私の手であなたを償ふのです。弟が兄を救ふだけなのです。あなたはただ時の來た時平氣でこの岩から下りて下さればそれでよいのです。

兄　狡猾い客は一番大事な用事を一番後で云ひ出す。——エピミシユース、お前はその相談がし度いばかりおれのところへは來たのだらう。而して用事を云つておれから秘密を聞かうとした。それを搭物にしておれの鎖を解かうとしてゐる。——何を驚くのだ。そんな事位おれに分らないと思つてゐるのか。併し心配しないでよい。おれは怒つてはゐないから、お前の嘘は却つてお前の深い友愛を證明するものとして禮を云ふよ。

弟　兄さんにさう云はれると僕は何んと云つてよいか分からない。あなたを瞞せるものだと思つた自分が恥かしくなる。あなたの寛大過ぎるのが苦しい。——それよりは何故いつそ私の不正を責めては下さらないのです。怒つても罵られてもその方が僕は樂です。

兄　失つた一人の弟が今一度おれに歸つた悦びの中で、何を責めたり怒つたりすることがあらう。エピミシユース。お前の先の裏切るから得た絶望や悲しみは、これで完全におれから去つたのだと思つてくれ。

弟　おゝ、私はただその裏切が償ひたかつたのです。その裏切のために自由に動いてゐる自分の手足が私を悩ませ

ました。私はあなたの手足と同じやうにそれを岩に縛られる機會を無くした代りに、あなたの鎖をも必ず絶たうと決心したのです。私は白状します。あなたの想像通り私の云つたことは皆んな嘘です。ヂュピターが威嚇したの、怒つたのと、そんなことは途方もないことです。それであなたを釣らうとしたに過ぎません。ヂュピターの秘密が聞き度いばかりにあなたを偽はつたのです。

兄　併しエピミシュース、お前はおれから聞き出した秘密を、實際ヂュピターに洩らす勇氣があるかい。

弟　あの豫言がどれ程不徹な意味であるにしろ、私はただ傳へる者に過ぎないのですから何も恐れることはありません。ヂュピターにしろ、豫言の言葉に對する怒りを直ちに私に移すほど偏狹ではない筈です。

兄　おれはそんな積りで聞いたのではない。エピミシュース、お前は自分のしようとしてゐることの正しい結果を考へて見たことはないのか。假りにヂュピターがお前の取引きに乘つておれを許し、おれがまたそれを受け入れてこの岩から下りるとして、後はどうなると思ふ。冒險を企てなかつた前と同樣に我々二人が仲よくやつて行けると信じてゐるのか。

弟　兄さんはそれを疑ふのですね。どうしてでせう。私は私の裏切、私の虚偽、その他私の過つた過去の一切を許して下さると云ふ兄さんの言葉に希望をかけます。それで何故元のやうに暮らして行けないと仰しやるのですか。

兄　お前自身が既に元のエピミシュースではないから。――獨立性を持つたから。――おれの弟であるよりはパンドラの夫であるから。――今一つの理由は、假令ヂュピターにこの鎖を絶たれたとしても、おれは永久に彼と仲直りは出來ないからだ。――彼の不正と暴虐が止まない限り、おれはいつまでも彼の敵だ。爭ふべきことに爭ひ、責むべきは責め、取るべきものは取るのだ。『火』の冒險よりもつと怖ろしい冒險を企てないとも限らない。お前はその時おれのた

めにヂュピターを捨て得ると思ふか。彼の忠實な信者となり切つてゐる現在のお前が。

弟　兄さん、私はあなたとヂュピターとの今後の關係をそれ程悲觀してはをりません。寧ろこの忌むべき事件はあなた方を前よりも强く結びつける機緣になるだらうと信じます。ヂュピターの仕事に取つて、殊に人間たちの支配に於て、あなたの力がどれだけ必要かと云ふことは、この際誰よりもよくヂュピターに分つた筈ですから。あなたが囚はれた後の人間たちの狀態はヂュピターを手こずらしてゐます。彼等は自分たちのためにしたあなたの罪を悲んで、赦免の祈禱で氣狂ひのやうになつてゐるのです。誰一人仕事をする者もありません。野に出て働く者もなければ、畑に種子を下す者もなく、山へ狩りに行く者さへありません。ヂュピターの羊を追うてゐた羊飼ひたちまで、羊を捨てて巡禮の群に入る始末です。この儘にしておけば人間たちの國の破壞は勿論、オリンパスの富まで失はれるのは目に見えてゐます。ヂュピターは威嚴の上から決して弱つた風は示さなくも、あなたと仲直りし度い意志は十分にあるのですから、今後は決してあなたの獻策を輕んじたり、要求を斥けたりする筈はありません。その點はどうぞ暫く私に任せて下さい。ヂュピターに從ふことがあなたに從ふことになり、あなたを愛することがヂュピターの崇拜に悖らないやうになる日を、私は屹度來させて見ます。可哀想な人間たちを今一度幸福にするためにも、是非その日を作り出さなければならないのです。

兄　お前は詩人だ。併し詩の夢が實現するものではない。おれはヂュピターが本質的に暴君であることを知つてゐる。自分で權勢を握るためには、親をさへ平氣に追ひ出した男ではないか。幾ら困つたつて、どうしておれに讓步するものか。それ位ならあんな人間たちなんぞは皆んな滅ぼし盡しても構はないと云ふだらう。最初おれは彼奴を買ひ被つた。狂暴を勇氣と誤り、專橫を英斷と解し、狡猾を智慧と考へた。巨人軍から攻擊されて、彼が牡牛の姿にまでなつて

イシオピヤを逃げ廻つた時には、妙な俠氣から今一度彼を救ひ出してやり度くなつた。おれは同族とさへ戰つて彼を勝たしてやつた。それ以來の黑線が我々を繋いでゐる。ただそれだけだ。それ以上の交渉がこの後二人の間に起らうとは信じられない。いや、ヂュピターはその羈絆さへ今では面倒臭くなつたのかも知れない。成り上り者に取つては、昔の恩人は兎角目觸りなものだから。彼のあらゆる陰謀は其處に原因を發してゐる。おれを孤立させ、手も足も出ないやうにして追つ拂はなければ安心されないのだ。丁度彼が父親のクロノスを王位から追つ拂つた傳で。――あんな魅力のある贈物を工夫したのも、それでお前を誘惑しておれに裏切らせたのも、みんなその爲だ。エピミシュース、この次はお前の順番だ。

弟　幾ら何んでも、それは兄さんの邪推がひど過ぎます。ヂュピターがさうまで我々を憎む筈は決してありません。その頃の彼を見ればよく分かります。兄さんの處刑以來彼は非常に氣が折れて來たのです。

兄　すつかり目を眩まされてゐるな。まあ、さう思ひたければそれにして置くさ。併しタイタン族では我々二人のみがただ僅かに殘されてゐるのだと云ふことは忘れないね。兄弟のアトラスは重い荷物で身動きもならぬ位置に立たされてゐる以上、ヂュピターに取つては居ないも同然なのだから、問題はただ我々二人だ。我々さへ片附けてしまへば、ヂュピターの煙度い不死術の者はもう一人もこの地上には存在しなくなる。タイタン族の完全な滅亡が來るのだ。ヂュピターがそれを望まないとお前は思ふのか。――愛する弟よ。氣をつけろ。おれの鎖を解かうとあせつてゐるお前自身が、いつか何處かの沙漠の底へでも生埋めにされない用心をしろ。ヂュピターは巧妙にそれを實行するに相違ない。――おれの忠告を今一度繰り返す。曲者はあの女だ。パンドラに氣を許してはならないぞ。

弟　兄さん、外のことは何んでもあなたの言葉に從ひます。ただ、パンドラだけはどうぞさう仰しやらないで下さ

い。自分の愛する者の悪口を、殊にあなたの口から聞くことが私にどんなに苦いか想像して下さい。パンドラは決してあなたの考へてゐるやうな女ではありません。あなたは何んにも御存じないのです。彼女の美しい心は美しい姿に劣つてはをりません。パンドラはあの晩私を引き留めたことを今では後悔してゐます。智慧は彼女に正しい批判を教へたのです。而してどんなにあなたの冒險に感動してゐるか、またどんなにあなたの今日までの功績を讃美してゐるかを知つたなら、あなたは決してあの女を傷けるやうなことは仰しやらないでせう。

兄　そんな筈はない。――チュピターに造られた者がおれの肩を持つ筈はない。

弟　私は辯解する代りにお願ひします。あなたが自由な身體になつたらばどうぞ一番にパンドラに逢つてやつて下さい。私の新しい家庭生活を見て下さい。而してあなたの傷づいた手足を私たちの柔らかい毛皮で休めて下さい。あの女がどう云ふ女であるかはその時初めてあなたに分かりませう。パンドラの美しさと優しさは、私を樂しませてゐると同じやうに、あなたをも樂しませませう。あの從順を裏付けてゐる鋭い機智、愼ましさと共にあつてそれを損はない快活は、いつも私を笑はす通りにあなたをも笑はせませう。それにパンドラは料理が非常に巧いのです。私が狩獵から持つて歸つた獲物で、あの女はあなたの舌を悦ばせるやうなどんなおいしい御馳走でも拵へませう。パンドラの酒はまた獨得です。バッカス自身が絞つたつておれ程見事な風味はありますまい。實際その時の私たちの食事を思ふと、今から考へただけでも愉快です。兄さんあなたは私のこれ程の嘆願を斥けはしないでせう。あなたの想像の通り、チュピターが我々を陷れようとしてゐるのが事實なら尚更です。あなたは私を見捨ててはいけません。我々は共に住み、共に力を合せることが何より必要です。

兄　エピミシュース、それではパンドラがチュピターの反逆者であるおのれを憎んでゐないと云ふのは本統か。

弟　そんな事で僕が嘘をついて何になります。怜むどころではない、パンドラはあなたを崇拜してゐます。

兄　おれの話をしたのか。

弟　パンドラは丁度人間たちがオリンパスの神々の話を聞く時のやうな興味であなたのことを聞いて悦んだのです。あの女は美しいこと、勇ましいことに對しては、驚くべき敏感を持つてゐます。あなたをも見る機會は一度もなかつたに拘はらず、知つてゐることはすべてを知つてゐます。あなたが今日までどんな立派な仕事をして來たか、どんな優れた智慧と勇氣を持つてゐるか、どんなに強くどんなに美しいか、……

兄　よし、それではつきり返事をする。――おれはお前がパンドラと一緒にゐる間は、お前と住むことは御免だ。

弟　おゝ――それはまた何故です。

兄　チユピターの陷穽が足許にかかつてゐるのに氣がつかないのか。

弟　チユピターの陷穽

兄　パンドラがおれを愛し出したらお前はどうする。

弟　兄さん――

兄　お前を捨てておれを取ると云ひ出したらどうする。

弟　おお――

兄　お前はあの女をおれに讓つてまでおれと共に住む覺悟があるのか。

弟　いや、いや、パンドラは決してそんな女ぢやありません。幾ら兄さんを崇拜してゐるにしても、私を捨ててま

で心を移すなんて、そんな大膽なことを思ふ筈はありません。あなたはもつとあの女の氣高い感情を信じて下すつてよいのです。

兄　おれはパンドラを信じないと云ふよりはヂュピターを信じないのだと云はう。あの女に依つてヂュピターのたくらんだ事に一つとしてよいことがあつたか。その目的のために造られた以上、あの女は何事に對してもヂュピターの意志通り動かれさるのだ。知らずして惡を導き、思はずして罪を醸すやうになる。どうだ。おれを救ひ出すことをお前に勸めたのも恐らくあの女だらう。

弟　さうです　さうです。おお――

兄　おれから秘密を聞き出せと云つたのも屹度あの女だ。それをヂュピターに賣らせようとしたのもまたその女だ。おれの鎖を賭物にしてな、どうだ。ヂュピターの陷穽は二重にも三重にもかかつてゐるぢやないか。結局どの陷穽かにかかれば、タイタン族の根は立派に絶てると云　魂膽だ。――最前パンドラを寄越した時のことから思つて見ろ。おれに呉れると云ふのでもなければ、お前一人を指したのでもない。わざと我々兄弟を名指して來た。不和の女神が面白半分に投げる林檎、丁度あれだ。ヂュピターはあの時おれたちが所有權に就いて爭ふのを待ち構へてゐたに相違ない。エピミシュース　お前はその危險な機會を今一度作らうと骨折るのか。

弟　そんなことがあり得るだらうか。――

兄　おれを信じろ。

弟　兄さん、あなたの怖ろしい言葉は私を打ち挫いてしまひました。私の希望は消え、悦びは去り、在るものは絶望と悲しみのみです。若し不死神でなかつたら、私は死を選ぶでせう。併しその運命さへ恵まれてない私が今後どうし

を生きて行くか、それを教へて下さい、命じて下さい。

兄　お前はお前の家へ歸ればよい。パンドラはおれよりもずつとよくお前を慰める方法を知つてゐる。

弟　おゝ――パンドラ、パンドラ、パンドラ――昨日まであれ程快く響いてゐたこの言葉が、急に毒針のやうにおれの耳を刺すのはどうだ。――それでまだおれはお前を疑ふことは出來ない。お前の愛の中に、お前の美しさの中に、そんな邪思の潜む場所があらうとは信じられない。いや、假令それが本當だと云つても、おれはお前を手離さうとは思はない。お前が怖ろしければ怖ろしい程一層お前が戀しくなりさうだ。

兄　安心してお歸り、エピミシユース、お前がおれを救はうとしなければ、お前の幸福も當分破壞されないですむかも知れない。この上はただチユピターに乘ぜられる隙を作りさへせねばよいのだ。

弟　それであなたの事なぞ構はずに、いつまでもこの岩に打つちやつておけと仰しやるのですね。兄さん、自分の幸福さへ再び歸つて來れば、あなたのことなぞ直ぐ忘れてしまつて、パンドラと今まで通り呑氣に暮らして行けると思ふのですか。それでは私をあんまり見くびり過ぎます。どんな幸福もどんな歡樂もこの岩に縛られてゐるあなたを思ひ出す瞬間、今後は行んな私から去つてしまふでせう。殘るのは永久の嘆きとかなしみばかりです。――いや、いや、私は決心しました。その嘆きも悲しみも私は決して他處ではしない。あなたと一緒に此處でします。歸らないであなたと二人でゐるのです。幾世紀か、幾百世紀か、幾千世紀か、それは知らない。あなたの望み通りの自然な機會がこの鎖を解く日まで、私はあなたを離れないでゐます。

兄　愛するエピミシユース、お前の誠意に禮を云ふよ。併しお前は歸つてくれ。此處にゐることは出來ない。

弟　それはまた何故です。兄さん。それさへあなたは僕に許さないのですか。

凡　おれのゐない間、お前はおれに代つて人間たちを指導する義務がある。さあ、落ちついて歸つてくれ。而しておれから訪ねて行く日を待つてゐてくれ。おれは屹度その日の來るのを信じてゐる。お前の所謂自然な望み通りの機會が到來するに相違ない。その時おれの鎖を絶つ者は、おれの不正に下らぬ志と、苦痛に屈せぬ克己心を認めてくれるだらう。而して多分その者の手に落ちるに相違ない人間たちを、おれがどんなに精巧に造つたか、どんなに強く愛したか、またどんなに困難と戰つて教育したか、分つてくれるだらう。おれはその時滿足してこの岩から下りればよいのだ。

弟　ああ――その日が來さへすれば。――

兄　チユピターの王位の沒落の日がそれだ。――おれは豫言の中の大工の息子の手に希望をかける。若し若者がおれの鎖に氣がつかないで行き過ぎたとしても失望はしない。その後に來る者を氣永く待つだけだ。屹度來る。誰か知ら來る。おれはそれを信じて待つ。

兄と愛の神

兄　エピミシユースは悲しみながらとうとう歸つて行つた。結局彼は落ちつくところへ落ちつくだらう。おれには我慢されないことでも、彼には辛抱が出來る。おれなら怒つて仕舞ふことでも、彼は微笑で見過せる。心の卑しさからでなく、素直さから自然に出來る。鈍感でなしに謙遜から出來る。この後の運さへ惡くなければ、彼だけはチユピターの毒手を免れるかも知れない。却つて彼の忠實な幕僚として重寶がられるだらう。それでパンドラと仲よく暮らして行

く。――結構だ。エピミシュースに取つては決してわるい生活ではない。ただおれに そんな眞似は頼まれても出來ないだけだ。……

（その時突然頭の上で大きな笑ひ聲が起る。）

兄　何者だ。おれの頭の上でそんな無遠慮な笑ひ方をするのは。

愛の神　僕だ。僕が君を笑つたのだよ。

兄　ヴィーナスの小さいいたづら子だな。何を笑ふのだ。おれの半分食ひほがれた胸の洞穴でもおかしいのか。

愛の神　ふん。手足を縛りつけられて、何處までが岩だか、何處までが身體だか見當もつかない化物見たいな君の胴體には、横穴の二つ位開いてゐるのはいつそ似合つて見える位ぢやないか。僕はそんなことを笑つたのぢやない。君があんまり偉らさうな大法螺を吹いてゐるのが滑稽だから、それでつい吹き出したのだ。君は今までエピミシュースと話してゐたことを、僕が何んにも聞かなかつたと思ふのか。

兄　聞かれたのなら仕方がない。併しそれなら此處で道草を食つてゐる隙に何故オリンパスへは飛んで行かないのだ。今偶然君の耳が拾つたものをその儘デュピターの耳に屆けてやれば、おれが受け合ふ。彼が大事にしてゐる黄金の三脚器をよこせと云つても君は拒絶されはしない。

愛の神　安心し給へ。僕は僕の弓と矢に直接關係のないことには何等の興味も持たないし、また手出しもしないことに極めてあるのだから。チュピターに王位の祕密を賣りに行くより、此處で君の氣のつかない君自身の祕密を發き出してやる方が僕の天賦に近い仕事だ。――プラミシュース、君は何故あの人のよい弟に嘘ばかりついたのだ。

兄　エピミシュースこそおれに嘘はついたが、おれがエピミシュースに嘘をついた覺えはない。

愛の神　反對だ。僕に云はせれば君こそ大嘘つきだ。――君は先刻エピミシユースがパンドラに逢つてやつてくれと賴んだ時、それこそ望んでゐたところだとは何故云はなかつたのだ。どうだ。そんな變な顏をするなら、もつと先のことから順序立てて云つてやらうか。ヂユピターがあの女を贈物にすると云つた時、君はエピミシユース以上に興味があつたに係はらず、大きな事を云つて弟に讓つた。君は野心のために――君の言を借りて云へば人間を愛するために――ヂユピターの不正と戰ふために――出し度い手を引つ込ましたのだ。それなら男らしく諦らめをつけたのかと思へば、わざとあの女の贈られた晩を選んで冒險をやらうとした。あの皮肉なやり方は何だ。エピミシユースを怖ろしい「女」の誘惑から防ぐためだとばかり云へるか。防がうとしたのは寧ろ君自身の身體ではなかつたか。君は自分では手を出すのを怖れてゐる物を、エピミシユースが自然に無邪氣に取らうとしてゐるのを見ると知らん顏が出來なかつた。そのさもしい嫉妬と強い誘惑、同時にそれを大びらに露し得ない僞善が、あの狡猾い手段を君に工夫したのだ。

兄　そんな馬鹿なことはない。君は何か成心を持つておれを惡く見ようとしてゐる。

愛の神　まあ續けて聞き給へ。どうせ褒めはしないだが。それで、エピミシユースの裏返りは見事に君を失敗さした。パンドラは完全に弟の手に、嚴しい刑罰はひとり君の上に落ちたわけだからね。これでも君は僕に嘲笑される理由はないと云ひ張るのか。また鎖に繫がれて岩から宙にぶら下つた儘眠る時、エピミシユースの暖い寢床を一度でも羨みはしなかつたと云へるか。――それから善良なエピミシユースが眞劍になつて君を救ひ出さうと骨折るのを見ると今度は氣が咎め出した。どうにかして彼の手を借るまいとした。またそれを正直に白狀する代りに、持ち前の大言壯語で彼を煙に捲いた。正しい解き手が來て鎖を切るまでは決して下りてやらないと公言した。序だから聞くが、その大工の息子とか左官の倅とか云ふのは、實際來る當があるのかい。

兄　乾度來る。間違ひなく來る。

愛の神　さうか、それならよいが、併しちよつとの事ではなささうだな。僕ならそんな者をぐづ／＼待つてはゐない。下りられさへすればどんな機會でも捕へてやる。それを君が何んとか理屈をこねて躊躇してゐるのは、下りるのが怖くて無理にもかぢりつかうとしてゐるとしか見えないよ。更に一層卑怯なことは君がパンドラについて云つた言葉だ。君は、若しパンドラがおれを愛し出したらどうする、と云つてあの可哀想なエピミシユースを躍り上らしたが、あれは何故おれがパンドラを愛し出したらとは云はなかつたのだ。それがあの際は自然な云ひ方ではなかつたか。——さあ、それ位云つてやつたら幾ら誇大忘想狂の君だつて自分がどれだけ嘘つきでどれだけ大法螺吹きかが分つた筈だ。またさうやつて世界に於ける正義の唯一の戦士のやうな顔して岩にぶら下つてゐることが、どれだけ滑稽な醜態だか思ひ知つた筈だ。それでも分らぬと抗辯するなら、僕はまだ他にはつきり分らしてやる方法を知らなくはないよ。（キユーピツドは弓と矢を取り出して覘ふ。）言葉は腑に落ちないことがあつても、僕の鏃で刻みつけてそれで感じない胸はない筈だからな。

兄　いたづらつ子、止せ。何の眞似だ。君は的を誤まつてゐる。君の弓矢は洒落者の神々やニンフ達の胸を的にして射る時が、一番似はしい遊び道具なのを忘れたのか。

愛の神　ハ、ハ、ハ、怖くなつたな。

兄　いや、君の武器の名譽を思ふためだ。それは一番六づかしい的を射るのが誇りではなかつたか。射難い胸を射抜いてこそ値打だ。初めて名譽だとも云へる。面白い遊びだとも云へる。それをおれのやうに岩に縛られて、動きの取れなくなつた的を射れば何になる。當らないのが不思議な位だ。それとも斯んな標的でも弓矢の手柄にしなければならぬほど君の獲物が乏しくなつたのなら別だが。——

愛の神　旨い。さう云はれると僕はいやでもこの弓矢を使ふわけには行かなくなる。——それでは君が待つてゐると云つた日まで僕も待つてやらうよ。先刻の話の男が君の望み通り鎖を切る日が來さへすれば、その時こそ君は自由な的なのだからね。

兒　勿論だ。併しその男の出現とヂュピターの凋落—は同時だと云ふことを聞き洩らしはしなかつたらうな。オリンパスの神の一員たる君が、その時まで呑氣にそんな弓矢の樂しみを續けてゐられるなら結構だ。

愛の神　大丈夫、ヂュピターの凋落は僕と關係はない。僕の仕事は少くとも他の神々の仕事とは變つてゐるのだから。僕は永遠の子供だ。永遠に遊ぶことが特權だ。豫言の大工の息子だつて、ヂュピターの玉座は奪つても子供の僕の遊び道具まで取りあげはしないに極まつてゐる。——ぢや左樣なら、ブラミシュース、その時にまた逢はう。——併しそれまでに僕の言葉が當つてゐるかどうか、ゆつくり考へて見るのも惡くはないよ。君の退屈を紛らすには丁度よい考案だ。（去る。）

兒　母親のヴィーナスに似て、それで全然違つた性格を持つてゐるのはあの小倅だ。オリンパスの神々の中でも、變り者だと云へばあの小倅が一番かも知れない。あの小生意氣な口のきゝ方はどうだ。それで不思議と憎氣がない。私心といふものが微塵も見えない。何をしても、何を云つても、他の連中の持たない純な自由が溢れてゐる。生き〳〵していつ逢つても氣持がよい。併し彼奴が今日パンドラに就いてしやべつて行つたことは徹透徹尾見當違ひだ。ひどい妄言だ。何んでも物事をヴィーナスの力に結びつけて考へたがる傾向は、流石にあの女神の子だから仕方がないとしても、おれがエピミシュースと同樣パンドラに心を動かしたなんて、飛んでもない邪推だ。オンリパスの連中がやるやうに、あの怖ろしい湖にかけて誓つてもよい。おれは　の時は製作中の二輪車のことで夢中で、外の物に頭を向ける餘裕

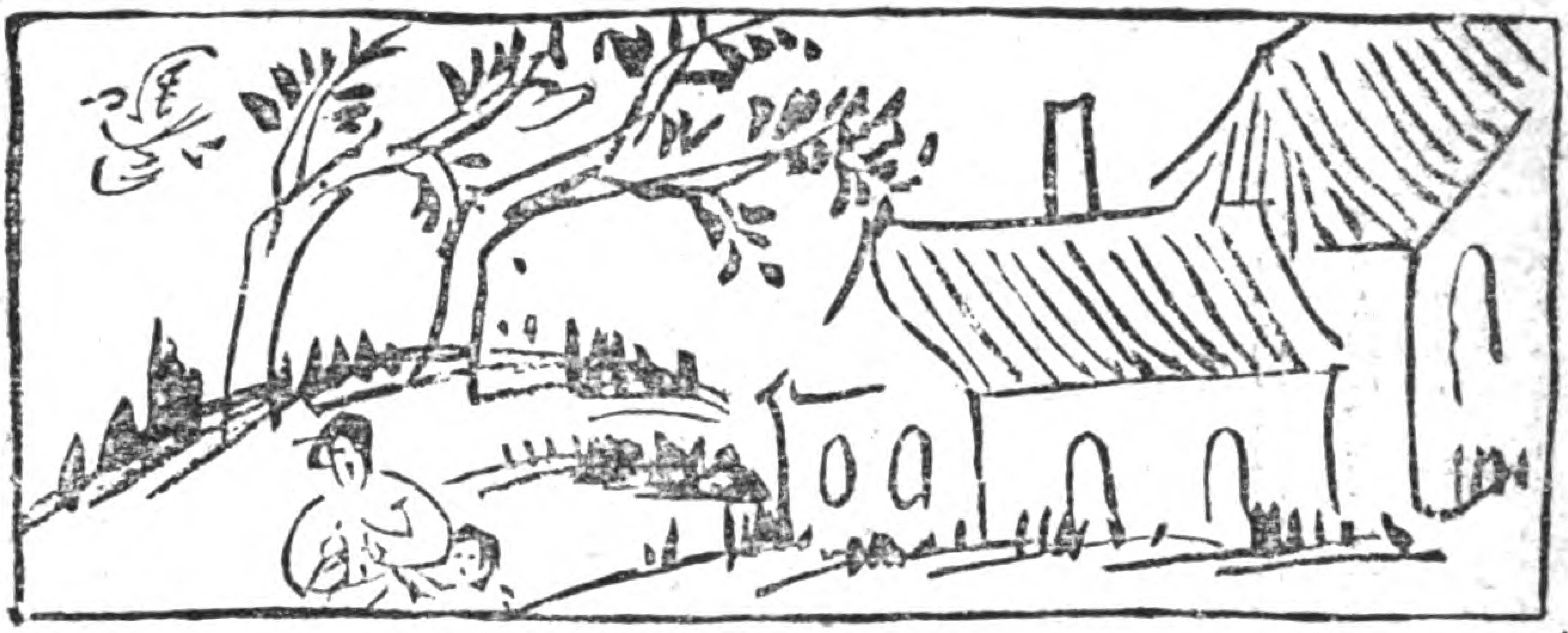
はなかつた。——それは、どんなものだらう位は時々考へても見た。併しそれとてチユピターが『女』なるものをどんな風に拵へ上げたかそれを見度いといふに外からなかつた。單なる製作上の興味に過ぎなかつた。おれは從來の『人間』ばかりでは、世界は早晩困ることのあるのを感じてゐた。彼等は餘りに力に富み過ぎて來た。牧場の仕事にも、畑の耕作にも、狩獵にも、その他の遊樂にも、費ひきれない剩餘力が生じて來た。この儘放任しておけば彼等はこれをお互ひ同士にぶぎかけて浪費するに極まつてゐる。爭ひから爭ひが續き、叩き合ひ、殺し合ひが始まる。結局は種族全體の滅亡に終る。その危險を救ふためには、彼等の有り餘る力を受け入れて、他の新しい無害な勢力に變へるやうな役目を務める何かの生物が必要だと信じた。併しその存在にどんな組織と表現を與ふべきかに就いてはまだ定見がなかつた。神と女神との對立は當然一つの見本ではあつたが、近來のオリンパスの生活に對する反感がそれを否定させた。彼等を眞似度くはない氣がした。では何が最も望ましい典型か。——チユピターが『女』を造つてゐると云ふ噂を耳にした時も、丁度その疑惑があつたから、別種の好奇心でおれは聞いたのだ。少くともおれ自身は今日までさうとしか考へなかつた。それをあの小倅はあんな風な云ひ方で批評した。——假りにあの興味が單なる製作上の興味のみでなかつたとするならチユピターの陷穽は成功したのだ。——いや、おれは見事にそれを外づし得たではないか。おれはエピミシユースと爭ひはしなかつた。パンドラは初めから彼の物として讓つたではないか。——併しおれがあの『女』のことをその後も意識から消し得なかつたのは事實だ。エピミシユースを考へることはパンドラを考へることであつた。あの晩、開かぬ戸の外に立つてエピミシユースを待つた間の心持は今でも説明がつかぬ。おれは弟の遲疑に依つて冒險の手管の狂ふのを怖れながら、戸一重向ふの光景を想像しないではゐられなかつた。彼は天職と義務を思ひ出させ、パンドラの誘惑から遁れることを勸告しながら、名狀の出來ない戰慄を感じてゐた。また裏切に對する危惧と絶望の中には一つの不明な激

しい感情が交つてゐた。おれはそれをパンドラに對する怒であり、憎であり、罵であり、呪であり、それ等のすべての混合であると今日まで信じてゐた。然るにあの小倅はそれを明白に嫉妬と呼んだ。――おお、若しそれが事實だとすればあの小倅はおれ自身にも知らなかつたおれを知つてゐるのか、おれの意識し得ない意識を洞察し得たのか。――なんだか彼奴の云つたことが段々氣味が惡くなつて來た。相手にもならない子供の惡口だとばかり聞き流したことが、強く胸を刺すやうに感じるのは何故だらう。――若し彼奴のしやべつたことを皆んな是認するとしたなら、そんなことがあり得ようか。斷じてあるべきではない。あの小倅が何んと云はうとも、おれの意識に明瞭に現はれないものが、眞におれの思考である筈はない。憚りなくおれはさう云ふ。――だがこの種類の感情にかけては、彼奴はあの弓矢の武器と共に母親譲りの不思議な力を持つゐるのだ。あの小倅は虫が林檎の皮の下に、水が河岸の砂の間に、滲り込むやうに安々と誰の胸の奥へでも入り込める。その點ではヂュピターと雖彼奴の敵ではない。ただ僅かにミナーヴァの銀の鎧のみが防げるのだと云はれてゐる以上、いつの間にかおれの胸に這ひ込んで、おれ自身でも氣のつかない、おれの曖昧な意識の秘密を皆んな嗅ぎつけたのだとしたら――それであんな輕蔑しきつた笑ひ方で笑つたのだとしたら――云ひ度い放題の惡たれ口を利いたのだとしたら――何んと云ふ恥辱だ――何んと云ふ不名譽だ。――誰でもよいあの小倅の饒舌つた言葉を皆んな嘘だと云つてくれる者はないか。ユクザインの海の潮の遠鳴りのやうに、永久におれの耳から離れないであらうあの笑聲をぴつたり塞いでくれる者はないか。サイクロプスであつても構はない、おれは彼の一つの目の前に、出來たらこの膝を我折つて賴むだらう。疑惑と昏迷に比べれば、どんな卑しい哀願でも増だと思ふ。すべての誇と勇氣は失はれかけた。鎖は急に千倍の重さを加へ、鋲は新たな苦痛で肉を苛責なみ出した。一時間前までは誰にも恥ぢない、また何物にも怖れない名譽ある囚人だと信じてゐた自分が、世界で一番醜い無力な奴隷に成り下つた氣がする。――兀鷹

の群よ。おれはおれの内で赤くなるお前たちの嘴を、アンブロジアで養はれるチュピターの鷲のそれよりも恵まれたものだと信じてゐたが、今は適當な肉を適當なものが食つてゐるのかも知れないぞ。斯うなれば遠慮は要らない。思ふ様引き裂いてくれ。おれは寧ろそれを頼む。肉の苦しみは心の苦しみを幾らか紛らしてくれるかも知れない。――さうだ。おれの待つてゐる解き手が現はれるまで、おれはこの儘此處でこの苦しみを續けなければならないのだ。長い世紀の間神と人間とはおれの淺間しい姿を見るだらう。偶にはおれの鎖と鐵のために憐れみ涙を催す者があるかも知れない。併し彼等にはおれの苦痛と悲しみが、今は何處にあるかを知ることは出來ないだらう。おれを解く者よ。お前だけはそれを悟つてくれるかも知れない。だがその事の爲におれを輕蔑しないでくれ。おれは誰よりも一番お前の輕蔑が辛い。――いや、いや、お前はおれを輕蔑する前に、屹度おれの賢い裁き手になつてくれると思ふ。この岩の鎖を解くと共に、新しくおれの心を縛りつけた今一つの鎖からも、おれを解き放して呉れると思ふ。おお早く來い。おれの待つてゐる若者よ。待ち遠しいその日よ。苦しみの多いその日までの世紀よ。

（終）

此の一篇の大體は別の標題で曾つて「思想」で發表したものであるが、その後作者は此戲曲の主題を變更したい衝動を感ずると共に、新たに一性格を出現させる必要をも感じ、今一度書き直して再び世に問ふことにしたのである。（作者）



逃れたる人々

藤森成吉

1

逃げて來る人間達は限りもなかつた。

煤けた浴衣掛け一枚で、青い風呂敷包みをひツかついで來る男、白い腰巻きも泥だらけに、赤んぼを負つて、もう一人子供の手を引ツ張つて來る女、四五人も一緒くたに載せられて、荷物のやうに手車で曳かれて行く老婆達、何か大聲で喚きながら、その混雜の中を分けてゆく。埃で眞ツ黒けな職人風の若者……。

「きいて見ましたらね、落合の方に親類があつて、そこへ賴つて行きなさるんですツて、……御親切さまに、有難う存じます、なんて、丁寧に禮を仰つて行きましたわ。」

とぼとぼと、さも疲れたやうに足をひきずつて行く老人夫婦に追ひすがつた春子はがつかりしたやうに戻つて來た。

「そうか、── 今頃つこゝらまで落ちのびて來る人は大抵目當があるのかも知れない。

なんなら、そこの學校で訊いて見やうか。」

なかなか思ひ切つて訊きがたく、きくとしてもどの人間を選んでいいか途方にくれて了つた靑木は、決心した。

「さうしませう。」

早速贊成して、彼女は雪雄の手をひいた靑木と一緒に、避難者救護所と筆太く書いた紙を門へ貼りつけて、その横手で盛んに炊き出しの釜の火を燃やしてゐる小學校の方へ寄つて行つた。

「ちよッと伺ひますが――」

入口の小さな「受附」のテエブルのうしろに控えた、教師らしい短い髭を生やした、――三十恰好の男に、靑木は遠慮勝ちに云ひ出した、――此の中に、誰か特別に困つてゐる人とか、又は足腰の立たない病人とか云つた人間はゐないか、うッちやつておけば見す見す死んで了ふと云ふやうな、……幸ひ自分の家は大した被害もなく、室もあるから、もしそんな人があつたら二三人位世話をしたく思ふが――。

「それはありがたう存じます、いや、お言葉に甘へて、一つ早速たづねて見ませう、どうぞ御一緒においで下さい。」

若い教師は率直な好意を見せて、わざわざ彼の足もとへ上草履など持つて來ながら、コンクリイトの叩きの上を先きへ立つた、白い上被ひを被つて、ぐるりとテエブルをかこんで立ながら、眞ッ白い湯氣のもくもくと立つてゐる炊き立てを、さも忙しさうに握り飯にかためてゐる束髪の婦人達の横手をとほつて、二人は一番奥の講堂らしい建物の方へ行つた。

「えゝと、どなたかひどく身體の悪い方はおいでになりませんか、たとへば、起きていらッしやれないと云つた方は？」

突きあたりの講堂の兩側に掲げた「忠」「孝」とすばらしい大字の刷り抜き額の下から、入口の二人の足もとまで、席

や布切れの上へ一杯ごちやごちやと入り亂れてゐる黒い人だかりの上で、教師は號令のやうな高い聲を立てた。

「――」。

人々は一様に暗い顔をあげた。

「いらツしやつたら、遠慮なく仰つて下さい。」

教師は再び見廻した。

「誰もゐないな。」

呟くやうな聲が一つ二つ起つた。

「ト、ここにはもうゐないやうです。つい今朝までは、一人二人ゐた筈ですが――おやあ向ふの護國寺の方へ行つてきいて來ませう。あつちには、たしかひどい病人の家族が一組居りましたツけ。」

「濟みません。」

じろじろ見あげてゐる避難者達から顔をそらして、ほつとしたやうな青木は又學校のそとへ出た。

「失禮ですが、御宅は御近所で御座いますか。」

「じき近くです。」

青木は自分の家の番地を云ひながら、初めて思ひついて袂から名刺を出した。

「あなたも一緒に行つて御覧になつたら？――。」

もうそろそろ夕暮れの迫つて來た往來傍の妻子のそばに居殘つて、相變らず潮のやうにざわめき流れて行く群集をぼんやり眺めてゐる青木へ、春子は云つた。

「行つて見なくちやアいけなかつたかな。」

急に自分の無力に氣がついたやうに、彼は斜向ひに高いこんもりした松の枝を聳えさせてゐる寺の方へ、むつと息のこもつた流れを横切つた。

古びた瓦葺きの仁王門――その前の柵にも、いろんな人の名前を書いた紙の一杯貼られてゐる――を潜りぬけると、いつもがらんとした靜かな中庭には、何百匹とも知れない軍馬がまるで馬市のやうに群つてゐた、高い又低いいなき地面を蹴る蹄の反響、鼻を鳴らす音、それらに混つて、かつかつと云ふ佩劍の物々しいひびき……それは、二三日前に布かれた戒嚴令に依つて集つて來た憲兵の一隊らしかつた。いつもと打つて變つた光景におどろかされながら、青木は敷石道を眞ッ直に歩いて行つた。と、本堂の方から降りて來る廣い、高い、夏の初めにはいろんな色のつつじが厚い毛氈のやうに兩側に咲き亂れる石段の上から、スタスタとさツきの教師がくだつて來て聲をかけた。

「この方がそうで御座います、このお連れ合ひが病氣で、今枕もあがらずに寢たツきりなんですが、お子さんが二人御一緒です。」

云ひながら、背後について降りて來た、身體の肥つた、色の淺黑い、小さな髷に結つた内儀さん風の女を指し示した。

「その病氣つて云ふのが。」言葉をつづけたから、彼は聲を一段低めて、

「肋膜なんだそうです、何でも乾性の奴で、もうずツと寢たまんまだツたのを、やつとまアここまで背負つて逃げて來なさつた樣子です、そんな病人でも、如何でせう、御世話下さいませうか。」

「初めてお目にかかります、わたしが今村の家内で御座んすが、今先生からのお話で――。」

その時、内儀さんが——それまで忘れてゐたやうに掛けてゐた細いタスキを兩手ではづ　たから、丁寧に頭をさげた。それは聲のガラガラした、鼻の低い、顔の大きく平べッたい、身體と一緒に雪達磨のやうな恰好の女だつた、何のわけか青木はすぐと「菓子屋のお内儀さん」を連想した。

「初めて——。」

青木も挨拶をかへした。

「これが今ここ一番重病人で、正直のところ、ここにゐたんぢやアとても手が屆きかねるんですが、もし御世話を願へましたらどんなに病人達の仕合はせかわかりません。」

「結構です、——よろしかつたら、どうかいらしつて下さい。」

半分は教師へ、半分は内儀さんの方へ向いて青木は云つた。

「左樣で御座んすか。」

まだ充分信じ切れないやうに、彼女は教師と彼の方を等分に見較べた。

「どうもありがたう存じます、で、すぐでもよろしう御座いま　か。」

「直ぐいらしつて下さい、何か荷物でもあつたら御一緒に持ちませう。」

「では何分よろしく。」

教師はそのまま、急ぎ足に仁王門の方へ去つて行つた。

「御病氣は肋膜だけですか。」

並んで石段をあがりながら青木は思ひ切つてきいた。

「いんえ、この外にまだ胃が悪くて、一向食べ物が頂けませんもんですから、餘計弱つて了つてます。ほんとにまア、飛んだ御迷惑さまで。」

「いや、まア出來るだけの事はしますから、あなたがたの方でも自分の家のつもりで、どうか御遠慮なさらないで下さい。」

彼は困惑の色を見せまいとして、思はず顔を俯伏せて、波のやうに足もとに高まつて行く灰色の石段に眼をそゝぎながら呟いた。

石段ばかりでなく、彼は自分も——世界全體が——急に灰色になつたやうな氣もちがした。

全く思ひもよらなかつたやうな大地震、大火災、あはれな變死者や傷病者の見聞、その最初の日からもう三日の上も過ぎてゐながら、一體どこからどこへ行くのかと思はれるやうな、毎日引きも切らず雲霞のやうに街を溢れて行く罹災者達、そのあひだにあつて、幸ひ屋根や壁や柱の破損だけで濟んだ青木の家では、彼も春子も毎日何かに濟まないやうな氣もちばかりしつゞけた、覿面、玄米飯食べたり、野菜や砂糖さへ録になくなつて、この後まだどんな困難に襲はれるかもわからない不安を一方に感じながら、一方には、良心と義務の呵責に似た心を經驗した、生憎、下町の方に知り合ひの尠い彼の家へは、待つてゐても誰一人避難して來る人間もなかつた。

「こんな事をして、自分ばかり氣らくにしてはゐられないわ、誰か困つてる人を世話してあげませうよ。」

とうとう我慢し切れなくなつて春子の方から言ひ出した。

「うむ……。」

考へ惑つてゐるやうに、青木は曖昧に應じた。じつとしてゐられない氣もちは、彼は彼女にも負けない氣がした、が

その申しわけなさの感情が、果して一時の義務的な感激でないかどうか、見究めがつかなかつた、もしいきなり人の世話なぞを引き受けて、あと熱がさめて來ると一緒に、反つて互ひに怨んだり怨まれたりするやうな事になつては、好意が反對になつては、――それつ位なら初めからやめた方がいい、――と思ふと一緒に、細君の身體の弱さも氣がかりだつた。彼女の根氣さへ、今までいろんな人間の世話の經驗上確かには信じられなかつた。

が、とうとう彼女の繰り返しての言葉と、自分の堪へられない感じとに彼は打ち負かされた。そうして、どんな事があつても出來るだけの助力を困つてゐる人達に與へやうと決心して、今日彼女と一緒に出かけて來たのだつた、――がまさかこんなふうな病人……云ふならば非辯災的、永半久的な……にいきなりぶツつからうとは豫想してゐなかつた。

肋膜、然かも乾性と云へば、もうそれはあきらかに結核性のものだつた、一方には、一年ばかり前肺炎をわづらつて一緒に海岸へ行つてやつとなほして來たやうな恭子、常々から弱い子供達、……そう考へて來ると、無限のおそろしい暗やみが――餘計な御せつかいと僞善的義務心の報酬として――この後自分達の前途へひらけて來るかも知れない怖れが彼の身に泌みた。何と云ふ輕はづみだ、飛んでもない、そうして今更取り返しのつかない誤りだ、……その恐ろしい新しい突嗟に定められた境遇の中から、一思ひに逃げ出さうか、と何度も彼は思つた、が、今となつては、もういくら何でもあとへは引けなかつた、まるで、一歩一歩屠所へ曳かれて行く羊のやうに、硬ばつた。が、不隨意に機械的に前の方へ動いて行く脚先きに導かれて、彼は蒼白くなるほど唇を嚙みしめた、だから云はないこつちやアない、これも一つは恭子のせいだ、どうなつたとこで云はばあれの自業自得だ、――そんな自暴らしい氣もちと一緒に、かうなればもう一切を見えない手に任せ切るよりほか仕樣がない、と云つた一種の忍從と決心が、幽かに心の奧で動き出した、細君なぞの幼稚な犧牲的なヒロイツクな考へかたなぞからは夙に蟬脫してゐる氣がしながら、彼は又今更、自分が限りなく

無力で弱く小さい人間の感じがした。

「ありがとう、何て御親切さまな事てすか、――まアやつと茲まで逃げ延びちやあ來ましたもんの、もう迚も自分は長くは生きられねえ、でも、お寺の御本堂で眼を瞑りやあ、火事や地震の中で死ぬより、どの位冥利に盡きた死にかたか知れねえ、なんて病人もあきらめ切つておりましたに、まアふんとに夢のやうな。」

「お宅はどこでした？」

「今まで神田の皆川町におりました。お父さんは、寝つく前までずつと車力をして稼いでましたが、一年ばかり前梶棒で胸を突いてそれがもとで骨がくさつて肋膜になッちひました。痛い痛いッて云ひながら、でも初めのうちは相變らず働いてましたけれど、そのうちだんだん弱つて來て、去年の十二月頃からもう寝たッきりになりました、今年の五月に、慈恵病院で診て頂いて、こりやあ入院して切らなくちやアいけないッて仰るもんで、一月ばかり入つて、手術して腐つた所をすつかり切り除つてお貰ひ申してから大分らくになりましたが、今度は又胃の方が悪くなりましてね。」

「神田から逃げてらしツたんですか、その御病人を連れて……。」

そんな機械的な原因からの發病か、なら、あんまり病氣の傳染るやうな心配もないかも知れない、……彼女の話でやや心を休めながら――と云ふよりは我から休めながら、彼はびつくりしてきいた。

「えゝ、背負ひどほし背負つて、――いい按配に、丁度一月ばかり前二階を貸した方が手傳つて下さつて、何度も戻つちやあ荷物を出して下さり、子供は又子供で、姉の方が男の子の手を引ッ張つて逃げて來ました。」

さくさくと氣さくな調子でしやべりながら、いつか彼女は石段を登り切つて、台石から五寸ばかりも滑り出た大佛や總崩れに、まるで亂暴者の手で押したほされたやうに無殘に轉げた寄進の澤山の石燈籠なぞの横手をとほつて、正面廣

場にそゝり立つた本堂の方へ行つた。

緑色の廣いゆたかな反りを打つた屋根もそのまんまに、古い木造の大本堂は、瓦一枚、木片一つくづれた樣子もなく寂び黑ずんで默々と前にほり聳えてゐた、が、開け放された階段の上には、澤山の避難民らしい人間の姿がうようよし高い手摺りや土臺石のあたりへかけて、懸けつらねられたぼろぼろの襤褸が萬國旗のやうに飜つてゐた。

大階段をあがると、いつも暗い須彌壇の上に蠟燭の火の輝いてゐる靜かな面影はすつかり消えて、背後には、一面に黑い葵の紋のついた白い幔幕を張り廻し、その前の何十疊もの疊敷きの上へは、隙間もなく黑い人間の塊りが蠢いてゐた、大きな古びた柱の上の、手の込んだ牡丹や獅子の彫刻や金具と對照して、それは何とも云へず不思議な光景だツた天井の高いせいか周圍の靜寂の爲めかてんでに、人間が動いたりしやべつたりしてゐながら、その全體は奇妙な靜けさを帶びてゐた。

「あそこに臥てゐるのがうちの病人で……。」

疊敷きの手前で下駄をぬぎながら、内儀さんは薄暗い奧の方を指し示した。靑木は眼を凝らした、向ふの、銀地へ豪宕な筆觸で墨繪の雲龍を描いた大きな衝立ての前に、なるほど一人分の小さな夜具の横はつてゐるのが、澤山の人間の群つてゐるなかですぐ眼についた。

「御免下さい、御免下さい。」

足の踏みどころもない混雜のなかを跨ぎ跨ぎ、内儀さんはそつちの方へ歩いて行つた。靑木もあとにつゞいた。

「丹ちやん！」

急に傍で子供の高い聲が起つた。

「靜かにおしなさい、――お父さん、此の方がその親切に云つて下さる旦那ですよ。」

いきなり取つつく、五六歳の男の子を制しながら、彼女は病人の枕もとに頭をくつつけた。

「ああ、さう。」

病人はやつと首を廻すやうにして、傍へうづくまつた青木の方を眺めた。それは胸部の病人に特有な、顔色のすつかり蒼白く、眼や頬のゲツソリと落ち窪んだ。すつかり傷々しく痩せ衰へた、老けて見えながら實際はまだ五十をそう越してはゐまいと思はれる老人だつた。よく光線の透らない窓の中で、大きく見ひらいた、が、力のない兩眼は、まるで二つの白い穴のやうだつた。

「充分お世話が出來るかどうかわかりませんが、よろしかつたら御いで下さい。」

青木は、前に内儀さんに云つた言葉を繰り返した、こりやア、とても此のまま居ちやあ助からない、……まるで燃え盡きやうとする蠟燭そのまんまの感じの老人の姿を眺めて、見る見る憐憫の感情に壓倒されてゆく心を彼は感じた。と一緒に、この世話がキツカケとなつて、彼の一家が端から病へ斃れて行く悲慘な光景が、再び意識的にパツと腦裏に描き出された。

「切角さう仰つて下さるに、ぢやアお父さん、御厄介になることに　ませうね。」

「ああ。」

かすかに、息のやうに病人は答へただけだつた。

「ぢやあ、今病人を負つて御一緒にまゐりませうか。」

「いや、倅をすぐ一走たのんで來ます。」

「いんえ、病人は私が脊負つて行きます、その方が、仲ェり反つて揺れなくてよう御座んすで、……けれど、これだけ道具や蒲團なんかが玆にありますが、——それは何なら、御宅へ病人を置かせてお貰ひ申してから、……」

内儀さんは思ひ迷ふやうに云つた。

「いや、そんなら御病人は負つて行つて頂くとして、荷物だけあとで俥で運ばせませう。」

「ちやアどうか、——俥賃は私の方で拂ひますで。」

「かアちやん、どこへ行くの。」

「もう御握りを貰つて來る時間ぢやアないの？」

傍から妹と弟と二人の子供が口を揃へて云ひ出した、

「これから此の旦那のお家へ行くんだから、みんなおとなしくしなくちやアいけないよ、お前達二人は、母ちやんがお父さんを負つて行つて來るまで、荷物の番をして待つといで。那ちやんけ、そのあいだに御むすびを貰つて來て。」

「いやだい、いやだい。」

男の子は、母親の言葉半に早口で遮つた。

「又そんなことを、……そんな事ばつかり云ふと、もう母ちやんは一人で行つちまうよ。」

おどしつけるやうに云ひながら、彼女はうすい掛蒲團をまくつてそろそろと病人を助け起した。

「いいんですか、出來るだけしつかり肩におつかまりなさいよ。」

「ああ」

山火事のあとの枯木のやうに白さけた。骨と皮ばかりの身體を倒れるやうに女房の背中へもたせかけて、赤ん坊のや

うに無力に病人は兩手で彼女の肩へ取りすがつた。

「ぢやあ僕、蒲團をかついで行きませう。」

あとの黒つぽい唐草模樣の煎餅蒲團を手早くたたんで、靑木はいきなりひつかついだ、もうかうなつたら、病氣が傳染るも傳染らないもこころ任せだ、――そう云ふ氣に彼はなつてゐた。

「どこへいらつしやるの?」

傍から不意に女の聲がきいた。そつちを靑木は振りかへつた、と、まだ生れたばかりの赤ぼを小さな赤い蒲團を被せて仰向けに寢かせて、その傍に、白手拭で鉢卷をした、髮のほつれた、痩せて靑白い産婦が、疲れたやうに半分膝をくづしてキヨトンとした眼つきで見上げてゐた。

「ア、……今度この方の御宅へ行くことになりました、もう一遍荷物を取りに戻つて來ますで、濟みませんが、それまで子供をお願ひ申します。」

内儀さんは負傷兵を運ぶ兵士のやうに、身體ぢうに力をこめながらたのんだ。

「そうですか、まアそれは結構ですこと。」

産婦の傍に坐つてゐた、彼女達の看護者らしい、初老に近い色白な女が、露はな羨望の色を顏に浮べて云つた。やつれた産婦の顏のうへにも、嫉妬に似た弱々しい表情があらはれた。

「母ちやん、じき歸つて來るの?」

先刻からむづかつて、妹から何か云ひ聞かされてゐた男の子は、その時又高い聲できいた。

「ああ すぐ歸つて來るからおとなしく待つてるんだよ。」

云ひ云ひ、内儀さんは人々の中をよろけながらやつと外縁まで出た、一種濕つぽい古夜具の匂ひを鼻先きに嗅ぎながら、靑木は彼女と一緒に本堂を降りた。

と、横手から眼の前の廣場へ、七八人の人間のかたまりがドカドカと現れた。刑事らしい鳥打帽を被つた男が、一人の勞働者風の男の手をぐん、ぐん、ぐんその眞中で引つ張つてゐた。

「どうしたんだ？」

「何をやつたんだよ？」

「毒藥を向ふの井戸へ入れやうとしやアがつたんだつてさ、水が飲みたいが、この邊に井戸はありませんか、つて聞きやアがつて、傍へ寄るなりいきなり袂から紫の粉を出して投げ込まうとしたとこをいい按配に警戒の私服に掴つたんだとさ。」

「ぢやあ朝鮮人か。」

「太え野郎もあつたもんぢやアねえか。此の下にやあ一杯憲兵がゐるに、よくも大膽不敵な……。」

「やツつけちまへ、叩ツ殺しちまへ！」

口々に罵り合ひながら、その黒い塊りは石段を流れ落ちていつた。

ほそい力のない聲で、背中の上の病人がたづねた。

「何かあつたか？」

「誰か毒を井戸へ入れやうとしたんですツて、——茲には井戸は一つッきりたくて、その水をみんなで飲んだり使つたりしてるのに、ふんとに呆御座んすねえ。」

病人と青木へ半々に内儀さんは云つた。
「ほんとですかね。」
青木は不審さうに眉をひそめた。
彼等が仁王門のところまで行くと、そこには春子と雪雄が注意深く待つてゐた。
「このかた？」
春子は逸早くきいた。
「うん、——これが女房です。」
蒲團の下から、青木は内儀さんに紹介した。
「まア左様で御座んすか、今度はふんとに思ひも寄らない御世話樣で……。」
病人の重荷の下に首を捩じ曲げて、そのうへ低く腰を屈めやうとして彼女はよろよろとした。
「まあ、そんな御挨拶はあとで……。」
春子はいそいで彼女の身體を抱きとめた。
「あの病人はね——。」
そのあと眼くばせして、少し病人達の先の方へ春子を誘つて歩きながら、青木は聲を低めて病症を話した。
「そうきいてドキリとしたが、然し今更外のもツと輕い病人を、つて云ふわけにも行かないしね。」
彼は細君の樣子をうかがつた。
「そう、——でも仕方ないわ、勿論、今更そんなこと愚圖々々云へやしませんわ。」

泰子も、最初の夫の一句に思はず蒼白くなつた、が、すぐ思ひ返して、自分の決心を固めやうとするやうに答へた。
「まだ、よつぽど遠御座んせうか。」
背後から、人混みの中で内儀さんは少し息をはづませながらきいた。
「もうじきです。」
「ほんとに大變で御座んせう、何なら、少し代つて差しあげませう。」
泰子は内儀さんの傍へ寄つて行つた。
「いゝえ、いゝえ、飛んでもない……。」
内儀さんは、あはてて横へ飛び除いた。
「あんなふうならいい按配に世話が出來るかも知れない。」
細君の様子にやや心を安めながら、青木は狹くなつた坂道を一人先きへあがつて行つた。

2

高台の青木の家へ擔ぎ込まれた病人は、すぐと六疊の一間へ蒲團を敷いて寢かされた。もうほとんど暮れて了ひながら、まだ電氣の點かない（地震以來）彼の家は、乏しい蠟燭の光でやつと頼りなく薄明るくされた、病人の室へは、特別に秋草を描いた古い絹燈籠が釣るされて、夢のやうに淡い光がそこいらに漂つた。
「お寺の中とちがつて、何て靜かで御座いますか、……お父さん、これなら落ちついてよく寢られるでせう。」
病人の枕もとに顔を摺り寄せて、内儀さんは誠心交りに云つた。

「ああ、こゝならゆつくりやすめる。」

病人は、視力の弱つた眼であちこちを見廻した。

「私達まで、あそこぢやアよく寝られませんでしたからねえ、ガヤガヤ夜どほし騒いで、――おやあ、もう一遍お寺へ戻つて荷物や子供を……。」

「僕も行きますよ。」

内儀さんと一緒に、再び青木は家を出た。

道々、おもんは――それが内儀さんの名前だつた、――朔日の地震の日から逃げたあらましを、人を避け避け青木に話して聞かせた。彼女の借家は 神田皆川町の露路の奥にあつた、周圍に家が建て込んでゐるので、晝間もよく日が當らないじめじめと埃つぽい窮屈な場所だつた。内儀さんは前から本の紙折りの内職をしてゐたが――流石に神田だけあつて、その邊の女の内職と云へば大抵みんな紙折りだつた。――亭主が寝込むやうになつてから、とてもそれ位では生活が追ツつかなくなつたので、二階の間貸を始めた。下四疊半と二疊の二間のほか、六疊の二階室があつたのだ。ところが、生憎質の悪い間借り人ばかりに入られて、二三人代つたが、みんな碌に室代も拂はずに行つて了つた。最後に若い左官職人が來たが、地震があると間もなく主人の用事で丁度そとへ出かけてゐた彼は、店へも歸らずにすぐその足で下宿の方へ廻つて來た。幸ひ、彼女の家は瓦や壁が落つただけ、潰れてはゐなかつた。

「なアに暇んな時、壁はみんなあツしが塗つてあげますア。」

そんな事を云つてゐるうちに、火事が廻つて來た、職人は自分の荷物はみんなうツちやつて、一生懸命彼女達の道具を運び出した、一時安全な場所へ持つて行つては、何度も戻つては又かつぎ出した。そのうちドンドン火事が迫つて來

るので、彼女等は燒けてゐる所を避け避け、やッと半藏門前まで逃げて來て、そこで野宿した、が、やがてそこも四方から火に押しつつまれた、その四方眞赤な熱い煙の中で一夜をあかした時の恐ろしさ、——翌日、まだカツカと熱い燒け跡を踏んで、やうやく彼等は小石川の、東京でのたつた一軒の親類をたよつて行つて見たが、もうそこは立ち退いた跡の祭りだつた。家は別に何ともなかつたが、今度の天災にすつかり怖氣立つて、もう東京の生活はいやになつたからと、今朝匆々一家ぢう國へ立つて行つた。と云ふ近所の話だつた。

仕方なく、その晩は護國寺の門前まで辿りついて、みんな又一晩を明かした、翌日初めて、本堂の方で世話が受けられるときいて、そつちの方へ引き移り、又一晩泊つた明くる日の今日、思ひがけなく青木達の世話を受けることに定つたのだつた。

「で、その同居の方はどうしました?」

「そのかたは、これでまああやつとあたしも一安心したから、これから外の知り合ひの見舞ひや見舞けに廻る。それから一旦秩父の自分の家へ歸つて、又二三日うちに野菜物でも持つて出かけて來る、と云つて今朝出なさつたんです。歸つて來なさつたら、さぞびつくりなさるでせう、もし又來てわからないといけませんから、お隣りのかた達によく頼んだり、紙へも書いて貼つて置きませう。」

そう云ふ内儀さんを本堂へ戻らせて、丁度寺の門横の車溜りに一人の車夫の姿を見つけた青木は、いそいで寄つて行つた。

「一つ本堂の中から荷物を運んでくれ給へ。」

「いや、どうかもう勘辨して下さい、今日は散々運ばされて、もうとても敵はんから。」

まだ二十を二つ三つ越したばかりかと思はれる、すばしこさうな、輕々しいいでたちの若い車夫は、いきなり手を握つてことはつた。

「まあそう云はないで、すぐそこ迄だから。」

青木は自分の家の番地を云つた。

「本堂からつて、誰か避難民でも引き取るんですか。」

「さう、病人でね。」

青木は當惑したやうに答へた。

「――ようござんす、ぢやあ行つてあげます。」

じつと青木の顏を見つめてから、車夫は思ひかへしたやうに傍の車の方へ行つた。

石段の下で車夫を待たせておいて、青木はあがつて行つた、そうして内儀さんと一緒に、赤みがかつた色で塗つたつづらだの、蒲團の包みだのを持つて降りて、若者に手傳つて車へ積み込んだ、まだ子供の始末や、寺への挨拶などで居殘つた内儀さんと別れて、車に附き添つて、青木は前の坂道とちがつた、別の廣いゆつたりした方の道を廻つて家へ戻つて行つた。

「僕は晝間はH大學へ通つて、夜はかうして車を引いて稼いでるんですがね、地震と火事で學校も丸燒けでさ、どうせ今は學校どころの騷ぎぢやアねえから、一日ぢうかうやつて引つ張り廻してるんですが、お蔭で一遍に成金になつちやつた。……その代り、今夜はこれから木劍を持つて夜警に出てやるんです、毎晩徹夜でさア。」

元氣のいい調子でしやべつて來た若者は、内儀さんの樣子から青木にきいて、それが知り合ひでも何でもないあかの

他人の世話だとわかると、金を云はずにズンズン歸つて行かうとした、呼びとめて、見計らつた——と云つても充分な見積りを青木が渡すと

「ぢやあ貰つときます、又暇ん時に、いつか話にやつて來ます。よう御座んすか。」

一寸はにかんだやうに考へ込んでから、若者は眼を輝かせてきいた。

「どうか來てくれたまへ。」

青木は微笑しながら家へ入つた。

やがて歸つて來たおもんさんと子供達と一緒に、青木達はみんなで夕飯を食べた。彼がとめたにも係はらず、おもんは自分達四人分の配給の握り飯を貰つて來て、漬物に舌鼓を打ちながらボリボリそれを嚙つた。病人へは、わづかに粥を煮て眞つ先きにすゝめた。

「お寺も電氣が點かなくてさぞ暗いんでせうね。」

「電氣どころか、用心が悪いからつて蠟燭もつけさせませんし、又朝鮮人が入つて來るからつて、夜はまはりの障子をみんな立てつちまひますから、あの廣い中ぢう眞つ暗で、おまけに人いきれでそりやあ蒸し暑う御座います。」

それから思ひ出しでもしたやうに、おもんは配給所のつらかつた話なぞをしやべり出した——。

切符を貰つて、それと引き替へにめいめい握り飯を取りに行くのだつたが、玄米の炊き出しなぞ、初めから醬油を混ぜて炊くので變に硬くぼろぼろして、どうしても喉へ通らなかつた、又一度はわざわざ群馬縣から送つて來た白米のむすびを貰つたが、何しろ自働車などで時日が手間取り、暑氣がらではあり、それに黄粉をまぶつてあるので、もうすつかり「來て」了つてゐた、腹は減つてゐるし、寺の係りへそう云つて行くと、お氣の毒だがそのまま棄てておいてくれ

あとでわかると自分達の落度になるからどうか見えない所へそつと棄ててくれと云ふ返事だつた、

その前、半藏門前でまんじりともせず明かした朝の話も出た、――見ると、向ふに置いてあつた避難者の一家の手車が、いつか荷物もろともすつかり燒け落ちてゐた、その持ち主達が何かよろこんで騷いでゐるので、見ると、荷物と一緒に積んで來た雞や家鴨が丸燒けになつて、その肉を早速の朝飯のお茶にしてゐるのだつた……。

「そんなにして、よくまア逃げて來ましたね。」

春子は眼を見張つた。

「ふんとに運がよかつたんだつて、皆さん仰つて下さいます、そのうへ又こんなにして引き取つて頂くなんて――」

飯のあとで、春子は靑木を自分の居間へ呼んで行つた、そうして、病人の世話をすると云つても、ここでは迚も充分な事は出來ないし、いつそ、近所の大學病院分院に賴んで見たらどうか、此の際でもあり、避難者のことでもあり、大抵――此の前と同じやうに無料で――引き受けてくれるだらうと思ふが、……と云ひ出した。

「うむ。」

靑木は曖昧に答へた。

「でも、切角世話してあげるつてつたのに、そんな事しちやあ惡いでせうが。」

「そりあ構やあしないだらう、ぢやあ聞いて見やう!」

暫く考へたあとで、靑木は云つた――。

そう云ふ彼女の言葉にはかげがあつた、……もう二年前になるが、或る日晚く散歩の歸りに、靑木は一人の憐れな病人を拾つて來た。

當時まだ二十だつたその島崎と云ふ若者は、小さい時から不思議な顔面の腫物に惱まされてゐた。あと分院長の診察で、それは象皮病の一種だ。とわかつたが、半面の恐ろしい膨脹の爲めに彼の眉も眼も鼻も口も――それはすつかり肉の下に蔽はれてゐた、――みんな片ッ方へヒン曲つて了つて、化物のやうな顔つきになつてゐた。いろいろ訊ねて、彼が今は兩親も親戚も何もないあはれな孤兒で、その晩も青木の出會つた上野公園でもう一寸で首でも縊らうかとしてゐたのだつたことがわかると、青木は自分の手で出來るだけの世話をしやうと約束して、自分の家へ引つ張つて來た。

翌朝、すぐに青木は近所の大學分院へ島崎を引つ張つて行つた、と、院長は一目見て、此の「世界的畸病患者」の爲めに施療で入院させやうと云ひ出した、思ひがけない言葉に青木はためらつたが、いろいろきいてやつと安心して、入院や手術は無料でして貰ひ、その外の附き添ひ費や雑費は、一切彼の方で受け持つことになつた。

それから丸一年のうへ、島崎は十何たびかの手術を受けた。腫物はひどく小さくなつたが、然しやつぱりとても普通の顔立ちにはなれなかつた。その後病院の親切で――醫者達と青木と相談したうへ――島崎は病院のなかの試驗用動物の飼育小屋で氣らくに働くことになつた、彼は殘らずの醫者や看護婦達に知られて、愛嬌者扱ひに可愛がられて、初めしばらくは青木の家から通つてゐたのを・まもなくもとの病室の中の一つのベツドを無斷で自分の住家にしてくらしてゐた、青木夫婦もそんな事からすつかり外科の醫者や看護婦達と顔馴染みなつてゐたのだつた。

「ぢやあすぐ私、これから行つて賴んで見ますわ、もし怪我人や火傷の人なんかで病室が一杯だつたら、島崎にそう云つてベツドをあけて貰つて、あの人は家へ泊つて貰ひますわ。」

云ふなり、早速彼女は角々に自警團の物々しい見張りの出來てゐる網の目のやうな道を突きぬけて、三四丁の向ふにある大學分院へ出かけて行つた。

病院の前まで行くと、彼女はおどろかされた、いつももう夜は大門を閉め切つて、寂と靜かな筈の大きな病院の前に今夜は物々しく一杯椅子を置いて、白い上ツ張りを着た醫者や看護婦達がズラリと半圓形に並んでゐた、――それは、あとからあとから運ばれて來る震災の怪我人達を待ち構へてゐる外科の醫者達なのを、一目で春子は知つた。

「御免下さい。」

彼女は眼ざとく、嘗て島崎の治療の主任をした若い淺黑い顏の醫學士をその中に見つけて、眞ツ直ぐに進んで行つた。

「急なお願ひで濟みませんけれど……。」

彼女は手短く今村の病狀を告げて、入院をさせて貰へまいかときいた。

『そりや困りますね、いくら罹災者だつて、今そんな内科の方の病人なんぞ――それに、今んところ病室は一杯です、少しは空いたベッドがあつても、それはこれから來る怪我人の分に取つて置かなけれりやアいけませんから。」

びつくりしたやうに、が、外科の醫者達に共通な、何か怒つてでもゐるやうな不愛想な調子で醫學士は答へた。

「そんなら、どうか島崎の分をお貸し下さい、あの人ば、そのあひだ私の方から通はせますから。」

思ひ込んだ調子で、すぐと彼女はつづけた。

「……………」

醫者は當惑したやうに眼をしばたたいた。

「おやあ、中へ入つて行つて、一つ内科の先生に聞いて見て下さい。構はずお通りになつてよう御坐んす。」

先刻からみんな春子に視線を鍾めてゐた醫者や看護婦の中から、一人の醫者がその時口を出した。

春子は早速門を通り拔けて、正面の玄關から、茲ばかりは早くも疎らな星のやうに明るく電氣の點つた(市電は、丁

度その晩から點き初めたのだつた）廣い廊下を早足に歩いて行つた、どこに内科の醫者達はゐるのか、あつちから來かかつた看護婦に訊かうとすると、丁度向ふの内科の病室の白いドアの一つがパッと開け放されて、恐ろしく背の低い、黒縁の大きな眼鏡をかけた、太い美事な髯をピンと生やした一人の醫者が、診察道具の入つた箱を持つた二三人の看護婦を從へて慌てたやうに飛び出した。

「今時分廻診してらつしやるのかしら。」

びつくりしながら、春子はいそいで傍へ馳け寄つた、そうして病人の入院のことを頼んだ

「ア、ア、ア、ア……。」

彼女の一句ごとにせかせかと合の手を入れて、兩足を互ひちがひに踏みかはして、如何にももどかしくて堪らないやうに聞いてゐた醫者は、彼女の言葉の終るか終らないに叫び出した。

「勿論、勿論です、……勿論、その病人はこつちでお引き受けします、すぐよこして下さい、何なら今晩、——いや、今すぐでも結構ですよ。」

「いゝえ、今夜はもう晩う御座いますし、一晩位は家でゆつくり寢かしてあげたく思ひますから、では明日の朝——。」

「結構です、結構です、ぢやあきつと、明日の朝お待ちしてますよ。」

まるで蝗やバッタのやうに短い脚を大股にひろげて、三跳びか四跳びで、云ふなり、小さな醫者は次の病室のドアのとこまで飛んで行つて、その扉を引き放して跳り込んだ。

「又どなたかお世話なさいますの。」

春子と見知り越しの一人の看護婦が、あとへ寄りながら微笑した。

「澤山、内科にも患者が御座んすか。」

彼女も何故かあはててきいた。

「いゝえ、こつちはそれほどの事もないんですけど、でも朔日から先生達も私達もずつとみんな徹夜ですの、だもんでもう疲れちやつて仕様がありませんわ、やつと今夜から交替に寢ることになりましたけれど。」

春子は彼女の言葉で、初めて病院ぢうの一種いつもとちがつた空氣や、殊に今の醫學士の異常な昂奮の理由がわかつた氣がした。

再び嚴めしい醫者達の勢揃ひの傍を過つて、禮を述べて、春子は自分でも不思議な位な早足で家へ歸つて來た。

「どうだつた？」

「まア私、びつくりしましたわ。」

すぐききかけた青木の問ひには答へずに、彼女は生き生きと眼を見ひらいて、いきなり門前で食ひとめられたおどろきをしやべつた、それからやつと、何もかも定つた報告をした。

「そうか、――やつぱり前から顔を知つてたから、それですぐと運んだんだな。」

青木はちよつと信じられないやうに呟いた。

「そうですわ、でなかつたら、とても今夜なんか中へ入れては貰へなかつたんでせう、でも、早くてよう御座んしたわね明日だつたら、もうどうだつたかわかりやアしませんわ、これでやつと病人の方も、子供や私達も安心ですわ。」

翌朝、おもんは又病人を背負ひ、青木が傍に附き添つて、病院へ出かけて行つた。――昨夜すぐ入院の話をすると、おもんも病人もひどく喜んで承知したのだつた。普通の營利病院とちがつて、醫者も看護婦もみんな親切で、おまけに病室が奇麗で、清潔で、明るくて、本院の方よりずつと氣もちがよく、何の心配も要らない、――などと、春子は詳しく説明して聞かせてゐた。

「ちよつと、ちよつと、今は外來は駄目ですよ。」

青木が先きへ立つて、門横の受附けの硝子窓の前を通らうとすると、眼鏡をかけた老人がいきなり中から呼びとめた。

「いや、昨夜お願ひして今朝入院するんです。」

彼はおもん達を指して見せた後、やつと許されて通り越した。玄關から上草履に替へてあがると、すぐ通りすがりの一人の看護婦に、彼は醫者への傳言を頼んだ。

「あアさうですか、そこの腰掛けで少し待つて下さい、今じきお迎へに來ますから。」

看護婦は、病室へ通じる廊下の、片方の窓際に据ゑつけた一臺のベンチのところへおもん達を連れて行つた。

まはりを見廻しながら、青木はひどくおどろかされた、いつもの病院とちがつた、地震によつての荒廢の感じが到るところに現れてゐた、平生隅から隅まで雑巾掛けをして、埃一つ見つからないやうに、奇麗な廊下は、今は土足で遠慮なく歩き散らした跡の埃だらけだつた、白く塗つた壁や天井は、ところどころ無殘にボロボロと崩れ落ちてゐた、ベンチの向ふの藥局の中では、硝子窓から覗くと、いろんな棚の藥瓶が落ちて壊れたのを片つけてゐるらしく、散亂した壜や硝子の破片の中で、二人ばかり男が默々と背中を曲げてゐた、いつも一杯立つたり腰かけたりしてゐる澤山の外來患

者は影も形もなく、朝の明るい日光が、まるで廢墟のやうに寂とした木造の建物の中へ、これもあつちこつち割れた硝子戸越しにさびしい金色の縞をつくつてゐた。

「大きな病院だねｏ」

肥つた女房の膝へ頭を載せ、痩せ細つた身體をベンチの上へ長く横たへた病人は、涙に潤んだやうな眼の色をしながらひとり語の如く呟いた。

「ぢやあ、これへ乘つて下さい。」

やがて、一人の看護婦が輕々とゴム輪の運搬車をすべらせて來た。

おもんに抱きあげられて車の上へ移されると、そのまんま、病人は廊下を內科の一室へ運ばれて行つた。

それは、そとと同じやうに青白いペンキで一面に塗りあげた、二列に十臺ばかりのベットの並んだ、廣々とした明るい病室だつだ、どのベットにもみんなじつと患者が寢てゐた、だだ一つ、一番隅に空いてゐる寢臺の眞つ白い床の上へ病人は靜かに仰向けにされた。

「割合靜かでせう。」

青木はおもんに云つた。

「ふんとに、東京の中たア思へないやうで御座んすね。」

混雜に滿ちた東京、殊に二三日前のあの恐ろしい火の東京はどこへ行つただらう、……怪訝に堪えないやうに彼女はキヨロキヨロ周圍を見廻した、大きく剝落したままの天井、割れた壁、――青木の眼は、が、そこにもまざまざと凄い變りさまを見つけた。

すぐあとから醫者がやつて來た、それは前夜春子が會つたとは別の、すらりと背の高い、緣無しの眼鏡をかけた、髭のない若い醫學士だつた、病人へ向つて、彼は今までの症狀を詳しくたづねた。衰弱してゐるにも係はらず、病人は低いゆつくりした聲で、かなりハツキリと今までの經過を答へた、時々質問が聞き取れないらしくつかへると、傍からおもんが引き取つた。

「何んろ御飯がちつとも頂けませんから、こんなに痩せて骨と皮ばかになつちまひました、……昨夜は、この方のお家で初めてゆつくり寢かして頂いて、お蔭さまで今日は大へん氣分がいいつて云つてます、……えゝ、五月には慈惠病院で、その時も無料で療治して頂きました、――ふんとに何て運がいいんですか、今度は又、見ず知らずの方にからして連れて來て頂いて……。」

彼女は、あたりの樣子があんまり立派なので、もし施療でなくされて、此のうへ青木達へ厄介を掛けるやうな事でもあつてはと、ひどく恐れたやうに、一生懸命彼女達が今まで貧乏で、又青木と何の關係もない人間なことをしやべつた。

「はア、はア……。」

丁寧な調子でき流しながら、醫者は檢溫器を調べたり――熱は七度に足りなかつた――聽診器を隈なく當てがつたり、病人を起して頸や背中の樣子を見たり、又ベツドから兩脚を垂れさせて、何度となく叩いては質問したりした、その合間々々に、傍の看護婦の捧げてゐる箱の中のインキ壺へペンを突ツ込んで彼は片手の紙を幾枚も幾枚もドイツ語で埋めた、ほとんど一時間ばかりもの念入りな診察のあとで、醫者は輕く頭をさげて出て行つた。

「一寸、……あの病人の模樣はどんなやうでせうか。」

すぐあとを追ツかけて廊下で、青木は醫者にたづねた。

「勿論肋骨カリエスですが、その方はまだ大したことは御座いません、まだ外のいろんな病氣が一緒になつて、ひどく衰弱してゐますから、あんまり安心が出來ません、胃が大へん惡くなつてますし、脚氣もかなり來てますし……。」

若い醫者は、相變らず靜かな慇懃な調子で說明した。

禮を云つて廊下を戻りかかると、丁度蓬々と草の茂つた中庭へ向ふ窓越しに、白い上ッ張りの衣囊(かくし)へ兩手を突ッ込んで、動物舍の方から向ふ道をぶらりぶらりと歩いて行く島崎の姿を彼は見つけた。

「島崎君、島崎君！」

いそいで窓から大聲で呼んだ。

びつくりしたやうに振りむいて、やがて彼を見つけると、島崎は相變らずゆつくりした歩調で窓下の階段のところまで歩いて來た。前には如何にも弱々しさうだつた彼の蒼白い皮膚は、今は茶色に日に焦(や)けてさも丈夫さうに變り、半分位にちぢまつた半顏の腫物まで、まるで新しいパンの皮のやうに艶々した光を帶びてゐた。小さな眼を臆病さうに瞬きながら、彼は挨拶代りに默つて、一寸小柄(こがら)の腰をまげた、青木は手短(みぢか)に新しい病人のことを話して、この後時々見舞つてくれるやうに賴んで、そのまま病室へ引ッぱつて行つた。

「ぢやアこれから歸つて、女房に藥罐や茶碗なんぞの道具を持つて來(こ)させますからね。」

青木はおもんに告げた。

「ありがとう、――私は、始終傍にゐてやらなくちやアいけませんでしせうか。」

「いや、時々いらッしやるだけで結構でせう。今醫者にきいて見たら、看護婦が充分世話するから附き添ひも要らないッて話でした、それに――この人が時々見舞に來てくれますから、御用があつたら遠慮なく賴んで下さい。」

青木は、うしろにつくねんと突ッ立つてゐる島崎を、おもんにも病人にも紹介した。

「まア左様で御座んすか、……どうかよろしく。」

おもんは島崎の顔を見てびつくりしたやうに、が、丁寧に挨拶した、ドギマギしたやうに、島崎は何か口の中で低く呟きながら、――それが癖の――片手で顔の瘤を撫で廻した。

ズウーン……ガタガタガタツ……その時、餘震とは思へないやうな大きな地震が、いきなり病室ぢうを二三度揺つた

「アッ――」と云ふ叫び聲がベットのあちこちに起り、幾人かの人間が起きあがつたり立つたりした。

「まあ恐いこと。」

おもんは思はず病人の寢臺へ片手を突きながら唇をふるはせた。

4

その夜、おもんを助けて無事に一緒に逃げさせた若い左官職人――太田が、不意に青木の家へ訪ねて來た。前日おもん達を青木に引き合はせた小學校教師が、提灯をつけて彼を連れて來てゐた。

知り合ひの家を廻つた後、その夕方、太田は又護國寺へ戻つて來た、と、いつかおもん達も道具類も影も形もなく今まで彼女達のゐたところには見知らない人間達が代つて坐つてゐた。彼はびつくりして、その邊の人達に彼女等の行方をきいたり、もしや貼り紙でもあるかと探したりした、が、誰も知らず、又貼り紙のなかにも今村一家の名前は見つからなかつた。寺番に聞いても要領を得なく。とうとう下の小學校まで降りて來て、初めて教師の持つてゐた名刺で、みんな青木の家へ避難してゐることがわかつたのだつた。

まだ夕飯前だと云ふ言葉に、早速玄米の飯へ眞ッ黑く煮た茄子の菜を添へて春子達はすすめた。

「ぢやあ遠慮なしに頂きます。」

太田はドッカリ胡坐を組んで、まるで奇術師のやうに輕々と大きな手の中で茶碗を廻しながら、おちんの甲斐々々しい給仕で何杯も丸嚥みの如く搔ッ込んだ。やがて濟ますと、蛙のやうな不恰好なお辭儀を一つした。

「よく、あんなに何を持ち出したものですね。」

ゆらゆら搖れる一本の蠟燭の暗い火をめぐつて、青木達はこの珍客の話をきき出した。

「御自分の物は何一つ出しなさらなかつたんですよ。」

太田の横に坐りながら、おもんは感謝のこころを繰り返した。

「どうせ碌なもんはなかつたんだから――だが、とうとう本をみんな燒いちやッた。」

「太田さんは、本好きでいろんな本を持つてなさつたんですよ。職人らしくなく、算盤でも何でも出來て、それに正直なもので、店の方でも今まで會計の方をおもにさせられてなさつたんです。」

おもんは說明した。

「おかみさん、店の方へも行つて見ましたよ。」

「やつぱし燒けてましたか。」

「いんや、燒きやアしねえが、とてもひどいもんだつた。」

大きな眞ッ黑い顏をした、筋骨の逞しく隆々とした勇士は、眼ばかり白く光らせながら、おそろしい主人一家の運命をみんなにしやべつてきかせた。

赤坂の方に住んでゐた彼の主人——彼の言葉によれば、腕にかけては「日本一」の左官屋だツた、——は店も大きく、つい二三年前鐵筋コンクリイトで新築したばかりの嚴丈な家だつたが、今度の地震で一堪りもなく潰れた、主人のほか内儀さんも、娘も、主人の母親も、女中も、家にゐた者殘らずその下敷きになつて死んで了つた。丁度金庫の前に坐つてゐたおかげで主人はただ一人生き殘つたのだツた、が、崩れ落ちた土や鐵ですつかり四方を塞がれた爲め、ほとんど身動きも出來なかつた。勿論いくら呼んでも助けに來てくれる者は誰もなかつた。家族の死骸を傍に、燃えひろがつて來る火におびやかされ、三日二晩一口も飲まず食はず、そうやつて彼は金庫の前に閉じ込められてゐた、三日目の夕方になつてやつと一人の男が呻き聲をききつけて掘り出した時、彼はもうすつかり氣が狂つてゐた。そうして、わけのわからない事をわめきながらあばれ廻つて仕樣がないので、みんなで今警察の方へ保護を頼んである、……と云ふ話だつた。

「何と恐ろしい話でせう、氣がちがふのも無理アありませんわ。」

春子は身ぶるひするやうに嘆息をついた。

「本所や吉原の方へも行つて見たが、どこもかも死人だらけで、ほんとにいやになつちまう……ああ、そう云へばお内儀さん、病人が梨を食べて見たい見たいと云つてたから、わツしやあ隨分あつちこつち探して見たよ、今日も一日探したんだけれど、とうとう見つからなかつた、どうか勘辨しておくんなさい。」

ヒョコリと、突然若者は頭をさげた。

「何のそんなこと、お頼みしたわけでも何でもないのよ、お氣の毒な——。」

おもんはおどろいたやうに云つた、

「一ツつでもいいから、どうかして手に入れてえと思つて一生懸命歩いたんだけんど。」

そう云はれても自分の氣に濟まないやうに、彼はさも殘念さうに繰り返した。

「今は梨どこか、御まんまさへ頂けるかどうかわからない時ですもの、そんな贅澤な……。」

おもんは申しわけなさそうに呟いた

5

翌朝起きぬけに、太田はおもんと一緒に病院へ見舞つたが、戻つて朝飯を濟ますと、これからひとまづ秩父の家へ歸ると云つて大きな握り飯をつくつて貰つて出かけた。

「今朝行きましたらね、ひとりぢやあ寂しくつていけないから、やつぱり誰か傍にゐてくれつて、病人が云ふんです。看護婦さんにお聞きしても、別に附き添つてる必要はないツて云ふし、お父さん、大丈夫だよ、ツていくら云つてきかせても、どうも心細がりますから、晝間のうち邦子をやつて、夜は私が行つて泊ることにしやうと思ひますが、旦那、どうでせう。」

壁の割れ目を造紙でまに合はせに貼り散らかした春子の居間に青木達がゐる時、おもんがやつて來て云つた。

「そう、ぢやアそうなさつたらいいでせう。」

「お子さん達がゐらツしやるに、ふんとにお手傳ひもしないで濟みませんけれど、――それから、病人には今まで始終少しづつお粥と牛乳を飲ませてたんですが、何だか病院のお粥は固くツて、どうしても喉へ通らないツて云ふんです、御親切さまに丁度重湯を（それは炊き立ての飯から取つた一番いい部分を今朝春子がわざわざ病院へ届けさせたものだ

ッた）頂いて、お蔭さまで少しはいけましたが、ついでに牛乳を少しばかり取つて頂けませんですか。」

「病院では牛乳をくれません？」

　春子はきき返した。

「えゝ、地震からこツち、病院へも牛乳が來ないツて話です。」

「ぢやあ仕樣がありませんわね、……さア、うちへ配つてくれる牛乳屋は、いい按配に地震でも家が何ともなかつたんで、毎朝すみ子の分だけは置いてツてくれるんですけれど、でもお得意さまだけやツと特別に配つてる、それに壜が足りないからツて、そのたんびドシドシ前の壜を持つてかつちやう位ですの、ですから、うまく持つて來てくれるかしら。」

　春子は思はず眉をひそめた。

「何しろ、もう少し何か食物が頂けるといいんですが、あれぢやアたアだ弱るツきりですから。」

　おもんは春子の當惑に耳を貸さないやうにつづけた。

「普通なら、どの患者へもきつと一本づつはくれるんですがね、——一遍牛乳屋にきいて見たらいいだらう。」

　青木は春子に云つた。

「えゝ、見るだけは見ますわ。」

　春子は、いよいよ不興げに言葉を切つた。

　あんまりお内儀さんも勝手なことばかり云ふと、彼女は思つたのだツた、——重湯は勿論、彼女は病人の食べ物についても出來るだけ心配してゐた。牛乳も、普通の時なら決して取つてやらないことはない、が、今は病院でさへ配れず

自分の家でも、やつとすみ子の分だけ貰つてありがたがつてゐるやうな時だ、その牛乳を見つけて、おもんはそんな請求もするのだらう。が、まだ生後一年にもならないすみ子は、一體胃腸が弱くて、重湯さへ遠慮してゐる位の子だ、いくら何でもその子供の分は分けてやれない、それともおもんは病人の世話の爲めなら、赤んぼの口からたッた一つの飲み物を奪ふのも當然だ、と考へてゐるのだらうか、……それどころか、今まで護國寺にゐると思つて見るといい、握り飯ばかりで、お粥さへなかつた時のことを考へたら、病院のお粥がまづいの何のと、そんな贅澤は云へた義理ぢやあるまい、人間は心一つだ、うんとお腹が減りさへすれば、どんな物でも食べられないことはないとも聞いてゐる、喉もと過ぎれば熱さを忘る、と云ふ諺どほり、少しでも安心すれば、もうそんなふうに人間は我がまゝになるものだらうか。

――

母親の本能と一緒に、人から要求されてしてやれないと云ふ氣もちが、餘計彼女の心を焦立たしく不快にした。

思ひがけなく――と云ふよりは半分豫期どほり、今まで何でもよろこんでしてくれた青木達が牛乳のことで讓つたのを見て、おもんの方でも悲しくなつた、……今の時 たとへ五勺の牛乳でも獲がたいことは彼女にもよくわかつてゐたが、見す見す眼の前に衰弱してゆく亭主を見ればこそ、傍で眺める辛さに堪へられなければこそ、強ゐてもそう頼んで見たものを……彼女もそれなり默つた。

一時近く、午飯を食べに病院から戻つて來た邦子は、病人がやつぱり寂しがつて、午過ぎからは母親に來てくれと云つてゐることを告げた。

「仕樣がないねえ。ふんとに。」

そう云ひながら、母親は又青木達に病人の附き添ひに代らうと云つた。

「勇ちやんも行く。」

傍で聞いて、早速甘ツたれたやうに男の子はすがりついた。

「ぢやアおいで、お前は、いくら云つても坊ちやんと喧嘩ばかりしてゐんだもの。」

一つはそれをしほに、一つ年下の雪雄と自分の男の子との喧嘩をおもんは避けやうと思つた。

全く、それは彼女に取つて最初から何よりの氣苦勞だつた。——今年六つの末ツ子の勇は、小さい時から弱かつただけ、自分でもどうしても外の子供達のやうにシツカリとは育てあげられないと、前から彼女はあきらめてゐた。親から見てもわからずやで、泣き蟲で、云ふ分なしの「母ちやん子」で、どこへ行くにも彼女から離れなかつた、一寸便所に立つと云つても、くさい、用のない中へ一緒について來る有様だつた、最初寺から病人を背負つて出て、門の前に待つてゐた春子と雪雄の姿を見た時から、彼女の胸にはこの後厄介になるについての心がかりがひらめいた。が、まだ一日も經たないうちに、その心配は實現されて了つた。二人の男の子は、何度となく喧嘩を繰り返した、玩具を取つて投げつけては泣き、一臺の三輪車を奪ひ合つては叩き合ひ、やつと仲がなほるかと思ふと、もう惡口を云ひ合つた。

「よくまア喧嘩ばツかりする人達ね。」

さすがに春子もびつくりしながら、不思議に彼女は割合平氣だつた。

「年上のくせに、お前が惡いんだ。」

たとへ春子がさうでも默つてはゐられないやうに、表面だけでもずつと今までよりきくとおもんは自分の子に當つた。

「何しろあんな處で育つたもんですから、まるで言葉やお行儀を知つてません。それも親の教育が惡いばつかりで、ほ

んとにお恥しい話ですが。」

「手前（てめえ）」だの「何でえ」だの「知らないやい」だの、如何にも町ッ子らしい荒つぽい子供の言葉も、今更彼女に氣にかかつた。

「なァにそんなこと。」

出來るだけ餘計の氣苦勞をさせまいとして、青木は無雜作に笑つてゐたが……。

「その前、一つどうか、はがきを二三枚書いてお願ひ申します。」

病院へ行かうとして、急に思ひ出したやうにおもんは青木に頼んだ。

「はがき？」

「あとで買つて御返ししますで、無事でこちらの御厄介になつてるつて云ふことを、一筆甲府と、千葉と、四ッ谷とへ……。」

彼女達の故郷は甲府在（ざい）だつた。丁度十年前國の方でいろんな事をして失敗した今村は、思ひ切つて家をたたんで東京へ移つて來たのだつた、當時邦子はまだ二つの子供で、その上に四人の息子や娘がゐた。長男の順吉は、本郷の雜貨商へ奉公にやつてあるうち兵隊に取られて、今千葉の聯隊へ行つてゐ、次男は肺病で死に、今年十六の三男の平吉は四ッ谷の酒店に勤め、娘は、二三年女工になつて印刷局へ通つてゐたが、今年の春やつぱり肺をわづらつて十九歳の花盛りをなくなつて了つた。國の方には、今村の兄が今一寸した店をひらいてゐた。その義兄と二人の男の子とへ、おもんは取りあへず――一つは安心させる爲め、一つは、もし出來たら訪ねて來て貰ひたい爲め――落ちついた知らせを出したかつたのだつた。

「いや、はがきなんぞいくらでもありますが……。」

よく彼女の氣もちはわかりながら、青木は何となく臆劫な氣がした。

彼も國に兩親や親類を持ちながら、地震以來まだ一度も電報もはがきも書いてゐなかつた。電報は中央郵便局まで、はがきでさへ、傳通院傍まで持つて行かなければいけない面倒臭さもあつた。が、それと一緒に、そんなことをするのが済まないやうな氣もちが不思議に彼はした。今度の事變では、東京だけでも何萬の人間が無殘な死にかたをしてゐた、その人達のことを思へば、生きてゐる者は無事なだけでも何よりの幸せだツた、人の不幸も知らず顔に、臆面もなく一家無事の知らせを出してやるなぞとは——。

「いろんな御願ひばツかりして、ふんとに済みませんけれど。」

おもんは又窮屈な心もちになつた。

「ごたごたして、僕もまだ國の方へは知らせてないんです。」

辯解するやうに青木は立つてはがきを五六枚取り出した。

「ただ一言で結構で御座んす。」

自分の分さへ書かないのを、と云はれた氣がして、おもんはなほ硬くなつた。

云はれれば云はれるだけ、——それを機會に自分の分も書かうと片方に思ひながら——いよいよ青木は氣が變に進まなくなつた、出來るだけ自分の家でおもん達に氣がねをさせないやうに、居づらく感じさせないやうに——それは何より彼自身に苦しい爲め、——と思ふ一方の力で、一生懸命それと戰ひながら、彼はやつと三枚のおもんのはがきを書いた。

そのあと、妙に憂鬱な氣分になりながら、――おもんが自分で出しに行くと云ふのをとめて ――崩れた町並みを一時間ばかりも歩いて、彼は傳通院傍の郵便局まではがきを出しに出かけた。地方へのはがきは受けつけられたが、市内はまだ配達しないからと、四ツ谷への一枚はことはられた。それを袂へ入れたまま、又ぶらぶらと、長くひび割れた地面や、道傍一面につくられた避難者の假小屋の櫛を彼はとほりすぎて行つた。

6

午過ぎの分を牛乳屋が配つて來た時、もう五勺でも一合でもいいから增して貰へないか、と恭子は呼びとめて頼んだ。

「五勺なんぞツては、今配達しません。……さア、一合でもどうですか。」

出來たら持つて來ると云つたまま、翌朝はやつぱりいつもの分きり置かなかつた。その代りに、恭子は又取り立ての温い重湯を病院へ邦子に持たせてやつた。

相變らず病人がいやがるからと云つて、おもんは朝飯にも歸らずに、自分達二人分の握り飯を邦子に病院へ持つて來させた――。

その午近く、青木は知人の見舞ひかたがた下町の方へ出かけて行つた。下谷から、淺草吉原の方までぐるりと廻つて到るところ焦け土の匂いと灰と埃とにむせ返りながら、凌雲橋から――その橋の前は谷のやうに落ち窪んで、高く懸つた鐵橋の裏に、まるで蜘蛛か鳥のやうに避難者が空に巣をつくツてゐるのが仰がれた、――上野の山へのぼつて、丁度博物館横まで戻りかかつた時、思ひがけなく彼は、その塀の根ツこに大聲で叫んでゐる梨子賣りを見つけた。最初、うそではないかと思つたほど心をおどらせて價をきくと、一ツ「大安賣り五錢」だつた、出來るだけ多く病人へ持つて行つて

やりたい氣がしながら、半日あまり燒け跡を歩きつゞけて、その時彼はもう疲れ切つてゐた。荷にならない用心に、そのよく熟した中位の果物を二つだけ買つて、もう蒼くたそがれかけた公園の中を、彼は竹の臺から入り口の方へ突つ切つて行つた。と、淸水堂の手前、一杯叢の生ひ茂つた崖のなかに、ふと一ツの小屋掛けに眼をとめた。

その近所にもいくつかの汚い假小屋がつくられてゐたが、それは特別にみぢめなものだつた。四方、破れた古席をつづり合はせた疊半疊ほどの低い小屋には、燒けトタン一枚、ボロ板一枚載ツかつてゐなかつた。そうして、中にうづくまつてゐる一人の若い女の肩から上がすつかり見えてゐた。

蓬けた埃だらけの叢、迫つて來る夕闇、……その中にあはれなその姿を見つけると、靑木は思はず足を停めた。しばらくじつと彼は見つめた。何と云ふ氣の毒さだ、きいて見やうか、そうして、もしただ一人ツきりで逃げてでもゐて、誰も賴る人間も行く處もないやうだつたら、うちへ連れて行つて今村と一緒にくらして貰はうか、もしあのまゝ夜を明かすのだつたら、若い女の身空にどんなに恐ろしくも、又不安だらう――。

思はず一足崖の方へ彼は寄つた。が、それなり又立ちすくんだ。彼は自分を振り返つた、まだ若い――三十そこそこの男が、こんな薄暗くなりかかつた時刻に、いきなりひとりで若い女に樣子をきくなぞとは、そうして、何なら自分の家へ一緒に來ないかなぞと云ふのは、あんまり無鐵砲すぎはしないだらうか、彼女は果して信じてくれるだらうか。もう少し自分が年を取つてゐたら、それとも二人か三人連れだつたら。……暫く立ちつくした彼は、とうとう內氣に打ち負かされて了つた、溫い寢床、雨は漏つてもとにかく蔽ひのある自分の室、――それをまざまざと彼女爲のめに思ひ浮べながら、彼は崖の方へ叫びかけた。

「どうです、梨子を一ツあがりませんか。」

女はびつくりしたやうに、白い顔を木下闇からこつちへ向けた。

「梨子を？……抛つてあげますよ！」

小屋の端を目がけて彼はいきなり手の中の梨子の一つを抛り投げた。黒い鳥でも飛んだやうなあとを描きながら、バサリと音を立てて果物は小屋からやや離れた草のなかへ墮ちた。

女は一寸あつけに取られたやうに見えた。が、輕く頭をさげると、ごそごそと蓆小屋の中から匍ひ出してそツちの方へ探しに立つた。様子を見定めると同時に、あたかも見てはならないものを避けるやうに、半ば駈け足に彼はそこを去つて了つた——。

夜おそく歸つて來ると、早速彼は殘りの一つの梨子を邦子にやつて、明日の朝病院へ持つて行くやうに云つた。

「そう……。」

彼女は色白な顔を半分微笑させた、——邦子は、あんまり口數をきかない、おとなしい、が、物を云ふ時は變にぞんざいな言葉を使ふ女の子だつた。同時に、その聲音が一向子供らしくなかつた。妙に嗄れて、まるで年寄りの女のやうに可愛げがなかつた。兄や姉が二人までも肺で死に、父親が又肋膜に惱んでゐるところから推して、どうやらそれは彼女の不幸な肉體的徴候らしく見えた。

午後、寄木は初めて病院へ見舞ひに出かけた。

「今朝は、ふんとに梨子をありがとう御座んした。」

彼の顔を見るなりおもんは禮を云つた。

「丁度見つかつたもんですからね、——少しはいけましたか。」

「大よろこびで、今朝半分も一度に食べて、さつきがた又みんな頂きました、こんなにいけた事は、地震からこッち初めてです。」

「そりやアよかつた。ぢやあ又見つかつたら買つて來ませう。」

よろこばされながら彼は病人に挨拶した。

「今日は。」

まるで誰か見知らない他人でもあるやうに、仰向けに寢た病人は低く素つ氣なく呟いた。

「お父さん、旦那ですよ、今朝わざわざ梨子を頂いたのに、お禮でもお云ひなさい。」

おもんが傍から云つた

「ああそう……。」

病人は横へ身體を曲げて、と、起きあがらうとするやうな恰好を示した。

「どうかそのままゐて下さい。」

青木はあはてて押しとめた。

「いろいろ御親切さまにあづかつて、此の御恩は、……一生子供達に忘れさせません、――もう私共は何ですが……。」

病人はもとどほり仰向けになつてゆつくりと途切れ途切れに云つた。

「恩なぞツて、……此の際お互ひさまの事ですよ。」

「今朝もそう云つてるんです、もう自分達にやアとても御恩は返せまいがつて――でも、やつぱりどうしても今死にたくはないと見えて、もう一遍何とかしてもとどほりの身體になつて働いて見たい。せめて子供達が一人立ちになる迄は

なんてひとり言見たいに云ふんですよ。」

「そうですとも、その後、醫者は何とか云ひましたか。」

「先生は、もしかしたらなほるかも知れないなんて仰つて下さいますがね、今朝二度ばかり注射して頂いて、そのあとがまだ痛い痛いツて云つてます、でもいい按配に、あんなふうにウトウトし始めてますから、これでいい工合に落ちついてくれたらと思ふんですが、……ゆうべは始終ぐづぐづ云つて私も夜ッぴて寝られませんでした。」

おもんは云ひわけらしく云つた。

青木は思はずベツトの向ふの、床へ敷いた茣座のうへのおもん達の夜具を眺めた。まだ蚊もゐるべきに蚊帳も釣らず狭い床板の隅へ子供と一緒に寝ころんで毎晩あかしてゐる彼女の看護が、深く思ひやられた。と一緒に、自分の家の様子も浮んだ。

地震以來、飲み食ひの物がすつかり不自由になつてゐた。野菜と云へば茄子が手に入るきり、水道がとまつた爲めに水は三軒置いて隣りの家の井戸まで始終貰ひに出かけ、瓦斯の代りに、炭で毎日飯も炊き物も煮るのだつた。が、それ位はまだよかつた。何よりの米が、もうそろそろその時なくなつてゐた。前から多く買つてなかつたところへ、急に今までの倍近くもの人數になつた爲め、見る見る玄米の分も減つて行つた。一二日前から調べを受けて、避難民への配給米として、毎日一人分一合づつの米を貰つて來るやうな運びにはなつてゐたが、それ位ではとても追つつきやうはなかつた。パンを賣る處もなく粉を買ふ店もなかつた、いざとなつたら一日や二日は絶食しても我慢する心でゐながら、その先きの不安がいつ迄つづくかもわからない氣がした。そんな困惑に加へて、穢いことだが、まだおもん達が來て幾日にもならないのにすつかり便所がたまつて、臭氣が絶へず室の方迄流れて來てゐた。勿論當分汲み取り手が來る筈もなく、

もう臭氣止め位では間に合はなかつた――。
いくら何でも、それ位のことでおもんゝ達の世話をやめやうとは青木も思ひつかなかつたが、そんないろんな困難に加へて、先きにそれほどの見込みもない病人の世話なぞに今更外の人間達が見す見す疲れて行くのは、如何にも無益な餘計な氣がした。なほるものなら格別、もしどうせ駄目と定つた壽命なら、いつそ早く死んで、みんなの氣づかひや手數を尠くしてくれたほうが……ハツと、彼は思はず自分を振り返つた。
何を自分は考へてゐるのだらう、病んでゐる人間の世話をしながら、然も、少しでも早くその面倒から逃れたいと思つてゐるこの心は！
「今朝からやつと、牛乳を病院でも下さるやうになりました。配つてなんかやれないから、自分々々で容れ物を持つて取りに來るやうにつて、仰つてですが、お蔭さまで今朝牛乳も少し飲ませてやりました。」
又うとうとし始めたやつれた病人の顏を眺めながら、おもんは疲れたやうに話した。

7

翌朝、――もう大地震の日から九日目になつてゐた、――邦子がまた病院へ握り飯やお茶を持つて行つて、それなりブラブラ遊んでやつと午飯に戻つて來ると、青木はすぐ病人の容態をきいた。
「今朝又二度注射したの。」
邦子は、いつもどほり半分微笑するやうに答へた。
「馬鹿につづけてやるね、……どんな藥だつたの、それは。」

少し不安になつて、青木は重ねてきいた。

「さア、――知らない、よく見なかつた。」

父親は、然し今別に苦しそうなふうもなく靜かに寢てゐる。母親も何とも云はなかつた、と云ふ彼女の言葉に、青木は一旦ひそめた眉をひらいた。そんなら格別なこともなく、反つて注射で病人が落ちついて行くなら、いい徴候かも知れない、……彼は自分勝手に氣がかりを打ち消して了つた。

が、午後三時ごろ、丁度訪ねて來た帝大の懇意の學生――それは武井と云つて、彼より七つばかり年下の、同じく哲學の方を勉強してゐる青年だつた、――と、彼が居間で話をしてゐると、突然ガラガラと玄關の格子戸をあけて、島崎があはてふためいて馳け込んで來た。

「あら、どうして?」

いつもゆつくりとしてゐる彼にも似ず、顔を眞ッ青にしてせいせい息を切りながら、然もあんまり飛びつけた爲め直ぐには口がきけないらしく、上り框に片手を突いて、片手で胸を押へてただ眼を白黑させてゐる島崎を見て、春子はびつくりしてきいた。その樣子に、青木達も室から出て來た。

「今ね、――えゝと、――今……あの病人のひとの樣子が變つたから、――すぐ來て下さいつて。」

「誰が云つたんだ!」おどろいて青木はきき返した。

「あのお内儀さんが?」

「えゝ……お内儀さんが、――ああ苦しい!」

「あなたはどうして? どこか惡い、それともいそいで走つたから?」

春子は島崎の肩へ手をかけた。

「い、い、いそいで來たからです。」

島崎はそのまんま突つ伏した。

「仕様がない人だなあ、……ぢやあ一寸藥口を出して！ もし何か又要るかも知れないから。」

島崎を見やりながら、青木は自分も顏の色を變へて細君に怒鳴つた。

青木がいそいで金を入れた藥口を受け取ると、へたばつた島崎をそのまんまに、青木はいそいで病院へ馳けつけた。

「もし、もし、何か用ですか。」

何度でも同じやうに呼びとめる受附けの老人に

「危篤の病人のとこへ行くんです。」

と云ひ棄てたまんま、彼は今村の病室のドアをあけて入つた。

病人のベットの頭の方には、その時四つ折りばかりの白ッぽい低い屏風が立て廻されて、丁度寢臺をみんなで蔽ひかくそうとしてゐるやうに、そのこつち側にかねて見覺えのある主任の醫學士、看護婦、おもん、子供達が並んで立つてゐた。

「御苦勞さまです。」

低く醫者に挨拶した青木の言葉で、おもんは初めて振りむいた。

「いろいろ御世話さまになりましたけれどもねえ……。」

彼女の兩方の眼は、涙で白く一杯だつた。

「駄目ですか。」

息を抑へながら、じつと青木は仰向けに寢た病人の顏を眺めた。

もう身動きもしなければ、蒼白い顏色は餘計白く蠟のやうに、いつも光の薄い眼は、まるで死んだ魚の眼のやうにぼんやりと氣味わるくひらいたまんまだつたが、然し、病人の呼吸はまだ絶えてはゐなかつた、しまりなく半分開いた口の中から、最後の息が風のやうに靜かに出てゐた。が、見てゐるうちに、その息の音は潮でも引くやうにいよいよゆるやかに、いよいよかすかになつて行つた。

「今朝はいつもになく元氣があつて、食もいけ、自分でも、此の分ならなほれるかも知れない、ただ身體が痛いから少う横にさせてくれ、なんて云つてましたにね、やつぱり、もうそれがいけなくなる印しだつたんでせう。」

おもんは腰をかがめて、片方の平手で涙を押しぬぐひながら、片手の指の腹で、もう亭主の眼をねむらせやうと頻りに瞼を押しさげてゐた。が、ゆるんで了つてゐる筈のその薄い皮は、思ひのほか容易に彼女の意に從はなかつた。如何にも降りるのをいやがるやうに、切角眼の上へかぶさるかと思ふと、手が放れるなり又釣りあがつた。まるで餅でも捏ねるやうな手つきで、おもんは繰り返、繰り返し、閉じまいと逃げ廻る眼をあはれにふさいだ。邦子や勇は、その傍で小さなガーゼに水を浸して斷末魔の父親の蒼ざめた脣を濡らした。

息の音一つ立てずに、その樣子を眞面目な顏つきで見まもつてゐた若い醫師は、やがて、ふとどこかから命令でもかけられたやうに、靜に腰をかがめて敬禮をした。と、看護婦も恭々しく頭をさげた。

「とうとうおなくなりです。」

次におもんや青木達の方へ向いて、醫者は鄭重な口調で云つた。

「ほんとにありがとう御座いました。」

泣きながら、おもんは醫者達に禮をいつた、靑木も口を添へた。

「今何時頃でせう？」

おもんは靑木にたづねた。

「丁度三時半です。」

醫師は、手頸の腕時計を靜に眺めて代つて答へた。そうして又輕く會釋をすると、コツコツと靴の音を立てて出て行つた。

「お父ちやん、死んぢやつたの？」

その時不思議そうな顏つきをして、勇が母親に聲高くきいた。

「死んぢやつたの？」

鸚鵡返しに邦子が引き取つた。

「あなたにもいろいろ親切にして頂いて……。」

おもんは、あとに殘つた看護婦に改めて禮を述べた。

「ほんとにお氣の毒さまで御座いました。」

彼女は丁寧に挨拶を返した。

「やつぱり、もうこれだけの壽命だつたんで御座んせう、これだけ皆さんから手を盡して頂いて、それでいけなかつたんですから、さぞ死んで行つた者も本望で御座んせう。」

何か云はなくてはゐられないやうに、おもんは又青木に話しかけた。

「いい按配に、ちつとも苦しみなさらなかつたやうですね。」

彼女の言葉に思はず自分の心を突かれたやうに、青木は口をそらした。死人に對する今までの自分の氣もちが、彼の心の中に再び鋭くふりかへられた。自分はほんとうに、死人に對して「心を盡した」らうか、どんなにしてでもなほしたいと思つてゐたらうか、否、それどころか、むしろ早く死んで厄介拂ひをして貰ひたいやうな心もちに動かされてはゐなかつたか、そんな自分の氣もちからでも、こんなに早くあはれな病人が死んで行かなかつたと、どうして云へやう。

心から愛してゐなかつたばかりか、手當ても果して充分だつたか、まだ盡そうと思へば盡せることも、自分達はやらなかつたと云へないだらうか、……強い良心の責めと痛みを感じて、我知らず頭を垂れ眼を瞑ぎながら、彼は死人の前に許しを祈つた。

「ほんとに樂往生でした。おしまひまでまだ自分ぢやあ死ぬつもりがなくつて、いつ死んだかも知らずに眠るやうに行つたんで御座んすからね、これもきつと御手當と一緒に、平生お父さんが正直で、信心をしてゐたお蔭でせう。」

まだ片方の眼をかすかに開いて、一寸見たところでは眠つてゐるか死んだかわからない。何の苦悶の影もない安らかな亭主の顏を見つめて、おもんは又涙をふいた。

「これから、身體をお拭きしますから。」

そこへ、もう一人の看護婦がバケツやらガーゼの包みやらを運んで來て云つた。甲斐々々しく腕をまくりあげた看護婦が、死人の顏を拭いたり、胸や背中をひろげたり、肛門へ綿をつめたりするのに手傳つて、おもんもガーゼをしぼつ

た。

「あなたがたはあつちイ行つておいで、いい子だから。」

ぼんやりベッドの傍に立つてゐる子供達をそとの廊下へ連れ出して、青木はしばらく湯灌を眺めてゐたが、やがて思ひついて、家へ戻つて甲府や息子達のとこへ知らせを出すことをおもんと話した。

頼りなさそうにしてゐる子供達の前をとほつて、玄關の方への廊下を來かかると、看護婦室の前のベンチに彼は子と島崎の姿を見つけた。島崎は、身體を蝦のやうに前へ曲げて、鳩尾のあたりを片手で押へてゐた。

「どうしたの、まだ苦しい？」

青木は傍へ寄つてきいた。

「今度は、何だかお腹が痛くなつちやつて……。」

びつくりしたやうに見あげながら、彼は嘆息交りに呟いた。

「藥を貰つて飲みたまへ、何なら。そんなにいつ迄も惡くちやあいけない。」

「えゝ、今になほるんですけれど。」

彼は顔を歪めて、はづかしそうに坐つて見せた。

家へ戻ると、かねておもんの書いておいた所番地の紙片を青木は引き出した。

「甲府へは勿論電報だが、千葉の兵隊さんはどうかしたら戒嚴令で今こッちへ出て來てゐないだらうか。」

「そうかも知れないわ、あゝ、丁度坂下に兵隊の駐屯所があるでせう、あそこへ行つて、わたしきいて來ますわ。」

春子は昂奮して早速出かけて行つた。

「やつぱりこッちへ來てなさるんですッて。すぐ配備圖を調べてくれて、その隊は今深川の砂村の方へ來てゐるから、用があつたらそつちへ行つてお探しなさい、ッて云つてくれましたわ。」

「さうか、が、そいつア大變だな。」

思はず青木が眉をひそめた途端、丁度門の戸があいて、見知らない、在郷軍人らしいカーキイ色の服を着た一人の若い男が入つて來た。

「私は、三の橋の御宅からの御言傳で參つた者ですが……。」

男はさう云つて、こつちへ來るついでに春子の麻布の實家から見舞ひを頼まれたこと、何か用があつたら遠慮なく云つて貰ひたいことを告げだ。

「ぢやあ、その深川の方をお願ひしませうか。

春子は青木に云つた。

「さあ、が、そんな事までは――。」

ためらふ青木の云ひ終るのも待たず、男は丁度手があいてゐるし自轉車があるから、いくらでも用を足す、と重ねて云ひ出した。

「そんなら御願ひします。」

思ひがけなく降つてでも來たやうな男に、青木はすぐと今村の長男の名前と、所屬部隊とを紙に寫して、短い知らせと一緒に渡した、甲府への電報も、その深川からの歸りに中央郵便局でついでに出すからと、（電報は、また東京ぢうそこ以外では扱はなかつた）強つて云つてくれる男の好意に任せて、彼は別の紙へ、甲府の宛て名や電文を書き初めた。

「おや、ちがつてますよ、ヤマナシケンでせう。」

先刻から傍に見てゐた學生の武井がその時注意した。

「そうさ、なぜ?」

「だつて、それぢやあヤマシナケンぢやありませんか。」

「あゝそうか。」

青木はいそいで消して又書き出した。

「あら、又ちがつたわ。」

春子が今度は口を出した。

「何が?」

「コウフシ、ヤマダマチでせう。」

「ヤマダチよ、……ああ、ヤダママチと書いたんか。」

云ふなり、青木は又その部分を眞ッ黒に消して了つた。

「消さなくッたつて、ちよつと引ッ返しをお附けになりやアいいぢやありませんか、急いでらつしやる癖に。」

「どうしたんだ一體、——どうかしてるな、おれは今日は。」

やつと氣がついて、青木はいきなり脊骨をかためて自分の頭をなぐつた。

「四ッ谷の息子さんの方は、僕が行つてあげますよ。」

その様子を見て噴き出しながら、武井が口を出した。

「ビッテ、ビッテ（獨逸語、どうか）！」
思ひがけない好都合に喜ばされながら、靑木は二人の使者に紙を渡して送り出した。
「まあ、不思議なやうにいい工合に行きましてね。」
春子は溜め息をついた。
「全く。」
そのまま靑木は又病院へ取つてかへした。
病室へ行くと、もう屍體は片づけられて、空の寂しいベッドの横におもんや子供達が並んでぼんやりと腰をかけてゐた。
「旦那、今看護婦さんが來ましてね、入院料の書附けだつてツて、これをよこしましたが、すると、やつぱり無料でやつて頂いたわけぢやアないんで御座んせうか。」
彼の顏を見るなり、待つてゐたやうにおもんは一枚の書附けを出した。
「なんなら、私のとこは十圓ばかしお金がありますから、それで……。」
彼女は怪訝と心配のごつちやになつた顏つきで懷へ片手を入れた。
「いや、いや、そんな御心配は要りません、勿論みんな僕の方で拂ひますから、――この方が、さつぱりしてずツといい氣もちですよ。」
いそいで遮ると、彼はすぐと看護婦の溜りへ出かけて行つて、かねて春子から受け取つた蟇口のなかの金を差し出した。

「おやあ、今判と一緒に死亡證明書を貰つて來ますから、一寸お待ち下さいまし。」

看護婦は早速立つて行つたが、なかなか戻つて來なかつた、彼は思ひついて、外の看護婦にたづねて、丁度レントゲン室にゐた主任醫のところへ案內して貰つた。

「いろいろ親切にして頂いて、まことにありがとう御座んした。」

改めて彼が禮を述べると、相變らず醫者は丁寧に悔みを云つた。周圍の眞ッ赤な壁の眞ん中に、顔も手も白い上ッ張りも火のやうに染めながら、醫者は、最後はやつぱり脚氣からの心臟痲痺だつたこと、が、注射のせいか、少しも普通の苦しみがなかつたことなどを話した。

その室から出ると、丁度看護婦が受取りと證明書を持つてやつて來た、二通同じやうに書いた證明書の病名欄には、「防骨カリエス、幽門狹搾症、脚氣」と、三つたてつづけに書き込まれてゐた。

それをおもんにも見せてから、廊下の眞中の階段傳ひに、夏草の丈高く茂つた中に犬ころ（それは島崎の受け持つてゐる動物舍の住人の一部だつた）が二三疋夢中になつてふざけ廻つてゐる中庭を通つて、彼は構內の片端の屍室へ行つた。

まるで物置きのやうな、剝げた白いペンキ塗りの小さな平屋建てのドアを押しひらくと、セメントで叩いた冷たそうな床の上に、二つトタン張りの寢臺が並んで、その一つの上へ鼠色の着物をきた今村の身體が長く乘つかつてゐた、顔には白い布がふわりと被せられ、防水布で張つた靑つぽい枕もとには、よごれた土器の線香立てに、心づくしの線香が二本ばかり細々と點り、魔除けの刀代りに錆びた庖丁形の刄物が橫に一つころがつてゐた、その全體が陸揚げをされた大きな鮫の死體が何かのやうだつた。

線香立てのそばの包みから線香を一本取つて、靜かに頭をさげてから、彼はそつと額の蔽ひを取り去つて眺めた。今村の顏は先刻と少しも變つてゐなかつた、薄い額のぬけあがつた柔かそうな髮、げつそりと瘦せた頰、弱々しく閉じた眼。綿を鼻の穴へ詰められてゐる爲め、少し息苦しくあけたやうにぼんやりとおだやかに開いた口、蒼白んで萎びた皮膚、……ふと、彼はよく似た顏をどこかで見た氣がした、そうしてピクリとした。それは、今まで何枚かの繪で見知つたキリストの死顏だつた。見れば見るほど、キリストの最後の面ざしにそれは似かよつて來るやうに思はれた。

「何から何まで、ちやんと出來てるんで御座んすね。」

再び死人の面を蔽つて顏をあげた靑木へ、おもんはさも感心したやうな次の室を指さして見せた。

それは、セメントの床と並んで作られた六疊敷きばかりの座敷だつた。もうかなり疊は傷んでゐたが、その奧にちやんと觀音びらきの佛壇が据ゑつけられて、金銀の蓮花や供物の器で飾り立てられてゐた、邦子は、女の子らしく遠慮してその疊の端に腰をかけてゐたが、勇はもう上へ飛びあがつて、犬ころのやうにそこらをころげ廻つてゐた。

「お通夜なぞも出來るやうになつてるんですね。」

かねて島崎からきいてゐたことを、靑木は思ひ出した。

「ぢやあ……ここで今夜はお通夜しませう。」

「いや、今夜はひとまづ僕の家へ死體を引き取つて――。」

「いんゑ。そんな手數をして頂かなくても、どこだつてもう同じこつてすから、玆からすぐ明日にでもお寺へ持つて行きませう、子供達も、明日までには、來られるもんならきつと來ませうから、あんまり長く置いてもこんな陽氣で臭くなつて困りますしね。」

「そうですか、が……。」

「なんの、もう此の際ですから――ただ、死ぬ前お父さんがいつも云つてたことですが……。」

おもんは言葉をついで、此の春娘がなくなつた時、どうせ此の後いるものだからと思ひ切つて、かなり安く日暮里の方へ一つ墓地を買つたこと、その時は火葬にして了つたが、もし自分が死んだら、是非燒かずにそのまんま娘の傍へ葬つてくれろと、かねがね今村が口癖にしてゐたこと、を話した。

「ぢやアその遺言どほりにしませう。」

青木はうなづいて、さぞ看病でおもんも疲れたらう、が、これだけ盡してやれば、病人も彼女も心殘りはあるまい。死んで行つた者はもう仕方ないから、あんまり氣を落してあと病氣になつたりしないやうに。幸ひ子供達もあゝして丈夫でゐるし、――そう云つて彼女を慰めた。

「いゝえ、私アもうがつかりはしません、どうせ壽命ですし、それにこんなに何から何までして頂いてらくらくねむつて行つたんですもの、此のうへ不服なんぞ云つたら罰があたります。」

心から滿足してゐる彼女の言葉に、青木は再び自分の心を刺される氣もちがした。

おもんの言葉どほり、明日のうち寺の方へ持つて行くことに大體定めて、彼は病院を出て、すぐと前手の俥屋へ寄つて、棺桶や運搬人夫を明日までは用意しておいてくれるやうに頼んだ。

「ようがす、仰つてさへ下さりやあ、いつでもすぐ運びます。」

病院の死亡者の仕事を受け負つてゐる、デップリとした赤ら顔の、ボタンのはづれたシャツのあいだから濃い胸毛を覗かせた、如何にも飲んだくれらしい俥宿の亭主は、一言のもとに承知した。

「すぐ家がわかりましたよ、――一緒に今來てくれました。」

彼が家へ歸ると、すぐあとからドヤドヤ足音がして、四ッ谷へ行つた武井が戻つて來た。

「仲々大きな家でね、今度の火事で、やつぱり京橋の方の店や倉庫はみんな燒けちやつたんだつてエ、大勢一杯家にゐましたよ、丁度主人も支配人もゐて、是非あがつてくれつて、大へん丁寧にもてなしてくれました、坊や、お土産！。」

靑木と一緒に出た雪雄へ、武井は貰つて來た菓子の紙包みをいきなり突き出した。

「御免下さい。」

小柄な、はしつこそうな、如何にも小店員らしい下駄穿きの少年と、加藤酒店と白く前へ拔いた法被を着込んだ、靴足袋を穿いたがつしりした身體つきの二十五六の若者とが、あとから顏を出した。

「どうかあがつて下さい。」

一旦上り框へ腰をおろした彼等を、强ゐて靑木は座敷へあげた。

「今度は、みんなで飛んだ御世話さまになりまして……。」

少年の平吉はキチンと坐つて、繰り返して禮を述べた、その傍で、兄貴分の若者は、主人からくれぐれもよろしく申しつかつたことを云つた。

「前に一遍、御通知のはがきを郵便局まで出したかつたんですが――。」

靑木は、初めから今村の臨終の模樣までを搔いつまんで話した。そうして、自分もやつと間に合つた位で、つい生きてゐるうち平吉達に一目會はせられなかつた詫びを云つた。

「今一緒に御案内します。が、粗末な飯ですが、その前に一杯あがつて下さい。」

みんなまだ飯前だときいて、青木はすぐ彼等に夕飯をすすめ、自分も食べた。

「主人から何度も申されましたが、葬式一切の費用は、是非共私の方へ受け持たせて頂くやう、又今村さんの御一家は今後私共の方へお引き取りしたう御座いますから、どうか御承知下さいますやうに、つてでした。」

「いや、今までの引きつづきですし、先きへ行つたら兎に角、佛のいろんな供養もある事ですから、まア當分はこのままにして置いて下さるやうに御返事して下さい。」

禿頭の言葉を青木は遮つた。

食事が濟むと、すぐ彼は二人を病院の屍室へ連れて行つた。

「平吉かい。」

青木のあとへ從つた息子の顔を見て、おもんは呼びかけた。

「どうも暫くで……。」

平吉は鳥打ち帽子を取つてヒョコリと頭をさげた、それから父親の死骸の方へ寄つて行つて、線香をともしたり神妙に兩手を合はせたりした、やがて疊敷きの端へ戻つて來て腰をかけると、彼は、今まで神田の燒け跡へ何度もたづねて行つて、立て札に依つてみんな護國寺へ逃げたことを知り、そつちへも三四度も行つて探して見たがついにわからなかつたことを云つた。

「此の前の太田さんて云ひ、まアどうしたんだらうね、たしかに貼り紙をして來たんだけれどねえ。」

母子が何もかもごつちやにしやべり出した時、戸があいてヌッと島崎が顔を出した。

「用？」

青木はきいた。

「いゝえ、寂しいから、僕もお通夜を少ししやうかと思つて……。」

賑かな中の樣子にどきまぎしたやうな彼は平手で頬を撫ぜた。

「それはどうも……コリやあ島崎君と云つて僕の親類のやうに懇易にしてゐる人です。」

異樣な顔つきにびつくりしてゐる平吉達に、彼を青木は紹介した。

「ああそうですか。今村の息子の平吉ツて云ふ者ですが、此の後よろしく。」

如何にも厳しくしつけられたやうに、平吉は御店風なキチンとした御辭儀をした。

人々のさわめきで、線香の白い二すじばかりの煙が、まるで絡み合ひながら天上する小さな龍のやうに、たツた一つだけ點つた薄明るい電氣の光の中に立ちあがつてゐた。

その晩青木達が寢つくと間もなく、つゞけて「御免下さい」と誰か呼びながら門を叩き初めた。

「四ツ谷の加藤で御座いますが……。」

門に近い室の春子がきき返すと、そう云ふ返事が青木の枕もとまでひびいて來た。彼は寢衣のまま春子につゞいた。

「夜分おそく出ましてまことに相濟みません。私は加藤の支配人の小島と申す者で御座いますが、——。」

一枚あけた雨戸の隙から、一人の大柄な、顔色の赤い、眼鏡をかけた羽織姿の男が入つて來て、上り框へ兩手を突きながら云ひ出した。彼のうしろには、まだ幾人かの人間の姿が動いてゐた。

春子等のすすめる座蒲團も取らず、小島は少し醉つてでもゐるやうなもつれた言葉つきで、然し今まで平吉の親近が思ひもよらない厄介を受けた禮を、順序を立てて厚く述べ立てた。

「かねがね先生の御高名はうけたまはつておりましたが、この度の御取り扱ひにつきましては、いや、何とも御人格のほどまことに恐れ入りました。失禮ながら、ほとほと敬服に堪えません、――かねて御謦咳の一端にでも觸れたいと思つておりましたところ、かうした御緣によつて圖らずも今晩お目にかかれましたことは、いや、まことにわたくし、身に取つてしんからうれしく存じます。どうせ此の後、折りにふれてよろしく御指導御教訓下さいますやう、是非ともお願ひ申したいと存じます、つきましては……。」

主人からの言葉もあり、この後今村の遺族を自分の方へ引き取つて世話をしたいから、と云ふことを、涙でもこぼしそうな眞ッ赤な顔つきをしながら、支配人は申し出した。

「いや、まアそのことはもう暫くお待ち下さい。」

どうしても一杯飮んで來てゐるらしい、が、萬更ふざけてゐるのでもない相手の樣子にすつかり面喰つて、青木は答へた。

「いや、御精神のほどはただ景仰に堪えません。實は、只今病院の方へ一寸寄つてお線香も供へてまゐりましたが――」

云ひながら、彼は何か合圖でもするやうに背後へ赤い顔を廻した。と、二人ばかりの屈強な若者の手で、いきなり大きな袋が持ち出された。

「これは、先日店の者が千葉の方へ行つて手に入れて來た白米で御座います。かやうな物を差しあげますは、普通なれば甚だ失禮至極ではありますが、此の際のこと、もし幸に先生に於いて御受納下さいますならば……。」

青い豆絞りの、重そうな奇麗な長い袋を前に置いて、支配人は又もぢやもぢやした髪の頭をさげた。

「それはどうも、――切角の御志ですから、ぢやア遠慮なく頂きます。」

びつくりしながら青木は禮を云つた。

「なほ葬儀萬端のことは、何卒私共にお任せ下さいますやう……。」

くどくどと附け加へた後、小島はやうやく出て行つた。

「まア、面白いかたね。」

春子はあとで吹き出した。

「まゐつたなあ。『御謦咳の一端に觸れたい』か。」

無邪氣に青木も笑ひ出した。

「でも、隨分澤山お米を持つて來て下さつてね、二斗位ありますわ、これこそほんとに大助りですわ、わたしもうどうしやうかと、蔭で心配してたのに、――この袋も、きつとわざわざ縫はせて持つてらしつたんですわよ。」

ズツシリと重い袋にさはつて、春子はさもよろこばしそうに云つた。

9

翌朝、平吉と一緒におもんは久しぶりに朝飯を食べに春木の家へ戻つた。

昨夜の通夜には、もう十二時前からみんな眠つて了つたが、その前加藤の連中の爲めに一騷ぎした。支配人達は自働車で乘りつけたが、何しろ晩くはあり、病院の方では、どうしてか警視廳から急に自働車で取り檢べに來たのだと聞ち

がんて、みんな大騷ぎした、と彼女は話した。昨夜支配人が春木の家を叩いた時、平吉も一緒について來てゐたのだつたとも云つた。

平吉達の話では、支配人はやつぱり丁稚から叩きあげた人間だが、よく物のわかつた、思ひやりの深い、店の者達の信望を一身に集めてゐる人物だ、と云ふことだつた。

もう棺が出來て屆けられてゐる、と聞いて、朝飯を濟ますと又春木達は屍室へ行つた。そうして眞新しい四角な棺の中へ、みんなで一緒に寢臺の上の死體を納めた、やや小さくはないかと氣づかはれた箱は、少し死人の腰を押して倚かかせるやうにすると、いい按配にすつかり頭まで入つた。頭陀袋をかけたり珠數を持たせたり。穴開き錢や草鞋を入れたり、すべて型の如く濟ませて、もし來るかも知れない長男の順吉の爲めにただ蓋だけを取り除けておいた。

そこへ丁度やつて來た加藤商店の二人の番頭と手順をして、一人は寺へ知らせかたがた行つて貰ひ、青木は、おもん達と家へ戻つて來た、途中又俥屋へ寄つて、棺の詰め袋を請求した。

「何しろ、から云ふ時期だもんですからな、……いや、然し出來るだけ探させます、が、もしなかつたら、どうか一つ新聞紙で御勘辨ねがひたいもんで、――その代りこつちから詰めにあがりますから。」

肥つた亭主は、狡猾そうな片頬笑ひをしながら辯解した。

「この前娘さんの時には、どんな工合に寺へ禮をなさつたんです、遠慮なく仰つて見て下さい。」

歸ると、青木はおもんにきいた。そうして、その時の覺えを云ふ彼女の言葉に從つて、御經料、卒塔婆料、百ケ日供養料……なぞと、十圓あまりの金を娘の時どほり紙に包み分けた。

午後の二時まで待つてゐたが、とうとう長男の兵隊はやつて來なかつた、――酒店の方からも今朝早く深川の方へ知

らせに行つたから、もし來られるものならもう來なければならない筈だ。が、何しろ戒嚴令の時は戰時と同じ取り扱ひだから、親が死んでも暇は許されないかも知れない。(前のはがきの知らせにさへ返事のない甲府の方からは、勿論誰も出て來る氣づかひはなかつた)と云ふ人々の言葉に、靑木はとうとう寺へ行くことに定めた。

黑い幌のかかつたゴム輪のさつぱりとした寢臺車へ、まづ棺を積んで、それへ案内かたがた平吉を附き添はせて先きに寺へやり、あとからおもんと靑木と加藤の番頭とが、一緒に電車を利用して行くことになつた。

それは、鬱陶しい雨模樣の日だつた。おもんと番頭は着のみ着のまま、靑木はかたばかりのセルの袴を穿き、線香を二束ばかり持つて、こまかく霧のやうに降る雨のなかをやつと、春日町まで通つてゐる無賃の電車に乘り、それから先きは、三橋から動坂までの電車に又乘り移つて、やがて途中で降りると、兩側に崩れかかつた家の並んだ狹い路次を幾つとなく曲つて行つた。

「この夏の初め、神田の家から電車に乘つて、一遍邦子と勇とたつた二人つきりで御墓詣りに來たことがありましたつけが……。」

はかない昔の追憶のやうに、おもんは傘を傾けて、泥をよけよけそんな話をあとの方の春木に聞かせて。

やがて路次を突きぬけて、彼等は古い小ぢんまりした寺の前へ出た、きつと、詣りに來る大勢の人達に賣る爲めだらう、門前で傘を立てかけてチユウチユウ油くさい揚物の露店をひらいてゐる商人の前を突つ切つて、本堂前の廣場へ入つて行つた。と、もうそこにはちやんと寢臺車と平吉と、昨日彼と一緒に靑木の家を訪ねた番頭とが待つてゐた。

「もう穴を掘らせておきました。」

そう告げる番頭に禮を出つて、靑木はおもんに寺へ金を出させた。

「こんな時ですから、式つて別にお寺の中ではしないで、すぐお墓の前へ行つて、そこで和尚さんが御經をあげて下さるんですつて。」

薄暗い厨裏の方から戻つて來る、と彼女は報告をした。

「ぢやアすぐ棺を埋めちまひませう。」

番頭は、かねて頼んであつた二人の墓掘りに手を貸して、本堂の横手から裏山の墓地へ棺を運んで行つた。かなり高く坂道や石段を曲りくねつて、一番上の、そこか 向ふは高塀の邸に垣根で隔てられてゐる閑靜な場所にのぼると、まだ掘りあげた土も新しく、小さな石碑の群りのあいだに一つのかなり深い茶色の穴があいてゐた。

荒繩を引つ張りながら、棺をその中へ釣りおろすと、丁度まはりの土の壁と擦れ々々にうまく四角の木箱は落ちついた、かねて堀り出してあつたらしい、娘の白い小さな骨壺がその棺の上へ、丁度父親の頸ツ玉へおぶさつたやうに置かれた。

「いい工合に行きましたね。」

口々に言ひ合ひながら、人々は土を手ですくッて投げ込んだ。そのあとから、人足達はドシ／＼鍬で棺も壺も穴も埋めつくして、その上へ小さな山を築いた。すぐとその頂邊へ塔婆が立てられ、花や線香が供へられた。

「とうとうお父さんも埋つちまツた。――南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

おもんはなつかしそうに、念佛を唱へながら卒塔婆へ手を合はせた。

「こりやア高くて廣くていい所ですね、水がちつともないから棺も水に浸る心配はありませんし。」

若い番頭は傍の青木へ話しかけた。

「それに靜かで木が多くて、これならゆツくり眠られそうですね。」

如何にも安心したやうに、――思はず自分の埋められる日のことを想像しながら――靑木も周圍の木立を見廻した。

火のやうな眞赤な袈裟をつけた、まだ若い、あまり心の落ちつきも分別もなさそうな僧が、そこにただ一人、裾をかかげて慣れた坂道をあがつて來た、土饅頭の前へ立つと、彼は早速御經を唱へ出した、その間を見計らつて、おもんを最初にみんなが順々に土へ藥罐の水をそそいで、最後の合掌をした。

濕つた土の匂ひと、蒼ひ煙をあげる靜かな線香の匂ひに混つて、濡れた木や草の香ひが、如何にも爽かに人々の周圍を取り圍んだ、

10

途中で酒店の二人に別れて、靑木はおもんと平吉の三人連れで家へ歸つた。

邦子や男達と待つてゐた春子は、子供達にも大人にも、――丁度武井や島崎もそこに來合はせてゐた。――パンを三つづつ配つた、それは、小さな笠を二つ重ね合はせたやうな菓子で、恰好が似てゐる爲め、弔ひの饅頭代りに今朝彼女がわざわざ菓子屋へ註文して作つたものだつた。

「ああ、お位牌の名がなくちやアいけなかつたね。」

何となく物足りない室の様子に氣がついて、もうたそがれて來た雨のなかを、おもんのとめるのもきかず靑木は再び出かけていつた、かなり遠くの葬具店へ行つて、小さな白木の位牌臺を買つてから、彼は又花屋へ廻つて一束佛前の花を手に入れだ。

「地震があつても、花だけはこの通り何の變りもありません。」

意味深そうに笑ひながら、花屋の亭主は草百日や石竹の美事に咲いた莖を選んだ。

歸ると、いつも春子の使ふ、横板へ桐の花の彫り拔かれた古い文机を、おもん達に宛てられた六疊の居間の片隅へ彼は持つて來て、その上へ、黒い漆塗りの置物臺を置き、おもん達が寺から貰つて來た戒名の紙を輕く貼りつけた位牌名を、眞中へ立てた、臺の前には、線香立ての赤い土器、その兩側へは水茶碗と飯茶碗、なほ横へ寄つて、サイダアの空き瓶へさした供への花、……線香の煙がゆるやかに立ち始めると、まに合はせながら、その全體が如何にも亡つた人を弔ふ感じになつて來た。

「おこわッてツても、今餅米もありませんしね、せめて氣もちだけ、青豆を入れ御飯をたきましたわ。」

その時春子が、ほかほかと白い温い湯氣の立つ豆飯を飯茶碗へ盛つて來て、佛へ供へた。

「まアそんな御面倒なことを……。」

おもんの聲はさもうれしそうにひびいた、

「やア、おいしいなあ、うまいなあ。」

佛前へチャブ臺を据ゑて、みんなで一緒に食べ始めると、勇は不意に大聲でわめき立てた。

「行儀の悪いイサちやん！」

邦子が姉らしく傍からたしなめた。

「お國の方ではどうですの、——私達の國では、御葬式のあと黒豆の入つたおこわへ饅頭を添へて、來て下さつたみなさん達があげますの。」

春子はおもんにきいた。

「頂きます。」

固ツ苦しく坐つて、平吉は丁寧に頭をさげた。

11

その晩母親達と泊つて、翌朝十時近くに平吉が店の方へ歸ると、ほとんど入れちがひに、最初平吉と一緒に來た番頭に連れられて突然長男の順吉が訪ねて來た。

「どうして今ん頃？」

びつくりしたやうに母親は迎へた。

「此のたびは、父達が思ひもよらない御世話様になりまして、此の御恩は一生決して忘れないつもりであります。」

座敷へ出て來た青木へ向つて、順吉は如何にも改まつた軍隊口調で禮を云つた。それは、額やコケた頬のあたりの紅く日に焦けた、父親に似て五分刈りのほそい柔かそうな髮の、眼の小さくやさしい、如何にも從順そうな兵隊だつた身體にくらべてやや大きすぎるカアキイ色の軍服の膝をキチンと折り曲げて、青木がすすめてもどうしても崩さなかつた。

禮のあとで、彼は母親の方へ振りむいた。そうして、前の彼女のはがきはつい受け取らず、今度の知らせも、加藤の方からの使ひでやつと屆いた。丁度父親の最後の日の一日前、彼の隊はもう千葉へ歸つて了つてゐたから。――戒嚴令の際でもあり、一體ならば到底出外は許されない筈のところ、平生自分可を愛がつてくれる上官の特別の取り計らひで

隊の用務と云ふ名儀で暇を貰つてやつて來た。ただし今日一日、それも午後六時までに歸隊しなければいけない、……そんなことを、父親や妹によく似た、妙に低く啞れた聲で話した。

「これが、その許可證であります。」

順吉はわざわざ衣囊から、大事そうな證明書を取り出して靑木達の前へひろげて見せた。

「これはおとなしい子ですから、皆さんに好かれましてねえ。」

母親はうれしそうに自慢した。

順吉はつづけて、今朝早く千葉を出て、まづ四ッ谷の加藤に寄り、そこで母親達がみんな靑木の家にゐることを聞かされて「番頭さん」に案内して貰つて廻つて來た、と丁寧な口調で云つた

「もう少しお待ちすれば よかつたんですが……。」

靑木は埋葬の云ひわけをした。

「ではこれから、お墓へお詣りして來ます、歸りに、もう一遍お寄りいたします。」

切りつめた嚴重な時間にせかれるように、間もなく順吉は立つて、佩劍をガチヤガチヤ鳴らせながら、番頭と一緒に出かけて行つた。

千葉の方へ歸るには大廻りになるにも係はらず、彼は二三時間後また靑木の家へ寄つて、今後の世話をたのんで、あがりもせずに燕のやうに去つて行つた。

それから二十日足らず、なほおもん達は青木の家に厄介になつてゐた。

彼女の心は、そのあいだハッキリと定まらなかつた……。

すつかり青木の家になじんで了つた平吉は、その後もたびたびやつて來ては加藤からの傳言をした、前からの言葉どほり、自分の方の店があるのに、此のうへ、今まで見ず知らずの青木の家へ母親達を預つて貰ふことは出來かねるから、すぐみんなでこつちに引つ越して來るやうに、と云ふ主人や支配人の勸めだつた。

「お前はどう思ふ？」

おもんは息子にきいた。

「わしは別にどうッて事はないが、あつちの方へかへッてつても、今店や倉庫が燒けちまつたからそつちの方の人達がみんな來てゐて、隨分混雜してるよ。」

兄とちがつて勝氣の平吉は、あんまり母親達に來て貰ひたくない口吻だッた、……特別な時ではあり、まだ子僧ッ子ではあり、彼女達と一緒に主人の家に厄介になることは、彼にはひどく肩身が狹い氣がした、まるきり今まで知らなかつた間柄の、義理も因緣もない青木にかける世話なら、反つて氣安く自由だッた、いづれは年をあけて店を分けて貰ふ身の、この後いつまでも主人達に恩に着せられるのも重荷だつた。

「そんな中へ子供連れであがるつてつてもね。」

大勢の中にくらす恐れと一緒に、如何に息子の主人の家とは云へ、今まで一遍閾を跨いだこともない他人の家へ、切角落ちついた青木の家から又引き移つてゆく臆劫さが、おもんの心をもためらはせた。が、重ね〻の主家からの勸めであつて見れば、無下にことはるわけにも行かなかつた。

「ぢやあ初七日が濟んだら、四ツ谷の方へ御厄介に……。」

加藤の方へも青木達へも、ひとまづ彼女は云つてゐた。

じきにその日はやつて來た。平吉は、その朝早く又青木の家へたづねて來て、墓詣りに行つたり、母親や妹達としやべつたりして一日をくらした。丁度彼岸をかねて、春子は黄粉や小豆のお萩をつくつて、――その頃になつて、やつとそろそろいろんな食物が不自由なくなつてゐた。――毎朝どほり最初に位牌の前へ供へた。

「お父さんは、これが何よりの好物で、時々こしらへてくれこしらへてくれつちや云ひましたつけが。」

母親も平吉もどつさり食べたが、夕方歸つて行く時には、やつぱり平吉一人きりだつた。

翌日の午後から、おもんは一人で加藤の家へ禮に出かけて行つた。晩がたちかく、彼女は何枚もの着物や子供への菓子なぞを貰つて戻つて來た。

「どうかよろしくつて仰つてでした。――そうしてやつぱり明日からでもこつちへ來るやうにつて、何度も仰つて下さいました」

が、彼女はやつぱりそれなり移らうとはしなかつた。

青木夫婦は、初めつから。先方が主家先きであるだけ。餘計行かない方がいいと主張した。殊に青木は、今村が死んで以來なほ更、彼女達を生半可に見棄てるわけには行かない氣がした。中途で世話を人に奪はれるいやさではなく、切角みんながなずんで來たものをと思ふと、今更別れるのがひどく寂しかつた。――よかつたらいつ迄でも家のつもりで氣業に一緒にゐるやうにと、夫婦は一緒になつて引きとめた。

「ありがとう、……わたしも、出來ることならずつと此のまんまゐたいんですけれど――。」

然し彼女として見れば、二人の子供を擁へていつ迄ものんべんだらりと、如何に青木達の言葉とは云へ、厄介になつてはゐられなかつた。青木の家も、決してそう裕かではなささうに見えた。もう一年あまり立てば、長男も軍隊から戻つて來、その時一緒に行く先き先きのことも相談しやう。が、それまでのあいだを、何とかして少しでも自分で働いて子供達を養はなければ、——そう考へる一方に、時々歸國のことも彼女の胸へ浮んだ。が、それはどうしても氣が進まなかつた。

「何しろ田舍は、こつちに較べちや萬事窮屈で、面倒で御座んすからね、やれ滑つたの、ころんだのつて、箸のあげおろしにも周圍がうるさくて、とても又歸つて行く氣もちにやアなれません、それにもう、十年も一遍も歸つたことがありませんし、今村の兄さんて云ふ人はいい人ですが、嫂がそりやあ薄情な頼りにならない人ですから……。」

彼女は青木達にさへも愚痴をこぼしてゐた。

「何か、一つこつちで仕事はないもんでせうか。」

或る晩、彼女は思ひ切つて青木達に相談した。

「さア、何しろ今の東京ぢやあ、……一人前の立派な男でも、みんな職がないつて云ふんだから。」

「わたし、大道あきなひでもやつて見ませうかしら、あんな食べ物屋位だつたらわけなく出來て、おまけにうんと今お金が儲かりさうですから。」

おもんは、此の前寺へ埋葬に行つた時、途中の本郷通りの兩側なぞにビッシリ露店をひらいて、壽司、すゐとん、ゆであづき、野菜の揚げ物、菓子、酒なぞ、ありとあらゆる食べ物の匂ひを一杯にみなぎらせ、その前には、いろんな種類の客が眞つ黒く蠅のやうにたかつてゐた不思議な光景を思ひ出して云つた。

「あれならすぐ出來るでせうけれど、でもやつぱり子供連れではね。」

春子が口を出した。

「ふんとに、……此の子つたら、こんなにちつとも離れませんから――。」

初めて氣がついたやうに、自分の膝へかじりついてゐる勇を彼女は見やつた。

いつまでも世話になつてゐる彼女の心苦しさの一つは、その子供だつた。邦子の方は何の心配もなかつたが、勇は相變らず我がままを云つたり――あれだけの火の中を經て來ながら、又貧しい中に育ちながら、どうしてその甘つたれすぎる癖がなほらないのか、それは青木にも不思議な氣がした。――雪雄と喧嘩したりして母親を手古ずらせた、玩具を奪ひ取つて、その揚句、雪雄の頭をいきなり力まかせに枕へ叩きつけたり、かと思ふと、さも憎々しそうに、「すみちやんは可愛いけれど、雪ちやんなんかゐない方がいいやい、ねえお母ちやん！」などと云ひながら唾を吐きかけたりした。

「ふんとに、お前みたいなわからずやつてありやアしない。」

叱るたんびに――青木達が何とも云はないだけ、餘計彼女は心苦しい氣もちがした。

おもんの氣もちを察して、青木もあちこち仕事の手づるを胸の中で探した。が、方面ちがひの生活をしてゐる彼に取つては、てんで何の當も見つからなかつた

「一遍國へ歸つたほうがいい、あつちにやあ伯父さんや伯母さん達が大勢ゐるし、それに田舍だから、きつといくらでも仕事はある。」

時々やつて來る平吉は、主人の方への手前もあり、一方でしきりに歸國をすすめ出した。

「全く、あかの他人の青木達でさへこんなにしてくれるものを、いくら薄情な親類だつて、こんな場合、何とかしてくれない筈はない、あつちへ行きさへすりやア、それこそ駄菓子屋の店でも何でも出來るだらう。」

丁度或る日、その邊の世話人と一緒に巡査が來て、いろいろ彼女達の身の上をきいたうへ、もし子供をここで就學させやうと思ふなら、すぐ近所の小學校へ云つて出るやうに、と云はれた時、彼女の心は急に定つた、もう一年で尋常六年の終へる邦子の學校の爲めにも、彼女はひとまづ國へ落ちつくより外に道はないと考へた。

その決心を彼女が打ちあけた時、青木達は一遍反對した。が、もうすつかり思ひ定めて了つた彼女の樣子を見て、強ゐてとめやうとする氣もちを棄てた、いづれは弱い人間の力の、最後は運命の意志に靜かに從ふよりほか途はない、見えない自然の力は、又どんな新しい幸福を彼女達の先きへ開いてくれるかも知れない、と彼等は考へた。

「だが、又こつちへ出て來るやうなことがあつたら、是非寄つて下さいな。」

靑木達は云つた。

「その時にやあ是非ともお願ひいたします、こちらより外に、もうどこへ頼つて來るところもありませんですから、……せめて一年のうへもゐたら、又こつちへ出て來たう御座んす、どうか行李や蒲團は、當分御邪魔でもお預りなすつて――。」

歸鄕の前に、彼女はもう一遍加藤の家へ暇乞ひに出かけた、靑木達からの菓子折りを持つて行つた彼女は、戻つて來ると、何十人からの店の者からの餞別として、支配人がくれたと云ふ五十圓の紙包みを出して見せた、Ｋ吉は區役所へ行つて、汽車無賃の爲めの罹災民證明書を貰つたり、まだ途中半里足らず徒步聯絡の鐵道の時間表を調べたりした、出立の前夜は靑木の家へ泊つた。

みんな五時前から起きて支度をして、翌朝六時頃、新宿まで平吉に見送られておもん達は青木の家を立つた。

「いいえ、飛んでもない、それどころぢやあ御座んせん、どうかもうこれは御置きなすつて。」

立ちがけに青木の渡した餞別の包みを、おもんはムキになつて押し返した、そうして自分も背負ひ、子供達にもみんな一つづつ、片肩から脇へかけて斜めに風呂敷包みを背負はせて、裾端折り甲斐々々しく、丁度雨模様の灰色の空の下を洋傘を杖に踏み出した。

「ぢやアお大事に。」

すぐ下の坂のところまで、あとから青木は見送つて行つた。

「さやうなら。」

「おぢちやん、チヤヨなら！」

口々に云ひ合ひながら、親子四人の姿は彼の前から離れた。

まだ人通りは稀れの、牛乳配達の車やら、ゴトゴト重さうな車輪の音を立てて何臺も馬に曳かれて來る濡れとぼつた荷車やらの蔭に、かくれたり又見えたりしながら、泥田のやうに捏ね返した泥濘の道を彼等は進んで行つた、めいめい大きさのちがつたその背後の白い風呂敷包みが、まるで蝸牛の殼のやうだつた。

足もとに氣を取られて了つたのか、誰一人うしろを振り返る者もなかつた、遠ざかるに従つて、彼等の黒つぽい着物は周圍の灰色の空氣の中へ融け込み、ただ眞つ白い風呂敷包みだけが、道をあつち側へ寄り、こつち側へ寄り、が、いつも一緒にピタリと寄り添つて、まるで生き物のやうに動いて行くのだつた。



千代公の藝術

正宗白鳥

尾形千代松は本職は植木屋であつた。長兄の金造は大工で、次兄の龍吉は魚屋で、どちらも家計が豊かではなかつたが、今日に窮しないくらゐな生活(くらし)は立てゝゐた。兄弟三人とも血のめぐりのいゝ方ではなかつたが、そのうちでも、千代松が一番ぼんやりの方で、口先きも手先きも不器用であつた。

それで、一人前の植木屋として十數年を經てゐるのに、極つたお出入先(でいりさき)を一軒ももつてゐなかつた。子供の時分から世話になつた親方の庇護によつて仕事に有りついてゐたのであつたが、時々は日雇賃だけを稼ぐのを詰らなく思つて、自分で相當の地所を持つて好きな樹木を育てゝ別莊へ賣付けたり、あるひは自分が工夫して小さな庭でもつくつたりしたいと夢見ることもあつた。庭の手入れをしたり垣根の壞れを繕ろつたりするにしても、いつも他人の下働らきをするのは面白くなかつた。親方に使はれると、賃錢の頭をはねられるだけでも、割に合はないと思はれた。

長兄の家に同居してゐた彼れも、七八年前におくらと結婚してからは、一時小さな

家を借りて別世帶を構へたが、一家のあるじとなることの樂みを感じるよりも、先づ夫婦の生活を人並みに續けて行くことの困難を覺えたので、ある知人の周旋で、數年前ある新築の別莊の留守番に住込んだ。家賃が入らないで新しい小奇麗な部屋に住はれる上に、この別莊の庭の手入れは一切自分一人で氣儘にやることが出來るので、以前よりもいくらかゆとりのある生活を立てられるやうになつた。おくらも、拭掃除の報酬として月給が貰える上に、主人の家族が遊びに來た時には、何かの餘得に有りつけるので、以前よりも身の廻りを小奇麗にして、たまにはうまい物を口へ入れられるやうにもなつた。

子供は出來なかつたが、おくらも千代松と同じやうに神經が鋭敏に働く方ではなかつたので、從つて何年にも夫婦喧嘩をしたことはなくつて、平和に日を過してゐた。「お前さんなぞは子供がないから氣樂だね。お金が殘つて爲樣がないだらう」と、兄嫁などに羨まれることがあつたが、貯蓄は殆んど出來なかつた。兄嫁などのやうに遣繰りの苦勞はしなかつたが、借金をしないだけで、いつも手一杯で、今月はこれだけ貯金帳の書入れが殖えたといふやうな樂しみは得られなかつた。

馴れてしまふと、別莊の留守番もさほどいゝものではなくなつて、小さくても自分の家に住みたくなつた。前觸れをしないで出しぬけに主人が來ることがあるので、掃除を怠る譯に行かなかつた。可成りに室數の多い別莊の中を、毎日奇麗にするのは骨の折れることなので、ガラスを一點の曇りもないやうに磨くのはことに煩はしかつた。それに主人は神經質で潔癖なのだから、隅から隅まで丹念に磨いて置かなければ御機嫌が惡かつた。風の荒い日や雨の强い日には、破損が氣遣はれて、夜中にでも起きて家を見廻らなければならなかつた

「金のかゝつた家を預つてるんだから、傍で思ふやうに氣樂ぢやねえ」と、千代松もをり〳〵零すことがあつた。

「かうしてゐたつてもお金が殘るのぢやないし、自分の家を持つてもどうかにか押いて行くのなら、自分の家にゐた方がよかあるまいか」と、おくらも打算的に考へて云ふこともあつた。

「おらの仕事がふんだんにありや、その方がいゝけれどな」

千代松は自分の職業については絶えず危んでゐた。本職だけでは暇で爲樣がないので、仕事師の手傳ひでも土工でも何でも、屆つてくれるところさへあると撰好みをしないで働いてゐたのであつたが、それでも一年中を勘定して見ると、働いた日よりも休んだ日の方が多かつた。それで、「此處を離れない方がいゝ。第一この別莊を離れると、自分が何年も丹誠して手を入れた庭が、外の植木屋にいぢくられるやうになるかも知れないのが業腹だ」と思つてゐた。

歐洲戰爭のために頻り成金が出來るとゝもに、この土地にも別莊が殖えて、それにつれて植木屋も殖えたのであつたが、世が不景氣になると、他の職人よりも一層激しい打擊を受けて、千代松の如きは、去年の暮れから今年の春へかけては、出仕事が全くなかつた。主人に頼んで自分の庭の秋の手入れや春の手入れは早手廻しにやらして貰つたのだが、その外には鐚一文何處からも入つて來なかつた。毎日いゝ天氣が續くのに、毎日煙草ばかり吸つて家の中でボンヤリしてゐた。頑健の身體を持扱ひかねるやうになつた。

「去年よりや今年の方がいけねえ。この先どうなることだか」と、歎息すると、

「奧ぢやどう思つてるんだらうね。留守居をしてゐるんだから食べるだけのことはしてくれなけりやいけないだらうに」

とおくらが激昂して云つた。

「ほんとにさうだ。今度旦那が來たら、おら、一つ云つて見べいか、二人の喰扶持だけはどうかしてくれるやうに」と

千代松は女房の言葉に動かされて云つて、「おら、本宅の普請の手傳ひに使つて貰つてもいゝんだがな。東京の普請の樣

子を見るのも爲めになるだから」

「お前は東京へ行くのは面白いだらうが、あとでわし一人で留守居は出來やしないよ」

「だつてお前は、此間婚禮の手傳ひに行つて、いゝ氣になつて遊んで來たぢやないか」

「さういふ折でもなければ、わしは一生東京を見ずにしまふかも知れないんだよ」おくらは、あの時目の眩みさうな華美な光景に觸れたことを、夢のやうに思出しながら、「お金持にはとてもかなはない」と、ふと溜息を吐いた。

「ほんとに金持にやかなはねえだ」と千代松は煙管の脂を取りながら、女房の言葉に調子を合せて、「旦那は先日隣りの高木さんの繪を買つて來たつておらにも、自慢で見せて、千代公どう思ふかつて云ふから、おら、結構な繪で御座いますと云つといたが、不動様が劍を持つて力みかへつてる繪だつたよ。上手に書いてるにやちげえねえが、あゝいふ繪が一枚だけで五百兩も千兩もするんだといふから、不思議でならねえ。買ふ人も買ふ人だが、繪師といふ稼業は滅法界もねえお金が取れるものだと、おら感心したよ。そりや、高木さんの繪はうめえことはうめえが千兩といふ價値はどこにあるだか」と、一服つけてから考込んだ。

「お前に繪か分るのかよ」と、おくらはニヤ／＼笑つた。

「おらにだつて分らないでか。松の枝振りだつて繪のやうに奇麗にするのだ。皆目繪心がなかつたら植木屋は勤まらねえだよ。此處の庭でもよく見ろ。ちやんと繪になつてるだ。あれで燈籠が時代をくつて苔をつけて、裝り井戸に蔦でも絡んで來りや、もつと風雅な繪になるんだ」

千代松はさう云つて、ふと立上つて、鬱氣を散らしに庭へ出た。そして、搜さなければ見えないやうな落松葉を二本三本拾つたりして用事のない時間を過した。

去年の冬よりも今年の冬がいけないのに、世間はます／＼不景氣になるつて云ふから、あたりまへなら多少は仕事のまはつて來るに極つてゐる春が來ても夏が來ても、おれだちは當分いゝ目は見られまいと思ふと、これまでにいい目を見たことのない彼れでも心細くなつた。そして、晝も夜も一つ事を思續けて氣を腐らせてゐると、それを誰れかの行爲にでもしなければ心の遣り場がなくなつたが、天にも地にも外に持つて行きどころがないので、詰るところは、それを主人の所爲に押付けて見た。世間のやうに窮乏の苦しみを夫婦喧嘩の材料にはしないで、二人は心を合せて、主人の方へ不平の目を向けた。

「おらつちが困つてるのを知つてれば、どうかしてくれてもよさゝうだ」と、たび／＼繰返してゐた。

明けてから、一月一杯、まる休みに休んで、彼れのまはりは死んだやうに寂閑としてゐた。おくらも落着いてはゐられなくなつて、主人の知人の米田といふ家へ出掛けて、ポツリ／＼と事情を訴へた。この家ではこちらに定住してから二年を過ぎてゐるのに、一度も庭の手入れをしないで、何本かの松が葉がのび放題にのびてゐるのも、垣根がところどころ壞れてゐるのもかまはないでゐるのを、千代松は主人の使ひとして時々來て見ては氣にしてゐたのであつた。

「そんなに遊んでゐちや困るでせうね」と、米田の妻君は、おくらの話に同情して、「ぢや、私のとこの庭の松の刈込みでもして貰ひませうかどうでもいゝんだけれど」と云ふと、おくらは笑ひをこぼして、

「ぢや、明日からでもやらせて頂きませう」と慌だしく云つた。

「あなたには洗濯をお頼みしたいんだけれど、他所のお留守居の人を使ふのは何だから」

「いゝえ、よろしいんですよ。この頃は奧でちつともいらしやらないんで、私も暇なんですよ。」

おくらは、妻君から渡された汚れ物や洗濯シャボンやソーダなどを持つて急いで歸つた。

千代松は吉報を得て喜んだ。翌朝久振りに仕事着を着て米田の家へ出掛けた。

「松なんざ打遣つといてもいゝんだがね」米田は植木屋の必要を認めないやうな口吻であつたが、千代松は

「一度枯つ葉を奇麗に取つときや、掃除に手間かゝりません。家をお賣りになるにしても、庭木を奇麗にしとくと高く賣れます。このくらゐな松になると、今時やさしい價ぢや買へませんからね」

「まあ、いゝ加減に手入れをしとけばいゝよ。手間が何日かゝるだらう」

「私が大あばれにあばれて、このくらゐな庭は二日もかゝりや、スッカリ奇麗になります」

千代松は松の無駄葉を毟つたり、剪刀を動かして、下枝を切つたりしてゐると、永い夜が明けたやうで、心がせいせいして來た。欲得なしに熱心に働いた。そして、下から見上げてゐる米田に向つて、「植木の好きな方は、毎日この鋏の音を聞くのが樂みだつて云ひます」と、自分で自分の鋏の音に聞惚れながら云つた。

一しきり働いて、緣側で休んで、煙草を吸つたり茶を飲んだりしながら、自分の仕事の結果を見上げてゐると、何とも云へないいゝ氣持がした。彼れはお八つの饅頭を口の中へ抛込んで、緋鯉が麩を食ふやうにパクリ〳〵と喉へ入れた。

僅か二日間で、庭の隅々まで、見ちがへるほど奇麗になつたので、米田夫妻は喜んだ。

「庭の手入れはするものだね」と云つて、次手に垣根の修繕をもしようかと夫妻は相談して、あまり費用が嵩張らないやうならやつてもいゝことにした。千代松は、どうせ遊んでゐるのだから、手間費を減らしてもいゝからやらして貰ひたいと申出た。

「しかし、私が安く請負つたことは、世間へお知らせなさらないやうにお願ひして置きます」と口留めした。仲間内へ知れて自分の懷を見透かされるのを彼れは氣遣つたのであつた。

垣根の修繕には四五日掛つたが、それが終ると、仕事の口はまたパッタリ留つた。でも、花が咲くころになると、案じ過したほどではなくつて、何かかにかポツ〳〵雇はれ仕事があつた。眞夏のうちは主人一家が揃つて避暑に來たので、家の中の雜務が忙しかつた。八月の末にみんなが歸つてしまつて、跡片附をすると、それからは、留守番部屋で二人きりの閑かな生活に戻るのであつたが、今年は跡片付がまだ濟まないうちに、不意の大地震に襲はれた。千代松は芝生の草を刈つてゐるところだつたが、コロ〳〵と草の上にころがされた。匐上つて見ると、二階の雨戸もガラス障子も剝飛ばされてゐて、高い家は波のやうに搖れてゐた。

「えらいことになつたものだ」と、彼れは呆然として立つてゐたが、そこへ逃げて來たおくらの眞青な顏を見ると、「もう大丈夫だ。芝生の上に坐つとれよ」と慰めて、自分も草の上に蹲んだ。

「お別莊の留守居なんぞするものぢやねえ。これでどう仕末をつける」と暫く立つてから歎息した。

混亂の日が四五日續いた。主人に通知する方法がないので、家の中は荒れたまゝで放任して置いて、周圍だけを世間の思惑を氣にして取片付けて掃除をした。

そこへ米田夫妻が訪ねて來て、「修繕の手傳ひをして貰ひたいんだが、忙しいんだらうね」と遠慮して頼むと

「別段忙しいつことはありません。外の職人はこれから目が廻るやうに忙しいでせうが、植木屋は駄目でさあ。垣根や植木は風にや弱くつても地震にや强いんですからな。それにこんな場合にや、どの家でも庭の手入れなんぞいたしませんよ」と、千代松は云つて、大工か左官か屋根屋にでもなつてゐたら、かういふ時にはよかつたのだと、自分の職業を悲觀した。

それで、翌日から何でもやることにして、米田の家へ出掛けて、甘んじて仕事師の差圖を受けて屋根の掃除をしたり家おこしの繩を引張つたりした。長兄の金造も來てゐた。千代松は外の職人が仕事の口が殖ゑて活氣づいてゐるのを見ると羨ましかつた。自分も、たゞの人夫として他人に使はれるばかりなのでは物足りなくつて、自分の本職を氣まゝに働いて見たかつた。

「こんな土の棄て場はないから、これで築山をこしらえちやいかゞでせう」と崩れた壁土や屋根の土がそこら中へ汚らしく盛上げられてゐるのを見て云つたが、

「この際土の仕末どころぢやないよ」と、米田は聞入れなかつた。

倒れてゐた門は引起されて、兩方の袖は仕事師の手で古板で假りに塞がれたが、それがいかにも見窄らしいのを、米田の妻君は氣にして、「千代さん、この門の兩側を竹で圍んぢやどうだらうね。杉板を使つて大工さんにやつて貰ふよりや、その方が安く上りやしないだらうか」と、ふとした思付で云ふと

「えゝそりや安く出來ますとも」と、千代松はムツヽリした顔を綻ばせて答へて、考へるやうな目付をして、「今のうちなら、私が買ひに行きや竹を安く賣つてくれる所があります。……少しでかい奴を十本も買たら充分間に合ふでせう。いゝ青竹がなければ少し枯れたのでやつけりやいくらもかゝるものぢやない。それで内側は建仁寺にしとくと丈夫で奇麗でいゝでさあ」

「まあ見つもつとくれよ」

「ようがす」

千代松は晝飯に歸る時に、懇意な薪屋の物置へ寄つて、かねて見て置いた材料を調べて價段をも掛合つた。そして、廻り途して谷村といふ人の別莊の門をも參考のために見て通つた、自分の手でかういふ風雅な門の袖垣など脊てこしらえたことはなかつたので、千代松も、今度は手際よく作つておれの腕を見せてやるべいと昂奮した。壞れ瓦を運んだり床の下へ藻繰込んで働いたりするよりは、どれほど働き甲斐があるか知れなかつた。

彼れは米田の承諾を得て、翌日から仕事にかゝつた。土方人足の入込んでゐる庭へ大きな竹を持込んで、自分だけは今日からその仲間を脱したのを喜んで、悠然と構へて、籾殻で丹念に竹を磨きだした。

「いゝ竹だなア、こんな竹はどこから來るんだ」と、傍の者が訊ねると

「××から來るだ。……かうやつてよく磨いとくと、垣に結つてから一週間も立つと、ポーツとかう艶が出て、何とも云へないいゝ氣持ちがするものだ」と、千代松は得意げに云つた。

豫定したよりも手間が掛るので、米田は急立てた。「この際に門なんかを御叮嚀に直さなくつてもいゝんだから、いゝ加減で押付けといてくれ。園ひさへ出來たらいゝんだよ」

「成べく急ぎませう」千代松は急ぐやうな風をした。しかし、街道に沿つて建つてゐる此處の門の前は、人通りが頻繁なのだから、まづい垣をこしらえて、通り掛りの者に晒はれなきやならないと思つて、主人に何ゝ云はれようとも閑流して一生懸命に念を入れた。

「こちらは早手廻しだ。門も早く直つたね。」と立留つて云ふものがあると

「えゝ、谷村さんのやうな門にするんでさあ」と、千代松は意氣込んで答へた。朝早く通り掛りの職人は古い門に新しい青竹の袖垣の出來るのに、誰れも一度は目を付けたが、その目に冷笑を浮べるものが多かつた。

「もつとアツサリ拵えた方が氣持ちがいゝだらうにな」と、米田は云つたが、彼れは出來榮えのよしあしよりも、豫算以上に費用の掛つたことを氣にしてゐた。

「滞りまでも竹で拵えたから重くつて爲方がない。變なことしないで大工に頼んだ方がよかつた」と、米田の妻君もこぼした。

が、千代松は四五日は毎朝門の前に立つて自分の仕事の跡を眺めた。「お前も行つて見て來い」と、おくらにも勸めた。



未來をめぐる幻影
—三部作その一—

神近市子

一

賑かな大通りの商店にさへまだ燈はチラホラと入つたばかりの時刻に、泉はもうその頃寄寓してゐた畫家の安井の家を出て夜の集會の爲めに白山の方に歩いてゐた。

その晩は土屋といふ死んだ古い同志が、生前親しい主義者と勞働者達とを集めてこさへた××會の定例日に當つてゐた。靴工であつたアンドレ・ジラードと故國を逐はれてロンドンの大道を即席アイスクリームを賣り歩いたといふエンリコ・マラテスタを心の友に、一生を勞働者として眼もあてられぬ窮乏のうちに土屋が死んでからもう三年ばかりたつてゐた。が、土屋の死後もその生前に無産階級のためにはたらいた故人の努力を多とし、未亡人の寂莫を慰めやうとする會員のやさしい心遣ひから、××會はどこにも移されずに相變らず六疊と三疊と二疊の狹い土屋の家に集つてゐた。泉

も土屋とは生前知合つてゐた關係から、今でも殆どかゝさずに出席することにしてゐたものであつた。會は集まる者に方々の工場につとめてゐる人が多い關係から、その時候にも八時にならなくては始まらなかつた。然し泉はその日は少し早目に先方につきたいと考へてゐた。それには二三日前に手に入つた小遣のうちを少し土屋の未亡人に渡して置かうといふ腹もあつたが、その外にその日××の會で相談されるといふ同志の有松の新しい雜誌の計畫について早く集まつた人々の口占を引いて置きたいといふ積もあつた。

有松といふのは古い主義者の一人であつた。ごく若い頃から社會主義の運動に加はつてゐて、ある事件に連座して三年ほど下獄したのはまだ廿を出たばかりの時であつた。彼はこの三年を無駄には過さず熱心に主義に關する研究に努めて歸つて來ただけに、出獄間もなく仲間のうちでも相當に認められ從つて彼の言ふところを重んずる一團の人々もできて來た、一般に△△事件といふ名で通つてゐる出來ごと以後、日本の社會運動の上に起つた波紋の大部分は最初のうちは殆ど彼の周圍で起つたものであつた。それほどに自負心に富み事を好み、一寸他に見られぬ長所も持つ代り又可なりな他人には致命的には思はれる弱點ももつてゐる男であつた。

泉が有松を知つたのは、五六年前に彼が古い主義者として一番よく知られてゐる小田を賴つて上京してからのことであつた。

彼は京都の生れであつた。傳統的に最も佛教の盛んな京都の舊家に生れた彼が、最先にキリスト教の洗禮をうけ道心堅固なクリスチヤンになり濟したことは何時でも一の不思議として知人の間で語られるのであるが、然しこれは偶々彼が極めて進取的で因習と僞善とにみちた習慣をきらい、それに反逆せずには居られなかつたといふ事實を物語つてゐるに過ぎなかつた。ともかくまだ極めて若くてクリスチヤンとなつた彼は、小學から中學、專門部と京都で聞へてゐるD

大學に學んで來たのであつた。然しまだ大學を了らないうちに途中で正統派の信仰を嫌ふやうになつたことは、彼の生涯を波瀾の多い窮乏勝ちなものとするに多分に預つたのであつた。彼は教會派の信仰を極端にきらい、トルストイに傾倒し始めた。その結果は自分から安易な學校生活を咀ふやうになり、學校を捨てゝ貧苦と放浪との生活に自分を委ねて了つたのであつた。

二

彼の所謂宗教的放浪の終には、彼は丹波の山奥で牛飼として生活してゐた。そこは一寸とした人里に出るにも一里半も山を下らなくてはならないやうな片邊なところで、彼の隣人は只だ一人の炭燒であり、稀れに顏を逢はせる人といつては三日に一度彼の郵便物をとゞけに來る配達か山越しをする旅人位なものであつた。こゝで何頭かまたは何十頭かの牛を相手に勞働と祈禱との何年かゞ過されたのであつた。

その頃彼はある用件の爲めに何年か振りに京都に出て來たことがあつた。そして學校時代の友人を訪ねたのが機縁となつて、彼はこれ迄親しんで來た宗教書をはなれて社會主義に關した書物に沒頭することになつた。彼の生活からは急に祈禱と讃美とが失はれて、克明な推理と人生の觀察とが始められた。彼は始めて廣く盛んな生活に當面してゐる自分を發見した。孤獨な靜寂をよろこんで暮してきた何年かの生活がにわかに無意味に價値もなく思はれ出して來た。そしてそれに氣付くとその儘その日のうちに山を下らなくては居られない彼であつた。

かうして町へとさまよい出た彼が最後に眼ざして來たのは小田の〇〇社であつた。東京に出て小田に逢ふ迄、彼は全く新しい進路に立つて何事に手をつけたらよいかといふことさへ知らなかつた。小田は中年の政治家にでもありさうな

タイプの頭の空疎な可なり我慾につよい政略的な人物ではあつたが、長く主義者中の長老として他人の面倒を見てきた人であつたゞけに、ころげ込んできた泉に對しても大して氣まづい思ひもさせないで落つくところを造へてくれた。〇〇社は最初小田が自分と自分の周圍に集まる少數の同志の衣食の資にあてる爲め始めた出版社であつたが、その時分では相當に基礎もできて、多少教育のある泉が手の出せるやうな仕事はいくらもあつた。そこで彼は一時落ついて〇〇社の仕事を手傳ひながら東京の社會主義運動の實際の樣子を觀察することができた。

小田を頼つて上京してきてから一年余りたち〇〇社を中心として集つて來る人々の顔も一通りは區別できるやうになつた時分には、彼も社會主義の諸運動の主張にも通じ、同時に主な主義者の品質と各派の間の軋轢の事情などにもよく通ずるやうになつてゐた。當初キリスト教によつて思想的に洗禮をうけ、近代的にはトルストイの人道主義に多くの共鳴をもつて行爲して來てゐた彼には、有松一派の無政府共産主義の主張が一番多く心に觸れるものを持つてゐた。それで小田によつて衣食の道を與へられ小田の下に〇〇社の仕事をしながら、矢張り彼は有松を中心とする一團と久しく行爲をともにして來たのであつた。然しごく最近になつて彼は久しく運動を共にしてきたその一派とも、手を分かたなくてはならないやうに事情が推移してきてゐることを感じはじめたのであつた。それだけでなくまた實際に事實の上ではよほど疎隔した關係になつて來てゐたのであつたが、たゞそれを明かにするやうな機會が到來してゐないのであつた。去就を明かにして自分の立場を闡明して置くことを、平時の主義者としての第一の義務だと考へてゐる彼には、物のこの不確實な狀態は長く忍ぶことのできないものであつた。

小徑をわたる獲物をまつ獵師の細心な注意と緊張とをもつて、彼は必ず來る筈のその分離の時をまつてゐるものであつた。

三

泉がとある活動寫眞館の角をまがるころには、それでもそこらは早くも宵の光芒に變らうとしてゐた。歩くことのすきな彼は、白山を上つて少し行つたところを左に折れる土屋の家まで歩き通すつもりでボツ〱とやつて來たのであつた。

『泉君でせう？　やあ、泉君だ！』

活動寫眞の前に看板を見てゐる群集の中から聲をかけたものがあつた。

『やあ、内海君！』

泉はポケツトに入れてゐた右手をふとつた勞働者風の男の前にさし出した。細くやせた手を毛むくぢやらな手がひつたくるやうに固くにぎつた。

『どこにもぐつてゐたんだ。君が京都から歸つて來たといふことはもう前に聞いてゐたんだが、どこに行つたらあへるのか分らなくて訪ねることが出來ないでゐたんだ。然し君は相變らず元氣で好いね。君は又ふとつたよ、えゝ内海君』

泉はやせて高い鼻の上にのせた鐵縁の眼鏡をとほして、對手の顏をなつかしげに見詰めた。彼に内海と呼ばれた勞働者は顏も頭もクル〱と圓く、素直な情熱の内在を顏にあらはしてゐる骨組の岩丈な廿七八の男であつた。絣の筒袖の上には古いレインコートを引かけてゐたが、それでも身體全體にははち切れさうな精力がみち〱て、それがその薄いコートを通して外に滲み出てゐるやうな感を人に與へた。

『これから××會に行くところでせう？』

彼は泉の顔に物をさぐるやうな鋭い眼を向けながら、かう口を切つた。

『さうだ。君も來るのだらう。』

『あゝ、久し振りで出て見やうと思つてやつて來たんだけれど……』

『では一緒に行かう。久し振りだ。大に話すことがある。時に君は飯はすんだのかね？』

『いや、まだです。然し君は金をもつてゐるのですかね？』

『珍しいことだが今日は少しもつてゐる。久し振りで大いに牛飯でもおごらう。』

泉は邂逅のよろこびにやせて淋しい口許に青年のもつやうな笑ひを見せて、懐中をたゝき乍ら先に立つた。

『へゝ、そいつは有りがたい。この頃はバカに景氣が好いと見へますね。』

内海は泉を馬鹿にしたやうにかう云ひながら、杉臺の下駄をカラ〳〵と引づつてついて來たが、イソ〳〵として先に行く泉の古びた帽子と外套とにうづだかくつもつた埃に見慣れた窮乏の痕を見ると、自分で自分の考を否定するやうに急に頭をうち振つて泉に追ついた。そして今度は肩をならべて歩み始めた。

間もなく二人が入つて行つたのは、通りを一寸入つた横丁にある牛めしやであつた。そこは二人には馴染のあるところらしく、泉は店に入るとすぐ空席を見つけて飯を注文した。

『そして、君はこの頃どこにゐるい？』

泉は壁に背をもたせ乍ら、卓をはさんで向ふに窮屈らしく腰を下ろさうとしてゐる相手の顔を見上げた。

『どこと云つて方々とまり歩いて極つたことはないのだけれど。まあ、染井の方にとつて る宿と時々は末山君のとこだの井上のとこだのころがり込んでゐるのです。』

『さうか。井上君のところにも久しく行かないでゐたから逢へなかつたんだね。末山君は相變らず繪を描いてゐるの？』
『あゝ、然し余り金にはならなさうだね。』
『でも安井君の話では、この頃は仲間のうちでも評判がよく可なり賣れてゐる樣子だと云ふことだつたがね。』
『でも、よく飲むのでね。』
泉はうなづいた。

四

『つまり、以前に較べると大分賣れて來だしたが、飲む方にも精が出て來たので追つかないといふんだね。末山君、そんなに貧乏してゐるの？』
『ひどい、それは消り込んでゐても時には氣の毒になる位の貧乏なんだ。もう少し飲む方が我慢できると、申分のない好い男なんだがなあ――氣持はこの上なく好いし、運動をやらせても仕事をさせてもできるしね……』
彼はかう云ひさすと急にしほ〳〵と、物を案ずるやうに口を閉ぢた。
『うゝん、末山君この頃ではそんなに飲むのかね。僕が時々逢つてゐた頃は尤もそれは大分前ではあつたが、酒が好きなやうであつたが、それでも始末に惡いやうな飲み方では少しもなかつたやうに考へたがね。』
『細君の話では、あんなに亂暴に飲むやうになつたのは、こゝ二三年のことだといふんだがね。』
『こゝ二三年といふと、運動に餘り顏を出さなくなつてからのことだね。』
『どうもそんなに思はれるね。』

『さうか。』

泉はあへてそれ以上には内海には尋ねなかつた。それ以上のことを强ひて内海に云はせなくても、彼には運動をはなれて行つた頃の末山の心情を想像すれば、鋭どい感情をもつた彼が酒に淫して行かなくてはゐられなかつたその氣持が手にとるやうに分つたやうな氣さへするのであつた。泉は心の底にかすかな然し淋しみにさそふ自責の念が萌して來ることを感じた。

末山も久しく有松とその一派の運動に加はつて來てゐた人であつた。多數の同志の中にも少ない生粹の東京つ子で、小供の頃には派手に暮して育つて來た、であつたが、まだ若くて親に分れ、その後は家も倒産して多くの兄弟と苦勞して成人して來た人であつた。都會育ちの特質として感情が鋭どいと同時に疲勞も早く、それに早く頼りとする年長を失つたといふ失望も大きく原因して長く一つのことに專念する氣力がなく、久しく浪々としてあらゆることに手を染めて來た人であつた。始めて運動に投じて來た頃は、それでも稍々安靜に近い生活に入つた頃で、方々の緣日に古本の露店など開き乍ら若い教育のある戀人と同棲して頻りに繪筆に親しんでゐた

彼が有松と親しくなつたのは、泉より一二年早い頃であつた。成型美術に何物にも替へがたい愛と執着とを持ちながら、彼は一面に推理と論斷とに亦つきない興味をもつた人であつた、これが彼を單純な藝術家としなかつた一の理由であつて、社會主義運動に足を入れると同時に、彼は先づ有松の主張と立場とに一番多くの共鳴と同情を感じ始めたものであつた。それに有松の方でも末山の才能と天分とには少なからぬ希望と興味とを持ち始めたので、二人の間の友情は極めて急速に進んで行つて、末山はその教育ある細君と共に間もなく有松にとつてはなくてはならない忠實な得がたい同志となつたものであつた。

彼等の協力の運動が一年二年と經つうちには、世間一般のさうした集團の間に有りがちな醜いいやな闘爭もまた避けがたかつた。特に多くの同志の間から有松が急速に擡出して行つた爲めに、古い仲間のうちには有松がふるまふ專斷や先輩振りに快くない人も出て來て、同志の間が離れ〳〵になることも珍しくなかつた。そんな時にも何時も有松の心情にまで入つて理解あるやさしい友情を示して來たのは末山であつたが、三年ほど前に有松が同志の一人である貧乏で無力な男の細君を奪ひ、苦勞をさせて來た細君を何の涙もなくすてた時、彼は一日有松と斷つて了つた。

『有松の行爲が道德的であつたかなかつたか、僕はそんな穿鑿をしやうとは思はないのだ。僕は只だ有松の性格の中に同志としての信頼をつなぐことの出來ないものを見ただけなのだ。あの男は、仲間の首に繩をかけることのできる男だ。主義に終始しやうとするものにとつて、これよりも恐ろしい敵がどこにあらう。』

泉は末山がさう云つたといふことを聞いてゐた。

五

泉は末山の名を聞き、内海が末山と一緒に行動してゐることを聞くと、すぐに末山が自分に加へてゐる辛辣な批評を耳許に聞くやうな氣持がした。

『どうにでもまげることのできる空疎な概念上の一致を現實の事實の上に置くものは、すぐにその罰をうけるよ。』

井上のところで仲間と一緒にドロ〳〵になるまで飮んだ時、明かに自分をさして末山が批評したといふことを彼は聞いたことがあつた。その當時。有松との協力に手一杯の活動ができて多少の得意をさへ感じてゐた彼は、末山の批評を耳にした時も大して動かされることもなかつたが、今それを思ひ起してゐると泉は末山に心の底を見すかれてゐたやう

な羞しさすら感ずるのであつた。それと同時に運動上の少しの成功に心のおごつてゐた當時の自分の心情に自責の念さへうすら冷たく萠して來るのであつた。

末山が有松と別れるその動機をなした戀愛事件が有松に起つた頃は、泉はまだ始めて小田をはなれて有松のところに投じて來たばかりの時であつた。

その事件に前後して、長く有松と行爲を共にして來た同志の大多數の心が有松をはなれ去つてゐた。事件そのものが直接に彼等の親しい仲間の一人を犧牲にしてゐるといふ事實から、同志の間に激しい批難と憤怒とを喚起したことは事實であつたが、その他にも若くて急速に名を成したことが原因して、性來自負心のつよい有松が急に心おごつて仲間の存在を無視し、その平生の主張を全く裏切つて專制的に事を運んでゐたことが、彼の同志に危惧の念をいだかしてゐたいとふことゝ事實であつた。尙もつと立入つて有松の心情に立入れば、彼がその物議を起した戀愛事件を引起したその事が既に心おごつた當時の彼のふざけ切つた心の所產で、逆境にある時最も人間らしいやさしさの溢るゝ彼が、得意な境遇にゐて驕慢と稚氣とにこまやかな神經をもつ者の面をそむけさせることは少くなかつた。さうした人間の矛盾が彼には極端に露出してゐることを泉は今考へるのであつた。

さうした有松とその仲間との離反の間にゐて、泉は他の二三の同志と共に有松の周圍に止つたのであつた。反省が深く、有松に對する批判が鋭どくなつた今その當時のことを考へ出してゐると、泉は當時の自分の行動を仲間を裏切つた卑怯な行爲のやうにさへ感ずるのであつた。事實彼れ自身もつと長く仲間のものと交はり彼等の感情を分つやうになる迄一派の間に深く入つてゐたとしたら、彼もその時に有松をすてた一人であつたかも知れないとさへ感ずるのであつた。然し當時の彼と云へば、有松を知つて殆ど間もなかつた頃で、有松以外の同志の間には有松ほどの親しみをもつた

人すらなく、妻にそむかれたといふその同志の顏さへ彼は知らなかつた。有松自身の上にはその弱點よりも多くその長所に眩惑してゐたことで、從つて有松が他人の妻君を犯したといふことについても――その夫が快く妻君を解放したといふのに、第三者が何の權利によつてそれに容喙する理由があらう。さうあることこそ――妻は夫をゆるし、夫は妻をはなつことこそ、未來の社會では日常茶飯事となるべき事ではないのか。彼は現實に觸れた瞬間に理想を捨て去つた多數の同志の不思議な憎惡と反感とを心窃かに笑つてゐたものであつた。

六

『末山のいはゆる所罰をうける時が來たのかな。』

泉は今から考へないではゐられなかつた。

同志が有松をはなれ、有松が泉とほかの二三の人を相手に運動をつゞけて行かなくなつた頃には、泉は幾分得意な氣持にさへなつてゐた。

彼等は智識階級の間に全く友人を失つたことを知ると同時に、今後の運動の範圍が勞働者の階級に限られて了つて來たことを感じた。それで彼等の運動上の眼目は勞働階級の耳目に觸れ易い場所では彼等の理解に入り易いやう平易に主義を說くといふことに最初からきめられたのであつた。

東京には泉は相當の位置にある數人の友人をもつてゐた。それらはD社時代の泉の同窓生で、彼が只管に思想の推移を逐ふて眞面目に苦悶し人生の體驗に骨身をくだいてゐるうちに、傳統的な信仰に何の不安もなく安住して一身の計を立てるに餘念のない種類の人達ばかりであつた。しかし彼等はさすがに昔の泉との交友はわすれないで、泉があたらし

く克ち得た理想をといて物質上の援助を乞ふた時に泉が希望したその自覺からではなかつたがそれでも可なりに快くその請求を入れて金を出してくれた。泉はその金を有松に提供して本所邊のある工場町に近く彼等の共同の住家をみつけそこを根據にして運動を始めたのであつた。

『泉君、何もかも君の骨折りでこゝまで漕ぎつけることができたやうなものだ。あの女性の方は何れ僕の都合がつき次第、どこか間借りでもして移すことにしてゐるのだから、まあ少しの間は君達も大目に見てゐてもらいたい。』

有松は氣持ちよくごくアッサリと泉に詫びた。彼はさうした關係による婦人を引入れて、新しい共同生活の中の清新な氣分を打こはすことを恐れてゐたのであつた。

勞働者の間に自分達の援助者と友人とを見つけやうといふ彼等の努力は、決して無駄には終らなかつた。元來が智識階級の出で文字の人である有松には、勞働者の間に入つて彼等の心を正確につかむといふことは稍々困難であつたが、長く勞働者の間に暮し自分自身で勞働の喜びも苦惱も味はつた經驗のある泉にはそれができた。彼は進んで彼等の間に入り、彼等の生活を分つて自然的に彼等と有松との間をつなぐ役目をするやうになつてゐた。そしてこの彼の特殊の持役はその後又一二の仲間にも分けられたが、そのうちで内海は又よく自分達の持場を知つて働いた一人であつた。

運命は意外にも彼等の仕事を微笑をもつて祝福しつゞけてくれた。本所を中心として彼等の運動は次第に勞働者の間にひろがつて、一の勢力にまで發展しやうといふ希望をさへ見せるやうになつた。ひそかに未來を望見する時に、泉は心からの微笑を禁ずることは出來なかつた。

その後間もなく起つた歐洲戰爭の終了といふ大波は、その餘波を彼等の小さな集團の上にまで及ぼして來た。講和後にての空前の慘虐をとり返さうとでもするやうにさかんに高唱されて人類愛とデモクラシーの精神とは、極東に長く眠

つてゐるこの小さな民族の夢にまで影を投じて來た。日本の智識階級は今更に社會主義のいふところに耳を傾け始めた。

七

有松は利害を見るに鋭どい眼をもつた人であつた。彼は智識階級の眼がもう一度自分の上に向けられたことを感じた。そしてそれと同時にそれによつて自分がどんなに酬はれるかといふことが彼の腦裡にはもうよく寫されてゐた。二つは同時に得られない！　彼は一たび友人に選んだ勞働階級を暫らくさしおいて、智識階級に向つて熱心に語り始めた。その結果は彼の周圍にはすぐ比較的に若い學生と文學的な人々の一團が形づくられてゐた。

感じ易い泉の眼には、この有松の心情の變化はすぐに寫らないではゐなかつた。泉には有松は勞働階級の間にあつた頃よりも、この新しくできた周圍の間にある時に寧ろアツトホームな自然な氣易さを感じてゐるやうに見へた。それは無産階級に屬する人々は、よほど若い人々でさへもう人生の幻滅を知り、硬化した感情と憂欝な氣分とで、自分の生活も他人のそれと少しも假借するところなく辛辣に批評しつくしてゐるのに、若い智識階級の間には、まだ多分の夢が殘されてゐた。そしてその幸福な夢多い生活から彼等は自然にグツドネエチユアであり愉快であり、批判が穩かで感激が單純であつた。この事が自負心に富みその性格の上にネロの暗い半面をもつ有松に安易な自由な氣持を起させてゐるのであつた。彼は自分が生れた階級に再び歸つて始めて安住を見出してゐるやうに泉には思はれた。

その頃になつて、これ迄主として泉と二三の同志の盡力で支へられて來た共同の家も、有松自身の手によつて支へられるやうになつてゐた。そしてそれと共に全體の空氣も前とはよほど異つたものになつてゐた。泉自身それに氣づかな

いことはなかつたが、然し輕々しく他人の非をあげることは泉の性情と習慣とになかつた。共同生活に對する有松の反逆に一番早く批難の聲をあげたのは内海であつた。

『手前らがこまつた時には散々泉君の世話になつて置いて、手前らに金が入るとコソ〳〵と面白い眼や好い眼をして歩いてやがる。それが社會主義的だといふのなら、こちとらは社會主義でなくとも好い。』

彼は仲間の者にかう不平をもらすと、すぐ京都の方に走つて了つた。

内海が去つたことを聞いた時には、泉はさすがに心を動かした。彼は内海に勇敢な第一歩を拔かれたことをかすかに感じた。そして本能的に自分も身をひく時ではないかと考へたのであつたが、彼の性質に衣魚のやうに巣喰ふ弱さと善良さとが彼を後方に引いて、彼はその儘有松が山手の方に見つけた更に手廣い更に便利な家に移るまで、その住家を見すてることが出來なかつた。

おもひ出の多い狹い家を越して行く時に有松はさすがに泉をわすれかねて、一緒に新宅に移つてくることをすゝめたが、その時こそ彼はキツパリと有松の申出をことはつた。

『僕は當分獨りでゐて少しやつて見たいと思ふことがあるから、好意はありがたいが行先は別に見つけることにしやう。』

『さうか、そんならまあ君の好きなやうにやつて見給へ。金がないのだらう。』

有松はさう云つて少しく金を泉の手に渡すと、女と一緒に新しい家に越して行つた。それ以來、泉は小さな間を借りたり仲間のところを泊り歩いたりして、浪々と暮して來たのであつた。

八

『ときに泉君、君は有松が△△に行つて來たことは無論知つてゐるんでせうね。』

前に差出されたビールのコップに無器用らしく手をふれた時に内海は、かう眼ふやうに口を切つた。

『あゝ、知つてゐる。』

泉の答は寧ろ簡單で氣がざさうであつた。

『で、歸つてから逢ひましたかね。』

『いや、まだゝ。一度逢つて見たいと考へ乍らツイまだ行逢はないでゐたところだ。』

泉の答は冷かであつた。

『すると、君は有松が出かける時にもどんな用件でどこに行つたものか少しも知らなかつたんですね。』

『あゝ、知らなかつたよ。こつちにはゐないといふことも餘程たつてから氣づいた位のことだ。』

『フーン!』

内海は泉が殆ど何事も知らない樣子を見ると、その迂濶さを憐みでもするやうにチラと口邊で冷たく笑つた。

『何でもよつぽと掘つて來てゐるといふ評判ですぜ。○○○の宣傳をするといふ條件つきでね。それで急に大勢を集めて週刊を出すといふ評判があるのですが、今夜はその相談が××會にも出るやうな風向きだつて云ひますよ。それで今夜は大分面白い幕合にならうと思ふんですがね。』

かう云ふと内海は急に口を閉ぢた。そしていかにも、

『どうだ、驚いたらう?』

とでも云ひたさうに、泉の方を見やつた。然し泉は依然として冷かに、内海に案外な感をいだかせた。

『そんなことも聞いたよ。僕も今夜はその話が出るといふ積でやつて來た譯だがね。』

『それでは君も今度のその仕事に一肩入れるといふ譯合ですね。』

内海は押へても押へ切れない輕蔑と憎惡の念を顏一面にあらはし乍ら、流しめに泉の方を見やつた。

『いや、それも決して決定してゐる譯ではないのだ。何事も今後の成行と有松君の態度によつて決まるのだがね……』

しかし、泉はかう云ひかけて急に口をとぢた。彼は自分を見てゐる内海の眼に、自分に對する偏見と敵意とが秘められてゐることを急に感じたからであつた。彼はにわかに言葉を切つて、再び内海が口を切るのを待つた。

『然し泉君、君はこれをどう思ひますね。有松はこれまでマルクス主義と無政府主義とは絶對に相容れることのできない二つの主張であつて、どこまで行つても並行して行く二つの線見たやうなものだと云つてゐたんですぜ。こちとらは何も分らなかつたが、なるほどよく話を聞いて見るていと、個人てへものは自分が自分の主人で、自分の外の者が自分を支配することを許さない。これが無政府主義の根本の思想であるのに、社會主義の方は人間は自分を支配する力がないから、これは個人以外の團體の力でなり約束でなり拘束して行かなくてはならんと主張する。これはなるほど誰が聞いても無政府主義のいふことが眞個であり、個人の人格といふものを尊ぶデモクラシーの精神にも叶つて居る。――それで有松のいふところに執心して社會主義の奴等と云へば權力慾をきれいな着物でかくして見せてゐる狼だと思つて、奴等には鼻も引かけない氣でゐたんですぜ。それが今度はさう云つて教へた有松が、お手前の方から掌をかへしたやうなことをやるのだから餘程どうかしてまさ。僕なんか主義はそんな飴細工見たいなものだとは思ひませんが、泉君なん

かには、それは少しも問題にはならないのですかねえ」

九

だまつて内海のいふところに耳を傾けてゐるうちに、泉は今日の内海の不思議な興奮と憎惡とのよつておこるところがよく分るやうな氣持がし始めた。

内海の主義者としての生活はまだ極めて短かいものに過ぎなかつた。大工が彼の身についた職で、以前は田舍で相當に生活してゐたものであつたが、一寸とした不幸な出來事がもとゝなつて田舍を住み兼ねる破目となり、東京に出て來て運動に投ずるやうになつたものであつた。有松と泉と共同の本所の家に半年ばかりも一緒にゐたが、有松が一緒に生活してゐるものを裏切るやうなことを始めると、斷然として有松をはなれて京都に行つて了つたのであつた。長く不當な待遇に馴れて來たことのある男だけに、その種の苦痛には特に敏感で僻みが強く、自分に加へられた不公平な待遇には、決して復讐を忘れない男であつた。

幼さい時から生活の勞苦の中に押やられ、苦勞して來た彼は殆ど文字通りの文盲であつた。しかし異常な記憶力と推理の力とをもつてゐて、一度他人の口から聞いたことは忘れなかつたし、會合などに出ても論戰の掛引に巧妙で且つ勇敢であつたから、一派の間でもすぐに頭角をあらはして有望な鬪士として重きを置かれるやうになつてゐた。

その内海が京都に立つた時には、泉は急に寂寥を感じたものであつた。内海は文盲であつたと同時に飢えたものゝやうに智識を求めた。然し負けぎらいな彼の性分が驕を傷けられることなしに教へを乞へるやうな同志が側にたかつたので、自然と彼は泉を凡ゆる生活を分かつ友人に選ぶことになつた。泉にだけはさすがの彼も安心して凡てを賴ることが

できた風で、することもなく家にゐる時など極つて泉を促して主義に關する書物をもち出して讀ませたが、聞いてゐる事など讀む泉よりは内海の方がよく覺へてゐて、讀後の批評などにも必ず彼れ自身の獨創的な意見を加へてゐて泉を驚かしたものであつた。泉は不幸にして正當に實を結ぶことを許されないこの異常な才能に、窃かに畏敬の念を禁ずることが出來なかつた。

半年ぶりに逢つた内海は、先輩である泉を却つて後輩でゝもあるやうに扱つてゐる樣子があつた。ともすると是非の判斷の前に迷ひがちな弱い自分の性格をよく知つてゐる泉は、直情で行爲に勇敢な内海にそんなに見られることは避けられないことであるやうに感ずるのであつた。それ丈けでなく、彼は元氣で正しい情熱に燃へさかつてゐる内海の顏を見てゐると、丁度病み老いて健康な子供の活動を見る親の氣持はこんなものでゝもあらうかと想像される不思議なよろこびを感ずるのであつた。それを單純な希望といつても當らないし、單純な喜びと云つても當らなかつた。寧ろその二つを含んだ幸福な感がそれであつた。

「いや、君に問題になつてゐるやうなことが問題にならないことはない。しかし、僕は有松君自身の口から聞かない以上有松君が急に自分の説をひるがへして○○○の前を膝を屈したとは考へたくないし、又萬一有松君が○○○の人達と一緒に事をやるとしても有松君には又相當の理由かあるのかも知れない。萬一有松君が立てゝゐる名分がハツキリとしてゐるなら、外國の無政府主義者が例へば○○○を排してゐやうと、我々がその血統をついで○○○を排する要もないと思ふ。今夜でも機會があつたらその點を大に有松君に聞くことにしやうではないか。君はどんなところから出た材料によつて有松を裁いてゐるのか知らないが、充分に事情を確かめずに古い仲間に對して悪聲を放つことは好くないと僕は考へる。」

ともすると熱してくる心を强ひて押へて、泉は冷かにかう云ひ放つた。

一〇

しかし、かう冷かに云ひ了つた泉の心は急に空虛になつて何かの充たされない空洞を生じたやうな感を彼に起させたそしてそれと同時に自分の上に眼を据ゑて暫くもはなれぬ内海にその空所を嗅ぎ出されて、それに有松に對する憎惡を注ぎ入れられてゐる慘めな自分の姿を見たのであつた。

『まあ好いや。君はまだ有松を買ひかぶつてゐるが、キリスト教主義の善良振りが祟つて眞個の君の氣持を君に云はせないかしてゐるのだらうから。しかしあの男がアケスケに自分は主義を賣りました、論敵をかへましたと同志に告白して新しい運動を始めるかどうか。僕の考ではそんな根本的な問題は結句ウヤムヤにして置いて、威勢のよい花々しい運動振りを見せて仲間も世間も烟に卷かうとするのがあの男の柄にはまつてゐるのだから。まあお互ひに長い眼で見てやりませう。』

內海はかういふと女中が運んで來て前に置いた牛飯に遠慮もなく箸をつき入れた。

『旨いなあ！』

やがて半ばを喰べ了るまで一語もしなかつた彼が、急に箸を止めて泉の顏を見上げた。

『もう一杯か？』

內海は靜かに口を拭いた。

『あゝ、貰つても好い。しかし君は矢張り始終こゝに來るのですかね。』

『あゝ、まあ金のある時にはね。この前にはいつか小母さんを誘つて來たことがあつたつけ。』

『すると、君は今でも前どほりに大抵は空の財布をもつて歩いてゐるんですね。』

『何も今更珍らしい事でもないぢやないか。それとも君は僕がどこぞの金持の伯父さんの遺産でも貰つたといふ噂でも聞いたかね。』

内海はその時は微笑したゞけで答へなかつた。しかし泉が始めは怪しみ思つたほど内海の態度は急にやさしみを加へ泉に對して深い親しみを示して來た。

『有松の奴、急に自動車か何かで納つてゐるといひますぜ。泉さんなんかも少し要領よくやれたら小使位には不自由はしなくてすみませうがねえ。』

内海は有松を念頭からはなすことができぬ有様であつた。

『まあ好い、さういふ君が要領よくやれないと見へて小使の持ち合せがなささうではないか。要領の好いものがいつも勝ちだといふこともあるまい。要領の惡い者は惡いもの同志で融通し合つて行くとしやうぢやないか。』

泉は勘定をすました時、釣錢のうちから二三枚の紙幣をぬいて内海の手に握らした。

飯をすますと二人はそこを出て並んで町を歩みはじめた。通りはもう全くの宵の景色で、角々の美しいショウウインドウの前には、散歩に出た若い男や女の影がチラ〳〵浮き出ては又消へて行つた。

二人は何時となく自分々々の考に耽つて町を歩いてゐた。二人とも一番多く頭の中を支配してゐた問題をあく迄語り合つたあと、又新しく話題をもち出すほどの氣力もないことを感ずる風であつた。

土屋の家から一丁ばかりのところに來た時、内海は一寸した店に入つて煙草を買つてつけながら、急にそこから進み

かねる風に歩みを止めた。何事であつたか自分にもハツキリはしなかつたか、内海は泉のまだ何かいふことをもつてゐたやうに考へ出したからであつた。彼は何となしに泉を二人のさうした時間をのばしたかつた。

二

『そして君はこれからどんなことをして行くつもりでゐるのかね。』

泉は内海の氣持をうつしとゐと、改めて自分から話題を求めて切り出した。

『末山君が小さな雜誌でも出したらといつてくれてゐるのだけれど……』

まだ決心がついてゐぬものゝやうに、内海は語尾をにごして明かにしなかつた。

『雜誌を? 君がゝね?』

『君でもさう思ふでせう。もつとも、書く方は勿論末山君だの青木君だのが主になつてやつてくれるといふからそんなに見つともなくないものが出せるといふ見込みはあるが、この際有松がウンと金をもつてゐていよ〳〵週刊でも出して大々的にやるとなれば、僕等が骨を折つて小さなものを出して見ても仕方もないやうな氣もするのでね。』

から云ふと内海は吐息をついた。泉はかろくうなづいたが、彼にも經驗と背景とをもつてゐる有松が手一杯の仕事を始めやうとする今は、内海にも末山にも手の出せる餘地はなさうに考へられるのであつた。

二人は又默つて歩き出した。

土屋の家ではもう大分集つた人があつた。

『やあ、甚君ぢやないか?』

泉と並んで入つて行く内海の顏を見てから叫んだものがあつた。

『さうだ、内海君だ!・内海君、こつちだ、こつちに來たまへ。』

『暫時だつたね。何時來たの?』

『あゝ、ついこないだ。變りはないのかねえ、ずい分久し振りだつたね。』

見慣れた親しい顏に迎へられて、内海はむつすりとしてゐた顏の筋肉を和らげ乍ら、レインコートをひら〳〵とさして片隅に陣どつた勞働者のなかにツカ〳〵と入つて行つた。

「どうかね、甚君、京都の邊には面白い事があるかね。」

から聲をかけたのは、久しく一緒に暮したことのある津上といふ男であつた。彼は有松のところで生活することに自分の最上の價値を見てゐる男で、長く運動の歷史に乘じながら一度も自己の存在をハッキリさせたことのない男であつた。

「面白いことやぼろい好い目のでることは、東京の方に澤山あるといふことぢやないか。雙六相手では何もできさうもないで、少しあやかりたいものだと思つてはる〳〵やつて來たんだよ。いやにからつぽの他人の懷中をさぐるない。』

内海は津上にとつては何時でも苦手であつた。最初の一發にもう傷いた津上は、會の始まる前多くの同志のまへで見苦しい敗北をするでもないと考へたものか、氣色ばんだ内海の樣子を見ると、用ありげに席を立つて内海に答へなかつた。

『こないだの無産者大會とかで面白い幕切れだつたつて、どつかにくわしい通信が來てゐたぜ。』

古い××會の會員で神田あたりに住む機械工の關が、内海の前に戸外の空氣につめたく冷えた顏をつき出した。關は

內海にとつてはなつかしい舊友のある同志であつた。

『あゝ、あの時の小田の態つてなかつたね。それから何とか云ふ憲政大學の奴さ。それ邪魔が入つたと騷ぎ出すと一緒に解散と來たのさ。こちとらは例へば社會主義の奴でも民衆の前では仲間として共同の動作をとらなくてはならないといふ考だから、味方の者に怪我があつてはならないと思ふので、ポカ〳〵やられながらも二三人で辯士室の人々をかためてゐたものさ。そのうちに少し靜かになつたのでヤレ〳〵と思つて中に入つて見ると、辯士室には人の子一人ゐないといふ始末よ。皆靴をさげて窓からにげ出した譯さ。實際あれには驚いたね。』

二

『でも、それつといふと一番に逃げ出した方がいゝかも知れないぜ。そら何時かの何とかいつたつけ、木本か？　木本のやうにやられるとつまらないからなあ』

横合から口を出した男があつた。內海はその男を知らなかつた。

『そりや、木本がやられた時には藤堂はじめ强がりの連にウラナリの瓢簞みたいなヘナ〳〵ばかり揃つてやがつたんだ。己達がチヤンと控へてゐるのに裸足でにげ出すつて法はないんだ。國防會の奴等が何と云つて笑つてやがるかと思つて、己らあんなに屑味のせまい思ひをしたことはなかつたぜ。』

內海がまだ何か云はうとしてゐる時に、ドヤ〳〵と入つて來た一團があつた。聞が變な咳拂ひをするので振り返つて見ると、今しがた噂の的になつてゐた憲政大學の學生が四五人の仲間を連れて座敷に上つて來たところであつた。

『やあ、今晩は！』

先に立つて入つたその男は、入口に立ちはだかり乍ら悠然と顋を引いた。オールバックにした髮が蒼白い額にかゝつた、眼の大きな濃髭のある男であつた。

『今晩は！』

先に集つてゐた勞働者達は、學生連に氣をおくやうに丁寧に挨拶を返へした。自分達が無智であるといふ引け眼から彼等が學生達にどんなに自分達を卑下して小さくなつてゐるかといふことが内海には直ぐに感じられた。彼は何かを云はうとしたが、學生は内海の顏を會員の間に認めると、慌てゝ顏をそらして了つた。

『することが有松によく似てら。』

内海は誰にともなくから低く呟いた。

『あれで有松ソツクリだと云はれるのが大得意なんだ。途中なんかで逢つて見ろ、肩なんか叩きあがつて、どうだね形勢は？　まだ革命は起らなさゝかね、つて來るから。』

闘が氣どられぬやうそつぽを向いてから云ふと、皆がクス／＼と笑ひ出すのであつた。

この頃には會員はもう次々によほど集つてゐた。これも内海は今度はじめて見る新しい五十燭の電燈の下に並んだ會員の顏を見廻して、内海はその半ばが馴染のない新顏であることを發見して心に少ならず驚いた。

世の中のことはいふ迄もなくたへず變つて行く。社會主義の運動と雖も、その埒外にある筈はなく、今年これに加はる人と來年それをつゞけて行く人とは常に同一の人でないことは覺悟してゐながらも、數に於いて大して變りのない會員の顏が、半年前のそれとは全く違つてゐたことは少なからず彼を失望させた。彼は古い馴染の顏でそこに見へない顏を一つ々々思ひ起してゐると、何とも云へない憂鬱な氣分に襲はれるのであつた。

末山が珍らしく酒の氣のない顏を光らして入つて來た時分、煎餅類か何かの茶菓子と茶が一齊に仲間の手に運び出された。

『小母さん、茶なんかまだ早いではないか。』

長髪の學生がかう暗い三疊の方を向いてどなつた時には、內海の近くではもう手をのばして菓子をとつてゐる人が多かつた。彼等は自分達が批難されたやうに感じて、互ひに顏を見合せて菓子をもてあつかつた風を見せた。

『あら、まだお人數が揃ひませんでしたの。私はまた大凡そお集りかと思つたものですから。』

暗い三疊から、やつれた土屋の未亡人の顏がのぞいた。

『氣が利きませんでしたわね。』

未亡人は媚びるやうにかう云つて學生の方に詫びた。

一三

『なに好いんだよ、小母さん。人數はこの通りお揃ひになつてゐるんだから。誰が一體足りないといふんだい？』

內海は又上半身を捩ぢて學生の身を睨んだ。

『だつて、佐藤君もまだだし、有松さんだつて見へてないではないか。肝心な人達がまだ揃つてないぢやないか。』

『これは面白い。××會では佐藤君だの有松だのが來なければ咽喉が乾いても茶も呑んではいけないといふ規約を造へてあつたのかね。第一この會では、會員が一樣に友人で同志であつた筈だが、何時肝心な人と肝心でない人とに區別ができたのかい。津上君、君に聞かう。そして物は愛嬌だ。會員を一人々々肝心であるとないとに區別をして見せてくれ

給へ。』

内海は學生に當るに好い言質ができたので心が浮き〳〵として樂しげであつた。實際に輕率で考の淺いその學生を見ると、内海は嬲らずにはゐられぬ不思議な衝動をうけるのであつた。

一度内海をさけた津上はいつかまたもとの座席に歸つて來てゐた。

『相變らず理屈つぽいね。然し僕は誰が肝心な人間で誰が肝心な人間でないか知らないよ。さう云つた人に聞いたら好いだらう。』

津上は今度も内海が妙にからみついて來るのを、事なく外らさうとしてゐた。執念深くて爭鬪好きな内海は、彼には何時も苦手であつた。

室内は妙に白け切つたものになつた。路次に面した窓近く兩手をポケツトに收めて柱によつてゐた泉は、最初から全體の空氣が妙にザワ〳〵と落附かないものがあることに氣づいてゐた。そしてその混沌とした形勢のうちから、今二つに分れやうとする集團があることを認めない譯には行かなかつた。一つは入口に陣どつた長髪の寺井を中心にする一團で、他の一團は座敷の一隅に集つてゐる勞働者の群であつた。古い同志であるこれらの勞働者達は、半年このかた急に殖へて來た若い學生やその他からなる智識階級の會員に殆ど凡ての發言權を奪はれた形で、長く沈默してその制御をうけて來たものであつた。そこに今夜突然内海が現はれて來てその怖れを知らぬ鋭どい舌鋒で自由に寺井を蹂躪し論難するのを、彼等は一樣にホツとして屈辱から解放された者の氣易さを味つてゐるやうに思はれた。そのうき〳〵とした愉快な有様をヂーツと觀察してゐると、泉はそれらの人々の爲めに深く心をうごかされずには居られなかつた。

『この頃の學生なんて奴は、物貰ひのやうなものだね、何でも自分の力で考へ出さう造り出さうとはしないで、少し何

とか評判にでもされるやうな人間をみつけ〻と、そのお取卷きになつて褌をかついで、それで一分までが偉くなつたやうな氣でやがる。まるで人間の屑だ。』

内海は皆に聞へるやうな聲でかういふと、又挑むやうに傲然と入口にかたまつた一團を見かへつた。

『生意氣だ！』

『なぐつて了へ』

『ルビ付しかよく讀まない癖して。』

學生の間では集合心理から激昂して腕を振つて内海の身を睨みつけてゐる者があつた。寺井はそれをなだめるやうに押へて、カラ〳〵と大きく笑つた。それによつて彼は自分がどんなに大膽で餘裕があるかを示さうとしてゐるのであつた。この男の行動には凡てにコミカルな新派の芝居がゝつた匂がつき纏ふた。この不自然さの爲めに、泉は始めから寺井が嫌ひであつた。

一四

最初から殆ど一言も口を開かずに物を觀察してゐた泉は、不圖内海が自分を失ふ程度に迄興奮してゐることに氣がついた。彼はそれ迄打ちすてゝ置いた自分の迂濶さに怖れすら感じた。

『内海君、君は今夜は少しどうかしてゐるのだ。理由のない惡罵は放つて好い氣でゐたんでは、君は自由を失ふよ。あとで君が眞面目に發言する場合に不利益になる。もう止し給へ。』

泉は心持身體を起しながら、機會を捕へてから内海をたしなめた。

『さうだ、内海君。あんな人達を相手にするなんて君にも似合はない。自重したまへ。』
末山も泉について内海に注意した。
『飲んで來たからいけないんだ。』
『君、もつと落つき給へ。』
勞働者達は、泉や末山の手前を繕はふとして、辯護するやうに又いたはつた。淋しいうす笑ひが内海の顏には現はれたが、しかし彼は決して不幸ではなかつた。
有松は佐藤と一緒に入つて來た。彼等のあとには四五人の人がつゞいて入つて來た。大凡そ集りさうな顏は、一二を除いてこれで殆ど全部揃つたことになつた。
『大變にお靜かだね。』
有松は厚い毛皮の外套にくるまつてラッコの帽子を被つたまゝ、入口にニューッと立つて微笑を含んだ顏で集つてゐる顏を一つ〳〵見廻した。
廣くもない室内はもう先に集つた者によつて殆ど占められて、多くの空席はなかつた。只だ正面の床の間近くだけ、誰人かを豫想してかあけてあつた。有松は皮の手袋をとつて外套のポケットに入れると、それを脫いでツカ〳〵と床の間に歩みよつた。そして外套を下に敷いてその上に腰を下ろした。新しい船來コール天の 廣のチョッキには、これも新しい金の鎖がからんで、明るい電氣の光に冴へた光を放つてゐた。
『ウエルカムホーム、カムレイド！』
有松が腰を下ろすのを待つてゐたもののやうに、長髮の寺井が自席をはなれてツカ〳〵と有松の前に出て有松の右手

を求めた。

『サウ、ベリグラツド、ダツトユウウオアセイフ。リシイブ、アワアハルチイカングラチユレーション！』

から云ふと彼は有松がさし出した右手を力づよく打ちふつて、自分をとりまく學生達や何事も深くは考へないで只だ會合の餘興位に事を見て打ち興ずる同志達の相手のうちに意氣暢々と自分の座席に引とつた。

眞面目に多くの考ふべきことをもつてゐた泉は氣重く、若い學生の誇張した感情と身振りとを見てゐたが、有松自身の趣味がこの考へのない學生に芝居がゝりな一幕をやらせたことに考へ及ぶと、何か厭ふべきものにふれたもの丶やうに憫然とした。まことに、彼と有松との隔たりは今日こそ彼の前に一點の陰影もなくその全長を示してゐたのであつた

その事實をそこに見よ！　彼はかういふ者の聲を聞いた。

實際に有松はその一場の喜劇をよろこんでゐるもの丶やうに、ポケツトから銀製の葉卷入をとり出して、悠然と紫の烟を輪に吹いてゐた。その葉卷入も洋服や時計などゝ同じく泉は嘗て見たことのないもので、そのヴアジンメルタの清新な光は彼の眼を見張らせた。

しかし、泉はすぐに自分の好奇心をはづかしく考へた。それと同時に自分のさうした感情のあさい動搖を氣はづかしく感じて急に會衆の顔を見廻した。幸ひに何人も彼に注意をはらつてはゐなかつた。たゞ末山が前から泉の心を見て取つてゐたやうに、泉の視線が彼の上に落ちた時冷かにニヤリと微笑した。泉は秘密をぬすまれたもの丶やうに憫然とした。

内海は、有松の出現とそれにつゞいて起つた芝居がゝりの場面にも格別心をうごかされないで、平然と煙草をふかしてゐた。今夜の内海の氣分では又どんなに妙な引かゝりをこさへ、その穽にわれと落ちないものでもないと内海のためにハラ〳〵した氣分にゐた泉も、彼のこの案外な平靜を見るとホツとした。政略的な、冷熱ともに功利的な立場から自分の感情を制御できる人は、どんな場合にも他に破綻を見せることはない。然し正直で感情が強いものは、いつでも容易に狡智ある人の手に陷れられて、自分の言動がうんだわなの中にあがくことがあるものである。泉は内海をかうした辱めの中に入れることをおそれた。

が、幸ひにも事柄は泉が希望する通りに運んで行つた。まだ内海は一言も發言しないうちに會はドン〳〵進行して行つて、佐藤の話が始まつた。佐藤はその晩、自分が米國にゐる時分に關係した印刷工のある大きなストライキについて語ることになつてゐた。話が抽象的な論議でなくて、當面してゐる現實の事柄であるだけに、集會は異常な緊張をもつて佐藤の話に聞き入つた。佐藤は四十前後の小柄な男で、話談はユウモアと諷刺とを含んで主義者のうちでは何人よりも巧妙であつた。

●

一つの銀製の卷莨入から一樣に煙草をぬきとつて、並んでそれを吹かしてゐる佐藤と有松とを較べて見て、泉はその對照の餘りに隔たりのあることを感じないでは居られなかつた。有松は大柄でこそなかつたが、小柄な佐藤に引くらべてスラリと目立つ男であつた。彼は自分の新しい服裝——洋服とか時計とか外套とか煙草入とか自分の身飾につけてゐるほどのものを分時も忘れず、それに子供らしい誇をさへ感じてゐるのに、佐藤は自分が何を身につけてゐるかさへ他人にでも聞かれなければ氣がつかない男であつた。佐藤が推理に長じ談論に長じ又演説に長じ勞働者の間に人氣を得てゐるのに、有松は新しい學説新しい傾向を察知するに極めて敏く、何時も智識階級の間に一つの焦點をつくつてゐ

た。有松が自分の社會的地位に眩惑されて近づいて來る若いアンビシアスな女性を次々に選んで恥ぢないのに、佐藤は不然と十年前の結婚をその儘に引づつてゐる男であつた。有松が貴公子然と氣取ることを好み權力の絕對否定、個人の絕對自由を常に主張し乍ら然も自分は何時も專制的行爲に出で權力慾の極めて旺盛な人間であることをあらゆる行動に示して歩くのに、佐藤は勞働者の間の自分の異常な人氣さへ何に利用しやうといふ慾望もなく、自分の名では組合一つ會合一つ造へてはゐないのであつた。宗教家にでも見る洒脫な親しみ易げな佐藤から、街氣にみちた有松に眼をうつすと、そこには一種精悍な何物をも恐れない勇氣がはりみちてゐることを感じさせられるのであつた。

『渴くやうに求めて止まないものは必ず得ることができるものだ。我々の間の勢力も結局は有松の手に歸して行くのだらう。』

有松の服裝、有松の街氣、閃光のやうに彼の全身から發散する彼の野心の前に、泉は眩暈に似たものを感じ眼を瞬いた。

一六

佐藤の話が一切りすんだ時、有松は代つて立つて暫時は休刊してゐた雜誌を新しく週刊に復活し、運動をこれまでよりも廣い範圍に及ぼし度いといふことを前提にして、旣に成案ができてゐる樣式をザツと說明した時にはさすがに皆緊張して耳を傾けて一語も口を挾むものはゐなかつた。しかし有松の說明がすむと、關が一番に口を切つた。

『週刊にすれば編輯も忙しくなるでせうが、その方は新しくは誰々が手傳ひますかね。』

『できるだけはこれ迄通りの顏振れで、たゞ編輯に專門になつてやつて行く積でゐるんだが、津上、村田、佐藤、僕がかゝつても間に合はないとなれば、ほかに寺井君と上浦君、それに諸君も知つてゐる伊丹君にも手傳つて貰ふことにな

つてるんだ。』

何氣なさうに有松の唇から『伊丹』といふ名がもれた時、一のセンセーションが人々を掠めて行つた。有松は極めて巧妙に、會衆の最小限度の注意しか呼び起さないやうに努めながら伊丹を連れ込んだ。集會は有松の爲めに巧みに一杯喰はされたことを感じた。何人も心あるものは伊丹の名が有松によつてそんなに事もなげに持出されることを豫期してはゐなかつたので、却つてその不用意の虛をつかれたことを感じた。

『伊丹君といふと、僕等は何にも知らないのだけれど、あれは全體どういふ出處の人ですかね。』

關が、物におびへたものゝやうに低い聲で有松にかう訊ねた。泉は關が悸へてゐるやうな氣がして仕方がなかつた。

『それは僕も知らない。』

有松は言葉少なく氣むづかしげに答へた。

伊丹の出所や素性については、古い同志でさへハッキリと口にするものはゐなかつた。彼等が言明してゐる通り、彼等は果して何事も知らずに云ふことができないのか、乃至はある程度までは明かになつてゐても伊丹がその出所を秘密にする必要をもつてゐてその爲めに皆が一樣に口を閉ぢてゐるものであるか、それは何人にも分らなかつた。たゞ彼等は伊丹が、歐洲戰爭の終了後、アメリカから歸つて來て○○が歐露に權力を奪ひ日本に社會主義的の諸運動が盛んになり始めた頃、その時期を見定めたやうに飄然と○○社を訪ねて來た人物であるといふに過ぎなかつた。小田と相知つてからの彼の行動は、單色のやうに見られてゐた。小田の紹介で同志の誰彼を知るやうになると、彼は種々の會合にも顏を見せるやうになつた。が、同志に出て來ても論議になつて特に自分を指して意見を徴されることがあれば斷片的にごく言葉少なく明かに自分の考へをのべるが、しかし大抵の場合には自分の主張の全部を發表することをさけ――彼が社

合主義者であるか無政府主義者であるかさへ不明のまゝになつてゐた、そんな風なので仲合には始終でゝもごく親しくするといふ人もなく、何人も伊丹がどんなところでどんな生活をしてゐるかハツキリとは口にするものさへなかつた。世話女房式の一寸した細君に小さな烟草店を出さしてゐるといふものがあるかと思ふと、絹銘仙の着流しか何かに角帯をしめて相場町を往來してゐた彼を見たといふ者もあつた。彼の風采は決して豐かに生活してゐる風は見せなかつた。しかし懷中に空の財布な入れてゐることを他人に見せたこともなかつた。

どつちかと云へば單純で興奮し易く好人物の多い同志の間では、この全く肌合の異つた不思議な人物に對する疑惑は深められて行つた。

『奴、スパイではないだらうな。』

とかう、自分の疑惑を持ちこたへ切れないで呟く者があつた。

『それよりも○○○の手先きではないかといふ評判だぜ。』

またかう云ふ者もあつて、噂は噂を生んで行つた。

一七

その伊丹を、前もつて何人にもはかることもなしに突然自分達の運動のしかも中心に連れ込んだといふことは、その夜そこに何も知らずに集つた人々を驚かした。

『○○○と切つても切れない關係をもつてゐる人だといふやうなことを云ひ廻る奴があるんだけれど、あれなんかも人の噂話にすぎないのでせうな。』

闘は何事も深くは知らないものゝやうであつた。たゞ今まで相當に口數を利いてゐた内海が急に押だまつて了つたのと、いつもになく運動上の可なり重大な相談を言葉少なく切り上げやうとする有松の態度とを見較べて、底の知れない不安を感じてゐるものゝやうであつた。

『それも僕は知らない。僕は本人に聞いたことはないのだから。とにかく諸君の方は諸君の方で今度の仕事の成立については何か批評したいことも多いのだらう。しかしこの種の會合で何から何まで諸君に納得のゆくやうに話を明かにするといふことは不可能な事だから、凡ての批評は我々の計畫が實際の仕事として現はれた時に、文章なり實際の行動なりについてやつて貰うことにしやう。それで今夜僕の方から求めたいことは、我々のこの仕事を充分の誠意をもつて諸君にも援助して貰ひたいといふことだ。援助といつてもしかし何も諸君に財布をはたかせやうとするのではない。雜誌は今度は少くも一萬くらいを刷りたいと思ふのだから、諸君の方でも精々讀者を勸誘してくれることゝ、方々の組合その他の思想團體などにも紹介して、機關として利用したり種々の通信などもして貰ふやう關係々々で盡力して置いて貰ひたいと思ふのだ。これは何でもないことのやうであるが、然し實際に仕事に當つて行くものにとつては大變な利便を與へるもので、また我々の機關紙を常に多數の人に觸れさせて置くといふことは、今度の大衆運動に働きかけやうとする者には基礎工事と同じ意味合のものなのだ。それで僕は紙數の許すかぎりは大部を無代で撒いても好いとさへ考へてゐるのだが、然し最初から無代では却つて雜誌を輕く見て體裁も面白くないしするから、そこは諸君の方でよく含んで置いて臨機應變の處置をとつてもらいたいと思ふ。そして今晩こゝに集つてゐない諸君には、出席した諸君の口からこんな風に決定したと傳へて尚ほ依頼の件も通じて置いてもらいたい。』

有松はかう云ひ了ると必然に會員の中に起つて來る反響を待つものゝやうに、煙草の灰を落して久しく頭を上げなか

つた。

しかし泉が想像してゐた通りに、最初伊丹の名が有松の唇からもれた時のセンセーションはもう過ぎてゐた。闘をとりまく一團の勞働者達には、朧ろげながらも事柄の眞相が漸くのみ込めた風であつた。彼等はこれ迄とは違つてこれからは自分達は有松の仕事の上にどんな重要な役割をも占めてはゐないだけでなく、寧ろその夜の相談會といふ豫告も自分達を疎外したといふ批難を體よく免れる爲めに一味の人々が敷いた方策であつたことを遲蒔ながらも悟つた風であつた。その事が明かになつた場合、有松の仕事とその一味の行動について彼等が何を云ふことがあらう――彼等の階級的意地と裏切る者への反感とは、斯くも彼等にかう教へてゐる風であつた。彼等は眼と眼に多くを云はせて、憂鬱に押しだまつて口を開かなかつた。

一八

それに比較して明かな對照をしてゐたのは學生達の一團であつた。その一團の眞中に盟主らしく座を占めた寺井のはしやぎ方は最初から目立つてゐたが、佐藤の話があつても有松の報告が出てもそこの一團の饒舌と喧擾とは止まなかつた。特に有松がその夜報告しやうとしてゐることは、彼等は最初から小耳にはさんでゐたもの丶やうに、有松が佐藤の後をうけて立つた時にも新しい週刊の編輯者の名を擧げた時にも今後の運動の方針について抱懐するところを述べた時にも、彼等は盛んに拍手して明かに有松に迎合する態度を見せてゐた。

そしてこれらの二つの集團を除くと、あとは泉だの末山だの安井だの何れかといふと智識階級に屬する有松の以前からの古い同志で、××會を殆ど自分の掌中に入れたと見られてゐる有松にとつては外樣大名のやうな關係にある人達で

あつた。從つて彼等は有松によつて制禦されることもなければ屈服せしめられることもできない人々で、從つて有松の方からはともすると放逐して置かうとする種類の人々であつた。そしてこの人々もその自分達の中心的な地位をよく意識してゐて、愼しみ深く容易には發言さへもしないのであつた。

こんな形勢で會員の多くは一人々々自分の考に深く入つて他を觀るものはゐなかつた。たゞ學生達の一團は何か頻りに暗號のやうな話をつゞけてゐたが、暫時するとドツといふ盛んな笑聲が彼等の間に起つた。

『惚れたんだつて!』

頓狂な聲でかう叫んだものがあつた。

「誰が誰に惚れたんだ?」

八百長らしく白ばくれて訊ねる聲があつた。

「寺井君が有松さんに惚れたんだよ。宵までだとよ!ヒ……………」

集會の半ばがドッと笑つた。

『惚れたといふのが何が可笑しいんだ。實際に僕は惚れてゐるんだ。では君達に聞かう、實際に有松さんの外にどこに男がゐる?』

寺井は半ば戯れるやうに半ばは仲間の學生たちを威嚇するやうにかう云つた。女のやうに白い顔が赤味を帶びて來て長髪がうるさくその額に落ちた。彼の態度には男の心を得やうと焦る時に若い女の心にいつでもうごく欲求と[illegible]崇との交錯した感情の動きが[illegible]へた。

『チエツ!』

喰ひ切つて捨てたやうな舌打が内海の口をもれた。

『場末のスベタ女郎のやうな性根　もつてやがる！』

つゞいて彼の脣からこの咀呪が流れた。

しかし、内海の憤怒は中途で周圍の人々にさへぎられて學生達に挑戰するまでにはならなかつた。内海の友人達は考へさせられるところの多い筈の會合を、さうしたとるに足らない爭鬪で終りたくないと考へた風であつた。

最後に末山と内海とが佐藤に促されて立つた。内海は會員の問に答へて關西地方の運動の模樣を手短かに語り、三四の同志の個人的な消息など傳へたあと、全體としての運動に對する自分の希望を述べたいと云つてから云つた。

『京阪地方に行つて一番不愉快に感ずることは、少數の眞面目な人達を除いて古顏の同志がチツとも自分達の仕事にも運動にも一生懸命にならないといふ點だ。みんながノラリクラリとしてゐて、旨い汁があつたらありつきたいといふ考ばかりで頭を一杯にしてゐるので、若い人達も自然とそれに見習つて甚しいのになると尾行が出す三圓五圓の小金にさへ手を出す始末なのだ。勿論これは手を出す本人が惡いことはいふまでもないことだが、然し青年をこんなに墮落させたことには指導の役に當る先輩にも責任はあると思ふ。そしてこれは一般に京阪地方も東京も同じやうであるが、先輩の同志の間で競ふて贅澤をする傾向のあることは一考を要することゝ思ふ。ブルジョアの金を引出すのもよからう、〇〇〇の援助をうけて仕事をするもよからう。然しその金を生活向きの足しにするのはまだしも、甚だしくは服裝や持物を奢つたり自動車の乘心地を何とかしたりすることは止したが好いと考へる。僕はこの運動は純理想主義で行かなくては駄目だと思ふ。』

一九

學生のうちから、内海と内海のいふことゝを嘲るやうな笑ひ聲が聞へた。内海はそれに對して只だ威嚇するやうにその太い腕を揮つて叫ひた、

『誰だ、不謹愼な笑ひ方をするのは？　こゝは眞劍な談論をする爲めに集つた場所で、ふざけたりヘラ／＼追從したりする倶樂部ではないぞ。』

古い同志の一人が見かねて靑年達をかうたしなめた。すると有松はその同志の言葉を覆ふやうに、内海に答へはじめた。

『しかし僕らは禁欲生活をするのだとは一度も云つた覺へはないし、また僕らの生活を必ずしも狹い偏つたところに抑込めて置かなくも好いと思ふ。反對に僕らは自分達が望んでゐる未來の新しい社會では、今日の程度またはもつと以上の文化式生活や利便を希望するのが當然であると思ふ。また是非さうでなくては、今日以下の社會を造る爲めに我々は苦しんでゐるといふことになり、我々の運動も努力も全然無意義だといふことになると思ふ。』

『それは君のいふ通りだ。これ迄我々の間では一度だつて禁欲的の生活をしなくてはならないと云つた者はない。しかしそれは云はなくとも我々の生活は禁欲生活に近いものに押しやられてゐることを皆感じてゐたからではないのか。又例へば金と機會が與へられてどんな贅澤でもできる境遇に置かれても、それをすることは惡いと我々皆が知つてゐると云ふことを暗默の理解のうちに持つてゐたからではないのか。また、將來の社會はもつと贅澤な便利なものでなくてはならないといふ君の說にも僕は決して反對はしない。凡ての人間が愉快な氣持の好い生活をすることができる社會で自

分だけ不快に窮乏した生活をする者は、無名の徒か野心家だ。自分といふものを民衆の眼のつくところに置かなくてはゐられぬ人間どもだ。しかし僕は現在のことをいふのだ。現在多數の無産階級のことは餘り抽象的になるから止す。けれどももつと手近く親しい同志の間でも喰ふや喰はずの生活をしてゐるものはいくらもあるんだ。そこに持つて來て自動車をのり廻して見せたり毛皮の外套を見せびらかされたりするんでは、ブルジョアの贅澤に見て見ぬ振りをしてゐた奴等でも妙な羨ましい氣持になつてコソ〳〵と……』

『おい、おい、內海君、個人的にわたることは避けて貰ひたいな。』

畫家の安井が、集會が險惡なものに外れさうなのを恐れてそれを阻止しやうとして口を入れた。然し安井のその阻止は、却つて今迄內海の云ふところを一般論としてウツカリ聞いてゐた人々の注意をよび起す不思議な結果を招いて了つた。彼等の眼は云ひ合せたやうに一度に有松の新らしい洋服の胸に燦々と光る金鎖の上に集められた。

有松はこれを感じた。それを感ずると同時に彼の顏には毒々しいまでに冷かな憎惡と自分の表情とが浮び出た。眼は光り唇は引つれて、一瞬彼は殆ど醜いまでにその驕慢に自分を入れてゐた。我の強い彼が、極度にその誇を傷けられてゐることを人々は感じた。

然し正面に背をむけ、發言する時だけ僅かに橫顏をその方に向けてゐる內海には、この全體の空氣の險惡さは何の影響も起さなかつた。

二

『まあ安井君、止めないで置いてくれ給へ。どうせ吐きかけた毒氣は吐き出して了はなくては身がたすからないし、聞

く方でもさうだらう。僕は現在のやうに不公平な多くの人が苦しんでゐる社會にゐて、ブルジョアどもが得意になつてひけらかしてゐるものを一緒になつて尊重することは、主義者がブルジョアの社會に對して降參したことを意味すると考へる。主義者たちが自分達がすることを極くあはれな程度で――時計一つとか一枚の毛皮の外套だとか罌粟粒ほどのダイヤとか――彼等がやつてゐることを最少限度で眞似してゐるのを見た時に、奴等は何といはう。きつと、主義者でも金さへあると己達のすることをするのだ。奴等はたゞ金がほしいのだ、金の欲しさに面倒なことを云つてるんだ。奴等を己達の位置に置いたら奴等も己達と同じことをするのだ。――奴等はかう云つて安心して自分達の位置をほこるに違ひないのだ。僕は奴等に持つてゐるもの、多寡で人間としての値打をはかられたくないのだ。人間としての理想を持つてゐるかゐないかで奴等と自分達とを區別して貰ひたいんだ。』

しかし内海がかう云ひ切る前に、有松の怒はもう頂點に達してゐた。その淺黑い顏は火のやうに赤く、握つた拳はブル／＼と慄へてゐた。彼は何かを云はうとしてゐるのであつたが、はげしく怒ると舌端に自由を失ふことは彼の一の特殊性になつてゐた。

『バ、馬鹿ツ！』

辛うじて最初の一語が彼の唇をもれたのは、内海が前にも後にもまれな雄辯を振ふ爲めのばしてゐた身體をもとに返した刹那であつた。

『バ、馬鹿！　貴樣はもう少し取柄のある人間かと思つてゐたら、な、生意氣になつて了まやがつた。それは一體誰に向つていふことなんだ！』

『僕は君に向つて云つてゐるんだといふことは、君にも分つてゐると思ふ。』

内海は人々の豫期に反して案外冷靜にキッパリと云つてのけた。

『僕は、我々同志の會合でこそ自分達の信ずるところ思ふところをアケスケに語り合つて、お互ひの過失も缺點もたゞして行けると思つてゐたんだ。』

『馬鹿！　最初から惡意をもつて傷けやうとする者に、本氣に對手になれると思ふか、馬鹿！』

同志の前にその誇を全く傷けられて、有松は平素にも似げなくその好んで粧ふ豪膽と彈力性とを全く失つて別人のやうに見へた。それに較べて平生激し易く爭ふ時に脱線し易い内海が却つて冷靜で最後迄一歩高くゐたことを泉は不思議な僥倖として何時迄も記憶してゐた。

『或はそれが眞個かも知れない。僕は以前君に對して持つてゐた信頼も尊敬も失つて了つたんだ。さう聞くと君は定めて不愉快に思ふだらうが、僕には不愉快以上のことなんだ。僕はそれを考へると苦しくなつて、爆烈彈でもかゝへて十二階の上あたりから飛んだらさぞ好い氣持だらうと思ふ位なんだ。』

『なんといふ冒瀆だ！』

内海の、獨語とも聞かるし最後の述懐がその唇をもれた時、焦々とした調子でから呼んだ者があつた。寺井の近くに座を占めてゐる蟋蟀のやうにやせて長い學生が叫んだのであつた。

『先輩であり我々の盟主である有松さんに向つて失敬な！』

しかしこれは彼が屬してゐる一團が今云はうとするところを叫んだものであつた。その證據には一度口火が切られるとその一團の憤怒は綜りもなく湧出するものゝやうに、内海の上にそゝがれたのであつた。

二

『スカツプ! 裏切り者!』

『つまみ出して了へ!』

『なぐれ、なぐれ!』

盟主である有松に對する忠誠と主義に對する情熱とをその憤怒の程度によつて示さうとするやうに彼等は競うてから聲をしぼるのであつた。彼等はまた偶然に、自分達が主義上にどんな位置にあるかといふことを集會にみせる機會を與へられたことをよろこんでゐるやうに見へた。そして彼等の興奮がその儘阻止されるところがなければ、數を恃んだ彼等は必ず內海に手を觸れたゞらうし、そしてそこに可なりに危險な、前後を顧慮するところのない亂鬪さへも起つたことであつたらう!

しかし、泉が突然立上つた。

『止し給へ、諸君! 諸君が一人の內海をなぐつて見ても、諸君が勝つたことには決してならない。また內海はそのいふことはよし入れられなくても、彼は彼相當にいふべき理由をもつてゐるんだ。諸君は彼の發言の自由を奪ふことはできない!』

かうした會合で言葉を發する時には、必ず何人をも沈默させる力をもつ泉の一言は、學生達に可なりな強さをもつて響いた筈であつた。彼等は顏を見合はせてこの横合から投げ入れられた抑止の前に口を閉ぢた、

『さうだ內海君、こゝでは君のいふことに素直に耳を傾けるやうなそんなナイーブな情熱をもつた人はこの集會を代表

じてはゐないんだ。こゝは勢力を得やうとする欲求と、[illegible]一部でもその勢力の恩惠を得やうと焦るものゝ追從とが手をとり合つてゐる舞踏場だ。君はこゝには長くゐる必要はないと僕は思ふ。君は君をまつてゐる友人のところに行き給へ。』

末山がさとすやうにかう云ふと、内海は悄然として立ち上つた。

『では又逢はあ！』

彼は側にハンチングを探ると型を直して頭の上に宛がひ乍ら、眼の下に見上ぐる親しい顏を見廻して顎を引いた。

『あゝ、また！』

勞働者達は一樣にかう挨拶をかへた。彼等の顏には彼等でなくては說明することのできない深い羞恥の影があつた。

内海が消然と引上げて行く足音が戶外に消へるまで、何人も聲は出さなかつた。有松は再び平靜を粧ふと同時に、その顏には前よりも一層の惡意と毒心とが深められてゐた。

『佐藤君！』

突如として末山によつて不愉快な沈默が破られた。よびかけられた佐藤は依然として最初からの平靜と無關心とを持ちつゞけ、默々として巢卷の烟を吐いてゐた。末山の聲には親しみの深いなつかしい友情が籠つてゐた。その聲によび立てられて、佐藤は靜かに末山の顏を見上げた。

『ナイーブな正しい情熱をもつた者はこの會を代表してゐないと今僕が云つたことは、或はその理由なしに君を羞める結果になつたかと考へる。僕は君にのみは僕が云つたことの當らなかつたことを感ずる。こゝで君に謝罪しておく。では、失敬！』

彼はかう云ふと眼の前に人の姿を見ぬものゝ落附と無頓着とをもつて、つゞいてそこを出て行つた。誰も彼を遮るも

の、妨げるものならなかつた。人々は彼の性質の激しさを恐れてゐた。

再び室内は以前の白けた靜けさに歸つて行つた。內海と末山とが歸り去つたあとの空虛が、明るい燈の下に大きく深く殘つた。闕の近くに座を占めてゐた人々が、二三人だまつて帽子をつかんで歸つて行つた。默々として會集し默々として去るのが彼等平會員の習慣ではあつたが、その夜のその場面ではそれすら弱い彼紋の一であるやうに感じられるのであつた。

二三

泉は會の始めのまゝ、釘づけにでもされたもののやうに路次に面した窓際の柱によつてゐた。彼の淋しい眼が ソコソと無言に歸つて行く勞働者の後姿を認めた時、彼は自分の爲すべきことを暗示されたやうに感じた。彼 また彼等がした通りだまつて帽子をつかんで立上つた。そして二三の親しい顏と無言の挨拶をとり交はし乍ら、出來事の多かつたその夜の會合をあとにした。

戸外は星が冴へて、冷たい西北の風が吹き過ぎてゐた。不愉快な息つまる無言の暗鬪がつゞく室內に長く喘いだ後、冷たい肌にしむ夜風はむしろ泉には心地よかつた。彼は汚物で一杯になつた頭が、奇麗に新鮮な水に洗はれて行くやうな、生々とした慰めと希望とが甦つて來ることを感じた。

市中とはいへ片邊なその邊の町並の、まして薄寒い初冬の夜更けには、人通りも極めて稀れであつた。彼が追かけるやうにしてその後につゞいて來た二人の勞働者達も、彼が靴をさがしてゐる間にいつか後影も求められぬ遠くに行つて了つてゐた。砂利を踏む彼のかたい足音のみが、路傍の石塀にコト〳〵と反響して彼の耳朶に歸つて來た。

一歩々々正しく刻む自分の足音を聞きながら歩いてゐるうちに、興奮してゐた彼の心は漸く靜かに平常の深い反省がそのまゝ彼に歸つて來た。彼はその夜極めてハツキリと今自分が全くの孤獨であることを知つたのであつた。最近數年寢食を共にし、最も深い意味で生活を共にして來た有松や井上さへ、もう彼にははかり知れない遠くの異つた環境に棲息してゐる人々であることが明かになつた。何といふ近さにある遠い隔たりであらう！　彼はかうした心の離合をいつでも頭髮一本の廣さと幾千億萬里の長さとに比較し、しかもそれが同じ里數であることを表現しやうとしてゐる印度の賢い詩人達のことを考へた。

廣い都會の渦卷の中に、彼のみたゞ一人ポツンとした影を落してゐるのであつた。彼の前にも後にも彼のやうな姿も影もなかつた、無限の曠野にとり殘されたものゝ淋しさが、ヒシ〳〵と彼の身に喰入つた。

しかし、そのうちに彼の想像をふと掠め過ぎた影があつた。刹那の幻影ではあつたが、彼はそれが誰であるかを見落さなかつた。

『さうだ。孤獨であるのは己だけではないのだ。内海にしろ末山にしろそして恐らくは闘でさへ、今夜自分達が孤獨となつてゐることを見損じた筈はない。奴等も己と同じやうに苦しんでゐるのだ。』

彼はかう考へた時、寂寥の底にあつて人間が多く不思議な歡喜と慰安とが靜かに自分を訪なうてゐることを感じた。

彼は傷ついた獸類が聲をも出さずに死の爲めにその暗い洞穴を選んで歸つて行く姿さへ、想像できるやうな感がした。

そして最後に彼の前に立つて行つた三人の姿を追想の上に思ひ浮めた時、泉はその夜の會合が意味してゐる最後の焦點に觸れたことを氣づいた。

『泉君、まつすぐにお歸り？』

薄暗い路次にヒラ〳〵とコートをひらめかす影があつた。

『おゝ、内海君！』

水のやうに清澄な瞑想に無意識に足を運んでゐた泉は、急に呼びかけられて愕然として息を止めた。然しその驚きはすぐに心からの喜悅と變つて行つた。

二三

『泉君、いよ〳〵何もかもよく分つて來た！』

泉はたゞうなづいた。

『僕は今度の君達が盛んに活動すべき時が來たのだと思ふ。君には成算があるのだらう？』

内海はそれには何とも答へないで、頭髮をかきむしり乍らそこに無言で立止つた。

『僕の頭の中がゴチヤ〳〵になつて了つて、もう何もかもよく考へられなくなつちまつたんだ。』

『しかし』

泉は絶望の底にゐる内海を叱責するやうに聲を勵して云つた、

『僕にも君が有松を憎みながらも愛を感じ、嘲罵し爭ひながらも同一の主義に生きて働いて行きたいと希望してゐた心情はよく分ると考へる。しかし、有松は今夜こそ正直にその選ぶべきものを選んだのではなかつたらうか。有松は今夜彼がこれ迄友人として選んでゐた勞働階級に宣戰した。奴が君にあびせたあの嘲罵は何だ。奴等には君だの君の階級の人だのが眞面目に考へたり主張したりすることが、生意氣に潜越に聞へるのだ。有松は平生はもう少し利口な人間

なのだ。然し今夜は歸朝後はじめてあの立派な服裝で押し出して來て、得意であると同時に内心自分で自分の弱みを氣づいてゐたところを、君に正面から切り込まれたので、有松の性質としてあゝしか出られなかつたのだ。僕は有松の爲めには心から惜しむ。君だつて、岡君だつて有志の今夜の態度は忘れないだらうし、君達の近くにゐた人々もさうだらう。僕等だつて――末山君も安井なんかも恐らく――今夜の有松の惡罵は永久に許すことはできまい。しかし僕は今夜の出來事は君等の爲めには却つてよかつたとも考へる。君が京都に去つた前後から、僕等の間には今日の分離の徴候があつたのだ只だそれがどんな形をして來るか、政略家の多い連中を相手のことだ、裏切られた諸君が却つて何の不名譽な名を被せられ裏切つた人々の裏切り行爲が立派な名前をつけられる結果になりはしないかと、それを考へる時に僕は甚しい不安をもつてその時を待つたものだ。それだのに今夜の君には隨分危險なところ迄押しやられさうであつたにも拘らず、有松の狼狽が君に手つけずの勝利を取らせて了つた。今夜知識階級と無產階級とは立派に分裂した。しかも分裂の名前は無產階級の手に落ちたのだ。そしてそれは――勞働者諸君に分裂の名前を與へたことは、それは誰でもない君の手柄だ君は君の仲間の間で新しい盟主となるべき素地を得たのだ』

『泉君――』

内海の聲は感極つてふるへてゐた。

『君のいふことはよく分つた、そして君は有松と伊丹との關係については、どんな觀察をしてゐるのです。』

内海は泉の心の底までを讀もうとするやうに、その長大な身體をまげて泉の顏に見入つた。

『僕が想像してゐたとほり、有松と〇〇との間を橋渡しをして、有松に△△を遂行させたのは伊丹さ、だから有松の今後の活動に伊丹は自然除外することと出來ない破目になつてゐると僕は思ふのだ、でなければ馬鹿ではない有松のこと

だ、今夜のやうに皆を頭から押へつけるやうな眞似をして伊丹を入れる筈がない。事情は思ひがけなくそんな事になつて來るわ、伊丹のことでは自分も何かと口を辷らしてゐた行掛りはあるので、利かぬ氣のあの男のことだ、諸君の方に何かと文句があることを假想するだけでもうたまらない氣持になつて、あんな專制的な態度に出て來たんだ。僕は今夜の會の模樣をチツと觀察してゐるうちに、有松の心情が手にとるやうに見透せたことを感じた。僕の想像は恐らく誤つてはゐないよ。』

二四

泉は自分の信ずるところを更に確かめでもするやうに、固く握りしめた拳を打ち振つた。そしてそれは内海が想像してゐるところとも決して距離ある想像ではなかつた。

『勿論小田も話にはのつてゐる？』

『勿論のことだ。小田も韮川もさ。然しこれ迄の行かゝりだつて全然捨てることはできないだらうから、疑問とするところはどの程度まで歩みよつてゐるかといふことだ。が、そんなことは他人のことだ、僕等に關係はない。しかし内海君、君は君の周圍にある諸君をどう纏めて行く積だね。』

『どう纏めると云つたつて……』

内海は泉の意味することを、あれかこれかと思ひ惑ふ風を見せた。

『あゝ、これは僕の云ひ方が惡かつたんだ。僕のいふのはかうなんだ。今日の會合で所謂無產階級に屬する諸君は、有松が今日までの自分達との友誼をすてゝ了つて、今後は智識階級の人々に擁立されてもつと表面的に華々しく運動して

行かうといふ意志をハッキリと示したことは見落しはしなかつただらう。關君や浦田君の様子を見てゐると、これは有松に對する僕の偏見がさう僕に思はせたとばかりも僕には考へられないのだ。諸君は可なりな幻滅と失望とを感じて、今日まで熱心に何の爲めに努力して來たのか自分で自分を疑ふやうな氣持がしたのではないかと僕には思へたのだ。僕がいふのはあの諸君を君はこの儘投つといて好いと考へるかどうかといふのだ。」

『……』

『關君でも浦田君でも運動の方策さへ立てるものがあれば、いくらでも働ける人なのだ。しかしこゝで一旦失望して自然と運動を遠ざかることになると、あんな働き手の能力が全く運動の爲めには利用されないことになる。僕はそれは惜しいと思ふ。そこで僕は君が立つべきは今ではないかと考へるのだ。君が今立つて、我々無産者を救ふものは我々無産者だ。智識階級は我々を利用し利益を收めうる間だけは我々に追從するが、利用できなくなるか利用できてもなほ他にそれ以上の利益を與へるものを見ると、何時でも弊履のやうに我々を捨て去るのだ。我々は節操のない利益の前には耻ぢることを知らない彼等を決して賴つてはならない。我々は自分達の力によつて自分達を救はなくてはならぬ――君が立つてから叫んで見給へ。智識階級のやり口をイヤツといふほど見せつけられその印象をまだマザ〱と殘してゐる勞働者諸君が、熱心に君のいふことに聞くのは火のやうに明かだから。又新しく運動を起すとして、自分自身を救へ！といふより以上に立派な大義名分がどこにあるのだ。勞働者を救へ、人類を救へ、社會を救へ！　これらは隨分長く云ひ古されて來た。然し勞働者を救ひ、人類を救ひ社會を救ふといふ標語には、どこか宗教的な社會政策的な匂がある。自分自身を救ふ！　――これ以上の事業が人生のどこにある。自分の爲めに自分を救ひ、自分の爲めに同類を救ひ、同じ自分の爲めに社會の全體を救ふ。個人主義的無政府主義の窮局はそこに行つてはじめて最高の意味の宗教とも社會政策

とも觸れ合ふのだ。僕はこの際こそ君が斷然と立つて仕事にかゝる時だと思ふ。』

二五

『と云ふと、君は最前僕が君に話してゐた雜誌のことを云ふんですか。』

『さうだ。雜誌をやるといふことは知識階級の事業のやうで、今日の君は餘りゾツとしないかも知れない。しかし多數の人の力によらなくてはならない運動には、組織が必要となり組織はまた機關を必要とする。君が雜誌を足臺として徐々に手をのばして行けば、運動は案外廣い範圍に及んで行きはしないかと僕は思ふ。雜誌運動といへばこれまではそれのみに限つてゐたのでとかく座食者の机の上の空論のやうに考へられるが、多くの人に接するには又是非なくてはならない機關だから、末山君から君にそんな話があり、君もまた幾分でも興味をもつて考へてゐたゝすれば、決行するには今が一番好い時期ではないであらうか。何れ今夜のことは、すぐ一般に知れるだらう。さうすれば君が黨中に黨を立てゝ反逆した者でないといふことは凡ての人に知れ渡ると同時に、君がよつて立たうとする大義名分は何人にも認容されると思ふ。君は勞せずに多くを收める結果となり、成功することに疑ひの餘地がない。どうだ、それでもまだ君は躊躇してゐるのか。君はそれほどに有松の名聲が怖しいのか。僕は君はもう少し勇氣をもつた人だと考へてゐた。』

泉は、この人のどこにこの眞新しい情熱がかくされてゐるのだらうかと内海でなくとも聞く者があれば怪しまずには居られぬ感激をもつて語つてゐた。彼は始めて得た戀人に語る若い男の熱情に似たものをもつて内海を説いてゐた。そしてそれに對して内海がいつ迄も沈默をもつて答へてゐるのにヂリ〳〵として、もどかしさにたへぬやうに肩をゆすぶつた。しかしその瞬間に、内海は夢からさめたやうに兩眼を輝して泉を見上げた。

『よく分つた泉君。有りがたう。僕自身考へてゐないでもなかつたが、しかし君に云はれて尙ほハツキリと自分の立場が分つた氣がする。長いいやな夢を今日まで見つゞけてゐたのだ。自分の力で何もかもしやうと思へば、他人を憎むことも惡口することとも入らなかつたんだ。僕はやる、きつと大いにやる。やりさへすれば僕は成功することは間違ひないと感ずる。この上とも君は僕の後見人になつて援助して下さい。賴む。』

內海はかう云ふと感極つて泉の手をとつて兩手に强くそれを握つた。

『承知した、僕の手にできる事はどの程度のことか君も知つてゐるだらう。僕はよろこんでそれを全部君に提供する。小さな雜誌なら、他に少し君の方で奔走したら、どうにか出して行けるだらう。二三日休息をとつてよく心を落つけてその上で徐ろに今後のことを計畫したまへ。』

彼が一緖にと誘ふのを拒絕して、染井の方にあるといふその家を指してトボ〳〵と歸つて行く內海に再會を約して、彼は一人本鄕の通りを步いて行つた。

彼は急に何かゞひどく愉快であつた。昨日まで——いやいや今しがたまで憂鬱に物淋しく暗い絕望的な氣分に苦しめられてゐたことが、今の彼には噓のやうな氣持さへするのであつた。彼には世の中がもう一度希望と愉樂とにみち、生きた働き甲斐のあるところに見へて來た。

彼の足は、その通りの端れに一寸した橫町にあるバアの前迄來た時に止つた。そしてそこのうすよごれのしたカーテンをくゞつて室內に彼の疲れた身體を入れたのであつた。

それは安井がよく來るバアであつた。その癖に仕事場と取引とを持つてゐる安井が、仕事着のポケットに小錢をさぐり乍ら跛足を引いて仲間の先頭に立つてそこのカーテンをくゞることは珍しいことではなかつた。泉は性來酒を好まなかつたが、それでも仕事場に安井と逢つてゐて他の仲間と落合ひ、そこまで連れ出されたことも決して三度や五度ではなかつた。

『電氣ブラン！』

彼はウエトレスが注文を聞きに來ると、傲然としてから云つた。人生の半ば以上を疾くに生きて――彼は四十になつてゐた――それでも强烈な飲物には一度も進んで觸れたことのない彼であつたが、今夜は何となしにその刺戟をうけなくては無事に過せないほどの氣分になつてゐた。それほどにその夜の彼の感激は强く、その望みは深く且つ大きかつた。彼はその感激に相應する刺戟を身に與へ、幸福に輝く未來の幻影を實感によび起したく考へた。そしてその目的の爲めに飲酒を選び、さうして安井の馴染であるバアを選んだものであつた。

强烈なブランデーがその夜は彼の唇に極めて滑かに、慰める力をもつてのつて來た。生涯戀の甘さを知らず枯木のやうに生きて來た彼は、よそ事にのみ聞いてゐる戀の感觸を極めて不確かに想像乍ら、燒肉の片らを楊子の先にのせつゝその一杯を譯もなく乾して了つた。

『お代り！』

彼はポケットに銀貨を數へ乍ら再びから叫んだ。

彼が二杯目を傾了つてあとにビールをよんだ時、ウヱトレスは聞き違へて同じ酒を運んで來た。

『あらさう、だつてお代りと聞へたんですもの。』

十六七の小柄の女給は、白いエプロンの端をつまぐり乍ら、父親にでも甘へるやうに上眼で泉を見上げ、鼻をならしてものをいつた。

『まあ好い、君の健康を祝してもう一杯大にのもう。』

泉は自分で自分を制御することのできない愉快な氣分になつて、コップを高くあげるとグッと一口勢よくのんだ。

『ほんとだわ、大いにおのみなさいよ。こんな苦勞な世の中に暮してゐては、醉へる人が醉はないのは嘘だわよ。』

『苦勞な世の中？　これは面白い。すると何だね、君にも苦勞はあるのだね。』

『まあ、あなたはいやな人！　苦勞がなくて何でこんなところに勤めますか。戲談云つてはいやよ。』

『さうか、君にも苦勞があつてこゝに來てゐるのか。親が病氣とでも云ふのか、男に金が自由にできないとでもいふのか。何にしてもその若さで苦勞の爲めに世の中を暗く見てゐるのは氣の毒だな。』

『仕方ないわ、生れ合せが惡い人ですもの。でも男の方は好いのね、同じ苦勞をしてもかうしてお酒を上るとその時だけでも愉快で入らつしやるから。私達はつまらないわ、皆さんの愉快を見るだけで、チッとも自分の身にはつかないんですもの。まあ、男の權利だと思つて、たく山上つてお醉ひなさることだわよ。』

『さうだ、君はよく大きな事實を知つてゐる。人生は醉はなくては嘘だ。酒に醉ひ女に醉ひ、希望に醉ひ、主義に醉ひ終ひには人生そのものに醉ふのだ。この夢、この陶醉のうちがほんとの人生なのだ。あの醉ふことを知らない、コチコチとした人間が幅を利かしてゐる世界は、咀ふべき虛僞の世界だ。』

彼はかう云つて來たが、フト有松が一滴の酒も口にすることができないことを思ひ起して、急に大きな聲をあげて笑つた。

二七

泉の醉つた頭腦には、今凡てのものが混雜し錯綜してゐて少しもとり止めがなかつた。彼の心は今始めも終りもない思念の斷片が、喜劇茶番の踊のやうに現はれては消へ、消へては現はれる舞臺のやうであつた。

『何を云つていらつしやるの。あなたもうスツカリ醉つて入らつしやるのね。』

凡ての事が朦朧とした現實の中に、小さな愛らしい一の顏が彼の眼の前に浮いてゐた。凡てが――つい今しがた迄を含む過去の凡てが、遠くの彼自身とは全くかゝはりのない世界の出來事のやうに不確實に定まりなく、動搖するのであつた。

『あなた、ずい分お醉ひなすつたのね。餘り御酒は上らない方なんでせう。でも、どうしてまあこんなに上つたんですよ。』

つゞいて彼は小刻みに急いで遠くに去る足音を聞いた。それは無限に――無限の遠くに去つて彼が再び聞く望みを全く捨て去つたその瞬間に、また小急ぎに規則正しく歸つて來た。そして彼の上に來た時にピタツとそこに止つた。と思ふと、再びよく聞き慣れたやさしい女の聲が間近く聞へて來た。

『さあ、お冷水ですよ。お冷水を召し上れな。すぐと氣分がよくなりますから。』

彼は冷たい容器が唇にふれるのを感ずると、口を開いて貪るやうに一滴もあまさずに呑んで了つた。

不圖、彼は眼を見開いた。と、彼の眼前には彼がこれまで少しも氣づかなかつた不思議な世界が開けてゐることを發見した。區切りも何にもない廣いガランとした一室があつて、そこに彼が幻影にのみ夢想する一の新しい明るい世界が實在の姿に現はれてゐた。彼は人々の騷がしい話聲も、亂れがましい事物の響も少しも聞かなかつた。彼の眼前にある

人々は、老人も青年も貧者も富者もなく、凡てが朦朧として同じ形體に蠢動する生物であつた。彼は彼等の全體を包んで彼等の全體をつないでゐる細い糸のやうなものを見るやうな氣さへした。この細い糸は力と彈性とをもつてゐて、彼の眼にすら止らぬ位に迅速に機敏に立働いで、その使命を全うしやうとあせるものゝやうであつた。

その糸が、細かく神經質的に動く狀態を茫然と見守つてゐる時に、彼の頭腦を冷たく水のやうに流れ通る一の想念があつた。

『僕達は今一つのものであるのだ！』

それは、强いて形を與へればこんな言葉でも現はせるより外はない想念であつた。それを考へてゐるとその矛盾、その不自然が急に可笑しく際限なく滑稽に見へて來て、彼はカラ〳〵と大きな聲をあげて笑ひ出して了つた。そしてよろめき乍ら立ち上ると、壁につかまつて一つの腰臺の上に土足のまゝ突立つた。

『諸君！』

彼はかう叫んだが、しかし自分乍ら自分の聲に驚いて眼を見はつた。

彼はまた、彼の眼の前に幻影が忽に忙しく盛んに身體をうごかしてゐる樣子を認めた。

『醉つたんだ。』

『何でも主義者らしい樣子だぜ。何か云はうとしてゐるんだ。それでゐて舌が引つれて云へないんだ。』

『無理はないよ、あの身體に電氣を三つやつたんだ。』

『無茶だね。』

彼はどこか遠くの方で、獨語してゐる自分の聲を聞いた氣でそこに立はだかつてゐた。

二八

『諸君！』

彼がかう再び叫んだ時、彼はそれに答へてゐるものがあることを知つて、慌てゝ室内を見廻した。

『やあ、醉はらいの山羊將君！』

『……萬歳、萬歳！』

『やり給へ君、謹聽！　謹聽！』

さう叫ぶ聲がそこゝに聞へた。彼は全身の神經を一緒に集めてその聲のする方に眼を從はせやうとしたが、しかし彼の筋肉は彼に從はなかつた。するうちに得意と歡喜の頂上に達して、彼は自分の聲が押出されるやうにその唇をもれて行くのを感じた。

『親愛なる諸君！　少々潜越ながら、暫らくかう呼ぶことを許してもらいたい。さて、親愛なる諸君！　私は今こゝに立つて諸君に何を云はんとしてゐるものであるか、知らないのであります。しかし今こゝに來て、親愛なる諸君の上に僕等がまちのぞんでゐる幻想の世界——夢幻とのみ考へられてゐる世界が實現されてゐるのを見て、私はあの何時も苦がみ藥をのんだやうな顏をしてゐる、醉はない、否醉へない人々の例に倣つて、諸君と遂に一語をも交はすことなしに別れ去ることの不可能であることを感ずるのであります。諸君、我々は何者でありますか？　私自身は家もなく妻子もない一浮浪の徒であります。今日からして到るところの木賃宿またはバアーが、私の一時の宿であります。家庭であるのであります。今日私は憂鬱と絕望とに心をはまれ、野良犬の如くに町を步いてゐたものでありました。こゝに來るま

で、私には人生は骨折甲斐のない僞瞞にみちたものに見へ、生れ出でたことの不幸が染々と私の心を喰んでゐたのでありました。しかも一歩こゝに入るや、一杯のブランデーは、私をその憂鬱から救ひ出してくれました。愉快な諸君の顔を見、幸福にみちたその聲を聞いた時に、私はこれ迄自分が極く狹い人生に自らを閉ぢ込めてゐて、諸君の愉快な和愛の現實の世界に觸れてゐなかつたことを感じたのであります。諸君！　私は學もなく才もない一浮浪人であります。諸君のなかには或は大商店の店員がありませう。また大工場の職工諸君がありませう。少しの月給に身心をひとしく縛られてゐる官吏がありませう、かく各種各樣の生活を營んでゐる我々が、夜陰このおそい時刻にかうしてこの一堂に集るのは何が故でありませう。何等かの理由がなくてはなりません。諸君！　白日は我々に何を語ります。白日のなかに我々の面前に現はれる人生は、いかなる姿を示して居ります。かの人生は實に不公平にして不都合極まる世界であります諸君は社會が飽食暖衣する一部階級に厚く、工場の隅に於いて官衙の一小室に於いて大きな店舖の薄汚ない後室に於いて汗を流して働く諸君に對して、酬ひることの甚しく薄いことを感じられはしませんか。そして諸君はこの不公平この不平等を匡正したいといふ欲求を心に抱いて見られることはありませんか。しかし乍ら諸君はその道を知らない。その手段を知らない。そこで諸君はその苦しい現實を忘れ陶醉のうちに夢幻の幸福な世界を瞥見しやうとしてこゝに來られるのでありませう。愍れなる兄弟よ！　今日こそ僕は諸君の悲しみが何であるかを知つたといふ氣持がする。不幸と悲しみとの中にあつて諸君と私とが同一體であることを知つたといふ氣がする。諸君！　諸君の健康の爲めに擧げる僕の祝盃をうけとり給へ！』

彼はかういふと、思ひがけない余興に注意を奪はれて、他の客によばれてゐることすらも忘れてそこに立ち盡してゐる若いウエトレスがさし出すコップを受取つて、一氣に息をもつかずにのみ干した。彼の近くに腰を下ろしてゐた洋服連れの一團にはじまつて、卽ち拍手が室内の各所から一齊に起つた。

『山羊髯君、僕も君の健康の爲めに飲むよ。僕の祝盃をうけ給へ！』

『サンキユ、サンキユ！』

『××××、××！』

もうこの時には客はすべて總立ちになつて、泉がのどかに眺めてゐた幻影の中も、ザワ〳〵ゴト〳〵と物騷がしかつた。無數の酒盃と酒盃とがはるかに高い邊でかち合ひひゞく音がした。

『萬歳、萬歳！　諸君萬歳！　僕はもう立てないんだ！』

かう呟くやうにいふと、泉はいつか床の上にすべり落ちてゐた。

『大分醉つたな。』

『しかし、演說は旨かつたな。』

『主義者か知ら。』

『さうらしい。』

『でも、どこか耶蘇臭いところもあつたな。』

『しかし、快男子だよ。どうして立派な思想家だよ。』

『ふゝむ。』

泉は全身が床の上に觸れた時、無限の慰安を心に感じて、周圍で交はされるそんな低語を聞いた。

『已れの批評をしてゐるところだな。大分醉つてゐるとも云つてゐたな。』

彼はかう考へた。彼の頭は明かに事柄の姿をうつしてゐるのに、彼の手足と彼の眼とは少しも彼の意志を耳ずに、辻褄の合はない動作をくり返してゐることを考へて、彼は限りのない可笑しみを覺へた。

『自分自身の身體が出來のわるい玩具のやうに見えるなんて……』

それが際限なく面白くて、彼は大聲を擧げて笑つた。

それから何時間經つたのかまたは何日も經つたのであつたか、彼の意識には泥のやうな中斷が來て彼は何事も少しも知らなかつた。彼はたゞ自分の兩手をムズとつかむ者があることを感じた。かすかに兩眼を開いて見ると、二三の青年の顔がチラ〳〵と彼の眼の前に動いた。

『お起きなさい、君。送つて上げませう。君はどこに歸るのです。知つてゐますか！』

彼等は代る〳〵泉に尋ねてゐた。

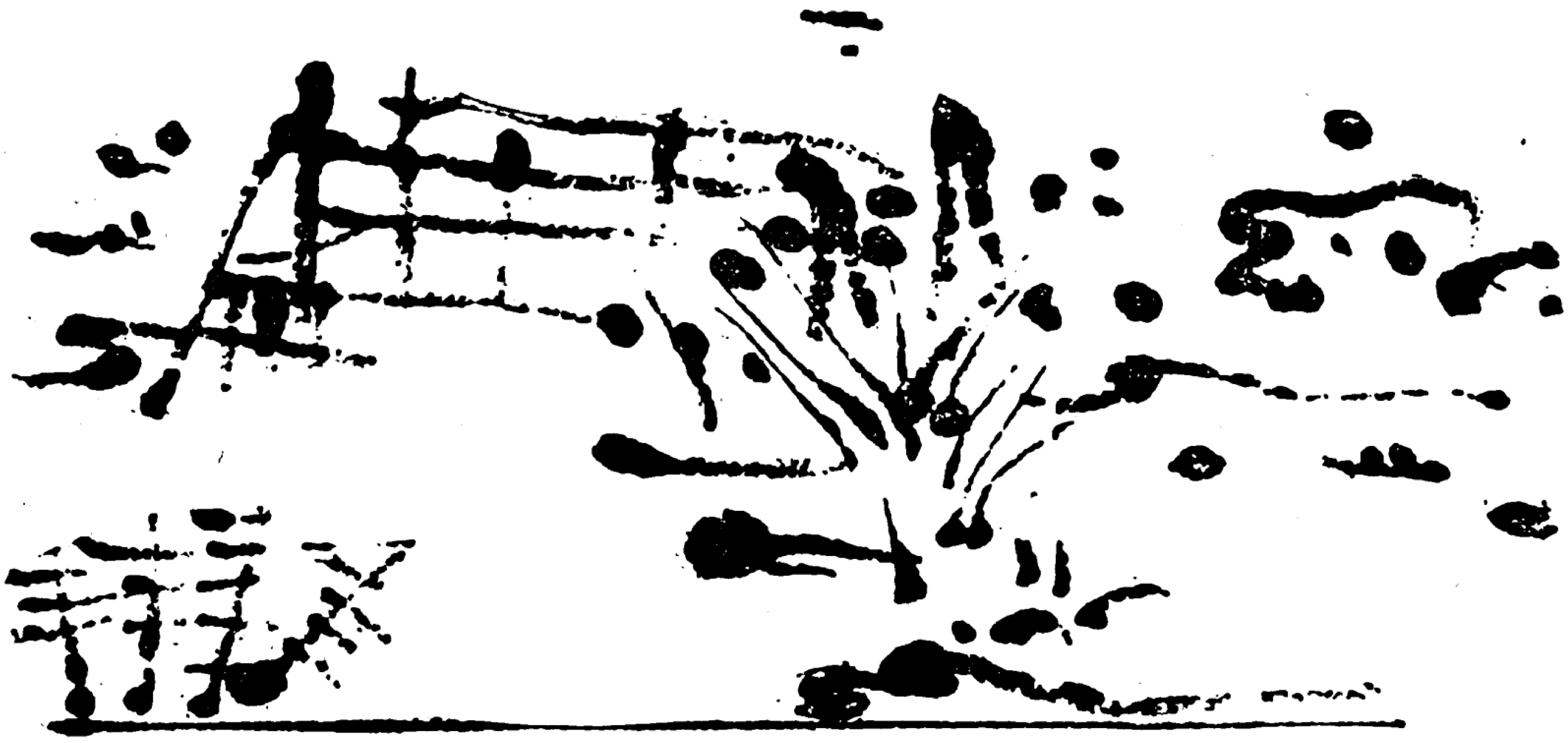
『自分の歸るところを知らない人間があるものだらうか。』

彼はかう考へて又止め度もなく可笑しくなつた。

『よろしい、よろしい。オーライー　いゝですか？　シツカリ肩につかまつてゐるんですよ。心配しなくもよろしい、大丈夫です。君の說によれば僕等は兄弟ではありませんか。兄弟が助け合ふに不思議はありません。君が歩けなくなつた時僕等が君を助けることは當然すぎることですよ。さあ、君の宿の方に歩きませう……』

翌日おそく安井の家の玄關の上り端で眼醒めた泉は、土だらけな洋服の儘敷物もなく眠つてゐた自分を見出した。起き上つて習慣的に兩手をポケツトに入れた彼は、そこからタシヤ〳〵になつた澤山の名刺を見出して、慚愧のうちに昨夜あつたことの一つ々々を思ひ起してゐた。

靜かな幸福な感觸が彼の心に甦つた。



餘震の一夜

徳田秋聲

或夜中に私が寢所について、いくらか眠つたと思ふ頃に、又人騒がせな餘震があつたとみえて、家中騒ぎだした。私は夢心地にこの地震を感じたに違ひなかつたが、どのくらゐの强さで初まつたかを、感ずるほど微細な知覺は働いてゐなかつた。私は今度の大地震を經驗する前から、時々坐つてゐる尻の下で、大地が動もするとゆら〳〵と搖いでゐるやうな氣のすることが屢であつた。勿論それは私の神經が微弱なために、自身の體の無意識な搖ぎを、さう感じたり、又は病的な中樞神經から來る輕い眩暈のやうな種類のものに過ぎないのだらうと思はれたが、しかし矢張り大地が始終動いてゐるやうな氣がしてならないのであつた。或地震學者は臆病になつた市民が、科學の智識がないために、徒らに餘震におびえて戸外へ出て寢てゐたのを非文明だと言つて嗤つてゐるが、大地が搖ぎつゞけに搖らいでゐた當時では、粗末な建物のなかなぞに、迚も安住してゐられないのも無理はなかつた。その上悠久な地球の生命について、わづか三千年やそこいらの經驗しかもたない我々の智識が、果して何程の權威を

もつことができやうか。勿論我々はそれでも結構生きて行かれるには行かれる。生の不安と恐怖が、生活の歡びの要づけとさへなつてゐるのである。

私が起きあがつた時には、妻と幼兒はまだ床の中にゐた。私はあの大震災の時家にはゐなかつた。多勢の子供たちと一緒に家を守つてゐた彼女は、十四日目にのこ〳〵歸つて來た私に、餘り好い感じをもたなかつた。一生の大難とも言ふべき運命の苦痛を偕にしなかつたことが彼女の飽足りなさであつた。彼女の弟達が、悲痛な氣持で遠くから救ひに來てくれたり、友人や近隣の人達が、女子供のうへに何彼と氣を配つてくれるにつけて、生死の巷をさまよはせられたあの大動亂の眞中に、中心となるべき主人のゐなかつた寂しさが、どのくらゐヒステリー質の彼女の心持を苛立たせたか知れなかつた。

「そのために私は却つて働けたのかも知れませんけれど。」彼女はさう言つてゐたけれど、子供達と一緒に歸りの遲いのにじれ〳〵してゐたことは私にもよく判つた。事によるともつと酷い餘震を經驗させたいくらゐに思つてゐるかも知れなかつた。

とにかく私は幼兒の春子を抱いて、緣へ飛出した。妻はさう驚きはしなかつた。と言ふよりも敏捷に働くには、彼女の體は餘りに疲れてゐた。私は板戶を繰開けた緣側の口へ集まつて來た子供を順々に降りさせてから、下駄を搜して庭へおりて行つた。そしてこぶしの大樹と柘榴の老木の間のところへ皆なを集めた。

「大きいね。」長男と二男が、棟が別になつてゐる裏の家から、隣りの三階建の下宿の建物の下をくゞつて出て來た。その同じ棟のなかに仕切をして住つてゐる二組の罹災者のT氏夫婦やS氏夫婦も、三尺ばかり切り開いてある別の出入口から這つて來た。

「まだ安心はできませんな。」T氏が笑ひながら言つた。

「この頃は夜分ばかりで、始末がわるい。」S氏も言つた。

「やつぱり枕頭に何かを纏めておかなくちや可けませんね。」妻も彼等の細君達と話してゐた。

「追々お寒くなりますと取廻しが悪くなりますからね。」

今一組の夫婦が來てゐたけれど、年が其の男と半分の餘も若い、この頃の細君――私は彼の何番目かに當る其の新らしい細君をまだ知らなかつた――が、私の家まで辛々避難して來て、庭の柘榴の木の下で産氣づいて、産後が悪いとかで、今は病院に入つてゐた。

今度の大地震では、もう其の儘ではいくらも持たないので、早く何うかしなければならない私の家も、地盤のお蔭で床の間の古壁に二筋割目が入つたのと、屋根が傷んだゞけであつた。そして旅行先から歸つてみると、こゝに永住するだけの設備をしようか、それともいつそ他へ移らうかと、絶えず不安定な氣分で迷つてゐた荒廢その物のやうな貧弱な家が、ひどく尊いものゝやうに思はれたのであつたが、それも日が經つて見ると、段々厭氣がさして來るのであつた。それに今度も何をおいても其が氣遣はれたのであつたが、東南の方角に高い三階の下宿が、裏の家の境界一杯に、私の家を見下すやうに多くの窓をもつて、聳え立つてゐるのであつた。私が自分の家を咀はしく思ふのも、一つはその爲めであつた。勿論人との交渉ではないので、單に建物其物が咀はしいのであつた。朝日を遮つてもゐたし、風の流動を淀ませてもゐた。それだけでも私の古い住居は、可也私の頭腦を憂鬱にした。木が立枯れになつたり、下枝が寂しくなつたりすることも、自然に愛着をもつてゐる私には、とかく氣になりがちであつた。勿論周圍にも年々二階家が立てこんで來て、平家建の私の家だけが穴窪のやうなどん底に埋れてゐた。地震をおそれる私は、二階屋が嫌ひであつた。まだ生

活に愛着の淡かつた若いをりの私は、地震がさほど苦にもならなかつたけれど、一度芝浦のロセツタホテルへ出て仕事をしてゐたとき、今にも大きな梁がはづれさうに、みしり／＼と無氣味な音を立てゝ、可也長い時間を搖れたことがあつて、がらんとした二階の端の一つの部屋にゐた私は廊下へ出て、大きな段梯子の降り口まで出たきり、危險を感じて降りることができずに、立悚んでゐた。その時受けた衝動が、幾分私を臆病にしたのであらうが、誰もさうであるとほり、年々責任の重くなつて來てゐることにも原因してゐるのであつた。

柘榴の木の蔭に佇んでゐた私は、倭い惨めな自分の家を眺めてみた。空のどんよりした晩で、大地もおどんでゐた。その處々に堀立小屋のやうな私の住馴れた家が、重苦しい屋根をもつて立つてゐた。最初のやうな、若しくはそれに類似した少し激しい震動が來るならば、いつでもぐしやりと地に蹈り伏しさうに思はれた。簡素な、比較的かつちりした私の氣分によくそぐふた小屋であるけれど、もうそこゝに朽腐したところや、壞れたところがあつて、側面へまはつてみると、よくもかうして寢起きがしてゐられると思ふくらゐであつた。庭にも庭らしい風情がなかつた。二十年その下に蟄してゐた三階建の、二階の中程の窓から明りがさしてゐた。目の加減でか、その高樓も私の庭の方へ、五六寸もよろけかゝつてゐるやうに見えた。

「お宅もどれで何ですね、突支棒でもしておかれたら何うですかね。」S氏は家を見上げながら私に言つた。

「さうですね。それに瓦が落ちさうで……。」私は應へた。

「この際屋根を亜鉛にするのも、一つの方法ですよ。」

實際破損のなかつた家でも、すぢかひを入れたり、支柱をしたりしてゐる家が澤山あるのであつた。

「何に支柱なら私でもできますよ。」いくらか心得のあるS氏が言つた。

「それがいゝですね。」妻も言つた。

私もその時はその氣になつたのであつたが、不時の用意などはやつぱり共れなり怠りがちのものであつた。そしてそこいらの親爺さんたちのやうに、屋根の漏るのを心配したり、板塀の腐るのを氣にしたりして、貧弱な子供たちの巣を大切にしなければならない私の生活も、ひどくぢゝむさいものだと思はれた。地震その物よりも沈滓と黴で一杯になつた生活の破壞に怖れを抱かせられるやうになつた。私の固定生活を咀はずにはゐられない。

「お茶でも飲みませう。」

そのまゝ別れるのが寂しかつたので、私は皆なをさそつて茶の室へ入つて來た。老人がお茶をいれた。妻が茶棚のブリキ鑵から鹽煎餅を取出し、饅頭の菓子器を出して、皆なの前においた。

私はまたいつも苦勞になつてゐる住居のことについて話した。それを話したところで、別に二人に好い思案があらうとは思へなかつたけれど、折が折なので、やつぱり言はずにはゐられなかつた。私は近頃になつて、鬱陶しいこの古家の改築に見切りをつけて、どこか適當な場所へ移つても可いと思つて、遠い郊外に地面を卜しておいたのであつたが、その負擔は今後幾年かのあひだの重荷であつた。妻はさう云ふ方法を取ることに不滿であつた。私は年齡と逆比例に自身の氣持を積極的にするために、わざとさうしようとしたのであつたけれども、今が今そこへ移ることは、私の經濟が許さなかつたし、ひどい不便を忍ばなければならなかつた。それにさうした懸離れた寂しい場所に不似合な彼女の氣分をも考へない譯に行かなかつた。寂しい田舍道や、上り下りの臆劫な郊外電車や、森や田圃は彼女の性に合はなかつ

た。居なじんだ町を離れ、愛兒の永眠についた家を見棄てることは、哀れな生活と別れることとであつた。私自身のなかにも、年ごとに不決斷と無精の蟲が巣くつてゐた。そして郊外に住むことを思ふと、古い町が懷かしくなつたり、こゝに落着かうとすると、また心が浮ついた。幼年の頃から家らしい家に安定することのできなかつた私の一つの放浪性だとも思はれたが、本質的に決定的になれない私の氣持が、餘儀ないところに落着かせられるまでは、いつも私の態度を浮動的なものにしてゐた。勿論漠然とした大きな輪廓を描いて、私の意志は守られて來た。若し適切な言葉で言現はすならば、私の生活はあつちこつちへ偏倚し、迷亂しつゝも、いつも私自身の中庸に落着いてゐるのかも知れなかつた。

「あの三階——それはあの人達とは親しくしてゐるんですから、そんな事はいへないけれど、旅先で色んな勝手な想像を描いてあれが倒れてくれゝば、私の家も潰れても可いと思つてゐたんだけれど。」私は笑ひながら言つた。

「尤も今度は駄目だが、保險が取れゝば、お宅なぞはつぶれてくれた方が兩得でしたね。私達の行派はなくなるけれどその時はその時で。」法律家のT氏も言つた。

「こんな家を買はなけあ可かつたんだ。」一番年長の子供が側から皮肉を言つた。

「でもこの家があつたから、かうして居られるんぢやありませんか。有難いぢやないの。」妻が喙を出して、「家を追立て(おひた)られたときのことを思つてごらんなさい。厭なもんだわ。」

「けれどあの時一と思ひに引越してゐれば、こんなにこゝに執着しなくてもよかつたぢやないか。」その子供がまた言つた。

「それだつて皆なお前達のためぢやないか。」

「何におれたちは、こんなところに居やしない。メキシコへでもブラチルへでも行くからね。こんな貧弱な日本なんか

……」胡座をかいてゐた二男の中學生が笑ひながら躰をゆすつた。

「こんな危險な國でも、海外へ移すと言ふこともできないんだからね。」

「それあさうさ。遷都論なんかも、やはりさういふ處から來てゐるのさ。德川の政策さへなかつたら、日本はもつと

〈海外へ發展してゐたらうからね。」

「西の方へ首都を遷すのもいゝかも知れんね。」

「それもちよつと困難でね。」

「僕等の家が引越せないやうなもんでね。」年長の子供が附加へた。

「今からうやつてゐても、いつまで皆なが一つに纏まつてゐられるか。」妻が心細げに呟いた。

「さう思ふと子供もつまりませんね。」

「だつて、それあ仕方がないぢやないか。」

「千代子や愛子なんかも、遠方の人には片づけたくないものですね。男は仕方がないとしても、女の子だけはね。」妻が

先きの先きを案じるやうに言つた。

「お前がさう思つても、子供は親の傍にばかりはゐないんだよ。また居るやうぢや困るんだよ。」

「まあ可いさ。みつ子さんが死んでよかつたかも知れないしね。みんなが又何ういふ目に逢ふか知れないんだから。」

「だから何時までも一緒にゐたいぢやないか。」

「さう云ふことばかり考へてゐたんぢや仕樣がないもの。地震やペツペレンのためにのみ生活してゐられないやうなもんでね。」年長の子供が言つた。

「あの井村のおばあさんでしたか、岩崎の避難場からお宅へおつれになつて、ひどく威張つてゐたお婆さん、あの年で荷物は何一つ燒かなかつたんですからな。さう心配したもんでもないですよ。」樂天家のT氏が笑つて、「いや、あのお婆さんには驚きましたね。」

「私も腹がたちましたわ。」妻も言つた。

孤獨な井村のお婆さんは、長いあひだ東京で貧しい間借り生活をしてゐて、寂しいをり／＼には、時々私のところへやつて來てゐた。彼女は私の幼いときからの親友である竹内の厄介ものであつた。竹内は私たちの田舍で、高等學校時代そのお婆さんの家に下宿してゐた。そして何時とはなし學資などの補助を受けるくらゐ彼女の世話になつてゐた。その頃四十ばかりであつた彼女は、まだみづ／＼した肉體をもつてゐた。そして又いつとはなし若い竹内が誘惑されたのであつた。しかし彼女の生活もさう樂ではなかつた。東京では二人で酸苦を嘗めた。そしてそれが井村が世のなかへ出て、結婚するやうになつてから、彼の家庭と社會生活とに、思ひも及ばない負擔と障碍となつて、現在の生活にまで祟ることになつたのであつた。

地方にゐる竹内とは別々に、東京で佗しくつゞまやかに暮してゐる彼女は、もう七十を三つも越してゐて、邪慳の角は好い加減折れてゐたけれど、刺はまだ全く取れてゐなかつた。そして折にふれてそれが出た。私の妻は、しかし不斷は物わかりの好い彼女を、素直にしてさへゐればいつでも好感を以つて迎へてゐた。好きな酒などつけることもあつた。お婆さんはそのお仕着のお神酒がまはると、好い機嫌になつて唄など口吟みながら、笑つたり泣いたりして嬉しがるのであつたが、何うかすると姑風を吹かしなどして、妻の氣色を惡くするのであつた。

震災中故郷の姉の家にゐた私が、妻や子供たちは勿論、色々の人の身のうへに、色々の場合を想像してゐたなかには

この老婆もあつたことは勿論であつた。彼女は下町の方で、或る行詰つた狭い路次のなかに、二階の一室を借りてゐたので、どんなに負最目に見ても、地震は免れたところで、火災に遭つてゐることは確かであつた。公園の池が其の近くにあつた。そして其の池が死體に埋れてゐると云ふことが避難者によつて、間接に私の耳にも入つてゐた。私は泥深い其の水に浮いてゐる彼女の哀れな死體を想像せずにはゐられなかつた。私は餘り好い氣持がしなかつたけれど、漸く竹内が救はれたやうな氣がなくもなかつた。

或る日私は茶の室にぼんやり獨りゐた。私の家も家族も無事だと云ふ簡短な知らせを受取つてから、それが三日目の八日の日であつた。すると其の時室は内部からのみ往來がよく見えるやうになつてゐる簾格子の外近よつて來る一人のお婆さんがあつた。それが彼女であつた。私は吃驚して入口へ飛出して行つた。

「よく來たね。」私が言ふと、彼女も私を見上げた目に涙を浮べて、

「吉村さ……ん。」とおろ〳〵聲になつて、

「ひどい目に會つて來た、吉村さん、かういふ時こそ人の心がわかる。」

「まあおあがんなさい。よく來られたね。」私は彼女を上へあげた。

この秋には彼女も長く住みなれた東京を引揚げて、田舎へ歸らうとしてゐたほど、死に近づきつゝある身世の寂寞を感じてゐた。地震はたゞそれを早めたに過ぎないのであつた。彼女は半夜を大宮で、野天で明かした。そして死物狂ひになつて、しかし老人の特權を可也我武者羅に主張して、威張りくさつて、人を押退け〳〵して遣つて來た。

「奥さんもお子達が多勢だからね、それあ無理もなからうけれど、吉村さん、こんな時人の心がわかる。奥さんはお米があるのか無いのか、それは知らん。又荷物も出さにやならんけれど、あんなに狼狽てなくともよからうと思つてね。」

私にはその場の光景と二人の心理的交錯がすぐ判つた。

「まあいゝさ。お婆さんは荷物は。」私は笑つてゐた。

「私はお蔭で三度行つて殘らず出しましたよ、奥さんに預けては來たけれど……。」彼女はさう言つてひどく其の荷物が氣になるらしかつた。

「不忍の池にも人死があつたつて？」

「不忍の池！　なあに、そんなことは大嘘。蓮が青々してゐますよ。」

私はその時彼女の見聞によつて、初めて本統に安心することができた。氣分の張詰めた子供の手紙も受取つた。

「えらい婆さんだね。」私は後で姉に其の話をして聞かせながら驚嘆したのであつた。

今T氏の口から出たのは、その老婆のことであつた。

「何しろ近所の人を頼んで荷物をそつくり出さしたんですからね。私も氣にかゝつたから、子供をやつて搜させたんですけれど、あのお婆さん何うも面白くない。餘り勝手が強いんですもの。」さう言ふ妻はしかし餘り好い氣持もしないのであつた。

「あのお婆さん、長煙官で煙草なぞふかして、大威張りでゐましたな。」S氏も言つた。

「私たちは御飯もたべず、三日も四日も寢もしないで、立詰めで働いてゐるのに、あの婆さんといへばづゐぶん無遠慮だつたんですよ。年寄りなんか自分の親でも。場合によつては介意つてゐられない時なんですもの。」

「とにかく甲斐性ものさ。」

「えゝ、それあ何うしたつてあんな強いお婆さんですから。荷物は取扱ひがはじまり次第荷造りをして、出さうと思つ

てゐます。その事をくれ〲も賴んでいきましたから。さぞ不自由をしてゐることでせう。私もあれまで同情してゐて、こゝのところであんな風で歸つたんですから。」

「まあいゝさ。」

「あの場合のことはお互ひに仕方がないね。人間は極度に好いところも出したが、勝手にもなつたから。」年長の子供が側から言つた。

「それよりもあのお婆さん厭なことを一つ言つたんです。」妻はまた言出した。

「田舍で吉村さんの親類に、奧さんの評判がわるくても、決して私がしやべつたと思つてはならんよつて、そんなことを言ふんですもの。だから私は別に惡く言はれるやうなことはしてゐない積りですと言つてやりましたわ。」

「いや、みんな分つてゐる。」

「え、それにあのお婆さんも、威張るには威張りますけれど、さうまたべちやくちやと人の惡口を言ふつていふ方ぢやありませんわ。」

「まあ今度は年寄は助かつて、若いものが餘計やられてゐますね。」T氏が言つた。

「いや、その年寄でどのくらゐ苦勞した人があるか知れませんね。」

「まさか年寄をおいて行かれはせず、どうしても若いものが働くことになりますからね。あんな豪い婆さんばかりならいゝが……。」T氏が言つた。

「僕も田舍で、それを一番心配したんだ。年寄りにかゝつて、子供の誰かゞ犧牲になりはしなかつたかと……。」

「今度火事になると、お婆さんなんか置いていくぞ。」上の男が傍に居睡りをはじめてゐる老婆を振返つた。

「家のお婆さんなぞ、迚もあのお婆さんの眞似はできませんね。今に止むづら、なんてつて、腰をすゑてゐるんですもの。漸と叱りつけるやうにして、外へ連出したんですよ。あの廣場まで歩かせるのは大變な仕事ですからね。」

「僕も家のお婆さんが、事によると獨り生き殘つて、つまり僕と二人きりになつた場合がないとも限らないと思つて、づゐぶん變な氣持だつた。」私は皮肉に笑つた。

お婆さんは善良な老人ではあつたけれど、しかし又井村の老婆と全く違つた意味で、づゐぶん厄介な年寄りでもあつた。彼女は年から年中休みなしに何かしら働いてゐた。晝でも夜でも坐ればきつと居睡りをするけれど、眠りながらも夜は一時までも二時までゞも針仕事につかまつた。勿論これと言つて、何一つ纏めることはできなかつたけれど、でも何かしらこと／＼遣つてゐた。そして其の丹念なことは、片の薄切れたところや、薄くなつてゐる部分を、どんなに手間がかゝつても、綴らなければ氣がすまないといふ風であつた。その品物が着物に仕立てゝ役立つか何うかは問題ではなかつた。洗濯や掃除が同じ方法で馬鹿叮嚀であつた。絣の目を、一つ／＼指端で丹念に揉むのであつた。總てがその流儀であつた。湯が舌も觸れることのできない極度の熱度に沸騰させられ、茹物がぐしよ／＼になるまで煮られたりした。

多勢の子供たちを育てるために、長いあひだ左に右私は彼女を働かせて來た。私達夫妻に小言を言はれながら、そして又其の小言に反抗しながら、不思議な彼女の流儀をつゞけてゐるうちに、背骨や腰が柳の枝でもたかねたやうに屈んで來たけれど、私には何うしても同情することのできない氣質をもつてゐた。私は長い間、心から彼女に優しい言葉をかけることのできないのに、苦しんで來た。自分自身の童蒙的な剛情を通すほか、積極的には何の障りにもならない鈍重な動物のやうな彼女ではあつたけれど、親らしい、若しくは祖母らしい心が少しも働かないのが飽足りなかつた。彼

女から逃避しようとして、私の神經はたえず苛々してゐた。そして其がまた何んなに妻を惱ませてゐるか知れないのであつた。三人は餘り幸福だとは思はれなかつた。けれど、彼女なしには妻は一日も家事を繰返しては行けなかつた。そして年々に體の衰へて行くのを見るにつけ、私の心も和らいで來た。そして今度はまた「まあよかつた」と云ふ氣がするのであつた。

近頃めつきり健康の損はれて來た妻と彼女とが、互ひに生存を尅し合つてゐるやうに私に思はれたりした。老婆は娘の病氣なぞに、餘りデリケートな同情をもつことができなかつたと同時に、妻は老母の不仕合な壽命を咀つたりした。

「誰だつて生きたいのは同じだけれど、迚も助からない場合には、ずゐぶん親が助かれる子供を逃がしたり、妻が良人のあとに殘つたりしたからね。」私はまた妙に皮肉に言ふのであつた。

「しかしそんな場合何うでせうか、誰でもそんな氣になるでせうか。」T氏がきいた。

「さあ、やつぱり人の性質ですね。私なぞ、玄米のお結びを一緒に食べなかつたことを、隨分不滿に思はれてゐるから――その癖私は玄米食を主張してゐるんだが……。」

「しかし、運命を偕にするのと逃すのと孰らが本統の愛だらうか。」T氏がきいた。

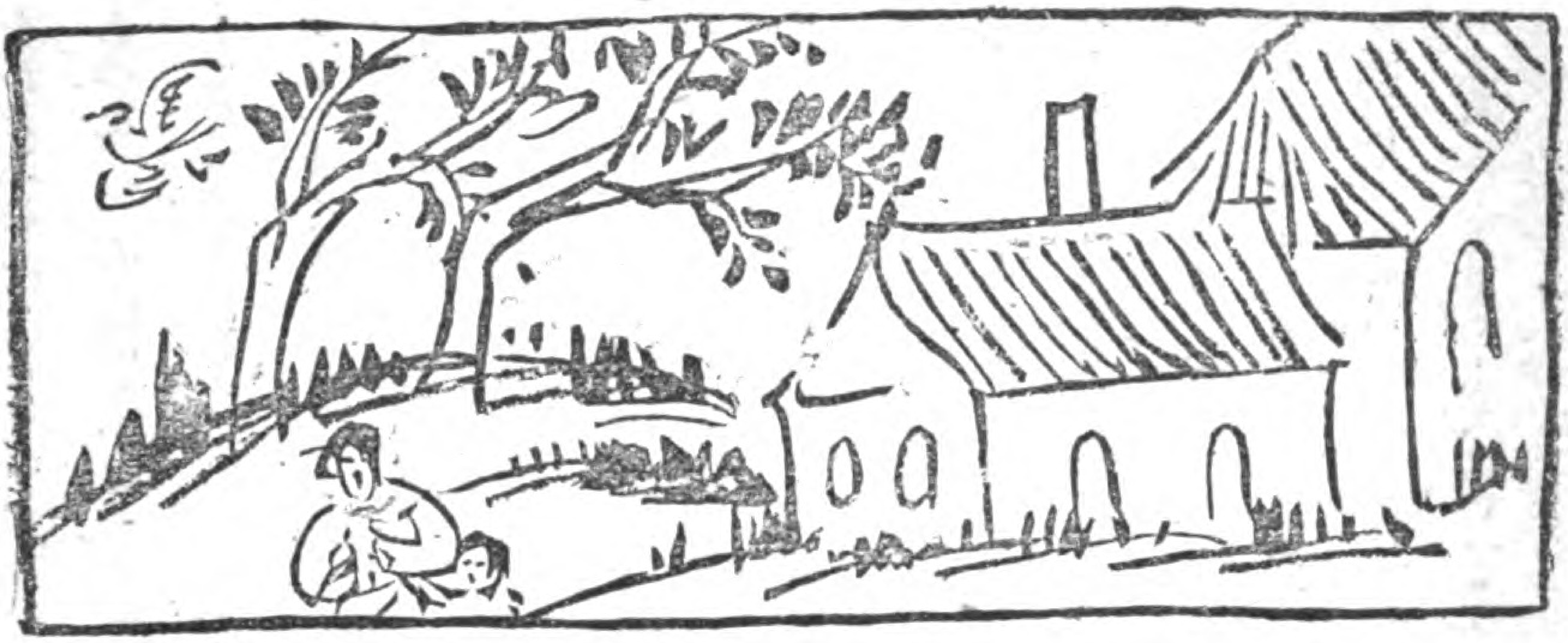
「さうさ、生殘つたものゝ方が辛い場合もあるし、生殘るのが辛い場合もあるから。」

「死ぬなら矢張り一緒ですね。だけれど、お婆さんにかゝつて死ぬのは、私だつて御免だわ。」妻は母親を振顧つた。

老母は眠さうな目をあげて、硬い手で口のはたを撫ぜながら、善良さうな微笑を浮べて、もぞ〳〵してゐた。

「大丈夫、お婆さんも助けてあげるよ。」年長の子供が口元に優しい微笑を浮べて言つた。

私はまた體に微かな搖らぎを感じた。そして電燈を見あげた。皆も目を擧げたが、何のこともなかつた。



象吉の一生

長與善郎

井東象吉は生れた時から一貫四百目もあつたさうである。あんまり大きくつてヘンな顔をしてゐるので、オギヤーと云ふと皆がいきなり顔を見あはせて笑つて了つた。こんな大きな美事な男の子が生れまれましたよ、と産褥の母親に見せると、母親は「胸がわるい」とガツカリしたやうに云つた。

おやじの名は虎吉と云つた。おやじが虎吉なら此子はどうしたつて象吉だと云ふんで象吉と名がついた。さうして「しやうきち」と讀ませる事にした。

五つ月目には皆のすゝめで赤ん坊展覧會に出されて案の定一等賞をとつた。だん〲大きくなると唐瓜のやうな頭の形がとゝのつて來て顔も變ではなくなつたが、愛嬌のある可愛い子とは云へなかつた。智慧の發達はおそかつた。しかし滅多に泣かない、手のかからなゐ、無口で、溫和しい子だつた。

學校へ行くやうになつた。一年の時にもう三年生の中位ほどは悠にあつたので、勿論級の中では圖ぬけて大きかつた。馬鹿に大きくつて、のろ〲してゐて名が象吉と云ふのだから、忽ち評判者にならざるを得なかつた。先生以外には誰も井東と

よぶ者はなく、皆「ぞう吉」「ぞう吉」とよんだ。さう云はれても自分の名は象吉と書くんだと知つてゐるので、「しやう吉」と讀むんだと辯明するでもなく、平氣で「何だい」とゆつくり答へた。

力は強くつて三年生になつた時には先生と相撲をとつて互格だつた。四年の時には先生を押し出した。算術が出來なくつて小學を卒業する時に落第した。落第しても平氣だつたが、圖體ばかりはます〳〵發育がいゝので、ます〳〵級の中で眼立つやうになつた。

そこは田舍の町であつたが、ある時學校の歸りに女生徒が亂暴なオートバイにハネ飛ばされて一寸腰が立てなくなつた。その娘はお轉婆で、よく彼を「象さん」と云つてからかつては逃げるのだつたが、その時はベソをかいた。するとその仲間の女生徒が後から來る彼に

「象吉さん。おんぶしてお上げなさいよ。貴方力が強いんぢやなくつて？」と叱るやうに云つた。彼はちよつと面喰つたらしく顏を赭くしたが、結局その娘をおんぶして十丁ほどある家までとゞけた。そしてその娘が背中の上でその友達と顏見合はせて、ペロリと舌を出してニツと笑つた事なぞは勿論氣がつかなかつた。が、それがたちまちいゝ冷やかしの種子になつた。

「象吉が女の子をおんぶした。」「女をおぶつた象助ヤイ」とからかつた。

「己やそんな氣でおぶつたんぢやないよ」と象吉は赭くなつて辯解した。

「そんな氣つてどんな氣だ。」

「女だからおぶつたんぢやないよ。」

「さうか。それぢや今日は俺をおんぶして歸つてくれな。君は利口な象さんだかな。象さんにかぎるよ。」

俺だ。俺だ。」と皆が彼の背に飛びついてのしかゝつた。すると先生がやつて來て皆をしかつて、彼をなぐさめた。「君は桃太郎だ。氣がやさしくつて力もちだ。」先生はわきを顧みて笑いながら彼の肩をたゝいた。

實際氣はやさしかつた。やさしいと云ふより「女のやう」に氣が弱かつたと云つてよからう。怪我人を見る事が出來ず、一寸した血を見ても蒼くなるほどだつた。それで喧嘩と云ふものを當てしたことがなく、見てさへゐられなかつた。誰かゞ喧嘩をしたり、人をいぢめてゐると「よし玉へよ。よし玉へよ。」と賴むやうに云つて、その腕をにぎつた。彼ににぎられると一寸ふり離せなかつた。が、決して亂暴はしない事を知つてゐるので、「よひ玉へよ。よひ玉へよ。」と彼の口眞似をしてからかふ者もあつた。

いつでも仲裁役をしてゐた。それで彼の仲裁癖を見て笑はうと云ふのでわざと喧嘩のまねをして見せる者もあつた。「オイ、象。AとKとが喧嘩してるよ。君、仲裁してやれョ。」と又わざ〳〵告げに來る者がある。すると彼は出かけて行つて「よひ玉へよ。喧嘩なんぞ。」と引き分けるのだつた。

かう云ふ事は喧嘩ばかりではなかつた。同級の者であらうと誰であらうと、泣いてゐたり、淋しさうにしてゐたりするものを見ると、彼はそこへ行つて、「どうしたの。君。え？　君。」とのぞき込むやうにして訊ねるくせがあつた。それで「慰め係り」と云ふ名をつけられた位だつた。すると又いたづら者がその癖をすぐ揶揄いの材料にして、わざと膝なぞを見せて擦つてゐたり、ふさいだまねをしたり、兩手で顏を掩つたりしてゐた。そして彼がそこへやつて來て「どうしたの。君。え？　君。」とやると、噴き出し舌を出して、「だまされた馬鹿象やい。誰が泣いてるもんか。」とはやした。

そんな時の彼の呆然とした、怨めし相な、なさけない顏つきと云つたらなかつた。そしてその後で彼は少し沈んでゐた。そしてだん〳〵彼は疑い深くなり、用心深くなつた。「オイ、象。彼奴が泣いてるよ。」なぞとまことしやかに云ふ者

があつても、「ふむ。嘘だらう。」と赭くなつて云ふやうになつた。

中學に入つてからの事、ある時人のいゝ習字の教師を學生がいじめた事があつた。その教師は到つて風采があがらず貧相なので、どの級も此「痩せ馬」と仇名のついた教師を馬鹿にして、虐待する事が殆んど習慣になつてゐた。で、象吉の級に此「痩せ馬」があらはれた時、皆は始めからどんないたづらをしてやらうかと工風をこらしあつた。

「ネエ、オイ、象。貴樣もやるんだぞ。いゝか。今日。習字の時間に。」

笹山と云ふ一人の餓鬼大將がある時彼の處へ來ておどかすやうに云つた。

象吉はその日の朝からの形勢でそれを察してゐた。それで困つた事になつたと云ふやうに早くからふさいで、一人なるべく皆から離れるやうにしてゐたのだつた。

「何を。」彼はとぼけて訊いた。

「何をつて、分つてるぢやねえか。蟇をあの池からつかまへて來るのよ。そしてあの硯の入つてゐる机の抽斗ん中へ入れとくんだ。痩せ馬の野郎、蛙と來た日にや生きてる面アねえつて云ふからな。ハツハ。野郎。這入つて來て、フツと抽斗をあける。その時の奴の面を見てやらうつて云ふんだい。ハツハツハツ? 面白えな!」

皆は幾分殘酷を意識しながらも樂しみさうに笑つた。がもう逃げる事の出來なくなつた象吉は蒼くなつた。

「よせよ。そんな事。わるいや。」

彼は漸くブツゝゝと云つた。

「後が、こはいからだらう。」皆は顏を見合はせて笑つた後で云つた。

「こはかないよ。」象吉の眼はもう血走つてゐた。「だつて……氣の毒ぢやないか。」

「やつ、此奴。涙ぐんでやがるぜ。これやおどろいた。象がベソをかいてやがらア。」

皆はクツクツと笑つた。

「一人の弱い先生を……多勢でいじめるのは……弱い者いじめだ。」

から云つた時、象吉は少しふるへてゐた。しかしこの「弱い者いぢめ」と云ふ彼の一言は一同を驚かす以上に憤慨させた。子供が大人を、しかも教師をやつけるなんと云ふ事は弱い者いじめどころか、反對に強い者いぢめで、大いに勇氣がなければ出來ない事だと彼等は思いこんでゐたからである。が、象吉のその性質から來る本能によつて、それにさうぢやない事、子供の集合は大人を泣かせ得る事、大人も子供から燐愍さるべきものである事を知つてゐた。しかし彼にはそれをハツキリ意識して表現する事が出來なかつた。で、結局自分が臆病で、教師のおべつかつかいであるためにそんな體のいゝ逃げ口上を云つて自分の卑怯をごまかすのだと云ふ風に皆に云いまくられると、實際さうなのかなと思つて了つた。自分が臆病だと云ふ事は彼自ら認めてゐたので。

しかし彼は毎日學校へ來る途中でその「痩せ馬」の家の前を通り、その氣の毒な感じのする――彼には何でも人がそんな感じに見へるくせがあつたのだが――家庭を見てゐた。その「病身らしい」細君や、小さい子供を見てゐた。「痩せ馬」が毎朝その細君から紫のめりんすにつゝむだ辨當を渡されて、生徒にいじめられる學校へ、「お父さん行つてらつしやいまし」と背中の子供に云ふやうに云つて、やさしく送り出される處を見てゐた。そんな時彼はぽかんとその前に立ちどまつて、彼獨特の、厚意にあふれるやうな、淋しくほゝ笑むやうな、ヘンな表情をしてそれを見るのだつた。のみならず、彼は又大の蛇嫌いで、嫌いな者に襲撃される事のいかに想像以上にたまらないものかと云ふ事を知つてゐた。蛇がもし自分の机の抽斗の中に入れられてゐたら……。

ぼんやり沈思默考してゐた彼は突然にすつくと走つて、教室を出て行つた。そして露骨にまつ蒼な顔をして彼が再び教室へ戻つて來た時には皆はもうちやんと彼が何をしに行つたかを知つてゐた。

「ヤイ、象！　貴樣、密告したナ！」

五六人の者がたちまち彼の處へ攻めよせた。

「……だ、だつて……」

自分の肩までもない一同を見おろしながら象吉はおど〱答へた。彼はその大きな出眼が吊し上つてゐたほどアガつてゐた。

「だつて何だ。」

「だつて、俺がよせと云ふのに君達は聞かないんだもの。」

「ヘッ！」笑はせやがると云ふやうに皆は顏を見合せた。

「賣國奴。露探奴！　運動場へ來い！」

笹山は彼の赭い耳をちぎれるほど引つ張つて叫んだ。

彼らは彼をまん中にしてワツショ〱と運動場へ出て行つた。

二三人のものが彼をコヅいたり、蹴つたりして。併し眞つ赤になつた彼が溫和しい眼つきでそつちをにらめると、「ヤーイ。象が赤くなりやがつた！」なぞと囃すのみで、進んで打つてかゝる者もなかつた。彼の偉大な體格はあまりに皆と段がちがいすぎてゐた。

しかしこの際に當然鐵拳制裁を加へるべき好箇の場合にしかもこゝ迄象吉を引つ張つて來て、只罵倒を浴びせる位で

空しく爲すところもないとあつては自分の權威にかゝはると云ふんで笹山は一案をしぼり出した。それは彼らの級にSと云ふ手くせのわるい學生がゐてよく仲間のものをぬすんだ。象吉自らも一度蟇口を盜まれた事があつた。それでもしそのSを皆の前で象吉がなぐつたら彼を臆病だと認める事だけはゆるしてやる。それがいやなら韓信の眞似をして皆の股をくぐれと云ふ案である。笹山は象吉がたとへどんな相手とでも掴み合ひの喧嘩をしたり、人を撲つたりする勇氣と本能とを全く持たない事を知つてゐた。それで圖體の大きい彼が四つん匐いになる姿を見て、皆でさんざ笑ひ者にしてやらうと考へたんである。

さう云はれた時象吉は「ふゝん」と苦笑をした。その苦笑にはむろん冷笑の氣持ちではなく、亂暴はよし玉へ。僕は溫和しいのかだら云ふ妥協を示すためだつた。しかし冷笑されたととつた笹山はなほいきりたつた。

「Sをなぐるか！」笹山はつめよせた。

「どうして。いやだ。僕は亂暴はきらいなんだ。」象吉は答へた。

「だつて貴樣だつてあの泥棒はにくいだらう。」

「僕あ別に憎くかあない。」

「憎むだけの勇氣もないんだらう。ぢや、くゞれ。さあ。」

笹山は不格好に短かい股をひろげた。そして一同に自分の後ろに同じやうにして並べと號令した。

象吉は石段に腰をかけたまゝ又ニツと笑つた。

「いやか。ぢや俺達と喧嘩をやるか。」

得意な笹山は威丈高にかういどんだ。象吉は起ち上つた。そして笹山の前に、ハチ切れ相な、ツギのあるズボンの尻

を高々とつき出して兩手をついた。さうされるとさすがに一寸薄氣味がわるかつたので、笹山はにやりとして後ろを向いた。が、それでよしておけばよかつた。象吉は全く彼の前に平つくばつて降參した形になつたのであるから。しかし象吉は匍ふやうにして頭を彼の股ぐらへ突つ込むか否や、そのまゝすつくと立ち上つて了つた。

アツと云ひながら笹山は蒼くなつた。皆も顔見合はせた。

「オイ象！　オイ象！」

笹山はじたばたしながら叫んだ。そして自分が蒼くなつた事のために眞つ赤になつた。しかしどうされるのかと云ふ恐怖のために又蒼くなつた。皆もどうなるのかと云ふやうに、しかし幾分小氣味よげに此「生意氣な」餓鬼大將を見上げた。しかし其時象吉は又輕々と靜かに笹山を下におろした。そしてにやりとした。

「ね、僕は亂暴はしない。だから之で仲直りしやう。」かう云つてるやうにその笑いは見へた。

それ以來象吉を露骨に馬鹿にする者はなくなつた。と同時に笹山の威勢も全く地におちた。翌日教室のボールドには象が笹山に似た生徒を鼻で捲き上げてゐる戯畫が描いてあつたがそれを見ても笹山は只顔を赫くして苦笑しただけで、「誰がこんなものを畫いた」と云つて呶鳴る元氣もなかつた。二ケ月たつた後笹山は退學した。象吉はしばらく平和だつた。しかし中學の最上級になつた春、つまらない事で彼も退學させられる運命になつた。

それは或る不良の少年がある女學生をねらつてゐた。その女學生を象吉も電車の中などで見て内々あこがれてゐた。その女學生が這入つて來ると、彼は大きな長い膝を行儀よくそろへて引つ込め、敬虔の念にみたされたと云つた風で、赫くなつて畏まりながら、ズボンのつぎの處を大きな手でかくしてゐた。そして奴隷が皇后の御氣嫌をとるやうなとでも云ふ表情で時々その女學生の方をにやりと見るのだつた。で、彼がその女學生を好きだと云ふ事はその不良の少年に

はぢき見てとれるのだつた。

彼はすぐ象吉はあんな面してゐて中々色氣があり、隅におけぬ奴だ、好きな女學生があるんだと云ふ事を級中に吹聽した。そして自分のその女學生へそつと送つた懸想文がその父兄から學校へ訴へられて一物議かもしかけてゐるのを探ぐると、早くも、一通の匿名の懸想文をうまく象吉の手蹟をまねて書き、象吉の内側のポケットにそつとねじ込でおいた。

勿論その不良學生の方にも手ぬかりはあつたので、彼も退學を免れる事は出來なかつたが、同時に象吉もその手紙を發見された時辯明する事が出來なかつた。

「そんな事、嘘です。僕は……」

彼は頗へなから涙ぐんだほどのぼせて校長の前で云つた。

「ぢや、君はそんな人は見た事もないと云ふんだナ。」校長は云つた。

「えゝ……見た事も……ありません。」

「嘘つけ。」不良少年はわきから口をきつた。

「君達は此手紙をどう思ふ。」

校長は彼の同級生を五六人呼びよせて訊いた。皆は彼の前からの評判と、その手蹟を肯定した。

結局校長は彼の不良行爲について幾分疑問を抱いてはゐたが、學校の體面上さう云ふ取締りにルーズであると世間から見做されては困るから、氣の毒だがと云ふので象吉にも「まア、退る事にしてくれ。後は又心配するから。」と宣告した。

象吉は泣いた。しかしどうせ彼は退學を免れられないのだつた。彼の父が長い持病で立てなくなつてから彼の家が破産してからである。

物領の兄がおまけに道樂者で借金に窮してゐた。兄は彼に一時的ではあるが、さし當り小僧に出てくれと云つた。

「はい。」

彼はさう答へて小さい行李一つ抱へると出て行つた。

正直で、のつそりしてゐる見かけによらず骨を惜まない、それに字が上手だと云ふんで早速主人夫婦に愛された。實際他の事には無器用であつたくせに字と好きな笛だけは上手だつた。支那人のやうな字を書くと云はれた。さう思つて見ると顔も體格も餘程支那人に近いと云ふんでよく「君の先祖には支那人はなかつたのかい」なぞとからかはれた。顔色がヘンに生ま黄色く、眼は大きく出で、おまけに眼と眉との間が馬鹿に距つてゐた。梯子段を降りる時はまるで危な梯子を降りる時のやうに一々後ろ向きになつて大きな體で匐ふやうに一段づゝおりる。その形がいかにも間抜けでおかしいので内儀さんは眼見への時噴き出して了つた。

そこでも慰め係りの特色を發揮した。女中だらうか、眼上の番頭だらうが、だれによらず滅入つた樣子をしてゐるとそこへ行つて、どうしたかと心配さうに樣子を訊き、「まあ〳〵、さう力を落さなくつてもね。貴方はまだ若いし、」とか何とか云つてなぐさめるのだつた。「それや氣の毒だネエ」と彼はよく八の字をよせ太息をついて云つた。

内儀さん達は首をすくめて笑つてゐた。何かわるい事があると象吉になぐさめてもらいなぞと云つた。しかし或る時番頭は少しムッとして云つた。

「おや〳〵、俺も象さんに慰められるやうになつちやつたのかナ。」と。

大晦日の晩には賑かに店の者が「かるた」會をした。象吉はまん中にはさまつて一心に前を見てゐる。「あゝそこにあつたか！」と彼はよく眼の前の札を取られた後でかう云つて又札をキレイに並べて穴をふさぐのだつた。

「だめよ。象さん。しつかりしなくつちや。キレイにばかり並べてゐたつて。」「さア。これを見てるのよ！　これ一つを「乙女のすがた」よくつて！」こんな事を女中仲間にこづかれ乍ら云はれてじつとそれを見てゐるが手が鈍いのでぬかれて了ふのだつた。そのくせどうかした時に飛んでもない敵の札を發見する。その時は「あゝ、そこにあるナ」と自分では取らずにおしへてゐた。

「どけた〳〵！　その大きな手！」

こんな事を云はれて手をどけると實際その下に二枚位札がかくれてゐたりした。

どこへでもいたづら者はゐた。ある晩泥棒が這入つた。象吉がふつと眼をさますと頰かぶりをした大の男が出刃庖丁をひらめかして彼の前に突つ立つてゐた。そして金のあり場所をおしへろ、騒ぐと殺すぞとおどかした。

象吉はガタ〳〵と顫へながら膝をあはせて蒲團の上に座つた。そしてどこに主人の金があるか、知らないが、その代りに少しだが之をもつて行つてくれと自分の財布を出して渡した。泥棒はその三圓いくら入つてゐる蟇口をあけて見ると噴き出し相になつたが、放り出して、小僧の財布なんぞ取りに來る俺ぢやない。此家にありつたけの金を出さないと家中血の海にしてやるといきまいた。それだけはどうかゆるしてくれと象吉は手を合はせた。そこで泥棒はとう〳〵噴き出して了つた。そして頰かぶりをとつた。それは下男の一人がいたづらをしたのだつた。

「まア、見かけだほしでなんて賴みにならない！」

皆はかう云つたが、怒る者はなかつた。併し大きな重い荷を運ぶ時なぞに彼は役に立つので一方重寶がられた。こゝを押へてゐろなどゝ云はれると卅分でも押えてゐた。

「君はよつぽど間抜けてゐるね。」と「圖」を低く聞こえるか聞こえぬに云つてからかふ者もあつたが、忙しい時にはも

う頭ごなしに「ヤイ、ウド！」と呼んだ。そんな時には一寸ふくれたが、大抵いつも氣嫌よく、頼まれた事は「はあ」と引きうけた。あいつをおだてる位譯ない事はないと皆は何かと面倒な事の場合には彼をおだてるに限るとしてゐたが、そのくせ彼もおだてられてゐると氣がつかないのではないのだつた。皆は自分を甘く見ておだてゝゐるんだと云ふ事は十々承知でも斷る事が出來ないのだつた。

主人は彼に眼をかけてゐたので時々いゝものをもらつた。するとそれを横取りして寄來せと云ふ謎をかける者がゐたすると彼は困つた顔をして。

「これ、あんたには是非要るんですか、」とか、「上げなくつちやいけませんか」とか訊くのだつた。

「まさか上げなくつちやいけないとも云へまいぢやないか。君のものだからな。只もらへれやうれしいと云ふまでさ。」と謎をかけるものは云ふ。そして結局捲き上げられて了ふのだつた。

しかし彼も一寸味噌をつけた。

或る二月の晩、藪入りの日で仲間は皆暇をとつてゐた。彼も取れるのだつたが、ずつと前に父に再縁した繼母が彼を好かない事を知つてゐたので歸る家もなかつた。その晩彼が一人で床の中で本を讀んでゐると、おさんどんが障子のやぶれ目から中をのぞいた上で這入つて來た。おさんどんは大きな赭ら顔に白粉の香いをぷん／＼させながら、寒からうと云つて自分の作つた古い綿フランネルの襦袢を持つて來てくれた。そして彼に近よつて變な眼つきをした。

象吉はおどろいた。ぶる／＼と内身を顫はせた。彼は此おさんどんが近々に緣づく爲めに暇をとる事を知つてゐた。女中は又その緣がいやさに、そしてどうせすぐ結婚するから一寸自棄ないたづらをしても分らないと云ふのでやつて來たのだつた。象吉も只臆病から誘はれる遊びにこそ行かなかつたが、もう純潔でばかりではなかつた。僕にも安い香油

をつけてゐた。

「だつて……それや、あんたの約束の人にわるいや。」と彼はやつと云つた。

女中はそんな馬鹿な事はない。その男だつて道樂者でどうせ結婚の前の晩迄、そして多分結婚の後までも遊ぶのだ。自分はどうせ逃げ出して來て、彼さへゆるしてくれゝば彼の處へ來てもいゝ覺悟なんだと云つた。

象吉はわなく＼とふるへた。しかし誘惑には克てなかつた。そしてもし彼がその翌日からあゝ眼に見へて、大罪を犯した疚しい者のやうにふさぎこんで了はなかつたら、二人の嫌疑はなほもう少しはつゞき得たのだつた。しかし内儀さんにお前どうかしたのかと聞かれた時彼は「ぶつ倒れ相」になつたほどどさまぎとして眞つ赤になり、そして自分の部屋へ逃げ返へつた。それですぐ感づかれた。

退學の場合と同じく、矢張り他の者への手前で、捨て難い可愛い處はあるんだがとおしまれつゝ彼は暇を出された。

もう泣く齢でもなかつたが、その後彼は餘程女には懲りたと見へて、その方をつゝしむだ。田舍の父の家へ歸つた後で夏の日暮れなぞ、ふと行水をつかふ女の裸體なぞを見かけると彼は頭をかゝへて、逃げた。

或る年、町にコレラが流行つて死ぬ者が多かつた。彼はその葬式に會ふと心から深い溜息をついて恭しくお辭儀した。「あゝあゝ。あの人も死んぢやつたんかねえ。可哀相に」彼はかう獨り言つた。

そして或る時家へ歸ると何を考えたか笛を取り出して來た。彼はその忌中の家の前へ行つた。そして一生懸命に笛を吹いた。

「此間抜け奴が！　又！」と彼は通つた男に呶鳴りつけられた。「人が死んだつてえのにわざく＼暢氣に笛なんぞ吹く氣違いがあるか。手前、人の死んだのを喜んでるのか！」

「喜んでるもんか。」象吉はドギマギしながら呆然として云つた。「俺はあの氣の毒な家の人がさぞふさいでゐるだらうと思つてね、喜ばしてやらうと思つて吹いてゐるんさ」

彼は頭を張られた。しかしそれでもなぜ自分がわるいのか分らなかつた。

コレラは彼の繼母まで殺して了つた。

「あれやまあ、天罰で仕方がねえさ。あゝ云ふ意地のわるいのが本當にゐるから、繼母つてものはわるいものにされちまふんだ。」

人々はかう云つた。しかし象吉は云つた。

「だけどねえ、あの人はしよつちゆう自分で苦勞してたんだよ。俺アあの母さんがほんとに晴々した呑氣な顏をしてるのを見た事がない。あの人も氣の毒な人だ。」

さう云つて象吉はぽろ〳〵と涙をこぼした。

兄は又當然象吉の分になるべきだつた財産をも狹ふに、破産以前につかいつくしてゐたのだつた。しかしその時も彼を愛してゐた伯母が、その事を彼に知らせて「あんたは人がよすぎるからねえ」とこぼし氣味に彼に同情を示しても

「俺アそんなものは要らねえだ。ありやあるでもいゝし、無けれや無いでいゝだ。」と彼は空を仰いで答へただけだつた。

その後彼の噂は一寸立ち消えになつてゐる。看板字かきになつてゐたと云ふ話もある。しかし一年の後彼が巡査になつた消息が傳へられた。その時も彼を知つてゐる者達は笑つた。「あの臆病者の野呂まが泥棒にぶつかつた處を見たいもんだ。」「あいつにつかまる泥棒もあるかね」杯と云つた。ところが私は最近突然彼がある踏みきりの處で汽車に礫かれかゝつたある女の子とその祖母さんとを助けやうとして、その爲めに自分が犠牲になつて礫死したと云ふ噂を聞いた。噂の事であるから私はまだ充分本當だとは信じない。併し彼が巡査になつたと云ふ事は確かであるし、それに何だか動作の鈍い彼のし相な事にも思へるので、本當らしくも思へるのである。（一三、一一）

昔がたり

宇野浩二

K――湖の岸の一寸した町に、私は一ケ月近く滯在してゐた後で、私はもうその町にも飽きたので、或る晴れた日を選んで出發することにした。だが、心持がどうしても私に東京の方へ足を向けさせなかつた。當時私はまだ二十五歳で、獨身者であつたから、そこに歸つたからとて、下宿屋の女中が、多分もう歸つては來ないだらうと思つてゐた客を迎へるところの、意外なやうな顏附をして、「おや、お歸りなさい、」と挨拶する位のものだつたらう、それは私に餘りに味氣ないことに違ひなかつた。

さういふ氣持が心の底にあつた爲か、私の足は無意識に鐵道の停車場とは反對の方角に向つてゐた、その停車場を走つてゐる單線の線路は、南に乘ると東京で、北に向うと私に殆ど馴染のない國々に行つてしまふ外なかつたからで、氣がつくと、私は湖水の岸にあるK――汽船會社の發着所の方へ歩いてゐた。「さうだ、こゝから船に乘つて見よう、この船には未だ一度も乘つたことはないが、この船の着く場所

で何處か氣に入つたところを見つけて、一週間でも二週間でも、或ひは方々に一週間づゝでも、下りて泊つて見よう、」と私は思ひついた。

私は汽船の發着所に着いて、切符賣場の上に掛つてゐる行先の土地の名前を一つ一つ讀んだ上で、その中で私が何處でともなしに聞覺えてゐた町の名を出鱈目に選んで、そこ迄の切符を求めて、やがて兩側に水車の附いた、古風な汽船に乘込んだ。それは多分夏の終り、秋の初めの美しい日で、湖水のほとりの葦か葭か、丈高く茂つて居る草も未だ青々として居て、その邊一體の平野の果は、青く晴れた空が乳色にかすんで見えた。釣をして居る人、土手を歩いて居る男、草原に遊んで居る家畜、遠くの畑で働いて居る百姓。——私は小さいバスケット一つしか持たない、身輕な書生の身分だつたので、船が出てから一時間以上の間わざと船室に這入らないで、それの屋根の上に當る、乘客たちの稍々大きな荷物を積んである場所に、船員に頼んで、蹲んで居る許しを受けて、煙草を吹かしながら四邊の景色を樂んで居た。が、稍々それも飽きた時分、丁度船が一つの泊り場になつて居る村らしい方に向つて、速力を緩めて岸の方へ進んで行つたので、私はその時私の傍を、停船場に着いた時の用意であらう、長い櫂を持つて通つた船員の一人に向つて、「こゝは何といふ所ですか?」と聞いて見た。それから、私の行先地である、切符の名前のところを言つて、そこ迄はこれから未だどの位の時間が掛るかと聞くと、「まだまだ、これから三時間半ばかりかゝりますよ、」との答だつた。

私はそこでふと決心して、つまり私は何も今私の持つて居る切符の當先まで行く必要はないので、而もそこ迄行くにはまだ三時間以上この船の上に乘つてゐなければならない、それで行先の土地が私にどれ程氣に入るか、どれ程氣に入らないか少しも分らないのである。見ると、今船が着かうとするところは、さして珍しい景色といふ程でもないが、背の高いポプラの木立が西洋風に彼方にも此方にもひよこ〳〵と立つて居て、割合に大きな村でありながら、家々が離れ

離れに散在して居る模樣と言ひ、而もその村の中程を湖水にそゝぐ幾筋かの支流を持つた川でもあると見えて、彼方此方に水車の廻つて居る風情といひ、それは如何にも可愛らしくて小奇麗な感じのする景色であつた。

「この村に宿屋がありますか？」と私は櫂を持つた船員に問いて見た。

「湖畔亭といふ大きな家が一軒あります、」と船員は答へた。

私はそこに下りることに定めた。

湖畔亭はそれ程大きな家といふ程ではなかつたが、私が前の日まで居た停車場のある町の宿屋よりはずつと小奇麗で、上品で而して閑靜であつた。家の廻りは例のポプラの木立に圍まれて、無造作に作られてある庭もよく、それに建物が、その中に彼方此方離家風になつて居るのもよかつた。何でもそれは宿屋こそして居るが、村で相當な家柄であるらしく、現に、後で聞いたのであるが、そこの主人は蠶糸何とか組合長などいふ役目をして居た。五十歲近くに見える布袋のやうに太つた男だつた。もつとも、主人としてのその男が私の注意を引いたのは、そこへ來てから一週間近くも經つてからのことだつたと思ふ。私の性分で、どんな家へ行つても、馴れるまでは極端に引込み思案で、與へられた部屋から滅多に外へ、そんなにその邊の景色が氣に行つて來たところでありながら、殆ど散步にも、出ることをしなかつたから。

が、或日、讀書に疲れた頭を休める爲に、庭を散步したことがあつた。矢張り晴れた日で、一寸した小丘があつたり、繁つた灌木の林があつたりする中をぶら／＼と步いてゐた時、とある丘の蔭に思ひもよらない廣々とした泉水があ

つて、そこに例の布袋のやうな恰好の主人が毛むくじやらな裸體を曝して、頻りにそれの水をかへて居るのを發見した。それが餘り思ひも寄らない出會ひだつたので、私たちは顏を見合はした時、思はず氣輕に挨拶を交した。

「いゝ天氣ですな、」と彼は言つた。「勉强が出來ますか？」

「大變ですね、水を變へるんですか？」と私は聞いた。

「えゝ、暇なもんですから、」と彼は答へた。

その時分にはもう泉水の水は殆どかい出されて居たので、一ところ、岩の蔭になつた深みに尺以上の眞鯉や緋鯉が、彼等の住居の不意の出來事に迷惑して、各々上になり下になりして跳ね廻つて居た。私がその方へ歩いて行つて、上から覗き込んでゐると、主人が後から大きな網を片手に持つて、滿足さうな笑を頰に浮かべながらやつて來て、

「隨分でかい奴がゐるでせう、」などと言ひながら、それ等を片つ端から傍にあつた桶の中にすくひ上げた。

そこから、左手の方を見ると、私が初めて見る、小さな茶室めいた離家が一軒立つてゐた。と、その家の戸が開け放しになつてゐて、中に壺のやうなものだとか、土器のやうなものだとか、石の棺のやうなものだとか、一見して何か昔の民族の遺物のやうなものが、そこに集められてあるらしいのが見てとれたので、私はその方へ歩いて行つて別にいゝ物か、古い物か、珍しい物か、少しも分りはしなかつたが、唯斯ういふ土地に、斯ういふ主人の家に、不思議なもの蒐輯があると思つて、長い間譯分らぢつと立つて見てゐた。すると、泉水の方の仕事が一片附きしたのか、それとも私にその蒐輯を自慢したくなつてか、いつの間にか主人が又私の傍へやつて來て、

「あんたもこんなものお好きですか？」と聞いた。

「えゝ、」と私は一寸返事に困つたが、直にお座なりに、「分りませんけど、好きです、」といつた風な答をした。

「私もついこの十年來集め出したんですが、」主人はひどく滿足さうな調子で言つた。「まあ、どうぞお掛けなさい、」と彼はその離家の緣側に腰掛けることを私にすゝめて、「この邊は先住民族の遺跡地なもんですから、今でも彼方此方に塚などがありましてね、こゝに集めてあるのはみんな私がこの邊から掘り出したものなんですよ。……さうです、つまりアイヌ族なんでせうが、例の坪井博士がコロボックル民族と呼んで居られるものですよ。御存知でせう、江見水蔭君、——江見君なども熱心家で、私と一緒によく掘つて廻つたものです。」

　私はもう大分前から、この主人を、斯ういふ田舍の宿屋の亭主としては、一風變つた人物のやうに氣がついてゐたが、彼の話の、十年も前と言へば、私が未だ一所懸命にその江見水蔭のお伽話や冒險小說やを愛讀してゐた時分である、その頃この布袋のやうな恰好をした主人は、その水蔭と一緒にコロボックル民族とかいふものの遺物を掘り廻つてゐたといふのを聞いて、次第に彼を尊敬する氣持にさへなつて來た。實際、そんな話を聞かない前からも、一見してこの男は何となしにこんな宿屋の亭主としては不似合に見えた、この男の前半生は何か外の事に盡されたもので、そしてそれ等の事に失敗したか、見切りを附けたかして、多分青年の頃には思ひもかけなかつた商賣——即ち宿屋の亭主などをして、半生を送つてゐる、といふ風な人間に違ひないと思はれた。實際幾度言つても、彼は畫にかいた布袋そつくりであつた、裸一つになつて、私と並んで緣側に腰かけてゐた恰好を、私は今だに忘れることが出來ない、臍の邊から下腹にかけて渦卷いて生えてゐる毛の具合といひ、同じやうに毛で飾られた、丸々として脹れ上つたやうな乳の恰好といひ、唯一つそれ等の一切の丸々としたものゝ中で、耳だけが際立つて可笑しいほど小さく見えた。

　ふと、私はその時兩手を膝に置いてゐる彼の、並んでゐる私の方に面してゐる右手の腕に、ゑぐられたやうな、可成り大きな傷跡があるのを發見して、何氣なく、「

「それはどうなすつたんです？」と聞いて見た。聞いてから、これは悪い質問ではなかつたかと氣がついたが、
「これですか、これは××戰爭の土産ですよ」と相手は何でもなささうに答へた。
「ほお！　戰爭に出られたんですか。それ程の傷を受けられたんでしたら、隨分いゝ勳章をおもらひになつたでせう」
と私はつまらぬことを聞いて見た。
「そんな氣のきいたものは貰ひませんでしたよ」と彼は別に皮肉な調子でなく言ふには「だが、あんなものも運でね、別に强い奴だからと言つて、中々いゝ勳章が當るといふ譯に行かないもんですよ。……現に私のゐた小隊で、こいつは又一寸類のない臆病者なんですがね、その男が日本から金鵄勳章と、敵の×××から年金を貰つたといふ不思議な話がありますよ。」……
私は大體この時の彼の挿話を傳へようとして、この話を書き始めたのであるが、……然し、兎に角初めの計畫通り、次に彼の話を書いて見よう。

「私（といふのは、この宿屋の主人公のことである。）私たちは第一軍でしたから、最初めに彼地へ渡つた方です。この話は五月か六月の初め時分のことでしたが、もうその時分には鴨綠江を向うへ越えてゐました、何でも九連城の次の戰爭の時だつたと思ひますが、あの邊は誰だゞつ廣い野原見たいなところでして、彼方にも此方にも小さな山や丘のやうなものが澤山あつてね、戰爭——といふより、演習をするのにもつて來いの地勢ですね。その時、私たちの小隊は第一線にゐたんですが、兎に角勝ちいくさをつゞけてゐたんですからね、割合に呑氣なもんでしたよ。ところが、或日のこ

と、可成り大きな丘――といふよりも小さな山位ありましたがね、その近くまで來ると、突然敵の將校斥候がその山に現れたといふ情報が來たんです。それで、此方もそれに對抗する爲に、各隊から將校斥候を出すといふことになつて、私の方の隊からは私の方の小隊長が選ばれたもんですから、分隊長をしてゐた私が小隊長から、それに連れて行く兵卒を選拔しろといふ命令を受けたんです。その時に、私は何人かの兵卒を拔き出した中に、人もあらうに楠谷といふ一等卒があつたんです。それがその話の始まりなんです。

「楠谷といふのは東京の日本橋の紙問屋の息子なんです、ちやんとした、それや立派な家です、子供の時分からつまり荒い風にも當てられないで育つたといふ人間でせう、どうしてあんなのが兵に取られたものですか、役者のやうな優男で、顏も奇麗でしたし、氣も極く優しい、女見たいな男でした、どうしたつて二枚目といふところなんです、何しろ呉から船に乘つて日本を出る時なんかの、しを〳〵した樣子つたらないんですからね、愈々玄海灘にかゝつて、日本の土地がこれで見おさめだといふ時分には到頭しく〳〵泣き出したもんですよ、もうその位の男になると、そんな事をしたら人に笑はれるだらうとか、人から輕蔑されるだらうとか、そんな事は一切考へる餘裕さへないんですね。

「だから、初めのうちこそまるで外の者は楠谷を虫のやうに扱つて、無論友達扱ひにしないどころか、傍を通つても言葉もかけない、かけるとすれば『おい、國へ歸りたいか、然しどうせ生きちやあ歸れないぞ。』とか、『おい、泣いたつて笑つたつて、勘忍してくれるもんぢやないんだから、いゝ加減にあきらめよ。』とか言ふ位のもので、然しまあ誰も相手にしなかつたんですが、不思議なもので、それ程馬鹿にされても、輕蔑されても、ちつともそれに反抗しないで、謂はゞ女のやうにめそ〳〵してる代りに、女のやうに從順でもあるもんだから、終ひには外の者の方でも別物扱ひにし出すといふ譯で、だん〳〵荒つぽい者ばかりの集まりの中に、この優しい男が入用にさへなつて來たといふ譯です。又この

男も前に言つたやうな性質で、人々の玩具にされるのに甘んじて、洗濯をするとか、掃除をするとか、さういふ女のするやうな仕事を喜んでするもんだから、終ひにはみんなが『楠ちやん、楠ちやん』と言つて可愛がるやうにさへなつたものです。だから、いつとなく、この男だけはなるべく戰線に立たせないやうに、大抵救護班の方へ廻すやうにしてやつてました。そんな風だから、いつからとなく、よくみんなが引張り合ふやうにして、暇な時にはこの男を連れて、野原や土手を散歩するやうになつたり、それや大變な一種の人氣者になつてしまつた位なんです。

「ところで、その私が小隊長の命令を受けて、さういふ楠谷を將候斥候の中に加へる人員にどうして選んだかといふと、丁度その前の日のことに、久しぶりで內地から郵便が着いたんです、この內地からの郵便といふものは、實際戰地へ行つたものでなければその嬉しさは分りませんよ。まあ、一度來ると、誰にも彼にも一人前三通四通はありますからね。その時、私も、無論楠谷も、それ〲一束の手紙を抱えて、近くの野原へ讀みに出かけて行つたと思つて下さい、晴れた日でね『楠谷、散歩に行かう、そしてそこで寢轉がりながら讀まう。』と私が誘ひ出したんです。

「そして、草原に寢そべりながら、誰でもさうですが、私は先づ封筒の裏を一つ一つ調べて、初めに兩親、それから妻、兄弟、親戚、友人といつた風に、誰が傍で見てゐる譯でもないが、まあそれが我々の見えで、さういふ順序で見ることになつてゐるのです。それで、私は一通り讀んでしまつて、何氣なく、傍に腰から下を草原に延ばして、上體を前に屈み加減にして、未だ讀みつづけてゐる楠谷の方を見るともなしに見ますと、それが實に長い長い手紙で、而も卷紙に書いてあるものだから、まるで芝居のお輕の手紙そつくりなんです。一目見て、これは女から來たんだな、と私は思ひました。實際長い手紙で、手紙の端が餘つて、草原の中に山のやうに積まれてあるんです。だが、それだけなら未だよかつたんですが、足下に未だ讀んでないらしい手紙が三四通ほつたらかしてあつて、つまり私が自分に來たのをすつかり讀

んでしまつた間に、こいつは未だ初めの一通を讀み切らなかつたといふ譯なんです。而も、氣がつくと、今讀んでゐる手紙の封筒らしいのが彼の尻の邊に轉がつてゐましたので、それを取上げて見ると、『日本ばし、何々』と名字だけ書いてあるのですが、勿論それは女の手蹟です。『この野郎、兩親や親戚からの手紙を後廻しにして、色女の、而もこんな長たらしいやつを先に讀んでやがるな。』と、確に嫉妬ですよ、兎に角、私はむつとしたんです、『馬鹿野郎！』と言ふなりいきなり彼の手からそれを引つたくりました。一二度彼は取返さうとしたやうですが、無論、私の劍幕に恐れて大した反抗はしませんでした。無論、中の文句はよくあるやつです、それが唯長々と書いてあるだけのことなんです、中で私の覺えてゐるのは、早く戰爭を濟まして歸つて來て下さい、それにあんたは人一倍弱い、臆病な方だから、そんな荒つぽい中にまじつて、恐い土地に行つて、どんな思ひをして入らつしやるだらうと思ふと、私は浮いたお座敷に出て居ても、氣が氣でありません、然し人がどんなに言はうとも、あんたはあんただから、なるべく危い事はしないように、笑はれても、少し位恥かしめられても、身體を丈夫にして、死なぬようにして下さい、××などもらはなくても宜しい、生きてさへ歸つたら、私がどんな××でも上げますから、といふやうな事が書いてあるのです。

「それを見ると、私はふとその臆病者と言はれても何でもかまはないから、命を大切にしろといふ文句がぐつと胸に來ました。何故といつて、これ迄私たちは彼の臆病な性質を可哀さうに思つてかばつてやつてゐたが、あの臆病は彼自身の臆病ではなくて、こんな女が後に居てさしてゐるんだな、と思はれたからです。『馬鹿野郎！』と私はもう一度叫んで、いきなりその手紙を彼の目の前ですた〳〵に引裂いて、そしてぷいとその場を立つて、一人で隊の方に歸つて來ました。だが、私自身もそんな事をして、決していゝ氣持で居られる譯ではありませんでした。それは幾ら私自身を辯解しようと考へても、確に嫉妬心から出たものだといふ外に何の理由もなかつたからでせう。私は隊に歸つてからも、その

翌日になつてからも、妙にその時の私の態度が、といふよりも心持が軍人らしくなかつたことが不愉快に考へられて、妙に苛々してゐました。すると、例の將校斥候に兵卒を選拔しろといふ命令を受取つたのです。私はその時又昨日の楠谷の長い手紙の中にあつた、どんなに臆病者と笑はれてもいゝから、怪我をしないようにしてくれといふ文句を思ひ出したのです。女の名前はたしか小菊とあつたと思ひます。私は夢中で楠谷一等卒！と指名してしまつたのです。

「楠谷一等卒は見る間に眞靑になつてしまひました。私はそれを見た瞬間、しまつた、可哀さうなことをした、と思ひましたが、もう取返しがつきません、見ると、外の兵卒たちの表情も一齊に不思議な表情を浮かべてゐました。彼等の目には明かに、可哀さうにといふ同情の色が見えました。それと共に確に面白いな、といふ表情も浮かんでゐました。

『はあ！』と答へたまゝ、今にも泣き出しさうな顏をして、楠谷一等卒が俯向いてしまふのを見ると、彼等はさういふ二つの表情を顏に浮かべて、拍手しました。

「そのうちに時間が來て、萬歲の聲に送られながら私たちは出發しました、無論楠谷一等卒も一緖にです。その時分からだん〳〵私の楠谷に對する考へが後戻りして來ました、楠谷が可哀さうになつて來たのです、不斷の通り、楠谷の臆病者な氣持が不憫になつて來たのです。まだ敵地に近づかない間は、斯ういふ際ですから兵卒たちにも銘々に勝手な話をすることを許してあります、だから、誰も彼もなるべく陽氣な、笑ひ話をしてゐる中で、楠谷一人は今だに眞靑になつたまゝ、無論口をきくどころか、俯向いたなりでとぼ〳〵と步いてゐます、その恰好が何とも言へぬ哀れなのです。こんな男が若しかすると、最先に鐵砲の玉に當つてしまふんぢやないかなどと思ふと、尙更可哀さうな氣がしてならないのです。そのうちにだん〳〵警戒區域に近づいて來ますと、みんなは益々變な燥ぎ氣分になつて、一寸した木の切株を見つけても、『ほら、敵らしいぞ、』とか、大きな石が二つ三つごろ〳〵してゐるのを發見しても、『伏兵ぢやないかな、』

などと、幾分は恐くもあり、と言つて、無論それ等が敵でないとは知りながらのそんな冗談を言つてる中で、楠谷一等卒だけは相變らず默々として歩いてゐる、その恰好がまつたく可哀さうでたまらない氣がして來ました。

「二時間ばかりそんな風にして方々偵察して廻りましたが、一向敵の影らしいものも、或ひは敵の歩いた跡らしいものさへ發見することが出來なかつたものですから、結局これは誤報だらうといふことになりました。實際この支那人の持つて來る情報ほど的にならないものはないので、奴等は時々唯日本人の歡心を買はうとして、そんな出鱈目な報告をすることがよくあるのです、と言つて、さういふ報告を聞いた上は、ぢつとしてゐる譯にも行かないものですから、そんな風にその爲に將校斥候などを出すのですが、それが結局斯うして空騷ぎに終ることがよくあるんです。今度も多分その手かも知れない、それに、もうこれだけ偵察の任を盡したんだから、引上げてもいゝだらうと小隊長も言ひ出しました。その時、ふと氣がついたのですが、左手の方に今まで知らなかつた小高い丘があるのに目がつきました。その邊の小さい丘といふ丘は殆ど歩きつくしたのですが、確にその丘だけは未だでしたので、みんなはもう面倒くさくなつてゐるので、引上げる氣持で一ぱいでしたが、さうなると又一つ見殘したその丘が急に怪しくも思はれ出します、それに斯うして偵察に出てゐるのが、自分たちの隊だけなら大した未練も起らないのですが、先にも言つた通り、方々の大隊から幾組かの斥候が出てゐる譯ですから、それ等に對する競爭心といふものが、これは一寸普通には想像つかないでせうが、それが非常に働くものなんです。で、兎に角、その丘を調べて見ようといふことになりました。それは今迄上つた丘のうちでは一番小さいものでしたが、何を言ふにも第一戰線のことですから、少しの油斷も出來ません。各々三十歩の間隔をとつて、丁度兎を追ひ出す時のやうな要領で、山の頂さして上つて行きました。が、まあ、大體今まで通り、別に變つたことにも出くわさないだらうと、みなは心の中では思つてゐたに違ひありません、然し、さうは思つて

居るものだ、いざさういふ要領で行進して行くと、變に心持は緊張するものです。

「ところが、どうでせう、我々が殆どその丘の頂上に近づいた時分でした、突然その上に眞青な外套を着た、一人の敵の將校が現れたのです。それを見付けた時は、もうはつきり敵の顏の目鼻が見えたくらゐですから、餘程近づいたに違ひありません。「ゐたな!」と思ふと、もう此方は何故そんなところに、敵の將校が、而も一人で姿を出したかなどと考へてゐる餘裕がありません。まして、その時向うで白い手巾を頻りに振つてゐたことなどは——それや分るには分つてゐましたが、それだつて向うの手段だとも疑へる譯ですから、此方では少しも油斷しないで、それどころかひどく緊張して、つけ劍のまゝで、その將校を中心にして、次第に各自の間隔をせばせながら、近づいて行きました。後で考へて見ると、その將校は何かの譯で一人逃げ遅れたか何かしたのでせう、彼にしても突然日本軍の姿を見たものだから、これはかなはないと思つて、降參のしるしにさうして手巾を振つたものらしいのです。考へて見ると、彼は氣が氣でなかつたと見えて、一生懸命に、苛々しなやうに手巾を振つてゐました。そんなにしてゐるのに、此方が大勢で、みんな緊張した恰好で、つけ劍をして進んで來るものですから、向うではこれはてつきり自分の降參を入れないのだな、と思つてしまつたものでせう、實際もうその時彼と我との間は十米突そこ〳〵の距離しかありませんでした、夢中で腰からピストルをとつて、此方に向つてうつたものです。それが彼にとつて最も不運になつた譯でした。だつて、此方も吃驚しますよ、突然ピストルをうたれたんでは。だから發作的に小隊長が『突つ込め!』といふ號令を發しました。「わーつ!」と喊聲を上げて、一度に突進する、敵はその場に立竦んでしまふ。一瞬間後には三方から身體中に日本軍の劍を見舞はれた譯です。ぱつたりその場に倒れてしまひました。思はずみんなはその場で萬歳を唱へました。

「ところで、その時までは、敵の、見たところ確に貴族將校に違ひないと思はれるやうな、立派な服裝をした軍人を

倒した嬉しさと、何よりも外の斥候隊を出し抜いたといふ喜びで一ぱいになつてゐた で夢中でゐましたが、間もなく楠谷一等卒はどうしたらう、と、ふ心配が起つて來ました。といふのは、さつき敵の將校がピストルをうつた時、私のすぐ傍にゐた楠谷が、『あツ！』といふ物凄い聲を立てゝその場に倒れたことを私は思ひ出したからです。その瞬間にだつて『やられたな！』と私は心の中ではつきり知つてはゐたのですが、無論そんな事を考へてゐる餘裕がありません。もつとも、その丘に上る時に限らず、三十歩の間隔をとつて進む時でも、奴はいつの時でもだん／＼だん／＼私の傍にくつ附いて來る癖があるのです。恐くて恐くてたまらないんですね。然し私はそれを默つて許してやつてゐました。それが運惡く今の敵のピストルが奴にあたつたらしいのです。『楠谷がやられたぞ。』とそこで私が叫んで、先に立つて、二三人の者と一緒にそこから五六間下りて行つて見ると、果して楠谷は草原の中に俯伏しになつてうん／＼呻つてゐます。私はその耳元に口を持つて行つて『大丈夫だ、敵は倒したぞ、さあ、これから隊へ歸るんだ、擔いで行つてやるから安心しろ、しつかりするんだぞ、待つてろ。』と言ひ殘して、もう一度山の上へ歸つて行きました。

『それからみんなで倒れてゐる敵の將校の死骸を檢査しました。先づ外套の金ボタンを外して、――その外套が、實際これまで隨分敵の捕虜や死體を見ましたが、そんな立派な外套は見たことがないといふやうなものでした。――それを脱がして、それから洋服の上着を取ると、襯衣の上に頸から金の鎖で下げた、隨分大きな型の十字架の飾りをかけてゐます、無論純金ですよ、それが唯の十字架だけでなくつて、その上に耶蘇の像まで刻みつけてあるんですから、大きさも大きいし、中々凝つたものでした。それから帶を解いて見ると、その下に腹卷をしてゐます。その中へはルー……………………、一ぱい詰め込まれてゐました。それに又望遠鏡にしたつて、獨逸製は獨逸製ですが、とても日本の尉官や佐官級の將校の持つてゐるものなど足元にも及ばないやうな立派な代物です。そればかりでは

ありません。ダイヤモンドの指輪は穿めてゐますし、プラチナの時計は持つてゐますし、――まつたく、×××の軍人はこんなのかしらと思ふと、一寸×××の軍人に生まれたいと思つた位ですよ、×××といふ國はえらい國だと思ひましたよ。――兎に角、戰爭中のことです。

…………………………

…………。

「それが済んでから、やつと氣がついて、敵の肩に掛けてゐた圖嚢を開いて見ますと、――實を言ふと、こいつが一番肝腎なもので、…………後でその圖嚢を調べて見たんです。するとどうでせう、その中から出て來た地圖といふのが大したものだつたんです、つまり敵の陣營の最も精密な地圖で、もうよく覺えてはゐませんが、その中で殊に貴重なのは奉天以北の地圖だつたと思ひます、といふのは、その奉天以北の様子は、日本軍には當時全然調べがついてなかつたからです。つまりその時の働きの中で、その地圖を手に入れたことが第一の、而かも大變な手柄になつた譯なんです。それを見ると、流石に…………………………、忽ち軍人らしい喜びと誇りとで、私達は思はず萬歳を叫びました。そして一刻も早く司令部へ、それを持つて行かねばならぬといふ緊張した心持になりました。

「私たちはそこ〳〵に引上げることにして、そこで又忘れるともなく忘れてゐた楠谷一等卒のことが心配 なりましたので、引上げの途で楠谷のところへやつて行くと、前の時には氣がつかなかつたのですが、俯伏しになつてゐる肩先のところから腕の邊にかけて、眞赤な血がにじみ出してゐるのです。傍へ寄ると、彼はもう虫の息のやうな呻り聲を立てながら、微かに目を閉ぢてゐます。「楠谷、楠谷、しつかりしろ！」と私は彼の耳のところで叫んでやりました。然し、

どうも血の出てゐるところから察して、玉は運惡く肩の下から、肺の中へ這入つてゐるらしいのです。それだともう助かりつこはありませんからね。』あゝ、矢張り虫が知らしたのが、此奴が犧牲になつたのか。』と思つて、私は氣がとがめられてたりませんでした。が、兎も角、それを兵卒たちに擔がして、私が傍に附き添うて、隊の方へと歸つて行きました。『楠谷、何だい、これつきしの傷で！　しつかりしろ！』と私は始終彼を勵ます言葉をかけました。すると、彼はいつの時でも直には私の聲に答くないで、而も時々『分隊長殿、分隊長殿』と思ひ出したやうに、消え入りさうな聲で呼ぶのです。『何だ、意氣地のない、――しつかりしろ！』と私はその度毎に強ひて大きな聲で呶鳴りました。然し終ひにはその聲さへ出なくなつてしまひました。

「すると、私の楠谷に對する後悔の氣持が次第に強くなつて來ました。と言つて、別に不法な命令を出した譯ではない、現に楠谷だけではなく、何人かの一等卒をも同じ斥候隊に選拔したのだから、表向きから言へば正當のことなんだ、とは思ふものゝ、外に人がなかつたから兎も角、わざ〳〵こんな臆病者を選拔した自分の心持は？……といふと、何と言つても、昨日のあの手紙の一件が確に原因の一つになつて居る、考へて見ると、あんな手紙だつて、別にこの際咎める程のことでは決してない、それどころか、それを咎めた自分の腹の中を檢査すると、何といつても嫉妬の氣持がなかつたとは辯解出來ない、若しあの時、自分が隊長らしい、寛大な心持で、『馬鹿野郎！』と呶鳴る代りに、肩の一つも叩いて、『運よく無事に國に歸れたら、添ひ遂げて、惚氣でも御馳走してくれ』斯う言つてやる程の餘裕があつたら、この男を選拔することはしなかつたらう、すれば今頃は隊に居て、女のやうにいそ〳〵と我々の歸りを待つてゐたらう、そして我々の歸るのを女房のやうに甲斐々々しくと迎へてくれたらう、などと考へられるのです。

「さて、隊に歸ると、取敢ず楠谷は後方の病院に送りとどけさしておいて、私は小隊長のお供をして、その日の出來事

を小隊長のところへ報告に出かけました。その途々、小隊長との話の中で、『小隊長殿』と私は言ひました。『ところで、今日の主動者は誰か、といふ問題になるのでありますが、どうでせう、それを楠谷一等卒にしてやつては？』と言ふのは、彼は、小隊長殿も見られた通り、あゝいふ重傷を負うて、今頃はもう若しかすると死んで居るかも知れないのであります。考へて見ますと楠谷一等卒も可哀さうな奴で、あゝいふ空前絶後の臆病者が今日初めて戦場に出て、而も選りに選つて彼奴一人が戦死するなどといふのは、よく／＼可哀さうな奴だと思ひますから……』そして私は小隊長の顔色をうかがひ、ながら前の日の手紙の一件などを笑ひ笑ひ話しますと、『よからう』と小隊長も言ひました。

「そして二人は司令部に聯隊長を訪問して、図嚢を出してその日の戦況を小隊長より報告しました。『報告終り、』と言つて帰らうとしますと、その時傍にゐました司令官の副官が『一寸待て、』と呼び止めました。『甲田少尉、』と副官が言ひますには、『敵の所持品はそれだけか？』『それだけであります、』と甲田小隊長は答へました。然しその時私は實はぎくつとしましたね。果して副官は『これ程重要な図嚢を持つてゐる者が、外に何にも持つてゐないといふのはをかしいぞ、』と斯ういふのです、流石は副官です。が、結局こちらも一旦言ひ切つてしまつたことですから、飽くまで『これだけであります、』と押し通してしまひました。その時——さうさう、忘れましたが、先に戦場から引上げようとした時のことでしたが、丁度我々が楠谷一等卒の傍に帰つて来た時でした、右手の丘と丘との谷合ひから、味方の、外の大隊から出た将校斥候の一隊に出遭つたんです、ところが、私の方の小隊長と、向うの将校とは多少顔見知りの間だつたらしいので——もつともさうでなくても、斯ういふ際に出つくはすと、…………

……………………、然し、運のよかつたことには、その時はこちらの仕事が大方済んだ後だつたものですから、もう五分前だとさうは行かなかつたでせうか、まあ土産といふ程の意味で、その組の者に……………

……………………斯ういふ事があつたのです。それが、私たちが副官の質問をやつと免れて、歸りかけようとしてゐるところへ、軍刀を持つて報告にやつて來たものです。『待て、待て、』と例の副官はもう一度私たちを呼び止めました。副官なんてものには中々馬鹿でない人がゐますからな。

「副官は私たちを待たして置いて、今來た隊の報告をすつかりさせてしまふと、『甲田少尉、』と又言ひました。『無論、これは同じ敵將の持物だらうと思ふが、どうだ、こんな立派な軍刀があるぢやないか。』と、もつとも、別に副官は意地惡で言ふ譯ではないので、まつたくのところ、斯ういふ戰爭中のことゝいふものは、軍略に大した差支へのない限り、大抵のことは大目に見られることになつて居るんです、……だから、もうこの時は副官も明らかにからかひの調子なんです。が、何と言はれても、私たちにして見ると、今になつて白狀する譯には行かないものですから、『いゝえ、何と言はれても、持つてゐなかつたのでありますから、持つてゐなかつたのであります。』と甲田少尉は答へました。そして、私たちはやつとの事で、腋の下に冷汗を一ぱい溜めて歸つて來ました。

「が、兎に角私たちの小隊は大した手柄を立てたとは立てたんですから、その翌日私たちの方にだけ、一日の慰勞休暇といふものが出ました。そんな休暇をもらつたつて、材料がなければ何にもなりませんが、例の……………

……………………………………

……………………………………

近所の隊では、手柄をして慰勞休暇をもらつたのは分つてゐるが、どうしてあんな大した散財が出來るのだらうと不審に思つてゐたに違ひありません。ところで、私は斯う見えて、酒はあまり得意の方ぢやないものですから、食ふものだけ鱈腹食つてしまふと、馬鹿騷ぎの中に加はる譯には行かないだけに、それにしても、とふと楠谷一等卒のことが考へ

られました。自分たちはこんな大騒ぎをして浮かれてゐるが、彼奴は、彼奴はもう今頃はこの世の外へ行つてしまつてゐるんぢやないだらうか、でなくても、今頃は恐らくあの虫のやうな聲を立てゝ、うん〳〵言つて呻つてゐるだらう、と思ふと、又しても私の氣まぐれな命令のことや、手紙を見た時のことなどを思ひ出して、私は少しばかり飲んだ酒の機嫌さへ醒めて來るやうな氣がしました。で、私は思ひ立つて、彼を野戰病院へ見舞に行つてやらうと、その賑かな騒ぎを後にして、こつそりと、脱け出ました。みんながあんな陽氣な騒ぎをしゐるのも他所にして、楠谷はベットの上で昏睡状態にでも陥つて呻つてゐるか、それとももう彼のベットといふものはなくなつてゐて、死亡室の片隅に形ばかりの二三本の花と線香とに守られてゐるか、と私はさういふ陰氣な想像ばかり廻らして、暗い氣持で病院への道を急いで行きました。

「すると、どうでしたらう。楠谷はちやんと病院の一室に生きてゐました。而も小ざつぱりした白いベットの上に、白い着物にくるまつて、見舞に行つた私の方がずつと悄氣た顔をしてゐたに違ひありません。嘘かと思はれる程潑溂とした、元氣な顔をして、私が數多のベットの間を通つて、傍に寄つて行くのを待ち兼ねたやうに『分隊長殿！』と一間も先のところから叫びました。その聲はこの男にも矢張りこんな聲が出るのか、これは矢張り女でもなければ、或ひは間違つて兵にとられたのでもない、立派な男子だ、と私に思はせた程、それは私が初めて見るやうな元氣な調子で、『分隊長殿！　傷は淺いさうであります、』と斯う言ふのです。多分生きてゐても、瀕死の床を見舞ふつもりであつた私は、それと共に彼の餘りの變り方に、呆氣に取られて、『おゝ！』と言つたまゝ、後の言葉が出ません。そして實は少しばかり不愉快な氣持さへして來ました。が、楠谷はそんな私の氣持を推量する筈もなく、『分隊長殿、』と快活な聲でつゞけて、『玉は肩胛骨を僅にかすめただけであります。これなら一二週間もしたら、もう一度戰線に出られるだらう、と軍醫殿も言つ

て居られます。』と言ひました。私はその時彼のベッドの端に腰をかけて、なるべく彼の元氣な聲の調子を抑へさせるつもりで、私の方が却つて小さな、低い聲で、『それやよかつたね、隨分心配したよ、』と言ひますと、どうでせう、彼が言ひますには、自分は今度の經驗で、今迄の臆病はすつかり追拂はれたやうな氣がする、――『分隊長殿、楠谷はこれからは今迄の楠谷とは生れ變つた楠谷になりました。もう〱戰爭など決して恐いとは思ひません。それどころか、これからは出來るだけ、第一戰線に立つて見たいと思ひます。分隊長殿、これ迄はまつたく楠谷は考へても耻かしいやうな臆病者で、女々しいことばかり言つたり、したりして、分隊長殿始め、同僚の諸君の心配をかけました。が、今度、隊に戻りましたら今迄の償ひに二倍も三倍も働くつもりであります……』などと、彼は私が初めて見た元氣な調子であるばかりでなく、初めて聞いた雄辯で立てつゞけて喋るのです。私はまつたく氣を吞まれた形で、『うむ』とも、『それや結構だ』とも、何とも返事の言葉が出ないのです。それどころか、どういふ譯でせう。相手がそんなに快活になればなる程、此方の氣が沈んで來るのです。私は何と答へたか、更に曖昧な、煮え切らない返事をしながら、ふと枕元の邊を見ますと、煙草だとか、菓子だとか、甘さうな物の罐詰類だとか、さういふものが山のやうに積まれてあります、それが、外の近所のベッドのどの枕元よりも、目立つて澤山、目立つて立派なものばかりなのです、銀紙に包んだチョコレートの箱など、それが蓋を開けて、その食ひさしが無雜作に散らばつてゐるのなど、外のベッドでは見たくても見られない、內地でゞも、餘程いゝ身分の人が病院に這入つてゐる時のやうです。私はそれを見ながら、楠谷の、勇敢になるとか、今度は人一倍働くとかいふ、妙に私には不愉快に響く豪語を避ける爲に、仕方なしに話をその枕元のもの丶方へ持つて行つて、『大分うまさうなものがあるな、』などと言つて見ました。が、さう言つた後から、その自分の聲が變に物欲しさうに聞えた氣がして、はッとした位です。けれども、楠谷はそんな事には一向頓着ない調子で、『今朝は早くから、

外國の觀戰武官たちが大勢お見えになつて、楠谷を叮嚀に見舞つて下さるのであります。そしてその言はれる言葉は分りませんが、何だか楠谷が大變な手柄でも立てたと思つて居られるらしく、握手をされたり何かして、大變持てなして下さるのであります。斯ういふものは大抵さういふ方々からいたゞいたものであります、といふのです。實際彼は、無心だつたでせう、少なくとも、自分のまぐれ當りのやうな怪我の功名に、夢のやうな氣がしてゐたことでせう。しかし、私には急に思ひ當る事がある筈です。といふのは昨日戰場から引上げて、その報告に司令部へ行く途々、私から言ひ出して小隊長と相談して、多分戰死したゞらうと想像したこの楠谷を、昨日の第一の殊勲者として報告してやつた事です。彼は今その私の作つてやつた光榮を、生きて、而も生れ變つたやうに快活な男になつて、享樂してゐる譯なのです。無論、それは一口に言ふと、私にとつて何とも言へない馬鹿々々しい目に遭つたと云ふ感じです。私はだん／＼氣分が重くなつて、終ひには口をきくどころか、頰の邊の筋が硬ばつて來て、作り笑ひさへ出來なくなつて來たのを感じました。

「そしてもの、五分間も、變に氣まづいだんまりになつてゐました。その時、向うの方から、派手な眞赤な洋服を着た、それは英國の觀戰武官だつたさうです、三人連れで、はツと思ふ間もなく、日本武官に案内されて、數多いベッドの間を素通りして、楠谷のベッドの傍にやつて來ました。私はもうその時は心の底まで不機嫌に蝕はれてゐましたが、彼等を案内して來たのは大尉です、仕樣がありませんから、楠谷のベットを離れて、擧手の禮をしました。が、彼等は私に禮を返しながらも、殆ど私の存在などは蠅ほどにも注意しないで、つか／＼と楠谷一等卒の枕元に進んで行きました。案内の大尉が英語で赤服の觀戰武官たちに何か說明してゐます、すると、觀戰武官たちは、一々楠谷の傍に進んで行つて、手を出しました。無論、その時の楠谷の頭には傍に私がゐることなどなかつたに違ひありません。而も、彼は面映いほ

ど馴れ切つた樣子で、一々それ等の毛唐の武官たちの手を握りかへしてゐるのです。『おゝ、勇敢なる兵卒よ、』などゝ毛唐たちは口々に叫んだものに違ひありません。そしてその日の朝からだと言ひますが、彼等と應待する楠谷一等卒の、落着き拂つた、何といふ馴れた態度だつたでせう。毛唐の武官たちの姿が部屋から消えると一緒に、私は楠谷の傍に行つて、『俺は歸るよ』と素氣ない挨拶を殘して、歸途に着きました。どうでせう、『俺は歸るよ、』と言ふと、楠谷は矢張り毛唐たちとしたやうに、私に握手するつもりで手を出しましたよ、私は知らぬ顏をしてづん／＼部屋を出て來ました。

『その翌日から、又私たちは進軍をつゞけました。楠谷はそれ切り到頭歸つて來ませんでした。これ迄は私ばかりでなく、あの女のやうに優しい、我々のうちの誰よりも飛び拔けて臆病者の、彼のやうなものが一人ゐた爲に、外の者がどんなに慰められもし、又自分たちが強い氣がしてゐたか知れません。それがゐなくなると、誰も彼も寂しく思つた證據に、一日のうちで少しでもみんなが寛いだ時に、彼の名前が出ないことがありませんでした。唯一の女に行かれた男世帶とでも言ふんでせうか、然しそんな言葉ぐらゐでは迚も盡せない氣がします。然し到頭楠谷は私たちの隊には歸つて來ませんでした。後で聞いたところに依ると、楠谷の傷は楠谷自身の言つた通り大したものぢやなかつたんですが、兎に角まぐれ當りとは言ひながら大變な手柄だつたんですから、それに免じて後送されて、除隊になつたんださうです。が、我々はさうは行きません、だん／＼寒さに向ふのに、遠慮なく北へ北へと進軍するんです。それで、何でも先の話の時から半年位經つてからだと思ひます、多分十二月時分でした。或日、突然司令部から小隊長と分隊長とに至急出頭しろといふ命令が來ました。何だらうと思ひながら、二人で出かけて行きますと、私たちは例のいつかの副官の前に呼び出されました。副官には楠谷の事件の時切り會はなかつたものですから、それを見ると、忘れてゐたあの時分のことを一度に思ひ出しました。と、副官の方でも『大分昔の話だがね、』と彼は例の髭ににこ／＼した顏附で言ふのです。『そ

ら、この前に會つた時の將校斥候のことさ。どうだ、あの時倒した敵の將校は本當にあの圖嚢の外に何にも持つてゐなかつたのかい、今日は一寸必要があるから、本當のことを聞きたいんだが……？』だが、さう言はれても、もう隨分前のことですし、それにあんな事は謂はゞ××××事で、その後大きなのや小さなのや隨分戰爭の數を重ねて來たんですからね、一瞬間ちよつとその質問の意味が分らなかつた位ですよ。それに今頃になつて、何を聞くんだらうといふ程の考で、『はい、何にも持つてゐませんでした。』と甲田少尉はこの前の通りの答をしました。『本當に何にも持つてゐなかつたか？』と又副官は尋ねるのです。小隊長は少し面倒臭くなつたと見えて、『どうも、持つてゐたとしても、今更持つてゐたと言ふのは變ではありませんか。』と答へました。すると。副官は愈々はつきり頬に微笑を浮かべながら、『それぢや、それは持つてゐなかつたとしてもいゝから、どうだ、お前の…………もので、何か…………ものを俺に預けてくれんか。』と斯う言ふのです。こんな風に何も彼も知つてゐるらしくて、くだけた態度に出られると、どうも我々の方の態度がぐらつかない譯に行きません、流石の小隊長も一寸返答に窮したらしいのです。すると、副官の方で言葉をつゞけて言ふには、『いや、こんなことは戰時中のことだから。無論……へさへなければもう半年も前のことだしするから、今更野暮らしく言ひ出したくはないんだが、實は今度佛蘭西の觀戰武官を通して、司令部の方へ斯ういふ交渉が來てゐるんだ。といふのは、いつかの事件をその佛蘭西の武官が本國に報告したので、それが佛蘭西の新聞に載つたと見えるんだ。すると又、その新聞が×××に這入つて、その記事があの時戰死した將校の親父の目に觸れたんだ。その親父といふのが何でも×××の大した貴族とかで、何々大公とか言ふんだが、それがこの戰死したのは自分の伜に違ひない、然し伜も武人のことであるから、國の爲に戰死したことは名譽と思つてゐる。ところでその伜が國を出る時に、これこれ斯ういふものを持つて行つたと言つてね、』と副官はそこで傍に積んであつた書類の中から一枚の紙片を出して、

『こんな風にちゃんと品書がしてあるんだ。その中で、例へば頸飾とか、時計とか、さういふ戰爭に縁のないものだね望遠鏡などはかまはないよ、それを自分の家に伜の遺品として永久に保存しておきたい、と斯ういふんだ。書いてあるよ、――尊敬すべき日本軍隊はさういふ不用の品にしても、保管の任は盡してくれてあるだらうと思ふ、一應貴下（といふのは、この手紙を宛てた佛蘭西武官を指すんだ、）から日本軍隊に話して調査してもらひたい――それから、もう一つ、こんな事を言つて來てるんだ、といふのはその佛蘭西武官の報告といふのはいゝ加減與太なものらしいんだが、聞くところに依ると、自分の伜は日本の勇敢な將校を仆したといふ話である、して見れば伜と共に同じ戰場に死んだ、因縁の淺からぬ人と思ふ。就いてはその將校に對して、及び遺族に對して、敵味方を離れた、自分一箇人としての弔慰金としての年金を送りたいが、受けてくれるかどうかと言つて來てるんだ。どうだね、斯ういふ譯なんだが、』と副官はしたり顔に髯で被はれた唇をなめながら、『そんな譯だからさ、たとへ敵の將校が何にも持つてゐなかつたとしても、これはかゝり合つたものゝ損害として、君等が持つてゐる似寄りの物を提供してくれないと困るんだ。』と譯を話されて見ると、我々ももうそれ以上强情を張る譯には行きませんから、『提供いたします、』といふ外はなかつたのです。それで、馬鹿々しい話でゝすよ、折角のものだが、その後みんな提供してしまひましたがね、その時、一通りその話が濟むと、副官が又言ふには、『この敵の仆した勇敢な日本將校といふのは、『これやつまりあの時の一等卒のことを言ふんだらうな？』さうだらうと思ひます、』と答へる外ないぢやありませんか。『で、その弔慰金といふのはどういふ風にするのでありますか？』と甲田少尉が聞きますと、『弔慰金といつても、それが年金といふんだが、』と副官は例のにやにや笑ひをしながら、『まあ、それは斷るには當らないさ、何にしたつて、日本の功三級よりは多い位の金なんだからね。取組がよかつたんだよ、向うは何しろ大公といふんだからね、ハツハハハ』――

「つまりそれだけの話なんだすよ。さういふ譯で、楠谷一等卒は、日本の政府からは戰爭中の殊勳者として、功何級かの、位相應以上の金鵄勳章をもらつた上に、敵の方からは莫大な年金をもらつた、と斯ういふ話なんです、無論、今でも貰つてゐるでせうよ。（註、これは未だ×××帝政時代の話である。）

「で、あなたはその戰爭が濟んでからずつと此方に歸つて居られんですか？」と私は彼の話が一切りついたところで、斯う聞いて見た。

「いゝや、どうしてどうして、」と彼は言つた。「私もその時分は未だ年は若し、色んな柄にもない野心で腹の中が一ぱいでしたからね、もつともその時分は今見たいにお腹はこんなに出張つてはゐませんでしたが、戰爭が濟んでからも內地へは歸らないで、ずつと滿洲を彼方此方とうろついてゐました。色んな事をやつて見ましたよ、もつとも一つも成功しませんでしたがな。……」

「色んな事つて、どんな事です？」

「いや、それや色んなことですよ、」と彼は笑ひながら、それには答へないで、「かれこれ彼方で六七年もゐましたかな、それからやつと內地へ歸つて來て、さうです、東京にそれでも二年餘りゐましたが、こいつも何一つ物になりませんでした。――さうさう、東京にゐた時分にこんな事がありましたよ、先の楠谷の話ですがね、自分のやつた事が何も彼も失敗してしまつて、どうにも斯うにもならなくなつて、餘程窮したんですね、私はふと楠谷のことを思ひ出したんです。さあ、金にして二三百圓も借りるつもりでしたのかね、もう大分昔のことだからその邊のことは忘れてしまひまし

たが、日本橋の可成の紙問屋といふことを思ひ出してね、いろ／＼考へた爲、電話帳を見たらと思つたんです、そしたら直分りましたよ、で、早速出かけて行つたものです。思つたより立派な、といふより如何にも古風な、親代々の老舗らしい家なんです、店と並んで往來に面して土藏などの建つてゐる家でね、實はその家の構へを見た時から、私は少し氣遅れした心持でした。名刺を出して、主人に會ひたいと申込むと、私はひよつとしたら、もう私のことなど忘れてゐるかも知れないし、又覺えてゐたとしたら倘更のこと、居留守でも喰はすかも知れないといふやうな氣がしましたが、どうぞお通り下さいと言つて、それや大變叮嚀な扱ひ方で、立派な奧座敷に通されました。もの二十分も待つてゐると、出て來ましたよ、それが何と、羽織袴に着更へて、四角張つた挨拶をするぢやありませんか。『おゝ、楠谷一等卒か』とも私の方は言へません、意氣地のない話ですが、唯もうもぢ／＼してしまひました。何でも十年振り位で會つた譯ですが、楠谷の奴、髮の毛を奇麗に分けて、さういふ優男ですから、ちつとも年を取りませんよ、それどころか戰爭中と違つて風呂にも毎日這入つてゐるでせうし、身だしなみも缺かしてゐないでせうから、以前の優男が一層優男になつて、まるで役者ですな、最後に會つた時『今度隊に歸つたら人一倍働きます』とか、『勇敢にやります』とか言つたのも夢のやうにしか思ひ出せない位で、やつぱり昔通りの弱さうな、優男に戻つてゐるんです。が、もうこの優男は戰爭中ぢやないんですから、押しも押されもしない優男です。『御機嫌宜しうございます、御無沙汰して居りまして申譯ありません。その節は誠に言葉に盡せない程いろ／＼御世話になりまして……』などと、それが規丁簡な挨拶をするのです。そこへ同じやうに白襟で、紋付を着た奇麗な女がしとやかに現れて、『楠谷の家内でございます、始終楠谷からお世話になつたお噂をうかゞつて居ります』なんて挨拶でせう。私はすつかり固くなつてしまつて、金の無心どころか、手土産の一つも持つて行かなかつたのが極りが惡くなつた位で、後から考へて見ると、何だかぺこ／＼頭を下げて、固くなつ

て茶を飲んだことだけしか覺えてゐませんが、いや、私も戰爭には出ますし、おまけに滿州三界を六七年も廻つて來たものですが、氣の弱いのは子供の時分のまゝで、ちつともなほりません、斯うなると楠谷一等卒と何方がどうか分りませんよ。

「無論、その時だつて年金はもらつてゐたんでせうが、向うからもその話が出ませんでしたし、此方もそんな事を聞くことなんかとんと忘れてしまひました。何しろ、さあ三十分と坐つてゐませんでしたからな。向うでも別にそんな風にたくらんだ譯ぢやないんでせうが、私が歸ると言つたら、隨分夫婦して一所懸命に久しぶりだからと言つて、眞味に止めてくれた位ですが。……唯、その時にも、いつかの手紙のことだけは思ひ出しましたよ、だから、その奇麗な細君が挨拶に出て來た時には、あの時の小菊とか書いてあつたこれは藝者ぢやないかな、と心の中で疑つて見た位ですから。いや、あゝいふ風な家ですから、藝者など家には入れられないかも知れませんが、考へて見ると、あの細君は奇麗でしたが、割合に年をとつてゐたやうな氣がしました、いや、それも唯想像ですよ。「おい、楠谷一等卒、この女はいつかの手紙の人か？」とも聞けませんからね、ハツハツハハ、大笑ひですよ。」

そこで、私は附合ひに笑つて、「ぢやあ、此方へお歸りになつたのはいつ頃なんです？」と聞くと、

「歸つてからですか、もう十年からになりますよ。」と話手は無雜作に言つた。「楠谷のとこで失敗して間もなくですよ、矢張りどうしても金の入用が出來て、外に都合のつきやうがなかつたもんですから、そつと家へ取りに歸つたんです。元々私はこの養子なもんですから、とても親父にはそんな事は言へないんです。それに戰爭に行つたのはこの家へ來てからですからね、つまり女房を國に殘して出征したといふ譯なんです、それが戰爭が濟んでからもそんな風で、もつとも一二度一寸一週間ばかり歸つたことがありますがね、それも大抵金をこしらへにです、そして滿州あたりを飛び廻つて

居て、内地へ歸つてから合はして十年も留守にして居たんですから、とても養父に無心になど言つて來られた義理ぢやないんです。それで、夜になつてからそつと裏口から忍んで這入つて、女房に會つて、少しばかり金の都合をつけるつもりだつたんですが、その時養父に見付かつてしまつて、そのまゝもう東京に出ないので、斯うして引込んでしまつたやうな譯なんですよ、ハヽヽヽ。」

そして主人はふと立上つて、彼はそれ等の話の間、ずつと池さらへのまゝの裸でゐたので、「おゝ、少し寒くなつた」と獨言のやうに言つたかと思ふと、突然一、二、一、二！」と聲をかけながら、私に側面を見せて、體操を始めた。成る程氣の弱い人かは知らないが、體格は流石に立派なもので、その空の方に向いて居る胸を持つた、大きな腹は、そんなに大きい癖に決してたぶ〳〵ではなくて、「一、二、一、二！」と彼が手足を動かす度に、それが筋肉のやうに波打つのである。

「いゝ體格ですね。」と私が思はず感歎して叫ぶと、

「いや、もう駄目ですよ、年が年ですからね、」と彼は如何にも謙遜らしく言つた。「しかし、今でもこれで角力は自慢なんですよ。江見水蔭君も好きですな、あの男は痩つぽちの癖に、中々角力は好者ですよ。この向うの方にまだ土俵がありますが、あそこでよく取つたもんです。」言ひながら、彼は未だ體操をつゞけてゐたが、その時ふと體操を止めたかと思ふと、吃驚したやうに池の方を見て、「しまつた、鯉を上げたまゝにして、放してやるのを忘れた、」と獨言のやうに言つた。そして、私の方を向いて、「御免なさい、」と挨拶を殘して、その方へ驅けて行つた。

「お暇だつたら晩にでもお遊びに入らつしやい、」と彼は驅け足を中途で止めて、私の方を向きながら又言つた。「お好きなら、今度はコロボックルのお話でもしませう。」

（十一・二・八）

三つの遺書

武者小路實篤

○

この手紙を君が見る時には僕は生てはゐないと思ふ。僕はまだ死ぬとは思つてゐないのだが、死なないとも思つてゐないのだ。だからともかく書くことにする。今熱が高いし、脈も百を越してゐる。頭にはまるで集中力がない。それで書くことも要領を得ない處があると思ふが察してほしい。

いろ〳〵君には話したいことがあるのだが何しろ遠方なので困る。それに君も公用があると思ふから、來てもらうわけにはゆかない。この手紙は實は妻に内證でかく手紙なので、妻の居る時にはかけない。だからなほ要領の得ない處があると思ふ。

簡單に云ふと、僕は妻に内證で、一人の女を愛して、その女と僕の間に一人の男の子があるのだ。このことは君にさへうちあけなかつたことを許してほしい。なぜうちあけなかつたかと云ふと、僕がもつと長が生きが出來ると思つたからだ。僕は醫者に聞いた所によるともう一ケ月もこの世に生きてはゐられないらしい。僕は死

ぬことはさう恐れない。頭がぼんやりしてゐて、死ぬことをはつ切り感じられなくなつてゐる。

しかし僕は實は今死にたくない。死ねば見すく五人の人間を不幸にするからだ。第一は僕の妻である。そして二人の間の二人の子である。そしてあと二人は之から君におたのみしやうと思ふ。女と、その子である。女には君のことを話してある。實はこの手紙も女にたくして、僕が死ぬと同時に、書留で君に送るやうに、その女にこの手紙をあづけておくつもりだ。

僕の妻子は、誰かゞいゝやうにしてくれると思ふ。又僕のかいたものでも、賣れる時がくれば、その印税でも生活出來ると思ふ。

しかしこの手紙を君に送る女のことを考へると、僕には君にすがりつくより仕方がないのだ。僕が妻にうちあけずにその女と關係したことを非難してくれるのは甘受する。しかしその女を非難しないでほしい。そして清淨な女が、男を信じ切つたことを笑はないでほしい。君は僕を知つてゐてくれる。僕は君には云ひわけをしないでもいゝと思ふ。たゞ僕の望みは、この女が、T子と言ふ女の運命を君がある程度以上に不幸にしないでほしいと云ふことだ。女がゆきたい處が出來たら何處へでもゆかしてほしい。女が出來るだけいゝ男と結婚出來ることを僕はのぞんでゐる。しかしその時は、僕の子は君の所でひきとつてほしい

女が何處へもゆきたがらずに、僕の子を教育するのを一生の仕事にする氣でゐてくれたら、どうか、その女の希望を叶へてほしい。

僕は君が承知してくれることを信じ、二人のことは安心してゐていゝつもりでゐる。どうか、おたのみする。

僕が勝手なことをしておいて、勝手に君に重荷をおしつけることをすまなく思ふ。しかしいくら考へても他に道はな

い。君をたよるより他ないのだ。僕は生てゐる内に、君から承知したと云ふ返事をうけとれたらどんなに安心して死ねるだらうと思つてゐる。しかし僕はまだ生きられると思つてゐるのだ。生られる限り、自分で、自分のまいた種はかりたい。そして僕は君を腹の底で信じ切つてゐる。

僕は君に云ひたいことはいくらでもある。生前の君の友情を考へると僕は實に感謝する。僕が、よはつてゐる時はいつも君がなぐさめてくれた。僕は金がない時に、いつも君に無心をしたが、その時君は一度だつていやな顔は見せてくれなかつた。

それから僕の妻も、君をたよるかと思ふ。それも出來たら助けてほしい。僕は他に女をつくつておきながら、こんなことを云ふのを可笑しく思ふかも知れないが、僕は妻も實に愛してゐる。妻にはどの位い感謝してゐるか知れない。又心でどの位い謝罪してゐるか知れない。僕は實際、妻以外の女を愛した自分を呪ひたい。しかしT子のことを思ふと、僕は實にT子に感謝する。僕はT子がどの位い僕を愛し、僕を信じ、僕の爲に苦しんでゐてくれたかを知ると、僕は神の前に跪づきたい。

誰も不幸にしないでほしい。私はわるい人間であり、あたなの意志に背いた人間かも知れないが、どうか許して罰しないで下さいと祈りたい。

僕は君の家庭の幸福を喜び、祝福する。しかし僕は自分のふんで來た道を顧みて後悔はしないのだ。之はやむを得ない事實だつた。僕は他の道を通れなかつた。妻を淋しくはしたくなかつた。それかと云つてT子を思ひ切ることは出來ない。

妻以外に、愛する女に出逢はないものは仕合せである。出逢つても、その女から愛されないものは仕合せである。だ

が愛する女に逢ひ、その女に愛せられる男はなほ仕合せだと自分の本心は囁いてゐる。實際T子に逢つたことは僕には幸福すぎたのだ。またあんないゝ妻と結婚することが出來たのも、幸福すぎた。僕は、T子に逢はなかつたらどんなに幸福な家庭、美しい家庭をつくることが出來たらう。僕は家庭に滿足し切つてゐたのは事實だ。しかしT子に逢つてしまつた以上、又そのことはどんなにいゝことだつたらう。僕は妻に秘密にしてゐたことはすまなく思ふが、妻はそのために實に幸福にしてゐることを、自分はよろこんでゐる。

自分はあざむいた夫かも知れない。しかし妻にたいする僕の愛を君は疑ひはしまい。僕は妻のことを思ふと、愛と感謝でいつも涙ぐむ。僕は償ひしない、二人の美しく清い女性に、つゝしみ深かく守護されて今日まで來た。二人とも僕の仕事のよくゆくことを祈つてくれ、又そのために忍從してくれた。

君はこの事實に不快を感じるかも知れない。だが、その罪は僕にだけあればあるのだ。しかし今の僕にとつては罪だとか、罪でないとかは問題ではないのだ。たゞ〳〵僕は僕を信じたものを不幸にしたくないのだ。僕の子を生んだものを不幸にしたくないのだ。僕はその爲にはどんなことでもするつもりだつたが、死がこんなに早く來やうと思はなかつた。

僕は死ぬまでに少しは二人の生活出來るやうに金を用意しておくつもりだつた。しかし何かと入り用があるので、つぎ〳〵と出してゆく内にいつも一文なしになつてしまふ。T子は決して無駄遣ひする女ではないが、僕が死ねばその翌日からもう、金の入る所はあるまい。T子には兩親もないし、肉親の人と音信不通になつてゐる。兩親の內、母は七八年前になくなり、父は三四年前になくなつた。父の生てゐる内に僕と知りあいになり、お互に愛しあつてはゐたが、子が出來たのは父がなくなつて一年程たつてからだ。

だから實際の處、僕は死ねない身體なのだ。しかしいくら死ねない身體だつて、死んでしまへばそれまでだから困る。そしてこんなことを安心してたのめるのは君だけなのだから、僕の蟲のいゝおたのみを許してほしい。

僕はT子が僕を知り、僕を愛し、僕を信じ、一生をまかせてくれたことを、理屈なしに不幸にしたくない。君にしがみついても不幸にしたくない。殊に生れて來た子を不幸にしたくない。又不幸にしないですめるだらうと思つたから、僕は運命から與へられたものをよろこんでとつたのだ。

尤もT子自身はどうにか、やつてゆくつもりではゐる。どうにか又やつてゆくとも思ふ。しかし僕には見當がつかない。君が助けてくれゝば實にうれしいのだ。又それを信じ切つて死ねる自分を幸福と思つてゐる。うそなしに僕は君をたよつてゐる。君も不死な人間ではないことを十分知つてゐながら、君を不死の人間のやうにさへ思つてゐる。しかし人間の生命はあてにならないものだ。僕は利己的な意味からも君が長生してくれることをのぞんでゐる。又その爲に僕に働ける餘地が與へられてゐたら働きたく思ふ。そんなことが死んだ自分には出來ないとは思ふが、死んだ自分だから出來るかとも思ふ。

君の仕事のよくゆくことをのぞんでゐる。實際今の世は不安な世の中だ。金許りがたよりの世の中だから。尤も金は人間のやうに死なないからね。だがいつまで金の世の中がつゞくものか。

心配しては切りがないが、熱があつて頭がわるいので心配も痛切に出來ない。又人間は隨分虫がよく出來てゐるから心配しすぎると又何がいゝことがあるだらうと思ふ。

それから僕の男の子の教育は、T子と君と相談してきめてほしい。僕は當人の内に生てゐる生命にすべてを任せていゝと思つてゐるが、頭の質を緻密にし、根氣よくすることゝ、身體を丈夫にすることゝ、いぢけないことをのぞんでゐ

る。何をやつたつてかまはないが、空想にだまされない着實さと、自分の好きなことを十分やらしてもらいたい。特色のない人間だつたら一本立の質素な生活をする親切でしつかりした男になつてくれゝばうれしい。僕は何と云ふことなしに、その子に望みをおいてゐる。きつと何かしてくれると思ふ。俺よりも偉い人間になりさうに思つてゐる。

それからそんなことはないと思ふが、萬一T子が姙娠してゐたら、よろしくたのむ。男の子か、女の子が生れたら、男の子なら兄と同じやうに育てゝもらいたい。女の子なら、T女に任せてもらつていゝと思ふが、自分の運命を自分で荷へる女になつてほしい。何と云つても當人の内の生命の力より他に、何にも出來ないのだから、その力をよく生かしてほしい。

まだ云ひたいことが山のやうにあるやうにも思ふし、ないやうにも思ふ。皆、君にはわかつてゐてくれるやうに思ふから。

君の奧さんにくれ〴〵もよろしく、僕は君の奧さんを尊敬し、いろ〳〵今迄につくして下さつたことを感謝する。この手紙が君の目にふれた時には僕はこの世に居ないだらう。一度逢ひたく思ふが遠すぎる。もうこの手紙を渡さなければならない時が來た。

君の一家の幸福と、君の仕事のよくゆくことを望んでゐる。そして之から生てゆく人々の上にも幸福を祈らしてもらはう。

さよならとかきたい處だが、それもいやだからやめにする。僕は自分の子供達の上に希望をもつて歸るべき處に歸る　僕の文學の仕事は貧弱すぎたが、もうとりも　す暇もなささうだ。しかしこの頃ではそんなことはどうでもいゝやうだ。

僕の父は笑つて死んださうだが、僕も笑つて死ぬつもりだよ。運命さんは僕の味方だと思つてゐる。幸福をのぞむ。萬事よろしく。

T子からこの手紙にそへて手紙がゆくだらうと思ふ。すぐ返事してやつてほしい。

きりがない。もうおしまいにする。

○

T子。

俺は死なゝいつもりでゐる。お前達の祈りでも生られさうには思ふ。しかし人間はいつ死ぬものかわからない。だから用意だけはしておいていゝと思ふ。この手紙を見てもあまり氣にしないでくれ。

俺は今熱が高いから、又手紙をかくと熱がなほ高くなるから、なるたけ用事だけかいて、そして、あとは天命に任せてゆつたりした氣持で養生したく思ふ。

しかし正直なことを云つて、俺は今度は死ぬかとも思ふ。三十七でこの世から去つてゆくなぞとは俺には考へられなかつた。それでお前の運命を俺は喜びの山の絶頂までもつていつて、そして俺の妻とも無二の友達にして見せるつもりでゐた。少くも俺達は七八十迄は生て見るつもりだつた。そして子供達が立派な男になつて、生てゐるのを見るまでは生るつもりでゐた。

俺はお前に時々、俺が死んでからの話をしたが、あれはお前がどの位い俺を愛してゐてくれるか、又お前がどの位い決心の強い女かと云ふことを知るのをよろこびたいためだつた。死ぬ氣なんてとてもなかつた。

俺は生れない前から生れ、死んでもなほ生きられる人間のやうな氣がしてゐた。

今だつて死んでも何處かで生てゐられるやうにも思つてゐる。

T子。俺はお前が俺を信じてゐてくれたことを深かく感謝する、殊にSを生んでくれたことを實に感謝する。俺がお前の愛に報いられない分を、Sが報いてくれさうに思ふ。

Sはきつと立派な男になつてくれるだらう。

こゝに同封してある手紙は、俺がもし死んだら俺がいつも話てゐた、宮崎にゐるAの處に送つてくれ。あの男はたよりになる男だ

お前はまだ若いから、今後、誰かを戀しないとも限らない、その時はSをAの所にあづけてほしい。しかしそれまではAはきつとお前の生活を助けてくれるだらう。Aは無二の親友の最後の願ひを　ばむやうなことはしまい。萬々が一Aがそれを拒んだとしたら、俺はこの世に信じることの出來る人間を見出すことは出來ない。あとはお前を導く運命だけた。その時は俺の妻や友人に何にもかも打ちあけてほしい。そして運命の前に大膽に突進してほしい。死ぬ覺悟はお前には出來てゐるはづだ。俺はSは是非お前に育てゝもらいたく思つてゐるが、Sの内にある生命は、どんな運命が與へられてもきつと生てゆくことを俺は迷信してゐる。俺はお前の愛を信じてゐないのではないが、自然のいたづらを知りすぎてゐる。俺は妻を愛してゐながらお前を愛させたものが、お前の内にも働かないとは限らない。俺はお前が不幸になることを實におそれる。それと同時に、幸福になることを實に望んでゐる。

お前は俺の田舍にゐる遠い親類の一人の女のやうな顏して、未亡人のやうな顏をして俺の處へこの手紙つき次第、たづねて來てほしい。何か土産物をもつて。

俺は熱があつて頭がぼんやりしてゐるが、お前の顏が見たいし、妻と仲よしにしておきたい。今迄一度もお前を妻に

逢はせなかつたことが、幸ひになつてゐる。お前は俺をたよつて出て來たことにおし、嘘つくのはいやだらうが、一人の人の幸福にはかへられない。そして俺の世話を少しでもやいてもらうためにはそれより仕方がない。俺はどうかして逢ひたいと思つて考へたのが、この嘘である。だから許してくれ。

逢つた時、機會がゆるせばいろ〳〵話すが。たゞ顔を見て、聲をきけばそれでいゝのだ。俺は實によくしてもらつてゐる。

つい餘計なことをかく。今日かきたいのはそんな呑氣なことではないのだ。

少し頭がつかれたから、又あとでかく。

俺はお前が俺に逢つたことを、實に天與の幸福だと思つてゐる。そしてそのことで、誰をも不幸にしたくないのだ。殊にお前を不幸にしたくないのだ。いくらないと云つても、事實、今俺が死んだらお前は不幸になりさうにも思ふ。しかし運命の神の細工と云ふものは俺たちにはわからないものだ。

何が幸福になり、何が不幸になるか、俺たちにはわからない。思はない處に運命はひらけるものだ。だから俺は俺が死ぬことがお前を不幸にするなぞと考へるのは生意氣な話かも知れない。

ともかくどんな時でも絶望しないでほしい。絶望すると云ふことは一番の罪である。殊にSが絶望しやすい男になつては仕樣がない。お前は出來るだけ快活にし、そして運命から與へられたものを根氣よく生かしてほしい。

Aから毎月金をもらつたにしても、それで決して卑屈な心をもつてはいけない。Aはそんな男ではないのだから、當然、もらうべき顔してもらへ。しかし恩は恩として思へ。Aの一家に萬一、そんなことはないと思ふが、不幸があつたら、その時、Sがしつかりした男になつてゐたら、その恩を報いることが必要だ。しかしAの家がちやんとしてゐる間は、その恩は他の方法で返せ。つまり、出來るだけ質素にくらすことで、又出來るだけSを立派に育てることで。

しかし要するに子供と云ふものは、自分の内にある生命力で生るもので、内にないものはどうすることも出來ない。だから云ふことをきかない時も、よくその素質を見て、そのいゝ素質が育つやうにしないといけない。いぢけたり、卑くつになるのは一番いけない。

Aが東京にゐるといゝのだが、遠いので困る。しかし萬事、自分の一存でゆかないことはAに相談しろ。俺は守れたら勿論、お前達の幸福を守つてやるつもりだ。出來るだけ身體を大事にしておくれ。お前は之から任務が重くなる。決心強く生きなければいけない。

俺はお前にはあやまりたいことだらけだがお前は許してくれるだらう。俺にとつてお前が居てくれたよろこびは、どんなに強いよろこびだつたらう。

俺はお前を俺に與へてくれたものに、深く深く感謝する。そしてそのものが、Sを地上におどり出さしたことを深かく深かく感謝する。Sは俺の希望の星の最大のものである。

俺はふと昨日からお前の胎内に一つの生命が芽ばへてはしないかと思つた。何かそんな夢でも見たのだらう。あてにはならないが、もしさうだつたら、お前の重荷はますく重くなつて氣の毒だが、それも、希望の野に咲く最も美しい花になるだらう。

俺はどうしてから樂天家なのだ。俺をつくつてくれたものに、このさいでも感謝したい。お前達を守護してゐてくれるものを信じるから、俺は腹の底で安心してゐる。目をつむると、輝くものゝ光りが、お前達をとりかこんでゐるやうな幻が見へる。お前は自分の運命を信じて生ていつてくれ。

そしてこの俺の樂天的な氣質と、自己を鍛へてゆく性質がSにつたはり、お前の優しさと、忍從と、靜かさとがつたはつてゐる以上、Sの運命を俺は信じてまちがいないと思つてゐるよ。

俺程仕合せものはなかつた。償へしないよろこびと、幸福と、希望と、愛が俺の一生をとりかこんでゐてくれた。深かく、深かく感謝する。

○

我が子よ

お前は　通に生れなかつたと云つて悲觀するやうな子になつてはいけない。私のやうな幸福な家庭に生き、その上に品行方正だつたものが、又お前のお母さんのやうな純潔な處女が、お前を生むやうなことをしたのを見ても、お前はこの世に生れる因緣が他の人より深かつたことを知つていゝと思ふ。

お前は兩親を恨んではくれまい。又私達を不名譽な人間にしたがりもすまい。

お前は私達を愛してくれるだらう。

それを切に切にのぞんでゐる。殊にお前のお母さんを愛して上げてくれ。それからお前の生長のために直接、間接に働いてくれた人のこらずに感謝してほしい。

生た以上は、生たと云ふ事實を出來るだけ貴く味はつてくれ。

私はお前の内に、生てゐる生命を信じる。それは私の内に生たがつて生られなかつたものをこの世に生かしてくれる力をもつてゐると思ふ。私は生てお前の成功を見ることは出來ないが、死んだが故にお前を守護することは出來ると思ふ。お前の心が純粹によろこんだ時、私の心もよろこんでゐるのだと思つてくれ。何事もくよ〳〵せず、役に立たないことに頭をつかはずに、役に立つことに頭をつかうやうにし、身體をよくしてくれ。

お前が何をしても私はうれしいが、なるべく正面から自己を生かすやうにしてくれ、そして自分の仕事には何處までも忠實であつてくれ。又何處までも忠實になれる仕事をさがしてくれ。どんな仕事だつて、間接、直接に人間に役に立

つものならいゝ。

しかしそんなことはお前の内の生命の方が私よりよく知つてゐるだらう。

之からお前はどんな目にあふか知らないが、無責任ものにはならないでくれ。

お前が生れたことを私達はどんなによろこんだか知れない。そのよろこびをお前は最も深い根據のあるものにしてくれるだらう。

人生に愛想をつかす時がもしあつたら、同じ運命で地上に生かされたものゝ運命に同情し、愛するやうにしてくれ。

そして人間に生れたことを少しでもよろこび多いものにしたく思つてくれ。

俺は自分の一生の傳記をすつかりくつて見て、最後の頁をくらうとしてゐるが、お前は之から最初の頁をあけやうとしてゐる。その希望に滿ちた手よ。思慮深かく、大膽に、しかしおちついてその頁をめくつてゆけ。

何が其處にかゝれるかはお前の力による。

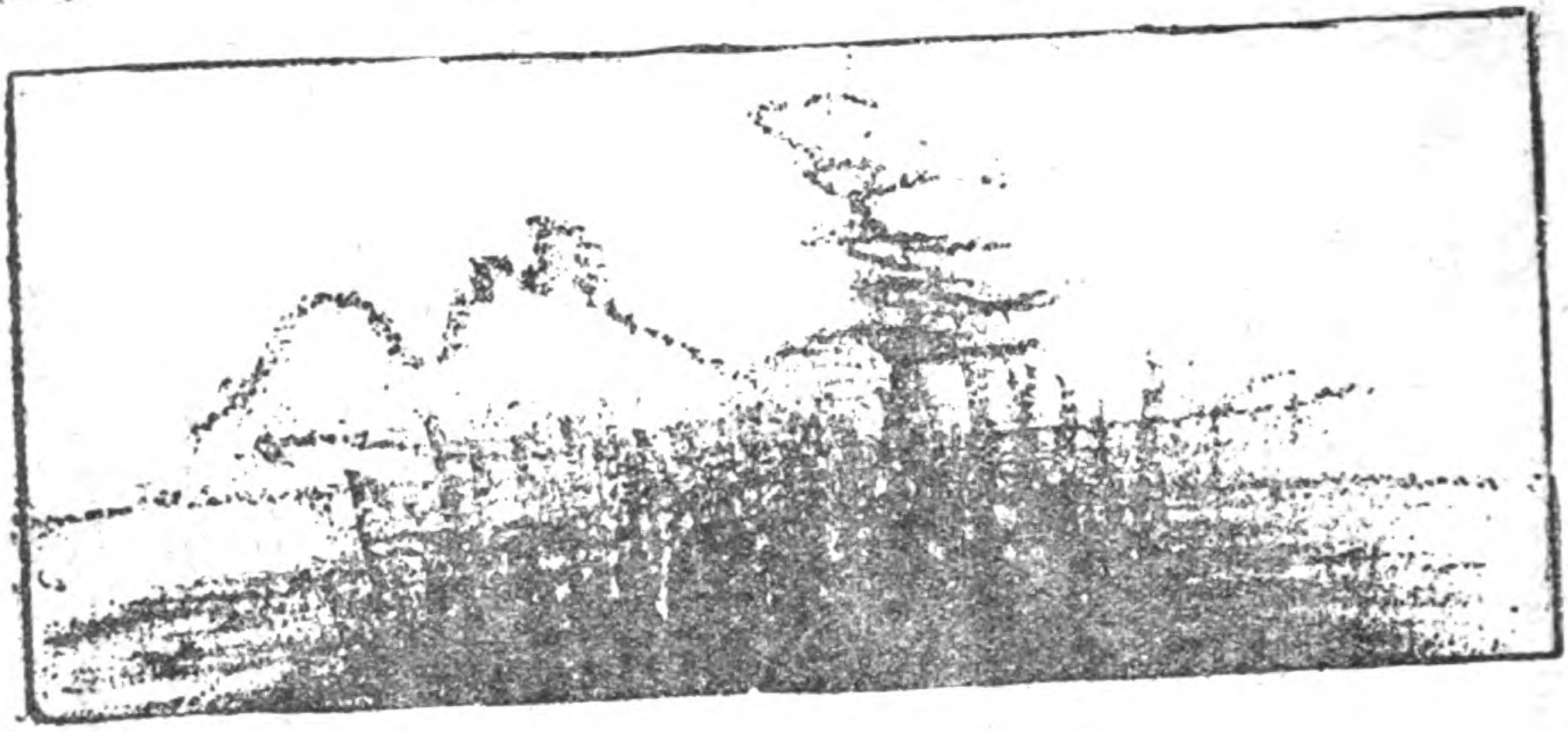
私は自分の最後の頁をあけるのを恐れはしない。其處には大くの希望の花が咲いてゐるから。私のまいた種は小さいが、何處かにはへる。私の肉身の子供達は希望にもへておどつてゐる。

お前のお母さんのちがう兄弟にも愛をもつてゐてくれ。その愛の生かし方はお前に任せる。死んで行く父を愛して、父の勝手な要求を笑つてうけとつてくれ。

生きることは樂でない時があるだらう。だが、何處かに希望の星はかゞやいてゐるものだ。力強く生き、運命に許された範圍で、男らしい男になつてくれ。釋迦、耶蘇、孔子、ソクラテス、その他、人間として實に立派に生き、何ものも恐れずに生き切つた人のことを常に思ひ出せるやうに用意して、自分がこんな人間があつたらいゝと思へる人間に、自分を築き上げるやうにしてくれ。

愛するわが子。

希望をもつて死んでゆく父より。(一三、一一、三〇)



ヴエランダ

ふたつの宗像の喜劇

長谷川如是閑

人物

宗像A
宗像B　後に宗像

絹江（伊波男爵令嬢）

眞白なヴエランダ。高い軒。左右前面に柱。正面中央の前方は三段程の石階後方は左右に外へ、開く硝子扉。閉めてある。その内側は硝子を透して眞赤なカーテン。ヴエランダの左右兩端は、廊下と直角に各扉。左寄りの柱近くに藤のテーブルに藤椅子二脚。

一面に青白い月の光。寧ろ暗い。

左右の扉が同時に開いて、同じ色の寢間衣（パイジャマス）を着た同じやうな恰好の、同じやうな相貌らしい人影二つ現はれる。互に同じ歩調で中央に近く歩み寄つて相對して立つ。

左の人　やゝ今晩は。

右の人（曖昧に）　やゝ……

左の人　いやに澄してゐるね。
右の人　君は誰れだつたかね。
左の人　アツハツハ。忘れたのかい？
右の人　見たやうだが。何うも思ひ出せない。
左の人　宗像だよ。
右の人　宗像？　宗像は僕だが……
左の人　さうだよ。僕は君だよ。番號をつけるなら、君が宗像Aで僕が宗像Bでいゝ。
宗像A　僕が宗像A？　君が宗像B？
宗像B　さうさ。わかつたらう。
宗像A　わからない。
宗像B　要するに僕は君で、君は僕なんだよ。
宗像A　からかつたちや困る。
宗像B　からかやしないよ。よく見たまへ。
宗像A、宗像Bの姿を頭から足の先まで見あげ見下ろす。
宗像B（顔を月の光に照らして）それこの通り、君だらう。（兩手を差出し、兩足を代る〳〵舉げて見せて）さうれ、何處が違つてゐる？
宗像A（ブルブルツと身慄ひして。）……

宗像B　何もそんなに驚くことなんかありやしない。元來君は君に違ひなかろう。その君が僕なんだから、君が君である如く僕が君なのだよ。

宗像A（慄へのやまない樣子で、）有り得べからざることだ。

宗像B　現に此の通り有り得てゐるぢやないか。（身體を宗像Aの方へ乘り出して見せる。）

宗像A（タチ〳〵として、が無理に威猛高になつて、）惡魔め、退散しろ！

宗像B　こいつは驚いた。誰れが惡魔なんだい？　誰れが退散するんだい？

宗像A　知れたこと貴樣がだ。

宗像B（にや〳〵笑つて、）僕が退散したつて君が殘つてゐちや、惡魔はやつぱりそこにゐるんだよ。

笑ひ顏で凝と宗像Aの顏を見つめる。

宗像A（ふるへ聲で）退散しろ！…

宗像B（聲を出さずに大口をあいて笑つて、）フフン（鼻を鳴らす）

宗像A（一層ふるへ聲で）退……散……し……ろ……

宗像B　駄目だ〳〵。そんなこつちやとても惡魔は退散しまひぜ。

ジロ〳〵宗像Aを見る。宗像A頻りに慄へる。

宗像B（なほ宗像Aを眺めながら）こいつは少し訝しくなつて來たぞ。（突然、聲を尖らして）おい！　一體君は……

じり〳〵と宗像Aの方へ進み寄る。宗像Aタチ〳〵と退く。

宗像B（低音の重味のある聲で）君は誰れだ。

宗像A（高音の慄え聲で）宗像だ。

宗像B　宗像は俺だ（強く）貴様は誰れだ。

宗像A（敗けない氣で、然しかすれ聲で）俺が宗像だ。

宗像B　はつきり云へ。誰れだ！

宗像A（立ち懐んで）……

宗像B（割れるやうな聲で）惡魔め、退散しろ！

宗像A　Bャ!!ロooo!!!（尻餅をつく。）

宗像B　アツハツハツハツハ！

宗像B宗像Aを助け起す。

宗像B（物靜かに）君はほんとうに宗像Aなんだらうね。

宗像A（やゝ落いて。）全く僕はその宗像Aなんだ。

宗像B　贋物ぢやあるまいね。

宗像A　決して、それ（顔を突き出して）間違ひないだらう。（兩手を差出して、代る〳〵足をあげて）それこの通り。

月の光が明くなる。

宗像B　いやに明るくなりやがつた。（宗像Aを態とらしく見あげ目下ろして）よし、間違ひないんだ。……自分を向ふに廻してはつきり眺めるつてものは、あんまりいゝ氣持のもんぢやないね。

宗像A　だから誰れもそんなことをするものはゐなんだよ。

宗像B　違ひない。僕達は寧ろ運がわるいんだな。

宗像A　一體何うしてこんなことになつてしまつたんだらう。

宗像B　それは此家のせいだよ。殊に此のベランダは一番奇蹟を働くんだ。このヴエランダの左の入口のドアを或る數字に當る時刻に內から開ける運命にある人間は、それをすると同時に自分が二つになつて兩方から出て來るのだ。

宗像A　或る數字に當る時刻てへと？

宗像B　目に鼻を加へたものに口をかけて耳で割つた數さ。

宗像A　變挺な數だね。それは何時何分のことだい？

宗像B　誰れが知るもんか。さつき僕達があすこをあけた時刻がそれなんだ。……そんなことは何うでもいゝ。…今夜は僕は頭痛がして何うしても寢つかれなかつたので、少し頭を冷やしに外の冷めたい空氣に觸れやうと思つてあすこの扉を開けたんだが……

宗像A　何んだい　それは僕のことだよ。僕は今夜頭ががん／＼して……

宗像B　だから僕のことなんぢやないか、君は僕なんだもの。

宗像A　だつて君は僕だけれど、君は態々向ふへ廻つてあすこのドアを開けた方の僕ぢやないか。頭の痛んだのは此方のドアをあけた方の僕だ、それは僕なんだよ。

宗像B　何を云つてるんだい、頭の痛んだ僕と痛まなかつた僕が二つあつたんぢやないよ。同じ僕があの時刻にそつちのドアをあけたんで二つになつたのぢやないか。

宗像A　さうだつたかね。

宗像B　何しろ立話しはくたびれる。此の椅子にかけてゆつくり話さう。

二つの宗像は、テーブルの方へ進まうとする途端に階段の處で一方が足をすべらしたので、他方がそれを救はうとして、二つの宗像が抱合ひながらグル〳〵と廻る。漸く踏み止つて、再びヴエランダに列ぶ。

宗像B　しつかりしたまへ。あぶなくすつてんころりとやる所だつた。

宗像A頻に考へる。

宗像B　何を考へてゐるんだい？

宗像A　今二人でクル〳〵廻つたんで、何方が僕だつたか君だつたか一寸わからなくなつた。（自分の肩をゆすつて）こつちが僕かしら。

宗像B　ウツフ。何方でも同じことだからいゝぢやないか。まあかけたまへ。（右の方の椅子へかける）

宗像A（左の方の椅子にかけて宗像Bをヂロ〳〵見ながら）何うも、そつちの方が僕らしいな。

宗像B　ぢや取りかへつこしやうか。アハツハツハ。

宗像A（ポケツトを探つて）あうやつぱり僕の方が僕だつた。（紙煙草入を取出して）それ僕の煙草入があつた。（蓋をあけて）ちやんと五本殘つてゐる。

宗像B　僕のこれかい。（同じ紙煙草入をポケツトから取り出して蓋をあけて、）ちやんと五本殘つてゐる。

宗像A　さあ、わからない！

宗像B　同じ僕でも、君はちと頭がわるいね。……そんなことはいゝにして、少し要件を話したいんだ。……今君は隨分煩悶したね。

宗像A　さうさ。愈々明日は返事をしなければならない日だからね。實際弱つたよ。

宗像B　で僕達は、もう何うしても態度を決めなければならないのだ。

宗像A　それを何うきめたらいゝのだらう。僕は此の一月はたゞ面喰つて暮らしてしまつた。

宗像B　それはさうだよ。テーブル一つの身代で、間借り生活をしてうろつき廻つてゐた男が、俄かにホテルのやうな洋館住ゐをして、美人たちにかしづかれて、毎日御馳走は喰ひあきる、夜は毎晩、聽いたこともないピヤノをやたら聽かされるのはいさゝか閉口だが、美しい令嬢達を見てゐるだけでも眼の保養だ。誰れかに抱つこされてゐるやうな大椅子に埋まり込んで、甘い酒や辛い酒に醉ぱらつて、ピヤノの音や美人の笑ひ聲をうつら／＼と聞くなんて、まるで夢だね。

宗像A　こんな事にならうとは全く夢のやうだ。僕に遠い親戚があるといふことは聽いてゐたが、それがあの地震で死んだ大金持の伊波男爵だとは全く思ひもよらなかつたし、其上、その男爵が子供の時、僕の親爺に助けられた恩返しだといつて、僕に百萬圓の財産を分けてやるといふ遺言狀を作つてゐたといふのだから全く驚いちやつたよ。恐ろしく嬉しいことには違いないんだらうが、何分にも餘り急激で、やけどをしたんだか水をぶつかけられたんだか、一寸見當がつかなかつたよ。

宗像B　西洋なんかにはザラにある話なんだが日本ぢや一寸珍らしいね。然しその遺言狀に、同時に自分の私生兒のうちの一人を貰はなければいけないなんて條件をつけたのは、やつぱり日本でなければ見られない圖だな。

宗像A　さアそこだよ。僕達の煩悶するのは。伊波男爵の親切はありがたいが、僕にはもう他に固い約束をした女があるんだからね。百萬圓が欲しいからつて、その女をすてる譯には行かないぢやないか。

宗像B　女をすてる譯に行かないからつて、百萬圓を欲しがらない譯にゃ行かないしな。
宗像A　僕は此の一月といふものは、隨分而喰はせられながらも、考へるだけは全く瘦せるほど考へたよ。何の因果でこんな苦しい思ひしをしなければならないのかと思つたね。あの遺言問題が起るまでの僕の生活といふものは、そりや貧乏は甚しかつたさ。然し一生懸命身體を働かしさへすれば食ふだけには不自由はしないし、さうして時々あの可愛いふうちやんに逢へば、日頃の生活の苦勞なんかは拭いて取つたやうに忘れてしまうし、百萬圓は愚か百圓の金だつて無理に欲しいと思つたことなんかありやしなかつたんだよ。それを君、伊波男爵家に引取られてからといふものは、何一つする仕事もなくて、君のいふ通り、お馳走を喰ひあまつて、甘い酒だの辛い酒だのを飮みあきて、ピアノを聽いて、小說を讀んで、人生の意義について議論をして、愛や自由の哲學を美人の口から聽いて、居睡りをして鼻をつままれて、……ねへ君、朝から晩までそんなことをしてゐるばかりなんだが、それでゐて何うも僕は苦しくて〳〵ゐたゝまれないよ。
宗像B　それは君が氣が小さ過ぎるのだ。なあに君、百萬圓だらうが、千萬圓だらうが、ちつとも驚くことはありやしない。さういふ金持の腹から產れたと思やいゝぢやないか。僕は平氣だよ。
宗像A　君の平氣なのが僕には一層苦しいんだよ。
宗像B　君は苟くも僕ぢやないか。そんな意氣地のないことでは僕を辱かしめるといふものだ。
宗像A　何んなに君に罵られても僕は苦しいのだから仕方がないよ。ふうちやんだつて、交換手になつてあの病人の母親を養つてゐたのに、地震以來失職して鼻緖の內職で指をはらしてゐるぢやないか
宗像B　だからふうちやん親子は、僕が貢いでやればいゝぢやないか。百萬圓もあればそんなことはお茶の子だ。

宗像A　君は情けないことをいふね。君は僕だといつてゐるが、そんな僕を僕の目の前に見せられちや、僕は生きちやゐられない氣がするよ。君は僕ぢやないよ。

宗像B　「悪魔め退散しろ」かい？　アハッハ。

宗像A　ふうちやんは、いくら貧乏したつて、自分を欺した人間から、金はおろか塵葉一つだつて貰やしないよ。誰れだつてそんな奴の恩惠なんか受けるもんか。僕はこのまゝぐつ〳〵になると、ふうちやんを欺したことになるんだ。僕がもし伊波男爵の遺言通りに、百萬圓を貰ふ爲めに、男爵の末子の絹江さんと結婚することになれば、ふうちやんは生きちやゐやしないよ。僕もふうちやんと一緒でなければ、何が面白くて生きてゐれると思ふ。君が僕ならよく知つてゐる筈ぢやないか。

宗像B　それなら、君は結局何うしやうといふのだね？

宗像A　解つてるぢやないか。明日にもこんな家を出てしまうんだよ。百萬圓なんか何んだ。あんな奇麗な令孃達だつて、みんな百萬圓の幽靈なんだよ。あのピアノだつて百萬圓の鳴る音だよ。絹江さんのあの鈴のやうな笑ひ聲だつて百萬圓が笑つてゐるのだよ。あゝいやだ〳〵。僕はもう明日此の家を出るよ。

宗像B　君は今、若い男と女の一度は罹る病氣に罹つてゐるんだ。ふうちやんの爲めなら何もいらない命もいらないなんて、馬鹿〳〵しい。そんなことは今二三年の間の話だよ。今に君の身體から狐が離れたらポカンとして「ふうちやんて何處の女だい」なんていふに定つてゐる。百萬圓の方は、何年經つたつて百萬圓だよ、狐がついてゐたつて百萬圓。離れたつて、百萬圓だよ。君だつて萬更欲しくないこともないんぢやないか。

宗像A　それは欲いに違ひないさ。殊に貧乏と組打ちばかりしてゐたんだもの、つく〴〵金が欲しいと思つたこと

は何度だかわかりやしない。けれども生れて此の方、稼いで取つた金の外に金といふものを持つたことがないんだからね。若も稼ぎもしないのに金をくれるツてものに今日が日まで出喰したこともなかつたがね。萬一そんなものに出喰はしたらつて「俺は乞食ぢやねへぞ」ッて云つてやつたらうよ。全く僕達の世界ぢや、乞食の外に、稼がずに金を貰つてゐる人間はないんだからね。

宗係B　そりや僕達の仲間にないだけの話だよ。一寸一足ふみ出して世間を見ればもうほんとうに稼いで金を取つてゐるものなんかありやしないんだよ。第一僕達の主人がさうぢやないか、僕達に働かして、自分は十倍がりの會社を月に二三度づつ盲判を捺して歩いてゐるんぢやないか。下宿の隣りの大きい屋敷の博士は、他人の本を讀んで、それを人に講釋してゐるうちに、あんな大きい邸が出來ちやツたんだ。いつも自動車に藝者や女優と相乘りで通るあの男は嘘を書いて金を儲けたんだ。僕達のやうなのばかりが人の役をしてゐるんぢやないんだよ。がそんなことは今問題にするには當らない。伊波男爵家から百萬圓と娘を貰ふのが何んでそんなに苦しいんだ。二つとも男爵家には何うでもいゝものなんだ。人に遣つたつて男爵家には蚊に喰はれたほどの影響もないんだ。それを僕が貰へば、今まで僕にはとても出來なかつた人間の仕事が大に出來るといふものだ。それだけ人間と世の中を益することになるんぢやないか。自分の掌に入つた珠を、毛虫でもつかませられたやうにふり落してしまう奴があるかい。

宗像A　百萬圓貰つたつて僕には使ひ途がないんだよ。十圓も貰へばふうちやんに着物の一枚もかつてやるんだが……

宗像B　アッハッハ大きにさうだが、それは僕達が貧乏してゐたからだよ。百萬圓も持つてゐる身分になれば、すぐとそれ相應な使ひ途を發見するよ。人間の器量は要するに財產によるものなのだ。太閤だつてナポレオンだつて、

地位と同時に金が出來るんで偉くなつたのさ、貧乏してゐたらとても朝鮮を征伐しやうの、歐洲を統一しようのツて氣になれるもんぢやない

正面の扉の鍵を外す音が聽へる。二つの宗像は驚いて立ち上つて、宗像Bは逸早く左の口から入る。宗像Aは右の口へ向ふとして戸迷ひしてマゴ〳〵してゐる。

正面の扉をあけて、眞白ろなナイトガウンを着た絹江が現はれる。

絹江　やつぱり宗像さんだつたのね。あなたお一人？　私今夜何うしてか寢むられないの。あんまりいゝお月夜だから一寸外へ出て見たくなつて、こゝのドアを明けやうとしたら、あなたの御聲がしたんで、何方かとお話しをしてお出でだと思つたわ。おひとりだつたの？

宗像A（どぎまぎしながら）一寸獨り語をいつてゐたんです。

絹江　あらさう。（疑り深くそこらを見廻す）でもほんとうにいゝお月夜だことね。かういふ晩に寢てゐるのはほんとうに惜しいわね。でも少し寒いこと。

絹江、態とらしく身をちゞめて宗像により添ふ。宗像おづ〳〵とトを退く、絹江寄つて行く。

絹江　まあ透きとほるやうに空が澄んでゐることね。私かういふ月夜の晩には變な氣になつてよ。

宗像A　どんな氣になるんです。

絹江　どんな氣ツてちよいと云へないわ。嬉れしいやうな悲しいやうな、寂しいやうな幸福なやうな、誰れか戀人ど懐かしいやうな……憎くらしいやうな……私何うしたらいゝだらう。

身體をゆすつて、宗像Aの方へよろけかゝる。宗像Aマゴついて絹江の方へよろける。二人強く觸れ合つてすぐと離れる。が接近

して立つ。

絹江　私何うしたらいゝだらう。變な氣になつたわ。ねへ宗像さん。

宗像A　（警戒して身構へながら）ど……どんな氣になつたのです。

絹江　すきな、すきな、しんから、しんからすきな人とたつた二人きりで、（宗像Aの腕を抱へ込んで）かうやつて手を組んで、ぶうらり〳〵と（宗像Aと二人でヴエランダを下りる。）月の光を浴びて歩き廻りながら、歌をうたつてすきな人に聽かしてあげたいの。

宗像A　聽かしてあげたらいゝでせう。

絹江　ほんとうにいゝ？

絹江、宗像Aと腕を組んで歩きながらうたふ。

絹江　一絃が鳴る。

命を顫るへる糸のふるへ。

胸で抑へれば胸がしびれる。

青く燃えるしらべを、

あらしが吹きまくる。

次第にふるえ聲になつて、うたひ終るか終らぬに、絹江宗像Aの腕に顔を伏せて泣く。

宗像A絹江をいたわりながらヴエランダを上つて、正面の扉をあけて入る

一分と經たぬうち、右と左の口から同時に宗像Aと宗像Bとが現はれる。宗像Bは酒の罎とコップを一つ手にしてゐる。

宗像B　さア大いに祝賀の意を表さなくちやならなくなつたぞ。こんなものをさらつて來た。（酒を見せて）相當コツプが一つだが、交る代るやらう。まあ掛けやうや。

二人前のやうに腰をかける。

宗像B　僕には實は、大なる懸念があつたのだ。もし絹江孃が僕達を嫌つて結婚を拒んだ時には、百萬圓はフイになるんだからね。遺言狀にはちやんとそのことが條件になつてゐると、あの鹿爪らしい辯護士の奴がぬかしてゐた。所がすべてオールライトだ。さア〱祝杯を擧げやう。

宗像B、酒をコップについで、先づ自分が飲み乾して直ぐにコップを宗像の前へ置いて酒をつぐ。

宗像B　さア飲んだ〱。

宗像A外方を向いて飲まうともしない。

宗像B　飲まんかい。飲まんなら僕は代理で飲むぞ、（飲む。）

宗像A　怨めし相に宗像Bを見る

宗像B　おい〱君は何を泣つ面をしてゐるんだい。緣起でもない。

宗像A　あゝ僕は苦しい、僕は何うしたらいゝんだ。（身をふるはせる）

宗像B（セセラ笑つて）熱でも出たか。

宗像A　絹江は僕を愛してゐるんだ。絹江は……僕を……

宗像B　で僕達はおめでたいのだが……頗る御愁傷の體とは、一體何うしたんだい。

宗像A　僕は君の聲をきくのがいやだ。君の姿を見るのもいやだ。ゾツとする。消へて無くなつてくれないか。賴む。

宗像B　場合によつてはなくなつてあげてもいゝが、全體君ほど變な人間はないよ。さつきは百萬圓、今度は絕世の美人、素敵なものといふと君はきまつて排斥するんだね。(酒を何杯もついでは、グイ〳〵飲む)

宗像A　戯談をいふのは、よしてくれ。僕はもうどうしていゝかわからない。

宗像B　だから、百萬圓と絹江孃を貰へばいゝんだ。(飲む)

宗像A(ムッとして)君は眞面目でそれを云ふのか。

宗像B　君こそそれで本氣なのかい。世間の奴等は、首位しめられても、今君の嫌つてゐるものを手に入れやうとしてもがいてゐるんだぜ。人から指もさゝれずに、そんなものを安々と手に入る機會が目の前にぶら下つてゐるんだ。

宗像A　それは惡魔の作つた機會だ。……あゝ僕はもう君と口を利くのもいやだ。

宗像B(ムッとして)それなら默つて俺に任かせるがいゝ。

宗像A　あゝ俺の惡魔め、俺はもう貴樣と一緒に生きちや行かれない。

宗像B(醉の廻つた様子で)何だ。俺と一緒に生きちや行けない。おい、貴樣は俺を殺す氣だな。(立ち上る)

宗像A(ふるえ聲で)何をいふ、此の惡るもの!

　　月が暗くなる。

　　宗像Aフラ〳〵と立ち上つて正面の方へ横に歩みながら、

宗像A　ふうちやん!ふうちやん!早く來て、私を連れて行つておくれ。私は一人では逃げられない。私の惡魔が私をつかまへて放さない。

　　宗像Aヴエランダを下りやうとして、走り出しさうな姿勢で體を屈める。

宗像B、正面に廻つてA、宗像の前に立ち塞つて、いきなりその上にのしかゝる。二つの宗像が少時揉み合ふ。宗像Aは宗像Bに押しつぶされて共に倒れる。やがて起き上ると、一人の宗像になつてゐる。

宗像　意氣地なしの癖に惡く骨を折らせやがつた。(着物を拂ひながら)然しこれでまあ厄介拂ひだ。あんな足手纏ひな奴は片づけてしまうに限る。(身慄ひして)おゝ寒む。おかげで折角の醉がすつかりさめてしまつた。(椅子にかけて、罎の口から飲む。)えゝと何んてつたつけな。

　青く燃えるしらべを、
　あらしがふきまくる。

絹江の鼾聲を眞似ながら、テーブルに俯伏せになる。そのまゝ眠る。橙黄色の朝日がヴェランダの上の方を薄く照らす。

正面中央の硝子扉をエプロン姿の女中が内から外へ左右に開く。眞中で別れる長い眞赤なカーテンが室内を隱してゐる。女中退く。絹江、カーテンを分けて現はれる。朝の珈琲を乘せた盆を持つてゐる。

絹江　まあ、やつぱりこゝに寐ておいでだわ。

盆をテーブルに置いて宗像Bをゆり起す。

宗像　あゝあ。(欠伸をする)

絹江うしろから兩手で宗像Bの眼を隱す。

宗像(絹江の手を撫でゝ)　絹江さん?

絹江(絹江手を離して)　今お部屋へ行つたらお留守でしたから、屹度こゝでせうと思つたのよ。ゆうべはずつとここにおいでだつたの?

宗像　ハツクショ。

絹江　お風を召してよ。熱い珈琲を持つて參りましたわ。

宗像　何うもありがたう。ゆうべはあんまり月がよかつたので、つひこゝで（椽を指し）ちびり〳〵やつてゐるうちに寢てしまつたものと見えます。（珈琲をのむ。）あゝすつかり眼がさめました。どうです。あなたもこゝでおあがりになつては。

絹江　さうね（卓子の上のベルを鳴らす。）朝のひやりとした空氣は、何といふ爽やかないゝ氣持でせう。

宗像　夜中から慢性に冷やされてゐたんで、ちつと爽やか過ぎますな。

女中　おめしでございましたか。

絹江　あゝ。私の珈琲をこゝへ持つて來て。

女中　畏りました。（退く）

絹江　ほんとうに靜かな朝ですこと。まるで、人間やけだものなんか一つも住んでゐない遠い〳〵國へ行つたやうぢやなくつて。

宗像　人間やけだものなんか？　フフーン。（トーストを取つて指の先でちぎる。）

女中珈琲を運んで絹江の前に置いて去る。

絹江　でももう少し經つてきら〳〵と月が當つて來ると、そこら中に、人間だのけだものだの、うぢや、うぢや、うぢや、うぢ……

宗像　へエー。

絹江　けだもの同士もうるさいでせうけれど、人間同士もずいぶん煩るさいわねえ。

宗像（躊躇しながら）實は、お嬢さん、その人間同士の件で……

絹江　「お嬢さん」なんて。私名があつてよ。

宗像　では絹江さん。

絹江　伊波絹江。

宗像　アツハツハ。今朝はひどく突撃されますね。……で短刀直入に申しますが、私はもう決心しました。長い事迷つてゐましたが、最後の返事を伊波家に對して申しあげなければならない日が愈今日なので……

絹江　最後の返事つて、何の？

宗像　例のその……あなたの私と結婚の問題についてゞす。

絹江　私とあなたが？　結婚？

宗像　はあ、それについて私はこの一と月の間晝夜考へさせられました。私のやうな人間が、果して莫大の財産と、さうして絶世の……いやあなたのやうな美しい方とに値するや否や、私は苦しんだのです、私はもだえたのです。

朝の赤い光線が、宗像の顔を正面から照らしつける。絹江は凝つと宗像の顔を見てゐたが、急に反對の側に顔をそむけて、上向きになつて考へ込む。

宗像（つゞける）あなたは屡私の臆病な態度をお笑ひになりました。けれども私は、どうしても勇氣が持てませんでした。私の道徳心は、絶えず私を抱きすくめてゐました。「莫大の財産。お前は少しも自分の汗を絞らずに、それをつかみ取る權利を何處から得やうとするのだ」そんな聲が絶えず私の耳に響きました。「さうだ、私は斷然拒絶しやう。」私は何度さう決心したか知れません。けれども……けれどもです……（絹江の方をチロ〳〵見ながら）私には何うしても、私の心の裡の隅に

従ふことが出來ない譯があるのです。戀をするものゝ決心ほど當てにならないものはありません。「何もかも振りすてやう」何度そんなことを決心したつて駄目です。私は進むことも退くことも出來ない破目に陷りました。……處がです。その意氣地のない私に勇氣を與へて下すつたのはあなたです。ゆふべの月夜は、私にとつては世界のはじめの光りでした。

絹江は、外むけてゐた顏を、怖る〱のやうに宗像の方へむける。宗像の顏にはまだ赤い朝日が當つてゐる。絹江はそれをチラと見ると、再びあはてたやうに外方を向く。

宗像（つゞける）あの、あなたの、天使のやうな聲……

絹江（急に大膽に宗像の方に向いて）それ、何んのおはなし？

宗像　へエー？

絹江　もうよして頂戴！私なんだか焦ら〱して來たわ。（珈琲を一口飲んで）あらこげ臭い。（烈しくベルを鳴らす。）

女中　ハイ。

絹江　この珈琲は何うしたの？こげ臭くて飲めやしないわ。

女中　では新しく熬つてお入れかへしませう。

絹江　この珈琲がこげ臭いつていふんぢやないの？　こんなに黑燒にした珈琲誰れがお好きなの？

女中　何うも濟みません。

絹江　誰れかお好きの方があるのつて聽くのよ。あるのなら私もこれからこういふ風に熬るわ。

宗像　いや中々結構な珈琲のやうですね。

絹江（宗像の聲をきくまいとするやうに態とらしく身體をひねりながら）人間に飲めるやうにお熬りなさいよ。

女中　ハイ。(退く)

絹江　では失禮。(立ちかける)

宗像　(慌てゝ)まあ絹江さん、一寸の間何うか。今迄二人きりでゆつくりお話をする機會がありませんでしたが……

絹江　よかつたわね。

宗像　いやこれは……。然しです、絹江さん、私達……つまりあなたと私とは、伊波男爵の遺言によつて結婚をすることになつてゐるのは確定の事實で、たゞそれはあなたがそれを承諾されるや否やに繫つてゐる譯で……

絹江　何んですか辯護士の議論のやうね。

宗像　ハイ伊波家の辯護士から聽いたのです。「重ねて申しますと」、辯護士はさう私にいひました。「男爵の遺言によると、宗像の長男と伊波の末女とが結婚することを條件として此の遺贈が成り立つ譯です」ツてね。

絹江　おとうさんがそんな勝手なことを云つたつて、私知るもんですか。おとうさんは私の仇です。でも私のお母さんの仇なんですもの。(とステツキに鞭をふるせる。)今のお母さんは。あれは私のお母さんぢやないんです。あれはお姉さんのお母さんだわ。いゝえさうぢやない。お姉さんのお母さんは、何處かで死んでしまつたんです。今のお母さんは仲の兄さんのお母さんだわ。そんなこと何うでもいゝわ。あゝ、私のお母さんは何處に居るんでせう。(両手を顔にあてゝ泣く)

宗像(獨白)こんな筈ぢやなかつたに。(絹江に向って)ねへ絹江さん。今更らそんな古い事をお考へになつたつて仕方ありません。あなたはあんまり覺えがよ過ぎる。昔の事は忘れてしまうに限ります。

絹江(手を顔からはなす)私忘れてゐたんだわ。お父さんはお母さんの仇だけれども、死んでしまつたから、すつかり許してあげたのに、お父さんの方ぢや、死んでまで私に仇をするなんて。いゝわ、私もうこんな家にゐないから。誰れもか

れも皆お母さんの仇なんだわ。誰れがこんなとこにゐるものか。(立ち上る)

宗像(慌てゝ) まあ絹江さん。短氣を起してはいけません。こんな家にゐるもんかッて、一體何處へ行かれるのです。私は何處へでもあなたの行かれる所へは喜んで一緒に參ります。

絹江(聞へないふりで) たつた一人きりで世界中を廻つて歩かう。お母さんは屹度見つかるわ。日本にゐなければアメリカかフランスかイタリーか、何處かにゐるに違ひない。お母さんが見つかるまで、私は歩るいて、歩るいて、命のつゞく限り歩るき廻るわ。

宗像(獨白)金がつゞくまい。(絹江に)まあ、そんなことをいはずに、落付いて此の家で今までのやうに仲好く暮らさうぢやありませんか。そんな世界巡禮なんかおやめなさい。第一旅費を何うなさる。

絹江 あのイタリーの田舍で見た女のやうに、ギターをひきながら歩るけばいゝわ。

宗像 ウツフ。(危うく噴き出さうとして堪へる)困つたお孃さんですね。ギターなんか彈いて世界中廻つて歩けるものなら、日本には一人も人間が居なくなつてしまうでせうよ。さあ、そんなわからないことを仰つしやらないで、いつものやうに面白ろいお噺でもしてきかして下さいな。

絹江(ギターを彈くまねをしながら唱ふ)

　惚れたお前の足あと嗅いで、
　野山さすらひ蓬をわけて、
　彼ッちへ行つちやクン〳〵
　此ッちへ行つちやクン〳〵

宗像(呆れる)……

絹江（ さようなら（行きかける）

宗像（立ち塞つて）まあ、まあ、一寸何うか……ゆふべまであなたはあんなに私に親切にして下すつたのに……

絹江　あらさうでしたの？　私ちつとも覺へてゐませんわ。古い事を覺へてゐるなツて、今しがた何處かのお馬鹿さんに云はれたもんですから、皆忘れてしまひました。

宗像　これは手厳しいシツペい返しですね。でもいつでもあなたはいろ〳〵なお話を私にして下すつて、私が居睡りをしたら、あなたのそのダイヤの指環の光つてゐる白魚のやうな指で、私の鼻をつまんで下すつたぢやありませんか。

絹江　まあいやだ！　此の指で？　（自分の右手の人差指の根を氣味惡るげに左の手で抑へて）屹度此指は、あなたの鼻に觸わつた所から腐れ込んで、落ッこつてしまうに違ひないわ。私何うしやう、あゝいやだ。（指先を邪慳にふる。）

宗像　これは驚きましたね。でもゆふべあなたは私と腕を組んで、あなたの濕ひ掌が私の冷めたい掌とぴつたり……

絹江　おゝ身體がゾク〳〵する。北極から掘り出したミイラの手のやうな、冷めたい、冷たい、カサカサな手に、もし私の手がさわつたのがほんとうなら、お墓のやうな冷めたさが私の手先から身體中に廻つて、私はもう凍へ死んでゐたでせう。おゝ考へてもぞつとする。

宗像　でもゆふべは……

絹江（媚びるやうに笑つて）そんなにゆふべが御覽になりたければ、私がもう一度見せてあげてもいゝわ。

宗像（有頂天で）そ、それはほんとうですか、

絹江　ほんとうよ。……一寸お眼をつぶつて。

宗像　あゝありがたい。（眼をつぶる。）

　　絹江、そつと正面入口のカーテンの内に入る。

宗像（眼を開いて）　やゝ大變、百萬圓に逃げられた。

　　驅け出さうとして、階段を踏み外づして、此方向きに尻餅をつく。

　　カーテンの内でヒステリックな笑聲。

ホツホツホツホツホツホツホツ。



三右衛門の罪

芥川龍之介

文政四年の師走である。加賀の宰相治修の家來に知行六百石の馬廻り役を勤める細井三右衛門と云ふ侍は相役衣笠太兵衛の次男數馬と云ふ若者を打ち果した。それも果し合ひをしたのではない。或夜の戌の上刻頃、數馬は南の馬場の下に、謡の會から歸つて來る三右衛門を闇打ちに打ち果さうとし、反つて三右衛門に斬り伏せられたのである。

この始末を聞いた治修は三右衛門を目通りへ召すやうに命じた。命じたのは必しも偶然ではない。第一に治修は聰明の主である。聰明の主だけに何ごとによらず、家來任せと云ふことをしない。みづから或判斷を下し、みづからその實行を命じないうちは心を安んじないと云ふ風である。治修は或時二人の鷹匠にそれぞれみづから賞罰を與へた。これは治修の事を處する面目の一端を語つてゐるから、大略を下に抜き書して見よう。

「或時石川郡市川村の青田へ丹頂の鶴群れ下れるよし、御鳥見役より御鷹部屋へ御注

進になり、若年寄より直接言上に及びければ、上様には御滿悅に思召され、翌朝卯の刻御供揃ひ相濟み、市川村へ御成りあり。鷹には公儀より御拜領の富士司（よりつな）の大逸物を始め、大鷹二基、鷂二基を擎へさせ給ふ。富士司の御鷹匠は相本喜左衛門と云ふものなりしが、其日は上様御自身に富士司を合さんとし給ふに、雨上りの畦道のことなれば、思はず御足もとの狂ひしとたん、御鷹はそれて空中へ飛び揚り、丹頂も俄かに飛び去りぬ。この樣を見たる喜左衛門は一時の怒に我を忘れ、この野郎、何をしやがつたと罵りけるが、忽ち御前なりしに心づき、冷汗背を沾すと共に、躊躇してお手打ちを待ち居りしに、上様には大きに笑はせられ、予の誤ぢや、ゆるせと御意あり。猶喜左衛門の忠直なるに感じ給ひ、御歸城の後は新地百石に御召し出しの上、組外れに御差加へに相成り、御鷹部屋御用掛に被成給ひしとぞ。

「其後富士司の御鷹は柳瀨清八の掛りとなりしに、一時病み鳥となりしことあり。或日上様清八を召され、富士司の病はと被仰し時、既に快癒の後なりしかば、すきと全治、唯今では人をも把り兼ねませぬと申し上げし所、清八の利口をや憎ませ給ひけん、夫は一段、さらば人を把らせて見よと御意あり。清八は爾來やむを得ず、己が息子清太郎の天窓にたたき餌小ごめ餌などを載せ置き、朝夕富士司を合せければ、鷹も次第に人の天窓へ舞ひ下る事を覺えこみぬ。清八は取り敢ず御鷹匠小頭より、人を把るよしを言上しけるに、そは面白からん、明日南の馬場へ赴き、茶坊主大場重玄を把らせて見よと御沙汰あり。辰の刻頃より馬場へ出御、大場重玄をまん中に立たせ、清八、鷹をと御意ありしかば、清八は此處ぞ富士司を放つに、鷹は忽ち眞一文字に重玄の天窓をかい掴みぬ。清八は得たりと勇みをなしつつ、圓揚げ（圓トハ鳥ノ肝ヲ云）の小刀を隻手に引拔き、重玄を刺さんと飛びかかりしに、上様には柳瀨、何をすると御意あり。清八はこの御意をも恐れず、御鷹の獲物はかかり次第、圓を揚げねばなりませぬと、猶も重玄を刺さんとせし所へ、上様には忽ち震怒し給ひ、筒を持てと御意あるや否や、日頃御鍛錬の御手銃にて、即坐に清八を射殺し給ふ。（註參照）

第二に治修は三右衛門へ、ふだんから特に目をかけてゐる。嘗て亂心者を取り抑へた際に、三右衛門外一人の侍は二人とも額に傷を受けた。しかも一人は眉間のあたりを、三右衛門は左の横鬢を紫色に腫れ上らせたのである。治修はこの二人を召し、神妙の至りと云々褒美を與へた。それから「どうぢや、痛むか？」と尋ねた。すると一人は「難有い仕合せ、幸ひ傷は痛みませぬ」と答へた。が、三右衛門は苦にがしさうに、かほどの傷も痛まなければ、活きてゐるとは申されませぬ」と答へた。爾來治修は三右衛門を正直者だと思つてゐる。あの男は兎に角巧言は云はぬ、頼もしいやつだと思つてゐる

かう云ふ治修は今度のことも、自身かう云ふ三右衛門に仔細を尋ねて見るより外に近途はないと信じてゐた。

仰せを蒙つた三右衛門は恐る恐る御前へ伺候した。しかし悪びれた氣色などは見えない。色の淺黒い、筋肉の引き緊つた、多少猜猾のあるらしい顔には決心の影さへ仄めいてゐる。治修はまづかう尋ねた。

三右衛門、數馬はそちに闇打ちをしかけたさうぢやな。すると何かそちに對し、意趣を含んで居つたものと見える。何に意趣を含んだのぢや？」

「何に意趣を含みましたか、しかとしたことはわかりませぬ。」

治修はちよいと考へた後、念を押すやうに尋ね直した。

「何もそちには覺えはないか？」

「覺えと申すほどのことはございませぬ。しかし或はああ云ふことを怨まれたかと思ふことはございまする。」

「何ぢや、それは？」

「四日ほど前のことでございまする。御指南番山本小左衛門殿の道場に納會の試合がございました。その節わたくしは

小左衛門殿の代りに行司の役を勤めました。尤も目録以下のものの勝負だけを見屆けたのでございまする。數馬の試合を致した時にも、行司はやはりわたくしでございました。」

「數馬の相手には誰がなつたな？」

「御側役平田喜太夫殿の總領、多門と申すものでございました。」

「その試合に數馬は負けたのぢやな？」

「さやうでございまする。多門は小手を一本に面を二本となりました。數馬は一本もとらずにしまひました。つまり三本勝負の上には見苦しい負けかたを致したのでございまする。それゆゑ或は行司のわたくしに意趣を含んだかもわかりませぬ。」

「すると數馬はそちの行司に依怙があると思うたのぢやな？」

「さやうでございまする。わたくしは依怙は致しませぬ。依怙を致す譯もございませぬ。しかし數馬は依怙のあるやうに疑つたかとも思ひまする。」

「日頃はどうぢや？そちは何か數馬を相手に口論でも致した覺えはないか？」

「口論などを致したことはございませぬ。唯、…………」

三右衛門はちよつと云ひ澱んだ。尤も云はうか云ふまいかとためらつてゐる氣色とは見えない。一應云ふことの順序か何か考へてゐるらしい面持ちである。治修は顏色を和げたまま、靜かに三右衛門の話し出すのを待つた。三右衛門は間もなく話し出した。

「唯かう云ふことがございました。試合の前日でございまする。數馬は突然わたくしに先刻の無禮を詫びました。しか

し先刻の無禮と申すのは一體何のことなのか、とんとわからぬのでございまする。又何かと尋ねて見ても、數馬は苦笑ひを致すより外に返事を致さぬのでございまする。わたくしはやむを得ませぬゆゑ、無禮をされた覺えもなければ詫びられる覺えもなほ更ないと、かう數馬に答へました。すると數馬も得心したやうに、では思違ひだつたかも知れぬ。どうか心にかけられぬ樣にと、今度は素直に申しました。其時はもう苦笑ひよりは北叟笑んでゐたことも覺えて居りまする。」

「何を又數馬は思ひ違へたのぢや？」

「それはわたくしにもわかり兼ねまする。が、いづれ取るにも足らぬ些細のことだつたでございませう。——その外は何もございませぬ。」

其處に又短い沈默があつた。

「ではどうぢやな、數馬の氣質は？　疑ひ深いとでも思つたことはないか？」

「疑ひ深い氣質とは思ひませぬ。どちらかと申せば若者らしい、何ごとも色に露はすのを恥ぢぬ、——その代りに多少激し易い氣質だつたかと思ひまする。」

三右衛門はちよつと言葉を切り、更に言葉をと云ふよりは、吐息をするやうにつけ加へた。

「その上あの多門との試合は大事の試合でございました。」

「大事の試合とはどう云ふ譯ぢや？」

「數馬は切り紙でござりまする。しかしあの試合に勝つて居りましたら、目錄を授つた筈でございまする。尤もこれは多門にもせよ、同じ羽目になつて居りました。數馬と多門とは同門のうちでも、丁度腕前の伯仲した相弟子だつたのでございまする。」

治修は少時默つたなり、何か考へてゐるらしかつた。が、急に氣を變へたやうに、今度は三右衛門の數馬を殺した當夜のことへ問を移した。

「數馬は確かに馬場の下にそちを待つてゐたのぢやな？」

「多分はさやうかと思ひまする。その夜は急に雪になりましたゆゑ、わたくしは傘をかざしながら、御馬場の下を通りかかりました。丁度又伴もつれず、雨着もつけずに參つたのでございまする。すると風音の高まるが早いか、左から雪がしまいて參りました。わたくしは咄嗟に半開きの傘を斜めに左へ廻しました。數馬はその途端に斬りこみましたゆゑ、わたくしへは手傷も負はせずに傘ばかり斬つたのでございまする。」

「聲もかけずに斬つて參つたか？」

「かけなかつたやうに思ひまする。」

「その時には相手を何と思つた？」

「何と思ふ余裕もございませぬ。わたくしは傘を斬られると同時に、思はず右へ飛びすさりました。足駄ももうその時には脫いで居つたやうでございまする。と、二の太刀が參りました。二の太刀はわたくしの羽織の袖を五寸ばかり斬り裂きました。わたくしは又飛びすさりながら、拔き打ちに相手を拂ひました。數馬の脾腹を斬られたのはこの刹那だつたと思ひまする。相手は何か申しました。……」

「何かとは？」

「何と申したかはわかりませぬ。唯何か烈しい中に聲を出したのでございまする。わたくしはその時にはつきりと數馬だなと思ひました。」

「それは何か申した聲に聞き覺えがあつたと申すのぢやな？」
「いえ、左樣ではございませぬ。」
「ではなぜ數馬と悟つたのぢや？」
治修はぢつと三右衛門を眺めた。三右衛門は何とも答へずにゐる。治修はもう一度促すやうに、同じ言葉を繰り返した。が、今度も三右衛門は袴へ目を落したきり、容易に口を開かうともしない。
「三右衛門、なぜぢや？」
治修はいつか別人のやうに、威嚴のある態度に變つてゐた。この態度を急變するのは治修の慣用手段の一つである。
三右衛門はやはり目を伏せたまま、やつと噤んでゐた口を開いた。しかしその口を洩れた言葉は「なぜ」に對する答ではない。意外にも甚だ悄然とした、罪を謝する言葉である。
「あたら御役に立つ侍を一人、刀の錆に致したのは三右衛門の罪でございまする。」
治修はちよつと眉をひそめた。が、目は相不變嚴かに三右衛門の顏に注がれてゐる。三右衛門は更に言葉を續けた。
「數馬の意趣を含んだのは尤もの次第でございまする。わたくしは行司を勤めた時に、依怙の振舞ひを致しました。」
治修は愈眉をひそめた。
「そちは最前は依怙は致さぬ、致す譯もないと申したやうぢやが、……」
「そのことは今も變りませぬ。」
三右衛門は一言づつ考へながら、述懷するやうに話し續けた。
「わたくしの依怙と申すのはさう云ふことではございませぬ。ことさらに數馬を負かしたいとか、多門を勝たせたいと

かと思はなかつたことは申し上げた通りでございまする。しかし何もそればかりでは、依怙がなかつたとは申されませぬ。わたくしは一體多門よりも數馬に望みを嘱して居りました。多門の藝はこせついて居りまする。如何に卑怯なことをしても、唯勝ちさへ致せば好いと、勝負ばかりを心がける邪道の藝でございまする。數馬の藝はそのやうに卑しいものではございませぬ。どこまでも眞ともに敵を迎へる正道の藝でございまする。わたくしはもう二三年致せば、多門は到底數馬の上達に及ぶまいとさへ思つて居りました。……………」

「その數馬をなぜ負かしたのぢや？」

「さあ、其處でございまする。わたくしは確かに多門よりも數馬を勝たしたいと思つて居りました。しかしわたくしは行司でございまする。行司はたとひ如何なる時にも、私曲を抛たねばなりませぬ。一たび二人の竹刀の間へ、扇を持つて立つた上は、天道に從はねばなりませぬ。わたくしはかう思ひましたゆゑ、多門と數馬との立ち合ふ時にも公平ばかりを心がけました。けれども唯今申し上げた通り、わたくしは數馬に勝たせたいと思つて居るのでございまする。云はばわたくしの心の秤は數馬に傾いて居るのでございまする。わたくしはこの心の秤を平らに致したい一心から、自然と多門の皿の上へ錘を加へることになりました。しかも後に考へれば、加へ過ぎたのでございまする。多門には寛に失した代りに、數馬には嚴に過ぎたのでございまする。」

三右衛門は又言葉を切つた。が、治修は默然と耳を傾けてゐるばかりだつた。

「二人は正眼に構へたまま、どちらからも最初にしかけずに居りました。その内に多門は隙を見たのか、數馬の面を取らうと致しました。しかし數馬は氣合ひをかけながら、鮮かにそれを切り返しました。同時に又多門の小手を打ちました。わたくしの依怙の致しはじめはこの刹那でございまする。わたくしは確かにその一本は數馬の勝だと思ひました。が、

勝だと思ふや否や、はや、竹刀の當りかたは弱かつたかも知れぬと思ひました。この二度目の考へはわたくしの決斷を鈍らせました。わたくしはとうとう數馬の上へ、當然擧げる筈の扇を擧げずにしまつたのでございまする。二人は又少時の間、正眼の睨み合ひを續けて居りました。すると今度は數馬から多門の小手へしかけました。多門はその竹刀を拂ひさまに、數馬の小手へはひりました。この多門の取つた小手は數馬の取つたのに比べますと、弱かつたやうでございまする。少くとも數馬の取つたよりも見事だつたとは申されませぬ。しかしわたくしはその途端に多門へ扇を擧げてしまひました。つまり最初の一本の勝は多門のものになつたのでございまする。わたくしはしまつたと思ひました。が、さう思ふ心の裏には、いや、行司は誤つては居らぬ、誤つて居ると思ふのは數馬に依怙のある爲だぞと囁くものがあるのでございまする。……………」

治修はやや苦にがしげに、相不變ちよつと口を噤んだ三右衛門の話を催促した。

「それから如何致した？」

「二人はまたもとのやうに、竹刀の先をすり合せました。一番長い氣合のかけ合ひはこの時だつたかと覺えて居りまする。しかし數馬は相手の竹刀へ竹刀を觸れたと思ふが早いか、いきなり突を入れました。突はしたたかにはひりました。が、同時に多門の竹刀も數馬の面を打つたのでございまする。わたくしは相打ちを傳へる爲に、まつ直に扇を擧げて居りました。しかしその時も相打ちではなかつたのかもわかりませぬ。或は先後を定めるのに迷つて居つたのかもわかりませぬ。いや、突のはひつたのは面に竹刀を受けるよりも先だつたかもわかりませぬ。けれども兎に角相打ちをした二人は四度目の睨み合ひへはひりました。すると今度もしかけたのは數馬からでございました。數馬はもう一度突を入れました。が、この時の數馬の竹刀は心もち先が上つて居りました。多門はその竹刀の下を胴へ打ちこもうと致しま

した。それから彼是十合ばかりは互に鎬を削りました。しかし最後に入り身になつた多門は數馬の面へ打ちこみました。

…………」

「その面は？」

「その面は見事にとられました。これだけは誰の目にも疑ひのない多門の勝でございまする。數馬はこの面を取られた後、だんだんあせりはじめました。わたくしはあせるのを見るにつけても、今度こそは是非とも數馬へ扇を擧げたいと思ひました。しかしさう思へば思ふほど、實は扇を擧げることをためらふやうになるのでございまする。二人は今度も少時の後、七八合ばかり打ち合ひました。その内に數馬はどう思つたか、多門へ體當りを試みました。どう思つたかと申しますのは日頃數馬は體當りなどは決して致さぬゆゑでございまする。わたくしははつと思ひました。又はつと思つたのも當然のことでございました。多門は體を開いたと思ふと、見事にもう一度面を取りました。この最後の勝負ほど、呆氣なかつたものはございませぬ。わたくしはとうとう三度とも多門へ扇を擧げてしまひました。——わたくしの依怙と申すのはかう云ふことでございまする。これは心の秤から見れば、云はば一毫を加へたほどの吊合ひの狂ひかもわかりませぬ。けれども數馬はこの依怙の爲に大事の試合を仕損じました。わたくしは數馬の怨んだのも、今はどうやら不思議のない成行だつたやうに思つて居りまする。」

「ぢやがそちの斬り拂つた時に數馬と申すことを悟つたのは？」

「それははつきりとはわかりませぬ。しかし今考へますると、わたくしは何處か心の底に數馬に濟まぬと申す氣もちを持つて居つたかとも思ひまする。それゆゑ忽ち狼藉者を數馬と悟つたかとも思ひまする。」

「するとそちは數馬の最後を氣の毒に思うて居るのぢやな？」

「さやうでございまする。且は又先刻も申した通り、一かどの御用も勤まる侍にむざと命を殞させたのは、何よりも上へ對し奉り、申し譯のないことと思つて居りまする。」

語り終つた三右衛門は今更のやうに頭を垂れた。額には師走の寒さと云ふのに汗さへかすかに光つてゐる。いつか機嫌を直した治修は大様に何度も頷いて見せた。

「好い。好い。そちの心底はわかつてゐる。そちのしたことは悪いことかも知れぬ。しかしそれも詮ないことぢや。唯この後は——」

治修は言葉を終らずに、ちらりと三右衛門の顔を眺めた。

「そちは一太刀打つた時に、數馬と申すことを知つたのぢやな。ではなぜ打ち果すのを控へなかつたのぢや？」

三右衛門は治修にかう問はれると、昂然と淺黒い顔を起した。その目には又前にあつた、不敵な赫きも宿つてゐる。

「それは打ち果さずには置かれませぬ。三右衛門は御家來ではございまする。とは云へ又侍でもございまする。數馬は氣の毒に思ひましても、狼藉者は氣の毒には思ひませぬ。」



愛憎二ならず

里見弴

秋の夜。

星あかり。

森のなかの少し打開いた場所。

美しい、二十四五の女が、人待顔に、五六歩の間を往きつ戻りつしてゐる。

風なくして自然と枝を離れる落葉。極めて靜なる蟲の音。

三十二三の男（甲）が、樹蔭から樹蔭へ身を隱しながら忍びよる。

女、心づき、透し見る。

人影なし。落葉。蟲の音。

女、また歩きだす。我が足ならぬ足の、落葉を踏みしめる音を聞きたる心地にて、急に振り向く。

時に、樹間を掠むる人影を認む。危惧の念に充たされつゝ、低聲に、

女。だアれ？

答なし。女、急に逃げ出さうとする。甲、躍り出でゝ追ふ。すぐ捕へられる。

甲。（息がはづんでゐる。）なぜ逃げるんだ。

女、無言、いきなり振り捥つて、もう一度遁走を企てる。甲、追ひ、一旦下手に入り、あまり間をおかず、叫聲とゝもに、女の體が、投げ飛ばされたやうに舞臺へ轉がり出る。甲つゞいて出る。

甲。（血相が變つてゐる。）なんにも、云ふことも聞くこともない。お前だつて、覺悟はしてゐるだらう……。

覺悟と云ふ言葉で、蹲つたまゝの女の體が、きゆつと縮まり、蒼白い顔が甲をふり仰ぐ。口が喘いでゐる……。

甲。なにも、いまさら驚くことはないだらう。もし俺以外の男を好きになつたら、殺すよ！　と云つてあつたね？

女。（ガク〳〵と頷き、同時に、身を膝行り退のきつゝ。）ですから。あたし……。

甲。（それには頓着なく。）誰でもよく云ふことで、千人に一人も實行する者のない言葉だ、惚れた女の耳に囁く男のお座なりだ、——まさか、さう思つてたと云ふんぢアあるまいな。

女。（かぶりを振る。ぢり〳〵といつか舞臺中央へ近く膝行つて來る。）

甲。（これもぢり〳〵と、四五尺の間隔を保つてついて行く。）よし、それぢア、信じてゐたと云ふんだな。

女。ですけど……。

甲。ですけど？

答を待つ。女の唇、徒に戰く。

甲。言葉としては信じられたが、實行としては信じられなかつたんだらう。（間。）今こそお前は、俺がほんとうに信じられて來た筈だ。俺が、お座なりなんぞ云ふおつちよこちよいでないと云ふことが……、俺の熱情に懸値なんぞなかつたと云ふことが……。

女。（急に半身おきあがり。）ですからあたし……、あたし、ほんとうにいけない人でした……。

甲の足もとに泣き伏す。甲、冷然と見おろす。落葉と蟲の聲。

女。でも、どんなことになつて來ようとも、あたし、あなたが大好きですわ……。

甲。それは信じられる。だが、それと同時に、お前はあの人も大好きだらう。

女。（立ちあがり、甲の胸に身を投げかける。）そんなことありません！

甲。（冷然と拂ひのける。）いけない。それは信じられない。嘘だ！

女。（なほも縋りついて。）いゝえ、いゝえ、ですから、今夜、……たつた、今自分で自分の心が解つたのです。矢ツ張りあたしは、誰より彼より、一番あなたが好きだつたのです。たゞそれが、自分で解らなかつたのです。ね、あなたさうなの、きつとさうなの！

甲、いつとはなしに女の脊へ手を廻してゐる。目をつぶり、ものを考へてゐる。
女、背に廻された手の感覺に力を得て、早口に續ける。

女。ですから。あたしの罪は、あたしが馬鹿だつたことです。自分で自分のほんとうの心持が解らなかつたことです。ね、さうでせうね、あなた、さうでせうツたら……。

女に振ぶられたゝめとも、自らさうしたとも分ち難いほどに、甲の首が頷く。

女。馬鹿から起つた間違ひだからつて、それア惡いことは惡いことです。だけど、馬鹿だつてことが罪とは云へませんわ。ねえ、もしさうなら。その罪は神樣が着なければならない筈ですもの。……あゝ、さうだわ、さうだわ、それに違ひないわ。……あたし、急にいろんなことが解つて來た……。

甲。もういゝ。

聲が優しくなつてゐる。ほつとしたやうに女が見あげる。目と目とが合ふ。

甲。お前のしたことは、馬鹿から起つた間違ひだ……。

女。えゝ、さうよ、さうよ。

甲。お前は、俺の愛に甘へて、ちよつと氣がゆるんだんだ……。

女。え、すみません、ほんとうにすみません。勘忍してくださいね……。

甲の胸に面を伏せ、堅く抱きつく。甲も抱きよせる。

落葉。蟲の音。可なり永き間。

甲。あの人は、だが、俺の尊敬してゐる先生だ……。

古池の面にポトンと一つ落し込んだ石のやうに、この臺詞から靜かに廣がつて行く波紋が、甲と女との心のうちに、さま〴〵な思ひを描くだけの間。

甲。初ツから俺は、お前が好きになりさうな人だと思つてゐた。(間。)卑怯な話だが。正直なところ、先生にお前を逢はせるのが可怕かつたな。可厭だつた……。

女。(嗚咽)すみません、すみません。

甲。そのくせ一方では、逢つてから、もしお前が、先生を好きにならないやうなら、——あの人の深い氣持に心を惹かれないやうなら、お前も仕樣のない、駄目な女だ、どうか先生のいゝところがすぐ解るやうな女であつてくれ、——さう云ふ氣持も隨分强かつた……。

女。(やゝ甘へ氣味に。)可厭々々、もうそんなこと云はないでください……。

耳を覆ふ。ちよつと調子のはづれた間。落葉、蟲の聲を配せず。

甲。もうぢきこゝに見えるのだらう。なん時に逢ふ約束なのだ。

女、可厭よ。もう今後、一さい先生のことは話さないつて約束をしてくださらない？

甲。（やゝ鋭く。）なぜ〳〵。

女。（それには答へず、體をもぢ〳〵させながら。）さア、早く歸りませう。

甲。いつそのこと、二人で、こゝで先生にお目にかゝらうか。

女　可厭！

甲。（やゝ獨語の調子。）先生も隨分お前が好きた。俺には、それがよく解つてる……。

女。そんなことないと思ふわ。

甲。（鋭く。）ほんとうにさう思ふか。

女。だつて、先生には奧さんやお子さんもおありだし、それに第一、あんなにお仕事を大切になさる方ですもの……。

甲。仕事を大切にする人なら、必ず、生活をそれ以上に大切にする人だ。生活は少しの誤魔化しも許せない人だ……。

しみ〴〵とした間、蟲の音。

甲。何を考へてた？

女。なんにも……。

男、嘘だ、先生のことを考へてゐたらう。

女、いゝえ……。

甲。ちよいと目をお見せ。

兩掌で頰を包み、女の顏を仰向かせ、上からぢツと見おろす。

永き間。

嗚咽て、女の肩が大きく波をうちだす。男は歯を喰ひしばり、ボロ〳〵泪を流す。初めて、二人の心に全き通路が開ける。舞台照明を、理由なく、すうツと暗くする。

甲。死なう。一緒に死なう。

女。（決然として） 勘忍して下さい。あたしには死ねません。

甲の手を離させ、づる〳〵と地上に崩折れて了ふ。

甲の涙一時にとまり、心臓まで冷え亘る心地……。

短き間。

甲。どうしても死ねないか。

女。死ねるくらゐなら、さつき殺されてゐます。死なうと思へば、さつき、一言でもあなたを憤らせるやうなことを云ひさへすれば、すぐ殺して貰へたんです。でも、あたしは死ねません、死ねません。いま死ぬのは心残りです。可厭です。……あたしは、あなたが大好きです……。

甲。解つてる！

女。いゝえ、解つてません。ほんとに、あなたには想像もつかないくらゐ大好きなんです……。

甲。だから、俺を殺したくないと云ふんだらう。

女。いゝえ、あなたも大好きですけれど……。

甲。俺も大好きだが、先生は……。

女。あゝ、先生……。

女、地面から弾かれたやうに飛びあがり、一散に舞臺奥へ駈け出す。甲の手に短刃が光る。追ふ。太い幹の蔭で一撃をうけ、叫びながら出て來るうしろから。右背を突かれ、女は、舞臺中央へのめり倒れる。甲も、續いてそこへ轉げより、上半身を膝へ抱きあげて、急き込み、

甲。死んでくれ、死んでくれ。喜んで一緒に死んでくれ。

女。（苦しい息づかひの間から、はつきりと、）可厭！　頼まれて死ぬのは可厭！

甲。ぢア……。

短刃を取り直す。

女。（聲のない笑。）待つて、自分で死ぬから……。

瞑目して、少時の間何事をか念ず。落ちついて、帶の間を探り、手紙やうのものを引き出す。

女。これは書置……。ですから、……ですから、これと、（書置を、甲の右の手に渡すやうにしながら、）これとを、（短刃を握つた指を、一本々々こぢあげながら、）これと、……これとを……取り變へツこしてね……。ね、解つたでせう。想像もつかないほど、あたしは、あなたを……、あなたを……。

云ふうちに、書置と短刃とを取り變へて了ふ。舞臺照明、理由なく光度を増す。

女。さよなら……。

見事に刃に伏す。

甲、ぐづぐづと腰を落す。悄然たり。

落葉と蟲の香の間。

暫して、甲、書置を讀み始める。その終りに近く、三十六七歳の男、（乙）急ぎ足にて、下手より登場。甲、認めて、

甲、先生！

乙。（ぎよッとして立どまり、透し見て、）榊原君か……。

甲。（立つて、よう／＼とそばへ行き、後手に女の屍骸を指す。口、吃す）あ、あ、あれ……。

乙、駈けより、屍骸を抱き起す。短刀、ぬけ落つ。はッとする。

乙。さよ子！　さよ子！

耳もとに口をよせて呼びながら、あちこち觸つてみる。その冷さに、心を凍らせながらも、執着はいや增す心地。

乙。さよ子！　おい、さよ子！

甲。（見かねて、）先生、もうどうしようもありません。立派な最後でした。

乙。（それも耳にはいらず、呼びつゞける聲が、だん／＼悲壯になつて來る……。）さよ子！　さよ子！　死んぢやいけないよ

お前は死んぢアいけないんだ！　さよ子、おい、さよ子ッたら！

甲、ぢッと見詰めてゐるうちに、だん／＼輕侮の色が動いて來る。

見苦しきまでの取り亂しかた……。

甲。先生、先生！

乙。（初て傍に人あるを辨じたる如くに、振り返るなり、）おい、誰か、醫者だ！　醫者だ！

甲。（益々輕侮の調。）先生！

乙。あ、榊原君か。おい、早く、醫者だ！　醫者を呼んで來るんだ！

甲。何を呼んで來たつて、死んだものは、どうにももう仕樣がありません。

その氷のやうな調子に冷まされて、やゝ我に返り、ぢツと見詰める。

乙。一體これはどうしたと云ふんだ。

甲。どうもしやアしません。さよ子が死んだのです。

乙。(殆ど無意識に呟く。)さよ子が死んだ……。

甲。(はつきりと、)さうです、先生の愛していらしつたさよ子が死んだのです。

乙。あゝ……。

屍骸に抱きつき、悲嘆、愁傷、小兒と撰ぶところなし。

甲。先生、こゝに書置があります。

そばにより、傲慢な態度で、肩を叩く。乙、死體より面を離さず、たゞ手のみを振りて、うるさい／＼、と云ふ氣持を示す。甲、呆れ返つた樣子にて、そばを離れながら、呟く。

甲。十年以上も騙されてゐたんだ。……これが大原先生の正體か……。

乙が斷腸の思ひをよそに、靜にあたりを歩き廻りながら、間をもつて、きれ／＼に呟き續ける。

甲。こんな男のために……。

馬鹿! ほんとうに馬鹿なさよ子だ!

馬鹿な罪惡だ……、神の背負はなければならない罪惡だ!

(頭を振りながら、)俺ぢアない、俺の知つたことぢアない……。

人間の愚さは、神の背負ふべき罪惡だ! (舌を打つて、)馬鹿なさよ子め!

さア行かう、こんな馬鹿々々しさのなかに、いつまでまご／＼してゐられるもんか……。

甲、唾をはいて下手へ行きかゝる。乙、ふと顔をあげ、それを見て、

乙。おい、君、君！　どこへ行くんだ。

甲。お先に御免かふむります。

乙。御免かふむる？（次第に明かなる心眼を啓き来る。）それは、何んと云ふ口の利き方だ。さよ子は、君が、あれほどまでに愛してゐた人ぢアないか。

甲。さつきまでは……。

乙。さつきまでとは？

甲。殺すまでは……。

乙。殺す？

甲。さう……。（冷静に。）さよ子が、彼の女自身を殺すまでは……。

乙。その前、君たちは一緒にゐたのだね？

甲、答へず、行きかゝる。

乙。ちよつと待ち給へ。この背なかの傷はどう云ふのだ。

甲。これをごらんなさい。こゝに書置があります。

甲、立ち戻つて来る。乙も立ちあがる。両人、屍骸をなかに、上下（かみしも）に相対す。乙、書置をうけとり読む。甲、屍骸から顔を背（そむ）けて立つてゐる。

夜の更けて行く靜けさ。かれ〴〵な蟲の聲。

乙、讀み終り、しみ〴〵とした心から湧いて來るやうな、目のなかの涙を拭き取りながら、屍骸に向つて、優しく。

乙。さよ子、お前はいゝ人だね、ほんとうにいゝ人だね……。

甲。(そつぽを向いたまゝ。)なアに、そいつは馬鹿だ。

乙。さう……、馬鹿だ。美しい心の馬鹿だ、可愛らしい馬鹿だ……。

甲、振り向く。乙、その眼を、ヂッと自分の視線のもとに抑へつけたまゝ、

乙。こんな書置一本で、君を殺人罪から救へると思つて死んださよ子は……、なるほど君の云ふ通りの馬鹿だ。然してそれでしすましたりと思ふ君の馬鹿とは、大ぶん性の違ふ馬鹿だ。せめては、その性の違ひでも思ひ知りたまへ。

甲。(驚かず。)まア、そこに落ちてる短刀を拾ひあげてごらんなさい。それは、お宅の倉から無斷で拜借して來たものですよ。

乙。(更に動ぜず。)あたしとしては、君なりあたしなりが、殺人の嫌疑で牢獄へ行かうと行くまいと、死刑にならうとなるまいと、そんなことは、今となつては、もうどうだつていゝことだ。それよりは、こんな可愛らしい謀計をして、――いつなんどき君に殺されても、あとで君を苦しませることがないやうにと、始終こんな、(書置を甲の方へ突きつけてみせる。)こんなものを持つて歩いてゐたさよ子の心根を考へてやりたまへ。心の底の底から、深くあたしを愛してゐながらも、立派に君も愛してゐたんだ。――立派にだぜ。あたしより先の關係だからとか、これまでの義理合だとか、心變りをすれば殺す殺されるの約束があつたからとか、そんなしようことなしの氣持からぢアなかつたんだぜ。ほんとに君が好きだつたんだ。それアまた君は、あたしにないいゝ性分をもつてゐるんだから。當

り前の話だ。當り前と思ひながら、正直なところ、あたしは、君に對して嫉妬を感じずにはゐられなかつた。——それほどだ！　だが、殺されたくはなかつたらう。まだ〳〵死にたくはなかつたらう……。可哀想だ、可哀想だ……。

乙、啼泣し、終に號哭す。

このうち甲、次第に首を垂れ、暗然として傾聽し、乙の號哭するに及んで、身を投じ、大地にひれふす

甲。先生、許してください！

乙。あたしぢアない、あたしぢアない。君が許しを乞はなければならないのは、さよ子だ。君の目の前に横はつてゐるそのさよ子だ。死んで了つたさよ子だ……。號泣す。甲も亦泣く。

甲。馬鹿！　馬鹿！　馬鹿！　（と、我が髪を掻り。）神様、あなたは、なんと思つてこんな馬鹿を拵へたんです。恨みます。恨みます。

乙。こんな場合、俺は、神様なんぞを引合ひに出す氣持にやアなれない！　君を恨む、俺は君が憎い！

甲。僕はまた、先生を恨んだ。憎んだ。

乙。當り前だ！　その憎い人間を、なんだつて今もつて先生なんぞと呼ぶんだ！　憎い戀の仇を、なんだつて生かして置いたんだ、なぜさよ子と一緒に殺して了はふとはしなかつたんだ。碌な愛が出來ない奴には、碌な憎みさへ出來やがらない！　えゝ、歯痒いけだものだ！

地にすり附けてゐる甲の頭を、いきなり、烈しく踏み躙る。甲、呻きながら、大地にしがみつく。乙、蹴り續ける。

乙。人を殺すなら、殺すだけの憎みをもて！　愛をもて！　心に碌な憎愛ももてないくせに、この手は！　このけだも

のめ！　お先ツ走りのこの手が！　くそ！

蹴返へされた甲の手先へ、短刃が觸れる。掴む。立上るや否や、飛鳥のやうに、乙の胸へ頭からのめりかゝる。

乙。うん、さうだ！

と、關取が稚下の力士に稽古をつける時のやうに、ぶら手のまゝ、どんを胸でうけとめる。刄が、脇腹に立つてゐる。

乙。くツくツくツ、かうだ！

ぶらさげてゐた兩手を、徐に甲の咽輪へ入れると、くるりと彼方を向け、肘をかけて締めあげる。

乙。貴様のやうな奴は、碌な死に樣も出來まい。さ、一緒につれてつてやる！

甲、滿足げに、されるまゝになつてゐる。

乙。なぜ、手むかはない！　生意氣な小僧ッ子だ！　さア、苦しいか。苦しけれアぢたばたしろ！

乙、ちり〳〵と締めあげる。甲、平然として死に就く。

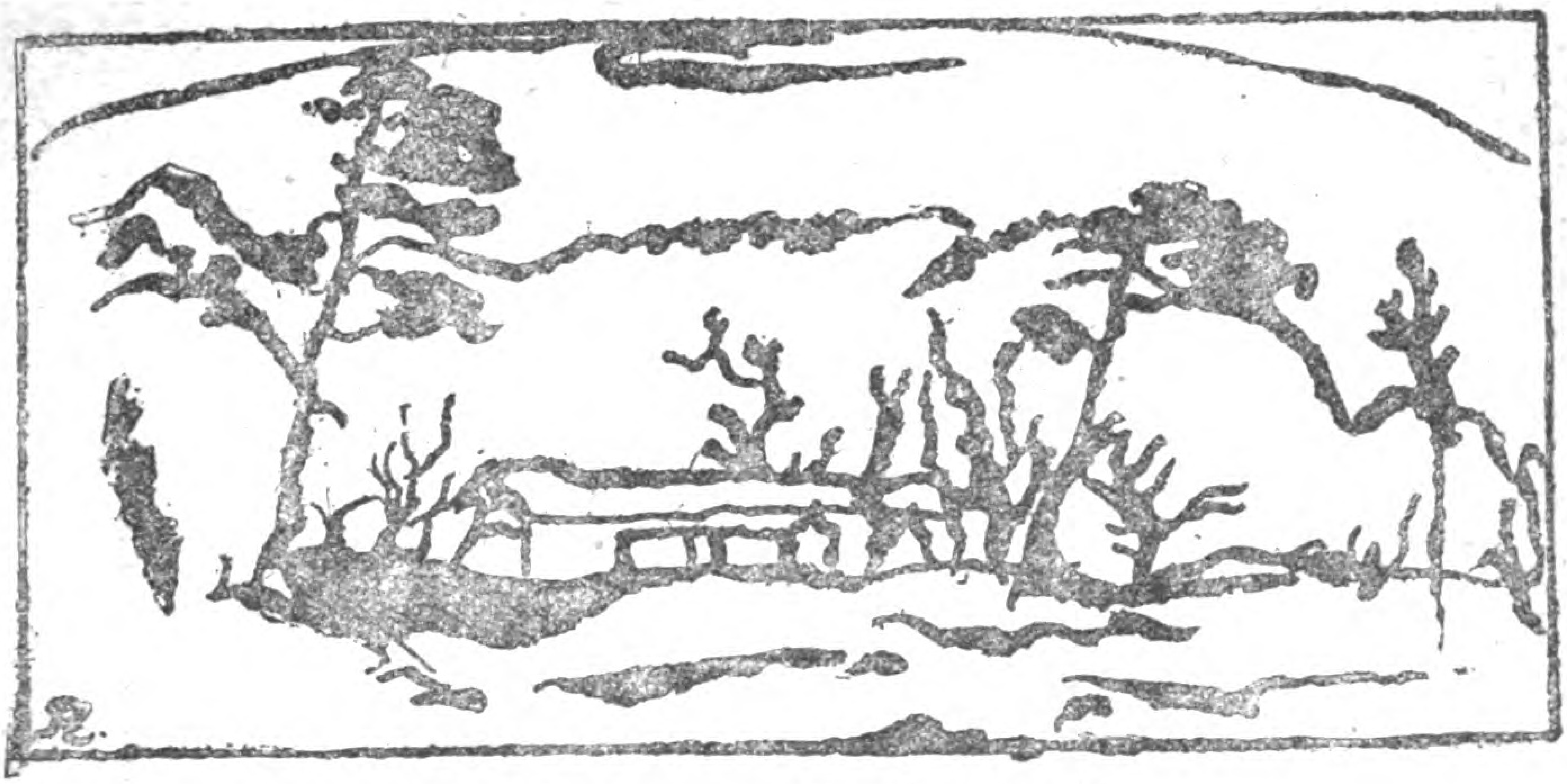
乙、息の絕えた甲を突き倒し、我が身もよろけ倒れる。

女を中央に、上下へ、同じほどの隔りをもつて甲乙が、轉び伏す。甲、動かず。乙は、大地にペタンコにひれふしたまゝで、ちりちりと女の屍骸の方へずりよつて行く……。

乙。さよ子！　さよ子！

落葉と、かれ〳〵な蟲の音。

舞臺照明を、理由なく暗くする。──幕。



戯曲

無明と愛染（一幕）

谷崎潤一郎

人物

無明の太郎
その妻楓
遊女愛染
高野の上人

時　南北朝の頃

所　或る山奥の廢寺

第一場

凄じく朽ち古びた寺の本堂の内部である。上手に腐りかかつた板戸、下手に破れた襖がある。奥の

方に内陣が見えてゐるけれども本尊の佛體は毀ち去られてあとかたもなく、わづかに須彌壇と蓮臺と背光だけが殘つてゐる。須彌壇の傍に唐櫃が一箇、それに凭せかけて五六尺の厨子に還入つた不動明王が置いてある。

秋の夜ふけの心持ちで、楓が上手の方に据わり、護摩壇を爐の代りにしてあかあかと火を燃やしながら、鴫の肉を炙つてゐる。彼女の傍には二人前の酒肴の用意があらかた整へられてゐる。楓は哀れなみすぼらしい姿をしてゐるが、上﨟の着るやうななまめかしい袿や、鏡臺や櫛笥などが下手の方に散らかしてあり、柱や壁のところどころに獣の皮だの、獵の道具だの、物の具だのが吊るしてあつたり立てかけてあつたりする。

幕があくと間もなく、表の方で板戸をほとほとと叩く音がする。楓はちよつと耳を傾け、返辭をするのをためらひながら鴫の肉を火にかざしてゐる。再び叩く音がする。

(男の聲)(板戸の外にて)頼まう、……頼まう、……

間。

(男の聲)(前よりも少し聲高に)のう、もし、お頼み申す。……お頼み申す、……

楓、鴫を傍に置き、板戸の方へ寄りながらひそひそ聲で、

(楓)どなたさまでございます、

(男の聲)わしは高野の御山へ參る旅の僧ぢやが、……

(楓)(默つてその聲をききながら考へてゐる)……

(男の聲)……路に行きくれて難澁してゐる、憚りながら一夜の宿を頼みたうて訪れたのぢや。

(楓)(疑ひ深い、迷惑らしい口調で)それはまあ、さぞお困りでござりませうが、生憎今宵は主も居らず、歸りの程も分りませぬので。……したが、高野へおいでなさるお方が、人里はなれた此のあたりへどうしてお越しなされました。

(男の聲)山のおくがに住む人々は世の中の騒ぎを知らぬと見える、——山の下では在々所々に火の手が上つて、京方

と吉野方と、また一戰が始まつたのぢや。それ故愚僧は道を廻つて山越しをせうと存じたのぢやが、……主どのが留守ぢやとあらば是非ないこと、せめて雨露をしのぐよすがに、此の御堂の縁先をお借り申すことは出來まいかの。

語の間に楓はをづをづ立ちよつて、板戸を細目に明けて見る。

（楓）さあ、それもならぬぬとは申されませぬが、……（いよいよ迷惑な調子）この夜寒にそのやうな縁の端では、おかつきの霜が身にしみて、手足が凍えてしま　ますぞゑ。

（男の聲）いやいや、愚僧は霜のおく朝も雪の降る夜もいとひはいたさぬ。ただ足腰を休ませて貰へばよいのぢや。

（楓）（だんだん板戸を繰りひろげて僧の姿をしげしげと見守る）そしてお師さまは、高野の御山の、何と云ふ御寺へおこしなされます？

（男の聲）わしは高野の一乘院の住職をしをる。――此のたび一宇を建立せうと思ひ立つて、ことしの夏から秋へかけて京大和路を勸化のために廻つたのぢやが、三月あまりも寺をあけたほどに、一と先づ山へ歸らうかと存ずるのぢや。

（楓）あゝ、一乘院の上人さま、――（獨りごとのやうに云つて、誰かに聞かれるのを憚る如く内陣の方を返り見ながら。やや打ち解けた言葉づかひになる）仔細あつて此の家へお泊め申すことは出來ませぬが、さればと云うて麓の里へはまだ五六里もござりませう。……（云ひながら又ちよつと考へる）もし、廂の間でよろしければ、此方で火になとおあたりさなれて休んでおいでなさりませ。

（男の聲）おお、さらばそちらへ參つても大事ないと申さるるか。それは何より忝ない。……

上人が這入つて來る。四十前後の瘦せた僧形で、笈づるを負ひ錫杖を携へてゐる。楓は戸外に氣を配りつつ板戸をしめ切り、爐ばたへ上人を案内する。

(楓) ではまあ此方へおいでなさりませ、ここが一番温うございます。

(上人) 飛んだお造作にあづかることぢやが、ほんの一時休ませて下され、

楓はしきりに薪をくべて一層あかあかと火をおこす。その間に上人は笈つるをおろし、いぶかしさうに部屋のありさまを見廻しながら爐の傍へすわる。

(楓)(上人に見られて恥しさうに食べ物を片よせながら) 何ぞおふるまひ申し上げたうはございますれど、これは主の夕餉のしろなり、それに此のやうな生ぐさい物では差上げることもかなひませぬ。本意ないことながら、どうぞお免し下さりませ。

(上人) いやいや、そのやうな心づかひには及び申さぬ。かうしてぬくまつて居られれば此れが何より極樂ぢや。——したが、見れば珍しい住居のやうぢやが、そなたはいつから此處に居られる？

(楓) いつからと云うて、もう長いことでござります。たびたびの合戰に都の家は燒き拂はれ、身の置きどころに困じ果てて知らぬ國々をさまようた揚句、此の山おくに無住の寺を尋ねあててから、今年でもはや七年の秋を過しまする。始めのほどは假りの宿りぢやと思うてゐたものの、もう此の頃では尾の上をわたる鹿の啼く音もなつかしく、茅にそよぐ風のひびきもさほどさびしうはござりませぬ。

(上人) それではそなたは、以前は都のお人ぢやと見えるの、

(楓) さやうでございます、——主はもと、京の三條堀河のあたりで、さるやんごとないお方さまの司人をいたして居りました。そのお邸も兵どもに火を放たれて、殿のお行くへも分らずなつてしまひましたが、……

(上人) はてさてそれは氣の毒な話。さうして主どのは、今では何をして居らるる？

（楓）何をせうとて此のやうな土、になりはひとてはござりませぬ。御覽の通り鳥や獸を射て來ては、それを喰べたり販いだりして、その日その日を送つてゐるまででござります。

（上人）成る程なう、――愚僧もこのたび世の有りさまを見て參つたが、打ちつづく戰亂に有りがたい伽藍の堂塔は毀たれ、月卿雲客の館は燒かれ、都はもはや荒れてしまうて、やがて大方は淺茅が原ぢや。嘆かはしいことながら、かやうな亂離の世の中には人里放れた山家のすまゐもなかなか心のどかであらう。では主どのは、こよひも狩りに出られたのぢやな？

（楓）はい、……毎日のやうに狩りくらしては、夜に入つてから戾つて參るのでござりますが、狩りの獲物は鳥獸ばかりではござりませぬ。あれ、あれを御覽じなさりませ、あそこにある黃金作りの圓鞘の太刀も、金襴地の直垂も、あの鏡臺のほとりにある唐綾の袿も、みんな主が麓の里から獲て參りました。

（上人）なに、何と云はるる？

（楓）御出家さまに噓を云うては御佛の罰が恐ろしいほどに、何をか包み隱しませう。わたくしの夫は今では無明の太郞と云うて、此のあたりに鳴りひびいた盜人でござります。夜道に出ては人の命や寶を奪ひたまたま上人さまのやうに宿りを求める客人があれば、大方生きては歸しませぬ。お泊め申せぬ譯と云ふのはそれゆゑでござりますが、……

（上人）（別に動ずるけしきもなく）ほほう、では此の寺は山賊の住み家でござつたか。さてさて長い旅路にはさまざまなことに出遇ふものぢや。そこにおはする不動明王も、定めし驚いておいでであらう。

（楓）まだあそこには御本尊の盧遮那佛も、もろもろの菩薩の像もござりましたが、薪の代にするのぢやと云うて、主が斧で割つてしまうて、もう何一つ影をとどめては居りませぬ。御佛をさへ恐れぬ夫の手にかかつては、御出家ぢやと

てそつと無事ではござりますまい。早う主の歸らぬうちにお立ちなされたがようござります。

(上人) 雲水の身の心やすさには、ぬすびとなりとて案ずるほどのこともあるまい。今宵はからず此のところへ參つたのも何かの緣と云ふものぢや、愚僧に思ふ仔細もあれば、その太郎どのとやらに會はせては下さらぬかな。

(楓) 思ふ仔細と仰つしやりますのは?

(上人) かうして國々を行脚する間には、或るときは夜盜に行きあひ、或る時はもののふに脅やかされ、劍の下をくぐつたことも數知れずござつたが、それが結緣のたよりとなつて、多くの人を佛の道へ導いた例がござる。いかなる者にも菩提の心はあるのぢやほどに、愚僧の力で及ぶものなら敎化して進ぜたいのぢや。あるじ殿とてよもや鬼ではござるまいが、……

(楓)(さしうつむいて涙ぐみながら) あ、ありがたうござります。夫も昔は物の道理をわきまへた男、鬼でも蛇でもござりませねど、まことの鬼が外にゐるのでござります。

(上人) まことの鬼が外にゐるとは?

(楓)(上人が覺えず聲高になるのを、手を振つて制する) もし、お氣をつけなされて下さりませ、今その鬼があの奧の間で眠つてゐるのでござります。

(上人) はて、何を云はるる? いかほど末法の濁世とは云へ、鬼が居るとは信ぜられぬが、……

(楓) 外面如菩薩內心如夜叉と法の言葉にもあるものを、鬼でなうて何でござりませう。わたくしの夫はあの鬼ゆゑに盜みを働き、人の命をそこなふやうになりました。鬼の色香に迷はされて惡業道へ誘ひ込まれてしまひました。……

短き間。上人はちよつと挨拶に困つた模樣で、物思ひに沈みながら墨染の袖をつまぐる。楓は眼をしばだたきつつ二つ三つ薪をくべ

る。爐の火が白くぶすぶすとくすぶる。

(楓) 世は苅りごもと亂れようとも夫の情があるものならば、片山里の侘住居も悲しいことはござりませねど、仇し女に男を取られ盜人の手助けをさせられて、何の生きがひがござりませう。これ、これを御覽じなさりませ、かうしてここに二人分の夕餉をととのへては居るものの、此れも夫と彼の人とがさしむかひで食べるのでござります。わたくしはただ下樣の召し使ひも同じこと、朝な朝なの水仕事に濡れそぼつ袖の干るひまもなく、折り焚く柴の夕のけぶりにむせぶ涙の乾くをりとてはござりませぬ。……(間。すすり泣く) 此のやうな憂きめに會ひますのも、前世の業の盡きない故でござりませう。

(上人) してその女性はいつから此處に居られるのぢや、

(楓) おととしの冬の雪のふる夜でござりました、戰に逐はれて此の山の中へ逃げて參り、わたくしのもとへ宿を求めに來たのでござります。妾が都を立つた折には父の三位や母御前と一緒ぢやつた、熊野へ詣うでる途すがら、思ひもかけぬ兵火に遇うて供の者どももちりぢりになり、惡い野伏や山伏に父も母も討たれてしまうた、もはや寄るべのない身ぢやほどに暫が間かくまうてくれと申しますので。……

(上人) ほう、ではやんごとない殿上人の姫ぢやと見ゆるの、

(楓) 邸は京の白川にある、みづからの名は愛染姫と云ふのぢやと、そのやうに申しては居りますが、何であの女が姫御前でござりませう。そだちは室か神崎か、いづれは遊女のなれの果てぢやと覺えまする。たとへ妾は上臈のやうに﨟たけて、みめかたちは美しうても、あの女の心は鬼でござります。あるじを色香に迷はせたばかりか、多くの人を此の古寺へおびき寄せて、生血をすすり寶を掠める恐ろしい鬼でござります。

(上人) さてさて、安達が原の黒塚の話をきくやうぢやの。――したが、人は誰でも煩惱の奴となることがあるものぢやが、いつかは懺悔の心をおこして解脱を願ふやうにもなる。そなたの夫とてやがては愛着の夢からさめる機縁もござらう。末世の時代にも神佛の加護はあるのぢやほどに、……

(楓) 御佛の慈悲がどのやうに廣大ぢやとて 四重五逆の罪を犯し、生きながら地獄に陥ちた人々の救はれる時はござりますまひ。夫は自業自得ゆゑせんないこととは申しながら、あさましいのは私でござります。業の海より業の海へと浮かびただよひ、川瀬の車のめぐるやうに輪廻生死の境をめぐつて、いつになつたら無礙の光を仰ぐことが出來ますのやら、……もう此の世には望みのない身ぢやほどに、せめて來世は淨土に生れたうござりますが、女人は罪の深いものぢやと聞きましたゆゑ、その願ひさへかなはぬこととあきらめてをりまする。

(上人) なるほど、女人は五障のさはりがあつて悟りの道に入りにくいとは申すものの、さはりと云ふのはつまりは妄執が多いからぢや。そなたにしても朝に夕に嫉妬の炎を胸に燃やして生、死の因を造つてゐるのが何よりも悪いのぢや
そなたは人を鬼ぢやと云うたが、佛を疑ひわが身を咒ふそなたの心こそ鬼ではないか。鬼はおのれの中にゐるのぢや。

(楓) このやうな憂いめ辛いめに遇ひましたら、わたくしとても鬼になるでござりませう。御佛の力を疑ふと云ふではござりませねど、今の身の上では尊い教を聞くをりもなく、行を修めるひまもないのでござりますものを。實を申せば私はとうから上人さまのお名前をきいてをりました、高野の御山に一乘院の聖と云うて、有りがたいお師さまがおいでになる、生あるうちに一度まみえて功徳にあづかりたいものぢやと、つねづねあこがれて居りましたが、勿體ないことながら、かうしてお目にかかれますのも淺からぬえにしでござりませう。どうぞ上人さまの法力で、心の鬼を退散させて下さりませ。後世安樂のたよりを得させて下さりませ。

(上人)おお、それはちかごろ奇特なことを承はる、それについて思ひおこすのは、恥かしながら愚僧も昔は心の鬼にさいなまれて、煩惱の火に燒きこがれたことがござつたのぢや。そのきづなを絶ち切つて偏へに如來の力にすがり、三密の行を修するまでには一方ならぬ苦しみをなめたものぢやが、今ではやうやう不退轉の志を固めて、金剛不壞の身となり申した。そなたは在家の女ゆゑ行を修めるいとまはなけれど、さる先達の言葉にも眞言念誦を怠らず破戒の僧侶も往生を得、造惡の男女も淨土に生るると申してある。

(楓)ではわたくしのやうなものでも、濟度の御手にすがれるのでございませうか。

(上人)無論のことぢやが、それには信心が第一ぢや。さうして明けくれ光明眞言を唱へたら、たとへ此の世で即身成佛は出來ずとも死ぬる時には諸佛諸菩薩の來迎をうけ、來世は必ず安樂國土に生れるでござらう。さればこそ高祖大師も、虚空が盡き、衆生が盡き、涅槃が盡きなば我が願も盡きなんと、有りがたい誓ひをお立てなされた。――

無明の太郎がこつそりと土手の奥から這入つて來る、髯をぼうぼうと生やした、顏つきの逞ましい男で、大きな太刀を佩き、山賊の裝いでたちをしてゐる。閣の方のうす暗がりに仁王のやうに立ちはだかつて、凄じい眼でぢつと上人を睨めつけてゐる。二人はそれに心付かない。

(上人)――おお、それ、ここによいものがある(頸にかけた、袋の中から一冊の經文を取り出す)これは秘密の陀羅尼を記した貴いお經ぢや、これをそなたに進ぜようほどに、この中にある眞言陀羅尼を、おきる時もねむる時も念々の間に誦するがよい。

(楓)あ、ありがたうございます。

楓が受け取らうとするとき、太郎が後ろから聲をかける。

(太郎) 禮を云ふのはまだ早いわ、その袋の中のものを、ついでに皆置いて行かれい。

云ひながら二人の間へ歩み出る。

(上人) (靜かな調子で) おん身は誰ぢや

(太郎) 無明の太郎の面を知らぬとは、迂濶な出家もあつたものぢや。その袋には大分目方がかかりさうぢやが よもや經文ばかりではあるまい。どれ、その中を調べてくれう。(手をさし出す)

(上人) はて、折角ぢやが此の袋に觸れてはならぬ、おん身の爲めに惡いと申すのぢや。

(太郎) (落ち着いた上人の態度にいささか氣勢を挫かれた形で) なに? 身の爲めに惡いと?

(上人) いかにも、たとへ盜人であらうとも、佛の功力は知つてであらう。この中には愚僧が持佛の、觀世音菩薩のお姿があるのぢや。

(太郎) 觀世音でも普賢でも佛とあらば惡うはないわ。してその姿は木像か、黄金か、銅か?

(上人) 小ひさな、美しい黄金佛ぢや、

(太郎) (黄金と聞いて眼の色を變へる) ほう、成るほど出家は正直ぢや。さ、命が惜しくばそれを此方へ渡して行きやれ。

(楓) (おどおどしながら) もし、太郎どの、此のお方は一乘院の上人さまぢや、粗相があつてはなりませぬぞえ、

(太郎) 一乘院の上人ぢやと? (はつと驚いたやうな様子で、しげしげと上人の顔を見守る) おう、紛れもない高野の聖ぢや、

(上人) さてはおん身は、愚僧を見知つて居らるるかの、

（太郎）（再び猛惡な相になつてにやにや笑ひながら）上人ぢやとて聖ぢやとて、この山おくでは差別はないわ。おぬしは久しう諸國を勸化してゐた筈ぢやが、定めし寄進があつたであらうの。

（上人）ありがたいことには、世は亂れても信心のともがらは絕えぬと見えて、思ひの外に喜捨の資を集め申した。

（太郎）ふん、集めて來たとは何よりぢや、それを殘らず置いて行かれい。

（上人）世俗の物なら進ぜてもよいのぢやが、ここにある寶は悉く御佛の物ぢや。このたび新たに御寺を建立せうと思うて、長い間兵火のちまたを行きめぐり、白刄の下を　いくぐつて數多の善男善女から淨い志を受けて來たものを、一紙半錢もおろそかには出來ぬ道理ぢや。

（太郎）出來ぬとあらば腕づくでも取つて見せうが、（刀の柄に手をかける）

（楓）（夫の腕にすがり着いて）これ、太郎どの、何をするのぢや、そなたは聖の法力に刄向はうとおしやるのか。たとへ劍を閃めかしても、上人さまの調伏に抗ひはせぬぞえ。

（太郎）あははは、調伏なぞとは片腹痛いわ、此の痩せ法師に法力があるならどれその驗をためしてくれう。

ぎらりと太刀を引き拔いて斬つてかかる。上人はその前から密かに身を構へてゐて、太郎が太刀をかざすと同時に袂の中で印を結び珠數をつまぐつて咒文を唱へる。と、袋の中の觀世音菩薩から俄かに一すぢの光明が輝き出で、太郎は太刀を振り上げたまま斬り付けることが出來なくなる。

（太郎）（踏み込まうとしてしきりにもがきながら）やや、どうした事ぢや、

（楓）おお、勿體なや、南無觀世音菩薩――

光明を見て恐れおののきつつ伏し拜む、

(上人)(口のうちで非常にかすかに)まかしつだやそわか、しづだゆけいじんばらやそわか、ならきんぢてわか、……

太郎、二三歩あとへよろめきながら、眼がくらんだやうにどうと尻餅をついて突つ俯す。やや長き間。上人はしづかに印を解いて太郎の樣子を見る。袋の中の光明が消え失せる。

(上人)太郎どのとやら、もはや手向ひはしないであらうの、

さう云はれても、[illegible]婦とも　だ死んだやうにぬかづいてゐる。

下手の襖をあけて愛染が姿を現はす。齢は三十路を過ぎてゐるらしいが、殘んの色香のなまめかしい女である。きらびやかな袿の上に房々とした翠の髮をすべらかし、閾の際に彳んで上人に眸をかける。

(愛染)上人さま、お久しいことでござります。

(上人)(嚴かに愛染の顏をつめて)おお、愛染どのぢやな、

(楓)(恐る恐る面を上げる)ではあの、上人さまは愛染どのを?——

(上人)知つてはゐるが、遠い昔の夢のことぢや、

(愛染)ほんにむかしの夢のこと。妾が知つて居りましたのはさるやんごとない少將の君でござりましたが、今では貴い眞言の行者、御山の聖におなりなされた、有りがたいことでござります。(云ひながらそこにうづくまつて恭しく兩手をつかへる)なう、上人さま、どうぞあの頃の罪をゆるして下さりませ、

(上人)いやいや、ゆるすどころではない、そなたと云ふものがあればこそ、色即是空のことわりを悟り、佛の道に這入れたのぢや、そなたは法の手びきでござつた。

(愛染)かたじけなうござります、(兩眼に袂をあて、涙をぬぐふ)…………したが、今も今とてあらたかな御修法の力

を拜みましては、此の身の罪が思ひやられて、そぞろに來世が恐ろしうてなりませぬ。もし、上人さま、いまだに迷ひの雲が晴れいで、輪廻の業をいとなんでゐるわたくしを、どうぞ憐れんで下さりませ、法の手びきをした者に手びきをなされて下さりませ。

(上人)(ひどく感動した樣子で)おお、よう云はれた、よう懺悔をしてくりやれた、ここで會ふのも大方ほとけのおん導きぢや、こよひはそなたに結緣のよろこびを得させて進ぜる、――いや、愚僧も共にその喜びを分ちたうござるわ、

(愛染)ああ、勿體ない仰せでござります、わたくしのやうな穢れた女が一期の障りを除かれようとは、盲龜の浮木にめぐり遇うたも同じこと、――なう、楓どの、そこはあまり端ぢか故、上人さまを奥の間へ招じて下さりませ、さだめしお疲れでござりませうが、まだ秋の夜は長いほどに、彼方でゆるゆる聽聞させていただきまする。

(楓)ほんに、さうなされてはいかがでござります。奥と云うてもむさいところではござりますが、隙間もる風も此處よりはいくらかましでござりませうほどに、……

(上人)もとより愚僧は樹下石上を宿とする者、法を說くのにいづこと云うて所をえらびはいたさぬが、……はて、折角のこころざしぢや、遠慮なく受けるといたさう、

(楓)さ、さ、どうぞこちらへお越しなされませ、

楓、上人を案内して下手の襖へ這入る。

太郎は悪夢からさめたやうに顏を擡げて、染の前に落した太刀を拾ふ氣力もなく茫然としてゐたが、愛染の懺悔の途中から、ときどき疑ぐり深さうに彼女の顏いろをうかがつてゐる。

上人が去つてしまふと、愛染はぢろりと太郎を流しめに見て消えかかつたともしびの心を搔き立て、默つて鏡臺の前に据つて化粧を始める。短き間。太郎の眉根がだんだん險しくなる。

(太郎)(恐怖に近い表情で訴へるやうに愛染を見ながら)聖の教へを聴かうと云ふのに、そなたは何をしてゐるのぢや、

(愛染)(化粧しながら)はて、知れたことぢやわ、おぬしの爲めに今の仕返しをしてやるのぢや、

(太郎)仕返しとは？

(愛染)またあの法師を迷はせて、煩惱地獄へ墮してやるのぢや、――彼奴(あいつ)のむかしはよう知つてゐる、あの法師はな惡鬼羅刹に攻められるより女の色香が恐ろしい、女を見ると淺ましい犬畜生の心になると云ひ居つて、高野の山へ逃げて行つたのぢや"も一度彼奴を犬畜生にさせてやるのぢや、

さう云ひながら、自分の顏をうつとりと鏡にうつしてなほも餘念なく化粧をつづける。太郎は一としほ恐怖の色を露はにして心配さうに彼女の樣子を眺めてゐる。

(第一場終り、以下次號完結)

新年號の編輯を了へて

□木枯寒く今年も暮れてしまつた。復興の陣容は未だ焦土が堆く、綠葉のうるほひもなくして武藏野の風そぞろ身に泌む。しかし風に身をいたむプロにも迎春の意を動かすものがあろう。

□江戸の地は由來僕土を以つて鳴る。そして樹木の成長する都市として世界屈指である。私たちは關東人の木强を好む、剛健を愛する、そして新東京がこの剛健の色をとり入れて街樹にも松、樫の如きを選ぶことを献言する。就中、樫は火に强く、防風によし、その蔚々として天に冲するさまを見よ、そして一本調子のかざりげなき木訥の裡にも、新芽の脊ばむあの雅びさは關東の代表的カラーとして申分はない。

□總ての計畫に剛健なれ、英人はズルいが、木强の根强い所に彼の生命がある。關東人はややもすれば輕薄に傾き易く、綾羅の色にくらみやすい。巴里人の如く氣輕で、宵越しの金はつかはない流、無思慮がすべての點に現れる。復興される家々を見よ、そしてその人々の精神を見よ、泣きたい位の薄つぺらな東京人がそれを通して見える。

□そして彼の復興計畫を見よ。何れも姑息で一時凌ぎであり、大風呂敷と稱さるる人のそのものさへもただ一代凌ぎの計畫だ。まして伊東とか大石とかの老碌連のそれに至つてはすべてを私利に出發し、現實に打算して恐るべき禍根を我々の兒孫に遺そうとしておる。任俠は我々の生命として尊ぶところである。との任俠の都に私利、私慾一天張りの彼等の跋扈を許すべきか。

□我社の建設計畫はいろいろある。しかし復舊すべき部もあまりに數が多い。私たちは緩急を誤らず前進する。世のため、人のためになることに向つて自分たちの生命を鰹節のやうに削つて行くことを否みはしない。

□大道の前には小徑なし、高山に登つた時の雄大の氣、大平洋の蕩うつさまを見た濶大の氣―その氣で一直線に驀進したいものです。いろいろな細かい人生の情實は涙を揮つてかなぐりすてよ。こだわり通して人生を無意義なものにしないやうに熟慮あつて欲しい。

□本社から運動雜誌「アスレチツクス」を發行することになりました。二月號から盛裝して花々しく街頭に出るはづになつています。本誌讀者の一讀をおすすめします。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の節は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾貳年拾貳月廿日 印刷納本
大正拾參年壹月壹日 發行

東京芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人 印刷人 平田貫一郎

東京牛込區市ケ谷加賀町一ノ一
印刷所 秀英舍

（定價壹圓八拾錢）
東京芝區愛宕下一ノ一
發行所 改造社
振替長野三二八〇
電話高輪四九九三

京城日報

每日申報

ライオン[illegible]

恭しく啓す

[illegible]

大正[illegible]年[illegible]月[illegible]日

ライオン歯磨本舗 合名会社 小林商店

[illegible]

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO